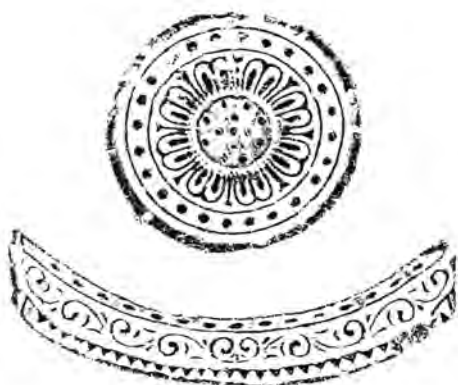


大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ

— 不丁地区 遺物編 1 —



2013

九州歴史資料館

大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ

— 不丁地区 遺物編 1 —

2013

九州歴史資料館



(1) 軒丸・軒平瓦



(2) 鬼瓦



(1) S D320出土越州窯系青磁



(2) S D2340出土土器



(1) S X2480出土土器



(2) S K388出土土器



(1) 緑釉香炉蓋片
(S D320出土)



(2) 人形木製品
(S D2340出土)



(3) 被熱鉄鍬束
(S D320・S E2503出土)

例 言

- 1 本書は、昭和46（1971）年度から福岡県が国庫補助を受け、福岡県教育委員会及び九州歴史資料館が発掘調査を実施した、大宰府政庁周辺官衙跡の不丁地区遺物編1の正式報告書で、大宰府政庁周辺官衙跡発掘調査報告書の第4集にあたる。
- 2 本書には、大宰府政庁周辺官衙跡の解明及び整備にかかる資料を得ることを目的に発掘調査を実施した、大宰府史跡第14次・17次・76次・83次・84次・85次・87次・90次・98次・104次・110次・124次・129次・147次・187次・192次調査に関わる出土遺物を掲載した。
なお、遺物写真は次年度刊行予定の不丁地区遺物編2-に掲載することとしている。
- 3 発掘調査は、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施し、検出遺構及び出土遺物については各指導委員の御指導と御教示を得た。
- 4 本書掲載の遺物実測図は、各概報作成時の調査担当者及び補助員が実測したもののほか、新たに小田和利・杉原敏之・下原幸裕・小嶋篤・阿部洪太郎・阿南翔悟・井上葵・佐々木華子が実測したものである。
- 5 本書掲載の巻頭写真は、北岡伸一が撮影したものである。
- 6 出土遺物の整理・復原は、調査概要報告時の調査員及び補助員、ならびに第I章の調査組織の中に記した人員で行った。
- 7 図面の浄書は、小田・杉原・下原・小嶋・高田いく子が行った。
- 8 目次と要旨の英訳は、西谷彰氏にお願いした。
- 9 本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第I章（1）～（3）	小田
（4）	下原
第II章（1）	下原
（2）1）・2）	小田
3）・4）	杉原
5）・6）①～⑥	小嶋
⑦	杉原
（3）	小嶋
（4）	小嶋
（5）	下原
（6）	杉原
- 10 本書の編集は、調査研究班員の協力のもと下原が行った。

序

当館では、平成14年3月に、大宰府政庁跡の正式報告書を刊行して以来、観世音寺・水城跡と、大宰府史跡の発掘調査の正式報告書を刊行し、昨年度は、『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲ』として、不丁地区遺構編の報告書を発刊いたしましたが、今年度はその続編として、不丁地区の遺物編1を刊行する運びとなりました。

不丁地区は、政庁周辺官衙跡の中でも政庁正面広場の西側に位置し、発掘調査の結果、8～9世紀代を中心とする大型掘立柱建物群が検出されています。政庁正面広場東側の日吉地区などとともに、政庁周辺の主要官衙群の一つを構成していたとみられ、様々な遺構からは多数の遺物が出土しています。とくに、東西の大溝からは土器や瓦のほか天平年間の木簡など注目すべき遺物が出土しました。本書の発刊により、当該地区の歴史的重要性が、地域住民や研究者に対して、さらに広く知っていただくこととなれば、望外の喜びであります。

さて、当館は平成22年11月21日、筑後小郡の地にリニューアルオープンし、2周年を無事に迎えました。長く慣れ親しんだ太宰府の地を離れましたが、調査研究の軸足は大宰府に置きつつも、九州西海道というさらに広い視野を持って、新たに邁進していく所存でございます。

最後になりましたが、大宰府政庁周辺官衙跡の発掘調査に際しましては、日頃より大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ、文化庁・太宰府市教育委員会や地元の関係者各位から、多大の御指導と御協力をいただいております。ここに記して、深く感謝申し上げます。

さらに今後とも、大宰府史跡の保存・整備活用に際しましても、関係者の皆さまと連携を密に計りながら万全を期したいと存じております。

平成25年3月31日

九州歴史資料館長 西谷 正

目次

	頁
第I章 緒言	1
(1) 報告書作成の経過	1
(2) 調査組織	1
(3) 報告書刊行計画	2
(4) 遺物の記録・整理の方法	4
第II章 出土遺物	5
(1) 瓦磚類	5
1) 軒先瓦	5
2) 道具瓦類	25
3) 文字瓦	31
4) 丸・平瓦	38
(2) 土器・陶磁器類	44
1) 掘立柱建物	44
2) 柵	62
3) 溝	64
4) 井戸	152
5) 土坑	155
6) その他の遺構・層位	192
(3) 木製品	218
1) 漆製品	218
2) 容器	219
3) 食膳具	223
4) 武器	223
5) 農工具	225
6) 奢侈品	226
7) 履物	226
8) 祭祀具	227
9) 部材	230
10) 用途不明品	232
(4) 金属製品	233
1) 鉄製品	233
2) 銅製品	239
(5) 土製品	242
(6) 石製品	247
1) 滑石製品	247
2) 砥石	247
3) 五輪塔	252
4) 地覆石	252
5) 碁石	253
6) 水晶	256
7) 石器類	256
英文目次	257
英文要旨	258

Fig.目次

	頁
Fig. 1 不丁地区主要遺構配置図 (1/600)	折込
Fig. 2 軒丸瓦実測図 (1) (1/4)	12
Fig. 3 軒丸瓦実測図 (2) (1/4)	13
Fig. 4 軒丸瓦実測図 (3) (1/4)	14
Fig. 5 軒平瓦実測図 (1) (1/4)	22
Fig. 6 軒平瓦実測図 (2) (1/4)	23
Fig. 7 軒平瓦実測図 (3) (1/4)	24
Fig. 8 鬼瓦実測図 (1) (1/4)	26
Fig. 9 鬼瓦実測図 (2) (1/4)	27
Fig. 10 文様埴実測図 (1/4)	29
Fig. 11 熨斗瓦実測図 (1/4)	30
Fig. 12 面戸瓦実測図 (1/4)	31
Fig. 13 文字瓦型式拓影 (1) (1/4)	33
Fig. 14 文字瓦型式拓影 (2) (1/4)	34
Fig. 15 文字瓦型式拓影 (3) (1/4)	35
Fig. 16 丸瓦実測図 (1/6)	39
Fig. 17 平瓦実測図 (1) (1/6)	41
Fig. 18 平瓦実測図 (2) (1/6)	42
Fig. 19 掘立柱建物出土土器実測図 (1) (1/3)	45
Fig. 20 掘立柱建物出土土器実測図 (2) (1/3)	48
Fig. 21 掘立柱建物出土土器実測図 (3) (1/3)	50
Fig. 22 掘立柱建物出土土器実測図 (4) (1/3)	53
Fig. 23 掘立柱建物出土土器実測図 (5) (1/3)	55
Fig. 24 掘立柱建物出土土器実測図 (6) (1/3)	58
Fig. 25 掘立柱建物出土土器実測図 (7) (1/3)	59
Fig. 26 掘立柱建物出土土器実測図 (8) (1/3)	61
Fig. 27 柵出土土器実測図 (1/3)	63
Fig. 28 境界溝出土土器実測図 (1) 14次S D320 (1/3)	65
Fig. 29 境界溝出土土器実測図 (2) 14次S D320 (1/3)	66
Fig. 30 境界溝出土土器実測図 (3) 14次S D320 (1/3・1/4)	68
Fig. 31 境界溝出土土器実測図 (4) 14次補S D320 (1/3)	71
Fig. 32 境界溝出土土器実測図 (5) 14次補S D320 (1/3・1/4)	72
Fig. 33 境界溝出土土器実測図 (6) 14次補S D320 (1/3)	74
Fig. 34 境界溝出土土器実測図 (7) 14次補S D320 (1/3・1/4)	76
Fig. 35 境界溝出土土器実測図 (8) 14次補S D320 (1/3・1/4)	78

Fig.36	境界溝出土土器実測図 (9) 14次補 S D320 (1/3)	80
Fig.37	境界溝出土土器実測図 (10) 76次 S D320 (1/3・1/4)	82
Fig.38	境界溝出土土器実測図 (11) 76次 S D320 (1/3)	84
Fig.39	境界溝出土土器実測図 (12) 76次 S D320 (1/3)	86
Fig.40	境界溝出土土器実測図 (13) 76・104・110次 S D320 (1/3)	87
Fig.41	境界溝出土土器実測図 (14) S D320陶磁器類 (1/3)	90
Fig.42	境界溝出土土器実測図 (15) S D320陶磁器類 (1/3)	92
Fig.43	境界溝出土土器実測図 (16) 83・84次 S D2340 (1/3)	94
Fig.44	境界溝出土土器実測図 (17) 85次 S D2340 (1/3)	95
Fig.45	境界溝出土土器実測図 (18) 85次 S D2340 (1/3・1/4)	96
Fig.46	境界溝出土土器実測図 (19) 85次 S D2340 (1/3)	98
Fig.47	境界溝出土土器実測図 (20) 87・90次 S D2340 (1/3)	100
Fig.48	境界溝出土土器実測図 (21) 87・90次 S D2340 (1/3・1/4)	101
Fig.49	境界溝出土土器実測図 (22) 87・90次 S D2340 (1/3)	103
Fig.50	境界溝出土土器実測図 (23) 87・90次 S D2340 (1/3)	105
Fig.51	境界溝出土土器実測図 (24) 87・90次 S D2340 (1/3・1/4)	106
Fig.52	境界溝出土土器実測図 (25) 98次 S D2340 (1/3)	108
Fig.53	境界溝出土土器実測図 (26) 98次 S D2340 (1/3)	110
Fig.54	境界溝出土土器実測図 (27) 124次 S D2340 (1/3)	111
Fig.55	区画溝出土土器実測図 (1) 83・87次 S D2335, 84次2455 (1/3・1/4)	114
Fig.56	区画溝出土土器実測図 (2) 76次 S D2015 (1/3)	116
Fig.57	区画溝出土土器実測図 (3) 76次 S D2015 (1/3)	117
Fig.58	区画溝出土土器実測図 (4) 76次 S D2015 (1/3)	119
Fig.59	区画溝出土土器実測図 (5) 85次 S D2015 (1/3)	121
Fig.60	区画溝出土土器実測図 (6) 85次 S D2015・2470 (1/3)	123
Fig.61	区画溝出土土器実測図 (7) 187次 S D4570 (1/3)	125
Fig.62	区画溝出土土器実測図 (8) 187次 S D4570 (1/3)	127
Fig.63	区画溝出土土器実測図 (9) 187次 S D4570 (1/3)	129
Fig.64	区画溝出土土器実測図 (10) (1/3)	131
Fig.65	区画溝出土土器実測図 (11) (1/3・1/4)	132
Fig.66	区画溝出土土器実測図 (12) (1/3)	134
Fig.67	その他の区画溝出土土器実測図 (1) (1/3)	136
Fig.68	その他の区画溝出土土器実測図 (2) (1/3)	138
Fig.69	その他の区画溝出土土器実測図 (3) (1/3)	140
Fig.70	その他の区画溝出土土器実測図 (4) (1/3)	141
Fig.71	その他の溝出土土器実測図 (1) (1/3)	143
Fig.72	その他の溝出土土器実測図 (2) (1/3)	145
Fig.73	その他の溝出土土器実測図 (3) (1/3)	147

Fig.74	その他の溝出土器実測図 (4) (1/3)	149
Fig.75	その他の溝出土器実測図 (5) (1/3)	151
Fig.76	井戸出土器実測図 (1) (1/3・1/4)	152
Fig.77	井戸出土器実測図 (2) (1/3)	153
Fig.78	土坑出土器実測図 (1) 17次 S K 388 (1/3)	155
Fig.79	土坑出土器実測図 (2) 17次 S K 388 (1/3)	157
Fig.80	土坑出土器実測図 (3) 17次 S K 388 (1/3)	158
Fig.81	土坑出土器実測図 (4) 17次 S K 388 (1/3)	160
Fig.82	土坑出土器実測図 (5) 17次 S K 388 (1/3)	162
Fig.83	土坑出土器実測図 (6) (1/3・1/6)	163
Fig.84	土坑出土器実測図 (7) (1/3)	165
Fig.85	土坑出土器実測図 (8) (1/3)	166
Fig.86	土坑出土器実測図 (9) (1/3)	167
Fig.87	土坑出土器実測図 (10) (1/3)	168
Fig.88	土坑出土器実測図 (11) (1/3)	170
Fig.89	土坑出土器実測図 (12) (1/3)	172
Fig.90	土坑出土器実測図 (13) (1/3)	174
Fig.91	土坑出土器実測図 (14) (1/3)	175
Fig.92	土坑出土器実測図 (15) (1/3)	177
Fig.93	土坑出土器実測図 (16) (1/3)	179
Fig.94	土坑出土器実測図 (17) (1/3)	181
Fig.95	土坑出土器実測図 (18) (1/3)	182
Fig.96	土坑出土器実測図 (19) (1/3・1/6)	184
Fig.97	土坑出土器実測図 (20) (1/3)	186
Fig.98	土坑出土器実測図 (21) (1/3)	188
Fig.99	土坑出土器実測図 (22) (1/3)	190
Fig.100	礫敷遺構・暗渠・瓦敷遺構・粘土採掘遺構出土器実測図 (1/3)	192
Fig.101	流路出土器実測図 (1) 98次 S X 2480 (1/3)	194
Fig.102	流路出土器実測図 (2) 98次 S X 2480 (1/3)	195
Fig.103	流路出土器実測図 (3) 98次 S X 2480 (1/3・1/6)	196
Fig.104	流路出土器実測図 (4) 98次 S X 2480 (1/3・1/6)	198
Fig.105	流路出土器実測図 (5) 147次 S X 4050 (1/3)	199
Fig.106	溜り・落ち込み出土器実測図 (1) (1/3)	200
Fig.107	溜り・落ち込み出土器実測図 (2) (1/3)	202
Fig.108	溜り・落ち込み出土器実測図 (3) (1/3・1/6)	203
Fig.109	溜り・落ち込み出土器実測図 (4) (1/3)	204
Fig.110	溜り・落ち込み出土器実測図 (5) (1/3・1/6)	206
Fig.111	溜り・落ち込み出土器実測図 (6) (1/3)	208

Fig.112	溜り・落ち込み出土土器実測図 (7) (1/3)	210
Fig.113	溜り・落ち込み出土土器実測図 (8) (1/3・1/6)	212
Fig.114	溜り・落ち込み出土土器実測図 (9) (1/3・1/6)	214
Fig.115	溜り・落ち込み・その他出土土器実測図 (1/3)	216
Fig.116	木製品実測図 (1) 漆製品・容器 (1/3・1/8)	218
Fig.117	木製品実測図 (2) 容器 (1/3)	220
Fig.118	木製品実測図 (3) 容器 (1/3)	221
Fig.119	木製品実測図 (4) 容器・食膳具 (1/3)	222
Fig.120	木製品実測図 (5) 武器・農工具 (1/3・1/5)	223
Fig.121	木製品実測図 (6) 農工具 (1/3)	224
Fig.122	木製品実測図 (7) 奢侈品・履物 (1/3)	226
Fig.123	木製品実測図 (8) 祭祀具 (1/3)	227
Fig.124	木製品実測図 (9) 祭祀具 (1/3)	229
Fig.125	木製品実測図 (10) 部材 (1/3・1/15)	230
Fig.126	木製品実測図 (11) 用途不明品 (1/3)	231
Fig.127	金属製品実測図 (1) (1/2)	234
Fig.128	金属製品実測図 (2) (1/2)	236
Fig.129	金属製品実測図 (3) (1/2)	240
Fig.130	土製品実測図 (1) (1/3・1/6)	243
Fig.131	土製品実測図 (2) (1/3)	245
Fig.132	土製品実測図 (3) (1/3)	246
Fig.133	滑石製品実測図 (1/3)	248
Fig.134	砥石実測図 (1) (1/3)	250
Fig.135	砥石実測図 (2) (1/3)	251
Fig.136	塔・地覆石実測図 (1/4・1/6)	252
Fig.137	碁石・水晶実測図 (1/2・2/3)	253
Fig.138	石器実測図 (1) (2/3)	254
Fig.139	石器実測図 (2) (2/3・1/3)	255

Tab.目次

	頁	
Tab.1	大宰府史跡報告書刊行実績及び刊行計画 (～平成30年度)	3
Tab.2	平成31年度以降に作成予定の報告書	3
Tab.3	軒丸瓦型式分類表 (1)	6
Tab.4	軒丸瓦型式分類表 (2)	7
Tab.5	軒丸瓦型式分類表 (3)	8
Tab.6	軒丸瓦出土点数表	9

Tab. 7	軒平瓦型式分類表 (1)	16
Tab. 8	軒平瓦型式分類表 (2)	17
Tab. 9	軒平瓦型式分類表 (3)	18
Tab. 10	軒平瓦出土点数表	19
Tab. 11	文字瓦出土点数表	36

巻頭PL. 目次

巻頭PL. 1	(1) 軒丸・軒平瓦	(2) 鬼瓦
巻頭PL. 2	(1) S D 320出土越州窯系青磁	(2) S D 2340出土土器
巻頭PL. 3	(1) S X 2480出土土器	(2) S K 388出土土器
巻頭PL. 4	(1) 緑釉香炉蓋片 (S D 320出土) (2) 人形木製品 (S D 2340出土)	
	(3) 被熱鉄鎌束 (S D 320・S E 2503出土)	

凡 例

- 1 本書掲載の遺構配置図は、国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設け作成している。
- 2 遺構番号の頭に付した記号は、以下の遺構を示す。
SA：柵，SB：建物，SD：溝，SK：土坑，SX：その他
- 3 掲載図面中、土器の断面を黒塗りしたものは須恵器、内外面に網かけしたものは黒色土器であることを示す。
- 4 土師器・陶磁器・瓦等の報告においては、以下の文献の型式分類・名称等に準じる。
 - ・土 師 器：九州歴史資料館1981『大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報』
 - ・黒色土器：田中 琢1967「古代・中世における手工業生産の発達（4）畿内」『日本の考古学』Ⅳ
 - ・陶 磁 器：森田勉・横田賢次郎1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心にして一」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
※文中では当分類を基本とし、補足的に以下の分類を使用する。
太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡X V』（文中では太宰府市分類と表記）
 - ・古 代 瓦：九州歴史資料館2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』
高橋 章2007「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」の追加資料について『観世音寺—遺物編2—』九州歴史資料館（新形式の追加）
九州歴史資料館2009『水城跡—下巻—』（新形式の追加）
九州歴史資料館2011『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ—日吉地区—』（新形式の追加）
 - ・鬼 瓦：毛利光俊彦1980「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究論集Ⅳ』奈良国立文化財研究所学報38冊

第 I 章 緒 言

(1) 報告書作成の経過

平成21年度から始めた大宰府政庁周辺官衙跡の正式報告書の刊行も既に4年目に入り、政庁前面広場地区、日吉地区、不丁地区遺構編と立て続けに刊行してきた。

本報告書は、『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲ－不丁地区 遺構編－』の続編にあたり、『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ－不丁地区 遺物編1－』として検出遺構及び層位出土の瓦罫類、土器・陶磁器類、木製品、石製品、土製品、金属製品を報告するものである。

当初の報告書刊行計画において、不丁地区は政庁周辺官衙跡の中でも遺構・遺物量が膨大であり、かつ天平六年（734）・同八年（736）の紀年銘木簡が出土した南北方向の区画溝S D 2340、礎石建物S B 370等重要な遺構・遺物が含まれることから不丁地区官衙跡の報告に際しては、平成23年度に遺構編、平成24年度に遺物編と2ヶ年に分けて報告する予定としていたが、パンケース630箱にも及ぶ出土土器類の再整理作業を進めていく中で、新たに墨書土器・定形硯・土器転用硯・漆付着土器・製塩土器・製鉄関連遺物等の報告すべき特殊遺物が多量に存在することが判明し、これら全てを網羅した報告書の刊行となると予算的・時間的な制約により当方の意図した報告書の内容が大きく乖離する恐れがあった。

したがって、当初の計画を再検討し、『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ－不丁地区 遺物編－』として刊行予定であった正式報告書を「遺物編1」と「遺物編2」に分冊し、「遺物編2」には木簡・墨書土器・定形硯・土器転用硯等の文字関連資料、腰帯等の特殊遺物及び金属製品等の分析結果、遺構・遺物の検討等を掲載することとした。なお、「遺物編1」を今年度に刊行し、「遺物編2」は次年度の刊行予定とし、報告内容の充実を図ることとした。このことに関しては、平成24年10月に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会の席上において審議頂き、大方の委員の了承を得た。

(2) 調査組織

九州歴史資料館は、大宰府史跡の計画調査及び研究、住宅改築等に伴う緊急発掘調査、展示、歴史資料の収集・保管、調査研究を所掌する機関として昭和47年4月に太宰府市に設置された。九州歴史資料館が発足して以降は、同館が大宰府史跡の発掘調査を担当し、出土品の展示及び研究を行うとともに、九歴論集・九歴講座等により調査研究成果を公開し、大宰府史跡に関する情報発信を担ってきた。開館以来、太宰府の地において40年余りを歩んできたが、施設の老朽化、狭小等により平成22年11月に小郡市三沢に移転・開館した。

大宰府史跡の発掘調査及び報告書刊行は、5ヶ年を一つの括りとした短期計画（大宰府史跡第〇次5ヶ年計画）、さらに年次ごとの調査計画及び報告書刊行計画を立案し、現在、国史学・考古学・建築史学・造園学・都市工学・土木工学の15名の委員で構成される「大宰府史跡調査研究指導委員会」に諮り、その指導・助言のもとに行っている。

平成19年度までは、九州歴史資料館調査課が大宰府史跡の発掘調査及び報告書刊行を担当してきたが、平成20年度の組織改編により、従来の学芸一課・学芸二課・調査課の3課が学芸調査室として統合され、その下に学芸班・調査班が置かれ班体制となり、調査班が発掘調査

を担当することになった。その後、平成23年度の組織改編により、九州歴史資料館は総務室・学芸調査室・文化財調査室の3室構成となり、加えて学芸班が学芸普及班に、調査班は調査研究班と改称し、大宰府史跡の調査研究は調査研究班が担うこととなった。

今回の報告書作成に係る関係者は、以下のとおりである。なお、不丁地区の発掘調査関係者については、昨年度の報告書に掲載しているので割愛する。

九州歴史資料館

総括	館長	西谷 正
	副館長	篠田 隆行
庶務	総務室長	圓城寺紀子
	企画主査	長野 良博
	事務主査	青木 三保
	主任主事	近藤 一崇
	主事	谷川 賢治
報告	学芸調査室長	小田 和利
	調査研究班長	杉原 敏之
	主任技師	下原 幸裕
	主任技師	小嶋 篤
整理	整理補助員	高田いく子
	整理作業員	市川千香枝 中田千枝子 堤 直美
保存処理	文化財調査室	
	保存管理班長	加藤和歳
	主任技師	小林 啓

(3) 報告書刊行計画

大宰府史跡の発掘調査は、昭和43年度から開始しているが、大宰府史跡の場合、遺跡そのものが大規模かつ重要であるため、ある程度広範囲に調査を行い、遺構の広がりを把握し、建物・溝等の遺構の変遷及び出土遺物の詳細な検討を行った上でもって報告をしないと大きな過ちを犯しかねない。

したがって、その調査成果は、『大宰府史跡 昭和（平成）〇〇年度発掘調査概報』として概要報告書の体裁で刊行してきたが、当初より大宰府史跡の発掘調査に携わってきた担当者全てが既に現役を引退し、或いは物故された方もおられ、本来、発掘調査を担当した者が正式報告書の作成まで担当すべきであるが、発掘調査及び概要報告書の作成に全く携わっていない者が正式報告書の刊行に関わっている状況である。こうした弊害を将来に残さないように、平成12年度以降は概要報告書ではなく、『大宰府史跡発掘調査報告書□ 平成〇〇年度』として報告すべき遺構・遺物を網羅した年次ごとの報告書を作成し、従前のやり方を改めている。

また、平成13年度からは『大宰府政庁跡』の正式報告書刊行を嚆矢として、『観世音寺』（平成16～18年度）、『水城跡』（平成21年度）を刊行し、平成21年度からは大宰府政庁跡の周辺に広がる官衙跡群の正式報告書刊行に着手し、平成21年度に政庁前面広場地区、平成22年度

には日吉地区、平成23年度には不丁地区遺構編を刊行した。

一応、大宰府政庁周辺官衙跡の正式報告書の刊行は、平成30年度を以て完了の予定であるが、遺構に関しては建物の再検討を主として行い、遺物に関しては収納しているパンケース全ての再整理を行い、土器の小破片1点1点まで見直しをしている。こうした手間のかかる緻密な作業を経て正式報告書の刊行を行っている。しかしながら、大宰府政庁周辺官衙跡以外にも大野城跡、学校院跡、観世音寺子院跡、筑前国分寺、大宰府条坊跡等の正式報告書が未刊のままの史跡が多く存在する。現在の体制で、これら全ての正式報告書を刊行するとなると向こう10余年程の歳月を要すると思われるが、無理のない刊行計画を立てるとともに調査研究班の体制整備を行い、残された正式報告書の刊行を着実にしてゆくことが大宰府史跡の発掘調査に少なからず関わった我々の責務といえよう。

Tab.1 大宰府史跡報告書刊行実績及び刊行計画（～平成30年度）

5ヶ年計画	年度	正式報告書	年次報告書
第6次	H12	—	大宰府史跡Ⅰ 平成12年度
	H13	大宰府政庁跡	—
第7次	H14	—	大宰府史跡Ⅱ 平成13・14年度
	H15	—	大宰府史跡Ⅲ 平成15年度
	H16	観世音寺—伽藍編—	—
	H17	観世音寺—寺域編—	—
	H18	観世音寺—遺物編1— 観世音寺—遺物編2— 観世音寺—考察編—	—
第8次	H19	—	大宰府史跡Ⅳ 平成16・17年度 大宰府史跡Ⅴ 平成18・19年度
	H20	水城跡—上巻— 水城跡—下巻—	—
	H21	政庁周辺官衙跡Ⅰ—政庁前面広場地区—	大宰府史跡Ⅵ 平成20・21年度
	H22	政庁周辺官衙跡Ⅱ—日吉地区—	—
	H23	政庁周辺官衙跡Ⅲ—不丁地区遺構編—	大宰府史跡Ⅶ 平成22・23年度
第9次	H24	政庁周辺官衙跡Ⅳ—不丁地区遺物編1—	—
	H25	政庁周辺官衙跡Ⅴ—不丁地区遺物編2—	大宰府史跡Ⅷ 平成24・25年度
	H26	政庁周辺官衙跡Ⅵ—大楠・広丸地区—	—
	H27	—	大宰府史跡Ⅸ 平成26・27年度
第10次	H28	政庁周辺官衙跡Ⅶ—蔵司・来木地区—	—
	H29	—	大宰府史跡Ⅹ 平成28・29年度
	H30	政庁周辺官衙跡Ⅷ—月山・政庁後背地区—	—

Tab.2 平成31年度以降に作成予定の報告書

番号	史跡名	備考	刊行年度
1	大野城跡		未定
2	学校院跡		未定
3	観世音寺子院跡	金光寺跡・西福寺跡・安養院跡等	未定
4	筑前国分寺		未定
5	大宰府条坊跡	五条泉水遺跡・市の上遺跡等	未定
6	その他	般若寺跡・崇福寺跡等	未定

(4) 遺物の記録・整理の方法

大宰府史跡の出土遺物に関しては、洗浄後に遺物の取捨選択を行い、選別された遺物を中心に遺跡略号・調査次数・小地区・層位・S番号・出土年月日を注記している。また、実測が終了すると地区ごとに実測順からR001・R002といった遺物番号（R番号）を追記している。さらに、遺物の照合や番号の重複を避けるため、遺物台帳に遺物番号を登録し、併せて実測した遺物の内容を記載している。

平成12年度（2000）以降は、R番号による整理を取らずに、整理・報告作業時には登録番号を付して整理番号とし、報告書刊行後は報告遺物ごとに報告書掲載番号を記載したカードを付して整理している。また、正式報告書刊行後は、概報報告資料との重複関係が分かるようなデータ整理を行って、カード化するとともに、将来的なデータベース整備の基礎データ作成に努めている。本書で報告を行う不丁地区についても、平成12年度以降の整理方針に基づき作業を進めており、報告書刊行後に報告遺物の一覧表作成とカード化を行う。

なお、今回報告分の14次・14次補足・76次・104次・110次・129次調査地は、本来大楠地区に含まれ報告対象外であるが、不丁・大楠両地区に跨っている遺構が存在する。よって、南北溝S D2340からS D320までの範囲を報告の対象とした。しかし、再整理作業自体は分離できないため、上記調査地の出土遺物に関しては、不丁地区と一括して整理作業を行った。これらの調査区の遺構配置と所属地区については、本書Fig.1および前書『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲ』を参照していただきたい。

第II章 出土遺物

(1) 瓦塼類

1) 軒先瓦

①軒丸瓦 (Fig.2~4, Tab.3~6, PL.1)

大宰府史跡において、軒丸瓦(古瓦)の型式分類は、現在60型式93種類に分類されている(文献は凡例参照)。不丁地区では、そのうち23型式38種類597点が出土している。政庁前面広場地区で196点、日吉地区で57点であることと比較すると、圧倒的な量の多さが窺える。ただし、その多くが当地区の東西を画する大溝S D320・2340からの出土であることも否定できず、他の地区との単純な比較はできない。なお、中近世期の軒丸瓦も2点出土しているのを併せて報告する。

以下、型式ごとに説明する。

058型式：単弁8弁で、中房は蓮子を持たず半球形を呈する。外区内縁の珠文の形態の違い、外区の圏線の有無によって2種類に細分される。当地区では珠文が小さく、外区の内縁と外縁との間に圏線を有するaが1点(187次溝S D4570上層)、珠文が大粒縦長で、外区圏線のないb (Fig.2-1)が1点(83次溝S D2350)のみ出土している。なお、bは瓦当の厚さが薄いこともaと異なる点である。

066型式：幅の広い単弁12弁で、外区内縁に尾の付いた珠文が巡る点の特徴である。当地区では14次補足調査の溝S D320中層から1点のみ出土している。

077型式：大きさや配置が不規則な単弁で、弁に凹弁状のものが混じるAと、瓦当径が小さくなり弁の数も少なくなるBの2種に細分される。当地区ではAが2点、Bが1点出土している。遺構出土はBのみで、14次補足調査の溝S D320中層からの出土である。

108型式：内区には大きさが不揃いな単弁を巡らせ、外区内縁の珠文も間隔が不統一である。当地区では18点出土している。溝S D320からの出土が目立つが、溝S D2337や落ち込みS X2336からも出土している。Fig.2-2は瓦当下半の資料で、突起状の範型痕跡が側面の瓦当面寄りに残っており、側面まで至らない型式の瓦当範を使用しているものと考えられる。

132型式：重弁8弁であるが、そのうち一つは弁にならない細い素弁で、一段低くなる中房の珠文配置などを含め、全体的に粗いつくりである。丸瓦部に文字銘903A型式を伴う例もある。当地区では、14次補足調査の溝S D320上層から1点(Fig.2-3)のみ出土している。断面観察から丸瓦をほとんど瓦当面に達する位置にまで差し込んでいることが分かる。

133型式：重弁12弁で、外区に不規則に珠文が巡り、丸瓦部に文字銘902G型式を伴う事例が確認されている。文様の線自体は太いが、高さがないため、全体的に立体感に欠ける(Fig.2-4)。当地区では3点出土しているが、丸瓦部の調整は不明である。













143型式：範傷の進行や瓦範の彫り直しなどで3種類に細分される。当地区では、単弁19弁のa (Fig.2-5)が4点、22弁に彫り直したb (Fig.2-6)が3点、傷の進行が最も進んだc (Fig.2-7)が4点出土している。このうちFig.2-5のaは、187次溝S D4570出土資料と、同溝の北側石垣の裏込めから出土した破片資料とが接合したもので、拓影も接合した状態である。断面図にも示しているが、側面には範型とともに枷型を使用した痕跡が明瞭に残っている。一

Tab.3 軒丸瓦型式分類表(1)

型式番号	直径	内区					外区					全長	外縁形態	
		中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区広	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
058a	162	31	-	116	34	T8	23	10	S28	13	3	-	-	傾斜縁
058b	158	32	-	118	34	T8	20	12	S28	8	9	-	-	傾斜縁
066	163	50	1+7	121	26	T12	21	10	S36	11	8	-	-	直立縁
077A	168	68	1+8	131	13	T20	18	-	-	13	12	-	-	直立縁
077B	156	60	1+8	128	13	T18	14	-	-	13	10	-	-	直立縁
108	162	52	1+6	92	8	T21	35	21	S24	14	18	-	-	傾斜縁
132	162	54	1+4	136	32	T8	13	13	S32	-	-	-	-	-
133	157	53	1+4	123	23	T12	17	12	S31	5	5	-	-	-
143a	162	52	1+8	102	15	T19	30	18	S21	12	11	-	-	傾斜縁
143b	167	50	1+8	107	13	T22	30	16	S21	14	16	-	-	傾斜縁
143c	162	47	1+8	102	12	T19	30	19	S21	11	8	-	-	傾斜縁
144a	159	40	1+6	103	17	T16	28	20	S23	8	7	-	-	直立縁
145b	169	50	1+6	123	22	T14	23	15	S25	8	3	-	-	直立縁

(1/10)

Tab.4 軒丸瓦型式分類表(2)

型式番号		直径	内区					外区					全長	外縁形態	
			中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区広	内縁		外縁				
									幅	文様	幅	高			文様
170A		157	61	1+6	129	21	T13	14	7	S33	7	7	-	383	傾斜縁
170Bb		178	59	1+5	138	23	T14	20	10	S24	10	6	-	-	直立縁 傾斜縁
170Bc		180	60	1+5	146	26	T14	17	11	S24	6	3	-	-	直立縁
170C		-	-	-	-	19	T5 以上	19	10	S12 以上	9	6	-	-	傾斜縁
208Ba		165	58	1+4	123	30	F10	21	14	S17	7	5	-	-	-
208Bb		167	62	1+4	115	27	F10	26	26	S17	-	-	-	-	-
208Ca		152	64	1+4	112	38	F8	20	16	S13	4	1	-	-	-
223a		163	51	1+4+8	111	28	F8	26	13	S24	13	5	-	-	傾斜縁
223b		170	58	1+4+8	116	30	F8	27	15	S24	12	4	-	-	傾斜縁
223L		195	65	1+4+8	111	29	F8	26	15	S32	11	7	-	-	傾斜縁
224b		168	57	1+4+8	112	-	F8	28	15	S32	13	-	-	-	傾斜縁
225		162	56	1+4+8	104	29	F9	29	16	S22	13	13	-	-	傾斜縁

(1/10)

Tab.5 軒丸瓦型式分類表(3)

型式番号	直径	内区					外区					全長	外縁形態	
		中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区広	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
237	186	60	1+4+8	127	25	F8	28	15	S24?	13	9	-	-	傾斜縁
275B	187	65	1+5+9	127	37	F8	30	14	S32	16	11	RV 32	-	傾斜縁
276	186	68	1+4+8	130	28	F8	28	13	S34	15	16	RV 28	-	傾斜縁
285A	165	54	1+5+9	111	28	F8	27	14	S38	13	2	RV 37	-	平坦縁
285B	138	53	1+4+8	94	22	F8	22	9	S32	13	-	RV 32	-	平坦縁
290Aa	180	67	1+6+12	122	36	F8	29	14	S38	15	21	RV 30	-	傾斜縁
290Ab	190	64	1+6+10	122	26	F8?	34	14	S38	20	18	RV 30	-	傾斜縁
290B	191	72	1+6+10	121	32	F8	35	13	S36	22	17	RV 32	-	傾斜縁
291	156	55	1+8	101	31	F8	28	13	S26	15	11	RV 24	-	傾斜縁
293	-	-	-	-	12	-	25	11	S6 以上	14	11	RV	-	傾斜縁
322	164	60	1+6	126	45	F6	22	12	S25	10	1	-	-	-
324A (1/10)	168	64	1+8	132	27	F11	18	11	S22	7	2	-	-	-

Tab.6 軒丸瓦出土点数表

型式名	点数	14次	14次補	17次	76次	83次	84次	85次	87次	90次	98次	104次	110次	124次	129次	147次	187次	192次	合計	百分比 (%)	
058	a	1															1		2	0.33	
	b	1				1															
066		1		1															1	0.17	
077	A	2			1												1		3	0.50	
	B	1		1																	
108		18	2	1		3	6		6										18	3.02	
132		1		1															1	0.17	
133		3		2					1										3	0.50	
143	a	4		1		1											2		11	1.84	
	b	3		1	1	1															
	c	4	1			2		1													
144	a	2				1			1										2	0.33	
145	145	2		1									1						23	3.85	
	b	21		4	4	2	2		6	1		1				1					
170	170	2				1						1							23	3.85	
	A	1										1									
	Bb	3			1	1				1											
	Bc	16		3	1	4	5	1		2											
	C	1				1															
208	Ba	5	2		1				1	1									12	2.01	
	Bb	3				1	1		1												
	Ca	4			1		1	2													
223	223	91	13	22	2	24	3	4	7	1	5		2				3	3	2	130	21.78
	a	31		11	3	1		5	3	5							1	2			
	b	4		1		1					1		1								
224	224	1															1		4	0.67	
	b	3				1		1	1												
225		61	4	9	2	4	18	7		10	3	1	1				2		62	10.39	
237		1		1															1	0.17	
275	275	6						2	2		1							1	66	11.06	
	B	60		9		3	1	3	25		6			2	9	2					
276		14		3			1	4			4						2		13	2.18	
285	A	6	3						2									1	25	4.19	
	B	19		1		1		2	12		1					2					
290	290	23	3	5	1	8			2		2				1	1			99	16.58	
	A	1		1																	
	Aa	30	1	7		2		3	2	3		6		1	3	2					
	Ab	2		1	1																
	B	43	2	9	1	7	1	4	5	4		3			2	2	2	1			
291		10	1	2		3					1					1	2		10	1.67	
293		3	1			1			1										3	0.50	
322		1				1													1	0.17	
324	A	1							1										1	0.17	
不明		83	9	19	10	5	3	4	13	2		3	2	1		3	8	1	83	13.90	
合計		597	44	117	30	77	47	44	74	46	10	29	7	4	1	11	35	18	3	597	100.00

方、Fig.2-6のbでは側面を丁寧にナデ仕上げしているため、痕跡の有無は不明である。それぞれの断面観察から、丸瓦は瓦当面から1～1.5cmほど離れた位置で接合されていることがわかる。

144型式：範傷の進行により2種類に細分される。単弁16弁であるが、弁の形状が剣菱形であるため角張った印象を受ける。顎裏面は丸くナデられ、支持土は比較的少なめである。当地区では、傷のないaのみが3点出土している。

145型式：範傷や彫り直し等により2種類に細分される。当地区では範傷の進行したb (Fig.2-8) が21点、細分できない破片が2点出土している。原型のaに比べると、弁の先端が尖ったり外区界線に接したりするものが出てくる点が特徴である。Fig.2-8は略完形品で、全長は35.8cmを測り、玉縁式丸瓦を接合する。瓦当面は、磨滅が進んでいることもあって、極めて平滑な印象を受ける。なお、bの丸瓦部凸面には文字銘901D型式を叩打しているが、他の地区においても同種の叩打痕が確認されており、文字銘との組み合わせは確実である。

170型式：文様の構成によりA～Cの3種類に細分され、このうちBは範傷や彫り直しにより4種に分けられる。当地区ではAが1点、B bが3点、B cが16点、Cが1点出土している。出土遺構をみると、B cは境界溝S D320と区画溝S D2350に限定される。なお、Cはこれまで大宰府史跡の中では、当地区76次S D320出土の1例しか出土していない。図示したB c (Fig.3-9) は、比較的残りの良い資料であるが、断面図からも瓦当面の平滑さが窺える。この資料では、瓦当裏面の丸瓦との接合部付近に朱の付着がみられる点が特筆される。

208型式：範の種類、範傷の程度により5種に細分される。当地区では弁が少し長めのBのうち複弁形式を保つB aが6点、弁の輪郭線を失い単弁化し中房の蓮子が大粒になるB bが3点、弁間の輪郭線が細小で丸い単弁のようにみえるC aが4点出土している。Fig.3-11のB aは瓦当面の残りが比較的良く、実測図からも文様が大振りであることが窺えるが、その割に瓦当の厚さは薄い。また、丸瓦はかなり下がった位置で接合し、外面は少ない支持土を強くナデ付けて調整する。丸瓦部凸面には太い線の斜格子目が確認できる。Fig.3-10のC aは、83次溝S D2359出土資料と87次灰褐色土出土資料とが接合したもので、丸瓦の接合位置がかなり低く、側面一帯は強いナデ調整を行う。なお、B b・C aは来木瓦窯跡で確認されている。

政庁第II期の主要瓦

223型式：いわゆる「鴻臚館式」と分類されるもので、軒平瓦635型式と組み合わせり、大宰府政庁第II期の主要瓦である。瓦範は複数あると考えられているが、使用による範型の摩耗具合などから2種に、さらに同文であるが径が大きいLを加えて、合計3種に細分されている。当地区からはa (Fig.3-12～14) が31点、bが4点、Lが4点、そして細分できない破片資料が91点出土している。その合計は全体の22%ほどを占め、比率からみても当地区における主要瓦であったことが窺える。なお、黒く燻された焼成具合の資料が多いことも、従来から指摘されるとおりであるが、図示した12～14も例外ではない。丸瓦と瓦当との取り付け方向は12・14と13では異なり、両者の瓦当の向きは180°違う。なお、13では内側の支持土が全くない状況で接合している。

224型式：瓦当文様は223型式と非常に近いが、外縁の珠文が密になっている。瓦当文様が鮮明なaと、文様の潰れが全面に及んでいるbに大別される。当地区ではbが3点と、細分不明が1点出土している。

225型式：223型式の系統にあるが、先端の尖った複弁が特徴的である。当地区では61点出土している。Fig.3-16・17は瓦当面のみ完形で、瓦当の厚さや側面に範型痕跡を残す特徴など成形技法の共通性が窺える資料であるが、両者は瓦当の取り付け位置が180°違っている。15は瓦当側面の調整痕が顕著に残るため、断面図と合成して図示している。

237型式：鴻臚館系の複弁8葉であるが、間弁は2本ずつ入る。当地区では14次補足調査の溝S D320中層から1点出土したのみである。

275型式：いわゆる「老司式」の軒丸瓦である。A・Bの2種に細分され、Aは観世音寺創建瓦である「老司I式軒丸瓦」に相当するもので、Bは223型式と並んで大宰府政庁第II期の主要瓦である。当地区ではBが60点、細分不明が6点出土しているが、Aは本来観世音寺所用で大宰府政庁や周辺官衙では日吉地区で僅か1点が例外的に出土している程度であることから、当地区の細分不明資料も基本的にはBと考えて良いだろう。なお、Bは国分瓦窯跡で確認されている。Fig.4-18・19はともに瓦当面のみ完形で、丸瓦の取り付け後櫛状の工具で器面を調整した痕跡が明瞭に残り、瓦当裏面も同様に櫛状工具で調整している。18では側面も工具調整を行うが、一部に範型痕跡とみられる段差がある。両者とも瓦当の向きは同じである。

老 司 式

276型式：275型式の系譜を引くが、全体的に平板で立体感に欠け、中房も「1+4+8」になる。水城瓦窯跡で生産が確認されている。当地区では14点が出土している。Fig.4-20は84次S X2454出土の資料で、断面からも文様の平板さが窺われる。

285型式：275型式の系統ではあるが、外区が一段高く平坦縁である点は大きな違いである。大型のAと小型のBに分けられ、Aは中房の蓮子が「1+5+9」で圏線を伴う点や瓦当裏面に突帯状の高まりがみられる点が特徴で、Bは中房の蓮子が「1+4+8」に減る。当地区では、Aが6点、Bが19点出土している。Fig.4-21は瓦当部の完形品で、丸瓦との接合部の剥離痕跡から丸瓦は浅く差し込む程度であったことが窺える。

290型式：瓦範の違いからA・Bの2種に、さらにAは磨滅の進行具合などから2種に細分される。Aは内区の複弁が短くなり硬さがみられるのに対して、Bは複弁の長さがさらに短くなりほとんど単弁化したように見える。当地区では、Aが1点、A aが30点、A bが2点、Bが43点、細分不明が23点出土している。なお、290型式は既刊の報告書でも指摘があるように、大宰府政庁II期の主要瓦の一つで、軒平瓦560B型式と組み合わせる。細分不明資料を含めた総数が99点にも及ぶことから、主要瓦であることが窺える。Fig.4-22~24はともにA aの資料で、丸瓦を瓦当面近くまで差し込み、接合後丸瓦方向にナデ調整を行い、側面全体もナデ調整している。そのため、範型の痕跡は不明であるが、丸瓦との取り付け角度は全く同じである。なお、瓦当裏面に突帯状の高まりがみられるが、この特徴は23では曖昧であるが22・24では顕著にみられる。

主 要 瓦 の つ

291型式：瓦当文様は290型式に近いが全体に小型で、扁平半球状に近い中房の蓮子も「1+8」と少ない。ただし、瓦当裏面に突帯状の高まりがみられる点は、老司系と呼ばれる一連の軒丸瓦の多くにみられる特徴である。当地区では10点出土しており、Fig.4-25の瓦当裏面にも僅かに高まりを残す。

293型式：小片資料しか確認されていないが、内区は一見間弁との区別が困難な複弁で、外区の内縁はやや杏仁様の珠文が広い間隔で配置され、傾斜縁の外縁には凸鋸歯文が確認できる。

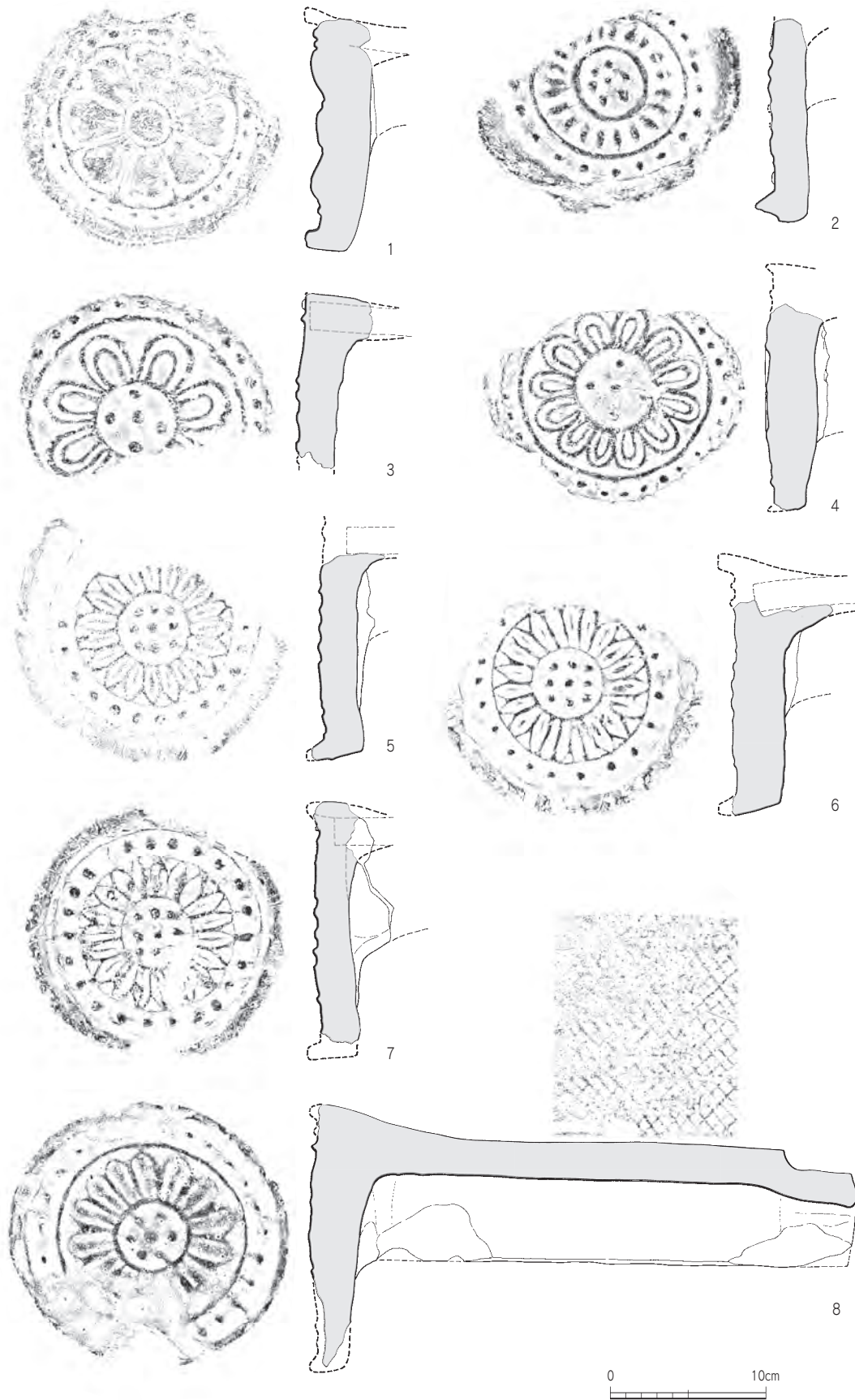


Fig.2 軒丸瓦実測図 (1) (1/4)

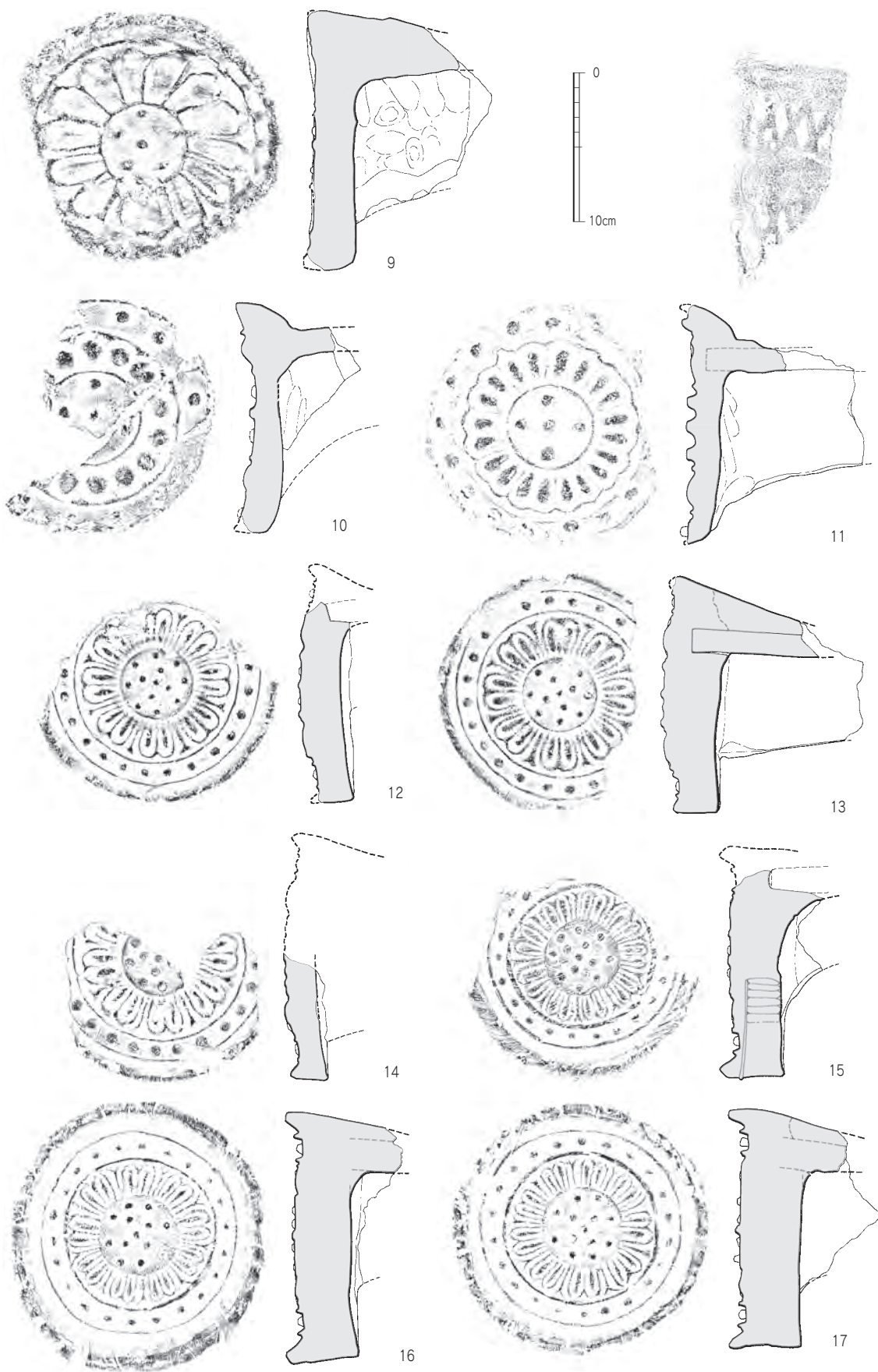


Fig.3 軒丸瓦実測図 (2) (1/4)

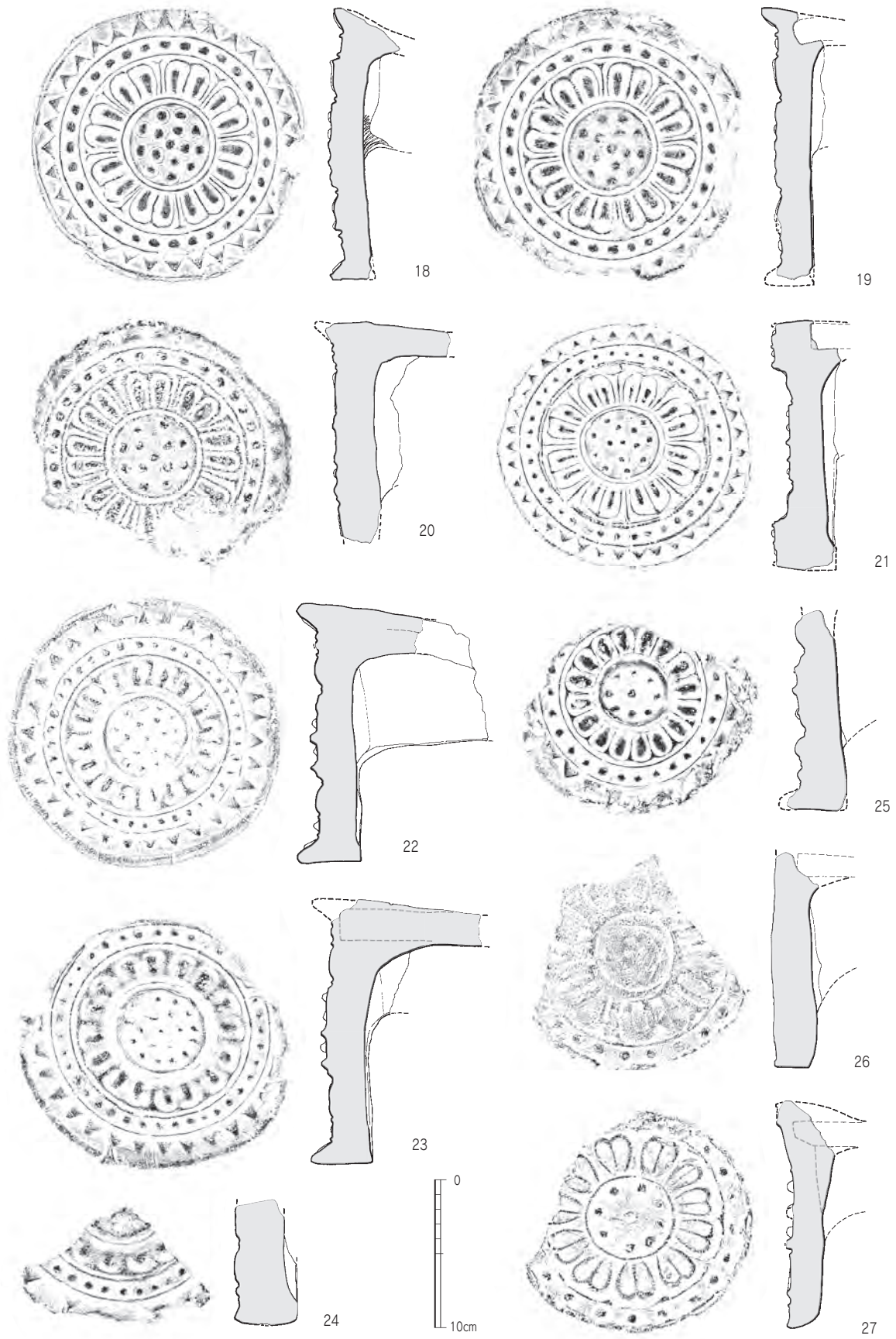


Fig.4 軒丸瓦実測図 (3) (1/4)

当地区では3点出土している。

322型式：凹弁表現の複弁6弁で、中房の周囲に蕊帯が巡るが、全体的には他に類がないぐらい非常に平板で立体感がない。当地区では83次の灰褐色土層から1点出土したものが唯一の資料である (Fig.4-26)。文様がずれて二重に押捺された状態であるが、範型の凹凸が少ないためにずれやすいという欠点があったのかもしれない。

324型式：複弁ながら凹弁である点は322型式と共通する特徴である。内区の複弁は付け根側が急速に細くなるため、ハート形を呈する。瓦範の違いからA・Bの2種に細分される。当地区では87次の床土からAが1点出土したのみである (Fig.4-27)。Aは、11弁あるうちの1弁だけが単弁の幅で窮屈な複弁を表現するのが特徴であるが、27をみてもその状況が窺える。ただし、設定されている型式一覧ではこの1弁は弁単が丸いとされるが、27を観察する限り小さいながらもハート形を維持していて完全な丸にはなっていない。

巴文型式の瓦：17次耕作土、147次茶褐色土層からそれぞれ1点出土している。いずれも中世期に属する巴文瓦とみられるが、小片のため型式分類は極めて困難である。ともに遺構からは乖離した資料で、出土点数もごく僅かである。当地区の変遷や性格とどの程度関わる資料であるかは不明であるため、ここでは出土例の紹介に留めたい。

②軒平瓦 (Fig.5～7, Tab.7～10, PL.2)

大宰府史跡において、軒平瓦 (古瓦) の型式分類は、現在63型式102種類に分類されている (文献は凡例参照)。不丁地区では、そのうち19型式29種類711点が出土しており、政庁前面広場地区194点、日吉地区30点に比べると、極めて膨大な点数といえる。その大きな要因には、軒丸瓦と同様にS D 320やS D 2340など官衙域を区画する大溝の調査が多数行われたことが挙げられる。なお、中近世期の軒平瓦も2点出土しているので、ここで併せて報告する。

以下、型式ごとに説明する。

510型式：まだ完形品が確認されていないが、内区に不揃いな斜格子文を地文としてその中に珠文を1つずつ配していくのが特徴である。また段顎で、凸面側に縄目を施す。当地区では5点出土しているが、包含層出土の1点を除けば出土遺構は溝S D 320に限られる。Fig.5-2では、凸面をナデやケズリで器面を丁寧に調整しているが、ごく僅かに縄目らしき痕跡を残している。

515型式：内区文様が二重の斜格子文で、それを横断するように雑な波線を一筋入れるのが特徴である。瓦範の種類からA～Dの4種類、Aは施文後の追刻からa・bの2種に細分される。当地区ではA aが2点出土している。A aはこれまで平瓦部に文字銘903C型式や906E型式を伴った例が確認されており、Fig.5-1にも906E型式の文字銘が打たれている。

560型式：いわゆる「老司式」の軒平瓦である。瓦当範の違いからA・B・E・Fの4種に細分され、さらに外区のあり方、範傷の程度などからAはA a・A b・A a'の3種、BはB a・B b・B c・B a'に細分される。とくにA aは既述の275A型式とともに観世音寺創建瓦の主要型式として広く知られているが、これまで政庁や周辺官衙の調査でも275Aや560Aはほとんど皆無に等しい。逆にBは政庁第II期の主要瓦であり、政庁や周辺官衙での出土量も多い。当地区では、B a (範傷なし)が29点、B a～B bが9点、B b (右側に斜交する範傷)が2点、B b～B cが9点、B c (左端にも斜交する範傷)が13点、Bが128点、細分不明

老司式










Tab.7 軒平瓦型式分類表(1)

型式番号	瓦当面													全長	顎形態	
	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁高			
510		-	-	-	34	25	一重斜格子	6	S	3	S	-	-	-	-	段顎
515Aa		263	52	284	55	27	二重斜格子	13	S20	15	RV19	右13 左12	S2	8	-	曲線顎
560Ba		-	-	336	59	26	HK	17	S25	16	△ RV31	右17 左15	RV 左右4	1	375	段顎
560Bb		326	82	330	54	26	HK	14	S25	14	△ RV31	右16 左14	RV 左右4	-	-	段顎
560Bc		-	-	-	52	27	HK	12	S25	13	△ RV31	左11	RV 左右4	1	-	段顎
561		-	-	-	58	28	HK	14	S26	18	RV25	-	-	2	337	傾斜顎
576		280	33	278	58	27	HK	16	S16	15	△ LV29	右23 左8	LV	3	-	曲線顎状
580		268	48	274	49	23	HK	13	☆ S23	13	内向 RV19	右13 左17	S	1	-	曲線顎状
582		-	-	-	42	19	HK	11	S34	12	RV20	-	-	2	-	段顎
600A		283	56	294	53	27	HK	14	S24	12	内向 RV29	右8 左8	-	-	-	段顎

(1/10)

☆：上外と脇区の合計 △：下外区と脇区の合計










Tab.8 軒平瓦型式分類表(2)

型式番号	瓦当面	瓦当面													全長	顎形態
		上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁高		
601A		-	-	-	64	32	HK	18	○ S40?	14	S	右16	S	6	-	曲線顎状
625		248	36	267	56	22	KK	19	○ S34	15	S	右22 左16	S	5	-	傾斜顎
635A		232	49	261	43	20	KK	9	GS15	14	RV27 右端 内向 RV1	-	-	2	-	段顎
635B		240	66	269	46	23	KK	14	GS15	9	RV27	-	-	2	-	段顎
642B		253	41	243	52	26	KK	11	○ S39	15	S	右10 左19	S	3	-	段顎
647		-	-	244	63	33	KK	17	○ S24	13	S	右13 左18	S	4	-	曲線顎
648		-	-	-	-	-	KK	-	S	-	S	-	-	-	-	段顎
653		275	45	275	62	31	KK	14	☆ S24	17	RV17	右15 左15	S	-	-	曲線顎状
656		255	35	258	49	32	KK	10	☆ S21 以上	7	LV15 以上	右13 左12	S	-	-	段顎

(1/10)

☆：上区と脇区の合計 ○：上外区と下外区と脇区の合計

Tab.9 軒平瓦型式分類表(3)

型式番号	瓦当面	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁高	全長	顎形態
657a		-	-	-	51	26	KK	13	☆ S17 以上	12	LV21	-	S	-	-	段顎
657b		-	-	-	54	27	KK	14	☆ S17 以上	13	RV21	-	S	1	-	段顎
662Ba		-	-	-	52	24	KK	20	○ S	8	S	右14 左13	S	2	-	段顎
688Aa		-	44	261	51	25	KK	20	S21	6	S20	-	-	2	344	段顎
688Aa'		-	-	273	43	26	KK	15	S21	-	-	-	-	1	-	段顎
688Bb		270	35	266	61	24	KK	17	S	20	S	-	-	-	-	段顎
688C		-	-	-	48	30	KK	15	S11 以上	3	S16	左20	左S3 右S2?	3	-	段顎
691Aa		253	39	254	54	24	HK	15	S17	15	△ RV24	右17 左16	RV	2	-	曲線顎状
691Ab		275	41	278	56	21	HK	19	S17	16	△ RV24	左16	RV	5	-	曲線顎状

(1/10)

☆：上区と脇区の合計 △：下外区と脇区の合計 ○：上外区と下外区と脇区の合計

Tab.10 軒平瓦出土点数表

型式名	点数	14次	14次補	17次	76次	83次	84次	85次	87次	90次	98次	104次	110次	124次	129次	147次	187次	192次	合計	百分比 (%)
510	5	1	3										1						5	0.71
515	Aa	2		1					1										2	0.28
560	560	29	1	2		1	2	1	9	2	1	2			2	3	3		219	30.80
	B	128	5	21	3	20	3	9	30	4		5		1	10	13	4			
	Ba	29		4	2	5	1	1	5				1	1	3	6				
	Ba~Bb	9							2			3			2	2				
	Bb	2		1						1										
	Bb~Bc	9		3					2			1		1	1	1				
	Bc	13	1	2		1		1	5	1	1	1								
561	17		1					8	1		1					5	1	17	2.39	
576	2	1								1								2	0.28	
580	1											1						1	0.14	
582	13					1	2	2	2					1		5		13	1.83	
600	A	2			1											1		19	2.67	
601	A	17			6		4	1		5			1							
625	3	1	2															3	0.42	
635	635	244	14	59		45	8	14	25	22	21	7	1	1		4	23		273	38.40
	A	27	1	3		2	5	1	5	3	1	2				4				
	B	2		1					1											
642	B	3		3														3	0.42	
647	1				1													1	0.14	
648	1				1													1	0.14	
653	6			3		1	1						1					6	0.85	
656	2			1	1													2	0.28	
657	657	15	1		1	3	4			1	2	2				1		94	13.22	
	a	77		9	9	5	27	6		15	3					2	1			
	b	2		2																
688	688	10	1	4	1	2		1			1							30	4.22	
	A	2		2																
	Aa	5	1	3				1												
	Aa'	3		1			1	1												
	B	4		2						2										
	Bb	1					1													
	C	5				1	2		1							1				
691	Aa	1			1													2	0.28	
	Ab	1			1															
不明	18		3	2	2		2	4								1	4	18	2.53	
合計	711	28	131	32	90	60	42	99	60	31	24	2	5	4	22	68	13	0	711	100.00

560型式
の新種か

が29点の、合計219点が出土している。Aが1点も存在しない点は、大宰府の典型的な様相といえる。Fig.5-3はB b, 4・6はB c, 5はB b～B cである。このうち3では顎面と平瓦部凸面, 5では平瓦部凸面に縄目が残る。なお, 7はこれまでBとしていたが細部に違いがあり, 新種のように取扱いについては続刊にて整理したい。

561型式：大きくゆったりと流れる老司系の偏行唐草文であるが, あまり丁寧な印象ではなく, 560型式の各種よりも弧深が極端に深い点が特徴的である (Fig.5-8～10)。当地区では17点出土している。Fig.5-9・10の顎面には拓影を掲載していないが, 縄目の叩きみられる。

576型式：短い波の偏行唐草文を主文とするが子葉の先端が粒状に丸くなる。また, 両脇区と下外区の鋸歯文が線鋸歯文になるのが特徴である。当地区では2点出土しているが, Fig.6-11に示したように小片しかない。拓影は未掲載であるが, 顎面に縄目叩きがある。

580型式：左に流れる偏行唐草文で, 唐草が大きく渦を巻き, 下外区の鋸歯文が内向きになる。外区は四周の境界がなく, 下外区以外は珠文が巡る。当地区では104次溝S D320の最上層出土の1点が唯一である。

582型式：左に流れる偏行唐草文で, 子葉の結節点が珠点になり, 両脇は切り落とされ, 下外区に少し大きめの鋸歯文が巡る。当地区では13点出土している。Fig.6-13は段顎で, 顎面に縄目叩きが残る。

600型式：右に流れる偏行唐草文で, 下外区の鋸歯文は内向きである。唐草文が6転半であるAと, Aの唐草の両端を短くしたような6転だけのBの2種に細分される。当地区ではAが2点出土しており, 顎部は段顎で縄目叩きが残る。

601型式：右に流れる偏行唐草文で, 唐草は一連ではなく, 1転ずつ複数本の子葉状に表現される。外区は珠文が四周を巡る。比較的流れが整っているAと, 流れが短く, 短い子葉の連続に見えるBとに細分される。当地区ではAのみが17点出土している。Fig.6-12は瓦当右端の破片であるが, 断面に平瓦を大きく包み込んで成形している様子を窺うことができる。

625型式：均整唐草文を志向しながらも全くの不揃いになっている。子葉も1転ずつ反転するものではなく, 2転したのちに2転するなど変則的である。外区は珠文が一周する。当地区では3点出土しているが, 全て溝S D320からの出土である。これまでの調査では平瓦部に文字銘902G型式を伴っている事例も確認されている。

鴻臚館式

635型式：いわゆる「鴻臚館式」の軒平瓦である。横に長いAと, 大きく沿って弧深が深いBがあり, とともに下外区の鋸歯文のみが内向きになるが, その下外区の鋸歯文がないCも存在し, 大きく3種に細分される。当地区では, Aが28点, Bが2点, 細分不明が244点, 合計274点が出土している。細分不明資料については, 観察する限りではその大半はAに属すると推定される。Fig.6-14～17はいずれもAの資料である。平瓦部凸面の調整を見ると, 14・17は格子目と縄目の両方が打たれ, 軒先側が格子主体, 狭端側が縄目主体になっている。15・16の凸面調整は格子叩き目しか確認できないが, 14・17の状況を考慮すると格子目のみと断定することはできないだろう。なお, 出土資料の大半は, 表面が黒く燻された瓦質焼成のもので, 同様の叩き目を有する軒先以外の平瓦の焼成もこれと共通するものが多い。

642型式：中心飾がハート形の鴻臚館系均整唐草文であるが, 唐草の周囲に一切加飾をしない簡素な文様で, 左右それぞれ4転ずつ反転する。左右に長く上外区のみ伴うAと, 左右幅が

短く不精美な文様に変化し、四周に珠文帯が巡るBの2種に細分される。当地区では、Bが3点出土しているが、いずれも溝S D320からの出土である。Fig.7-18では、平瓦の凹面側端部を面取りしたものを差し込んでいることが、断面観察から窺える。

647型式：中心飾りが左右の渦に分裂し、唐草も2転を単位に流れる均整唐草文で、四周には広い間隔で珠文が巡る。瓦当面の左右幅は比較的狭いほうであるが、接続する平瓦が他の型式に比べて倍ほどの厚さがあるため、完形品ではないものの重量はかなりある。なお、顎面に朱の付着が認められる。

朱が付着

648型式：少し太い線の均整唐草文であるが、外区との界線がなく、上外区・下外区に相当する部分に珠文が巡る。ただし、唐草文と珠文列の位置が少し重なるため、内区幅と上・下外区幅は定かではない。当地区では、76次溝S D320から1点のみ出土している。

653型式：均整唐草文で、中心飾りがハート形と円とが上下につながった文様となり、長く尾を引く唐草が2転を単位に反転する。上外区と両脇区は連続した珠文帯で、下外区のみ大きな凸鋸歯文である。これまで平瓦部に文字銘901B型式を伴った資料が確認されている。当地区では6点出土しているが、遺構出土のものは83次溝S D2350出土の資料のみである。Fig.7-19は、瓦当右端の破片である。

656型式：均整唐草文であるが、2本の唐草が平行して渦を巻き反転していく。上外区と両脇区は連続する珠文、下外区は線鋸歯文である。当地区では2点出土している。Fig.7-20は、元々三つの破片であったものを接合したもので、本来一団体である。

657型式：均整唐草文で、C字状の文様が左右対称にX状に交わった中心飾りを有し、幅の狭い内区に細線の唐草が長く広がる。外区に境界はなく、上外区と両脇区が連続する珠文、下外区が鋸歯文である。これまでの資料から、範傷がなく外区の鋸歯文が小さな線鋸歯文であるaと、右側に斜交する大きな範傷があり鋸歯文が凸鋸歯文に彫り直されるbの2種に細分される。当地区では、aが76点、bが2点、細分不明が15点出土している。このうち83次溝S D2337出土資料と83次溝S D2350出土資料とが接合した。Fig.7-21に示したaは、ヘラケズリにより段顎をつくり、その段差付近に朱の付着も認められる資料もある。

662型式：木の葉状の中心飾りを持つ均整唐草文で、内区を埋め尽くすように子葉が分かれているのが特徴で、一段高い外区には四周に連続して珠文が巡る。瓦範の違いからA・Bの2種に、さらに文様の彫り直しなどからそれぞれa・bの2種に細分される。当地区では14次補足調査の溝S D320下層からBaが1点のみ出土している (Fig.7-22)。ちなみに、Baはこれまでに平瓦部に文字銘907型式を伴った資料が確認されている。

688型式：中心飾りがなく内向する均整唐草文で、範の種類からA～Cの3種に分類されるが、範傷の進行や施文後の切り落とし加工などから、Aa・Aa' (下外区の削り落とし)・Ba (子葉が増える)・Ba' (さらに子葉が多い)・Bb (範傷)・C (太く子葉が少ない) の5種に細分される。当地区では、Aが2点、Aa (Fig.7-23) が5点、Aa' (Fig.7-24) が3点、Bが4点、Bbが1点、C (Fig.7-25) が5点、細分不明が10点の、合計30点が出土している。Fig.7の23・24・25はいずれも顎面および平瓦部凸面に縄目叩きが認められる。

691型式：内区に唐草文を並べる特異な文様で、左の唐草文は右流れ、真ん中と右の唐草文は左流れである。範型の種類によりA・Bの2種に、さらに文様の潰れや彫り直しなどからA

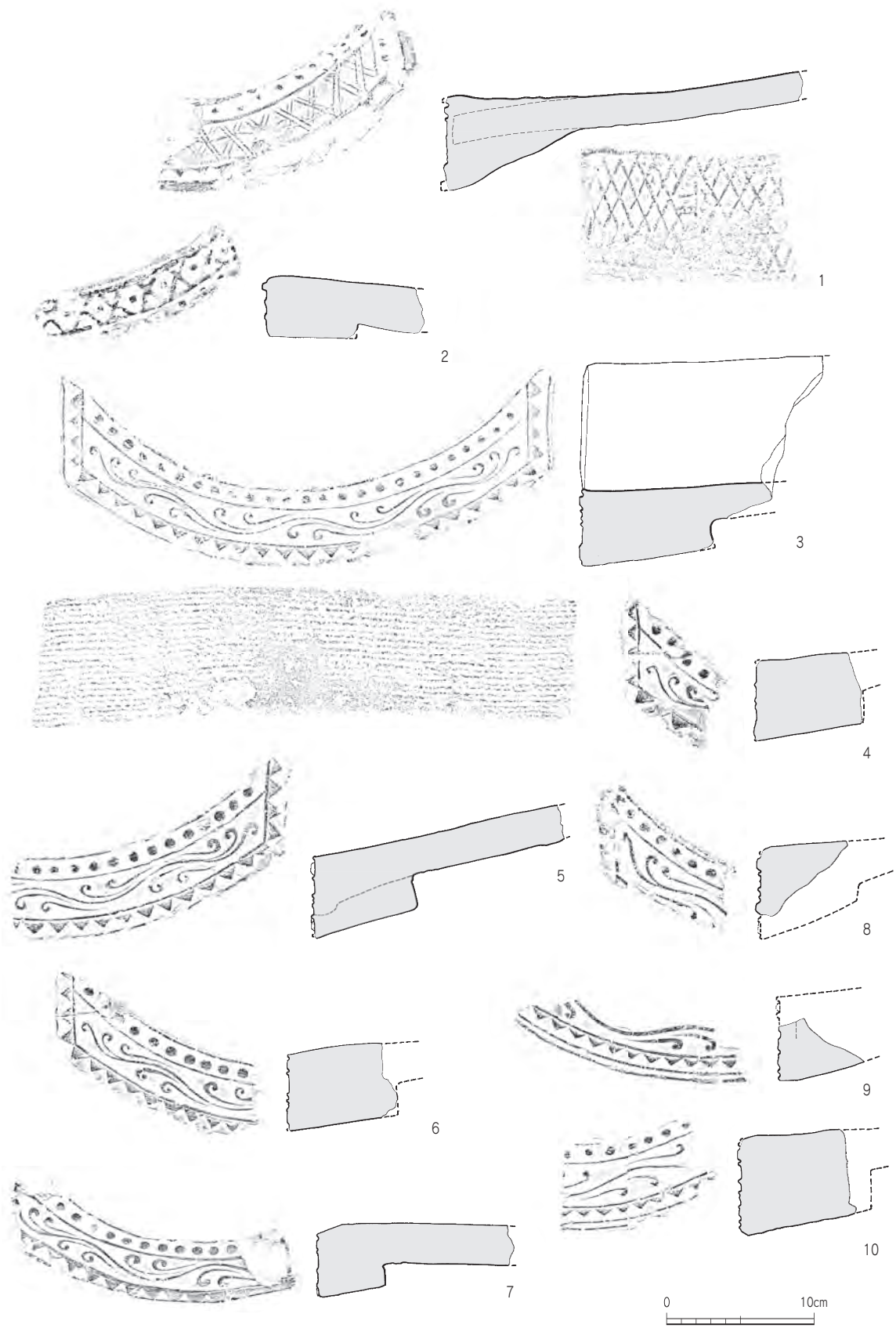


Fig.5 軒平瓦実測図 (1) (1/4)

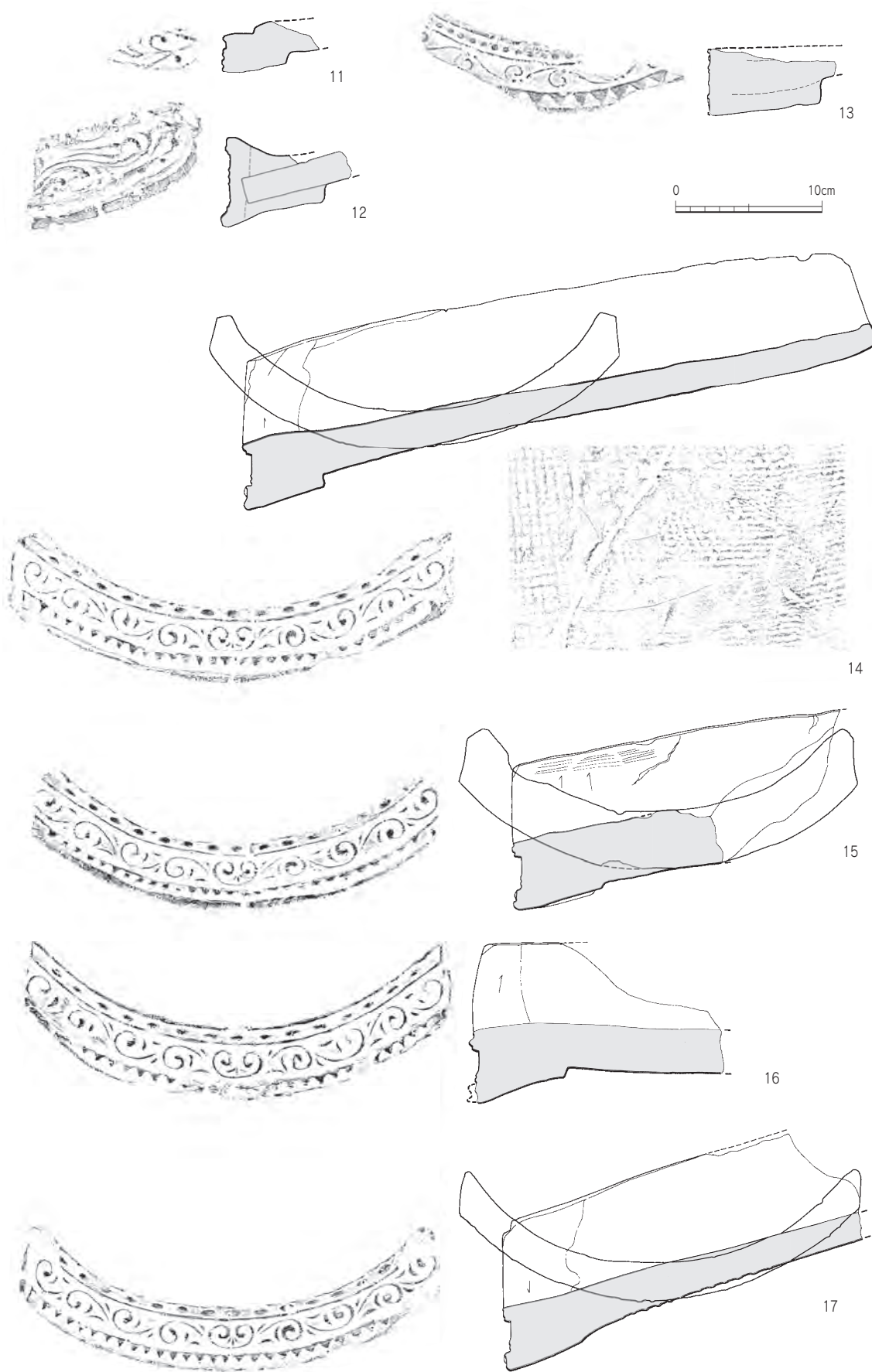


Fig.6 軒平瓦実測図 (2) (1/4)

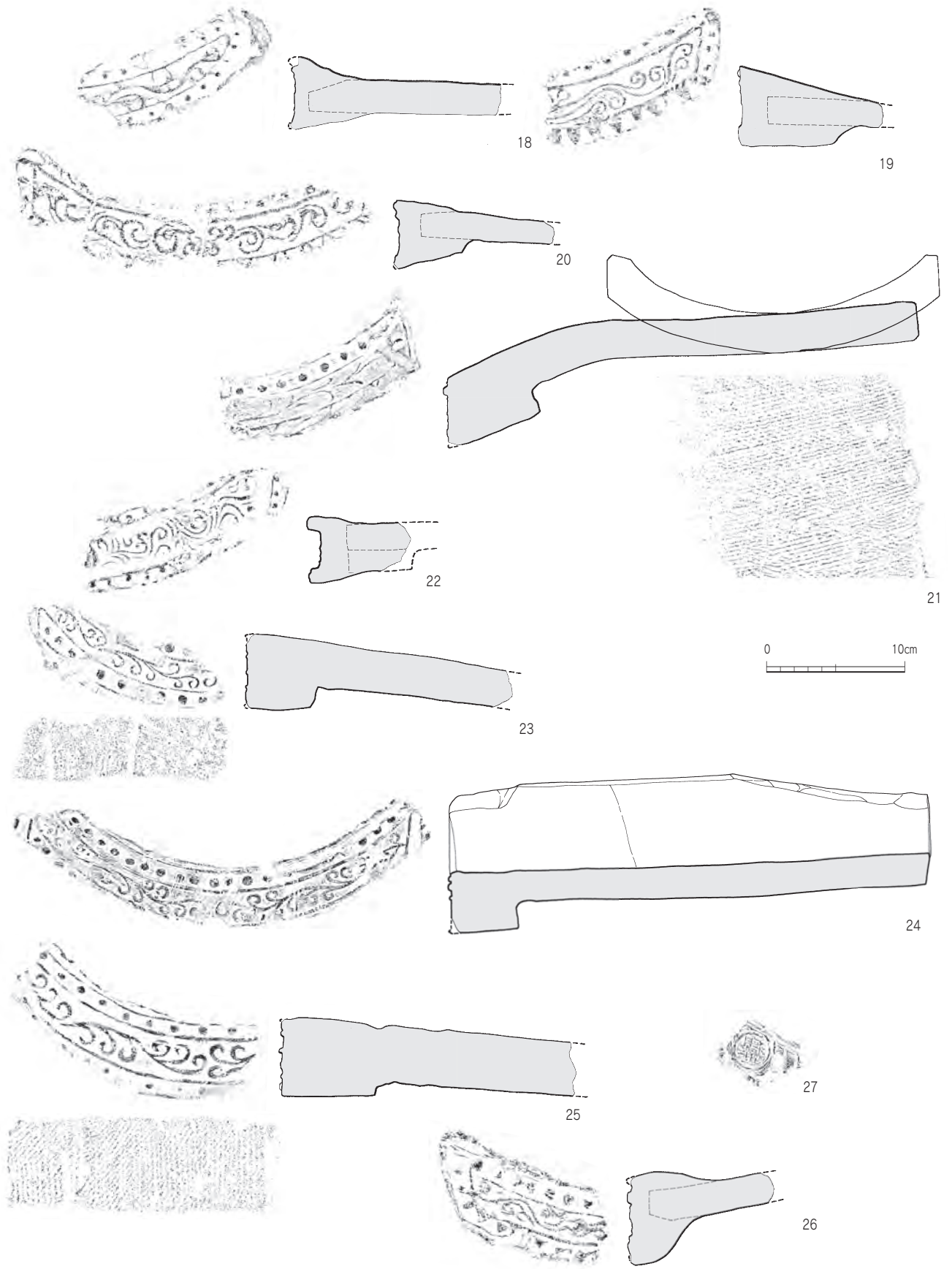


Fig.7 軒平瓦実測図 (3) (1/4)

は a～c の 3 種、B は a・b の 2 種に細分される。当地区では 17 次調査区から A a が 1 点、A b が 1 点出土している程度である。A b (Fig.7-26) は、その拓影からも全体的に潰れが進行する以前の状況が窺える。また、断面観察からは平瓦の広端側凸面端を面取りしている可能性が高い。

4301 型式：中世期の軒平瓦で、剣頭文が主文となり、「観世」「音寺」「瓦也」の左字 2 字を丸で囲んだものを、左端・中央・右端の順に配している。当地区では左端の「観世」の部分の破片が、14 次補足調査の床土から 1 点のみ出土している (Fig.7-27 拓本のみ)。観世音寺所用瓦であることは明白なので、後世の造成などによる混入であろう。

中・近世軒平瓦新種：明らかに古代瓦とは異なり、中・近世瓦とみられるが『観世音寺—遺物編 1—』の分類にはない種類の軒平瓦である。左端の小破片であるが、唐草文の流れ方からすれば 0901 型式ないし 1001 型式に近い均整唐草文のようである。全体像が判然としないため、ここでは新たな型式名称の設定は控えたい。14 次調査時に出土したものであるが、所属する遺構あるいは層位も不明であるため、年代的な位置づけも不明確である。

当地区出土の軒平瓦は以上であるが、整理作業を進める過程で、政庁前面広場地区の 86 次調査分の資料の中で新たに 3 点の軒平瓦を確認した。ここに補遺として紹介しておく。いずれも床土下の灰褐色土から出土したもので遺構には絡まないが、TM18 グリッドから 560 B 型式 1 点と 635 型式 1 点、TK18 グリッドから 582 型式 1 点が出土している。グリッドの位置は既刊報告書を参照されたい。

前面広場の
追加資料

2) 道具瓦類

不丁地区の出土瓦のうち道具瓦は、鬼瓦 25 点、文様埴 11 点、熨斗瓦 9 点、面戸瓦 10 点が確認でき、この他に無文埴が多数出土している。紙幅の都合上、その全てを報告することはできないため、無文埴を除いた各種類の主要資料について報告を行うことにしたい。

① 鬼瓦 (Fig.8・9, PL.3)

確認した 25 点はいずれも大宰府式鬼瓦で、その内訳は I A 式 4 点、I B 式 7 点、II 式 13 点、新種 1 点である。以下にそれぞれの代表資料について報告を行う。

1・2 は I A 式である。1 は右上部の破片で、額の力瘤表現や二束の頭髪の流れ方、径 1.6cm 程度の外区珠文など、I A 式の特徴を備えている。眉間部分に円形の釘穴が表面側から穿たれている。2 は左下部片で、中央部を欠いているが上歯が 6 本になる点や外区に径 1.6cm の珠文を巡らせる点など I A 式の特徴である。焼成は良好だが、亀裂が多数生じている。焼成は 1・2 ともに須恵質である。

3～5 は I B 式である。いずれも破片であるが、強く巻き込む眉根、横に長い額中央部、4 本の上歯、溝のある上牙、三つの球状の口髭、径 1.6cm ほどの外区珠文など、各種特徴を備える。釘穴は眉間部分の 1ヶ所だけである。いずれも鴻臚館式軒瓦に類した焼成で、黒色～黒灰色を呈する。

6～11 は II 式とみられ、出土点数も最多であるが破片資料ばかりである。しかし、上辺外区の小粒の珠文、縦長の額の力瘤表現、径 1.2cm 程度の外区珠文、四つの球状の顎髭、上牙と下牙とが近接する点など II 式の特徴を備える。釘穴は眉間に円孔ないし方孔を穿っている。鼻

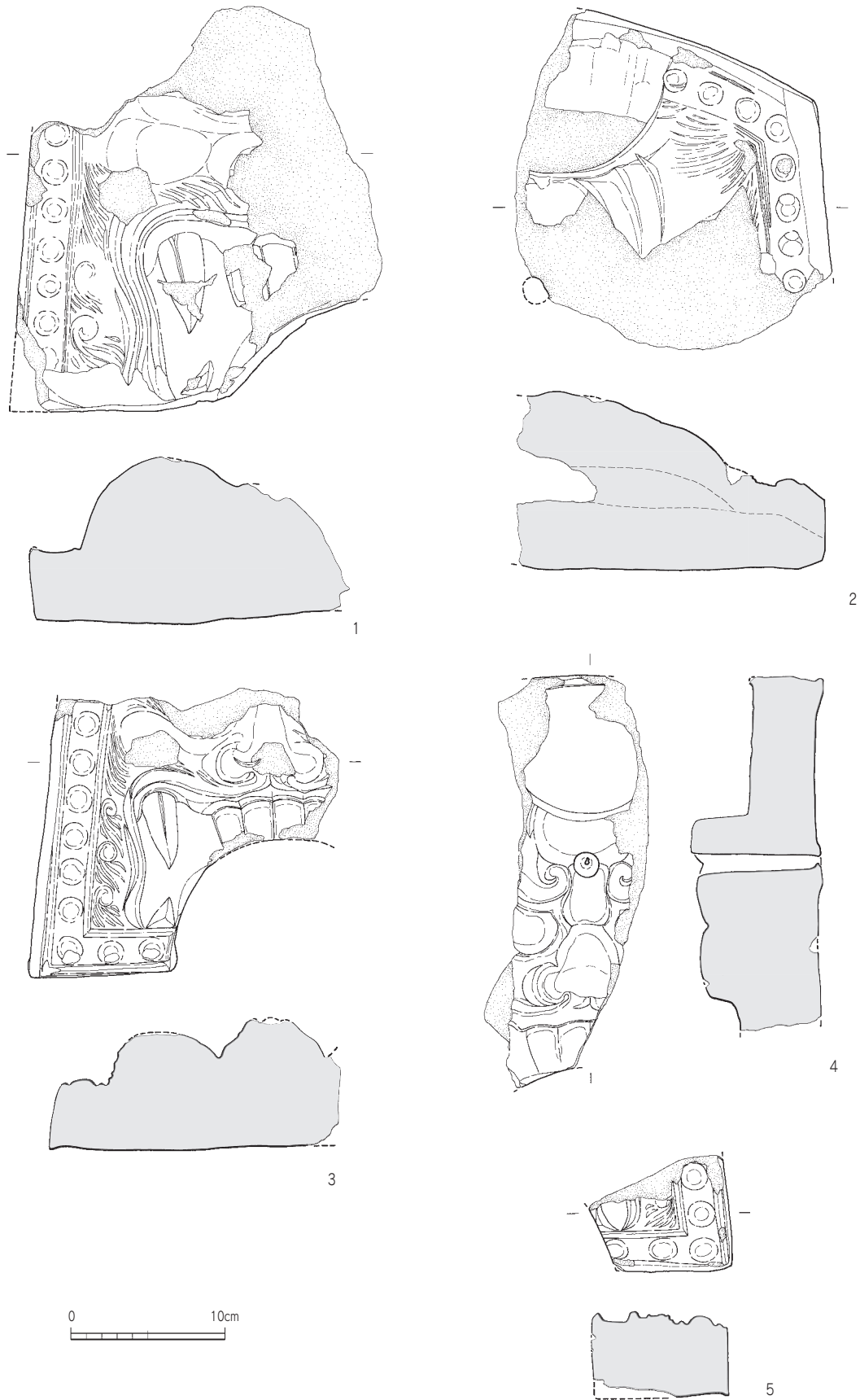


Fig.8 鬼瓦実測図(1)(1/4)

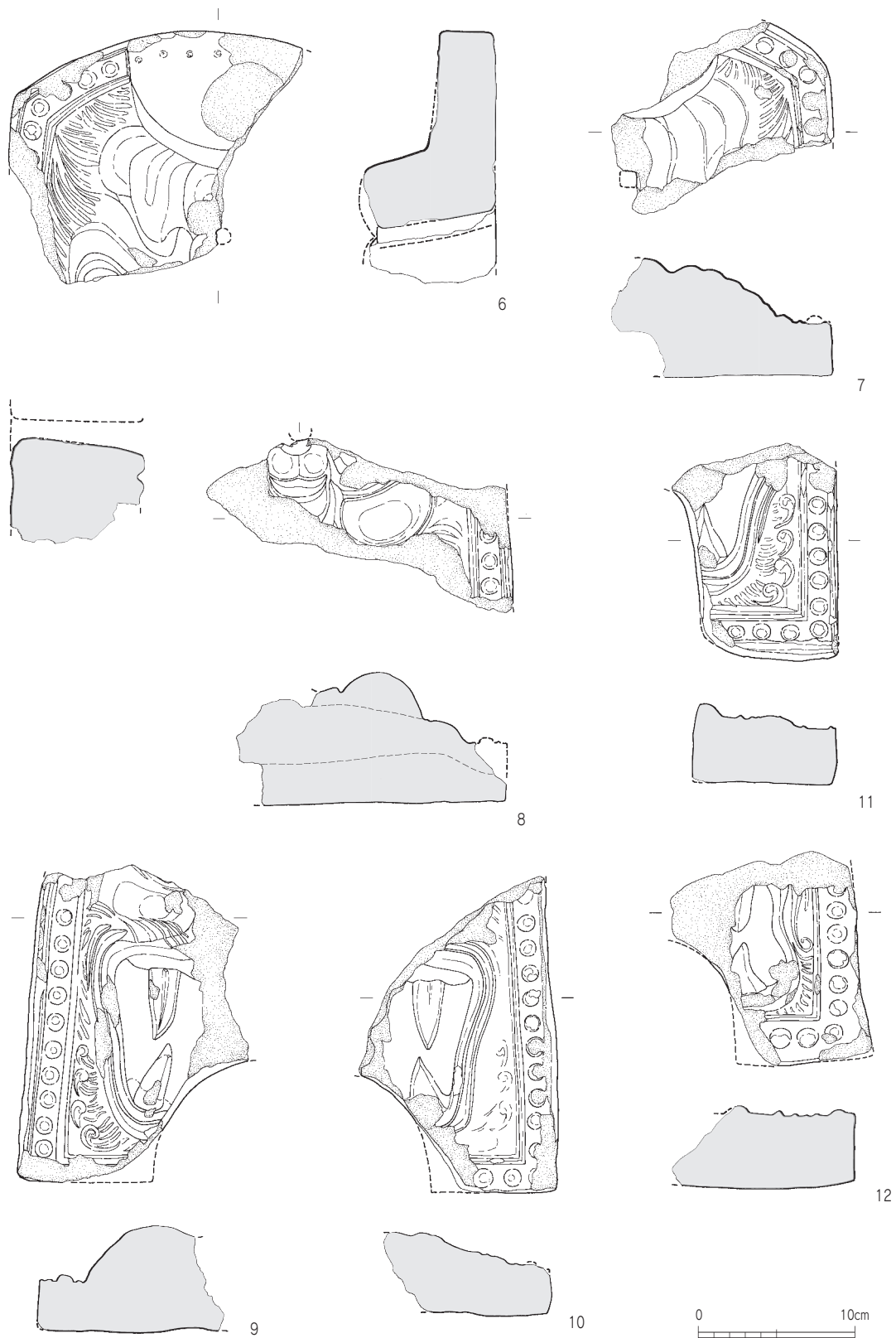


Fig.9 鬼瓦実測図 (2) (1/4)

新 型 式 の
鬼 瓦

は図示していないが、鼻孔が円形の面をなす表現の破片がある。焼成はいずれも須恵質ないし瓦質で、多くは灰色～暗灰色を呈する。

12は、平成5年度概報においても指摘しているように大宰府式鬼瓦の系譜にある新出の鬼瓦型式である。本来ならば型式分類を行う必要があるが、まだ未報告の地区もあるため分類については将来に期したい。全容を知り得ないが、全体的な法量はII式に近い。口の形態が台形になる点や、口元の髭が下向きに流れて渦を巻く点などが、I～III式とは異なる特徴である。焼成は瓦質で、表面は黒灰色を呈する。

②文様罇 (Fig.10, PL.3)

確認した11点のうち極小片である1点を除いて、Fig.10に示したものが全てである。

1～8は方形罇である。いずれも断片資料であるが、中央の宝相華文から放射状に花文がのび、四隅に観花文を配している。内区の地文は水波文で、左上から右下に向かって流れる。外区には珠文が巡る。上面のみの施文である。いずれも焼成は須恵質であるが、1・8は少し焼成が甘く軟質である。厚さはおおよそ6cmで一定している。

9・10は長方形罇である。ともに右下部分の破片で、中央に蓮華文を置き、その周囲に唐草を巡らせる。隅には方形罇と同じく観花文を置く。内区の地文は水波文であるが、長辺に沿って横方向に流れるのが特徴である。外区には珠文帯が巡る。9は長辺側の側面にも施文されている。側面の文様は上下にそれぞれ平行して流れる唐草文を置き、その間に6弁の蓮華文を一つ置く。中心飾りは欠損している。なお、10の中心には方形の釘穴が穿たれている。

③熨斗瓦 (Fig.11, PL.3)

瓦の総出土量に対して極めて少量で、確認したのはFig.11に掲載した程度しかない。

1は軒平瓦635型式(鴻臚館式軒平瓦)の凸面に打たれたものと同じ長方形格子叩きの熨斗瓦である。一部欠損するがほぼ完形品で、他の例に比べて一回り大きい。狭端幅14.4cm、広端幅17.0cm、厚さ2.4cmを測る。粘土板桶巻作りの平瓦を2分割したもので、凹面には糸切り痕が明瞭に残る。灰色～黒灰色を呈する特徴も軒平瓦635型式と共通する。

2～9は縄目叩きの熨斗瓦で、叩きは縦方向に長手に打たれている。いずれも凹面の状況から桶巻作り平瓦を分割したものと考えられ、4～7は3分割であるが、2・3・8・9は幅が狭いため4分割によるものか。側面は分割破面を残す6・7、ヘラで削る3・5、面取り調整までする2・8など多様である。なお、8・9は元の平瓦の側部側にあたり、8は右狭端部に隅切り加工、9は左側部に面取り調整が行われている。また、7のように凹面に明瞭に糸切り痕を残す粘土板桶巻作りの資料もあるが、4・5は粘土紐桶巻作りとみられる。焼成は硬軟の差はあるがほとんど須恵質であるが、5・7は瓦質焼成で、表面は黒灰色、断面は灰白色を呈し、焼成具合はいわゆる鴻臚館式と呼ばれる軒平瓦635型式に伴う平瓦に類している。

④面戸瓦 (Fig.12, PL.3)

当地区出土の面戸瓦はFig.12に掲載したものに限られる。いずれも丸瓦を原体に焼成前に製作されたいわゆる蟹面戸瓦のみである。全てが小片であるため全容を知り得ないが、大小の差異があるようである。しかし、あくまで破片であるため、ここでは分類は行わない。

焼成は、1・5が須恵質である他は瓦質である。このうち、2・3・6・8～10は表面が黒灰色、断面が灰白色を呈する特徴が鴻臚館式軒瓦に類する。

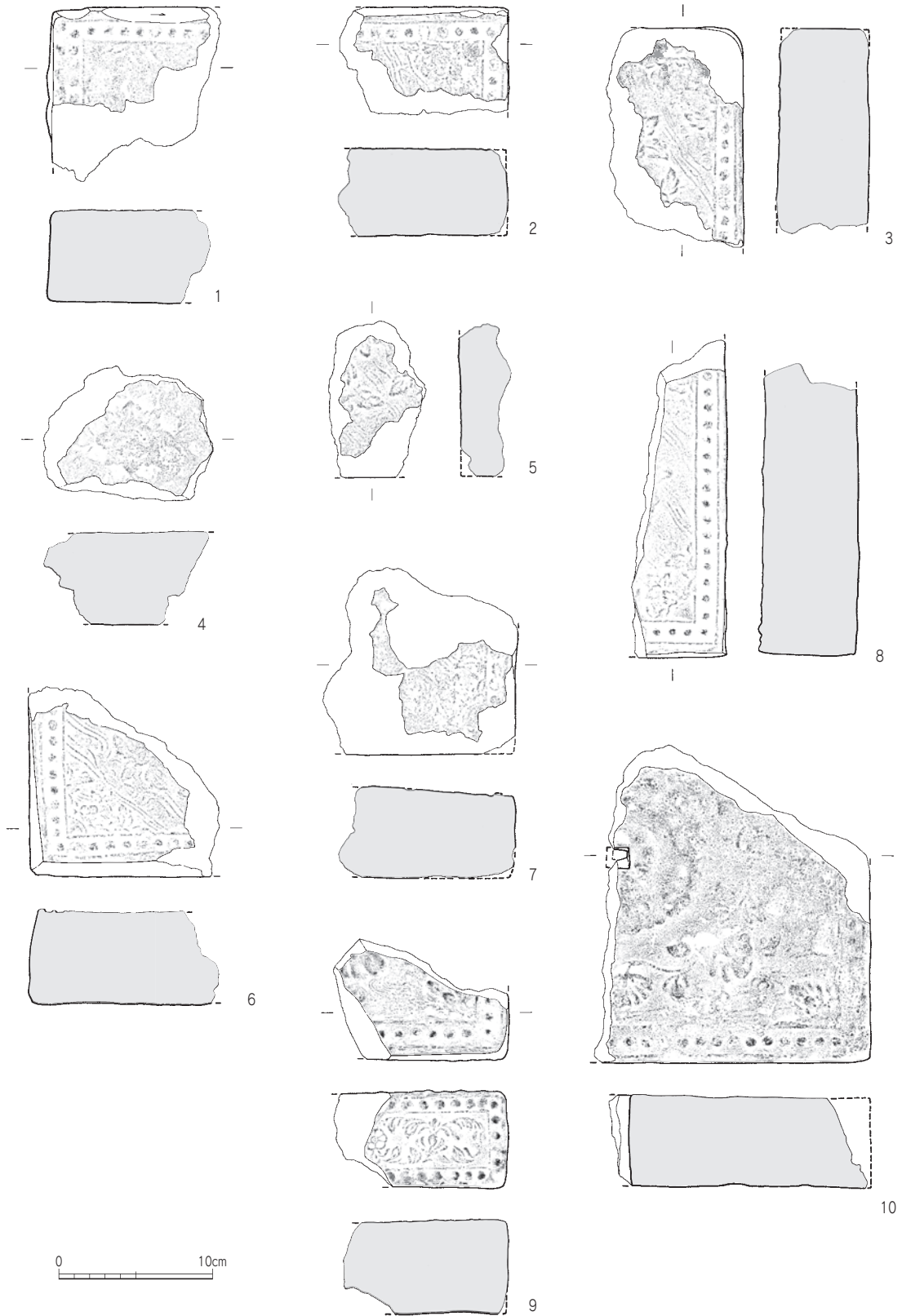


Fig.10 文様埴実測図 (1/4)

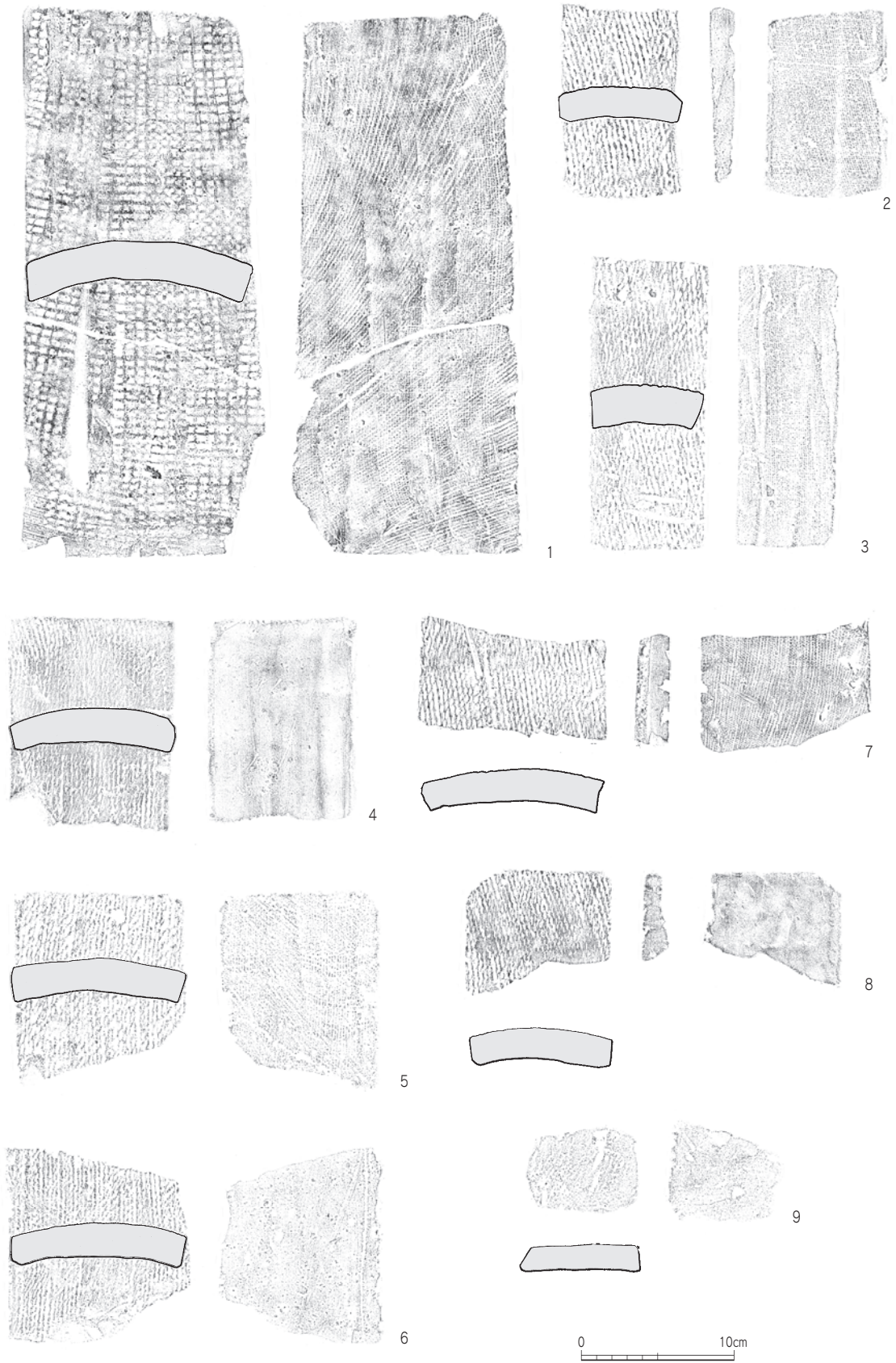


Fig.11 鬲斗瓦甗测图 (1/4)

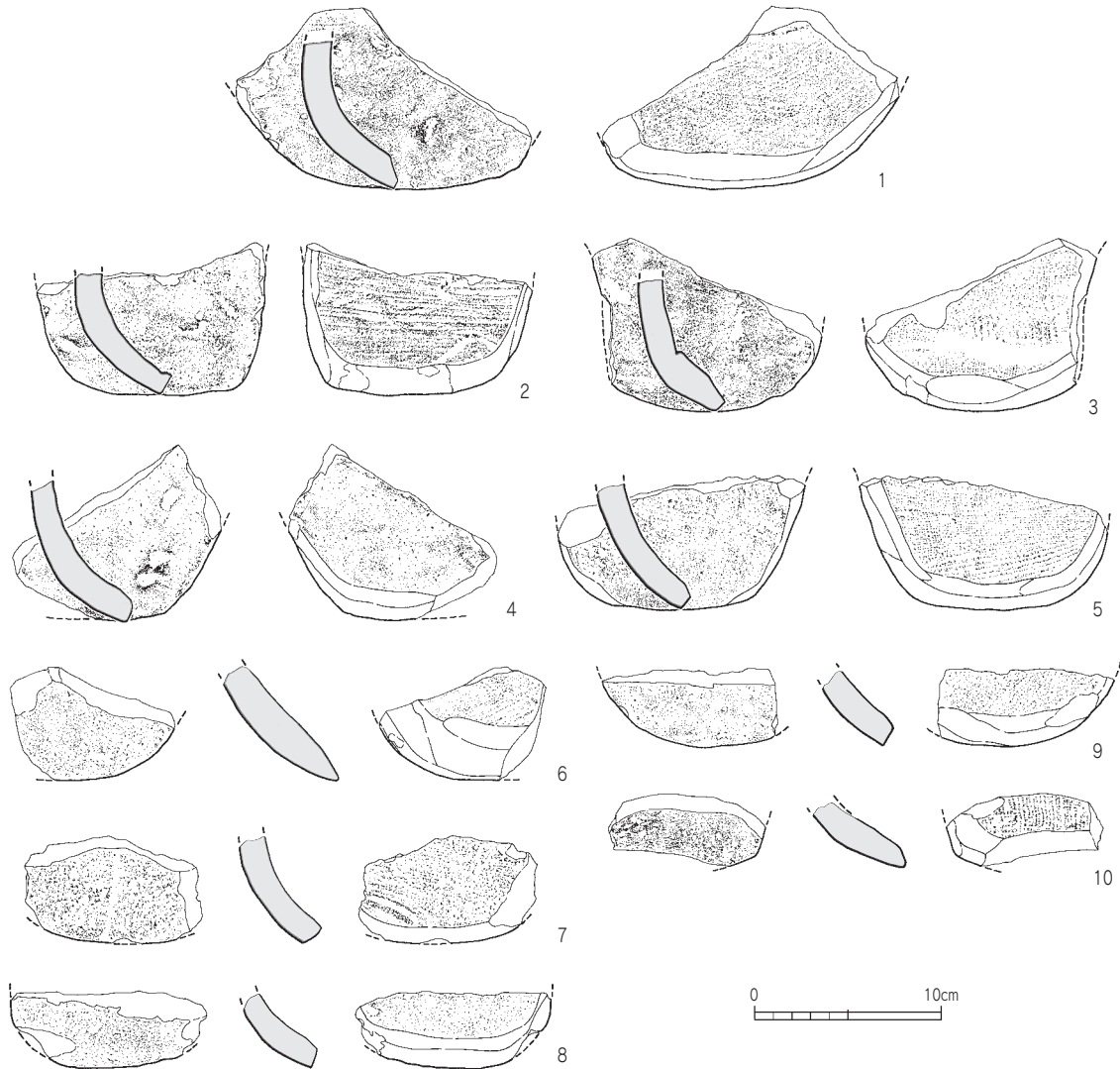


Fig.12 面戸瓦実測図 (1/4)

凸面の調整は、3・5・8～10が明らかに縄目ナデ消しで、その他はナデ調整である。しかし、大宰府史跡ではこれまでも格子叩きの面戸瓦が発見されていないことから、後者のナデ調整の資料も縄目をナデ消したものであろう。凹面はいずれも布目痕が確認できる。また、3は粘土板の継ぎ目が明瞭に残り、6をはじめ明瞭に糸切り痕を残す資料が目立つことから、ほとんど粘土板巻き上げによるだろう。端部については、2・7を除いて全て凹面側の面取り加工を行っている。

3) 文字瓦 (Fig.13～15, Tab.11, PL.4)

丸・平瓦の凸面に木製長手叩打具で押捺することで格子目・斜格子目の中に文字が刻印される叩打痕文字瓦は、大宰府史跡では現在23型式83種類が設定されている(凡例参照)。ただし、設定された以外の新種も確認されており、不丁地区でも新型式が数点存在する。そのうち分類可能な資料については型式番号を割り当てたが、判読不能な資料については番号設定を保留している。そうした事例も含め、不丁地区では15型式63種類959点が出土しているが、全体の

半数強を901型式が占める点は、日吉地区とも共通している。なお、記号や文様を叩打した例もあるが、明らかに文字銘ではない類については、丸・平瓦の項目で述べることとする。

文字瓦の
半 数

901型式：「平井」「平井瓦」「平井瓦屋」銘の文字瓦で19種類あるが、当地区ではA～E・F a・G a・G b・H a～H c・I a・I b・J～Nの18種類507点が出土している。Aは方形枠の中に陰刻左字の「平井瓦屋」銘、Bは陰刻の「平井瓦」銘、CとDは陽刻の「平井瓦」銘、Eは斜格子が陰刻の「平井」銘、F aはEより大きい陰刻格子に「平井」銘である。また、G a・b・H a～H c・I a・I bは斜格子の中に「平井」銘を置くもので、J・Kはその左字のもの、L～Nは「平井」銘が横位になるものである。出土点数ではA～Cが突出しており、Dも比較的多い。901型式の総点数は507点で、既述のように文字瓦の半数を占めている。

902型式：「佐」「佐瓦」銘の文字瓦で12種類が確認されており、当地区ではA・B a・B b・C・D a・D b・E～Jの11種類141点が出土している。Aは斜格子に重ねて「佐」銘、B aは斜格子の中に菱形の枠を設けその中に左字の「佐」銘、Cは斜格子の中の菱形枠に正字の「佐」銘を入れる。また、D aは左字の「佐」銘より上が斜線、下が斜格子で、D bはD aに追刻して上下とも斜格子にしたもの、Eは斜格子の中に長方形枠を設けて「佐」銘を入れるものである。Fは不規則な斜格子に左字の「佐」の異体字銘、Hは細かい斜格子に重ねて左字の「佐瓦」銘を入れる。Iは斜格子の中に六角形の枠を設けて、その中に「佐瓦」の異体字銘を入れ、Jは同様の枠に「佐」の異体字銘を入れる。当型式は総点数141点と、901型式に次ぐ出土量ではあるが、その差は歴然としている。主要瓦ではあるが、主体的にはならない型式といえよう。

903型式：「賀茂」「賀茂瓦」「賀」銘の文字瓦で11種類が確認されており、当地区ではA・B a・C～G・H a・H b・Iの10種類43点が出土している。A・B aは二重格子に「賀茂瓦」銘、Cは格子に左字の「賀茂瓦」銘、D～Fは二重格子に「賀茂」銘を重ねる。Gは斜格子の一角に菱形の面を残し「賀茂」銘を重ね、H aは斜格子に左字の「賀」銘、H bはH aの左字の「賀」に追刻を行う。Iは二重格子に左字の「賀」銘を重ねる。各種とも10点未満で、さほど顕著な傾向は見出し難い。量的には比較的多いが、全体の中では5%弱である。

904型式：「安」「安楽寺」「安楽之寺」銘の文字瓦で安楽寺（太宰府天満宮）の所用瓦である。6種類が確認されているが、当地区ではA a・A b・Dの3種類のみが出土している。A aは斜格子の大きな枠の中に「安楽之寺」の4字を入れるもので、A bはこれに二重の縦線を追刻して安楽寺所用瓦ではないことを示すとされる。Dは二重格子の中に左字の「安」銘を置くものである。A aが2点、A bが8点、Dが3点と、全体に少ない資料ながら「安楽之寺」銘を消したA bが最も多い傾向にあり、本来の安楽寺所用瓦であったA aが少ない点と合わせて、この種の瓦の生産と流通を考える上で興味深い傾向といえる。ちなみにA bは、大宰府政庁第II期と第三期との間で確認された焼土層から出土したことで知られている。

906型式：「筑前瓦」「筑」「前」銘の文字瓦で7種類が確認されており、当地区ではA・C・D・Eの4種類が出土している。Aは不規則な斜格子に左字の「筑前瓦」銘、Cは斜格子の中に正方形の枠を設けその中に「筑」銘、DはCよりも細い書体で「筑」銘、Eは斜格子に異体左字の「筑」銘を置く。各種とも5点以下、合計でも12点と全体の1%に過ぎない。

907型式：田の字形の枠に「大国」銘を二列並べる文字瓦で、24点出土しているが、全体の

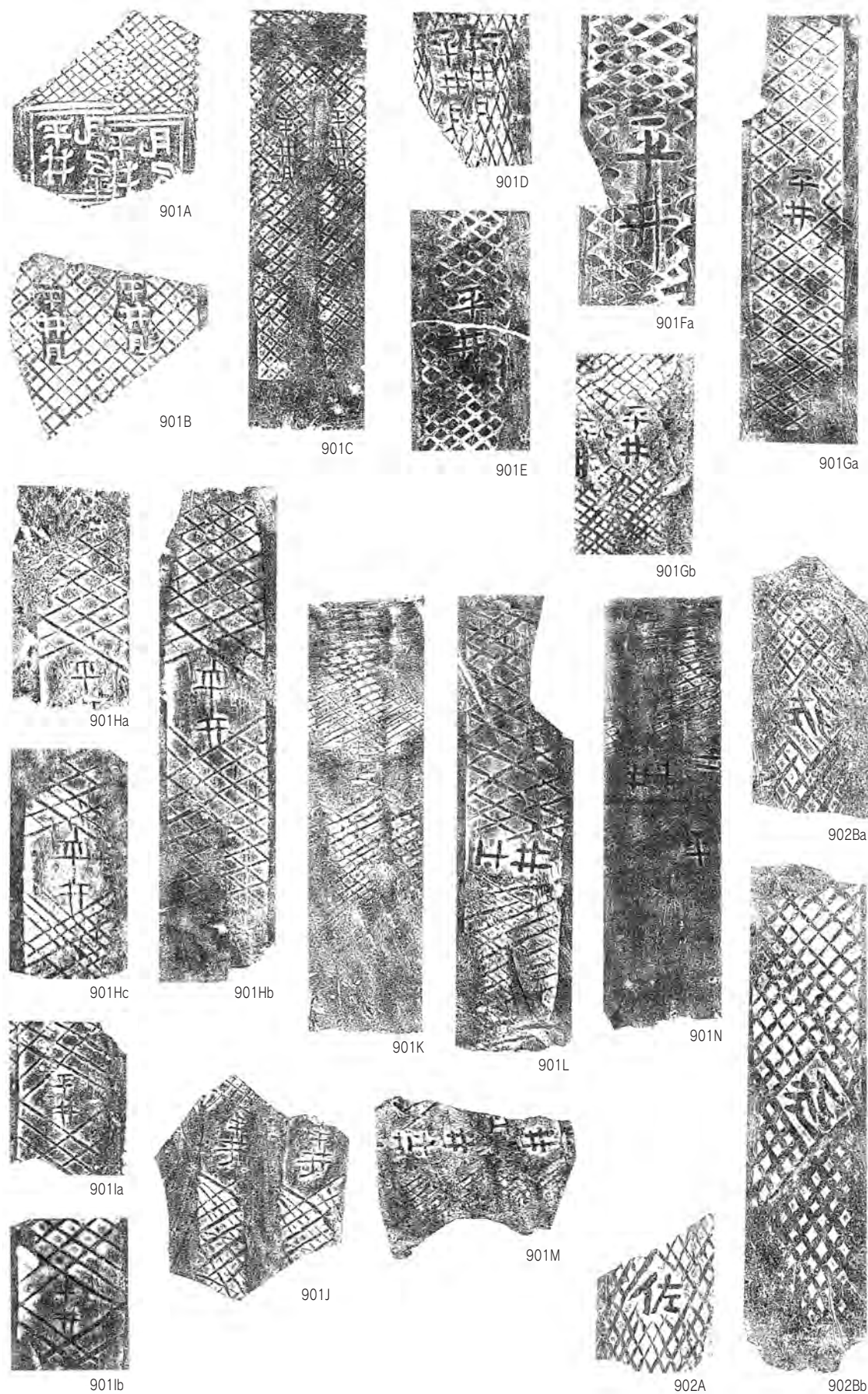


Fig.13 文字瓦型式拓影 (1) (1/4)

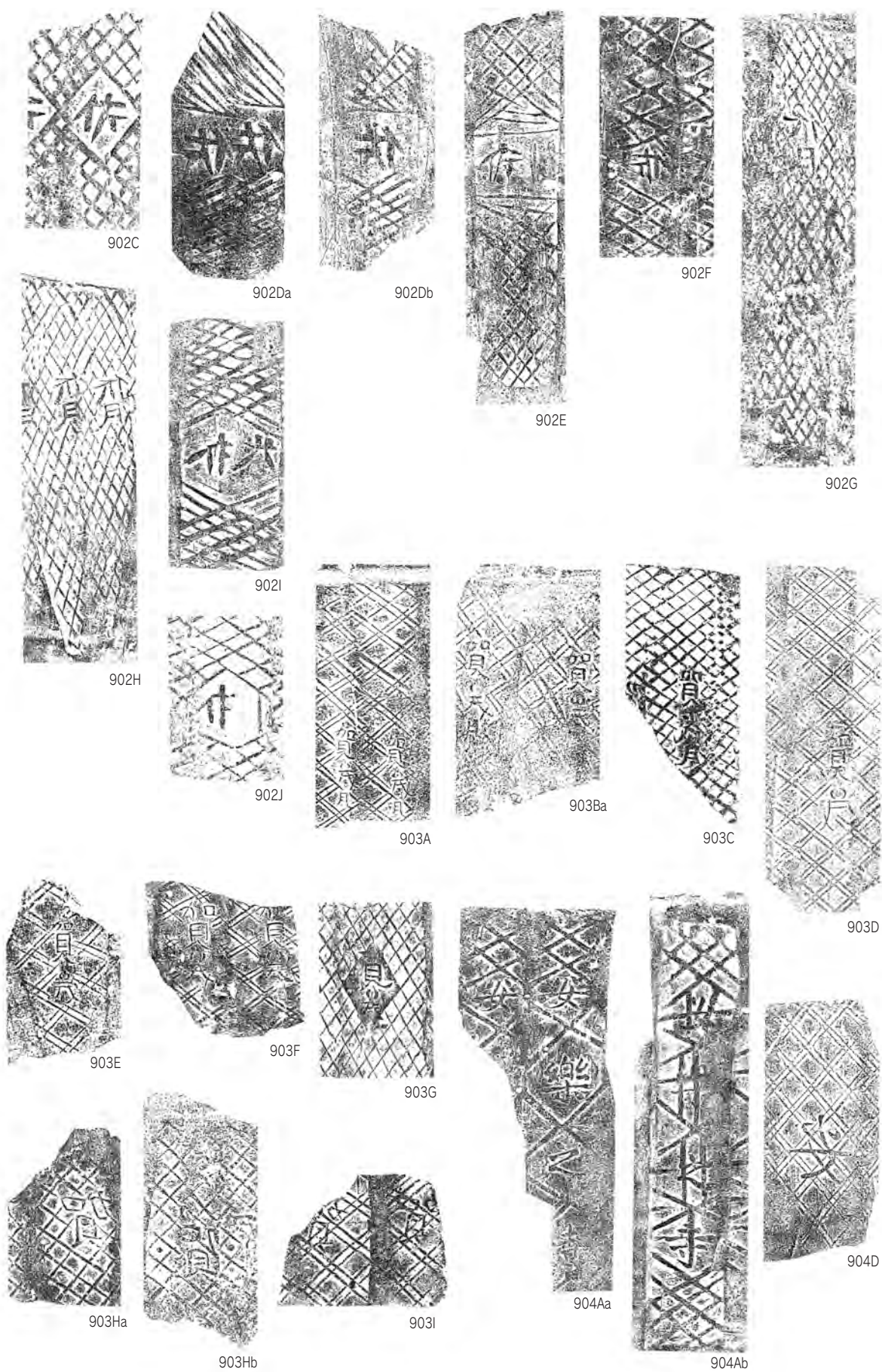


Fig.14 文字瓦型式拓影 (2) (1/4)

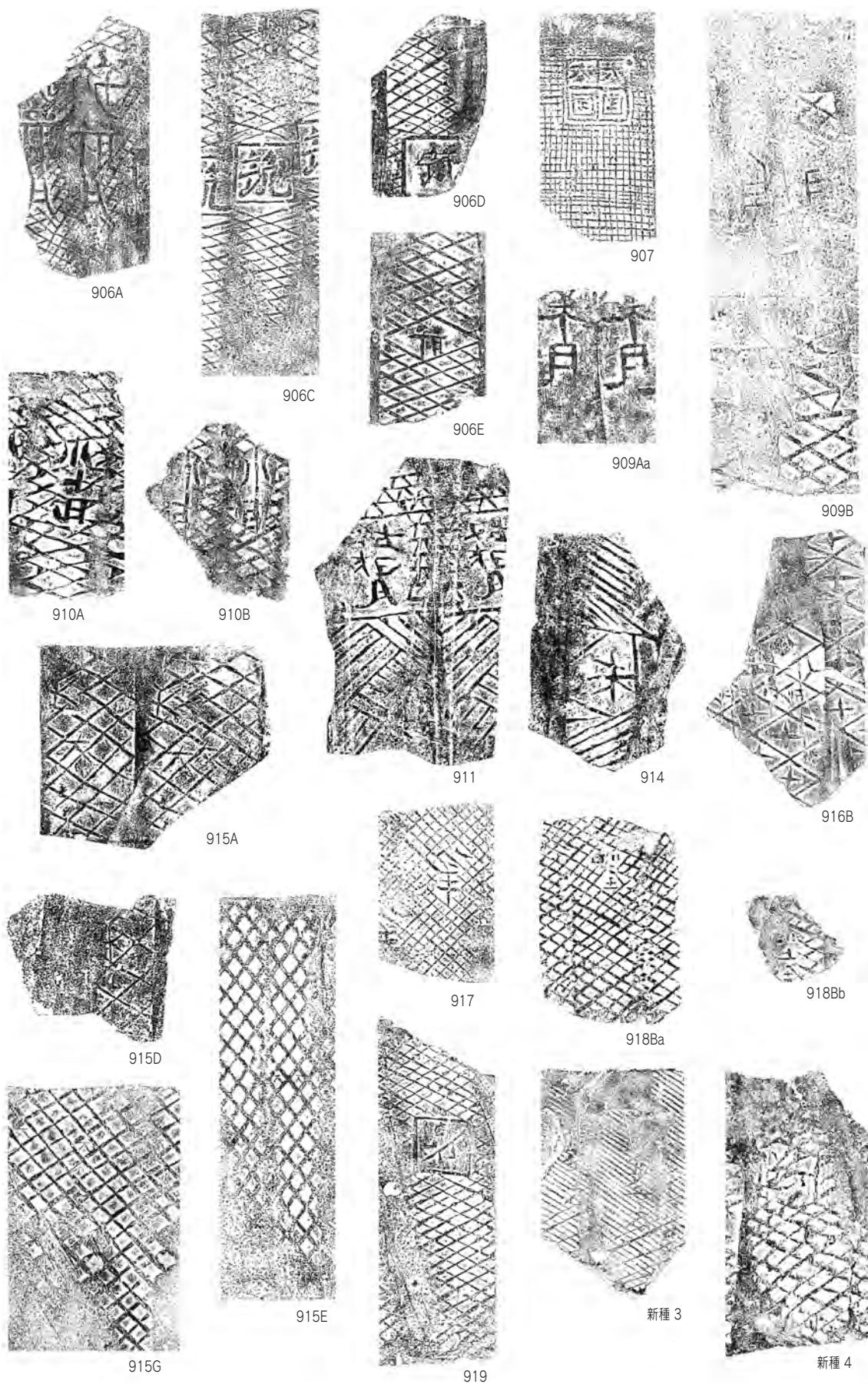


Fig.15 文字瓦型式拓影 (3) (1/4)

Tab.11 文字瓦出土点数表

型式名	点数	14次	14次補	17次	76次	83次	84次	85次	87次	90次	98次	104次	110次	124次	129次	147次	187次	192次	合計	百分比 (%)
901	A	81	9	26	9	11	18	4	2							2			507	52.88
	B	122	15	54	8	10	5		4	1	1	1	1				21			
	C	129	11	40	25	7	13	4	1	12	4		1				3	8		
	D	44	4	10	3	10	3	2	2	3		3						4		
	E	13	1	2	1	2	2	2	1	2										
	Fa	4			2		1			1										
	Ga	22	6	10	1	1	1			1		1					1			
	Gb	10		2		2	2	1	1								1	1		
	Ha~Hb	1	1																	
	Hb	12	1	6		2				1							2			
	Hc	22	1	6		3	2			5							2	3		
	Ia	3						2										1		
	Ib	4		1		1				1			1							
	J	6		1	1	3											1			
K	2				2															
L	24	1	5	1	4	4	5		2							2				
M	5				1		1		2								1			
N	3		1	1					1											
902	A	23	2	10	4	4											3	140	14.60	
	Ba	2	1						1											
	Bb	13	2	8				1									2			
	C	35	5	12	6	2	3	1	3			1				1	1			
	D	5				3						2								
	Da	4	2	1								1								
	Db	11		4		4		1	2											
	E	10	2		1	1	1			2	1					2				
	F	6	3			1	1					1								
	G	7	1	2			2	1	1					1						
	H	5		1		3				1										
903	I	15	3	6		2	1		1	1						1		43	4.48	
	J	4				2			1							1				
	A	6	1			5														
	Ba	7	1	2	2	1	1													
	C	8	1	1		2			2							1	1			
	D	3	1		1		1													
	E	6	1			1	4													
	F	3			1		1		1											
	G	5		1				1	1	1			1							
904	Ha	2		1		1												13	1.36	
	Hb	2	2																	
	I	1															1			
906	Aa	2	1						1									12	1.25	
	Ab	8		1	3		3		1								1			
	D	3				2														
907	A	4		2		1									1			24	2.50	
	C	5		1		1			3											
	D	2							1								1			
909	A	1																2	0.21	
	B	1							1											
910	A	25	3	15		1	3		2							1		41	4.28	
	B	16		12		3	1													
911	A	18	3	6	2	2	2	1	2									18	1.88	
914	A	1				1												1	0.10	
915	915	26				5		1									20	58	6.05	
	A	28	11	6	5		1		2							1	2			
	D	1	1																	
	E	1														1				
916	B	1															1	1	0.10	
	917	53	5	17	1	12	11	1	2							4	53			
918	Ba	35	7	8	4	5		1	1	1							8	36	3.75	
	Bb	1		1																
919	A	1						1										1	0.10	
新種3	1					1												1	0.10	
新種4	5		5															5	0.52	
不明	3	1	1								1							3	0.31	
合計	959	115	293	82	124	94	34	15	70	8	6	8	2	0	1	23	84	0	959	100.00

約2%にとどまる。これまでに、軒平瓦662B a型式の平瓦部凸面に伴う例が知られているが、当地区の出土資料はいずれも細片のため確認できない。

909型式：「大瓦」銘のaと、それに追刻をして「木瓦」銘とするbの2種類が確認されているが、当地区ではこのうちのbの「瓦」の字体に極めて類似する「瓦」銘の完形平瓦が87次瓦敷遺構S X2573から1点出土している。この種の瓦は既に『大宰府政庁跡』でも紹介されているが、未分類のままである。今回改めて完形品が出土し、異範ではあるがその字体から909型式の一種の可能性が非常に高いと判断されることから、新たに「909B型式」を設定し、従来の909型式を「909A型式」としたい。その結果、当地区ではA aが1点、Bが1点出土したことになる。

909型式
の新種

910型式：「小□瓦」銘の文字瓦で、これまで1種類のみが設定されていたが、当地区では元の型式に比べて文字が縦長で「瓦」の字が少し横にずれる「小□瓦」銘が出土している。そのため、従来の910型式を910A型式、当地区出土の新種を910B型式としたい。新たに設定したBは16点出土しており、Aが25点であることを考えると、今後も一定の割合で確認される可能性がある。なお、Bは大半が溝S D320からの出土である。

911型式：未解読の「□□瓦」銘を境に、上が変則的な斜格子、下が互い違いになる平行文となる特徴的な文字瓦で、これまで筑紫野市剣塚瓦窯跡で出土している。当地区では18点出土しているが、全体の2%弱である。

914型式：中央に「未」銘を置きその上下を異なる方向の斜線とする文字瓦で、76次茶灰色砂質土から僅か1点の出土である。

915型式：斜格子に「大」銘を入れる類の文字瓦で、A～Fの6種類が確認されているが、当地区ではA・D・Eの3種に加えて、新種を1種確認した。Aは斜格子に「大」銘、Dは一角目が長い「大」銘を横位に入れる。Eは2画目が上に突き抜けない「大」銘を隣り合う格子の中に並べて入れるもので、今回新たに平瓦に同種の「大」銘を一つだけ入れるものを2点確認した。字体そのものは915Eに近いが、格子の彫りをみると異範であるため、当地区出土の新例はG型式とする。当型式は細分型式の認定が困難な資料も含めると58点が出土しており、全体の中では6%に過ぎないが、901・902型式に次いで3番目に多い。

915G型式
の設定

916型式：大きな斜格子の中に「太」銘をいれる文字瓦で、十字文を数個伴うAと多数の十字文に囲まれるBの2種に細分される。当地区では、このうちのBが1点だけ187次の黄灰色土層から出土している。

917型式：細かい格子に左字の「八年」銘を持つ文字瓦で、1種のみ設定されている。当地区では53点出土しており、全体の中では約5.5%であるが、4番目に多い型式である。

918型式：「四王」銘の文字瓦で、大きくはっきりと「四王」と銘するAと、四の字がかなり省略化されているBの2種類が設定されている。当地区ではBの新種とみられる資料が出土している。一見するとBの「四王」銘に近いが、2字の間に左字の「上」に似た字があるため「四□王」銘となる。「王」の周辺はBの格子と同じなので、彫り直しの可能性が高いことから、従来のBをB a、新例をB bとして細分する。当地区ではB aが35点、B bが1点、合計36点が出土している。

918型式
の新種

919型式：斜格子目の中に方形の枠を置き、枠を斜め線で区切って判読できない記号（文字？）

を置くもので、枠が正方形のAと横長方形のBの2種に細分される。当地区では85次灰褐色土層から僅かにAが1点出土しただけである。

未読型式・新種3：『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ一日吉地区一』で報告された新種3にあたるもので、『大宰府政庁跡』でも紹介されており、3～4文字が刻まれているが未読のままである。当地区では83次土坑SK2361から1点出土しているが、今回の資料でも判読ができず、型式名の設定には至らなかったため、「新種3」の表現を踏襲した次第である。

未読の新種 未読型式・新種4：比較的大きな斜格子に筆記体の文字がある。判読ができないので型式の設定は将来の課題とし、ここでは日吉地区の新種3例に次ぐ新資料としてひとまず「新種4」とする。当地区では14次補足調査の溝SD320でのみ出土しており、溝の中層で1点、下層で4点の合計5点を確認した。

4) 丸・平瓦

当地区では丸・平瓦だけでも膨大な量が出土しており、その全てを網羅的に取り上げることが不可能であるため、それぞれ遺存状況の良い資料や特徴的な資料を抽出して報告としたい。

①丸瓦 (Fig.16, PL.5)

丸瓦は破片資料が多いが基本的に玉縁式丸瓦が圧倒的に多く、明らかに行基式と認められる資料は極めて少ない。

1は、凸面ナデ調整の行基式丸瓦である。幅5cm程度の粘土紐の巻き上げにより成形される。凸面はハケ状工具によるナデ調整の痕跡が明瞭であるが、部分的に縄目の痕跡かと思われる部分が確認できる。凹面の布目は細かく、狭端側と広端側に強いナデ調整を行う。表面が黒灰色に燻された瓦質焼成で、断面は灰白色を呈する。全長36.3cm、厚さ2.7cmである。

2～7は玉縁式丸瓦である。

2は、凸面に縄目叩きの痕跡を残す資料である。凹面は布目痕とともに糸切り痕が残り、粘土板巻き上げである。広端側の凹面端部のみヘラケズリを行っている。玉縁部では、接合後に凸面側の接合部をヘラで削っているが、断面観察から粘土の接合位置より深く削っていることが判る。全長38.6cm、玉縁長6.0cm、厚さ1.7cmである。

3は、凸面に文字銘901C型式（左字「平井瓦」銘）を叩打した玉縁式丸瓦である。粘土板巻き上げによる成形とみられるが、その痕跡は見出し難い。凹面に残る布目は粗めである。全長33.5cm、玉縁長4.3cm、厚さ2.0cmである。

4は、凸面に花文を叩打した玉縁式丸瓦である。右側部寄りの凹面に粘土板の接合部が残り、Z型の接合による粘土板巻き上げである。花文は左右対称で、記号ともとれる。全長36.3cm、玉縁長5.1cm、厚さ2.1cmである。

5は、凸面に斜格子目を叩打した玉縁式丸瓦である。右側部凹面にZ型の粘土接合痕跡がみられ、粘土板巻き上げによる成形である。凸面の叩打痕は狭い間隔の斜格子であるが、『大宰府政庁跡』の報告書でも指摘されているとおり、玉縁寄りの位置に文字とも記号とも取れる部分がある。これが何を示すものか不明である。凹面は布目痕跡を残す。全長34.5cm、玉縁長4.5cm、厚さ2.3cmである。

6は、不整美な斜格子目を叩打した玉縁式丸瓦である。凹面に横方向の割れが多数生じてい



Fig.16 丸瓦実測図 (1/6)

るため、粘土紐巻き上げの可能性も考えられるが、積極的根拠になり得ない。粘土円筒からの分割には玉縁側から広端側に向かってヘラで切り込みを入れているが、位置を失敗したため最初の切り込みをナデ消して再度切り込みを入れている。全長34.2cm、玉縁長4.2cm、厚さ2.4cmである。

7は、凸面に渦巻き文様を叩打した玉縁式丸瓦の破片である。破片資料しかないが、『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ一日吉地区一』に完形品が掲載されている。この文様は、従来指摘されているように、福岡県遠賀郡芦屋町浜口廃寺出土瓦にあることで知られている。全く同じ文様は、次項で取り上げる平瓦 (Fig.18-8) にもみられ、丸・平双方に叩打される文様である。完形品資料からみると粘土板巻き上げによる成形であるが、当資料からは積極的な痕跡は窺えない。玉縁長4.2cm、厚さ2.2cmである。

②平瓦 (Fig.17・18, PL.6)

1～3は凸面に縄目を叩打した平瓦である。1は全長35.5cm、広端幅28.0cm、狭端幅25.5cmを測り、凸面にはタテ方向に縄目叩きをする。凹面には粘土板の糸切痕と布面痕が明瞭に残る。側面はヘラケズリが1面である。両側面が垂直になる点、縄目叩きが広狭両端まで一連である点、粘土板の合わせ目が確認できない点などから、すでに指摘されているように凸型成形台を用いた一枚作りと推定される (栗原2000)。焼成は良好で、黒く燻されるため、表面は黒色、断面は灰白色を呈する。2は全長36.2cm、広端幅28.6cm、狭端幅24.5cmを測る。凸面にタテ方向に縄目を叩打するが、1の縄目に比べて少し細かい印象がある。両側面はヘラケズリであるが、その面は概ね円弧の中心に向かう。しかし、叩きの状況、粘土板接合部がないことなどから、やはり一枚作りの可能性が高いだろう。焼成は1と同じである。3は1・2よりもさらに太い縄目を叩打する。全長34.6cm、推定広端幅24.8cm、狭端幅23.2cmを測る。凹面には粘土板糸切痕と布目痕がみられ、側面は垂直に削り、凹面側に面取りを行う。1・2と同じ一枚作りとみられるが、焼成が甘く、色調は灰白色から明灰色を呈する。

4～9は凸面に格子目を叩打した平瓦である。4は全長34.5cm、広端幅25.7cm、狭端幅26.3cmを測る。凸面には比較的細かい目の格子が叩打される。凹面には粘土板糸切痕と粗い布目痕が残る。側面には分割裁線と分割破面がみられる。粘土板桶巻き作りの4分割で製作されたとみられるが、この資料に粘土板の継ぎ目はない。ただし、広狭端幅が逆転しているので、円筒桶が逆台錐形か径の一定した円柱をなしていたとみられる。焼成は須恵質で、明灰色を呈する。5は凸面に文字銘917型式を叩打した平瓦で、全長32.5cm、推定広端幅28.0cm、狭端幅26.8cmを測る。凸面は叩きの後にタテ方向の粗いナデで仕上げる。凹面は粘土板の糸切り痕と粗い布目残り、右寄りの位置に粘土板の継ぎ目 (S型) が明瞭に残る。側面に分割裁線と破面が残るため、粘土板桶巻作りである。焼成は須恵質で、明灰色から黒灰色を呈する。

6は凸面に大きな格子目の中に鉤状文を入れた叩き目を残す平瓦で、全長33.5cm、広端幅25.8cm、推定狭端幅27.0cmを測る。凹面は細かい布目残り、粘土板の継ぎ目 (Z型) もみられる。側面は分割裁線と破面が右側にのみ残り、左側面はヘラケズリのみである。粘土円筒をヘラ切りで半裁し、その後さらに分割裁線で分割したものか。広狭端幅の逆転から4と同様の桶形態とみられる。このような鉤状文を有する格子叩きの瓦は『大宰府政庁跡』にも掲載されているが、その資料には格子の中に「水」と読める文字銘を入れている。6の資料をみる

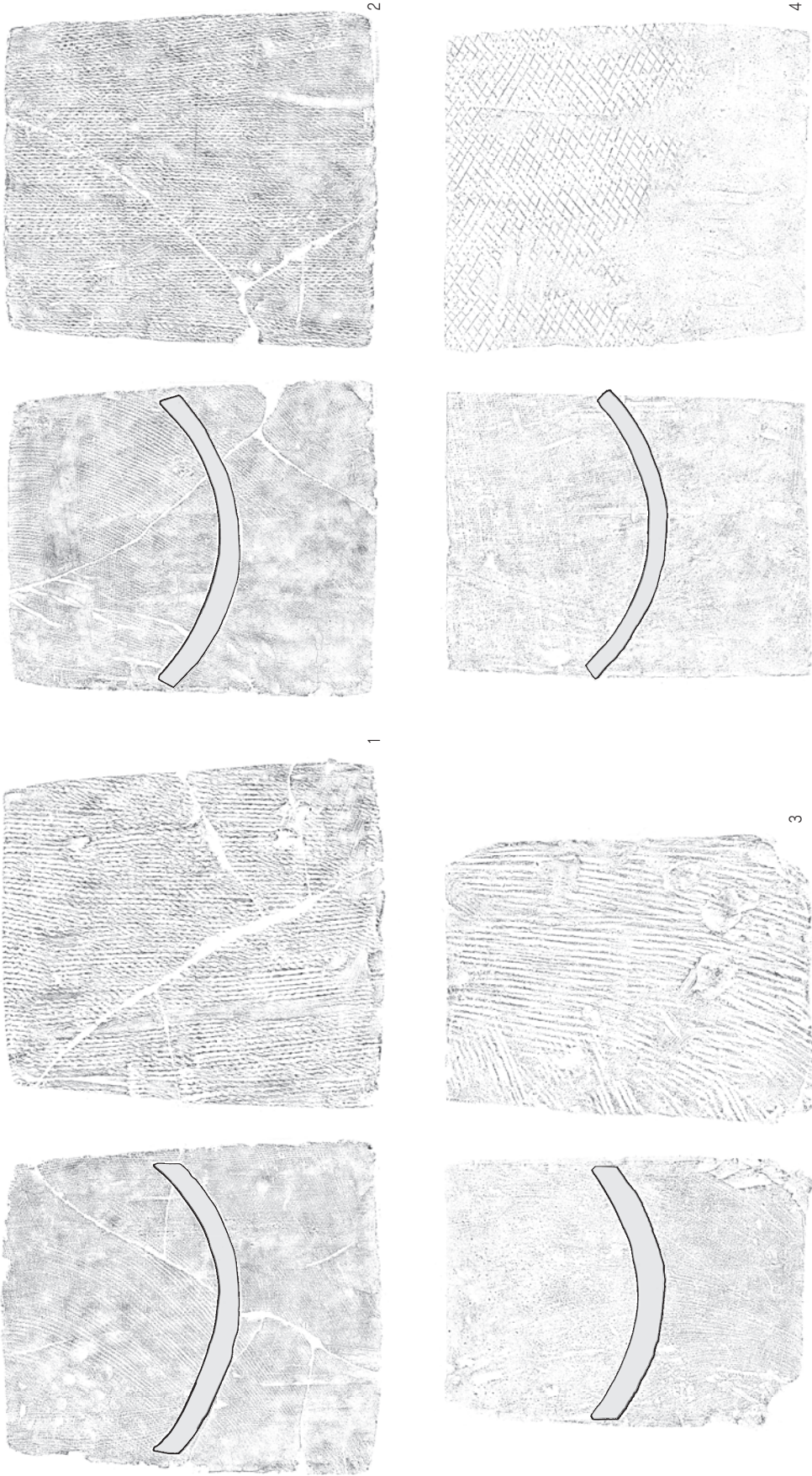


Fig.17 平瓦美測圖 (1) (1/6)

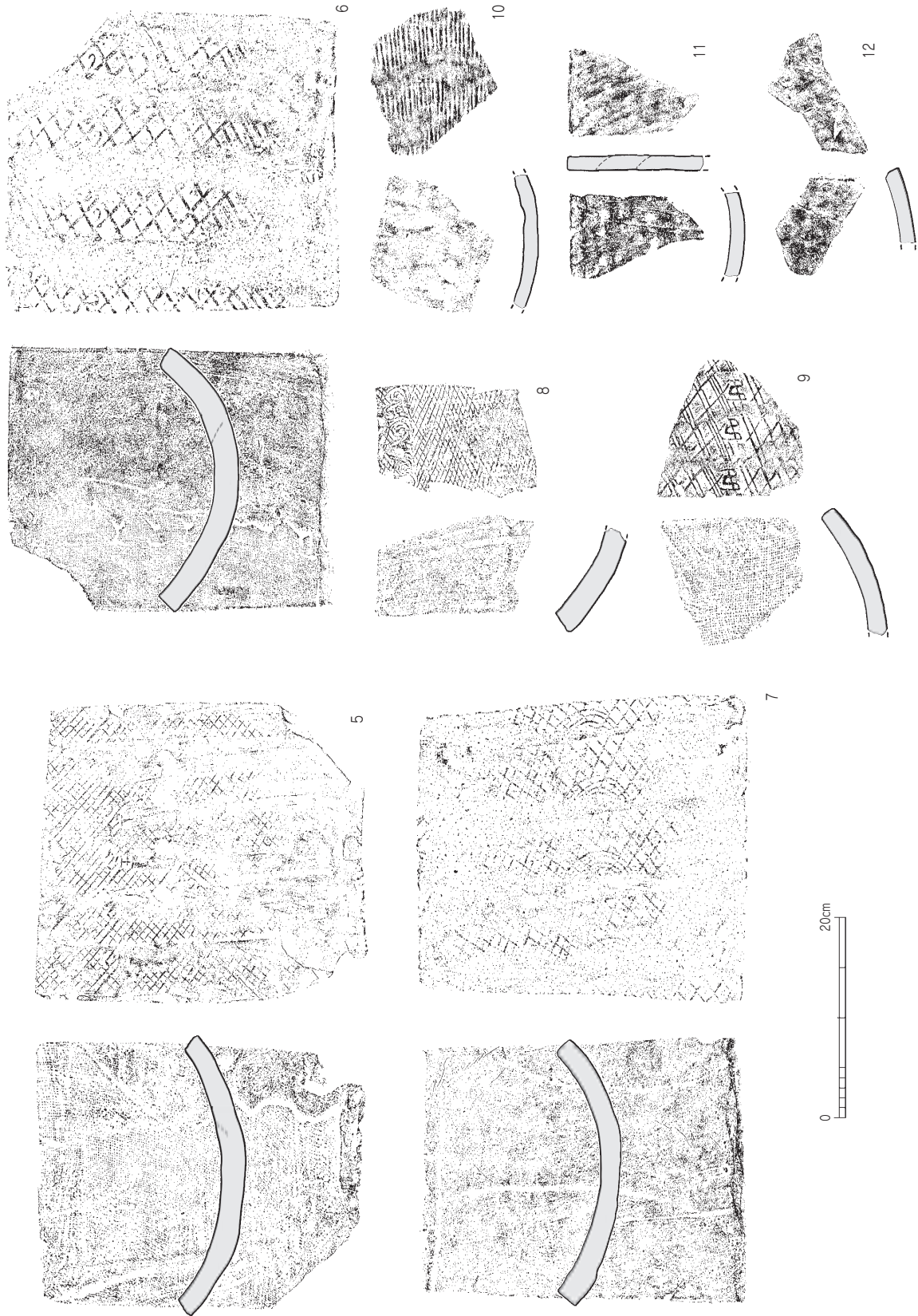


Fig. 18 平瓦実測図 (2) (1/6)

限りでは確認することができず、「水」を有するものはあるいは追刻の可能性も考えられる。なお、前掲の報告書でも指摘されているように、福岡市西区にある斜ヶ浦瓦窯跡の製品にも鉤状文を有する製品がみられ、生産と供給の問題を考える際には注意を要する。

7は凸面の格子の一部に半円の重弧文がみられる平瓦で、全長33.4cm、広端幅28.1cm、狭端幅25.7cmを測る。凹面は細かい布目が残る。側面は6と同様に片側にのみ分割裁線・破面がみられる。粘土板桶巻作りであるが、粘土板の継ぎ目はみられない。焼成はやや甘く、灰色から暗灰色を呈する。8は細かな斜格子目の狭端側に渦巻文を並べる叩き目の平瓦である。その文様は前述の丸瓦 (Fig.16-7) にもみられる。凹面は布目が残る。焼成は瓦質で、灰色から黒灰色を呈する。9は乱雑な斜格子目に弓字形の記号を重ねる叩き目の平瓦である。これに類した文様では、『大宰府政庁跡』に掲載の軒平瓦691A b型式 (Fig.258-1) の凸面にあるU字を並べるものが挙げられるが、9の場合は明らかにUではなく弓字形につながる一連の文様である。不丁地区でも僅か2点しか出土しておらず、類例の増加を待ちたい。焼成は堅緻な須恵質である。

10～12は98次調査時のS X2480から出土した資料である。10は凸面に横位の平行叩きを行った平瓦で、凹面は強いナデで仕上げる。凹面には横方向の粘土の継ぎ目があり、断面観察からも粘土紐作りとみられる。焼成は土師質で、色調は明橙色を呈する。11は凸面をナデ調整した平瓦であるが、10と同様に凹凸が顕著である。凹凸面ともナデで仕上げるが、凹面には僅かに布目が残る。また凹面に横方向の粘土継ぎ目があることから、10と同様に粘土紐作りとみられる。焼成は土師質で、色調は淡灰褐色を呈する。12は凹凸両面ともナデ調整であるが、これら3点の中では最も丁寧である。凹面には布目が少し残る。胎土は精良で、焼成は土師質で比較的硬質である。色調は淡橙色を呈する。なお、これまで10～12は7世紀後半に遡る瓦として紹介されてきたが、S X2480からはこの他にS D2340で多量に出土している縄目瓦や玉縁式丸瓦片のほか外縁に鋸歯文帯のある軒丸瓦片が1点出土している。それらは10点強と総遺物量の中では極めて少量なので、その評価は慎重にすべきであるが、瓦に限って言えば従来紹介されている資料はあくまで古相の瓦を抽出したものであることを留意されたい。

S X2480
出土瓦

(2) 土器・陶磁器類

不丁地区官衙の調査においては、掘立柱建物・柵・溝・土坑・ピット等の遺構が多数検出され、パンケース630箱にも上る夥しい量の土器・陶磁器類が出土している。その大半を須恵器・土師器が占めるが、黒色土器及び緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁等の陶磁器類に加えて、弥生土器も若干出土している。ここでは、遺構出土品を主体に報告する。

1) 掘立柱建物

土器類は建物の柱掘方及び柱穴（柱痕跡）内から出土しているが、遺構の性格上、出土点数は少なく、図示に耐え得る230点余りを報告する。

S B 2005出土土器 (Fig.19, PL.7)

当建物掘方からは比較的多くの土器が出土している。北東隅柱掘方から1・7・8・11・18・19・22・23・25が、南東隅柱掘方から4・16・17が、東側梁行中央柱掘方からは2・6・10・12・13・24が、北東隅柱から西に2番目の柱掘方より3・5・14・20が、同じく4番目の柱掘方から9が、南東隅柱から西に2番目の柱掘方より15が出土しており、21は南東隅柱柱穴からの出土である。

須恵器蓋（1～5） 1～4は口縁端部が鳥嘴状を呈するもので、1の立ち上がりは高く、2～4は低いもの。3・4は口縁部内面に沈線状の段を設け、口唇部としている。5は口縁端部を欠くが、1同様の形態を呈しよう。1・5のみ天井部外面は回転ヘラケズリによる。なお、1の内面はよく擦れているが、墨痕はみられない。また、2の天井部内面には墨痕がみられるものの器面は全く擦れておらず、転用硯として使用したものではない。1の口径は14.2cmに復元した。

須恵器杯（6～12） 6以外は口縁部を欠き、高台径が9cm程の小型のもの（9・10）と10cm程のもの（6・7・11・12）及び13cm程の大型のもの（8）とがある。高台は断面台形の低いもので、6～8・12は底部の外側寄りに貼付し、9～11は底部端に高台を貼付している。6・7・10～12は高台内端部で接地する。いずれもヘラ切り後は未調整。6は器高5.8cm、復元口径16.0cm、高台高0.4cm、復元高台径10.1cmを測る。

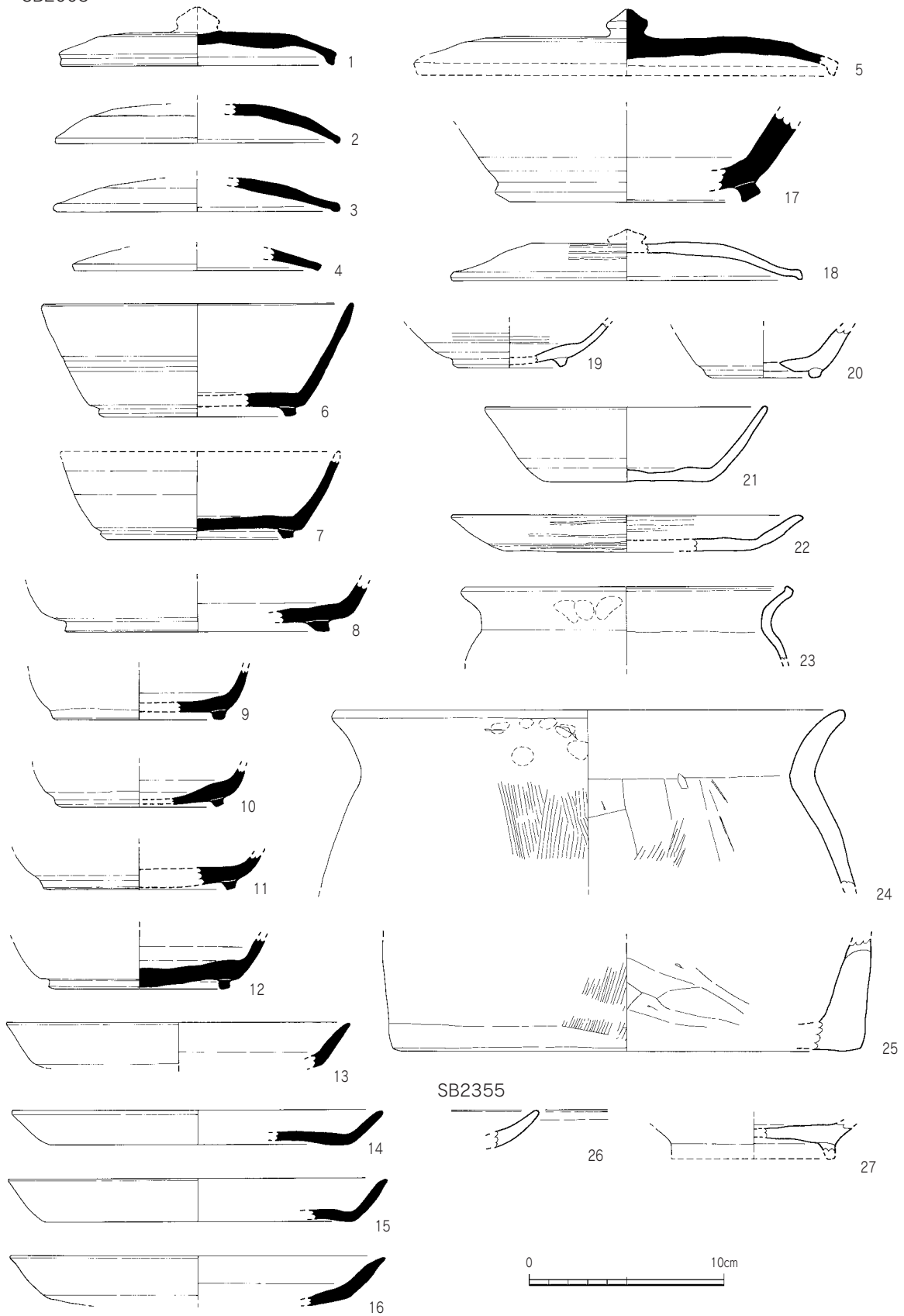
須恵器皿（13～16） いずれも口縁部から底部にかけての小破片である。底部から直線的に開くもの（14）と口縁端部が若干外方に屈曲するもの（13・15・16）とがある。口縁部はヨコナデで、14・15はヘラ切り後未調整。

須恵器壺（17） 17は底部の小破片である。高台が平らに接地したとすると盤の可能性もあるが、外面調整が回転ヘラケズリであること、内面に灰被りがみられないことから壺とした。高台は断面方形を呈し、内端部で接地する。

土師器蓋（18） 口縁部から天井部の破片で、撮みを欠く。口縁端部は屈曲し、口唇部は鳥嘴状をなす。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリで、内面は磨滅が顕著であるが、ヘラケズリによるものと思われる。

土師器杯（19～21） 19・20は有高台の杯で、ともに底部の破片。高台は断面台形を呈し、19は底部端寄りに貼付し、20は底部端に貼付している。21は無高台の杯で、平底の底部から直線的に立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外底面ヘラ切りによる。器高3.85cm、復

SB2005



SB2355

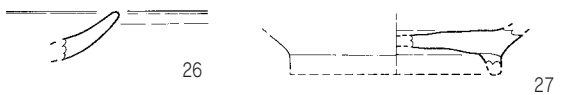


Fig.19 掘立柱建物出土土器実測図 (1) (1/3)

元口径14.4cm, 復元底径8.6cmを測る。

土師器皿 (22) 口縁部から底部にかけての破片で, 下位にヘラ沈線を1条巡らす。体部は内外面ともヘラミガキで, 底部はヘラケズリの後ミガキを施している。口径は18cmに復元した。

土師器甕 (23・24) 23の口頸部はS字形に屈曲し, 口縁端部を小さく跳ね上げ, 一見古式土師器の形態をみせる。磨滅顕著であるが, 頸部外面はユビオサエによる。胎土に1mm大の石英・赤褐色粒を含むものの割合緻密である。焼成はやや軟質で, 色調は橙灰色を呈する。24は口縁部から体部上位の破片で, 口頸部は「く」字形に外反する。口縁部ヨコナデ, 外面ハケ目(7~8条/cm), 内面ヘラケズリによる。残存部位で煤の付着はみられない。

土師器甕 (25) 当初は移動式竈の底部片と考えたが, 径が小さく裾が広がらないこと, 使用に伴う煤の付着及び被熱痕跡が全くみられないことから甕の底部とした。また, 底部内端が欠損しているが, ブリッジ部分の欠落とすると2孔式の甕となろう。

S B 2355出土土器 (Fig.19)

土師器皿 (26) 口縁部の小破片で, 皿として実測した。調整はヨコナデによる。

土師器椀 (27) 底部の小破片であるが, 高台は低いものと思われる。内外面ともナデによる。胎土に1mm大の石英を含むものの緻密で, 色調は灰白色を呈する。26が身舎の北西隅柱掘方, 27は身舎の北西隅柱から南に2番目の掘方内の出土である。

S B 2360出土土器 (Fig.20, PL.7)

須恵器環 (1) 無高台の環で, 平底の底部から直線的に立ち上がり, 口縁端部を僅かに外反させる。口縁部ヨコナデ, 底部ナデにより, 口径は13.4cmに復元した。

須恵器皿 (2) 口縁部が緩やかに外反する皿で, 口唇部は丸く納める。

須恵器甕 (3) 体部破片であるが, 長胴の甕になるものと思われる。外面格子目タタキの後平行タタキで, 一部をナデている。内面は同心円タタキによる。

土師器環 (4) 有高台の環で, 口縁端部を欠くが浅めの器形を呈するか。内外面とも横方向のヘラミガキによる。底部には高台を貼付するための沈線を施している。1・2・4は南西隅柱から東に4番目の柱掘方, 3は南東隅柱から東に3番目の柱掘方から出土した。

S B 2365出土土器 (Fig.20, PL.7)

須恵器蓋 (5) 鳥嘴状を呈する口縁部の小片で, 端部外面は櫛歯による沈線を2条施している。口縁部ヨコナデ, 外天井部回転ヘラケズリによる。

須恵器環 (6) 有高台の環で, 口縁部を欠く。高台は断面靴形を呈し, 7世紀後半代のもの。外面回転ヘラケズリ, 内面ナデによる。高台径は9.4cmに復元した。

須恵器壺 (7) 頸部のみ破片で, 頸部径が5.1cmと小さく, 小型の長頸壺になるか。内外面とも回転ナデによる。

土師器椀 (8・9) 8は口縁部, 9は底部の破片で, 両者は別個体。8はヨコナデを主体とするが, 内面の下半部には工具による擦過がみられる。9は八字形の高台を貼付する。8・9ともに赤褐色粒を含むが, 9の胎土は緻密である。

土師器皿 (10) 口縁部は丸みを帯びた底部から内湾気味に立ち上がり, 口唇部は丸く納める。磨滅顕著であるが, 外面ヘラケズリ, 内面ナデによる。復元口径19.2cmを測る。

5は西側梁行中央の柱掘方, 7は東側梁行中央の柱掘方, 6・8は南東隅柱から西に3番目

の柱掘方、9・10は北西隅柱から東に3番目の柱掘方出土。

S B 2366出土土器 (Fig.20)

須恵器蓋 (11) 鳥嘴状を呈する口縁端部の破片で、口唇部はしっかり爪先立つ。端部外面には1条のヘラ沈線を施す。口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面ナデによる。

土師器椀 (12・13) 12は口縁部の小破片で、端部を丸く納める。13は口縁部と高台端部を欠く。内面はナデによるが、外面は磨滅顕著により調整不明。胎土に赤褐色粒を多く含むも割に緻密で、明黄橙色を呈する。いずれも南西隅柱から東に3番目の柱掘方から出土した。

S B 2380A出土土器 (Fig.20, PL. 7)

須恵器蓋 (14) 口唇部が鳥嘴状を呈する蓋で、立ち上がりは僅かである。内外面ともナデによる。口径は15.2cmに復元した。

須恵器坏 (15・16) 有高台の坏で、15は口縁部を欠く。高台は三角形を呈する高めのもの。16は口縁部と高台端部を欠く。口縁部との境にはヘラ沈線を1条巡らしている。

土師器甕 (17) 口縁部の小破片で、口頸部は「く」字形に屈曲する。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリで、頸部外面には指頭圧痕がみられる。14が西側梁行中央の柱穴、15は北西隅柱から東に3番目の柱穴、16は北西隅柱柱穴、17は北東隅柱から西に2番目の柱穴から出土した。

S B 2380B出土土器 (Fig.20)

土師器椀 (18・19) 高台付近の破片で、18の高台は断面台形で、19は細身の高台を貼付する。18は赤褐色を呈し、19は灰白色を呈する。いずれも南東隅柱掘方から出土した。

S B 2383出土土器 (Fig.20)

須恵器坏 (20) 口縁部の小破片であるが、有高台の坏になろう。口縁部はヨコナデによる。

須恵器鉢 (21) 口縁部破片で、体部以下を欠く。口径は25.2cmに復元した。口縁部はヨコナデにより、口唇部を丸く納める。断面では粘土紐の接合痕を観察できる。ともに南西隅柱掘方から出土している。

S B 2390出土土器 (Fig.20)

土師器椀 (22) 高台部分の破片で、太めの断面台形の高台を貼付する。復元高台径7.8cm。

土師器皿 (23) 皿の底部破片で、口縁端部を欠く。磨滅顕著であるが、外底面に板状圧痕がみられ、底部は糸切りによるか。

灰釉陶器碗 (24) 口縁部の小破片で、口唇部は小さく突き出る。灰白色の胎に淡灰緑色の釉が掛かる。22は北東隅柱から西に2番目の柱掘方、24は東側梁行中央の柱掘方出土。23は北東隅柱掘方の出土であるが、混入したものと思われる。

S B 2410出土土器 (Fig.20)

須恵器蓋 (25) 口縁部内面に身受けのかえりを有する蓋で、かえりはしっかりしている。口縁部はヨコナデで、外面には灰が厚く被る。口径13.2cm、かえり径10.8cmに復元した。東側梁行中央の柱掘方から出土した。

S B 2415出土土器 (Fig.20, PL. 7)

須恵器蓋 (26) 口縁端部が鳥嘴状を呈する蓋の小破片。器面調整はヨコナデによる。

須恵器坏 (27) 口縁部の小破片で、口縁部ヨコナデ、外底部回転ヘラケズリによる。

須恵器盤 (28) 内湾気味に立ち上がる浅めの盤で、口縁端部に平坦面を有する。口縁部ヨコナデで、外面の体部下半部から底部にかけては回転ヘラケズリ、内面はナデ調整による。1/2程の残存状況で、器高3.2cm、復元口径29.2cm、復元高台径22.6cmを測る。

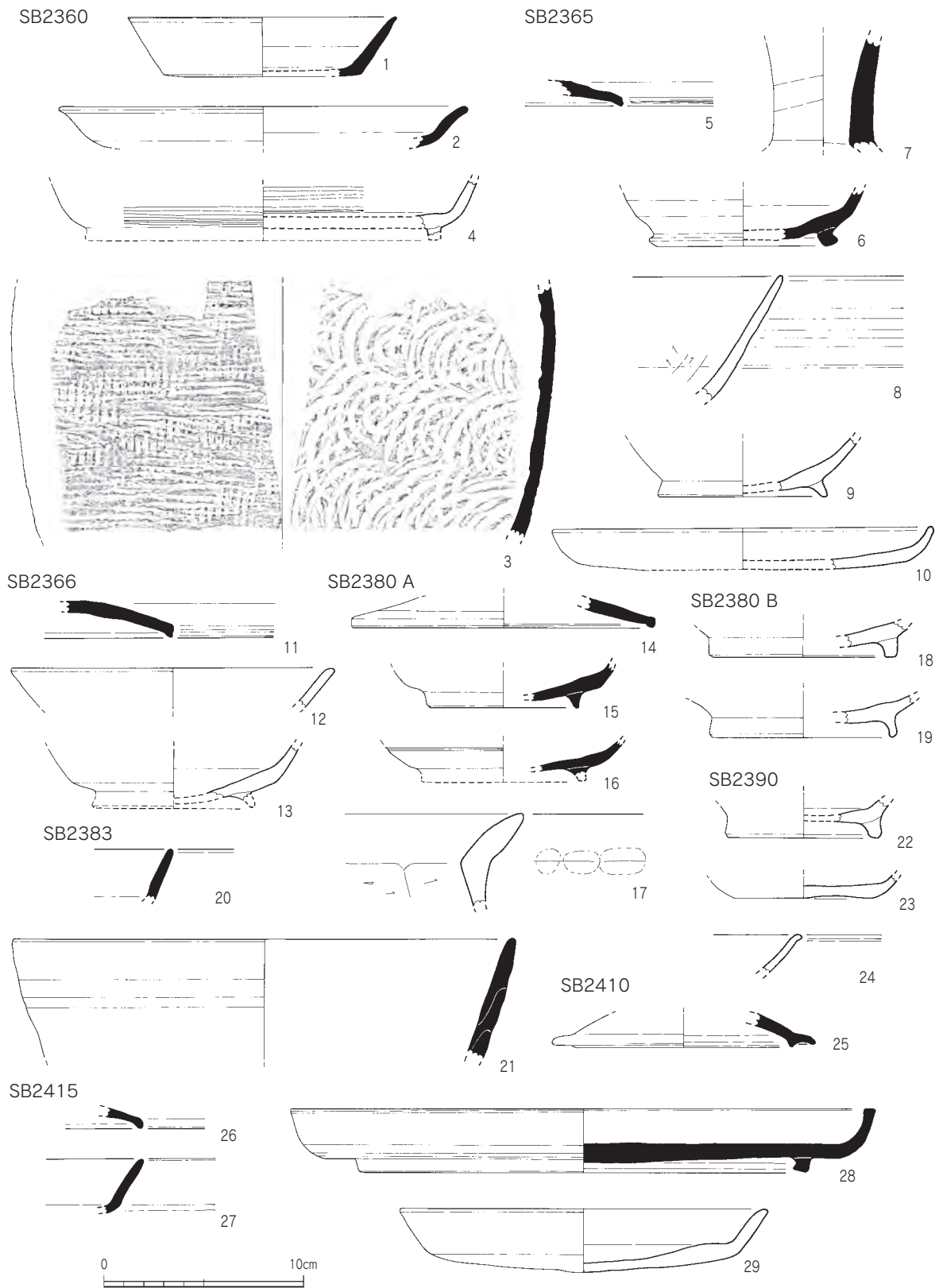


Fig.20 掘立柱建物出土土器実測図 (2) (1/3)

土師器皿(29) 口縁部は丸みを帯びた底部から直線的に立ち上がり、口唇部を丸く納める。底部外面はヘラ切り後未調整。器高3.2cmで、口径は18.4cm、底径は15.5cmに復元した。

26は身舎の南西隅柱から東に2番目の柱掘方の出土、27は同じく3番目の柱掘方の出土、29は南東隅柱から西に3番目の柱穴の出土である。また、28は概報段階ではS B 2405出土と報告していたが、S B 2415出土の誤りで、北西隅柱から東に3番目の柱掘方の底部付近から口縁部を下にした状態で出土している。

S B 2420出土土器 (Fig.21)

須恵器蓋(1) 口縁端部が鳥嘴状を呈するもので、立ち上がりは高い。口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリによる。口径は15.6cmに復元した。

須恵器坏(2・3) 有高台の坏で、ともに口縁部を欠く。高台は2が断面台形、3が方形を呈し、底部端に貼付している。高台径は2が9.0cm、3が12.0cmに復元した。また、3の高台内にはV字形のヘラ記号がみられる。1は廂の北西隅柱から南に3番目の柱掘方出土で、2・3は身舎の北西隅柱掘方から出土した。

S B 2435出土土器 (Fig.21)

須恵器蓋(4) 口縁端部が鳥嘴状を呈する蓋の小破片で、口唇部との境に段を有するため口唇部が突出した感がある。

須恵器坏(5・6) 5は口縁部破片で、6は口縁端部を欠く。6の高台は断面靴形を呈し、体部との境に沈線状の段を有する。5は復元口径14.6cm、6の復元高台径は8.5cmを測る。

土師器坏(7) 高台付近の小破片で、やや高めの高台を貼付している。

弥生土器壺(8) 上底をなす底部破片で、底径は8.4cmに復元した。外面はハケ目をナデ消している。混入品であるが、付近に同時代の遺構が存在した可能性が窺われる。

付近に弥生
遺跡が存在

4は南東隅柱から西に2番目の柱掘方、5は南西隅柱から東に2番目の柱掘方、6は南西隅柱掘方、7は東側梁行中央の柱掘方、8は南側桁行中央の柱掘方から出土した。

S B 2460A出土土器 (Fig.21, PL.7)

須恵器蓋(9・10) 9は大型で肉厚の口縁部破片で、端部は小さく爪先立つ。外面はヘラケズリ後ナデで、内面は回転ナデによる。10は口縁端部が鳥嘴状を呈する蓋で、撮みを付していたかは不明。外天井部は回転ヘラケズリによる。

須恵器坏(11・12) 底部の破片で、11の高台は断面三角形を呈し、高台中央部で接地する。12の高台は断面台形を呈し、内端部で接地するが、ともに底部端に貼付している。12の内底面には擦過がみられる。

須恵器鉢(17・18) いずれも口縁部の小破片で、17は端部に平坦面を有するが、18は口唇部を丸く納める。ともに口縁部はナデにより、18の胴下半部外面は回転ヘラケズリによる。

須恵器甕(19) 口縁部小破片で、口唇部は外方に突出する。口唇部の直下に突帯を貼付し、その下位にはヘラ沈線を施している。

土師器坏(13~15) 13は有高台の坏で、須恵器を模倣した形態を呈する。高台は断面方形の低いもので、底部の端寄りに貼付している。内外面ともナデ調整による。14は小型ながら深めの坏で、器高3.8cm、復元口径10.0cm、復元底径6.4cmを測る。器面調整は磨滅により不明。15は口縁端部を欠く。胎土に赤褐色粒を多く含み、明赤橙色を呈する。

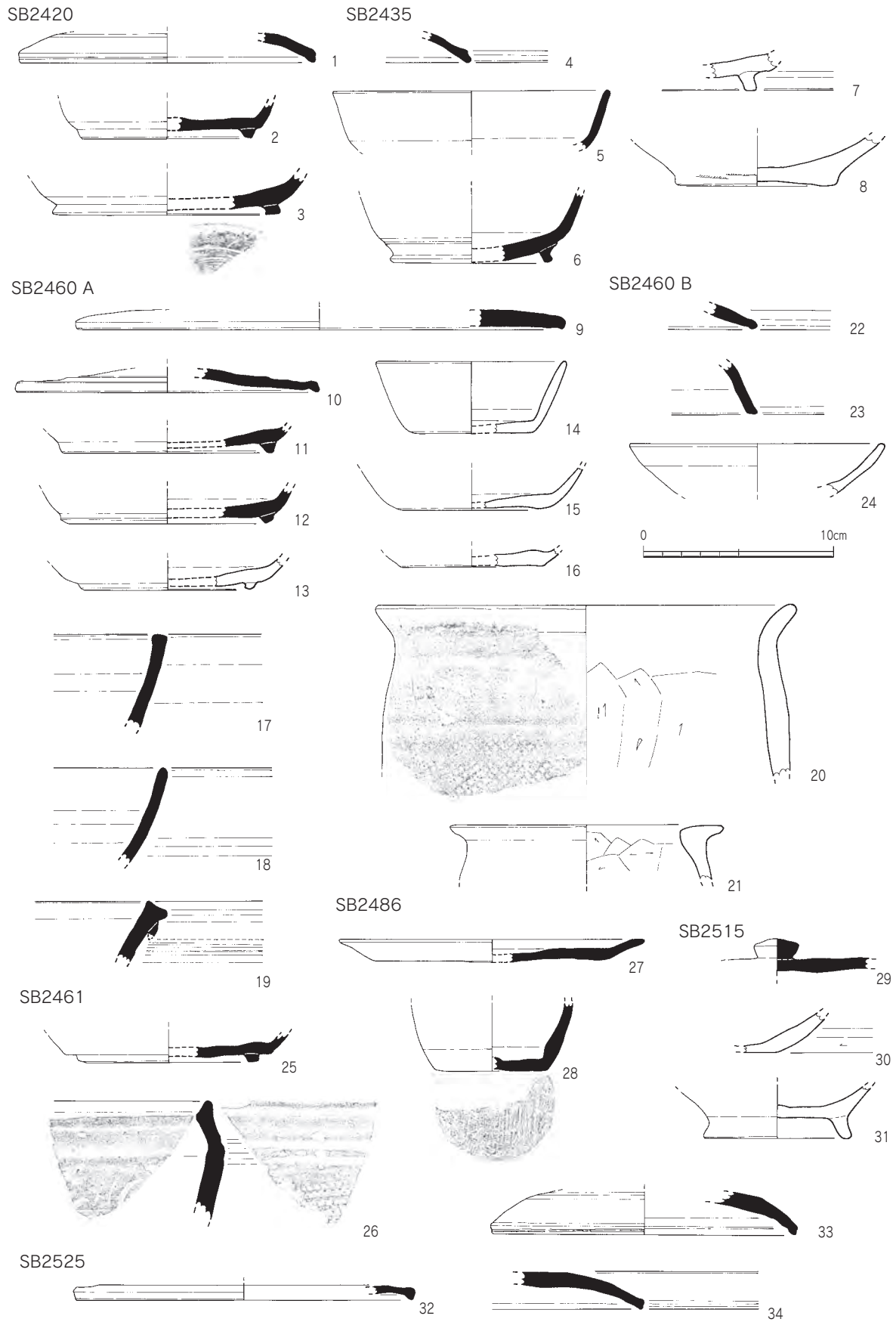


Fig.21 掘立柱建物出土土器実測図 (3) (1/3)

土師器皿 (16) 口縁端部を欠くが、厚めな底部に比して口縁部の器壁が薄いことから皿とした。底部はヘラ切り後未調整。色調は灰褐色を呈する。

土師器甕 (20・21) 20の口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く納める。器面調整は口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリであるが、外面は格子タタキによる珍しいもの。外面には煤が遺存している。口径は22.1cmに復元した。21は小型の甕で、口縁部は逆L字形を呈する。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリによる。口径は14.4cmに復元した。

9・10・13・14・17・20・21は廂の北東隅柱から西に4番目の柱掘方、11は身舎の北東隅柱から西に3番目の柱掘方、12・19は身舎の北東隅柱掘方、18は身舎の北東隅柱から西に2番目の柱掘方、15・16は南東隅柱から西に3番目の柱掘方から出土した。

S B 2460B 出土土器 (Fig.21, PL. 7)

須恵器蓋 (22・23) 22は口縁部の小破片で、口縁端部の立ち上がりは僅かである。23も口縁部の小破片であるが、口縁端部が平坦面をなし、外面には灰が厚く被っていることから壺蓋として実測した。

土師器坏 (24) 口縁部の破片で、口唇部は丸く納める。底部を欠くため高台が付くかは不明。器面の磨滅が顕著であり、調整も不明。口径は13.4cmに復元した。22・23は北東隅柱から西に2番目の柱掘方の出土で、24は東側梁行中央の柱掘方から出土した。

S B 2461 出土土器 (Fig.21)

須恵器坏 (25) 底部破片で、口縁部を欠く。底部との境の稜はシャープである。高台は断面方形を呈し、底部の端寄りに貼付している。高台径は9.6cmに復元した。

須恵器鉢 (26) 内湾気味に立ち上がる鉢の口縁部小破片で、口唇部は上方に立つ。体部との境にヘラ沈線を2条施す。口縁部ヨコナデ、外面格子タタキ、内面円弧タタキによる。85次調査暗褐色土からも同様な形態の鉢(昭和58年度概報第44図20)が出土している。25・26は北西隅柱掘方から出土した。

S B 2486 出土土器 (Fig.21, PL. 7)

須恵器皿 (27) 1/4程の破片で、器高1.2cm、復元口径16.0cm、底復元径12.4cmを測る。口縁部は緩く外反し、口唇部は丸く納める。口縁部ヨコナデ、内面不整方向のナデ、外面ヘラ切り後ナデにより、底部外面には板状圧痕がみられる。

須恵器椀 (28) 口縁部を欠くが、一応椀とした。外面はヘラケズリ後ナデ、内面は回転ナデにより、底部外面には板状圧痕が付く。底径は5.8cmに復元した。27は西側梁行中央の柱掘方、28は南西隅柱から東に2番目の柱掘方からの出土である。

S B 2515 出土土器 (Fig.21)

須恵器蓋 (29) 蓋の撮み部付近の破片で、撮みは擬宝珠形を呈する。

土師器坏 (30) 無高台の坏の底部小破片で、胴下半部は回転ヘラケズリによる。

土師器椀 (31) 椀の底部破片で、口縁部を欠く。高台は割合高めで、ハ字形を呈する。磨滅が顕著であるが、内外面に明黄橙色のスリップを施している。29・30は東側桁行中央の柱掘方出土で、31は西側桁行中央の柱掘方出土であるが、混入品とみられる。

S B 2525 出土土器 (Fig.21)

須恵器蓋 (32~34) 32は口縁端部が鳥嘴状を呈する蓋で、口径は17.6cmに復元した。

33・34は口縁部内面を強くナデているため、33は段状を呈し、34は稜をなしている。ともに口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面ナデにより、33の口縁部外面には手描きによるヘラ沈線を施している。33・34とも灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。32は南東隅柱から北に5番目の柱穴、34は同じく4番目の柱掘方、33は南西隅柱掘方から出土した。

S B 2530出土土器 (Fig.22, PL.7)

須恵器蓋(1) 口縁部の小破片で、端部は鳥嘴状を呈する。調整はヨコナデによる。焼成はやや軟質で、灰青色を呈する。

須恵器坏(2・3) 有高台の坏で、高台はともに断面台形を呈する。2の口縁部と底部は接合しないが、胎土・色調から同一個体として復元した。口縁部は直線的に開き、口唇部は割合シャープである。底部はヘラ切り後、未調整。外面は一部瓦質化し、燻し銀を呈する。3は底部の破片で、高台の内端部で接地する。

土師器甕(4・5) 小型の甕で、口径は4が12.8cm、5は14.3cmに復元した。4の口縁部は緩やかに立ち上がり、端部を丸く納める。調整は磨滅により不明。胎土に砂粒を殆ど含まず、精良なもの。5の頸部はよく締まり、口縁部は「く」字形を呈する。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリにより、内面は二次火熱により黒変している。

1～3は西側桁行の南西隅柱から北に3番目の柱掘方、4は東側桁行の南東隅柱から北に2番目の柱穴、5は同じく抜き取り穴から出土した。

S B 2535出土土器 (Fig.22)

須恵器蓋(6) 口縁部の小破片で、立ち上がりは弱い。端部はやや肥厚する。

須恵器坏(7) 胴下半部の小破片であるため、傾きは定かではない。内外面ともナデによる。

土師器坏(8) 高台付近の小破片。胎土に1～2mm大の石英を含むものの割合精良である。いずれも東桁行の南東隅柱から5番目の柱穴上層の出土である。

S B 2540出土土器 (Fig.22, PL.7)

須恵器皿(9) 底部を手持ちヘラケズリした浅めの皿で、器高2.8cm、口径18.4cm、底径14.8cmを測る。焼成は堅緻で、小豆色を呈する。内面には黒褐色を呈する漆が付着している。西側桁行の南東隅柱から北に2番目の柱掘方から出土した。

S B 2880出土土器 (Fig.22)

須恵器坏(10) 有高台の坏であるが、高台を欠く。口縁端部は丸く納める。口径は16.0cmに復元した。南東隅柱掘方から出土した。

S B 2900出土土器 (Fig.22)

須恵器坏(11) 口縁部破片で、口唇部は丸く納める。復元口径13.8cmを測る。南東隅柱掘方上層から出土した。

S B 3815出土土器 (Fig.22, PL.7)

当建物からは、比較的多くの土器が出土している。12・14・15は身舎の北東隅柱掘方、13・20・21・23・25は身舎の南東隅柱掘方、16・18・24は南西隅柱掘方、17・19・22は身舎の東側桁行の南西隅柱から北に2番目の柱掘方の出土である。

須恵器蓋(12) 口縁部内面に沈線状の段を設け、口唇部は僅かに爪先立つ。口径は16.4cmに復元した。

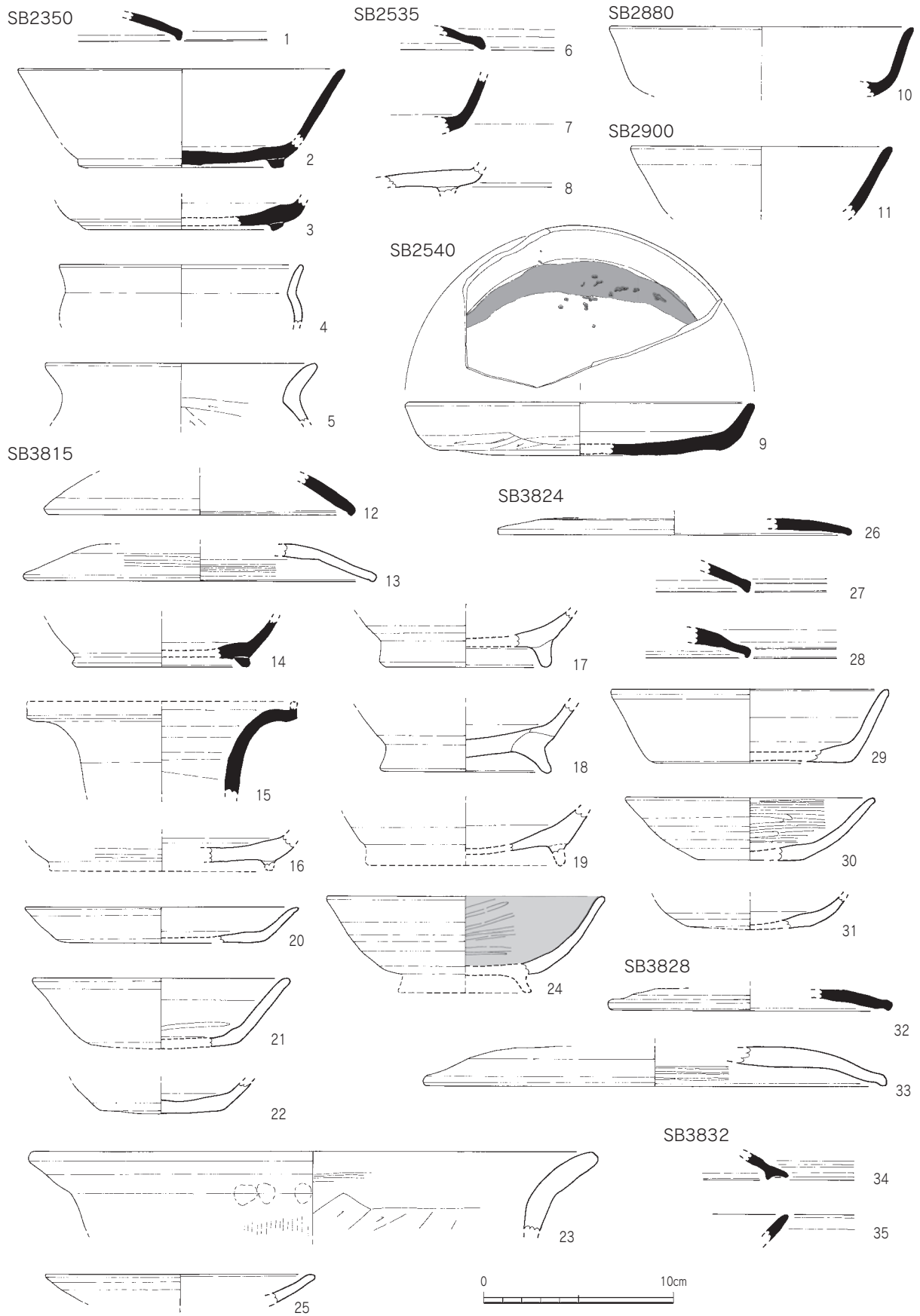


Fig.22 掘立柱建物出土土器実測図(4)(1/3)

灰釉陶器の
素地か

須恵器坏 (14) 有高台の坏で、低めの高台を貼付する。高台内には糸切りによるかと思われる同心円状の沈線がみられる。須恵器としたが、灰釉陶器の素地の可能性もある。

須恵器壺 (15) 広口壺の口頸部破片で、口縁部は弓なりに外反し、口縁端部は直立する。内外面ともナデによるが、内面には灰が厚く被る。

土師器蓋 (13) 裾広がり口縁部破片で、口唇部は丸く納める。内面に1mm幅のヘラ沈線を施し、形骸化した立ち上がりとしている。口縁部は内外面ともヘラミガキで、天井部はヘラケズリの後ミガキを施している。口径は18.6cmに復元した。

土師器坏 (16・21・22) 16は有高台で、21・22は無高台の坏。16は内外面ともヘラミガキによるが、高台内はヘラケズリによる。また、高台内面のみ黒く燻している。21は体部が直線的に開くもので、口唇部は丸く納める。22は口縁部を欠くが、内湾気味の体部を持つ。

土師器椀 (17~19) 高台付近の破片で、17の高台は肉厚である。18は高台の成形状況が判る資料で、粘土板を充填し、底部としている。19の内面には釘状工具による細い線刻を施す。高台径は17・18とも9.0cmに復元した、

土師器皿 (20) 口縁部は直線的に開き、口唇部はシャープである。器面の磨滅が著しい。器高1.85cm、口径14.4cm、底径11.2cmを測る。

土師器甕 (23) 頸部の締まりがほとんどない甕で、口縁部は大きく開く。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。口径は30.0cmに復元した。

黒色土器椀 (24) 内面を燻したA類の椀で、高台を欠く。体部は湾曲し、口縁端部を外反させる。口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面ヘラミガキによる。

灰釉陶器皿 (25) 口縁部小破片で、傾きからして皿になるか。外面はヘラケズリによる。灰色の胎に淡灰色の釉が掛かる。胎土に砂粒をほとんど含まず緻密である。

S B 3820出土土器 (Fig.23, PL.7)

当建物は桁行3間×梁行2間の小規模な建物であるが、比較的多くの土器が出土している。1・7・9は南側桁行南西隅柱から東に2番目の柱掘方、2は南西隅柱掘方、3は北東隅柱掘方、12は同じく北東隅柱柱穴、4・6・13・18・20は北側桁行北西隅柱から東に2番目の柱掘方、5・10・16・19は南東隅柱掘方、8・17は北西隅柱掘方、11・14・15は東側梁行中央の柱掘方の出土。

須恵器蓋 (1~3) 1は口縁部小破片で、内側にヘラ沈線による段を設け、口縁部との境にしている。2は鳥嘴状を呈する口縁部破片で、口径は23.0cmに復元した。3も口縁部破片であるが、端部は丸く、裾広がりであることから壺蓋とした。天井部との境は工具ナデによる。

須恵器坏 (4・5) 有高台の坏で、4は口縁端部を欠き、5は口縁部を欠く。高台はともに底部端に貼付し、5は内端部で接地する。4の体部下半は回転ヘラケズリによるため底部との境の稜はシャープである。また、高台内には墨痕がみられるものの、全く擦れておらず、硯として使用したものではない。

須恵器壺 (6) 口縁部破片で、口唇部は丸く納める。平瓶の口縁部と比べてやや長めであることから長頸壺とした。調整は回転ナデで、口径は9.0cmに復元した。

土師器蓋 (7) 蓋の口縁部破片で、内側に僅かな段を有する。内外面とも細かいヘラミガキによる。口径は11.0cmに復元した。

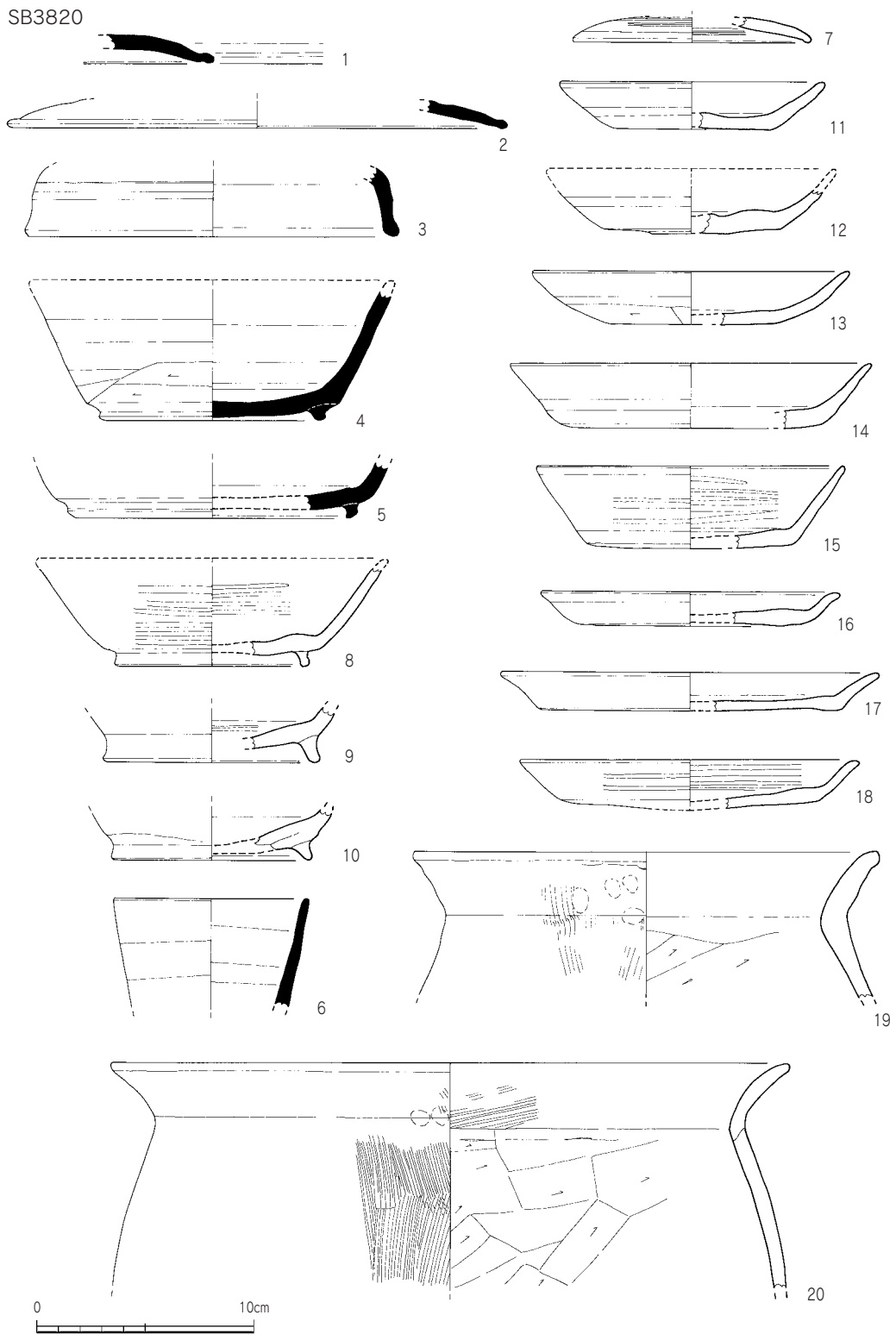


Fig.23 掘立柱建物出土土器実測図 (5) (1/3)

土師器坏(8~15) 8~10は有高台の坏で,11~15が無高台の坏。8は口縁端部を欠くが,底部から直線的に開く。高台は細めで,底部端寄りに貼付する。内外面ともヘラミガキによる。9・10は高台付近の破片で,高台は底部端に貼付する。9は内面にヘラミガキを施している。11・14・15は平底の底部から口縁部が直線的に開くもので,12・13は口縁部が内湾するもの。調整は15が内外面ともヘラミガキを施し,11・13の胴下半部外面はヘラケズリにより,それ以外はナデによる。底部は11・12・14がヘラ切り後未調整,13はナデで,15は工具痕がみられる。

土師器皿(16~18) いずれも口縁部が外反し,口唇部は丸く納める。18は内外面ともヘラミガキにより,底部は17がヘラケズリ,16がヘラ切り,18はヘラ切り後ナデによる。

土師器甕(19・20) 19の口頸部は断面「く」字形,20は緩やかに外反するもの。調整は口縁部ヨコナデ,外面ハケ目,内面ヘラケズリによる。20の外面には煤が遺存している。口径は19が21.4cm,20が31.2cmに復元した。

S B 3824出土土器 (Fig.22, PL.7)

須恵器蓋(26~28) いずれも鳥嘴状を呈する口縁部の小片で,26の口縁部内面の段は僅かである。26の口径は18.6cmに復元した。

土師器坏(29~31) 無高台の坏で,29の口縁部は直線的に立ち上がり,口唇部は外方に小さく突き出る。30・31は内湾気味に開くもの。29・31はナデによるが,30は内面ヘラミガキ,外面ヘラケズリを施す。26・29は北西隅柱掘方,27・30は北東隅柱掘方,28・31は中央の柱掘方から出土した。

S B 3828出土土器 (Fig.22)

須恵器蓋(32) 鳥嘴状を呈する口縁部の破片で,天井は低い。復元口径15.0cm。

土師器蓋(33) 復元口径24.2cmを測る大型の蓋。器面の磨滅が著しいが,内外面ともミガキを施している。32・33とも南側梁行の南西隅柱から東に2番目の柱掘方の出土である。

S B 3832出土土器 (Fig.22)

須恵器蓋(34) 口縁部内側に身受けのかえりを有する小破片。かえり・口縁端部ともシャープな作りである。

須恵器坏(35) 口縁部の小破片で,外面を強くナデている。34・35ともに北側柱列中央の掘方出土。

S B 4030出土土器 (Fig.24, PL.8)

須恵器蓋(1・2) 1は口縁端部が鳥嘴状を呈する蓋で,立ち上がりは高い。天井部には内窪みの扁平な撮みを貼付する。2は口縁部外面にヘラ沈線による段を施し,口唇部は小さく突き出る。ともに口縁部ヨコナデ,天井部外面回転ヘラケズリ,内面ナデによる。口径は1が14.8cm,2は20.6cmに復元した。

須恵器坏(3・4) 高台付近の破片で,3の高台は靴形を呈する。ともにナデ調整。

土師器盤(5) 底部を欠くが,体部下半が外反気味であり,また高台の剥離痕跡がみられることから盤とした。口縁部ヨコナデ,体部下半外面はヘラケズリによる。1・2は東側梁行中央の柱掘方,3は南側桁行隅柱から西に2番目の柱掘方,4は北東隅柱掘方,5は南側桁行隅柱から西に4番目の柱穴から出土した。

S B 4035A B 出土土器 (Fig.24)

6～8はS B 4035A・Bいずれの柱掘方出土か特定できないが、9～14はS B 4035Bの柱掘方から出土している。6・8・13は身舎の南東隅柱から西に2番目の柱掘方、7は北西隅柱掘方、9・11は廂の南東隅柱から西に2番目の掘方上層、10は身舎の南西隅柱掘方、12は身舎の南東隅柱から西に3番目の柱掘方、14は身舎の南西隅柱から東に2番目の柱掘方から出土した。

須恵器蓋(6～8) 口縁端部が鳥嘴状を呈する蓋の破片で、6の口縁部の稜はシャープである。7・8は立ち上がりが高く、7の内面にはヘラ沈線を施している。

S B 4035B 出土土器 (Fig.24)

須恵器蓋(9) 低平な蓋であるが、立ち上がりは高い。口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面ナデによる。口径は15.0cmに復元した。

須恵器坏(11) 胴下半部の破片で、やや太めの高台を底部端に貼付する。外面は回転ヘラケズリによる。高台径は8.2cmに復元した。

須恵器皿(10) 口縁部の小破片で、端部は僅かに外反する。

須恵器壺(14) 頸部破片で、頸の締めりはよい。内面には粘土の接合痕がみられる。

土師器坏(12・13) 12は高台付近の破片、13は口縁部。13の口唇部は丸く納める。

S B 4046 出土土器 (Fig.24, PL.8)

土師器坏(15) 浅めの器形で、口唇部はシャープである。口縁部ナデで、底部はヘラ切り後未調整。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で、灰白色を呈する。器高2.4cm、口径11.1cm、底径7.5cmを測る。

黒色土器椀(16) 口縁部と内底部及び高台端部を欠く。内面を燻したA類。磨滅が顕著であり、調整は不明瞭ながら内面はミガキによるか。15は北西隅柱掘方、16は南東隅柱掘方から出土した。

S B 4047 出土土器 (Fig.24)

土師器皿(17) 小型の皿で、口縁端部及び内底部を欠く。ナデ調整により、底部には糸切り痕はみられない。北東隅柱掘方から出土している。

S B 4048 出土土器 (Fig.24)

土師器椀(18・19) とともに高台付近の破片で、高台は断面三角形の低いもの。

土師器皿(20) 小型の皿で、口縁端部を欠く。ナデ調整により、底部には糸切り痕はみられない。18は北東隅柱掘方、19・20は南西隅柱掘方の出土。

S B 4560 出土土器 (Fig.25, PL.8)

当建物柱掘方からは多量の土器が出土している。15・26は北西隅柱掘方、3・18は西側梁行中央の柱掘方、4・12・22は北側桁行の北西隅柱から東に3番目の柱掘方、17・19・20は同じく4番目の柱掘方、7・10・11・25・27は同じく5番目の柱掘方、2・5・14は南側桁行の南西隅柱から東に2番目の柱掘方、1・21・24は同じく3番目の柱掘方で、16はその下部、6・13・23は同じく4番目の柱掘方、8・9は同じく5番目の柱掘方から出土した。

須恵器蓋(1～7) 口縁端部を小さく折り曲げたもの(1)、口縁端部が鳥嘴状を呈するもの(2～4・6)、口縁端部にヘラ沈線を施すもの(5)、口縁部内側の段が僅かなもの(7)

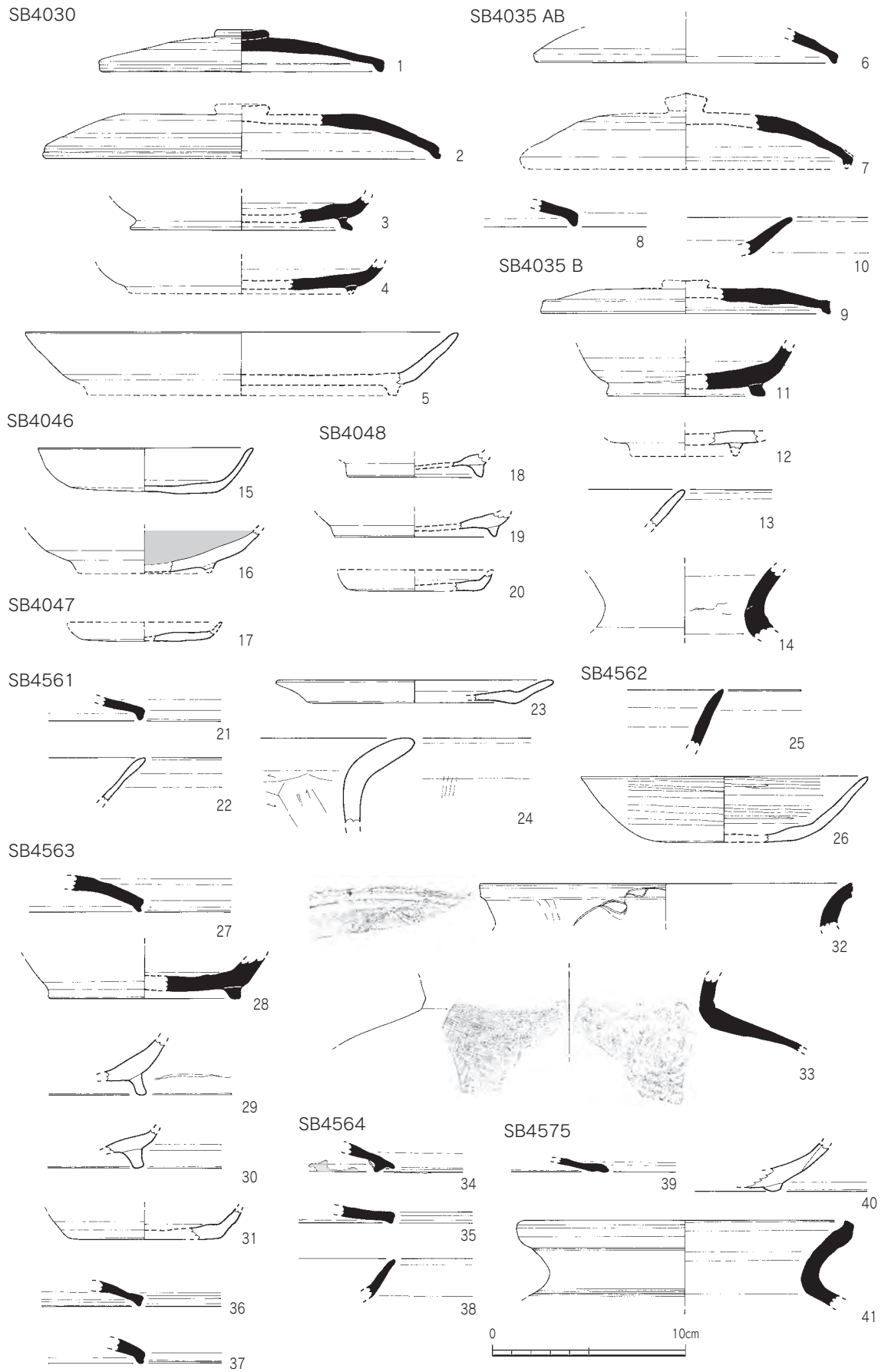


Fig.24 掘立柱建物出土土器実測図 (6) (1/3)

SB4560

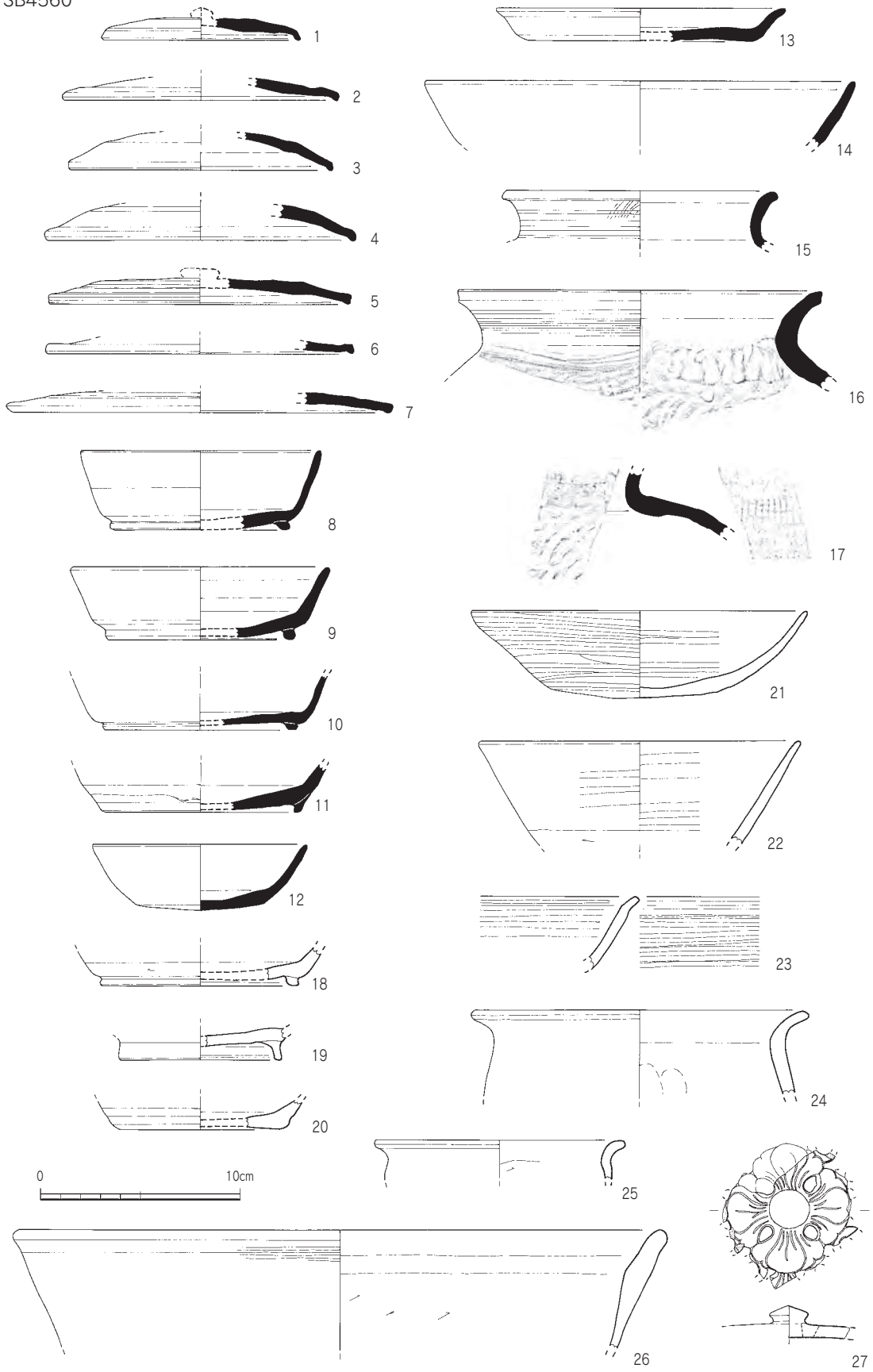


Fig.25 掘立柱建物出土土器実測図 (7) (1/3)

がある。1・4・7の天井部外面は回転ヘラケズリによる。口径は1が10.0cm, 5が15.2cmに復元した。

須恵器環(8~12) 8~11は有高台の坏で, 12は無高台。8は深めの器形を呈する。高台は8~10が底部の端寄りに貼付し, 11は底部端に貼付する。12の口縁部は内湾気味に立ち上がる。底部はヘラ切り後未調整。8は器高9.0cm, 口径12.0cm, 底径9.0cmに復元した。12は器高3.3cm, 口径10.8cm, 底径6.4cmを測る。

須恵器皿(13) 浅めの器形で, 口縁部は外反する。底部はヘラ切り後未調整。

須恵器盤(14) 口縁部の小破片であるが, 器高が低く大型であることから盤とした。

須恵器甕(15~17) 15・16は口頸部, 17は頸部の破片。15・16の口縁部は弓なりに外反する。15・16とも頸部外面にはカキ目を施す。16・17は体部外面格子タタキ, 内面円弧タタキにより, 16の頸部内面にはヘラオサエ痕がみられる。

土師器環(18~22) 18・19は有高台の坏の底部破片で, 20・21は無高台の坏で, 22は口縁部破片であるが, 有高台となろう。19の高台は細身で高いもの。22は内外面ともヘラミガキを施し, 胴下半部はヘラケズリによる。

土師器鉢(23・26) 23は口縁部破片で, 内湾する体部から口縁部が外方に屈曲する。内外面とも丁寧なヘラミガキを施している。26も口縁部破片であるが, 直線的に開き, 口縁部が肥厚するのに比して体部が薄いことから鉢とした。外面ハケ目, 内面ヘラケズリによる。また, 外面には煤の付着がみられる。口径は31.8cmに復元した。

土師器甕(24・25) 24は復元口径17.0cmの小型甕で, 口縁部は鉤形に屈曲する。25は復元口径が12.6cmの極小甕で, 口縁部は大きく外反する。

緑釉香炉蓋 緑釉蓋(27) 香炉蓋の撮み部付近の破片で, 擬宝珠形撮みを貼付する。毛彫りで花文を描き, 中央4ヶ所に涙滴形の透孔を設ける。胎土は砂粒をほとんど含まず緻密で, 内外面とも淡緑色の釉を施す。筑後国府第31次調査S D 1361からも同様な蓋が出土している(註)。

S B 4561出土土器 (Fig.24)

須恵器蓋(21) 口縁端部が鳥嘴状を呈する小破片で, 立ち上がりは高い。外面には厚く灰が被る。

土師器椀(22) 口縁部の小破片で, 口唇部は丸く納める。

土師器皿(23) 浅めの皿で, 口縁部は外反する。口縁部はヨコナデによる。器高1.2cm, 口径14.2cm, 底径11.1cmに復元した。

土師器甕(24) 口縁部の小破片で, 大きく外反する。口縁部ヨコナデ, 外面ハケ目, 内面ヘラケズリによる。21は南東隅柱から西に2番目の柱掘方, 22~24は南東隅柱から西に3番目の柱掘方から出土している。

S B 4562出土土器 (Fig.24, PL.8)

須恵器環(25) 口縁部の小破片で, 口唇部はシャープである。ナデ調整による。

土師器環(26) 無高台の坏で, 口縁部は緩やかに外反する。内外面ともヘラミガキで, 底部はヘラ切りによる。胎土に石英・雲母を含む。焼成は良好で, 赤褐色を呈する。25・26とも南西隅柱掘方の出土。

S B 4563出土土器 (Fig.24)

須恵器蓋 (27) 口縁端部が鳥嘴状を呈する蓋で、口唇部は小さく爪先立つ。

須恵器坏 (28) 有高台の坏で、高台は底部端に貼付している。胴下半部外面ヘラケズリ、内面ナデで、底部はヘラ切りによる。

須恵器甕 (32・33) 32は口縁部破片で、口径は19.0cmに復元した。口縁部は大きく外反し、口縁端部にヘラ沈線を巡らす。また、外面には眼鏡状のヘラ描き文様を刻んでおり、邪視文を表現したものか。33は頸部から肩部にかけての破片。外面平行タタキの後カキ目 (6条/cm)、内面円弧タタキによる。

土師器坏 (29~31) 29・30は有高台の坏で、31は無高台。高台は29が細身で、30はやや太めで、いずれも底部端に貼付している。31の底部はヘラ切りによる。29は北東隅柱掘方、27・30は東側桁行の北東隅柱から南に2番目の柱掘方、28は同じく3番目の柱掘方、31・32は西側桁行の北西隅柱から南に3番目の柱掘方、33は西側桁行の北西隅柱から南に2番目の柱掘方出土。

S B 4564出土土器 (Fig.24)

須恵器蓋 (34~37) 34は口縁部内側に身受けのかえりを有するもので、かえりはしっかりしている。かえりの内側と口唇部には黒色の漆が付着している。35~37は口縁端部が鳥嘴状を呈するもので、35の立ち上がりは低い。

須恵器皿 (38) 口縁部は内湾気味に立ち上がる。器高が低いことから皿になるか。

S B 4575出土土器 (Fig.24)

須恵器蓋 (39) 端部の小破片であるが、蓋とした。口縁部内面の段は僅かなものである。

須恵器甕 (41) 口頸部の破片で、口縁端部は上方に立ち上がる。口縁部ヨコナデ、外面カキ目による。また、口縁部内面には灰が厚く被る。復元口径は17.4cmを測る。

土師器坏 (40) 高台付近の破片で、底部端に低めの高台を貼付する。39は南西隅柱掘方、41は同柱穴、40は南東隅柱掘方の出土。

S B 4577出土土器 (Fig.26, PL.8)

当建物からは比較的多くの土器が出土している。1・4・9・12は身舎の北東隅柱掘方、

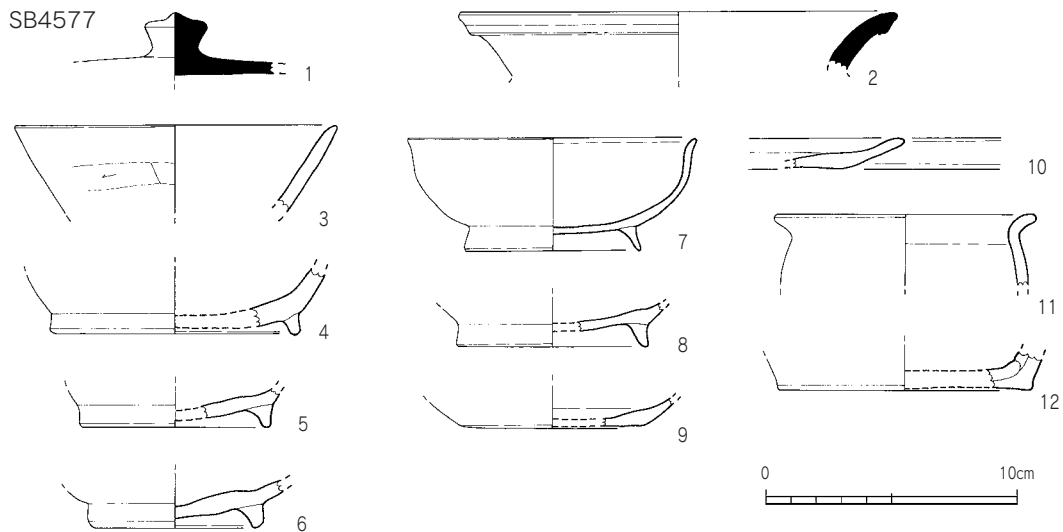


Fig.26 掘立柱建物出土土器実測図 (8) (1/3)

2は身舎の東側桁行柱列の北から2番目の柱掘方、3は同じく3番目の柱掘方、5～8・10・11は同じく4番目の柱掘方から出土した。

須恵器蓋(1) 撮み付近の破片で、撮みは大きめの擬宝珠形を呈する。壺蓋になるか。

須恵器甕(2) 甕の口縁部破片で、大きく外反する。復元口径17.4cm。

土師器椀(3～8) 3は口縁部破片、4～6・8は高台付近の破片。3の口縁部は丸く納め、外面はヘラケズリを施す。4・5は底部端に低めの高台を貼付している。6の高台は太めで、8は細め。7は丸底の坏に細めの高台を貼付したもので、口縁端部は小さく外反する。磨滅が顕著であるが、ナデによるか。器高4.5cm、口径11.5cm、高台径7.0cmを測る。

土師器皿(9・10) 9は口縁端部を欠くが、底部はヘラ切りによる。10は口縁部から底部にかけての破片で、器高が低いもの。底部はヘラ切りによる。

土師器甕(11) 復元口径10.4cm程の小型甕で、頸部から逆J字形に外反する。外面ナデ、内面ヘラケズリにより、外面には煤が遺存している。

青磁碗(12) 越州窯系青磁碗の底部小片で、下半部が露胎なII類。上げ底を呈するが、蛇ノ目高台であるかは不明。胎土に砂粒をほとんど含まず精良である。

註) 久留米市教育委員会 1980『筑後国府跡昭和54年度発掘調査概報』(久留米市文化財調査報告第23集)

2) 柵

古い次数の調査においては、一群のピットをまとめてS番を付して遺物を取り上げているため、報告段階で柵と認定したピットであっても土器が出土したピットを特定できず、結果として17点という僅かな報告に留まる。

S A 2513出土土器 (Fig.27)

須恵器蓋(1) 口縁部内側に身受けのかえりを有する坏蓋の小片である。天井部寄りの外面は沈線状のカキ目、口縁部はヨコナデによる。南端から3番目の柱掘方より出土した。

S A 2522出土土器 (Fig.27, PL.8)

土師器坏(2) 体部は平底の底部から直線的に斜めに開き、口唇部は丸く納める。磨滅顕著であるが、体部はヨコナデによるか。東端から2番目の掘方の出土。

S A 2895出土土器 (Fig.27)

須恵器蓋(3) 口縁部内面に身受けのかえりを有する坏蓋の小片で、かえりの度合いは僅かである。器厚は7mmと肉厚の器形を呈する。

須恵器坏(4) 口縁部付近の小片で、体部は直線的に開く。口縁部はヨコナデによる。3・4ともに柱掘方から出土した。

S A 3816出土土器 (Fig.27, PL.8)

須恵器坏(5) 口縁部の小片で、口径は13.0cmに復元した。調整はヨコナデによる。

須恵器皿(6・7) 6は口縁部の破片で、底部を欠く。復元口径は14.0cmを測る。口縁部はヨコナデによる。7は口縁部小片で、S字形を呈する。内面は灰被り。

土師器蓋(8・9) 8は復元口径26.6cmを測る大型の蓋で、天井部を欠く。口唇部は小さく爪先立つ。口縁部ヨコナデ、外天井部は回転ヘラケズリ後雑なヘラミガキ、内面はヘラミガキによる。9は口縁部小片で、僅かに爪先立つ。口唇部外面に沈線を施す。磨滅顕著である

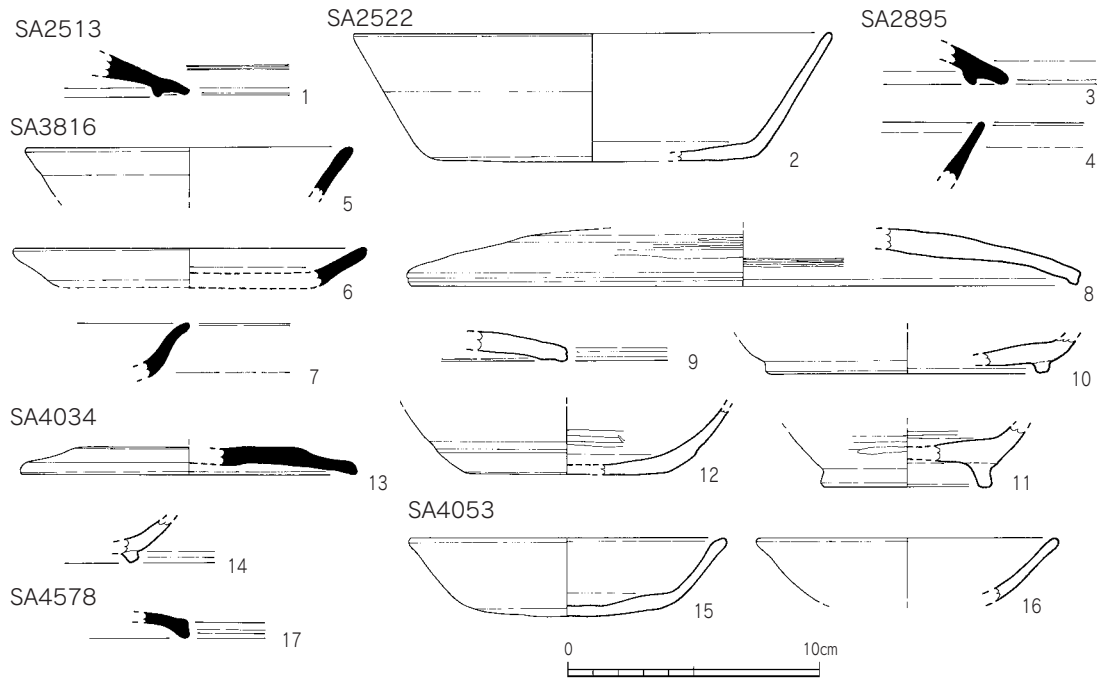


Fig.27 柵出土土器実測図 (1/3)

が、ヨコナデか。8は南端から2番目、9は同じく3番目の柱穴から出土した。

土師器坏 (10~12) 10~12は坏の底部破片で、10・11は有高台、12は無高台である。10の高台は低いが、11の高台は高めで、ハ字形に開く。10は器面の磨滅が著しいが、ヘラミガキによるか。11の体部はヘラミガキによる。高台径は10が11.2cm、11が6.8cmに復元した。12は口縁部を欠くが、体部は内湾し、平底の底部に移行する。体部下半に沈線状の段を有し、段から上位はヘラミガキ、下位は回転ヘラケズリによる。体部には灰色のスリップを施す。10・11は南端から3番目、12は南端の柱穴出土。

S A4034出土土器 (Fig.27, PL.8)

須恵器蓋 (13) 天井部中央を欠くため撮みを付していたかは不明。口縁端部は鳥嘴状を呈し、低平な器形を呈する。口縁部ヨコナデ、外天井部不整ナデによる。復元口径は13.4cm。

土師器坏 (14) 有高台の坏の底部小片。高台は低く、内側で接地する。外面は磨滅が著しいが、内面はナデによる。13・14ともに西端から2番目の掘方出土。

S A4053出土土器 (Fig.27, PL.8)

土師器坏 (15・16) 15の口縁端部は肥厚し、16は丸く納める。16は底部を欠くが、15の底部は丸みを帯びる。何れも口縁部はヨコナデにより、15の底部はヘラ切り離した後、未調整。口径は15が12.6cm、16は12.0cmに復元した。15は東端の柱穴、16は東端から3番目で、S B2435を切る柱穴から出土した。

S A4578出土土器 (Fig.27)

須恵器蓋 (17) 口縁部の小破片で、端部は鳥嘴状を呈する。内外面とも厚く灰を被る。西端から2番目の柱穴から出土した。

3) 溝

①境界溝

S D320出土土器 (Fig.28~42, PL.9~12)

不丁地区西の境界溝S D320は各地区で補足調査を含めて計5次の調査が行われた。ここでは、各調査における出土層単位ごとに報告する。各地区の出土層位の対比や検討については、後で述べる。

14次調査資料 (Fig.28 ~30)

調査区南北端にそれぞれ設定した、溝断面を観察するためのトレンチ調査出土資料である。

1~100は下位より各層序ごとに取り上げた。

溝最下層
出土

〈1~12：最下層・灰色砂礫層出土資料〉

須恵器蓋 (1~4) 破片資料が多い。口縁端部はいずれも折り返すが、僅かに屈折するもの(1)、踏ん張りが強く外面に段を有するもの(2・4)、肥厚して折り返し断面三角形となるものがある。1の外天井部は回転ヘラケズリ後ナデ、復元口径12.3cm。2・3は外天井部を回転ヘラケズリ。4は盤の蓋であろう、復元口径は20cm。

須恵器杯 (5) 体部を直線的に開き、外底部端に低い方形の高台を貼付する。外底部はヘラケズリ。復元口径23.6cm。

須恵器皿 (6・7) 外底部はヘラケズリ後ナデ。7は赤焼で一見土師器に見える。外底部に踏ん張る高台を貼付する。内外面は丁寧なナデ。

須恵器盤 (8) 底部端に多少踏ん張り気味の高台を貼付する。外底部はヘラケズリ後ナデ。

須恵器甕 (9) 頸部から口縁を外反させる。端部を僅かに肥厚させ大きく反る。復元口径21.0cm。

土師器皿 (10) 外底部は回転ヘラケズリ後ナデ。体部内外面は回転ヘラミガキ。復元口径19.2cm, 器高1.9cm。

土師器杯 (11・12) 11は体部が大きく開く。体部下位と外底部を回転ヘラケズリ。内外面の調整は磨滅により不明。復元口径15.6cm。12は体部が大きく開き、口縁端部が僅かに外反する。外底部ヘラケズリ。

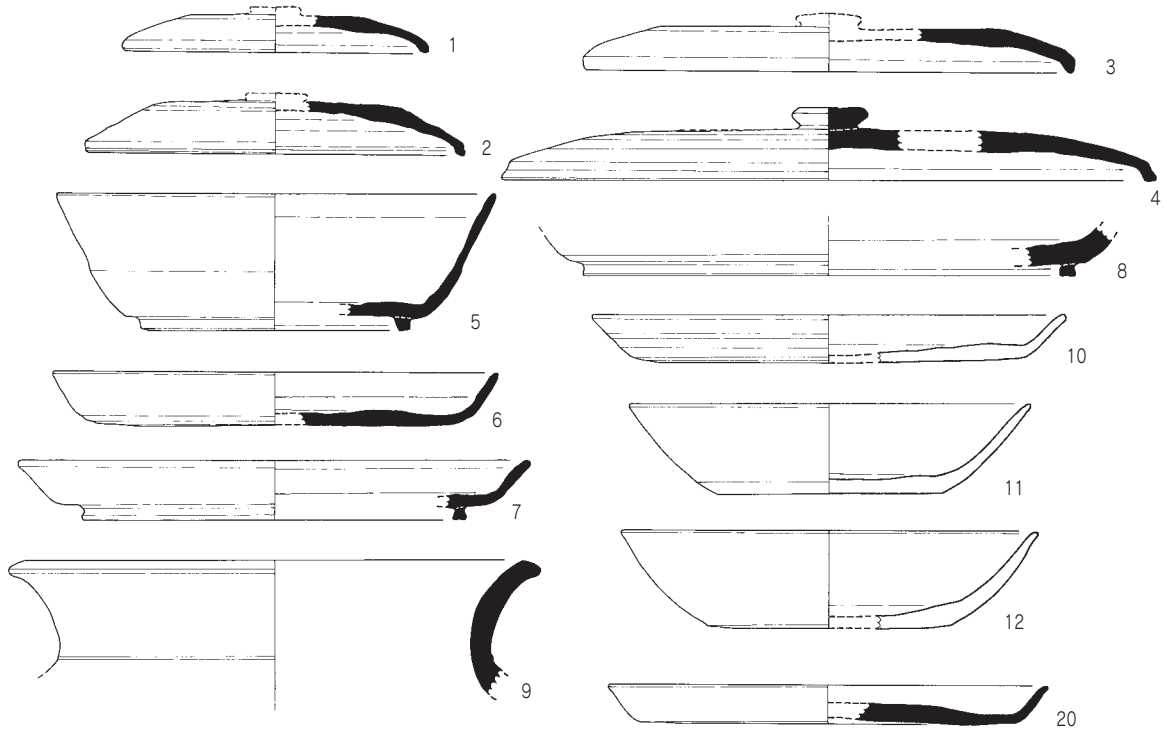
〈13~25：最下層・灰白色砂層出土資料〉

須恵器蓋 (13~15) 13はヘラケズリによる平らな天井部に低平なボタン状の撮みが付く。口縁端部を折り返し僅かに肥厚する。口径13.4cm, 器高12.5cm。14は口縁部を薄く直立させて折り返し、端部が僅かに肥厚する。高い外天井部は回転ヘラケズリ。復元口径19.4cm。15は口縁端部を嘴状に鋭く折り返す。

須恵器杯 (16~19) 16は外底部の端に方形の高台を貼付し、体部は直線的に開く。焼成は軟質で、外底部は回転ヘラケズリ。復元口径13.2cm。17の体部は大きく逆ハ字形に開く。平らな外底部には低く踏ん張る高台を貼付する。外底部は回転ヘラケズリ。焼成は軟質。18・19はどちらも体部が直線的に開く。19の口縁部はやや内傾する。外底部は中央が少し沈み、方形の高台はやや開く。復元口径19.8cm, 底径14.8cm, 器高6.2cm。

須恵器皿 (20・21) 20の外底部はヘラケズリ後ナデ。21の口縁部は外反する。外底部は雑なヘラケズリを施す。

灰砂礫



灰白砂

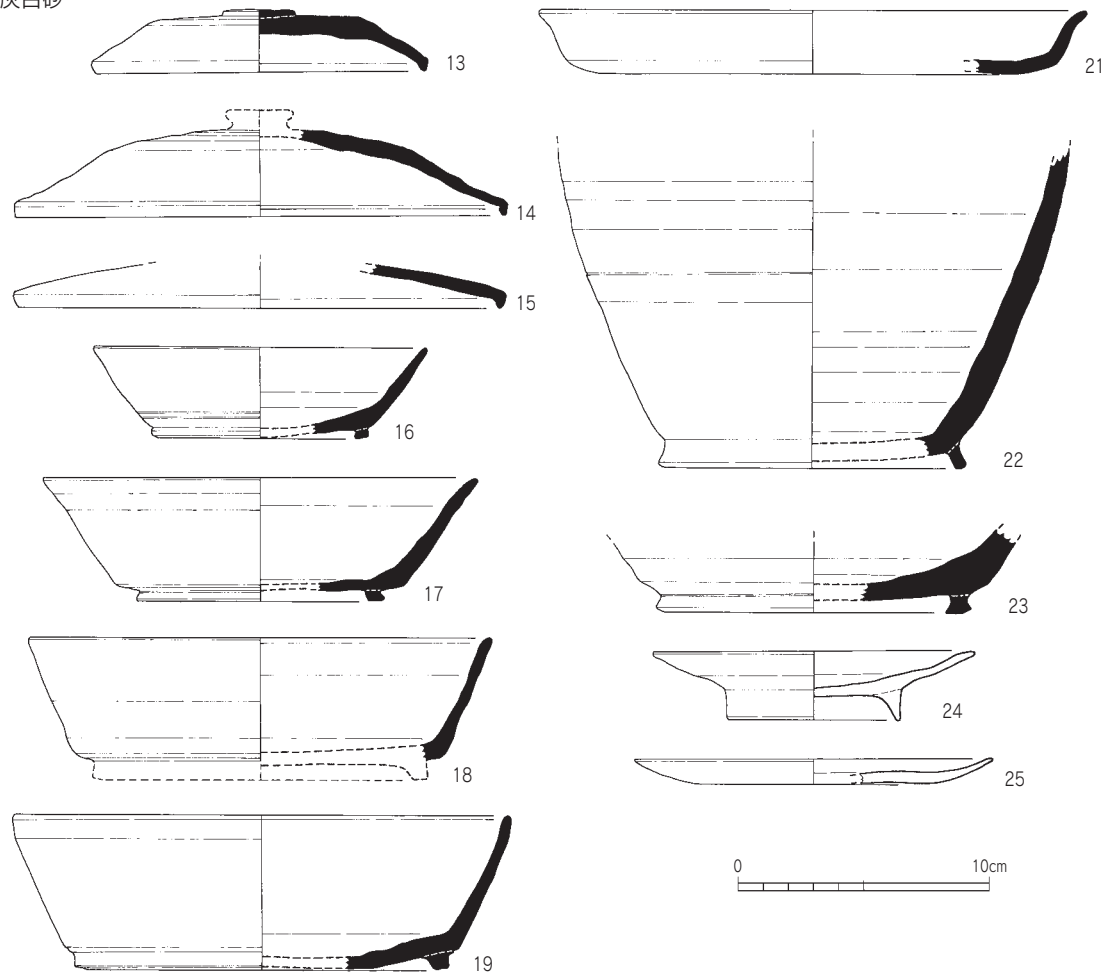


Fig.28 境界溝出土土器実測図 (1) 14次SD320 (1/3)

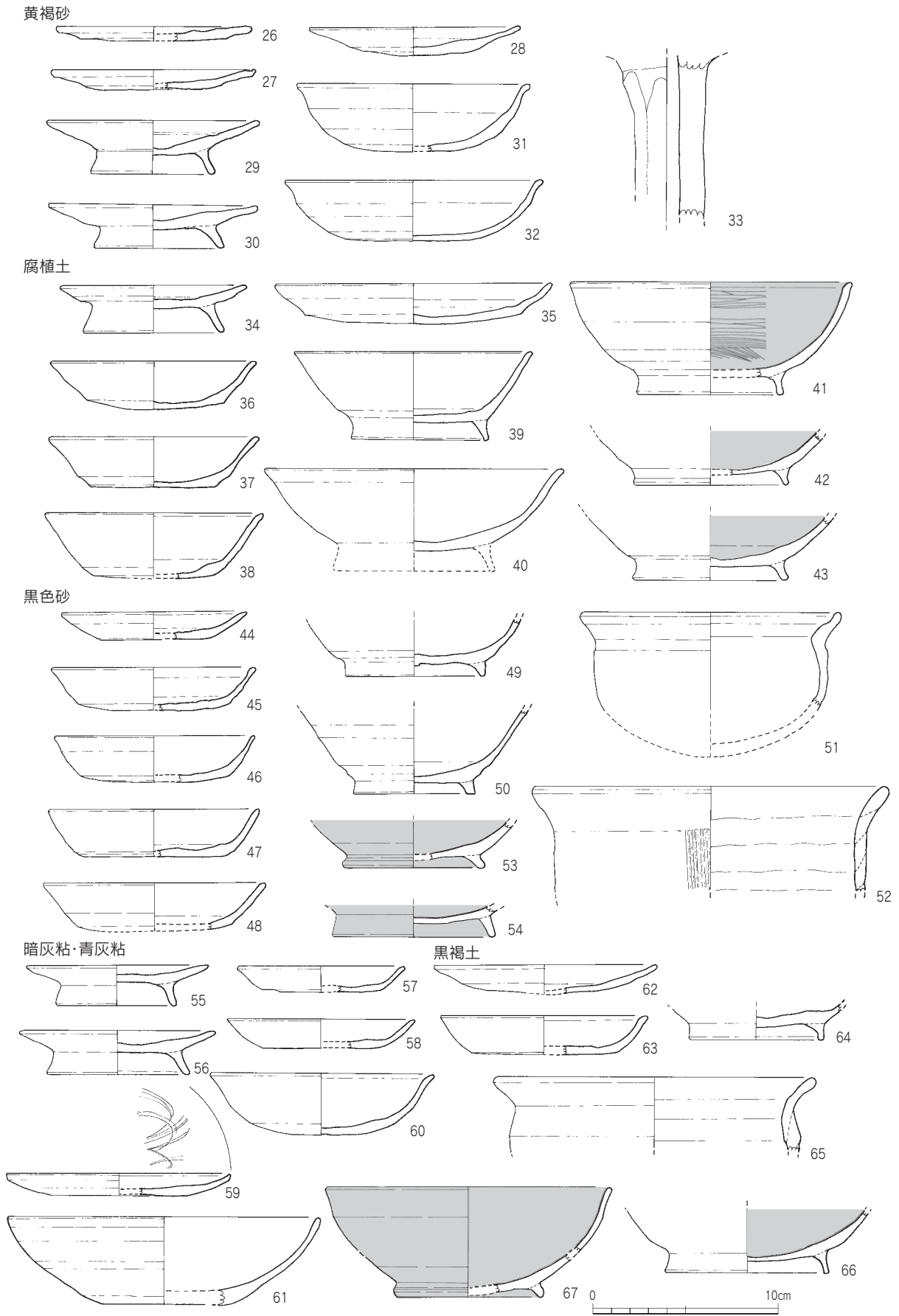


Fig.29 境界溝出土土器実測図(2) 14次SD320 (1/3)

須恵器壺 (22・23) 22は体部中位に沈線を1条巡らす。高台は細く開く。23は体部下位をヘラケズリ。高台端部は内面に僅かに踏ん張る。

土師器皿 (24・25) 24は体部を僅かに屈折させて大きく開く。直立する高台は端部が細く鋭い。口径12.8cm, 器高2.7cm。25の短く開く体部の内外面はヨコナデ。外底部は回転ヘラケズリ。蓋の可能性も残す。

〈26～33：中層下部・黄褐色粗砂層出土資料〉

土師器皿 (26～30) 26・27は口径10.6～11.1cm, 器高0.8～1.1cm。27は口縁部を僅かに折り返す。どちらも外底部はヘラ切り。28の体部は直線的で、ロクロによる外面の稜線を明瞭にしている。口径11.2～11.4cm, 器高2.4～3.0cm。29・30はどちらも高くハ字形に開く高台を貼付する。

土師器坏 (31・32) どちらも丸底坏で口縁部を外反させる。外底部内外面はヘラケズリとナデによる調整。31は口径12.6cm, 器高3.7cm。32は口径13.6cm, 器高3.3cm。

土師器高坏 (33) 脚部片。体部は縦位のヘラケズリで、多面体に面取りしている。

〈34～43：中層・腐植土層出土資料〉

土師器皿 (34・35) 34は高くハ字形に開く高台を貼付する。35は体部下位を強いナデで、口縁部が大きく開く。復元口径15.0cm。

土師器坏 (36～38) 口径11.0～11.6cm, 器高2.6～3.4cm。いずれも体部を大きく逆ハ字形に開き、口縁端部を僅かに肥厚させる。外底部はいずれもヘラ切り。

土師器碗 (39・40) 39は高くハ字形気味で直立する器壁の薄い高台を貼付し、体部は直線的に開く。体部内外面はナデ、外底部はヘラ切り後ナデ。復元口径12.8cm, 器高5.0cm。40は口縁部に向って大きくハ字形に開き、体部下位に丸みを持つ。

黒色土器碗 (41～43) いずれも黒色土器A類碗。41は方形で端部に丸みを持つ高台をハ字形気味に貼付する。口縁端部が僅かに外反する。内面は丁寧なミガキ。42は端部が僅かに踏ん張る低い高台を貼付する。内面はミガキ。43の外底部はヘラケズリ。

〈44～54：中層・黒色砂土出土資料〉

土師器皿 (44) 外底部はヘラ切り。復元口径10.0cm, 器高1.5cm。

土師器坏 (45～48) 口径10.7～11.9cm, 器高2.2～2.5cm。いずれも体部が直線的に開きながら口縁端部を僅かに肥厚させる。外底部は全てヘラ切り。

土師器碗 (49・50) どちらも体部下位にロクロによる稜線を明瞭にし、高台部は高くハ字形に踏ん張る。外底部はヘラ切り。

土師器甕 (51・52) 51は口縁部が大きく逆ハ字形に開き、端部を僅かに内傾する。内外面の調整はヨコナデ。復元口径13.8cm。52は直立する胴部から僅かに屈折して、口縁部が短くハ字形に開く。外面胴部は櫛状の工具による縦位のハケ目。内面は頸部以下をヘラケズリ。

黒色土器碗 (53・54) 53・54は黒色土器B類碗の底部片。

〈55～60：中層・暗灰色粘質土、青灰色粘質土出土資料〉

土師器皿 (55～61) 55・56は高台付皿。口径9.9～10.4cm, 器高2.2～2.4cm。短く大きく開く体部に、高くハ字形に開く高台を貼付する。外底部はヘラ切り後にナデ。57～59は、口径9.0～12.0cm, 器高1.2～1.4cm。外底部は、57がヘラ切り、58・59はヘラ切り後、板

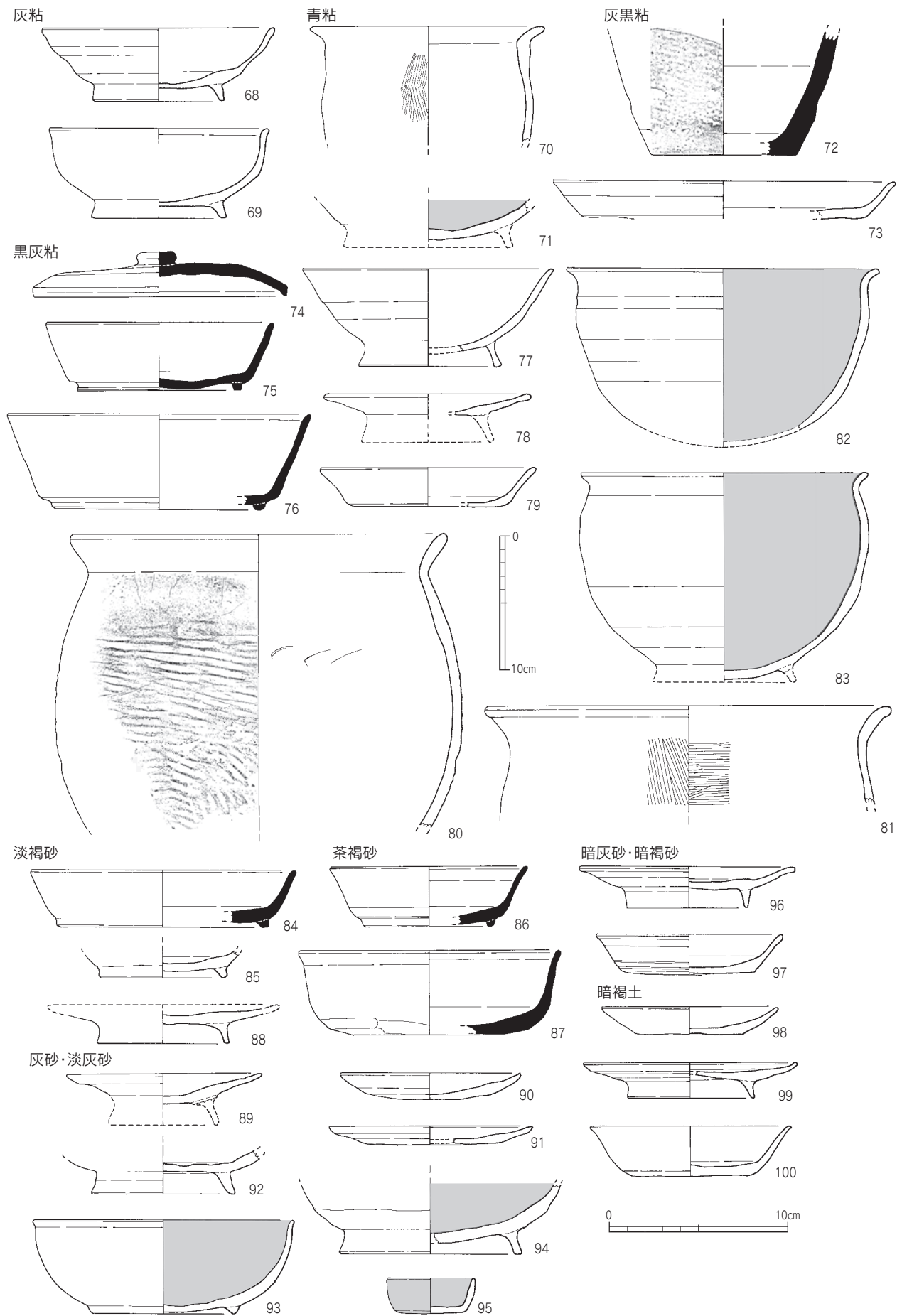


Fig.30 境界溝出土土器実測図(3) 14次SD320 (1/3・1/4)

状圧痕あり。59の底部内面には、文様状のハケ目がある。

土師器坏 (60・61) 60は底部が丸底状で、体部も丸みを持って口縁端部を外反させる。復元口径11.8cm。61は径の小さい底部から丸みを持って体部が大きく開く。口縁部は僅かに肥厚する。復元口径16.8cm。

〈62～67：中層・黒褐色土出土資料〉

土師器皿 (62・63) 62は体部が長く大きく開いて扁平気味。淡肌色に焼成。外底部はヘラ切り。復元口径12.0cm。63は小皿で、外底部はヘラ切り後ナデ。

土師器椀 (64) 直立して、端部が肥厚する高台を底部端に貼付する。外底部はヘラ切り後ナデ。

土師器甕 (65) 短い口縁が逆ハ字形に開き、端部を肥厚させる。復元口径17.2cm。

黒色土器椀 (66・67) 66は黒色土器A類、67はB類。いずれも体部下位に丸みを持つ。66は細くハ字形に開く高台を貼付する。67は端部を肥厚させる低い高台がハ字形に開く。内面はミガキ。復元口径15.2cm、器高6.1cm。

〈68・69：中層・灰色粘質土出土資料〉

土師器椀 (68・69) 68は体部下位で屈折して大きく開き、口縁部を肥厚させる。底部端には直立する端部の細い高台を貼付する。外底部はヘラ切り。復元口径13.0cm、底径7.1cm、器高4.1cm。69は丸みを持った体部から口縁部を屈折させて外反する。比較的厚い断面方形の高台をハ字形に貼付する。

〈70・71：中層・青色粘質土出土資料〉

土師器甕 (70) 頸部下位で僅かに肥厚し、短い口縁部がハ字形に開く。復元口径13.0cm。

黒色土器椀 (71) 黒色土器A類底部片。高台は剥落している。外底部はヘラ切り。

〈72・73：中層・灰黒色粘質土出土資料〉

須恵器壺 (72) 外面は格子タタキ、内面はナデ。底径8.0cm。

土師器皿 (73) 体部は直線的に開き、中位外面には調整による稜を持つ。内外面回転ヘラミガキ、外底部はヘラ切りのち回転ヘラミガキ。復元口径19.0cm、器高2.2cm。

〈74～83：中層・黒灰色粘質土出土資料〉

須恵器蓋 (74) 比較的高い天井部にボタン状の撮みを持つ。口縁端部を僅かに肥厚させて嘴状に折り返す。外天井部は回転ヘラケズリ。口径14.2cm。

須恵器坏 (75・76) どちらも体部は直線的に開き、外底部の端に低い方形の高台を貼付する。75の外底部はヘラ切り。口径12.7cm、底径9.2cm、器高3.8cm。

土師器椀 (77) 高台は高く、ハ字形に開く。外底部はヘラ切り後ナデ。

土師器皿 (78) 体部は直線的に開き、口縁端部を僅かに肥厚させる。外底部の剥離面から高台付と分かる。

土師器坏 (79) 外底部はヘラ切り。口径12.0cm、器高2.2cm。

土師器甕 (80・81) 80は球形の胴部を持ち、口縁部内外面をヨコナデ、体部の外面は横位のタタキ、内面は強いナデ。復元口径27.6cm。81の頸部の屈折は僅かで、ハ字形に開く口縁の端部は肥厚する。内面頸部下位に横位のナデ。復元口径20.0cm。

黒色土器甕 (82・83) どちらも黒色土器A類の甕で、短い口縁部を外反させる。82は内

面をジグザグ状のヘラミガキ、外面は体部中位までを横位のナデ、体部下位をヘラケズリ。復元口径23.2cm。83は高台付の甕。外面の口縁部から体部中位以下をヘラケズリ。内面は体部中位まで回転ヘラミガキ。体部下位をヘラミガキ。復元口径21.3cm。

〈84・85：上層下部・淡褐色砂層出土資料〉

須恵器環（84） 外底部端に方形の高台を貼付する。復元口径14.8cm，底径11.8cm，器高3.2cm。

土師器椀（85） ややハ字形に開く高台を貼付する。外底部に板状圧痕あり。

〈86～88：上層・茶褐色砂出土資料〉

須恵器環（86・87） 86は体部が直線的に開く。外底部端に方形の低い高台を貼付する。復元口径10.9cm，底径7.4cm，器高3.4cm。87は無高台で体部下位をヘラケズリ，外底部はヘラ切り。復元口径14.7cm。

土師器皿（88） 口縁部を欠損する。高台は細く鋭く直立する。外底部には板状圧痕あり。

〈89～95：上層・灰色砂，淡灰色砂出土資料〉

土師器皿（89～91） 89は体部中位で屈折し開く。剥離面から高台付と分かる。90は体部下位が肥厚する。外底部はヘラ切り，板状圧痕あり。口径10.0cm。器高1.4cm。91は口縁端部内面に沈線を巡らす。外底部はヘラ切り。

土師器椀（92） 体部下位は丸みを持ち，ハ字形に開く比較的高い高台を貼付する。外底部はヘラ切り。

黒色土器椀（93・94） どちらもA類の椀。93の口縁は短く丸みを持つ。体部内面はヘラミガキ。外底部はヘラ切り後にナデ，さらに格子文様のヘラ書きあり。94は比較的高い高台を持つ。内面はヘラミガキ，外底部の調整は磨滅により不明。

黒色土器環（95） B類で小型の環。内外面はヘラミガキ。口径5.0cm，器高2.0cm。

最上層出土
資料

〈96・97：最上層・暗褐色砂層出土資料〉

土師器皿（96） 小皿c。体部は下位に段を持ちながら直線的に開き，口縁端部を僅かに外反させる。高台は細く直立する。口径12.1cm，底径6.8cm，器高2.3cm。

土師器環（97） 体部下位にはヘラ状工具で沈線を2条巡らす。口径10.4cm，器高2.2cm。

〈98～100：最上層・暗灰色砂，暗褐色土出土資料〉

土師器小皿（98・99） 98は底部端が最も肥厚し，体部は短く直線的に開く。外底部はヘラ切り後，板状圧痕。口径9.8cm，器高1.5cm。99は高台付で小皿c類。体部は丸みを帯びて開く。口縁端部が僅かに内湾する。また，端部が細く鋭い高台を貼付する。外底部はヘラ切り。

土師器環（100） 口縁部は細く鋭く，僅かに端部を外反させる。外底部に板状圧痕あり。

14次補足調査資料 (Fig.31～36)

〈1～45：最下層・砂層出土資料〉

須恵器蓋（1～18） 1～4は口縁部に身受けのかえりを有する古期に属する資料。いずれも撮みを欠損する。天井部は比較的高く，回転ヘラケズリ。口径10.8～14.4cm，器高1.6～2.2cm。5～8は口径10.7～11.8cm，器高1.2～2.0cm程度で比較的まとまっている。ボタン状の撮みを有し，口縁部を肥厚させて折り曲げる。特に6・7は口縁外面に強いナデによる段を有する。外天井部は回転ヘラケズリ。9は口縁端部を僅かに屈折させ，内面に身受けのた

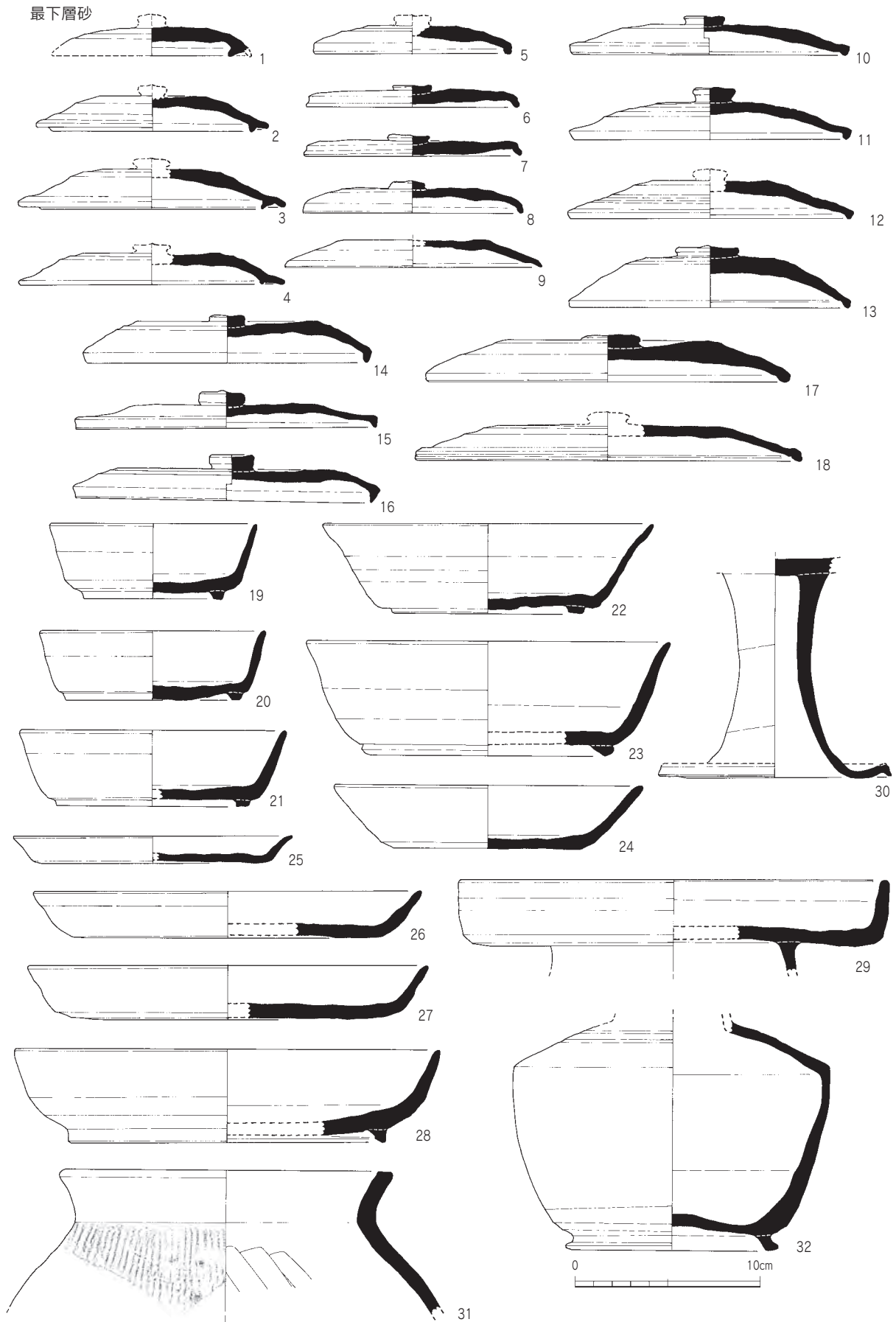


Fig.31 境界溝出土土器実測図 (4) 14次補SD320 (1/3)

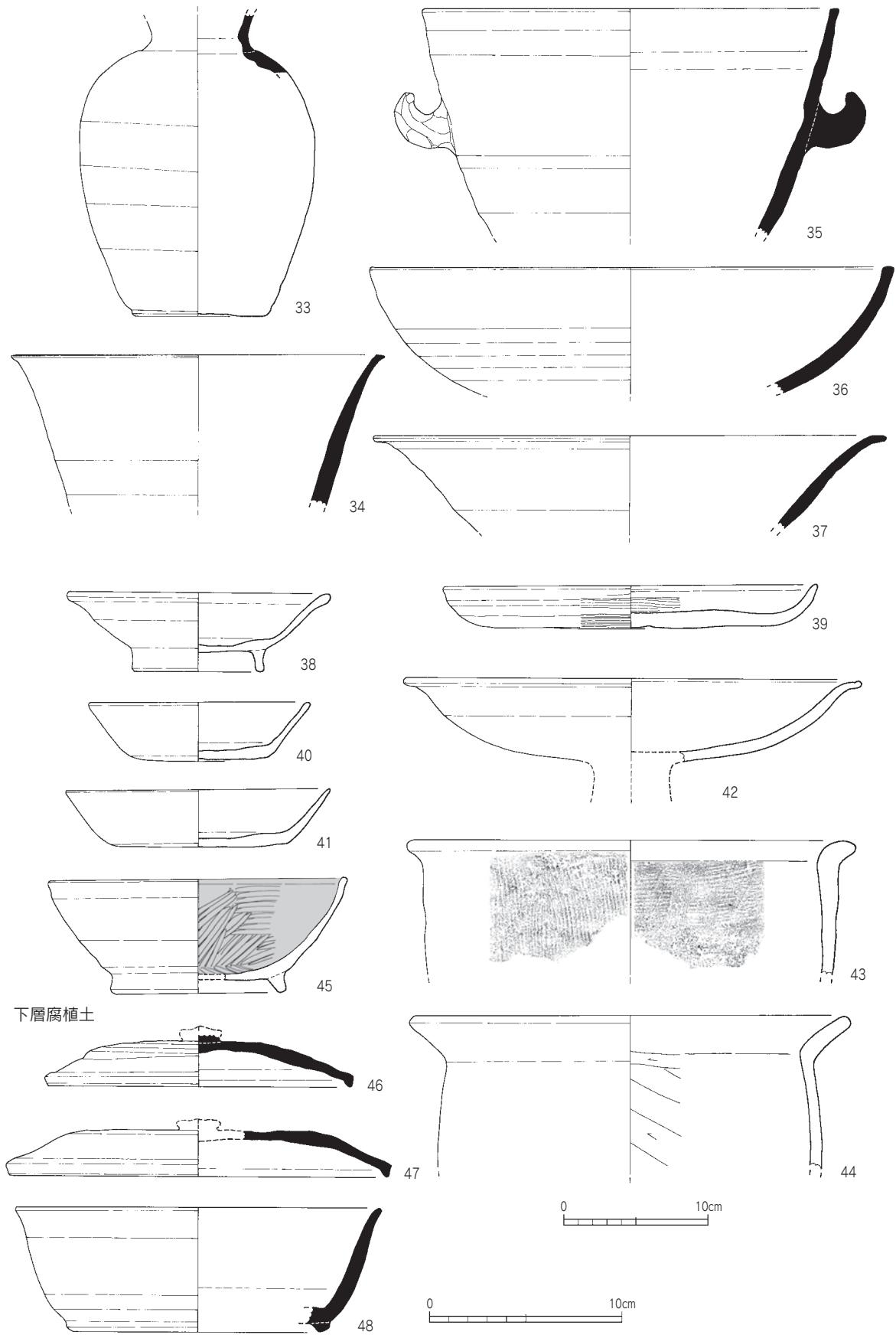


Fig.32 境界溝出土土器実測図 (5) 14次補SD320 (1/3・1/4)

めの段を有する。外天井部はナデで、撮みを有さない可能性が高い。復元口径13.8cm。10～17は口径15.1～16.6cm、器高2.0～2.9cm。12を除きいずれも撮みを有するが、13のみは大きな低平なボタン状である。口縁部は肥厚させて嘴状に折り曲げるもの（11・14～16）、僅かに折り曲げるもの（18）、肥厚するもの（10・12・13・17）がある。外天井部はいずれもヘラケズリで、15についてはヘラ切り未調整。

須恵器環（19～24） 19～23はいずれも有高台の環。19～21は口径11.2～14.4cm、器高3.8～4.1cm。22・23は口径17.9～19.6cm、器高4.9～6.2cm。体部はいずれも直線的に開き、外底部の端に方形の高台を貼付する。ただし、23の高台は大きく外側に開く。外底部の調整は確認できるもので19・20がヘラ切り、22はヘラ切り後板状圧痕。24は無高台の環。体部は比較的厚い器壁で、直線的に開く。体部下位、外底部はヘラ切り後ナデ。胎土は精良で、色調は白色に焼成される。口径16.6cm、器高3.4cm。

須恵器皿（25～27） 25は体部が外反する小型品。外底部はヘラ切り後ナデ。26・27は体部下位に丸みを持ち、底部の器壁は比較的厚い。外底部の調整はいずれもヘラ切り。27は復元口径21.6cm、器高2.9cm。

須恵器盤（28・29） 28の器壁は比較的厚い。体部下位外面は回転ヘラケズリにより稜を明瞭にする。高台畳付部を内傾させて内面に沈線を巡らす。外底部はヘラ切り。復元口径23.0cm、高台径17.1cm、器高5.0cm。29は体部を直立させる。外底面の脚部内はヘラ切り、脚外はヘラケズリ。復元口径23.2cm。

須恵器高環（30） 裾部がラッパ状に開き口縁端部を折り返す。裾径12.6cm。

須恵器壺（31～33） 31はやや直立気味の口縁部は端部を天井に向ける。外面には自然釉が被る。32は長頸壺の頸部を欠損する。体部下位はヘラケズリで丸みを帯び、肩部には2条の沈線を巡らす。高台部は高く踏ん張る。胴部最大径17.4cm、底径11.4cm。33は長胴の壺で口縁部を欠損する以外は残る。体部中位より上部は回転ヘラケズリ、中位から下位はヨコナデ、外底部はナデ。胴部最大径は16.2cm。

須恵器鉢（34～37） 34の体部は直線的に開き、口縁部を僅かに外反させる。口縁端部を平坦にする。体部中位は回転ヘラケズリ。復元口径26.0cm。35は把手付で、体部付近が僅かに内湾して口縁部へ至る。把手下位は回転ヘラケズリ、それ以外はヨコナデ。36は丸底となる。外面口縁下位を回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。内面は磨滅。口径36.6cm。37は体部が朝顔形に大きく開き、口縁を外反させる。口縁部はヨコナデ、その下位は回転ヘラケズリ。

土師器皿（38・39） 38は高台付皿。体部は大きく開きながら口縁部が肥厚する。方形の高台を直立させる。口径13.7cm、底径6.9cm、器高4.1cm。39の体部は内湾気味で、底部との境は不明瞭である。内外面横位のミガキ、外底部はヘラ切り。口径26.0cm、器高3.0cm。

土師器環（40・41） どちらも体部が直線的に開くが、41は口縁部を細く鋭く仕上げる。外底部は40がヘラ切りで板状圧痕あり。41は回転ヘラケズリ。

土師器高環（42） 環部片で、体部と底部の境は不明瞭。口縁端部は外反させて僅かに肥厚する。体部中位以下は回転ヘラケズリ。復元口径19.0cm。

土師器甕（43・44） 43は直立する胴部に対して肥厚する口縁部が僅かに開く。頸部下位外面は縦位のハケ目、内面は横位ハケ目。復元口径31.0cm。44の内面頸部下位はヘラケズリ。

中層腐植土



中層黑色粘質土

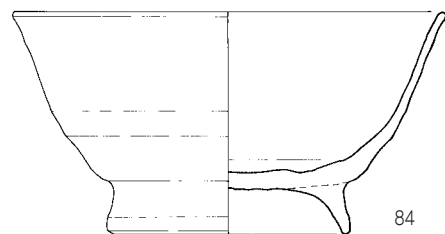
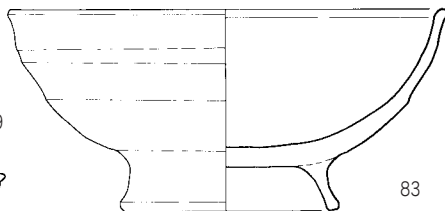
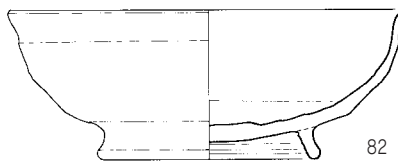
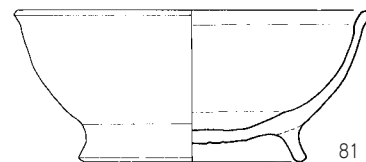
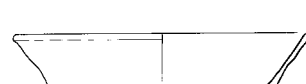
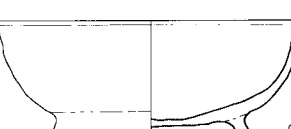
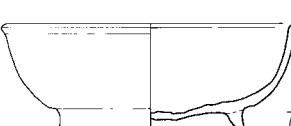
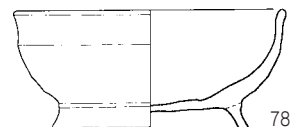
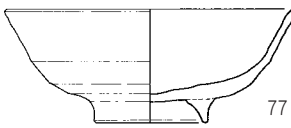
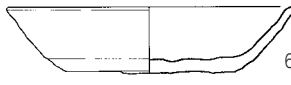
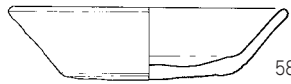
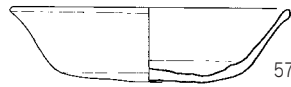
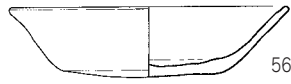
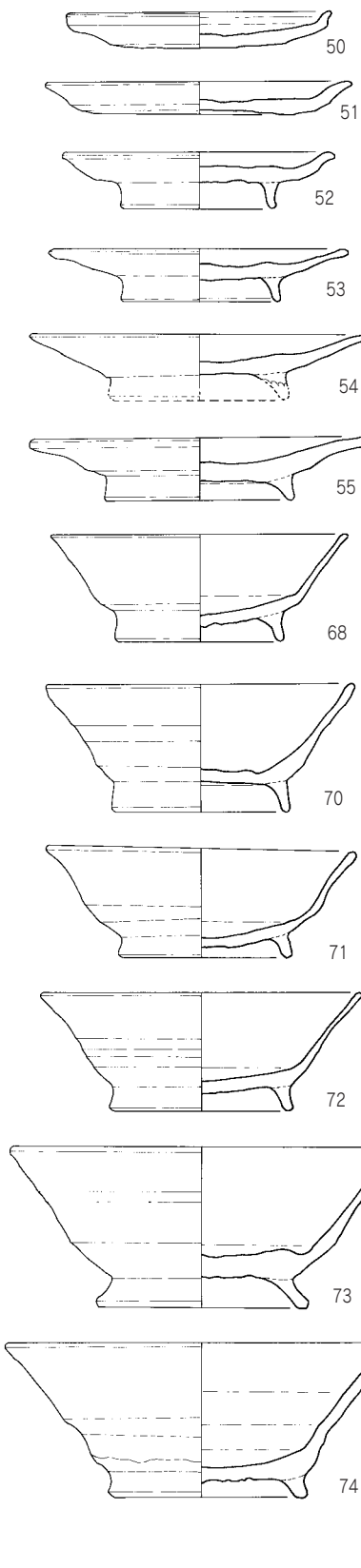


Fig.33 境界溝出土土器実測図 (6) 14次補SD320 (1/3)

最下層の
黒色土器

黒色土器椀 (45) A類椀。丸みを持つ底部端にハ字形に開く方形の高台を貼付する。内面は粗いヘラミガキ、外面は横位のナデ。口径15.5cm。器高5.9cm、底径5.9cm。

〈46～48：下層・腐植土層出土資料〉

須恵器蓋 (46・47) 46・47ともに口縁端部を肥厚させ僅かに折り曲げる。どちらも天井部は比較的高い。46の復元口径は15.4cm。

須恵器坏 (48) 体部下位に丸みを持ちながら口縁端部が外反する。低い逆台形の高台を底部端に貼付する。

〈49～94：中層・腐植土、黒色粘質土出土資料〉

須恵器坏 (49) 体部はハ字形に開く。外底部はヘラ切り。

土師器皿 (50～55) 50は口縁端部を外反させる。外底部はヘラ切り後板状圧痕あり。51の体部は外反し口縁部へ至る。体部はヨコナデ、外底部はヘラ切り。口径12.8cm、器高1.4cm。52～55は高台付皿。口径11.4～14.3cm、器高2.4～2.6cm。52の体部は内湾気味で口縁端部を外反させる。外底部は55がナデ以外はいずれもヘラ切り。

土師器坏 (56～67) 口径11.0～12.3cm、器高2.3～3.7cm。体部はいずれも直線的に開くが、体部下位にヨコナデによる稜線を明瞭にするものがある (62・67)。体部中位の器壁を一旦薄くさせて口縁部が肥厚するもの (57・59・63・64)、一定の器壁で口縁部に至るもの (56・58・60・61・62・66)、口縁部へ向かうにつれて器壁が細くなるもの (65) がある。外底部はいずれもヘラ切りで一部板状圧痕を残すものがある (56～59・61・62・65)。

土師器椀 (68～84) 体部が直線的に開くもの (68～76) と、丸みを持つもの (77～83) とに大きく分かれる。68～72は口径12.4～13.4cm、底径7.1～7.7cm、器高4.5～5.4cm、73～76は口径15.3～16.4cm、底径8.3～9.1cm、器高5.7～6.6cmと法量的に二分される。いずれも、体部は中位で器壁を薄くしながら外反させ、口縁部を肥厚させる。また、体部下位にはロクロナデ調整によって稜線を明瞭にするものがある (71～73・76)。高台部は外底部端に貼付し、いずれもハ字形に開く。このうち、69・73は高台が踏ん張って端部外面を肥厚させ、73は大きくハ字形に取り付いて他と峻別される。74・76の口縁部内面には煤が付着する。外底部はヘラ切りで板状圧痕を持つもの (71・72) もある。

77～84は、口径10.8～12.5cmと器高4.3～4.9cm、口径14.2～17.5cmと器高6.0～8.8cmの二つに大きく分かれる。このうち77・84を除き、いずれも口縁部を僅かに外反させる。特に79は口縁端部を著しく肥厚させる。高台については、77が直立させる以外はハ字形に開いたものを貼付する。82の高台内面はナデによって沈線状となり、84は端部を細く仕上げる。外底部はヘラ切りで板状圧痕を持つもの (81・83) もある。

土師器鉢 (85) 開く体部は丸みを持つ。口縁部を肥厚させて僅かに外反させる。外面は、底部を手持ちヘラケズリで他はナデ、内面はハケ目。外面に煤付着。内面には炭化物付着。口径22.4cm。

土師器甕 (86～89) 86は小型で、体部下位に丸みを持ちながら平底気味となる。胴部は球形で、頸部を窄めて口縁を外反させる。外面には煤付着。復元口径17.2cm、器高12.0cm。87は球形の胴部で口縁部が大きく開く。外面胴部には格子のタタキ目、内面には頸部下位に縦位のヘラケズリ。胎土の砂粒は比較的少ない。口径25.2cm。88・89は多少丸み

タタキ目
を持つ
土師器甕

中層腐植土

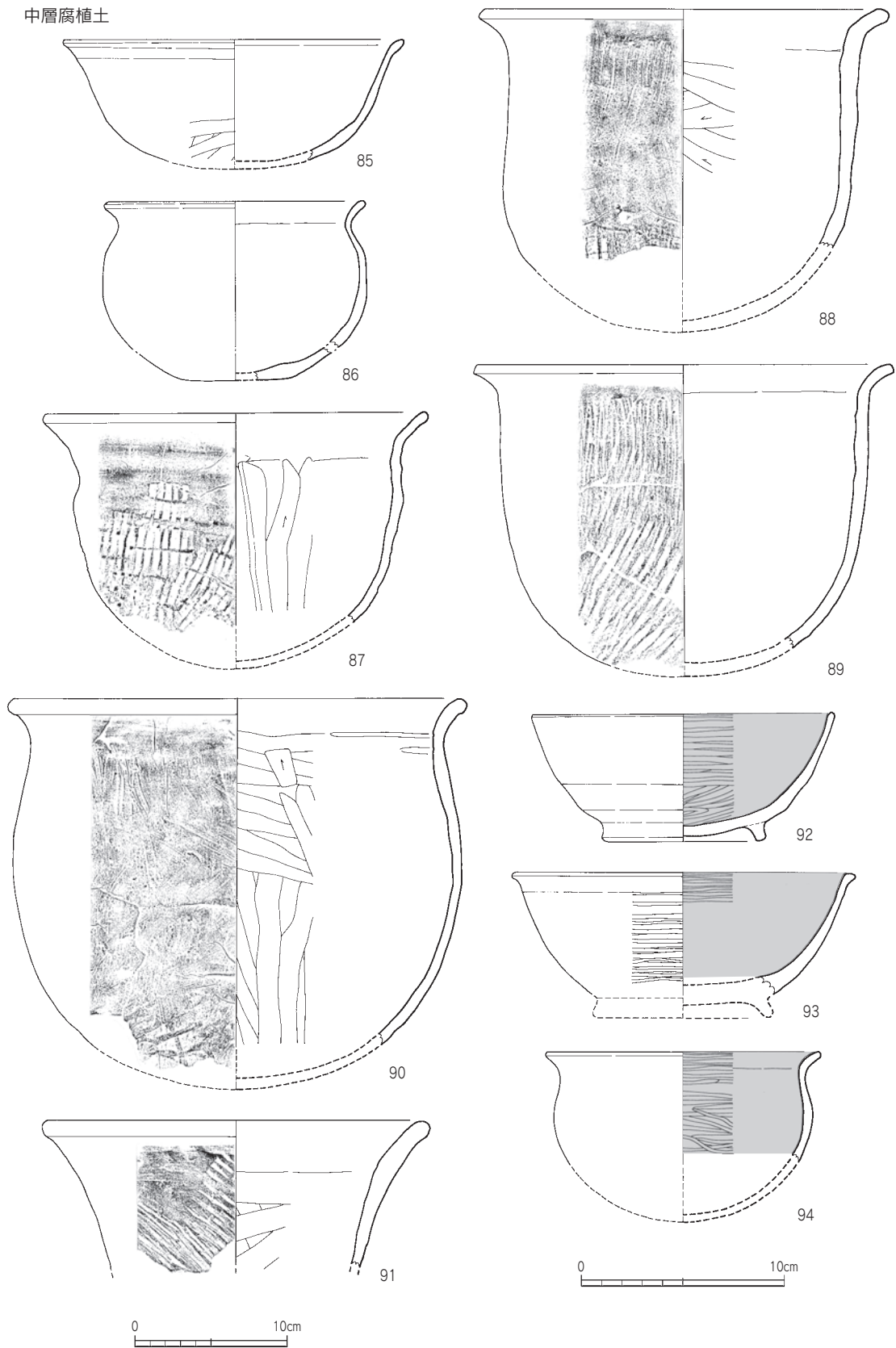


Fig.34 境界溝出土土器実測図 (7) 14次補SD320 (1/3・1/4)

を持つ体部から短い口縁部が外反する。88の体部外面はハケ目で、下位には粗い格子のタタキ目。内面頸部以下はケズリ。復元口径27.0cm。89の外面胴部上位は平行タタキ目とハケ目が重複し、中位以下は平行タタキ目。内面はヨコナデ、所々指頭圧痕があり、赤色物と炭化物が付着。口径27.6cm。90は球形の胴部で、口縁部は丸みを持ちながら僅かに肥厚し、体部外面は粗いハケ目、下位は粗い格子のタタキ目。復元口径30.0cm。91は鉢状の器形。外面にタタキ目を持ち、内面はヘラケズリ。87～89の甕類と共通する調整を持つ。

黒色土器椀 (92・93) どちらもA類。92は丸みを持って開く体部で、方形の高台を貼付する。内面ヘラミガキ。外底部には板状圧痕がある。口径14.9cm, 底径8.0cm, 器高6.3cm。93の口縁端部は肥厚して外反する。内外面にヘラミガキ。また外面に黒斑あり。

黒色土器甕 (94) A類の小型の甕。内面には横位のヘラミガキ。外面は淡茶色で、煤が付着する。口径13.1cm。

〈95～104：中層・粗砂層出土資料〉

須恵器蓋 (95・96) 撮みを有する。95は口縁端部を嘴状に鋭く折り曲げ、96の端部は丸く肥厚する。どちらも外天井部をヘラケズリする。96は口径17.6cm, 器高2.2cm。

須恵器坏 (97) 直線的に体部が開く。外底部端には方形の高台を貼付する。外底部はヘラ切り。

須恵器皿 (98) 丸みを持った体部から肥厚して口縁部に至る。外底部は丁寧なヘラ切り。口径21.2cm, 器高3.4cm。

須恵器高坏 (99) 小型品で、坏部は大きく開いてそのまま口縁端部に至る。脚部下位から裾部を欠損する。坏部の口径16.4cm。

須恵器甕 (100) 直立する体部から平坦な口縁端部へ至る。口縁外面に沈線を2条巡らす。復元口径29.0cm。

土師器蓋 (101) やや突起したボタン状の撮みを持ち、口縁端部を折り曲げて外面に段を有する。外天井部は回転ヘラケズリ。口径26.7cm。器高3.4cm。

土師器盤 (102) 直線的に体部が立ち上る。内外面はヘラミガキ。外底部は回転ヘラケズリ。口径24.5cm, 器高4.5cm。

土師器皿 (103) 体部は大きく開き、口縁端部を肥厚させて内面を天井に向ける。やや厚みのある方形の高台を貼付する。外底部はヘラ切り。口径13.1cm, 器高2.3cm。

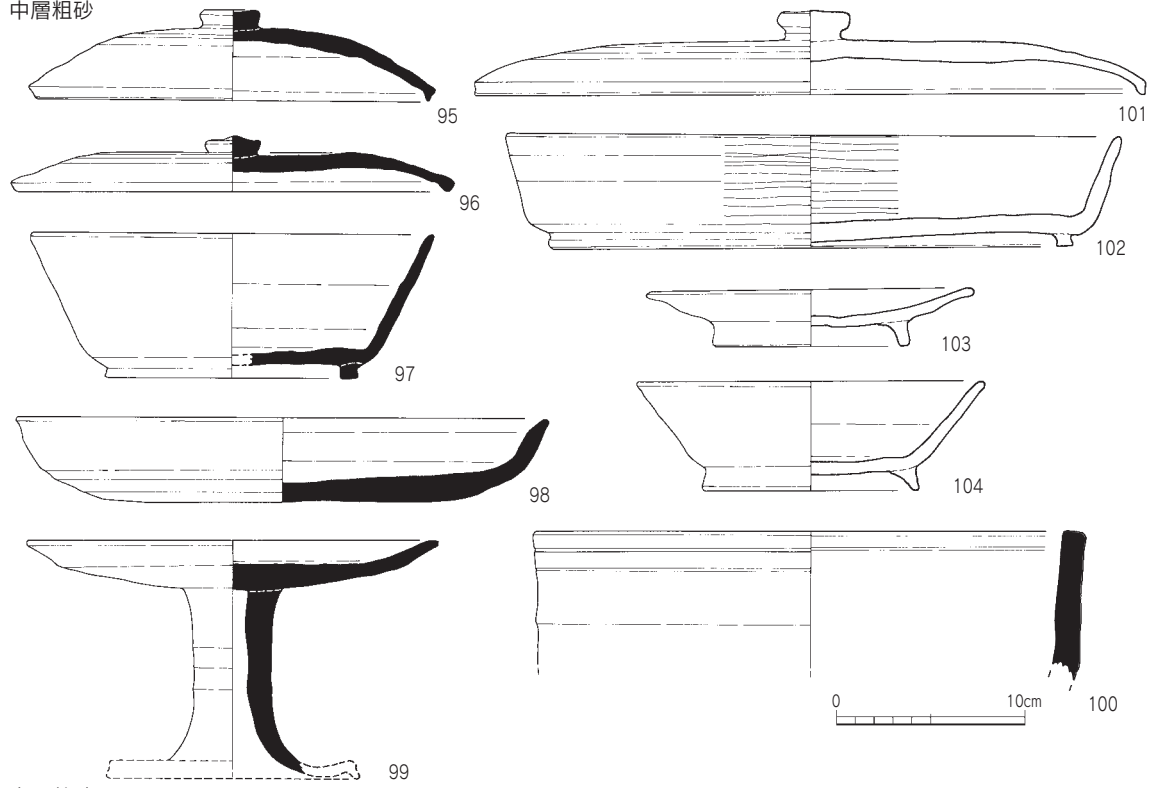
土師器椀 (104) 体部は直線的に逆ハ字形に開き、高台は外底部端に貼付し、ハ字形となる。外底部はヘラ切り後、板状圧痕。口径13.8cm, 底径8.6cm, 器高4.4cm。

〈105～116：中層・整地層出土資料〉

土師器坏 (105～109) 口径10.6～12.2cm, 器高3.1～4.5cm。体部は直線的に開き、口縁部を肥厚させるものが多い (106・108・109)。ただし、105は体部下位をロクロナデ調整によって稜を明瞭にし、一部をヘラ切りする。外底部の調整はいずれもヘラ切りで、一部には板状圧痕がある (106・108・109)。

土師器椀 (110～112) いずれも体部は直線的に開く。口径13.0～15.3cm, 底径7.3～8.1cm, 器高4.7～5.9cm。112の高台は高く、ハ字形に開いて端部は僅かに踏ん張る。また、体部下位に煤が付着。111・112の外底部はヘラ切り。

中層粗砂



中層整地

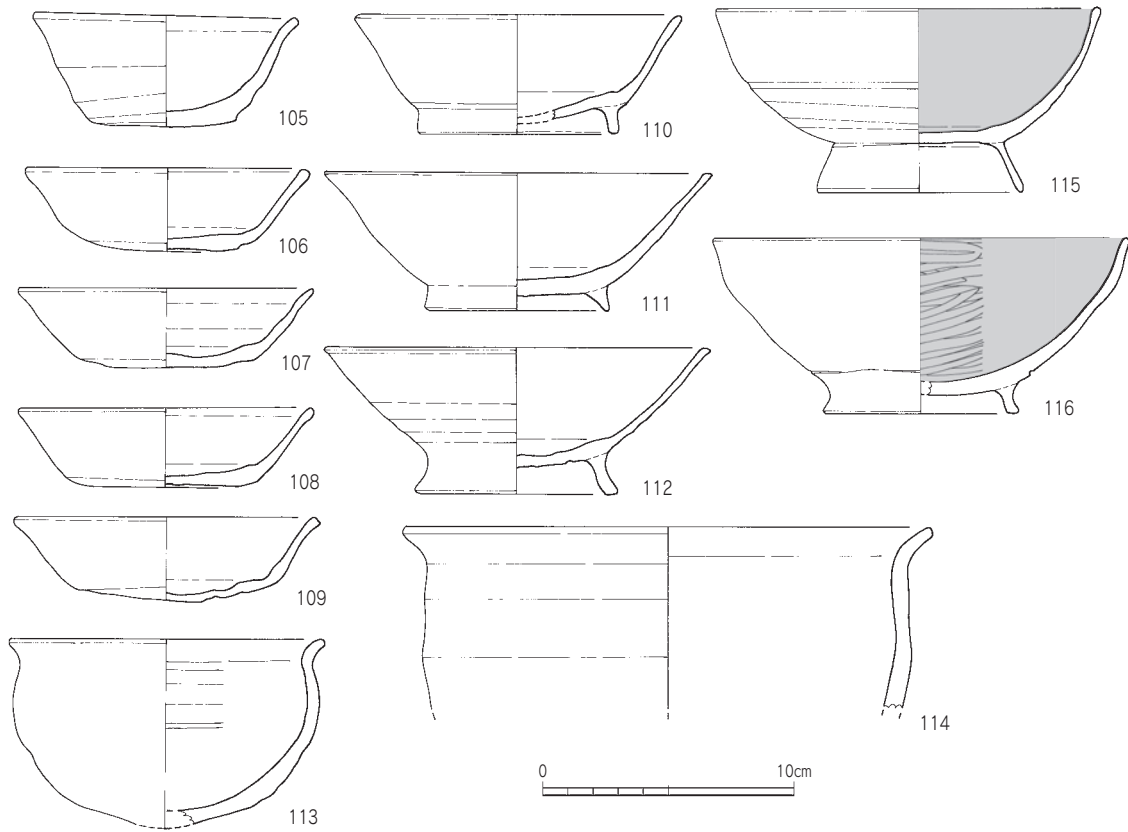


Fig.35 境界溝出土土器実測図 (8) 14次補SD320 (1/3・1/4)

土師器甕 (113・114) 113の体部は球形となり、短い口縁部は外反する。内面にケズリ痕跡あり。口径12.6cm。直立する体部を持ち、短い口縁部を僅かに外反させる。内外面ともにヨコナデ。外面に煤が付着。復元口径21.0cm。

黒色土器椀 (115・116) どちらもA類。115の高台は高くハ字形に開く。体部内面の調整は磨滅により不明。外底部に板状圧痕あり。116は底部径が比較的小さく、方形でハ字形に開く高台を貼付する。体部内面は横位の丁寧なヘラミガキ、外面は横位ナデ。口径16.6cm、底径7.8cm、器高7.0cm。

〈117～127：上層・炭層出土資料〉

土師器坏 (117～123) 口径11.2～11.8cm、器高2.1～3.5cm。117～119の体部は大きく開いて口縁端部が肥厚する。外底部はヘラ切り。121は丸底で、120もやや丸底気味となる。外底部はヘラ切り後、板状圧痕。122・123はどちらも器高は低く、体部下位に僅かに丸みを帯びる。外底部は122がヘラ切り、123は板状圧痕あり。

土師器椀 (124・125) 124の体部が直線的に開くのに対し、125の口縁部は丸みを持って外反する。124は口径13.0cm、底径6.9cm、器高5.0cm。外底部はヘラ切り。125は外底部に板状圧痕あり。

土師器甕 (126・127) 126は球形の胴部が特徴的で、短い口縁部が外反する。外面に煤付着。口径13.8cm。127は口縁部から体部上位までヨコナデ、体部下位に平行タタキ目を持つ。外面に煤付着。復元口径20.3cm。

〈128～140：上層・粘質土出土資料〉

土師器皿 (128・129) 128は外底部に板状圧痕あり。口径11.6cm、器高1.2cm。129は高台付皿。坏部の形態は128に似る。高台は直線的に開いて端部を細く仕上げる。口径12.6cm、器高1.2cm。

土師器坏 (130～134) 口径10.6～11.2cm、器高2.2～2.6cmと法量的にもまとまりを持つ。外底部はいずれもヘラ切り後に板状圧痕あり。

土師器椀 (135～138) いずれも体部は下位に丸みを持って立ち上がるが、136・137は口縁端部を外反させる。高台は方形を基本として僅かに開くものが多いが、137は高くシャープでハ字形に開き、ナデによって外面には段を有する。外底部の調整は137がヘラ切りの他は、板状圧痕あり。138は口径12.4cm、底径7.2cm、器高4.4cm。137は口径14.7cm、底径7.8cm、器高5.6cm。

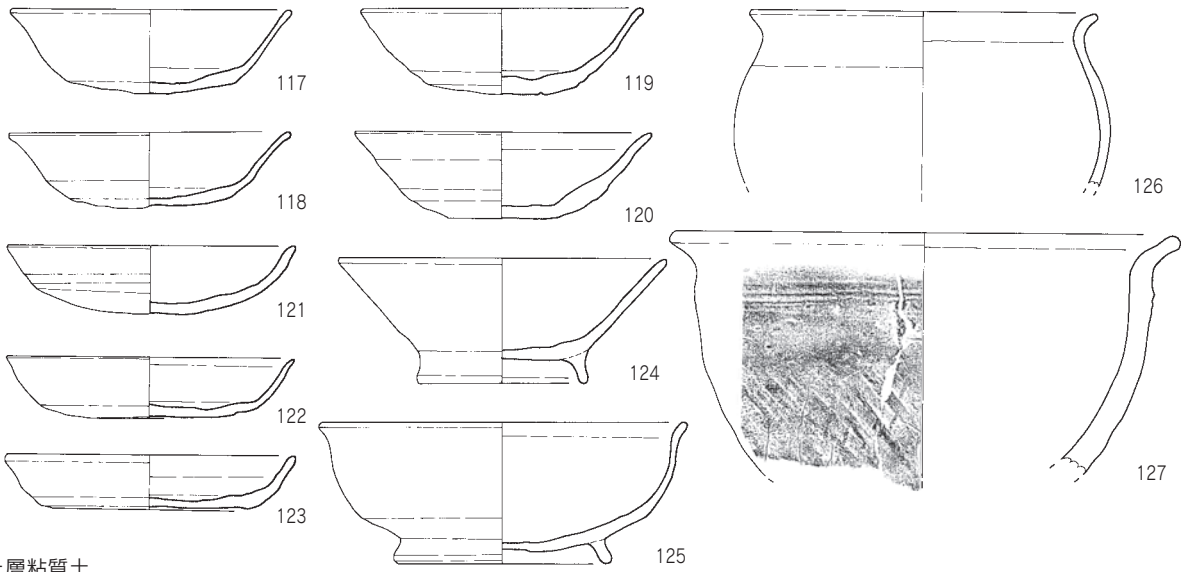
土師器甕 (139) 球形の体部から頸部で内傾して、短い口縁部が肥厚して外反する。口縁部から体部中位までの外面はナデ、中位以下は格子のタタキ目。内面体部上半をハケ目状のケズリ、下半をヘラケズリ。外面に煤、内面に炭化物がそれぞれ付着。復元口径21.8cm。

黒色土器椀 (140) B類椀。丸みを有する体部を持ち、口縁端部を僅かに外反させる。高台は低くややハ字形気味で、外面は沈線を巡らす。内外面丁寧なヘラミガキ。外底部には板状圧痕あり。口径16.4cm、底径8.6cm、器高6.4cm。

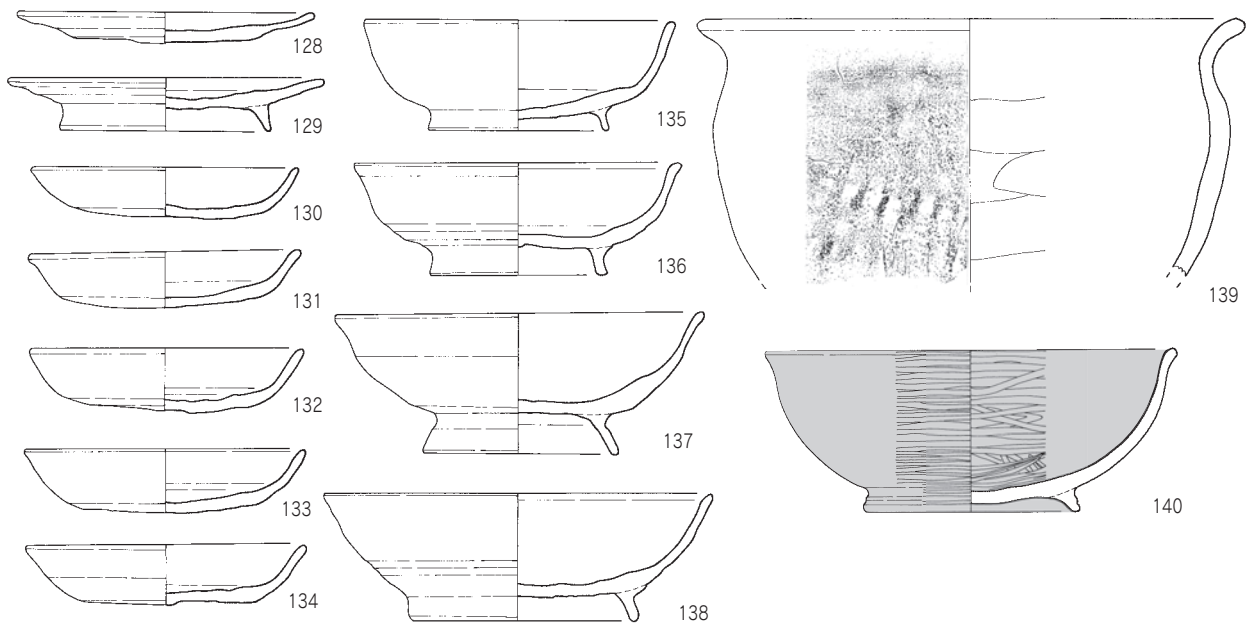
〈141：上層・粘土出土資料〉

須恵器鉢 (141) 体部は丸みを持って大きく開き、口縁部内面を僅かに突出させる。外面にはカキ目。復元口径26.4cm。

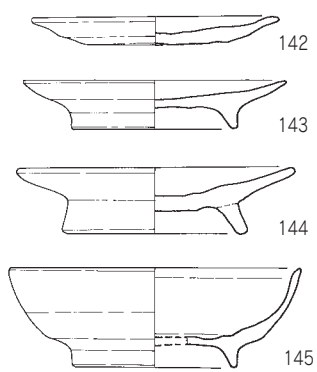
上層炭層



上層粘質土



上層砂



上層粘土

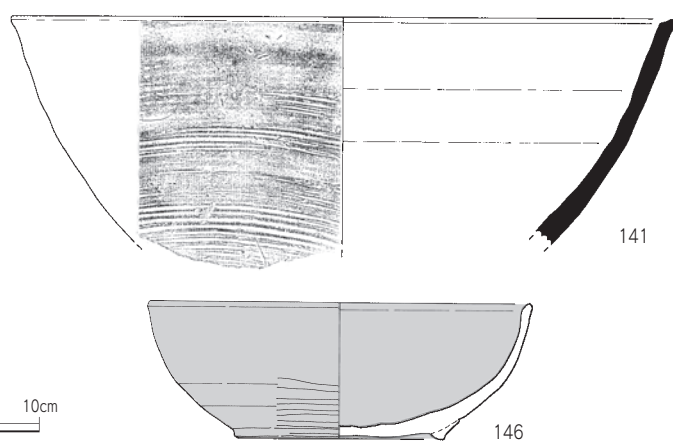


Fig.36 境界溝出土土器実測図 (9) 14次補SD320 (1/3)

〈142～146：上層・砂層出土資料〉

土師器皿（142～144） 142は肥厚する底部から体部が細くなりながら口縁へ至る。調整は磨滅により不明。143・144は高台付皿。143は磨滅著しく調整不明。144の高台は太く大きくハ字形に開く。外底部はヘラ切り。口径11.1cm，底径7.3cm，器高2.65cm。

土師器椀（145） 小型品で内外面は磨滅するが，口縁外面に黒斑あり。

黒色土器椀（146） B類椀。体部下位を回転ヘラケズリして稜を明瞭にする。口縁端部は僅かに肥厚する。低い断面三角の高台を外底部端に貼付する。器面は磨滅しているが，外面に僅かにヘラミガキが残る。口径15.3cm，底径8.4cm，器高5.4cm。

76次調査・104・110次調査資料 (Fig.37～40)

〈1～35：最下層・砂層出土資料〉

須恵器蓋（1～12） いずれも撮みを有する。円柱状で中央を窪ませるものが多い。口径は11.9～14.1cm，15.2～16.8cm，18.0～22.9cmと大きく3つに分かれる。口縁端部を肥厚させて丸くするもの（1・3），折り返して外面に段を有するもの（2・5・9・11），端部を肥厚させて折り返すもの（8），僅かに折り返すもの（4・6・7・10・12）などがある。外天井部はいずれもヘラケズリ。

須恵器坏（13・14） いずれも体部は直線的に開く。13は外底部端に踏ん張る高台を貼付する。14の高台は低く外反する。14の外底部はヘラ切り。復元口径13.5cm，底径8.2cm，器高4.4cm。

須恵器皿（15・16） 15の体部は細く外反する。外底部はヘラ切り後，ナデ。16は短い体部が肥厚する。外底部はヘラ切り。口径14.5cm，器高2.6cm。

須恵器盤（17） 体部は丸みを持って立ち上がり，口縁端部を平坦に納める。外底部はヘラ切り。口径46.5cm，器高6.9cm。

須恵器鉢（18・19） 18の口縁端部は僅かに内傾して沈線を巡らす。体部下位はケズリ。口径29.7cm。19は直線的に立ち上がり口縁部を平坦にする。体部下位は回転ヘラケズリ。復元口径27.0cm。

須恵器壺（20） 小型壺で，口縁部は短く丸みを持って外反する。復元口径14.0cm。須恵質土器の可能性もある。

土師器蓋（21） 口縁端部を丸く肥厚させ，内面に身受けの段を有する。外天井部は回転ヘラケズリで，その後内外面ともにヘラミガキ。口径22.7cm，器高4.0cm。

土師器椀（22・23） 22は体部の器壁を一定にしてやや外湾する。高台は方形で僅かに踏ん張る。外底部はヘラ切りで，ヘラ書きあり。口径13.5cm，底径7.2cm，器高5.7cm。23は外底部端に方形の低い高台を貼付する。外底部はヘラケズリで簾状のヘラ書きがある。

土師器皿（24） 口縁部を僅かに肥厚させる。体部内外面は回転ヘラミガキ。外底部は回転ヘラケズリ。口径15.0cm，器高2.2cm。

土師器坏（25～30） 25～27は口径11.8～12.4cm，器高3.1～3.8cm。体部は27を除いて器壁をほぼ一定にして口縁部へ至る。25は内面に油煙が付着，26は内外面に煤付着。28～30は径の小さい底部に対して口径が大きい。外底部はいずれも回転ヘラケズリ。28は内外面に横位のヘラミガキ。29は器面が磨滅して調整不明。30は体部下位を回転ヘラケズリ。磨滅

最下砂

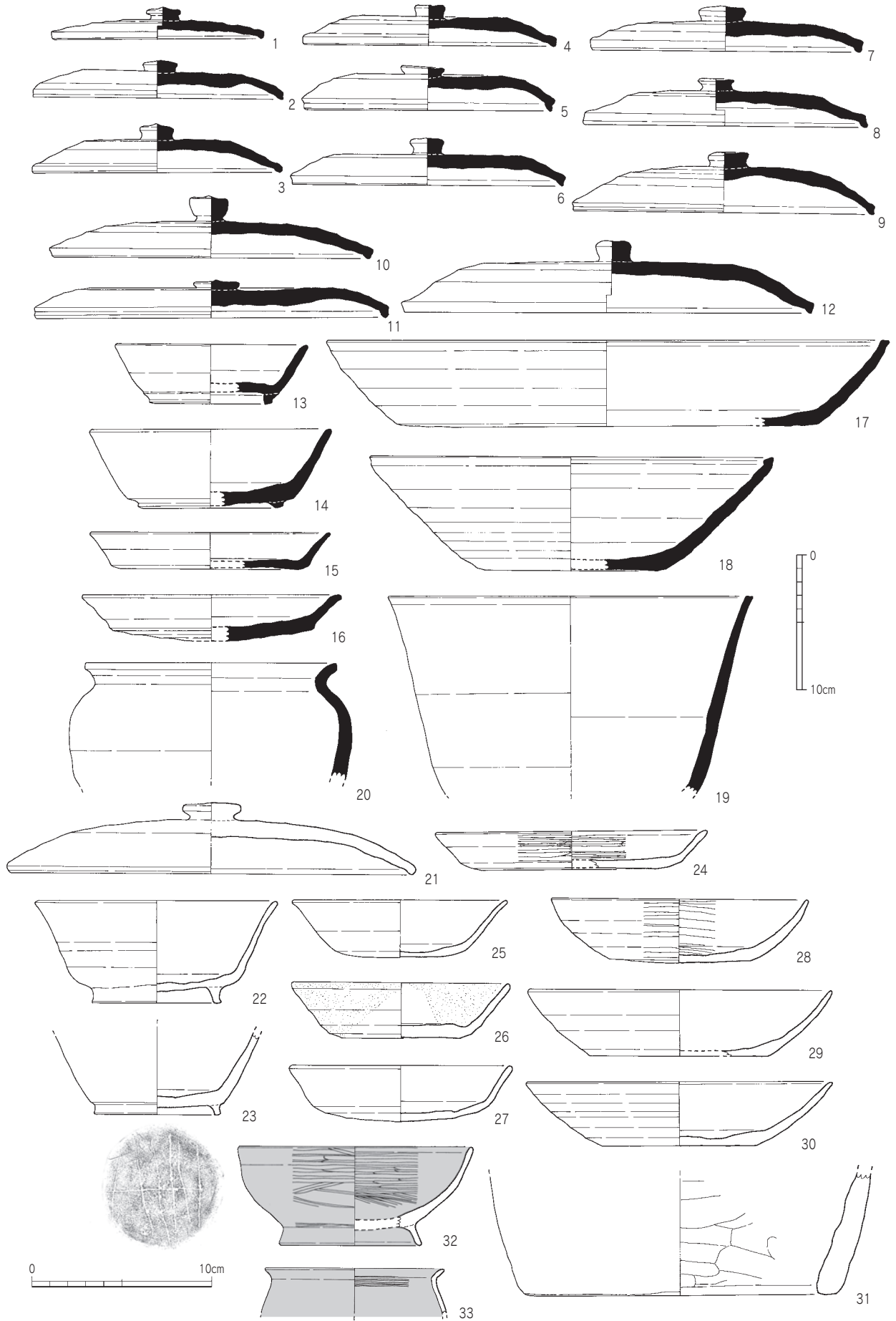


Fig.37 境界溝出土土器実測図 (10) 76次SD320 (1/3・1/4)

して単位を把握できないが、内外面ミガキ。口径17.0cm、底径8.4cm、器高3.6cm。

土師器甕(31) 土師質で鉢状の器形をとるが、土管状になるため甕等の用途が考えられる。下端部は横位のナデで仕上げるが、指頭圧痕を残す。底径13.0cm。

黒色土器椀(32) B類椀。体部は丸みを持って開き、口縁部が僅かに肥厚する。高台部は細く鋭くハ字形に開く。内外面には丁寧なミガキ。復元口径13.2cm。

黒色土器壺(33) B類小型壺。口縁部が僅かに外反する。器壁は薄い。復元口径10.0cm。

〈34～60：下層・腐植土D層出土資料〉

須恵器蓋(34～40) 34は円柱状の撮みを持ち、天井部は平坦で体部との境がない。口縁部は垂直に折り曲げる。外面には自然釉が覆う。口径10.8cm。35～37は口径14.8～15.4cm、38～40は口径19.3～20.7cm。口縁部は、折り曲げるもの(36・39・40)、折り曲げて外面に段を有するもの(37)、肥厚して外面に段を有するもの(38)、肥厚するもの(35)がある。外天井部はいずれもヘラケズリ。

須恵器坏(41) 体部は直線的に開き、外底部端には低く踏ん張る高台を貼付する。外底部はヘラケズリ。復元口径17.6cm、底径12.4cm、器高5.0cm。

須恵器高坏(42) 口縁部を直立させ、さらに端部を内側に肥厚させて段を作る。体部外面は回転ヘラケズリ、内底部は不定方向のヘラケズリ。復元口径30.8cm。

須恵器小型壺(43) 胴部に対して径の小さい口縁部が直立する。口縁部に灰被りあり。復元口径7.0cm。

須恵器鉢(44～46) 44は口縁端部を肥厚させて平坦に仕上げる。45の体部は直線的に開き、下位外面をヘラケズリ。46は鉄鉢模倣。体部上位に器の最大径がくる。体部下位はヘラケズリ。復元口径20.6cm。

土師器坏(47～51) 47は体部の境を強いナデによって外面を高台状にみせる。外底部はヘラ切りで板状圧痕あり。口径11.7cm、底径6.8cm、器高3.2cm。48は体部がやや開き気味で、口縁部を肥厚させる。口径11.8cm、器高2.5cm。外底部はヘラケズリ。49は体部と底部の境となる屈曲部は明瞭。外底部はヘラ切り後に板状圧痕。口径12.3cm、器高3.0cm。50は成形時の歪みが大きく、外底部中央が大きく突出する。外底部はヘラ切り後、板状圧痕。51は体部下位と外底部は回転ヘラケズリ。体部内外面には横位の丁寧なヘラミガキ。復元口径16.6cm、底径7.6cm、器高4.0cm。

土師器椀(52～55) 52・53の体部は、ロクロ調整による稜が明瞭で大きく開き、口縁端部を肥厚させる。外底部端には高台を貼付するが、53の端部は細くやや開き気味となる。52がヘラケズリ、53はヘラ切り。54は端部が僅かに肥厚する高い高台を貼付する。高台高は8.8cm。55は底部から体部にかけて煤が付着している。

土師器甕(56) 口縁部は緩やかに開く。内面頸部下位はヘラケズリ。復元口径29.6cm。

黒色土器椀(57・58) A類椀でどちらも体部は丸みを持つ。57は口縁部が僅かに外反し、低くハ字形に開く高台を貼付する。内外面ともに丁寧なミガキだが、内面は多方向である。58は口径13.4cm、底径6.8cm、器高5.0cm。

〈59～61：下層・腐植土D層に貫流した砂層堆積層出土資料〉

須恵器蓋(59) 天井部に円柱状の撮みを持つ。口縁端部を折り曲げる。口径6.4cm。

76次 腐植土D

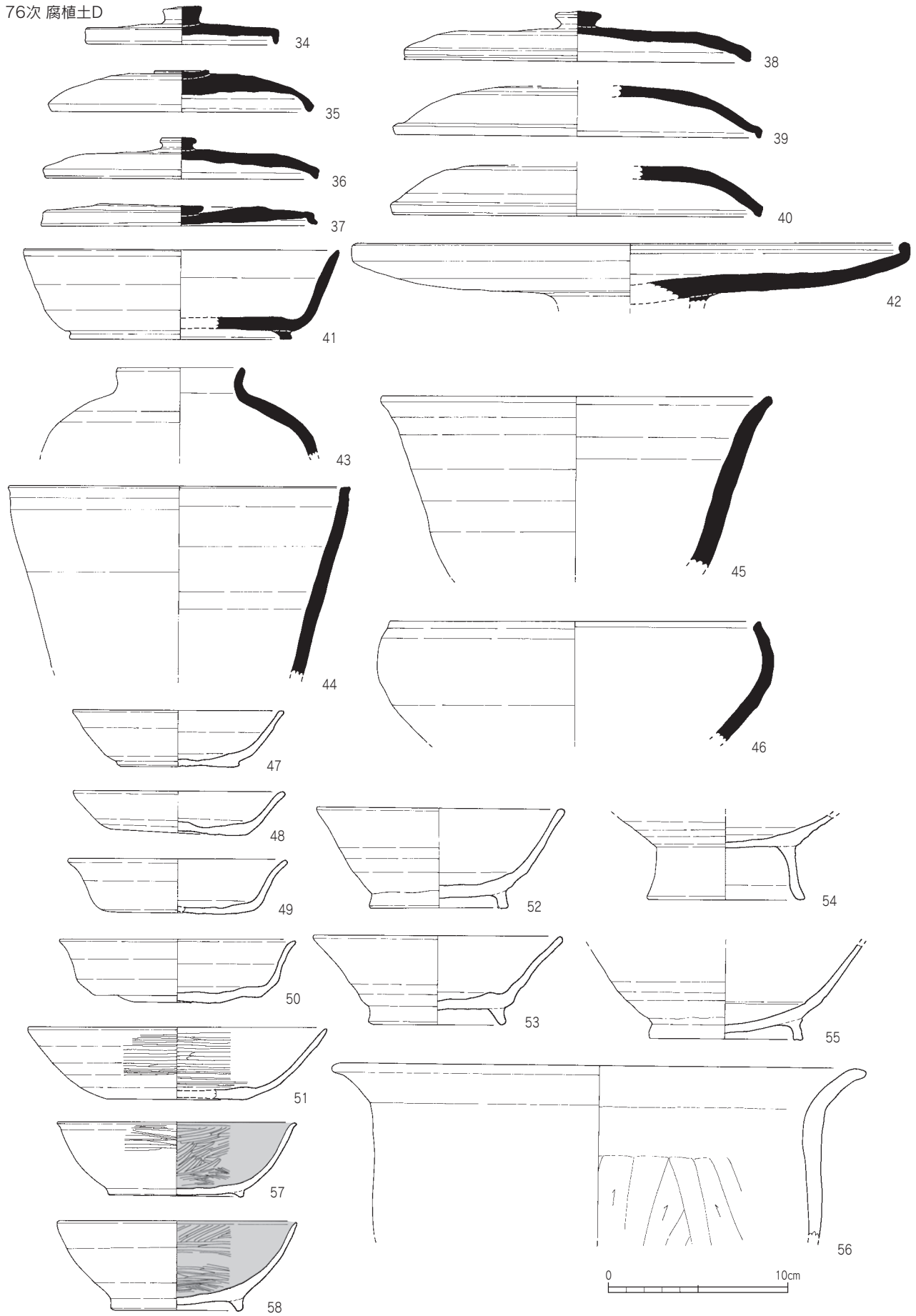


Fig.38 境界溝出土土器実測図 (11) 76次SD320 (1/3)

須恵器盤(60) 体部下位をヘラケズリして屈折する稜を明瞭にする。体部は直線的に開く。外底部はヘラケズリ。口径23.8cm, 底径17.5cm, 器高4.0cm。

土師器坏(61) 体部は直線的に開く。外底部はヘラ切り。口径11.4cm。

〈62～66：下層腐植土(腐植土D上層)出土資料〉

須恵器鉢(62) 口縁端部を平坦にする。復元口径16.0cm。

土師器坏(63) 体部は大きく開き、底部は中央が沈む。外底部はヘラ切り。口径11.6cm, 器高3.7cm。

土師器皿(64) 体部は大きく開き、口縁端部は肥厚する。焼成は軟質。外底部はヘラ切り。

土師器甕(65) 口縁部は外反して、端部が肥厚する。頸部下位はケズリ。外面に煤付着。復元口径23.6cm。

黒色土器甕(66) A類の甕。把手は外面ナデで、上部へ大きく伸びて端部付近を屈折させる。内面は丁寧なミガキ。

〈67～69：下層・暗灰色砂礫層(下層堆積最上部)出土資料〉

須恵器坏(67) 小型品。体部は丸くそのまま口縁端部へ至る。高台は大きくハ字形に開いて端部を細くする。外底部はヘラ切り後板状圧痕。口径10.6cm, 底径6.5cm, 器高3.2cm。

土師器坏(68・69) 口径11.5～12.5cm, 器高3.3～3.9cm。68はナデによって稜を明瞭にし、口縁端部は肥厚して大きく外反する。外底部はヘラケズリ。69の外底部はヘラ切りで、中央部には板状圧痕あり。

〈70～76：上層・腐植土層出土資料〉

須恵器坏(70) 直線的に体部が開き、中位に沈線を巡らす。外底部はヘラ切り。口径13.2cm, 底径9.6cm, 器高4.1cm。

土師器坏(71～74) 口径11.2～12.0cm, 器高2.6～3.9cmである。71～73の体部は逆ハ字形に開くが、74は口縁端部が肥厚し外反する。外底部は74がヘラケズリの他はヘラ切り。

土師器椀(75・76) 75の体部は直線的に開き、細く直立する高台を外底部端に貼付する。また、底部中央は大きく沈む。外底部はヘラ切り。口径12.0cm, 底径7.8cm, 器高4.3cm。76の外底部はヘラ切り。

〈77～82：上層・腐植土A層出土資料〉

須恵器甕(77) 比較的長い口縁部は大きくハ字形に開く。外面体部はタタキ、内面頸部下位はケズリ。復元口径20.0cm。

須恵質土器鉢(78) 体部が直線的に開き、口縁端部は肥厚する。内外面ともにナデ。

土師器皿(79) 高台付皿で、体部の器壁は厚く大きく開き、皿部は浅い。高台はややハ字形に開き、ナデによって体部との境を不明瞭にする。口径12.1cm, 器高2.9cm。

土師器椀(80・81) 80の体部は丸みを持って開き、口縁部が僅かに外反する。方形の高台は端部が僅かに肥厚して直立する。外底部はヘラ切り後、板状圧痕。81は大型品で器壁は全体に薄い。高台は細くハ字形に開き、端部は丁寧なナデ。外底部はヘラ切りで板状圧痕あり。口径20.0cm, 底径9.8cm, 器高9.7cm。

黒色土器椀(82) A類椀。方形の高台は端部を丁寧に仕上げる。底は中央部を少し窪ませる。内面は丁寧なミガキ。口径14.6cm, 器高8.4cm, 器高6.2cm。

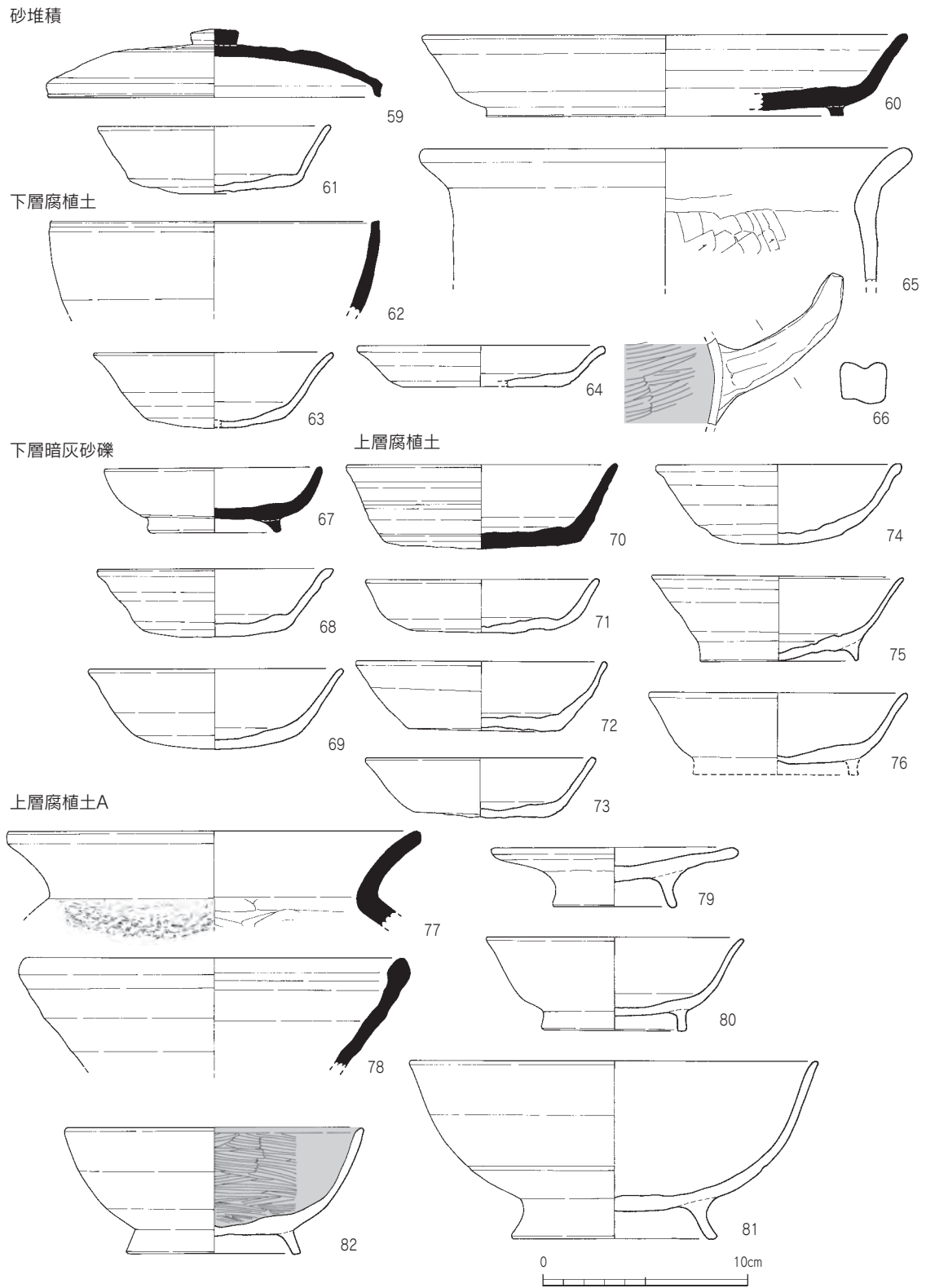


Fig.39 境界溝出土土器実測図 (12) 76次SD320 (1/3)

〈83～92：上層・灰色砂礫層出土資料〉

内面に墨 須恵器壺 (83) 体部外面は工具によるナデ。内面はナデだが、墨が全面に付着している。
外底部は糸切り。復元底径8.6cm。

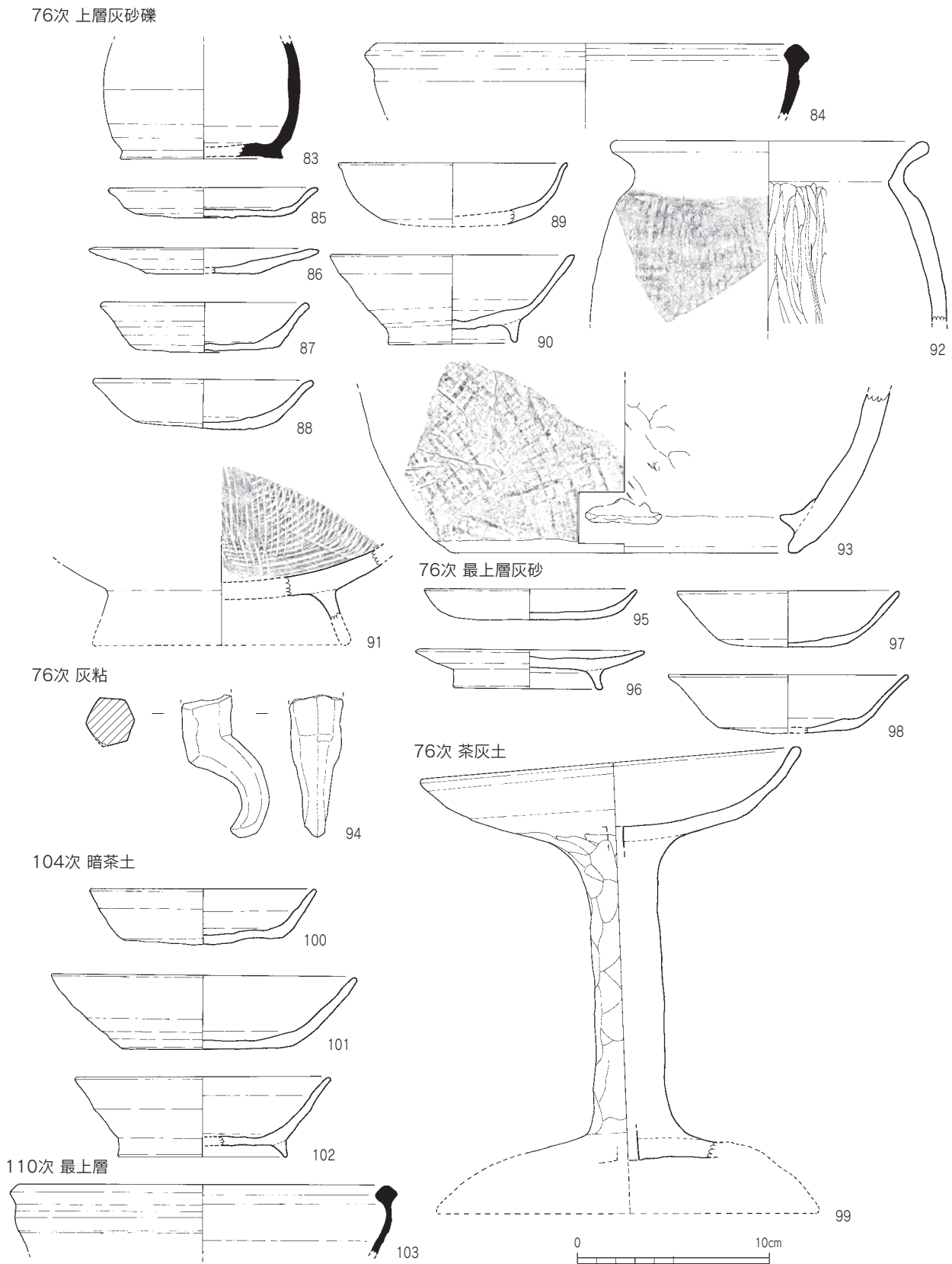


Fig.40 境界溝出土土器実測図 (13) 76・104・110次SD320 (1/3)

須恵質土器鉢 (84) 口縁部を丸く肥厚させる。体部内外面はナデ。復元口径22.0cm。

土師器皿 (85・86) 85は端部を肥厚させて外反する。外底部に板状圧痕あり。口径10.8cm, 器高1.5cm。86の体部は大きく開き, 口縁部を肥厚させる。外底部はヘラ切り後, 板状圧痕。口径12.0cm, 器高1.3cm。

土師器坏 (87~89) 87・88は口径10.9~11.5cm, 器高2.5・2.6cm。どちらも体部が直線的に開いて口縁部を肥厚させる。外底部はヘラ切り後, 板状圧痕。89の体部は丸みを帯びて口縁部が僅かに外反する。底部を欠損するが, おそらく丸底坏であろう。外底部はヘラ切りか。口径11.8cm。

土師器椀 (90・91) 90の体部は直線的に開き, 口縁部を肥厚させる。高台は直立する。底部中央は窪んでいる。外底部はヘラ切り後, 板状圧痕。口径12.8cm, 底径6.8cm, 器高4.5cm。91は大型品で, 高台部下位を欠損する。内底部には斜位に交差する櫛目状の施文がある。

土師器甕 (92) 肥厚する体部器壁に対して頸部から口縁部は細くなり, 端部で肥厚させる。体部外面は平行のタタキ目, 内面は縦位のヘラケズリ。復元口径16.6cm。

土師器甌 (93) 底部は内傾し, 内面には支えの突起物を貼付する。外面はタタキ目, 内面はナデで指頭圧痕を残す。端部は横位のナデ。

〈94：灰色粘土層出土資料〉

土師器脚 (94) 土師質でヘラケズリによって端部を多面体に面取りする。大型の火舎など脚部の可能性も考えられる。

〈95~98：最上層・灰色砂層出土資料〉

土師器皿 (95・96) 95は体部下位に丸みを持つ。外底部は板状圧痕。復元口径11.0cm, 器高1.5cm。96は高台付皿。体部は短く, 高台部はやや開き気味となる。磨滅により器面調整は不明。口径12.0cm, 器高2.0cm。

土師器坏 (97・98) 97は体部中位の器壁が薄く, 口縁部を肥厚させる。外底部の調整はヘラ切り。復元口径11.6cm, 器高3.0cm。98は体部の器壁が底部に比して著しく薄い。外底部の調整はヘラ切り。

〈99：茶灰色土（溝最上層埋没に関わる）出土資料〉

土師器高坏 (99) 坏部は大きく内湾し, 口縁端部を僅かに肥厚させる。脚部は指頭圧痕によるナデ。裾部を欠損する。口径20.0cm, 残高21.0cm。

104次調査資料 (Fig.40)

〈100~102：暗茶灰色土出土資料〉

土師器坏 (100・101) 100は口径11.8cm, 底径8.3cm, 器高11.8cm。外底部はヘラ切り後に板状圧痕。101の体部は大きく内湾する。磨滅のため調整不明。外底部はヘラ切り。

土師器椀 (102) 体部は直線的に開く。高台は端部を細くして直立する。外底部の調整は不明。口径13.4cm, 底径8.8cm, 器高4.2cm。

110次調査資料 (Fig.40)

〈103：溝埋没の最上層出土資料〉

須恵質鉢 (103) 口縁端部を肥厚させる。体部内外面は回転ヨコナデ。復元口径19.0cm。76次灰色砂礫層出土資料と同型式。

S D 320出土陶磁器 (Fig.41・42)

灰釉陶器碗 (2・6) 2は底部の小破片であるが、体部が立ち上がりをみせることから碗とした。高台端部はシャープである。外面には淡緑色の釉が掛かるが、内面は無釉。高台径は8.4cmに復元した。76次腐植土Dの出土。6は平底の底部破片で、口縁部を欠くが碗とした。内底面には灰被り状に緑色の釉が掛かる。外面ケズリ後ナデ、内面ナデで、底部切り離しは糸切りによる。復元高台径10.0cmを測る。76次最下層砂中の出土。

灰釉陶器皿 (1・3～5) 1は口縁部から底部にかけての小破片で、口縁端部は小さく突出する。高台端部は爪先立つ。体部内面から外面の下半部にかけては淡緑色の釉を施す。また、内底面には重ね焼き時の釉溜がみられる。3～5は底部破片で、いずれも口縁部を欠く。高台は3が内窪み、4は低め、5は高めのもの。3の外面はナデにより、高台内には糸切り痕がみられる。釉葉は緑灰色を呈し、内面のみ施釉している。4の外面はケズリ後ナデによる。釉葉は淡緑色を呈し、外面は無釉。5の釉葉は淡緑色を呈し、内底面と体部下半は無釉であるが、外面には釉垂れがみられる。高台径は3が6.2cm、4が9.6cm、5が8.2cmに復元した。1は14次暗褐砂、3は76次砂礫層、4は14次補足上層砂、5は76次腐植土Dの出土である。

灰釉陶器壺 (7) 頸部の小破片で、内外面ともナデ調整による。また、内面にはヘラ沈線を3条施している。内外面とも淡緑色の釉掛り。76次暗灰砂質土の出土。

緑釉陶器碗 (8～21) 8～12は口縁部小片で、8・9・12の口唇部は外方に突出する。10・11の口唇部は丸く納める。いずれも調整はナデを基調とするが、10は横方向のヘラミガキによる。釉葉は8が濃緑色、9は緑色、10は緑黄色、11・12は緑灰色を呈する。また、8の口縁端部は口壳を呈する。13・14は体部外面の下半部にヘラケズリによる稜を有する所謂稜碗で、内面にも段を有する。13は内外面ともヘラミガキにより、14はナデによる。釉葉は13が淡緑色を呈し、瓦質風に焼き上がっている。14は濃緑色を呈する。14は器高5.6cm、口径17.6cm、高台径8.0cmを測る。15の口縁部と底部は接合しないが、色調・胎土から同一個体として実測した。口縁端部は外方に小さく突出する。底部にはやや太目の高台を貼付し、内底面にはヘラ先による曲線状の文様を描く。黄灰色の胎に濃緑色の釉掛り。16～20は底部破片で、いずれも高台は低めのものである。16・18・19の外面はミガキ調整により、17はケズリ後ナデている。また、17・18・20は糸切りによる。釉葉は16が濃灰緑色、17・18・20は濃緑色、19は淡緑色を呈し、17は畳付から高台内にかけて無釉。21は体部破片で、内面ミガキ、外面ナデによる。内面のみ釉葉を施した珍しいもので、釉葉は緑色を呈する。

8は14次黒色砂、9は14次補足上層炭層、10・16は76次最下層砂、11・19は76次腐植土、12は76次腐植土D、13は同腐植土下層、14は14次腐植土、15は口縁部が14次暗黄灰土で、底部は14次黒色砂の出土。17は76次腐植土A最上層、18は14次補足中層黒粘土、19・21は14次補足上層粘質土の出土である。

緑釉陶器皿 (22～28) 22は口縁部の小破片で、端部は丸く納める。23～28は底部破片であるが、体部の立ち上がり弱いことから皿とした。高台は23が内窪み、24～27は低めのもの、28は細く高めのもので、いずれも削り出しによる。27・28の高台端部はシャープである。器面調整は23・25・26がナデ、24・27・28はミガキにより、釉葉は23が明緑色、24・27は暗緑色、25は黒緑色、26は緑灰色、28は濃緑灰色を呈し、24～26・28の高台内は無釉で

稜 碗

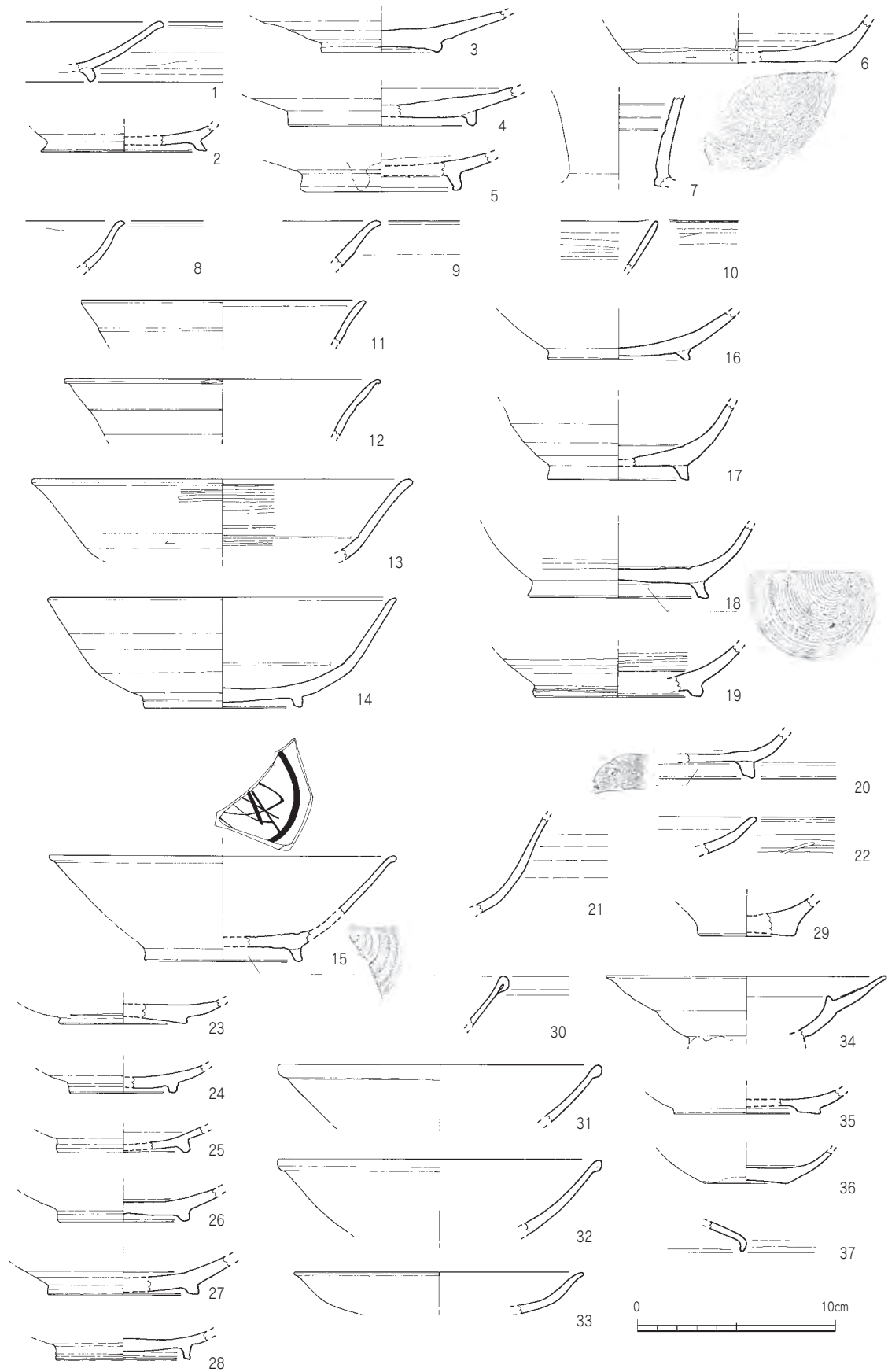


Fig.41 境界溝出土土器実測図 (14) SD320陶磁器類 (1/3)

ある。高台径は23が6.4cm, 26が6.6cm, 28が6.8cmに復元した。

22は14次補足中層粗砂, 23は76次(土層不明), 24・25は76次腐植土, 26は76次暗灰砂礫, 27は14次補足中層黒粘, 28は14次黒色砂の出土。

緑釉陶器壺(29) 平底の底部破片で, 小壺あるいは花瓶になるか。釉薬は緑色を呈し, 外底部は無釉で, 糸切りによる。復元底径は5.0cmを測る。76次灰色砂礫の出土。

白磁碗(30~32) I類の白磁碗で, 30~32は玉縁状の口縁を呈する。30は折り曲げて玉縁としたもの。31・32の玉縁は小さめである。胎土は30が乳白色を呈し, 31・32は灰白色で, 釉薬も灰味を帯びる。口径は31・32が16.4cmに復元した。30・31が14次補足中層黒粘, 32は76次腐植土Dの出土である。

白磁皿(33・35・36) 33は口縁部破片で, 内湾気味に立ち上がる。口縁端部は外方に小さく突出し, 口唇部はシャープである。胎土は灰白色を呈し, 釉薬も灰味がかかる。I類とすべきか。35はII類の底部破片で, 高台は低く幅広のもの。胎土は青みを帯びた灰色を呈し, 釉薬はやや黄味がかかる。畳付は釉剥ぎ。36はVI-1b類の皿で, 口縁部を欠く。内底面には沈線状の段を有し, 体部との境としている。胎土は灰色を呈し, 釉薬は黄味を帯び, 細かい貫入がみられる。下半部から底部外面にかけては無釉。何れも76次調査出土品で, 33は腐植土D最下砂, 35は灰色砂礫, 36は灰白砂粘の出土である。

白磁托(34) 丸みを帯びた体部から口縁部が大きく開き, 体部内面には削り出しによる断面三角形の低い突帯を施す。胎土は灰味を帯びた乳白色を呈し, 釉薬はやや灰味がかかる。口径は14.2cmに復元した。76次腐植土D上層から出土した。

白磁合子蓋(37) 口縁部の小破片で, 端部は鉤状に屈曲する。胎土は乳白色を呈し, 釉薬は透明釉で, 口唇部外面の釉薬を剥ぎ取っている。76次下層腐植土の出土。

越州窯系青磁碗(38~52) 38・39の底部は蛇ノ目高台を呈するI-1a類で, 39は底部の破片。38は体部が直線的に開き, 口縁端部を丸く納める。釉薬は38がオリーブ色を呈し, 39は緑色を呈する。また, 39の外面には釉垂れがみられ, 内底部には現状で5ヶ所に重ね焼きの目跡が付く。38は器高4.6cm, 口径14.2cm, 高台径5.3cmを測る。

40・42の底部はI-2類の輪状高台であるが, 低めの高台である。釉薬はオリーブ色を呈し, 内底面に7ヶ所程の重ね焼きの目跡が付く。42は口縁部内外面に釉垂れがみられ, 発色は悪い。40は器高5.8cm, 口径15.6cm, 高台径6.0cmで, 42は器高6.9cm, 口径16.6cm, 底径5.8cmに復元した。

41・43・44の底部はII-1類の輪状高台であるが, 高台は低い。41の釉薬は淡緑色を呈するが発色が悪く, 内底面及び外面下半部はさらに悪い。下半部は露胎で, 内底面及び畳付には重ね焼きの目跡が7ヶ所付く。43・44の釉薬はさらに悪く, 灰白色を呈し, 釉薬が剥落したものか素地の様な状態である。ともに内底面には現状で2ヶ所に重ね焼きの目跡が付く。41は器高5.4cm, 口径15.5cm, 高台径5.6cmを測る。45は底部破片であるが, 高台は細目で高い輪状高台で, I-3類になろう。釉薬は緑灰色を呈し, 畳付のみ釉剥ぎ。外面には釉垂れがみられ, 内底面及び畳付に重ね焼きの目跡が現状で3ヶ所みられる。

46~49は底部が上げ底の円盤状を呈するII-2b類で, 口縁端部は46・48・49が外方に小さく突出し, 47は小さい玉縁状をなす。また, 46・49は輪花を施している。釉薬は46・48

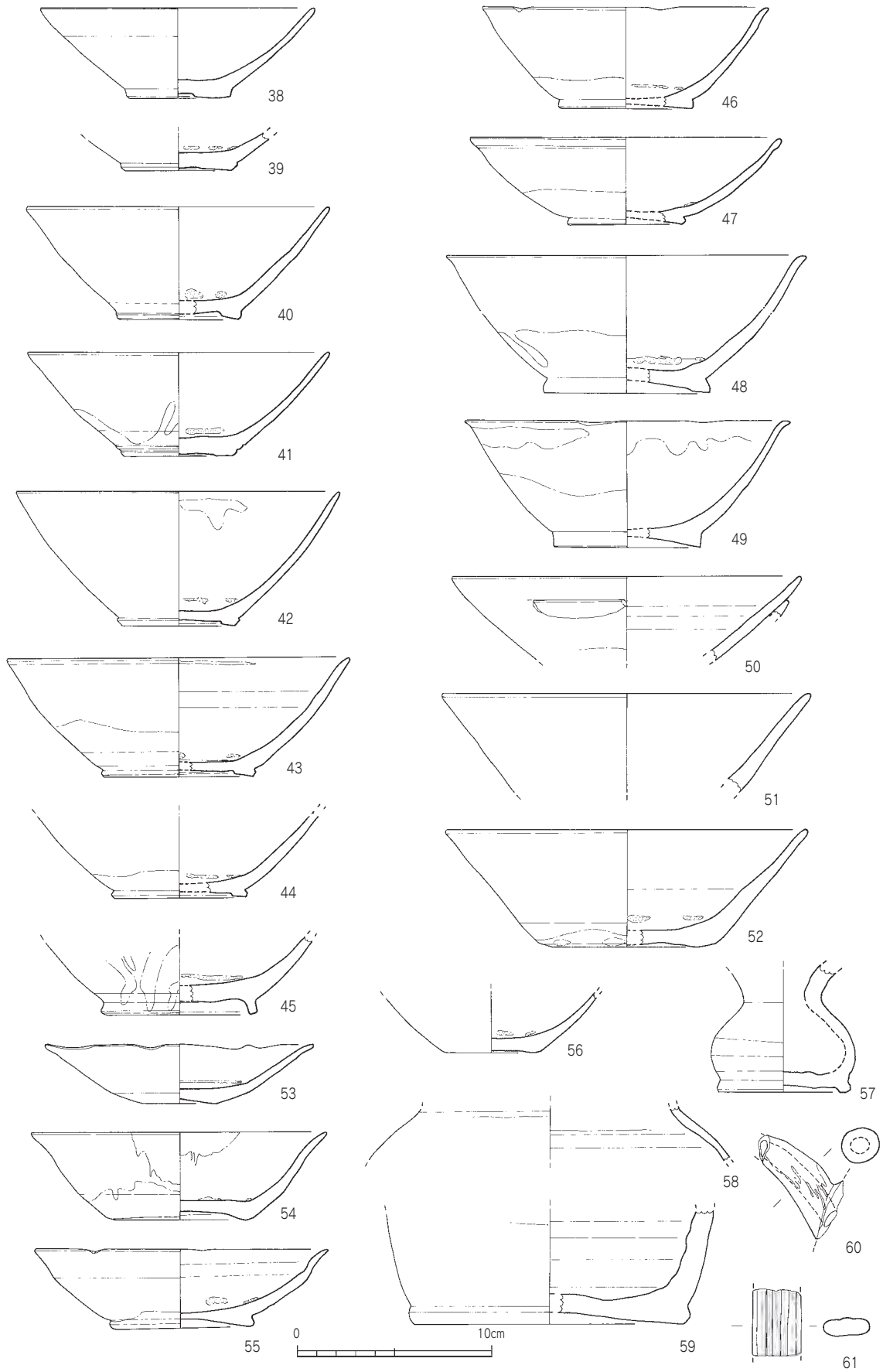


Fig.42 境界溝出土土器実測図 (15) SD320陶磁器類 (1/3)

がオリーブ灰色を呈し、47は黄緑色、49は内面から口縁部外面にかけてはオリーブ灰色、体部下半は緑灰色を呈し、口縁部内外面には釉垂れがみられる。いずれも体部下半部は露胎である。46は器高5.2cm、口径14.7cm、高台径7.0cmに復元した。

50・51は口縁部破片で、50がⅡ類、51はⅠ類。また、50は口縁部下に別個体の口縁部が溶着しており、重ね焼きの状態を示すものである。釉薬は50が淡緑色を呈するが、ほとんど剥落しており、51はオリーブ灰色を呈する。52は平底のⅡ-3類の碗である。内面ナデ、外面ヘラケズリにより、外底面は未調整。釉薬は緑灰色を呈し、発色は良好である。外底部は無釉。内底面及び体部と底部との境に重ね焼きの目跡が現状で3ヶ所みられる。

38は76次腐植土D、39・41・42・48は14次補足中層黒粘、40は14次補足中層、43は76次腐植土、44は14次補足下層砂、45は76次暗灰砂礫、46は14次補足上層炭層、47は下層腐植土と腐植土Dの中間の溝状堆積層（S13）、49は14次灰白砂から出土している。50は14次補足上層粘質土、51は14次補足整地層、52は76次下層腐植土の出土である。

越州窯系青磁坏（53～56） 53は輪花の坏であるが、突起と切込みとを交互に施しており、復元すると4個ずつとなる。底部は上げ底をなし、内底面には篋先による沈線状の段を設け体部との境としている。釉薬はオリーブ灰色を呈し、発色も良好である。器高3.0cm、口径13.8cm、底径3.6cmに復元した。54は内湾気味の体部から口縁部上方が開くもので、施釉法からⅡ類に分類されるものである。釉薬は灰緑色を基調とするが、口縁部上方の内外面にかけて黄褐色の釉が掛かる。また、内底面には重ね焼きの目跡が現状で2ヶ所残る。器高4.5cm、口径15.2cm、底径6.8cmを測る。55はⅡ類の輪花の坏。底部は上げ底の円盤状を呈し、口縁部上方で屈曲して開く。釉薬は灰緑色を呈するが、発色にむらがある。内底面には重ね焼きの目跡が現状で5ヶ所残るが、復元すると6ヶ所となる。器高3.8cm、口径15.1cm、底径7.5cmに復元した。56はⅠ類の底部破片であるが、底径が5.0cmと小さく、坏とした。釉薬はオリーブ灰色を呈し、細かい貫入がみられる。また、内底面には重ね焼きの目跡が5ヶ所付く。53は76次最下層砂、54は14次補足中層黒粘、55は14次補足中層腐植土、56は14次補足上層粘質土の出土である。

越州窯系青磁壺（57） 所謂唾壺で、口縁部を欠損するが、口縁部は大きく開くものと思われる。高台は低く、外側に踏ん張っている。体部外面はヘラケズリによる。釉薬は淡灰青色を呈し、畳付のみ無釉で、畳付には7ヶ所の目跡が付く。残高6.7cm、高台径6.8cmを測る。76次腐植土の出土である。

唾 壺

黄釉褐彩水注（58～61） 58～61は長沙窯系の黄釉褐彩水注で、58が肩部、60は注口部、61は取手部、59は底部の破片であるが、4者は全くの別個体である。58の釉薬は濃緑色を呈するが、頸部との境は特に濃くなっている。59は上底をなし、残存部位の上端に釉薬が掛かるが、下半部は露胎である。底径は14.0cmに復元した。また、60の外面の一部は灰青色に発色している。61は断面楕円形をなし、上面には断面V字形の平行する沈線を2条施している。58は14次補足中層黒粘、59は14次補足中層黒粘出土品と同上層粘土出土品が接合したもの、60は76次腐植土、61は76次灰砂礫の出土である。

長沙窯系の
水 注

S D2340出土土器 (Fig.43~54, PL.13~15)

不丁地区の東の境界溝S D2340は、各地区で計7次の調査が行われた。ここでは、各調査における層単位ごとに報告する。

83・84次調査資料 (Fig.43)

いずれもトレンチ調査出土資料。遺物の出土量も限られる。

須恵器蓋 (1) 低平な撮みの付く高い天井部で、体部との境を明瞭にする。天井部から口縁部へは直線的に至り、端部を折り曲げる。外天井はヘラ切り。口径15.6cm, 器高2.6cm。

須恵器環 (2~4) 2は平らな底部の端に低い方形の高台を貼付する。体部は直線的に立ち上がる。外底部はヘラ切り。口径12.7cm, 底径9.9cm, 器高3.8cm。3は無高台の環。口縁部が僅かに肥厚する。外底部はヘラ切り後ナデ。4は方形で厚い高台を底部端に貼付する。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。

須恵器皿 (5) 体部は緩やかに開き、口縁部を外反させる。外底部は回転ヘラケズリ。復元口径21.8cm, 器高2.8cm。

須恵器壺 (6) 体部の立ち上がりは緩やかで丸みを持つ。高台はしっかりと踏ん張る。体部内外面はナデ。

85次調査資料 (Fig.44~46)

〈1~38：溝下層出土資料〉

須恵器環蓋 (1~10) 3以外は撮み部を欠損するが、本来は貼付したであろう。口縁端部は2が高く方形の折り曲げを行う以外は、1・3・4・7・8のようにやや肥厚させて僅かに折り曲げるものが多い。さらに5のように踏ん張り気味となり、外面に沈線状の段を有するものもある。また、6のように端部が明瞭でなく僅かに屈曲するものもある。口径12.5~16.4cm, 19.8~28.0cmに分かれる。外天井部の調整は確認できるものはいずれも回転ヘラケズリだが、6のみはその後ナデ。

須恵器壺蓋 (9・10) 9は体部がやや開き気味だが、10については直立して端部が踏ん張る。天井部はいずれも回転ヘラケズリ。9の復元口径は17.2cm。

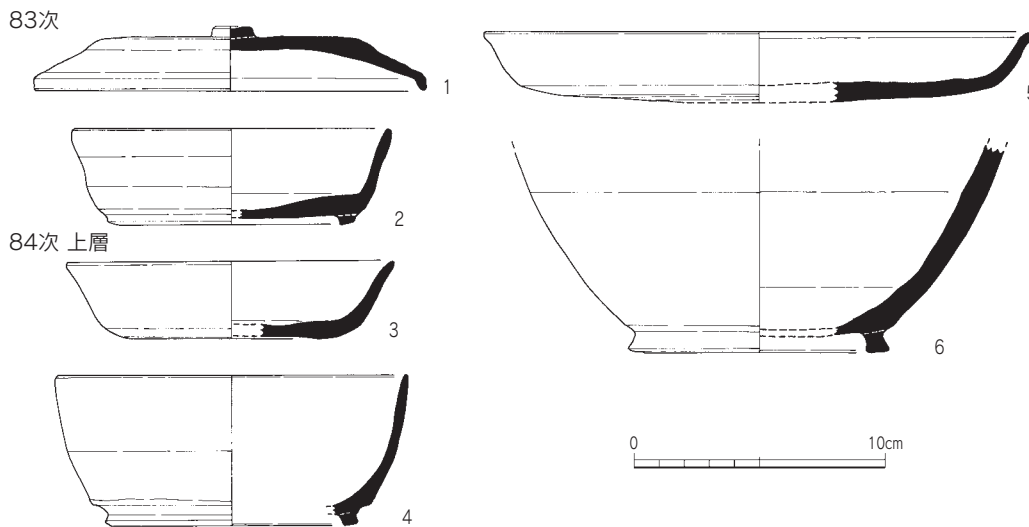


Fig.43 境界溝出土土器実測図 (16) 83・84次SD2340 (1/3)

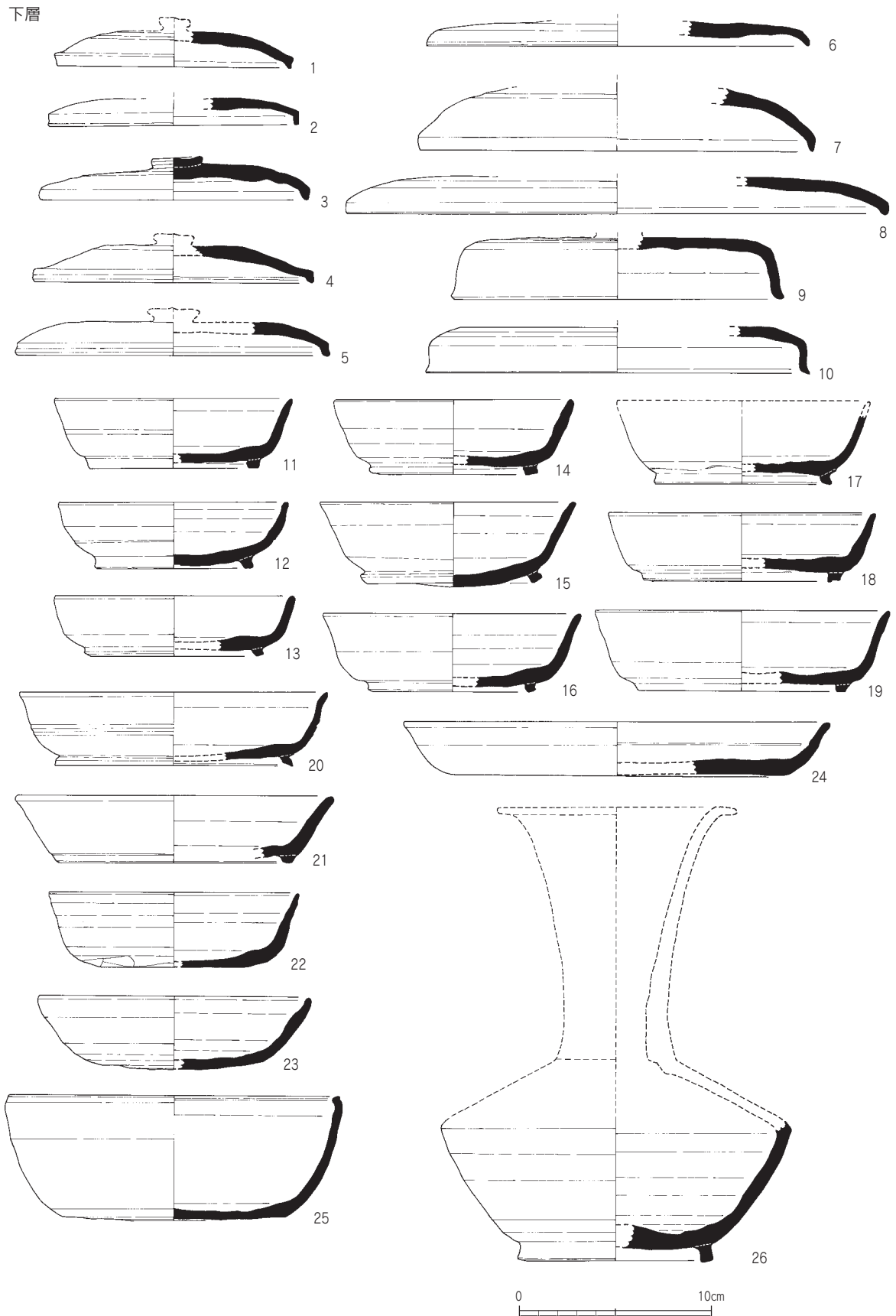


Fig.44 境界溝出土土器実測図 (17) 85次SD2340 (1/3)

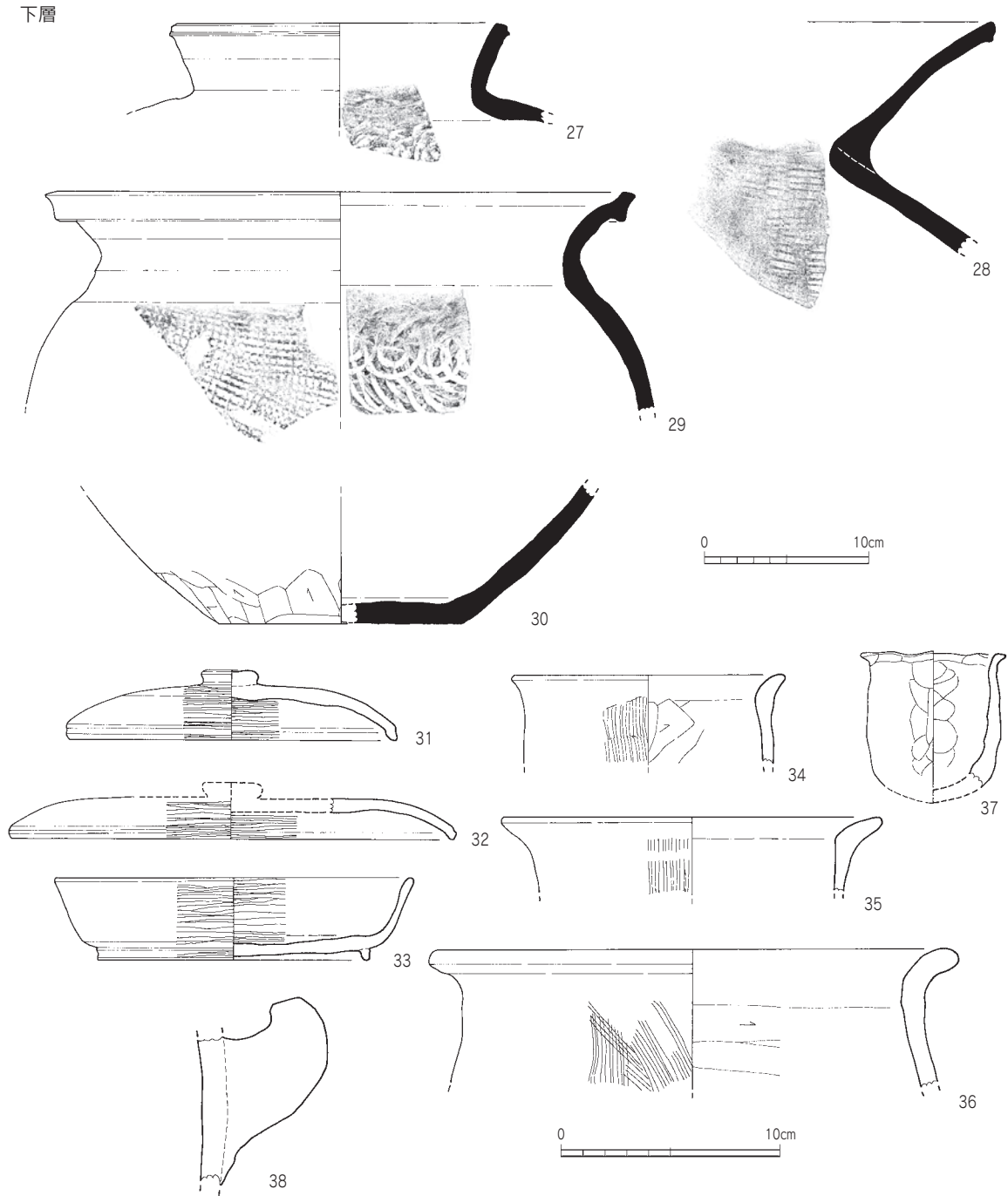


Fig.45 境界溝出土土器実測図 (18) 85次SD2340 (1/3・1/4)

須恵器坏 (11~23) 11~21は有高台の坏。口径12.1cm~13.8cmの範囲に収まるものが多く、最も大きいもので21の16.5cm。体部は底部との境で丸みを持ちながら直線的に立ち上がるものが多い。ただし、12の口縁端部は肥厚して僅かに外反し、21は底部と体部の境が明瞭でなく直線的に立ち上がる。また、20は体部中位に2条の沈線を巡らせる。金属器模倣か。高台は底部端に貼付するが、僅かに踏ん張って外反するもの (12~16) のほかに低い方形となるもの (11・19・21) や、畳付に沈線を有するもの (20) がある。外底部は13・15が回転ヘラケズリの他は、ヘラ切り未調整が多い。22・23は無高台の坏。22は、体部が直線的に

立ち上がる。体部下位は回転ヘラケズリで、外底部は手持ちヘラケズリ。口径13.0cm, 器高3.9cm。23は丸みを持った体部下位から底部を回転ヘラケズリする。口縁部内側に湾曲する。口径14.2cm, 器高3.8cm。

須恵器皿 (24) 外底部を回転ヘラケズリする。内面体部中位に沈線状の段を巡らせる。口縁端部は僅かに肥厚して外反する。復元口径22.2cm。器高2.8cm。

須恵器鉢 (25) 口縁部を内傾させて端部が肥厚する。体部下位と底部を回転ヘラケズリ。

須恵器長頸壺 (26) 体部下位から底部の破片。体部下位・底部を回転ヘラケズリする。胎土は精良である。

須恵器甕 (27~30) 27は口縁部が直線的に立ち上がり、外面に沈線を有する。復元口径20.6cm。28は内面頸部下位にタタキ目。29・30は口縁部と底部の復元資料。口縁は外反して、外面は肥厚し突帯を巡らせる。復元口径35.8cm。体部下位と底部を回転ヘラケズリ。内面下位は同心円のタタキ目をナデ消す。この他、朱墨の硯に転用した大甕が出土している。

土師器蓋 (31・32) 須恵器模倣品。31は口縁端部を踏ん張るように外反させる。内面には沈線状の段を設ける。外天井部は回転ヘラケズリで、内外面をヘラミガキする。口径15.0cm, 器高3.8cm。32の口縁端部は肥厚し、外面に沈線を巡らす。外天井部はヘラケズリ。

土師器坏 (33) 口縁部が僅かに肥厚し、内外面ともにヘラミガキする。胎土は砂粒を含まず精良である。なお、外底部は回転ヘラケズリ後にヘラミガキ。

土師器甕 (34~37) 34・35の口縁は短く、大きく外反する。口縁部と胴部の境が不明瞭だが、内面は頸部下位のケズリで明瞭である。36は頸部がやや内傾し、口縁部は肥厚して外反する。外面はハケ目、内面は横位のケズリ。37は小型の甕で、内外面に指頭圧痕を明瞭に残す。口径6.6cm。復元口径24.2cm。

土師器甕 (38) 甕の把手で指オサエにより調整し、内面は縦位のケズリ。

〈39~62：溝上層出土資料〉

須恵器蓋 (39~50) 口径14.0cm, 15.8~17.2cm, 18cm以上のものがある。口縁部形態は丸く肥厚するもの (39), 折り返して肥厚するもの (40・41・43・44・47・48), 折り返してさらに外面に沈線状の段を有するもの (42・45・46・49・50) がある。ただし、39については折り返すよりもむしろ内面身受の段の作出が顕著である。外天井部はほぼ回転ヘラケズリだが、42はナデ。

須恵器坏 (51~55) 51~54は有高台。いずれも体部は直線的に立ち上がる。高台は底部端付近に貼付するが、方形でやや踏ん張るもの (51・53・54) と大きく外反するもの (52) に分かれる。51は口径13.7cm, 底径9.4cm, 器高3.9cm。53は口径15.2cm, 底径10.9cm, 器高3.6cm。55は無高台。器壁は薄く、体部下位と外底部を回転ヘラケズリする。口径15.3cm, 器高4.4cm, 底径9.2cm。

須恵器小壺 (56) 器壁が薄く、短い口縁が外反する。体部上位から下位は回転ヘラケズリ。復元口径9.4cm。

須恵器挿鉢 (57) 外底部を手持ちヘラケズリし、ヘラ先による刺突を施す。

須恵器鉢 (58) 口縁は内湾し、端部は肥厚する。体部下位、外底部を回転ヘラケズリする。口径26.4cm, 底径11.7cm, 器高11.9cm。形態は下層出土の25に似る。

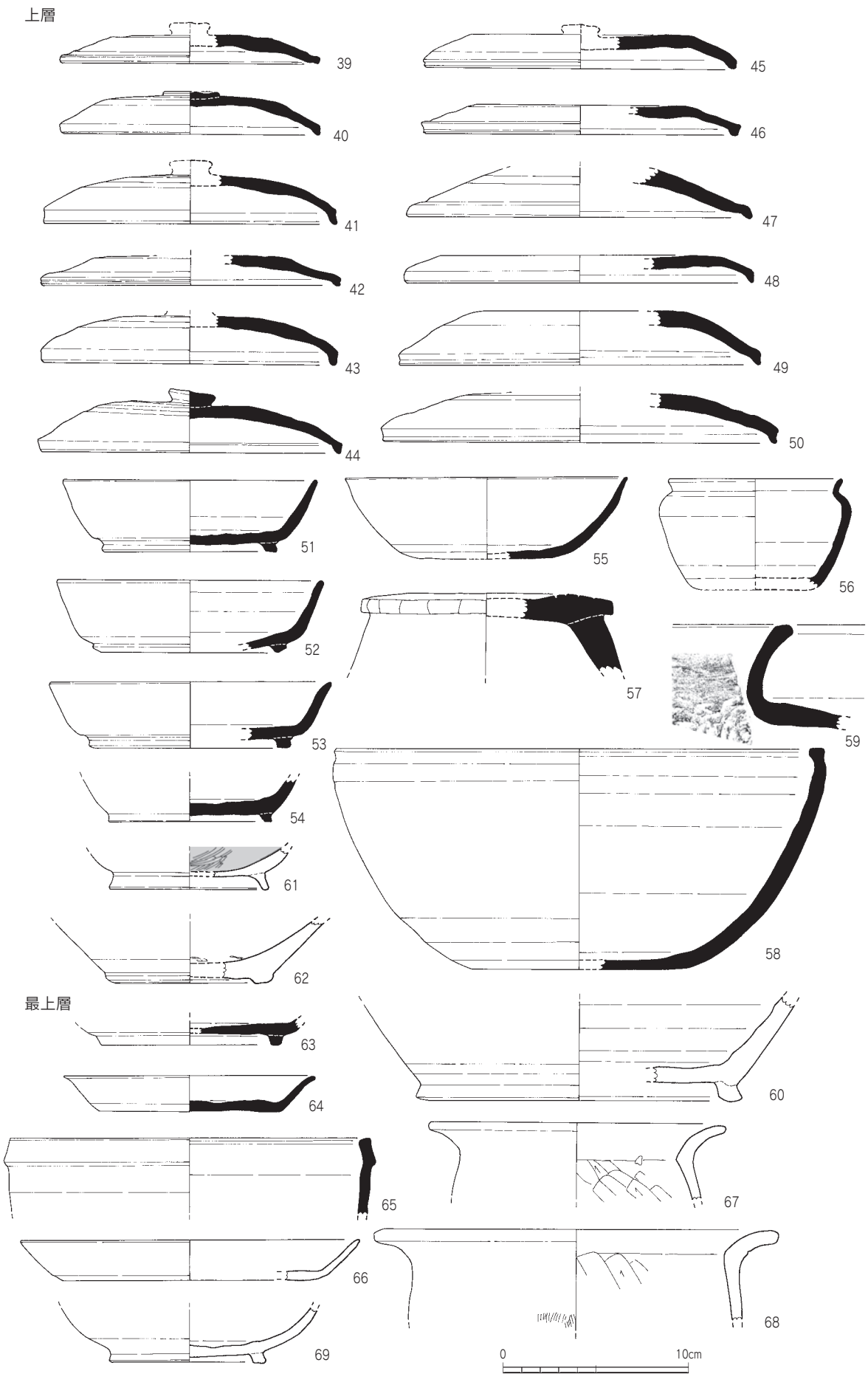


Fig.46 境界溝出土土器実測図 (19) 85次SD2340 (1/3)

須恵器甕 (59) 口縁部片で端部を平らにして上面に向ける。肩部の器壁は厚い。
 灰釉陶器壺 (60) 底部片で太い高台を底部端に貼付する。
 黒色土器椀 (61) A類椀。断面方形の高台がハ字形に開く。内面にミガキ。
 青磁碗 (62) 越州窯系青磁碗で、体部下位と底部は露胎。内面見込に目跡あり。黄緑色に発色する。

〈63～69：溝最上層出土資料〉

須恵器坏 (63) 底部端に低い方形の高台を貼付する。復元高台径9.6cm。
 須恵器皿 (64) 口縁を僅かに外反させる。外底部はヘラ切り後ナデ。
 須恵器鉢 (65) 口縁部外面を肥厚させて突帯状にする。復元口径19.0cm。
 土師器皿 (66) 外底部は回転ヘラケズリ。口径18.2cm, 器高2.2cm。
 土師器甕 (67・68) 67は焼成が堅緻で、青灰色を呈する。外反する口縁部や内面頸部下位など土師器甕の製作技術だが、還元状態となって須恵器化した可能性が高い。68は口縁部が肥厚し、大きく外反する。復元口径21.6cm。
 灰釉陶器碗 (69) 高台部は丸みを持ち、畳付には沈線が1条入る。胎土は精良である。底径6.2cm。

87・90次調査資料 (Fig.47～51)

〈1～13：87・90次最下層・茶褐色砂層出土資料〉

最下層出土

須恵器蓋 (1～6) 1・3・4は身受けのかえりを有する。1～3の口径は13.4～14.0cm。1は擬宝珠状の撮みを持つ。焼歪みがあり口縁端部も分厚く、外天井部はヘラケズリ。口径13.4cm, 器高2.7cm。2は低平な天井部で、口縁端部は肥厚して折り返す。端部外面には強いナデによる段を有する。3は撮みを持たずに身受けの返りを有するタイプ。口縁端部は水平となる。外天井部の調整はナデ。4は天井部が高く、口縁端も細く作りは丁寧。外天井部はヘラケズリ。5は口縁端部を肥厚させて折り返す。回転ヘラケズリで、復元口径22.0cm。6は撮みを欠損して外天井部にカキ目が入る。

須恵器坏 (7～10) 7は有高台の坏。底部端に低く踏ん張る高台を貼付する。外底部はヘラ切り。口径12.5cm, 底径9.1cm, 器高4.6cm。8・9は無高台の坏。口径13.2～13.6cm, 底径9.4～9.5cm。8は底部端に回転ヘラケズリを確認できるが、他は灰被りのため不明。9は外底部をヘラ切り後ナデ。10はかえりを持ち、口縁端部は僅かに外反する。口径12.4cm。

須恵器鉢 (11) 底部片。外底部は回転ヘラケズリ。

土師器坏 (12) 口縁部が肥厚する。磨滅著しいが、体部には僅かにミガキが観察できる。

土師器高坏 (13) 体部から口縁部へは緩やかに至る。内外面ヘラミガキ。外底部は回転ヘラケズリ。復元口径24.4cm。

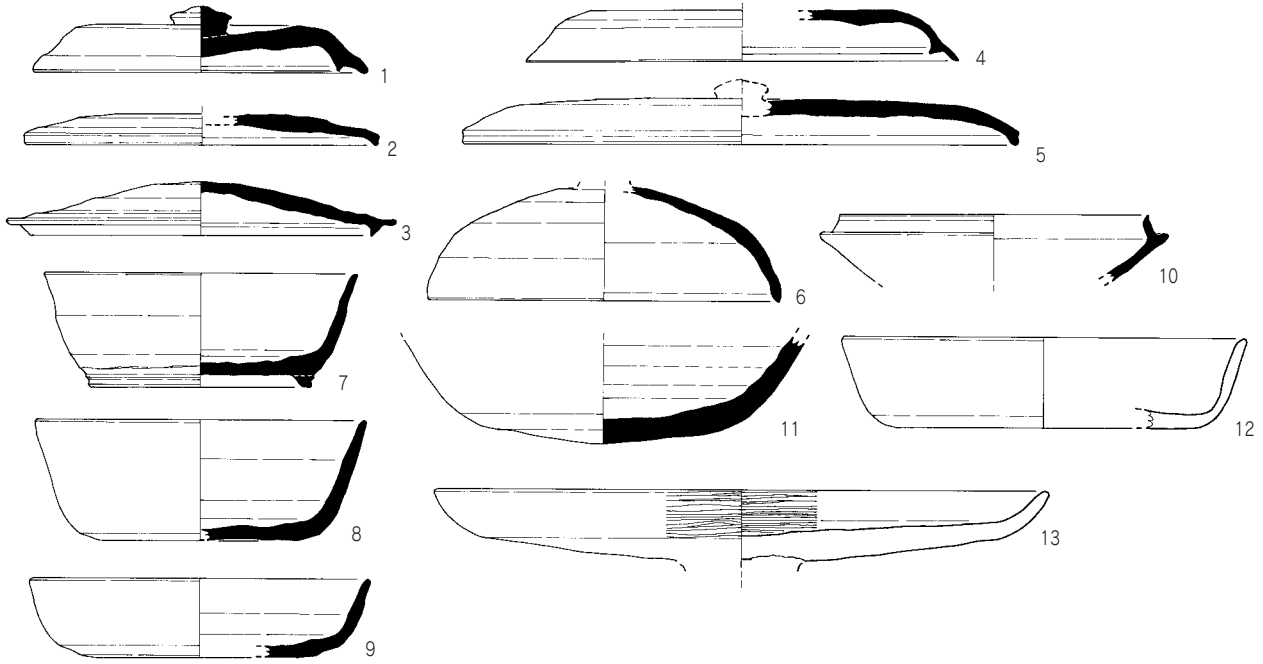
〈14～41：87次青灰色砂質土・暗灰色粘質土出土資料〉

砂層直上の木簡出土層に相当する。

木簡出土層

須恵器蓋 (14～22) 口径10.2～14.5cm, 15.1～16.6cm, 17.0cmに分かれる。口縁端部はやや肥厚させて折り返すものが多いが、21のように内面に身受けの段を僅かに有するもの、22のように端部外面に沈線状となる段を有するものがある。撮みは特殊な擬宝珠状の14

87・90次 下層茶褐砂



87次 中層青灰粘・暗灰粘

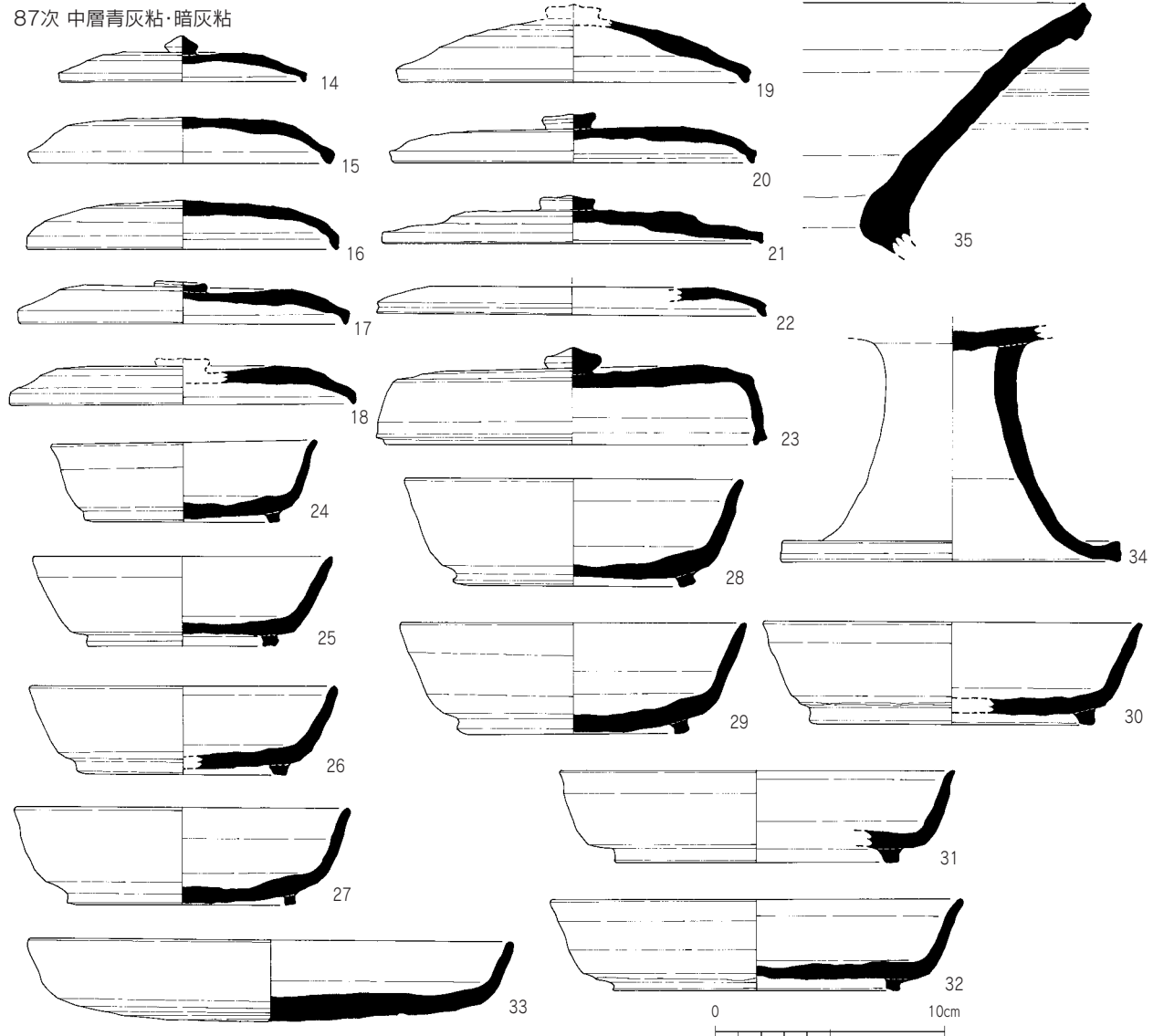


Fig.47 境界溝出土土器実測図 (20) 87・90次SD2340 (1/3)

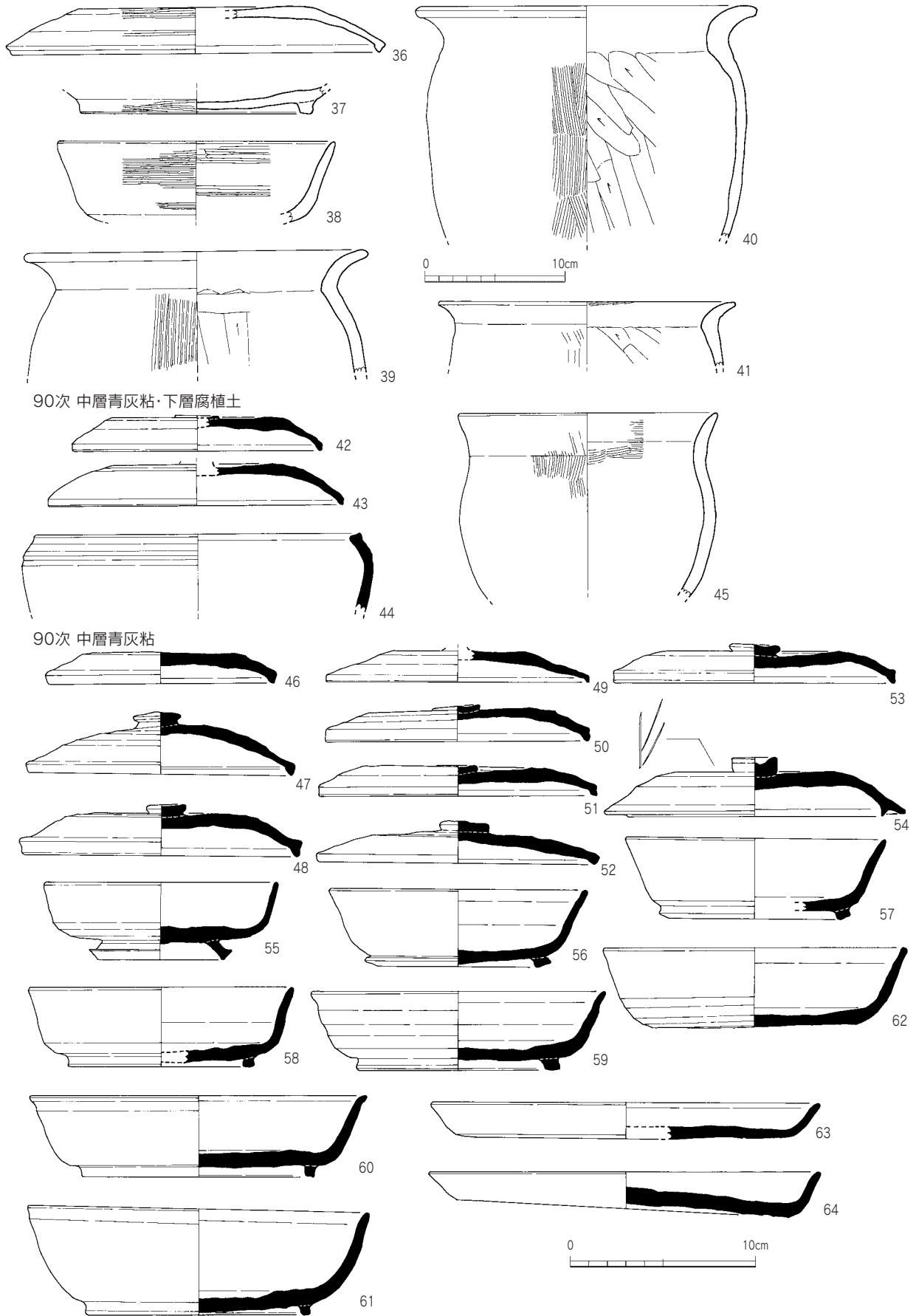


Fig.48 境界溝出土土器実測図 (21) 87・90次SD2340 (1/3・1/4)

を除き、低平なボタン状の撮みを基本とする一方で、15・16のように口径が小さなものには付かないものもある。外天井部は回転ヘラケズリを基本とする。

須恵器壺蓋(23) 擬宝珠状の撮みを持つ。直線的に垂下する口縁端部は屈折して内傾する。外天井部は回転ヘラケズリ。

須恵器坏(24~32) 法量は口径11.6~13.4cmで器高3.7~3.9cm, 口径14.6~15.1cmで器高4.3~4.9cm, 口径16.5~18.0cmで器高4.0~4.5cmの三つに分かれる。いずれも体部下位に丸みを持って口縁部へ至る。24・29・30のように口縁部の強いヨコナデにより体部上位に稜線が入るものもある。逆台形となる方形の高台を底部端に貼付するが、外端部が反り気味となるものが多い。大半が外底部をヘラ切り未調整とするが、32は回転ヘラケズリである。

須恵器皿(33) 底部端は回転ヘラケズリによって丸みを持つ。口径21.6cm, 器高3.0cm。

須恵器高坏(34) 脚部片。裾部はラッパ状に開き、端部は肥厚して反る。器面にシボリ目を確認できる。裾径14.8cm。脚高9.5cm。

須恵器甕(35) 口縁に3条の沈線が巡る。口縁端部を肥厚させて突帯状に削り出す。

黒色に塗られた土師器

黒色土師器蓋(36) 胎土や焼成は土師器だが、内外面は黒色でミガキを行う。ここでは黒色の土師器として報告する。36は坏蓋で口縁端部を肥厚させて折り返し、内面に沈線状の段を有する。外天井部はヘラケズリ、器面内外は回転ヘラミガキ。作りは丁寧である。復元口径19.6cm。37とはセットになる可能性が高い。

黒色土師器椀(37) 36に対応するとみられる。椀か鉢の底部。体部を欠損しており、形態は不明。方形の高台を底部端に貼付し、ヘラミガキしている。外底部は回転ヘラケズリ。底径12.4cm。

土師器坏(38) 内外面に丁寧なヘラミガキを施す。

土師器甕(39~41) いずれも口縁部が大きく外反する。口縁が短い40・41は端部が肥厚し、長い39の器壁の厚さは一定である。外面胴部をハケ目、内面頸部下位はケズリ。39は口径24.6cm, 41は口径16.0cm。

〈42~45:90次調査中層・青灰粘質土, 下層・腐植土(砂層直上)出土資料〉

須恵器蓋(42・43) どちらも天井部は高く、口縁端部を僅かに折り曲げる。どちらも天井部の調整は回転ヘラケズリ。42は極端に潰れた撮みを持つ。

須恵器鉢(44) 口縁部は肥厚して僅かに内傾する。頸部下位には2条の沈線を巡らす。口径17.7cm。

土師器甕(45) 頸部は僅かに屈折して開く。復元口径14.0cm。

〈46~75:90次中層・青灰色粘質土・灰色粘土出土資料〉

木簡出土層

須恵器蓋(46~54) 46~48は青灰色粘質土出土。49~54は口径14.0~15.2cm, 器高1.7~2.0cm, 54は口径16.2cm, 器高3.2cm。口縁端部は、肥厚して嘴状に折り返すものが大半で、52が端部を肥厚させて内面に段を有し、54は身受けのかえりを持つ。撮み部はやや低平なボタン状や潰れたものだが、54のみ中央が窪む。外天井部は、49がナデ、50・51・54が回転ヘラケズリ、52がヘラ切り。54の外天井部にはヘラ記号がある。

須恵器坏(55~62) 55~61は有高台の坏。55~58は口径12.6~14.3cm, 器高4.2~4.4cm, 59が口径15.9cm, 器高4.3cm, 60・61が口径18.1・18.4cm, 器高4.4・5.9cm

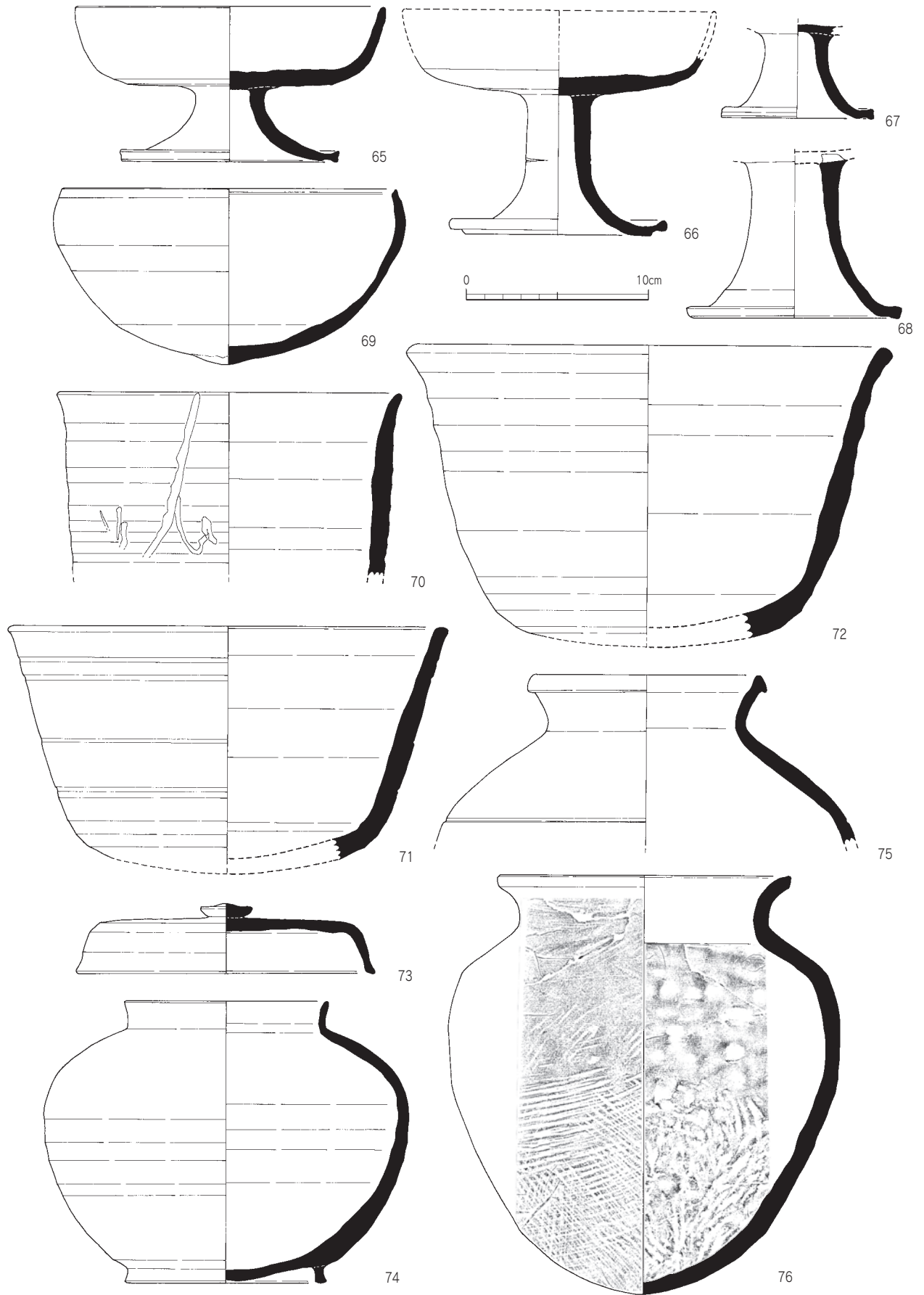


Fig.49 境界溝出土土器実測図 (22) 87・90次SD2340 (1/3)

となり、法量としてみると三つに分かれる。体部は56を除いて丸みを持ち、口縁部は直線的に開く。59・60の口縁部下位はナデによって稜が際立つ。高台は底部端付近に貼付する。大きく外に跳ね上げるもの(55・56)、方形で比較的太く端部のみを僅かに跳ねるもの(57・58)、方形のもの(59・60・61)がある。外底部は58が回転ヘラケズリの他は全てヘラ切り。62は無高台の須恵器杯。口縁端部を僅かに肥厚させる。体部下位から外底部を丁寧にヘラケズリする。内面に煤が付着しており、灯火器として使用されたか。口径16.4cm、底径11.0cm、器高4.3cm。

須恵器皿(63・64) どちらも体部は下位に丸みを持って開く。外底部は回転ヘラケズリ。63は口径21.0cm、器高2.0cm。64は口径21.1cm、器高2.5cm。

須恵器高杯(65~68) 65は全容が分かる資料。大型で深い杯部に裾を大きく広げる脚部が付く。口径17.0cm、器高8.5cm、脚部は高さ4.0cm、裾径12cm。66も同規模の杯が復元され、脚高は8.5cm、裾径は12cm。裾部の形態は僅かに肥厚して屈折させるものが多い。67の脚部の径は大きく、裾端部が肥厚する。67の脚高は低く、68の脚径は大きい。

須恵器鉢(69~72) 69は須恵器鉄鉢。丸底にした後に粘土を貼付して尖底風に仕上げる。体部下位はヘラケズリ。口径18.4cm、器高9.7cm、胴径19.3cm。70は鉢の口縁部片で、乾燥時にヘラ書きしているが意味は不明。口径18.9cm。71・72は直線的に開く体部と平らな口縁部を持つ。丸底で体部下位から底部を回転ヘラケズリしている。71の体部沈線は成形時に生じたもの。

須恵器壺蓋(73) 擬宝珠状の撮みを持ち、口縁端部を僅かに肥厚させる。外天井部は回転ヘラケズリ。口径16.4cm。74とセットになるか。

須恵器壺(74) 葉壺形で直立する口縁を持ち、胴部中位の最大径は20cmとなる。体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリ。

須恵器甕(75・76) 75は口縁部が肥厚して突帯状となる。体部上位に沈線を1条巡らす。76は器形全体が分かる。逆ハ字形に大きく口縁が開き、内面を天井に向ける。外面に平行タタキ目、内面に弧状のタタキ目がある。口径16.1cm、器高23.0cm。

土師器椀(77) 外底部端に方形で端部が僅かに跳ねる高台を貼付する。内外面には丁寧なヘラミガキ。外底部はヘラ切り後ナデ。口径11.8cm、器高3.0cm、底径9.1cm。

土師器皿(78) 体部下位に丸みを持って口縁へ至る。外底部は回転ヘラケズリ。内外面ヘラミガキ。口径20.0cm、器高3.4cm。

〈79~110:90次黒色粘土出土資料〉

須恵器蓋(79~87) 口径13.4~15.0cm、16.3~17.0cm、20.4~21.7cmと大きく三つに分かれる。本来は全て撮みを持つとみられ、小型品ではボタン状、大型品では擬宝珠状のものがある。口縁端部はいずれも嘴状に折り返すが、強いナデによって外面に沈線状の段を持つものがある。外天井部は79・80がヘラ切りであるほかは、ヘラケズリで丁寧にナデるものもある。79の器壁が著しく薄いのに対し、80の器壁は全体に厚い。83は天井部の回転ヘラケズリが丁寧で、85の天井部から体部はヘラ切り後にナデ。86・87は壺蓋で、どちらも撮み部付近を欠損する。86は外面に踏ん張るが、87は口縁端部を直立させる。どちらも外天井部は回転ヘラケズリ。87は復元口径20.3cm。

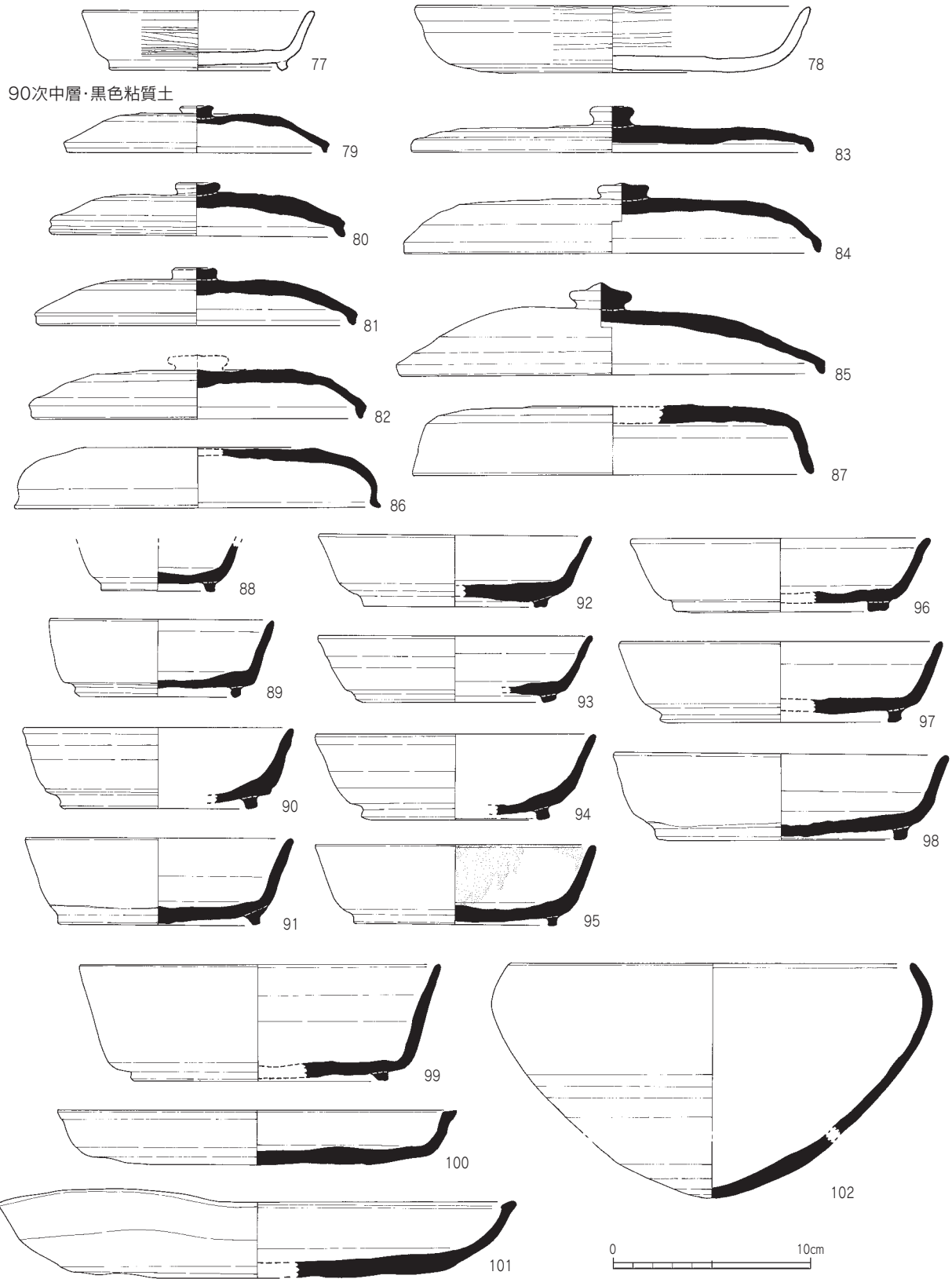


Fig.50 境界溝出土土器実測図 (23) 87・90次SD2340 (1/3)

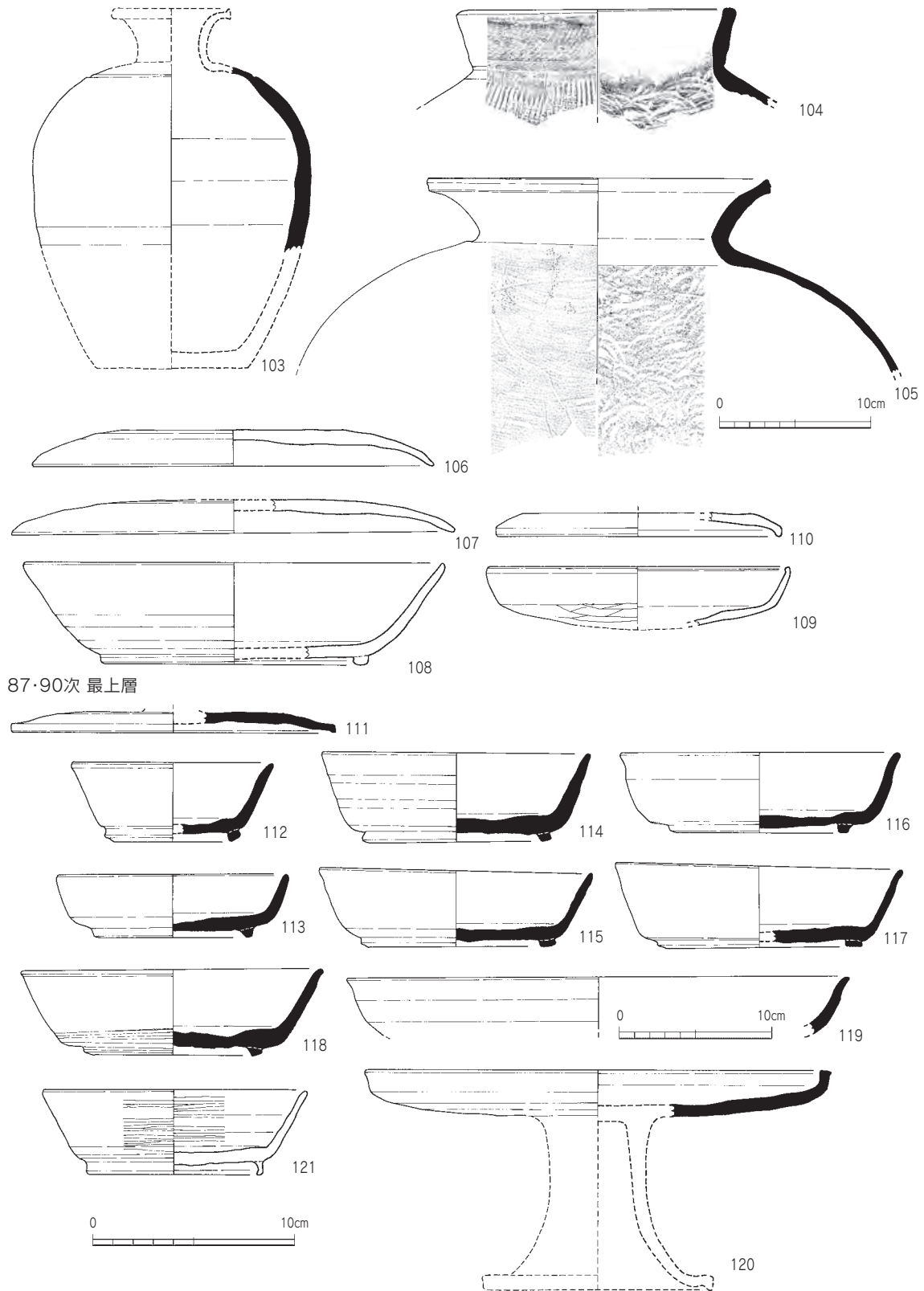


Fig.51 境界溝出土土器実測図 (24) 87・90次SD2340 (1/3・1/4)

須恵器杯 (88~99) 口径11.2~14.2cm, 15.2cm, 16.4~17.0cmに分かれ, 器高3.7~4.5cmとなる。89を除いて体部が下位に丸みを持って直線的に開き, 口縁部が外反するものが多い。89の高台が内面に段を持って外側へ僅かに跳ね上がるが, その他は太さに多少の違いがあるものの, 低い方形の高台を底部端に貼付する。92は体部下位から外底部を回転へ

ラケズリするが、他の外底部はヘラ切りで一部ナデるものもある。

須恵器皿(100・101) どちらも口縁端部を肥厚させ、上方に平坦面を向ける。100は外底部の中央を中心にヘラケズリ。口径20.1cm, 底径16.9cm, 器高2.8cm。101は焼歪みが大きい。外底部はヘラ切り後ナデ。

須恵器鉢(102) 鉄鉢形で、口縁部は大きく内傾し、端部を丸く納める。体部中位以下は回転ヘラケズリ。胎土に砂粒は少ない。口径20.6cm, 胴部最大径は22.3cm。

須恵器壺(103) 肩部には沈線を1条巡らせる。本来、頸部はくびれて短く口縁に至る器形。体部下位は回転ヘラケズリ。

須恵器甕(104・105) 104は口縁が直線的に開く。復元口径18.4cm。中層の灰色粘土層出土破片と接合した。105は体部が球形となり、口縁部は大きく外反して端部を僅かに肥厚させる。復元口径22.5cm。

土師器蓋(106・107) どちらも低平な天井で、器高が低く、口縁部を僅かに屈折させる。ともに天井部は丁寧な回転ヘラケズリ。口径は105が19.9cm, 106が22.0cm。

土師器椀(108) 体部は器壁を一定の厚さにして直線的に開く。外底部の端に低くやや丸みを持つ高台を貼付する。体部下位は回転ヘラケズリ。

土師器皿(109) 器壁は全体に薄い。口縁端部を僅かに折り返し、内面に沈線を持つ。外底部は手持ちヘラケズリ。胎土は精良である。復元口径15.0cm。

黒塗土師器蓋(110) 胎土焼成は土師器と同じだが、内外面を黒く塗る。器形は須恵器と同じ坏蓋で、口縁端部を折り曲げる。外天井部は回転ヘラケズリ。復元口径14.0cm。

〈111～121：87・90次最上層出土資料〉

須恵器蓋(111) 口縁端部を肥厚させて僅かに屈折する。外天井部は回転ヘラケズリ。復元口径16.0cm。

須恵器坏(112～118) 口径10.0～11.5cm, 器高3.1～3.9cm, 口径13.3～14.9cm, 器高3.9～4.3cmの二つに大きく分かれる。112を除き、いずれも体部下位に丸みを持つ。外底部には方形の高台を貼付するが、112や118は端部を跳ね上げる。外底部は112が回転ヘラケズリで、それ以外はヘラ切り。

須恵器盤(119) おそらく高台を貼付するだろう。体部に丸みを持ちながら口縁が外反する。復元口径33.0cm。120は須恵器高坏。

須恵器高坏(120) 坏部は口縁端部を平らにして天井に向ける。外底部は回転ヘラケズリ。復元口径23.1cm。

土師器椀(121) 細く直立する高台を貼付する。体部内外面はヘラミガキ。外底部はヘラ切り。口径13.1cm, 高台径8.8cm。器高4.2cm。

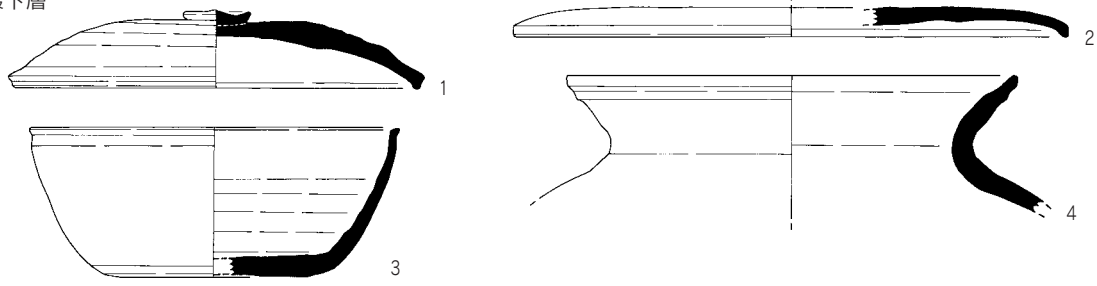
98次調査資料 (Fig.52・53)

〈1～4：最下層・砂層出土資料〉

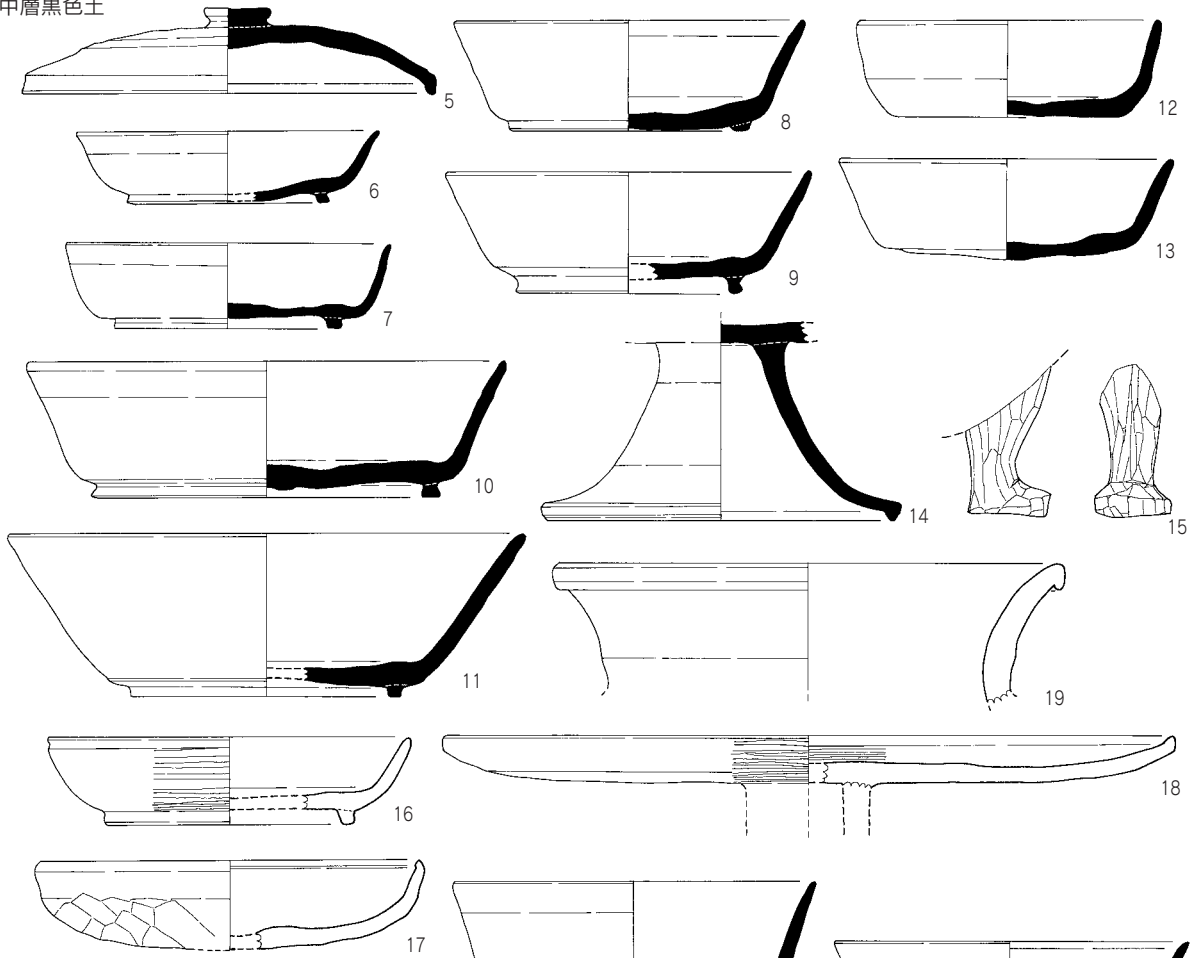
須恵器蓋(1・2) どちらも口縁端部を肥厚させて折り曲げる。1は低平なボタン状の撮みを持ち、外天井部は雑なヘラケズリ。口径16.3cm, 器高3.1cm。2は比較的low平な大型品。外天井部はヘラケズリ。復元口径22.0cm。

須恵器鉢(3) 口縁端部を僅かに外反させて内面を上方に向ける。体部下位から外底部に

最下層



中層黑色土



上層

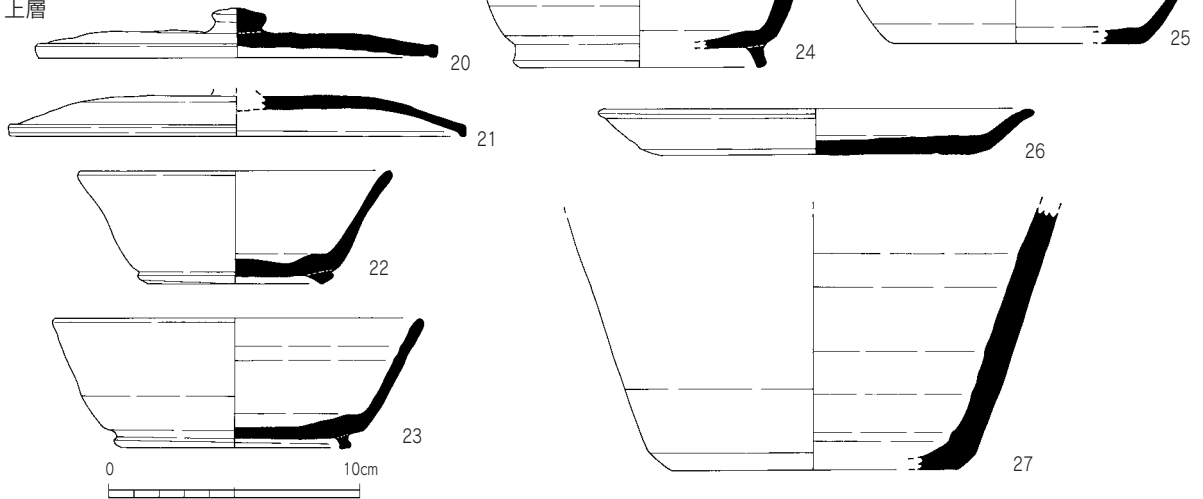


Fig.52 境界溝出土土器実測図 (25) 98次SD2340 (1/3)

かけて回転ヘラケズリ。復元口径14.7cm、底径7.4cm、器高6.0cm。

須恵器甕(4) 口縁部は細く鋭いが外面端部を肥厚させて段を設ける。復元口径17.9cm。

〈5～19：中層・黒色土出土資料〉

須恵器蓋(5) ボタン状の低平な撮みを持つ。肥厚する口縁端部を嘴状に折り返し、強いナデにより外面に段を有する。外天井部はヘラケズリ。口径16.4cm、器高3.4cm。この他、坏蓋の転用硯が数点出土している。

須恵器坏(6～13) 6～11は有高台の坏。口径12.0～14.5cm・器高2.9～4.9cmと、19.0～20.6cm・器高5.4～6.5cmの大型品と大きく分かれる。体部は直線的に立ち上がり、下位には丸みを持つ。高台はやや踏ん張りを持つもの(6・7・9)、方形のもの(10・11)、低い逆台形のもの(8)がある。外底部はヘラ切り未調整が多い。12・13は無高台の坏。体部は器壁の厚さを一定にして立ち上がり、外底部はヘラ切り未調整。12は口径12.1cm、底径9.2cm、器高3.9cm、13は口径13.3cm、底径9.3cm、器高4.0cm。13の内面には油煙が付着しており、灯火器として使用されたとみられる。

須恵器高坏(14) 脚部片で裾部がラップ状に開く。裾部を肥厚させて折り返す。裾部径は13.6cm、脚高は7.0cm。

須恵器獣脚片(15) 体部からの剥離面をみると丸底を有する器形となり、葉壺などの脚部が考えられる。脚部全面を手持ちヘラケズリする。 葉壺の脚か

土師器椀(16) 体部は丸みを持ち口縁外面に沈線状の段を巡らす。高台は端部に丸みを持ち、底部との境外面を沈線状にする。外面は回転ヘラミガキ、内面はヨコナデか。外底部はヘラ切り未調整。

土師器皿(17) 丸底になる。口縁端部を僅かに内側に折り曲げて段を作る。体部中位から下位は手持ちヘラケズリ。胎土は精良で砂粒はほぼ皆無である。口径15.3cm、器高4.0cm。

土師器高坏(18) 坏部片。口縁端部を僅かに折り返す。外底部は回転ヘラケズリ、その後内外面に横位のヘラミガキ。胎土は精良で、復元口径29.0cm。

灰釉陶器甕(19) 比較的長い口縁部を持つ。端部を肥厚させて折り返し、段を有する。内外面に緑色の釉が発色し、胎土も精良である。復元口径20.0cm。

〈20～36：上層出土資料〉

須恵器蓋(20・21) 20の天井部は低平で、口縁端部を丸く肥厚させ、内面に段を設ける。外天井部はヘラ切り未調整、内天井部は平滑で硯に転用か。口径16.0cm、器高2.0cm。21は口縁端部を僅かに折り曲げる。外天井部は回転ヘラケズリ。内天井部は粗雑なナデ。

須恵器坏(22～25) 22～24は有高台。口径12.5～14.7cm、器高4.5～6.7cm。いずれも体部は直線的に開き、24以外は口縁部がやや肥厚する。ハ字形に開く高台を底部端に貼付するが、低く端部を跳ね上げるものがある。22・23の外底部はヘラ切り未調整。24は体部下位と外底部は回転ヘラケズリ、体部下位はヘラミガキ状の器面調整を行う。25は無高台の坏。体部は直線的に立ち上がる。体部下位はヘラケズリ、外底部はヘラ切り後にナデ。復元口径14.0cm、底径10.0cm、器高3.3cm。焼成は良好、胎土は精良で、あるいは灰釉陶器か。

須恵器皿(26) 口縁端部を肥厚させて外反する。外底部はヘラ切り未調整で一部板状圧痕がある。また煤も付着。

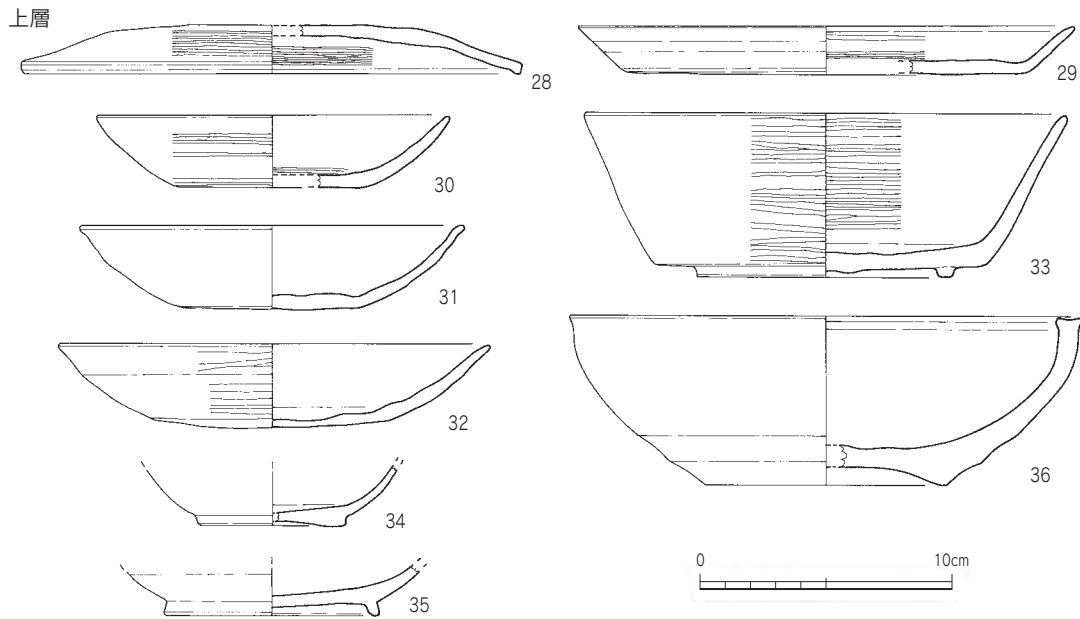


Fig.53 境界溝出土土器実測図 (26) 98次SD2340 (1/3)

須恵器壺 (27) 体部が直線的に開く。体部は回転ヘラケズリ後ナデ、下端部は回転ヘラケズリ。外底部はナデ。復元底径11.2cm。

土師器蓋 (28) 口縁端部は肥厚して、内面に身受けの段を設ける。外天井部は回転ヘラケズリ後、内外面ヘラミガキ。口縁部内面に墨痕がある。口径19.6cm。

土師器皿 (29) 体部から口縁部へは外反して至る。外底部はヘラケズリ後、端部付近をヘラミガキ。体部内外面と底部の一部を回転ヘラミガキ。復元口径19.8cm、器高1.9cm。

土師器杯 (30~32) 体部が大きく開き、口径に対して底部径は小さい。30は体部下位と外底部に回転ヘラケズリ。体部は磨滅しているが、内外面に僅かに回転ヘラミガキ。口縁部に油煙付着。復元口径14.0cm、底径7.0cm、器高2.9cm。31は口径15.3cm、底径7.0cm、器高3.4cm。32は内外面に回転ヘラミガキ。底部は欠損して調整不明。S K 2882出土資料と破片が接合した。

土師器椀 (33) 平な底部に低い方形の高台を貼付する。体部は直線的に開く。内外面ともに回転ヘラミガキで、外底部中央に僅かに板状圧痕あり。

緑釉陶器碗 (34) 内外面は緑色の釉を発色する。ケズリ出し底部の外表面は回転ヘラケズリ。

灰釉陶器碗 (35) 方形で端部を細くする高台を貼付している。内面に緑灰色の釉が発色する。外底部はヘラケズリ。

無釉陶器鉢 (36) 体部は丸みを持ち口縁端部を平坦にする。外底部は回転ヘラケズリ。全体に茶灰色である。底部、口縁端上面に目跡。口縁口径20.4cm、器高6.7cm、底径9.6cm。

124次調査資料 (Fig.54)

〈1~9：最下層・砂質土出土資料〉

須恵器蓋 (1) 口縁端部を折り返して嘴状にする。外面は強いナデにより踏ん張り気味となる。内定面に墨痕があり、硯に転用されている。復元口径12.8cm。

須恵器杯 (2~6) 口径13.0~14.0cm・器高3.7~4.6cmと、口径16.2~17.2cm・器高

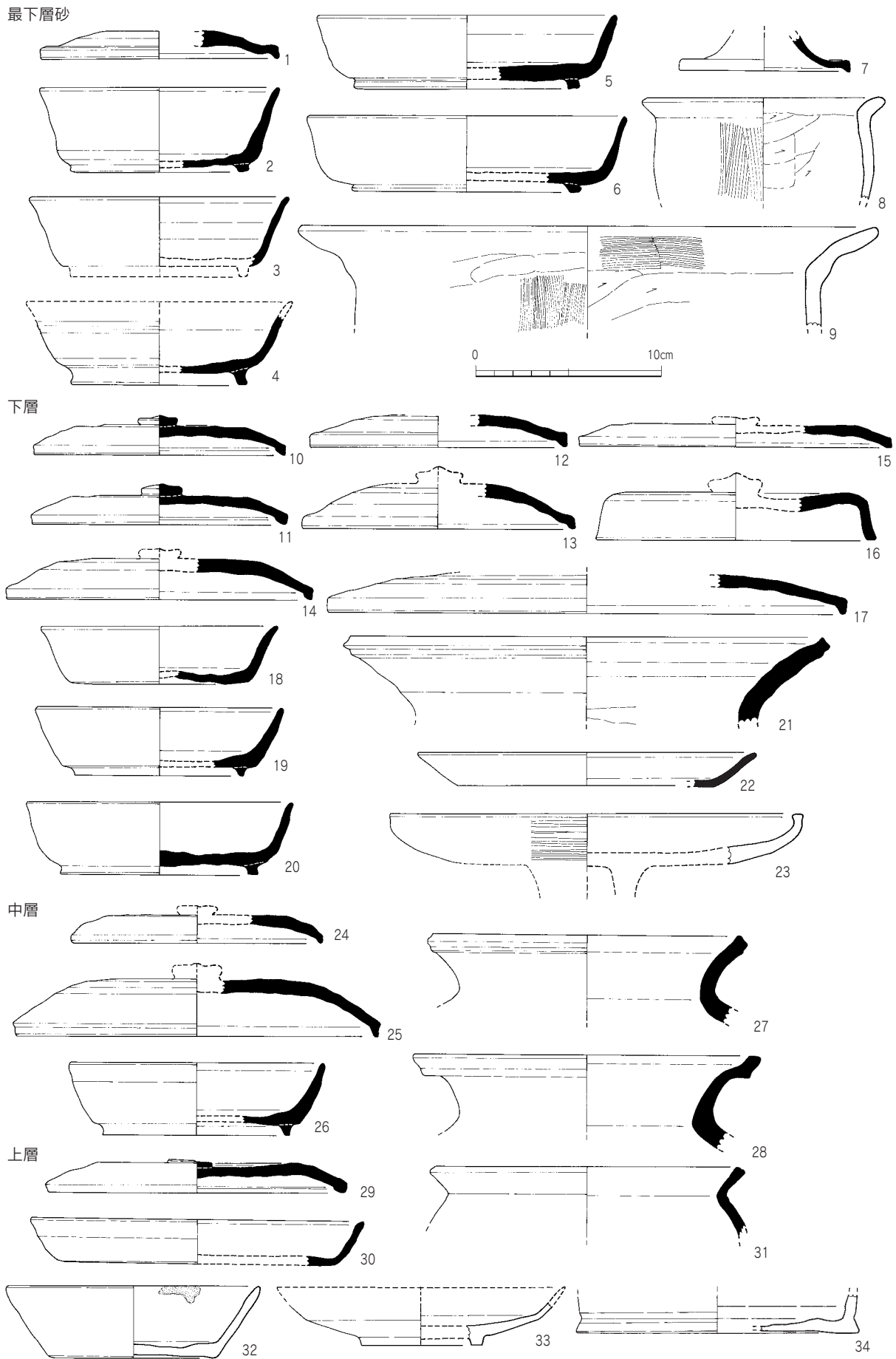


Fig.54 境界溝出土土器実測図 (27) 124次SD2340 (1/3)

4.0~4.1cmの大きく二つに分かれる。いずれも体部の下位に丸みを持つが、4は中位に2条の沈線を巡らせ、その間を突帯状にみせる。高台は5の跳ね上げるもの以外、概ね方形で端部がやや反る。2の外底部はヘラ切り離し、4~6は回転ヘラケズリ。2の外底部に墨痕あり。

須恵器高坏(7) 裾部を大きくラッパ状に開き、端部を肥厚させ折り曲げる。裾径9.2cm。

土師器甕(8・9) 8の口縁部は短く開いて肥厚する。内面頸部下位ヘラケズリ。9の口縁部は大きく外反する。口縁部内面は横位のハケ目、頸部下位ヘラケズリ。復元口径31.2cm。

〈10~23：下層出土資料〉

須恵器蓋(10~16) 口径は13.9~14.7cm, 16.5~16.8cm, 28.0cmに分かれる。撮みは、残るもので中央が突起したボタン状のものを貼付する。口縁部は15を除いて口縁端部を折り返すものが多いが、その際、10・11は口縁内面に身受けの段を明瞭にする。15は端部を肥厚させて外側面を少し湾曲する。外天井部は11を除き、回転ヘラケズリ。16は壺蓋で、口縁部がやや開き、天井部は回転ヘラケズリ。17は大きさから盤の蓋になるか。口縁端部を折り返して嘴状にする。外天井部は回転ヘラケズリ。

須恵器坏(18~20) 18は無高台の坏。外底部はヘラ切り。口径12.8cm, 底径9.7cm, 器高3.1cm。19は平な底部端に方形の高台を貼付する。口径13.4cm, 底径9.2cm, 器高3.7cm。20の体部は下位に丸みを持つ。底部端に方形の高台を貼付する。外底部は回転ヘラケズリ。

須恵器甕(21) 口縁は大きく開き、端部下位に突状の線を削り出す。復元口径26.2cm。

須恵器皿(22) 口縁部は外反する。外底部の調整は不明。口径18.0cm, 器高1.4cm。

土師器高坏(23) 坏部片。体部は丸みを持ち、口縁端部を肥厚させて上面を僅かに折り返す。外面は回転ヘラミガキ。内面に墨が付着。

〈24~28：中層出土資料〉

須恵器蓋(24・25) 24は僅かに口縁端部を折り曲げる。外底部は回転ヘラケズリ、内面は平滑で墨が付着する転用硯であろう。復元口径は13.6cm。25は口縁端部を嘴状に折り返し、外面に屈折する稜を形成する。外天井部は回転ヘラケズリ。復元口径は19.8cm。

須恵器坏(26) 平な底部端に方形の高台を貼付する。外底部はヘラ切り未調整。

須恵器甕(27・28) 27は口縁端部付近外面を削り出して突状にする。復元口径17.2cm。28の口縁部は大きく外反して、口縁端部下位に突線を作出する。

〈29~34：上層出土資料〉

須恵器蓋(29) 低平な撮み部はやや内湾する。口縁端部は丸く肥厚し、内面に身受けの段を有する。外天井部は回転ヘラケズリで墨書あり。口径16.2cm, 器高1.7cm。

須恵器皿(30) 口縁部は肥厚し、内外面ナデ。外底部は回転ヘラケズリ。

須恵器壺(31) 逆ハ字形に開いて口縁端部を肥厚させる。復元口径17.0cm。

土師器坏(32) 体部は直線的に開く。外底部はヘラ切り。口径13.7cm, 器高3.9cm。

白磁皿(33) 白磁I類皿。輪状高台の暈付部と外底部は露胎。内外面は乳白色の釉。

陶器(34) 底部片。施釉の有無は不明だが、水注底部の可能性もある。

②区画溝

南北溝

S D2335出土土器 (Fig.55, PL.16)

須恵器蓋 (1~7) 1は口縁端部を肥厚させる。天井部は回転ヘラズリ。復元口径13.0cm。2は天井部と体部の境は強いナデによる段を有し、口縁端部が肥厚する。3は体部から口縁部で一度屈折させて口縁端部を肥厚する。天井部はヘラ切り。5は円柱状の撮みを有し、天井部は高く丸みを持つ。口縁端部は肥厚させて内側に沈線状の段を有する。口径13.6cm, 器高3.9cm。5は輪状の撮みを有する坏蓋。撮みは細く逆ハ字形に開き、口縁部を上方に撮み上げて端部を肥厚させる。天井部はヘラ切り、口径13.7cm, 器高1.5cm。6・7は須恵器壺蓋。6の口縁部の器壁は全体に厚い。天井部はヘラケズリ。7は復元口径17.8cm。

須恵器坏 (8~11) 8の体部は直線的に開き、外底部の端に丸みを持つ。低い逆台形の高台を貼付する。復元口径11.3cm, 底径6.6cm, 器高3.9cm。9は外底面端に逆台形の厚みのある高台を貼付し、体部と高台部の境が屈折したようになる。10は高台部の畳付内側が僅かに浮く。11は高台の外表面がナデにより沈線が巡ったようになる。

須恵器甕 (12) 頸部外面には叩板の先端があたり、疵になっている。復元口径25.6cm。

須恵器壺 (13) 厚みがあつてやや踏ん張る高台を底部端に貼付する。復元底径16.0cm。

灰釉陶器甕 (14) 口縁部が大きく湾曲して肥厚する端部に至り、外面には沈線が1条巡る。外面頸部下位には格子目のタタキ目あり。

土師器蓋 (15) 口縁端部を肥厚させて折り曲げる。外面には段が付く。復元口径19.6cm。

土師器皿 (16・17) 16は口径14.7cm, 器高1.5cmで外底部はヘラ切り。17は体部内外面をヘラミガキ、底部は回転ヘラケズリ。復元口径20.4cm, 器高2.8cm。

土師器坏 (18~20) 18は体部がやや内湾し、口径に対して底部径が小さい。体部下位から外底部は回転ヘラケズリ。内外面横位のヘラミガキ。口径11.5cm, 底径5.6cm, 器高3.0cm。19は体部から口縁部にかけて内湾しながら至る。内外面共にミガキ、外底部の調整は回転ヘラケズリ。20は底部をヘラケズリする。

土師器椀 (21・22) 21の体部は直線的に開き、外底部端付近に少し跳ねて反った高台を持つ。22の体部は直線的に開き、外底部には方形の高台を貼付する。体部下位、外底部を回転ヘラケズリ。また、内外器面は横位のミガキ。口径17.4cm, 底径9.7cm, 器高4.7cm。

S D2455 (Fig.55)

須恵器蓋 (23・24) 23は壺蓋。体部と口縁部の境は丸みを持って屈折し外口縁部で強いナデによる稜を作り出し、端部は少し踏ん張る。24は口縁部片。端部を折り返して肥厚する。

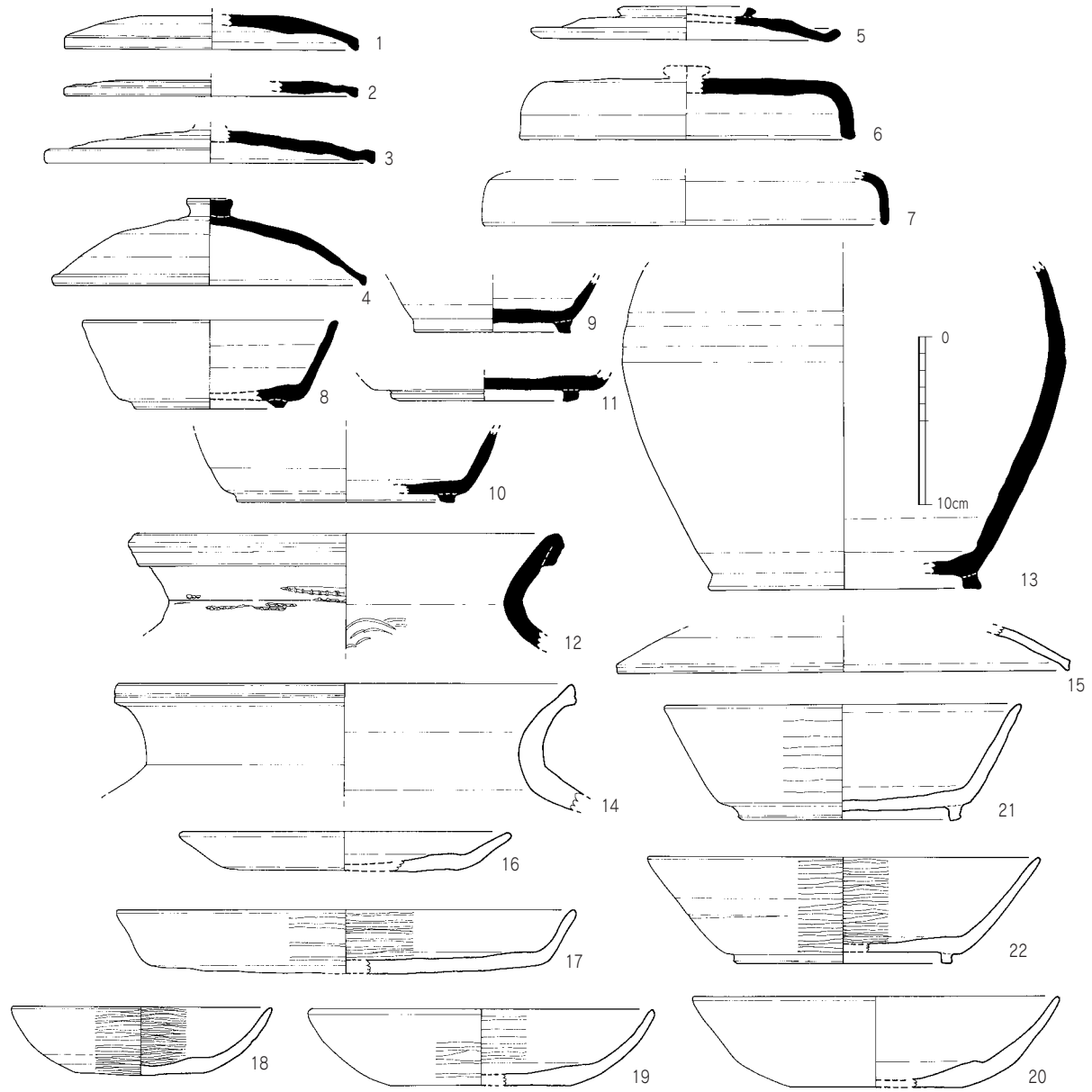
須恵器坏 (25・26) 25は直線的に開く体部で、高台は低い逆台形。復元口径12.0cm, 底径7.2cm, 器高4.5cm。26は底部片で、方形の高台の畳付には僅かに沈線が巡る。

土師器蓋 (27) 口縁内面に段を有する。内外面共に横位のミガキ。

土師器坏 (28・29) 28は体部中位で僅かに肥厚する。口径12.0cm, 器高3.3cm。29は外内面に横位のミガキ。外底部は回転ヘラケズリ。

灰釉陶器碗 (30) 体部は丸みを持ちながら開き、口縁端部は外反する。体部外面は露胎で、黄緑色の施釉。外底部は回転ヘラケズリ。S X2336などで出土した破片が接合する。

SD2335



SD2455

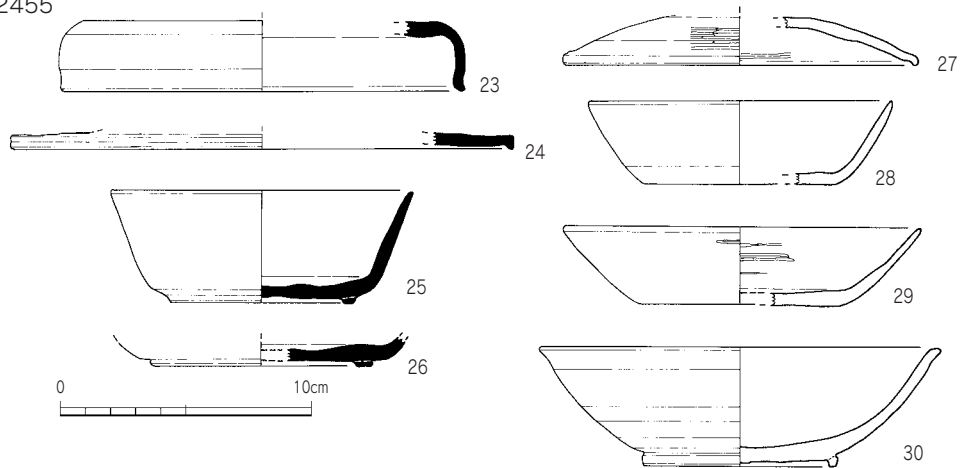


Fig.55 区画溝出土土器実測図 (1) 83・87次SD2335, 84次2455 (1/3・1/4)

S D2015出土土器 (Fig.56~60, PL.16・17)

ここでは次数ごとに溝下位より順番に報告する。Fig.56~58は76次調査資料である。

〈1~40：76次下層（A）出土資料〉

須恵器蓋（1~6） 1は口縁内側に身受けの段を有する。外天井部はヘラ切り未調整。2は高く丸みを持った天井部からそのままだらかに口縁に至る。口縁端部は肥厚させる。3~6は円柱状の撮みを持つ。3は体部と口縁部の境を屈折させ、口縁端部を丸め込むように肥厚させる。4は焼き歪みが大きい。口縁端部を肥厚させながら撮み出し、端部は僅かに踏ん張る。外天井部は回転ヘラケズリ後にナデ。5は天井部と体部の境をナデによって明瞭にする。口縁端部を肥厚させ、内側に沈線を巡らせる。6は撮みの中央部が突起状となり、天井部も比較的高く、体部との境も明瞭である。口縁端部は丸みを持っており、僅かに屈曲させる。外天井部は回転ヘラケズリ後ナデ。口径21.8cm。

須恵器杯（7~14） 7~11は有高台杯。7の体部は直線的に開き、方形の高台を底部の端に貼付する。焼成は堅緻で、復元口径11.6cm。8は直線的に開く体部から口縁部が僅かに肥厚して外反する。低い逆台形の高台を底部端に貼付する。9は直線的な体部と底部の境は明瞭である。高台は僅かに外に跳ねる。復元口径13.0cm、底径7.0cm、器高3.5cm。10は体部下位に丸みを持って口縁部へ僅かに外反しながら至る。方形で低い高台を貼付する。胎土は精良である。11は大型の杯で、体部は直線的に開き、やや踏ん張る高台を底部端付近に貼付する。外底部はヘラ切り。口径15.4cm、底径9.4cm、器高5.8cm。12~14は無高台の杯。12の体部下位は整形の際のヨコナデによって稜を持ち、口縁部は直線的に開く。外底部はヘラ切り後にナデ。口径13cm、底径7.8cm、器高3.5cm。13は体部にロクロナデによる稜を明瞭にする。外底部はヘラ切り。14の体部は直線的に開きながら口縁部を僅かに外反させる。器壁は薄く胎土も精良である。外底部はヘラ切り後にナデ。復元口径13.2cm、器高3.3cm。

須恵器甕（15） 頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部を肥厚させる。灰茶褐色に焼成され、復元口径20.0cm。

土師器蓋（16） ボタン状の撮みを持ち、天井部と体部の境を明瞭にしながらか口縁端部を肥厚させる。内外面ともにロクロによるミガキ。口径19.6cm、器高2.5cm。

土師器杯（17~26） 17・18は小型の土師器杯。17の体部は直線的に開き、器壁は底部に比べ薄い。外底から口縁部付近までヘラケズリ、体部内面と口縁部内外はヘラミガキ。口径9.7cm、底径5.8cm、器高3.4cm。18は丸身を持った体部で、口縁部が僅かに外反する。外底部はヘラケズリで、ヘラ記号がある。19・20も外底部にヘラ記号がある。19は外底部と体部下位をヘラケズリし、体部の内外は横位のミガキ。外底部には「*」状のヘラ記号。20は土師器杯の底部片で、体部内外面ともにヘラケズリ後にミガキ。21~25は口径13.2~14.0cm、底径6.6~7.6cmである。外底部は、21~23が回転ヘラケズリ、24・25がヘラ切りで、24には板状圧痕あり。21~23は内外にミガキ。25の体部は丸みが少ないが大きく開く。26は体部に丸みを持ちながら大きく開く。内外面はロクロによるミガキ、外底部は回転ヘラケズリ。復元口径17.0cm、底径9.0cm、器高3.5cm。

土師器皿（27~30） 27は体部から口縁部にかけて先細りとなる。外底部はヘラ切り後ナデ。復元口径17.0cm、底径15.0cm、器高2.6cm。28~30は外底部を回転ヘラケズリし、体部と

SD2015 下層A

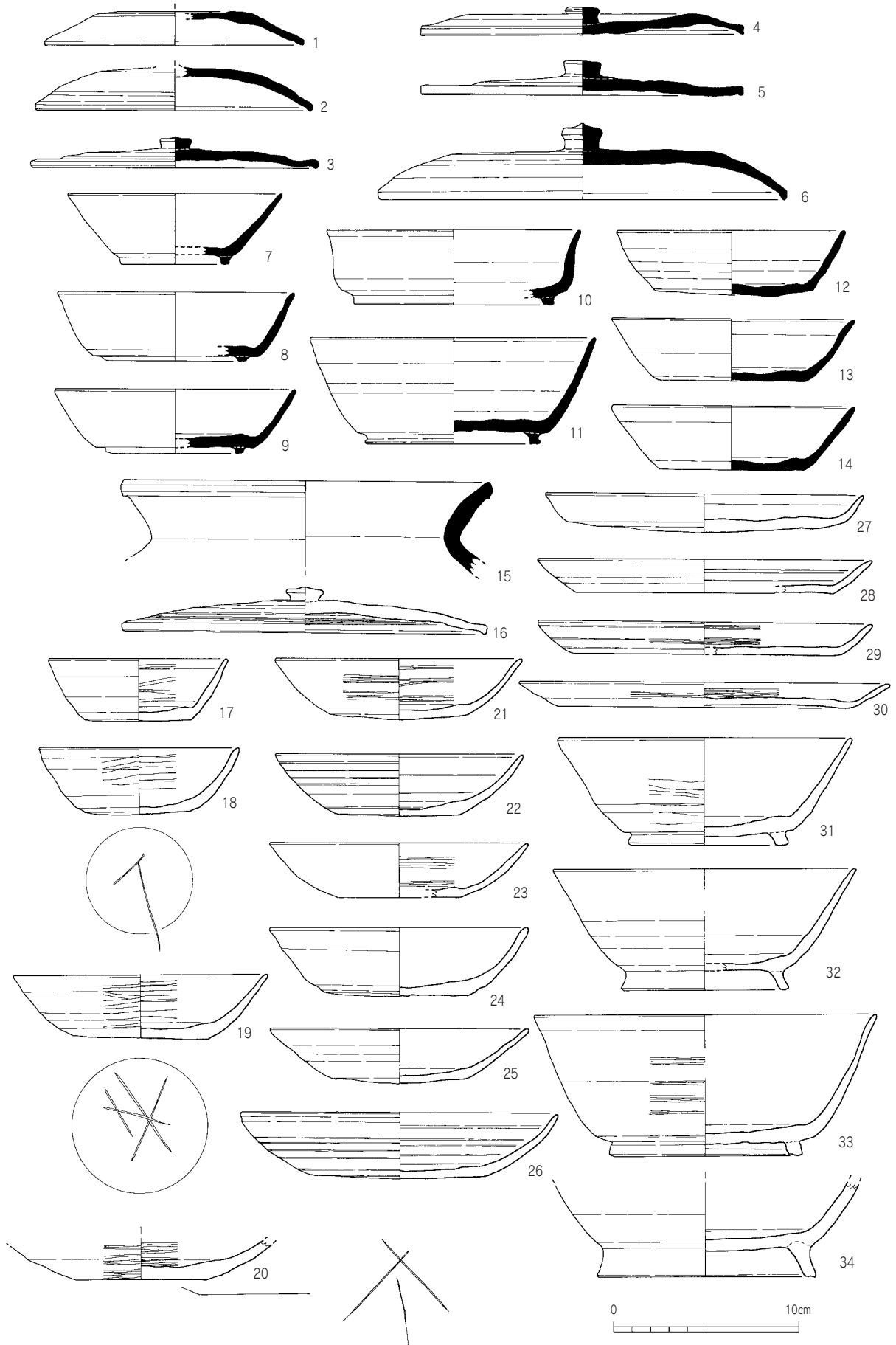
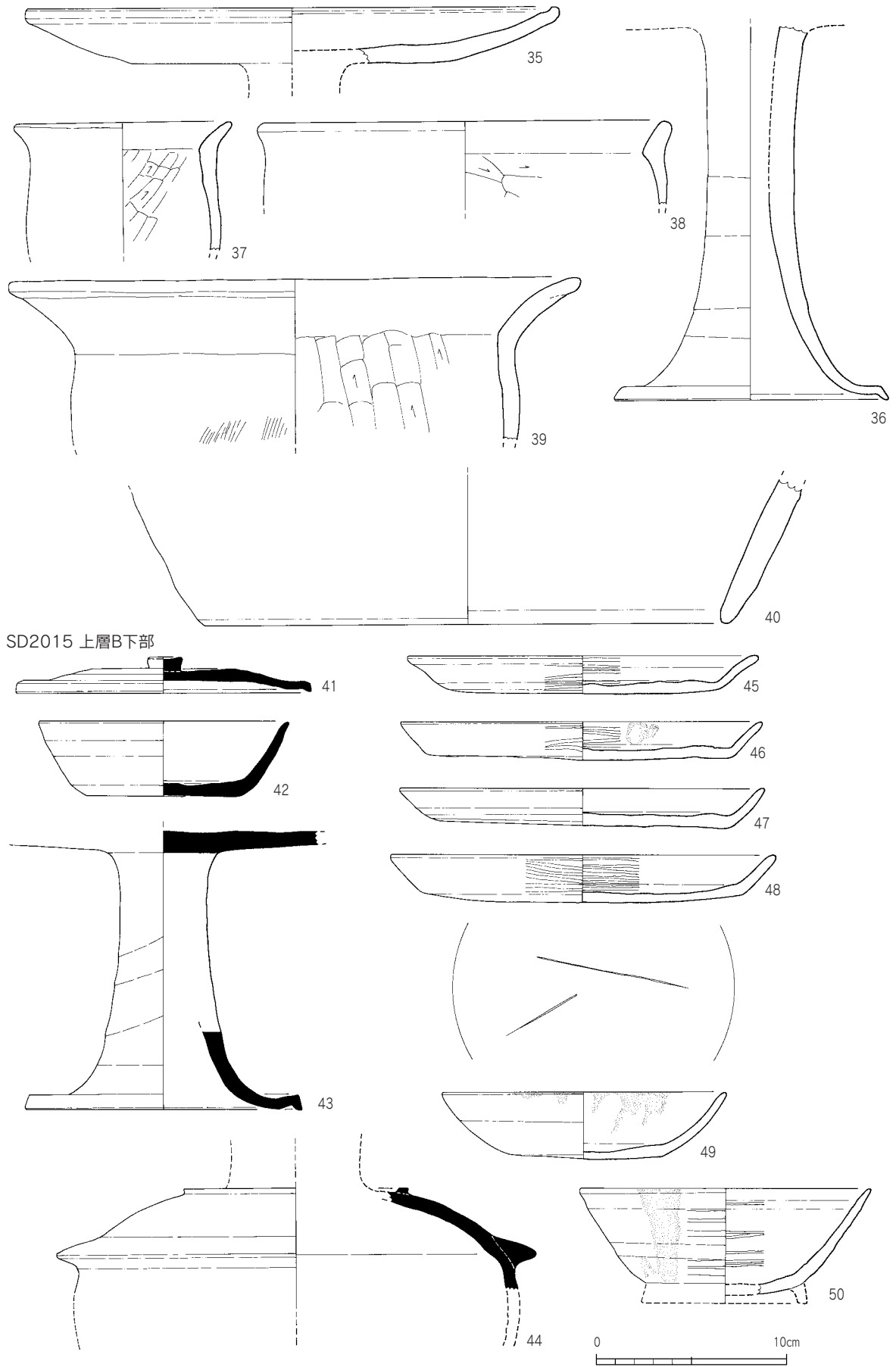


Fig.56 区画溝出土土器実測図 (2) 76次SD2015 (1/3)



SD2015 上層B下部

Fig.57 区画溝出土土器実測図 (3) 76次SD2015 (1/3)

底部の境を明瞭にする。特に30は体部下位を強くナデて、器壁を薄くする。28は内面ロクロ使用のミガキ、29・30は内外ミガキ。30の口径は19.8cm、底径16.0cm、器高1.4cm。

土師器椀 (31~34) 31は体部下位に丸みを持ち、厚く低い高台を貼付する。全体に磨滅しているが、外面には僅かにミガキが残る。32は直線的に開く体部で、細く高い方形でハ字形に開く高台を貼付する。内外面にミガキの痕跡を一部確認できる。33は大型の椀で、高台は高く、暈付に僅かに沈線状の窪みを持つ。胎土は精良。34の高台は高く、ハ字形に開く。

土師器高坏 (35・36) 35の坏部は口縁端部が肥厚し、沈線を巡らす。外底部は磨滅著しいが僅かに回転ヘラケズリの痕跡がある。36は脚部で比較的長い脚部から裾部へ至り、端部を折り返す。焼成は堅緻である。裾部径14.4cm、脚部高19.8cm。

土師器甕 (37~39) 37は頸部が僅かに外反し、口縁端部は細くなる。内面頸部下位は斜位のケズリ。38は短い口縁端部を肥厚させる。復元口径21.2cm。39は口縁部が大きく外反する。外面は頸部下位に僅かにハケ目、内面には縦位のケズリがある。外面は煤が付着し黒変している。復元口径30.0cm。

土師器甗 (40) 体部下半が筒状となる土師器で、甗類に関わる資料か。裾端部は、横位のナデで仕上げる。器面は粗い。

〈41~50：76次上層 (B) 下部出土資料〉

須恵器蓋 (41) 天井部は低平で口縁部を屈折させ、肥厚した端部を僅かに曲げる。天井部はケズリ。口径15.5cm、器高1.9cm。

須恵器坏 (42) 体部から口縁部へは直線的に開いて至る。外底部の調整は磨滅により不明。

須恵器高坏 (43) 脚部はラッパ状に開いて裾部へ至る。裾端部は嘴状に折り返し、断面三角形となる。裾径は14.5cm。

須恵器壺 (44) 壺の胴部片で、肩部はやや丸みを持ち、体部との境に断面三角形の大型凸帯を貼付する。頸部下位には断面方形の凸帯を持つ。肥後系であろう。

土師器皿 (45~48) いずれも体部下位から外底部をヘラケズりする。口径18.4cm~20.3cm、底径14.0~16.8cm、器高1.4~2.1cm。47を除き体部内外面に横位のミガキ。45の口縁部は肥厚しながら僅かに外反する。46は内面に油煙が付着。

土師器坏 (49) 体部下位、外底部をヘラケズリ。内外面にヘラ記号がある。内面から口縁部にかけて油煙が付着している。

土師器椀 (50) 内外面はヨコナデ後に横位のミガキ。外底部にヘラ記号あり。

〈51~75：76次上層 (B) 出土資料〉

須恵器蓋 (51) 円柱状の撮みを持ち、口縁部を直角に折り曲げる。短頸壺の蓋で、天井部はヘラケズリ。口径8.8cm、器高2.2cm。

須恵器坏 (52~55) 52・53は無高台。52の体部は直線的に開き、外底部はヘラ切り。口縁部内面に煤付着。53は口縁部が僅かに外反する。外底部にはヘラ切り後の板状圧痕あり。復元口径12.6cm、底径7.9cm、器高3.7cm。54は平らな底部の端に逆台形の低い高台を貼付し、体部は直線的に開く。55はハ字形に開く高台を底部端に貼付し、体部は大きく開きながら内湾して端部に至る。体部下位と外底部はヘラケズリ。

須恵器皿 (56) 体部はヨコナデ、外底部はヘラ切り離しで未調整。復元口径17.2cm。

SD2015 上層B

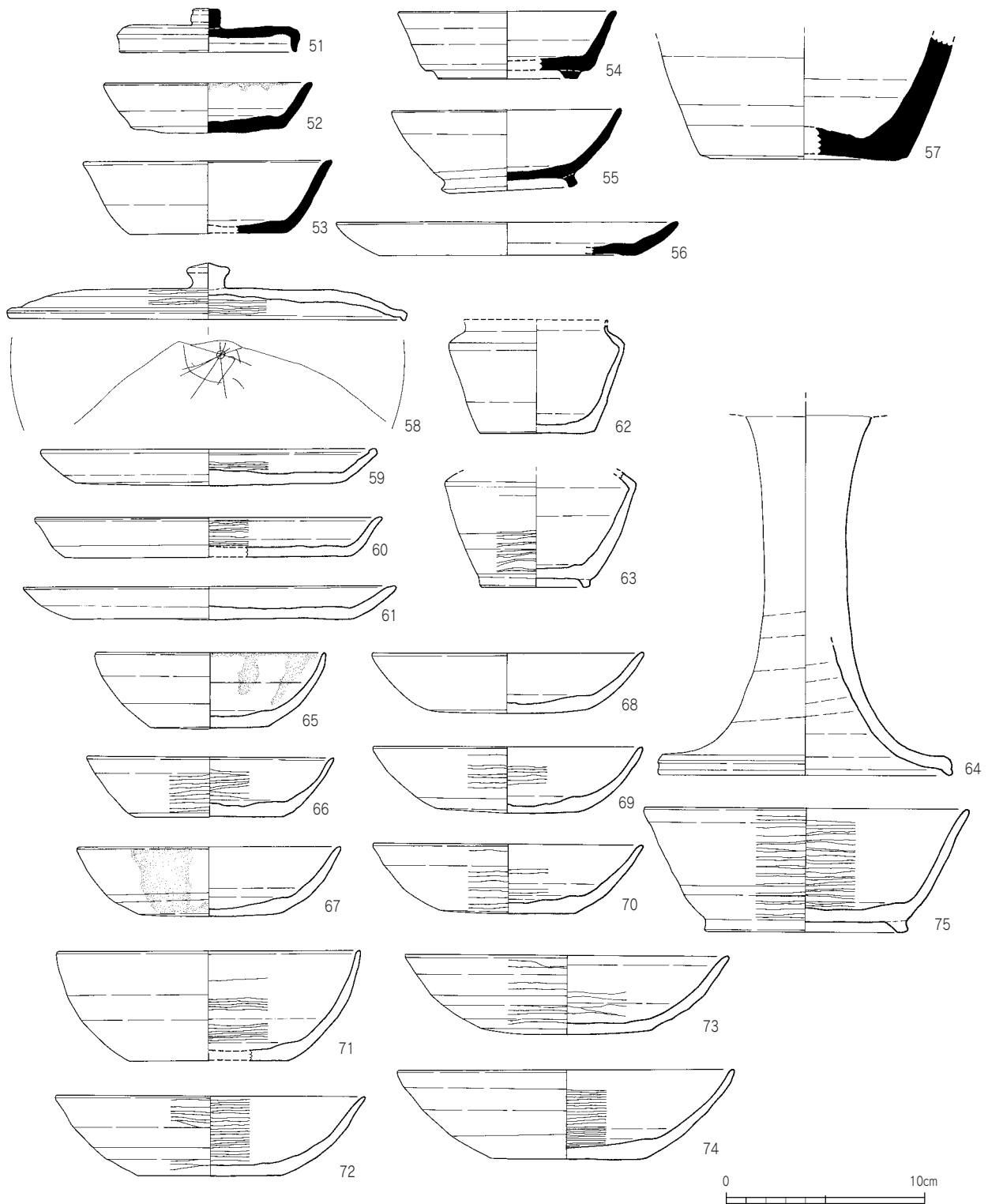


Fig.58 区画溝出土土器実測図(4) 76次SD2015 (1/3)

須恵器壺 (57) 壺底部片。外底部から体部はヘラケズリするが、外底部には円弧のタタキ目あり。内面にはナデ後に底部と体部を接合するためのヘラオサエ痕がある。

土師器蓋 (58) 天井部はヘラケズリで、口縁部を屈折させて端部を僅かに折り曲げる。復元口径20.3cmで、内面中央に放射状の線刻文様がある。

土師器皿 (59~61) 59は肥厚する口縁部内面に沈線を持ち、外底部と体部下位はヘラケ

ズリ、内面はミガキ。口径17.0cm、器高1.8cm。60は口縁部を外反させる。外底部と体部下位をヘラケズリ、体部内面はヨコナデ後にヘラミガキ。61の体部は肥厚し、口縁部内面に沈線を巡らす。外面体部から底部をヘラケズリする。

土師器壺(62・63) どちらも広口短頸壺の小型品。62の体部は開いて肩部を屈曲させるが、細く仕上げる口縁を欠損する。外底部から体部下位をヘラケズリする。63は方形の高台を貼付する。体部下位にヘラミガキの痕跡がある。おそらく磨滅著しい62もヘラミガキがあったものと思われる。

土師器高坏(64) 脚部片で、下位はラッパ状に大きく開き、裾端部を嘴状に折り返して踏ん張り、外面に沈線を巡らす。脚高は18.0cm。

土師器坏(65~74) 口径11.6~13.6cm、器高3.0~3.8cmのものと、口径15.2~16.9cm、器高4.0~5.5cmの大型のものに分かれる。最も器高の高い71は椀に近い形態となる。68以外はいずれも体部下位と外底部はヘラケズリ。66・69・70・72~74の内外面はヘラミガキ。また、65は内面に、69・72は外面にそれぞれ油煙が付着している。74はほぼ完形で赤褐色を呈する。

土師器椀(75) 低い方形のやや踏ん張る高台を貼付し、体部は直線的に開く。外底部と体部下位をヘラケズリし、外底部以外の内外面をヘラミガキする。口径16.4cm、底径10.3cm、器高6.2cm。

Fig.59・60は85次調査資料。

〈1~7：下層(A)出土資料〉

須恵器蓋(1) 天井は低く、口縁端部は丸く肥厚する。復元口径20.0cm。

土師器蓋(2) 撮みは突起状となって高い。口縁端部は僅かに折り曲げる。外天井部は回転ヘラケズリ。口径20.5cm。

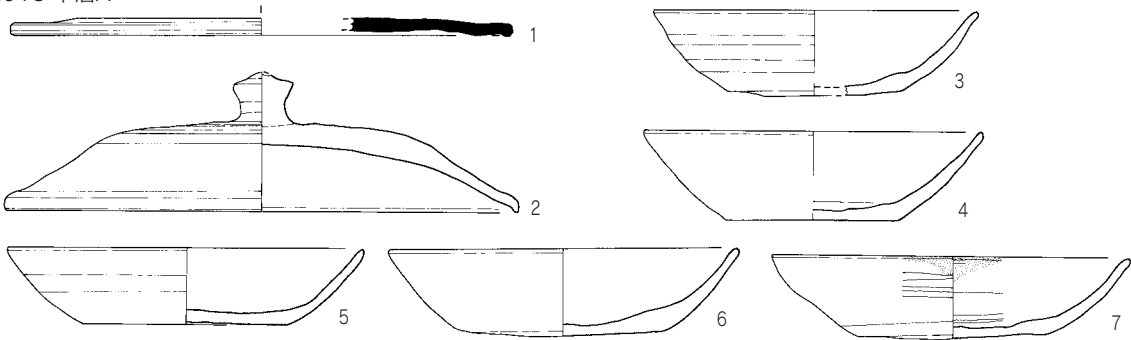
土師器坏(3~7) 3・4・7は体部下位をヘラケズリして、底部径に対して口径が大きくなる。3は体部に僅かな丸みを持ち口縁部が開く。口径13.0cm、底径6.9cm。4の体部の器壁は口縁部に向かうにつれて次第に薄くなる。外底部はヘラ切り。5は外底部をヘラ切り後ナデ。6の外底部は回転ヘラケズリ。口径14.0cm、底径8.0cm、器高3.5cm。7は口縁端部を僅かに外反させる。内外面は横位のミガキで、外底部はヘラ切り。口縁部内外に煤が付着しており、灯火器として使用したのであろう。

〈8~38：上層(B)出土資料〉

須恵器蓋(8~10) 8は口縁部を屈折させて端部を僅かに折り曲げる。外天井部はヘラ切り未調整。復元口径12.0cm。9は円柱状の撮みを持ち、天井は低平気味である。口縁部内面に段を有し、端部を丸く肥厚させる。外天井部はヘラ切り未調整。口径14.0cm、器高2.3cm。10は細く鋭い輪状の撮みを持つ。比較的lowな天井部を持ち、口縁端部を嘴状に僅かに折り返す。外天井部はヘラ切り未調整。復元口径20.4cm。

須恵器坏(11~14) 11は無高台。体部内外面ナデ調整で、外底部はヘラ切り離し。口径10.7cm。底径7.3cm、器高2.6cm。12・14は有高台坏。12は体部が直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。高台は低い方形で、底部の端に貼付する。復元口径11.4cm、底径7.4cm、器高3.5cm。13は無高台。体部下位に丸みを持つ。外底部の調整は不明。14は高く直立する

SD2015 下層A



SD2015 上層B

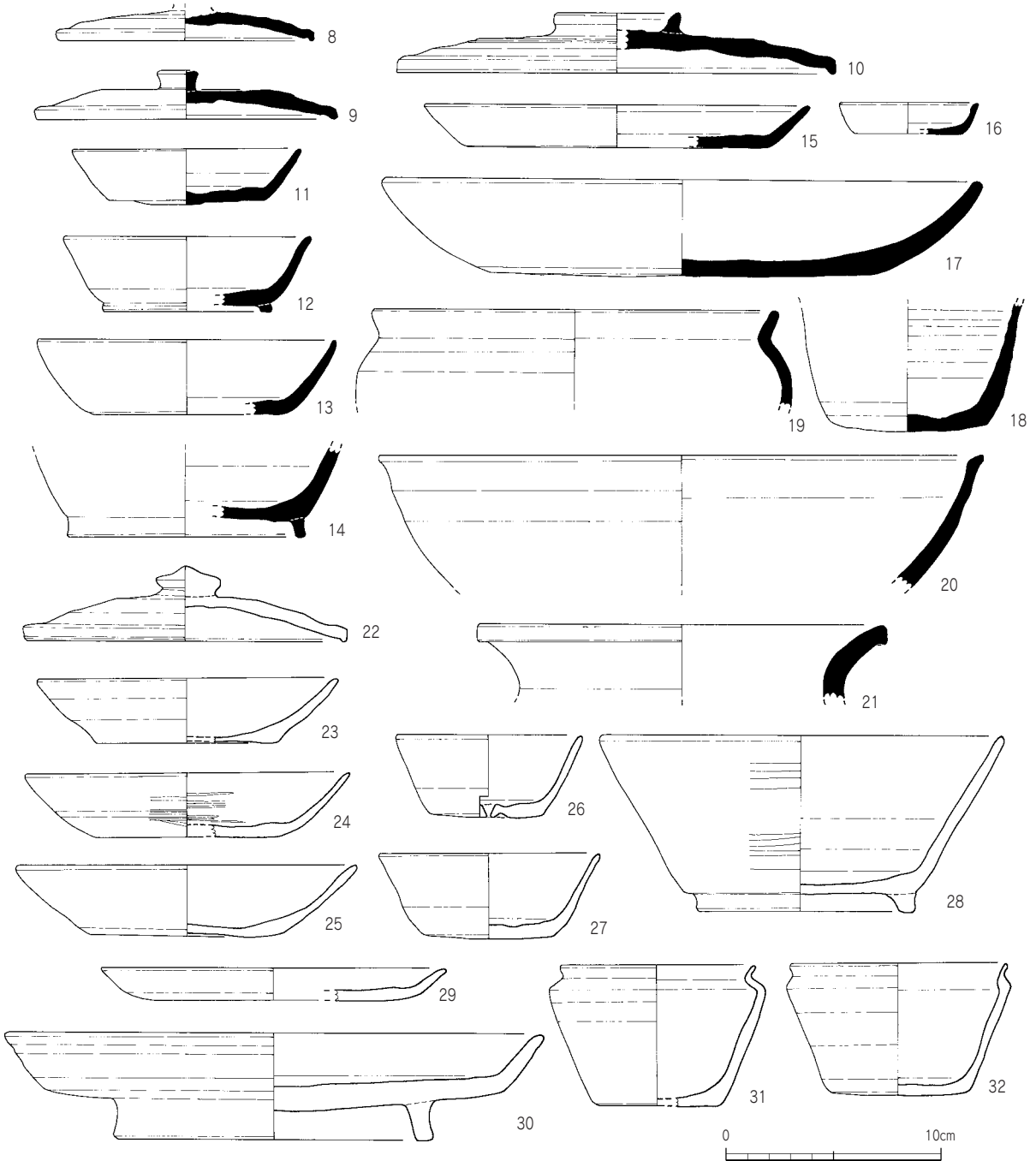


Fig.59 区画溝出土土器実測図 (5) 85次SD2015 (1/3)

高台を底部端に貼付する。体部下位はハ字形に開いている。

須恵器皿 (15・16) 15は外底部をハケ状の工具でナデる。16は小型皿で、口径6.4cm、底径5.0cm、器高1.4cm。

須恵器盤 (17) 大型品で体部下位と外底部を回転ヘラケズりする。口径27.8cm、底径18.0cm、器高4.5cm。

須恵器椀 (18) 体部下位から外底部をヘラケズりする。

須恵器壺 (19) 口縁部が僅かに外反し端部を平らにする。内外面ナデ。復元口径19.6cm。

須恵器鉢 (20) 体部は大きく開き口縁部が肥厚する。内外面横位ナデ。復元口径28.0cm。

須恵器甕 (21) 口縁部で大きく外反し、底部は肥厚する。復元口径18.8cm。

土師器蓋 (22) ボタン状の撮みを持ち天井部は比較的高い。口縁端部は肥厚し、内面に僅かな段を有する。器面の磨滅が激しく調整は不明。口径15.0cm。器高3.5cm。

土師器環 (23~27) 23は体部下位を強くナデる。外底部はヘラ切り後ナデ。外面にはミガキを僅かに観察できる。24の外底部は回転ヘラケズリ。25の体部は僅かに内湾し、器壁は薄い。体部下位と外底部は回転ヘラケズリ後、内外面にミガキ。26・27は小型環。26は完形品で内外面よりそれぞれ穿孔を試みているが、内面からのみ貫通している。器面の調整は磨滅により不明。口径8.6cm、底径5.4cm、器高3.8cm。27は体部中位から口縁部にかけて僅かに外反する。器壁は薄く胎土も精良である。体部下位と外底部は回転ヘラケズリ。

土師器椀 (28) 大型品で断面四角形の高台を底部端に貼付し、体部は直線的に開く。体部下位はヘラケズリ、外底部はヘラ切り。口径18.8cm、底径10.1cm、器高8.2cm。

土師器皿 (29) 復元口径16.0cm、底径11.0cm、器高1.5cm。磨滅により調整不明。

土師器盤 (30) 高い高台を有する。体部下位と外底部はヘラケズリ。内外面ともにヘラミガキを確認できるが磨滅のため単位などは不明。口径25.0cm、高台径14.9cm、器高5.0cm。

土師器壺 (31・32) 小型短頸壺。どちらも肩部を屈折させた後、口縁部が開く。口縁端部の器壁は著しく薄い。内外面共に本来はヘラミガキで調整したとみられる。

土師器高環 (33) 接合によって完形品となる。口縁部内面に沈線を巡らせ、環部の内外面は丁寧なヘラミガキ。脚部は細いところで径4.8cm、下位はラッパ状に開く。裾端部は高く折り返して僅かに踏ん張る。口径25.6cm、器高20.4cm、裾径15.7cm。

緑釉陶器碗 (34・35) 34は土師質で、淡黄緑色の釉が発色している。高台端から底部にかけて回転ヘラケズリにより蛇ノ目高台を作出する。体部は直線的に大きく開く。口径13.9cm、底径6.4cm、器高3.4cm。35は円状高台を有するか焼成は軟質である。体部外面には山形、内面にはジグザグ状に交差するヘラミガキ。

灰釉陶器碗 (36) 器壁は薄く口縁端部は僅かに外反する。復元口径18.0cm。

青磁碗 (37) 越州窯系青磁碗で、淡灰緑色に発色する。

陶磁器碗 (38) 小型浅形の碗。釉は黄緑褐色に発する。畳付に沈線を巡らす。

S D2470出土土器 (Fig.60)

須恵器蓋 (39~41) 39の天井部と体部の境は明瞭で、口縁端部を肥厚させる。外天井部はヘラ切り。復元口径14.0cm。40は口縁端部を僅かに折り返す。外天井部はヘラケズリ後ナデ。41は口縁端部を肥厚させる。外天井部は回転ケズリ。復元口径20.4cm。

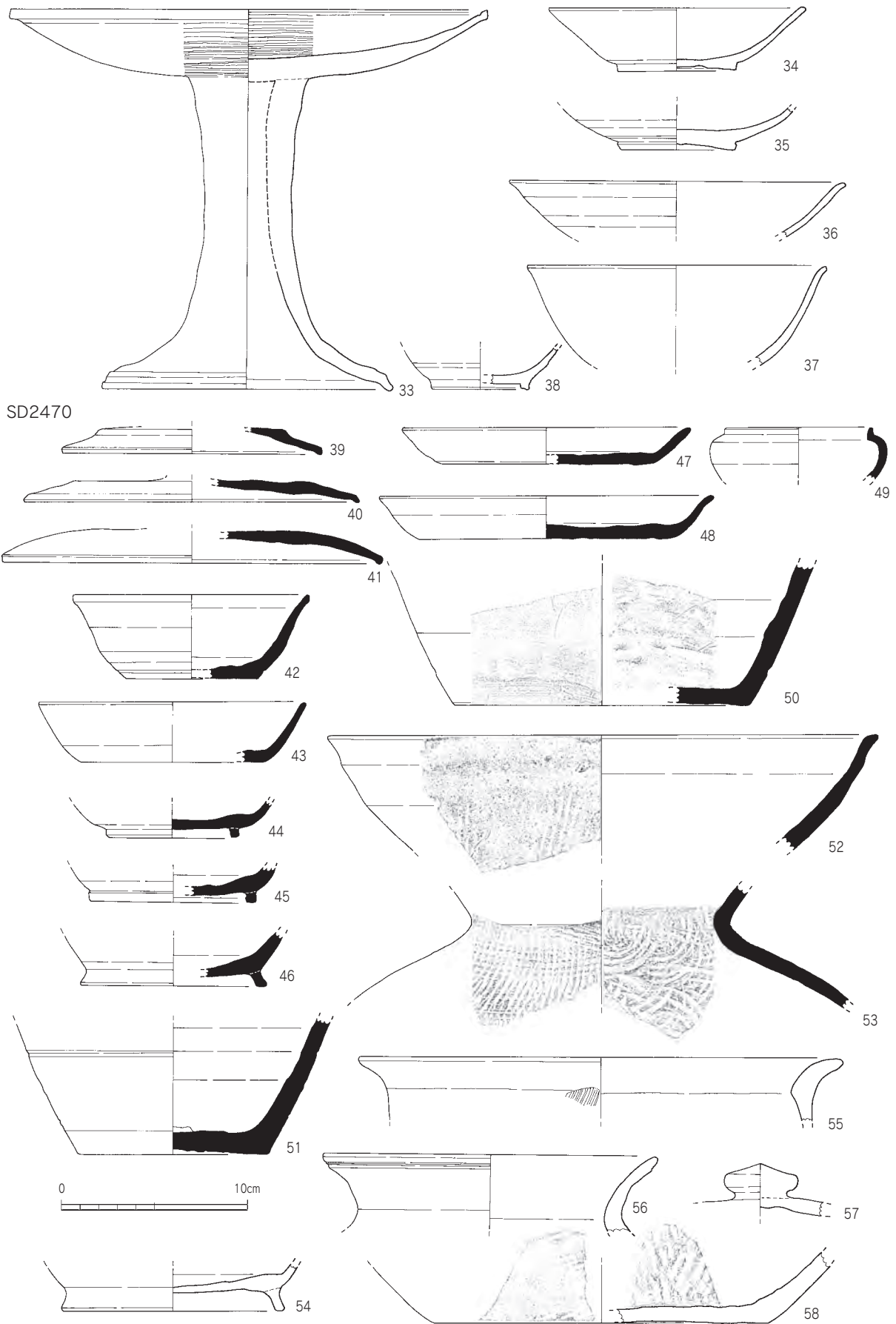


Fig.60 区画溝出土土器実測図 (6) 85次SD2015・2470 (1/3)

須恵器環 (42~46) 42・43は無高台の環。42の口縁端部は僅かに肥厚して外反する。体部下位と外底部は回転ヘラケズリ。口径12.7cm, 底径7.0cm, 器高4.5cm。43の体部は丸みを持って直線的に開く。外底部はヘラ切り後ナデ。44~46は有高台環。44・45は低く方形の高台を外底面端部に貼付する。体部下位は丸みを帯びる。46はハ字形に開く高台を外底部端に貼付する。体部は大きく開くであろう。外底部はナデ。

須恵器皿 (47・48) 47の体部は直線的に開き, 外底部はヘラ切り。復元口径15.5cm, 底径11.9cm, 器高2.0cm。48は器壁の厚い底部に対して体部は薄い。口縁部は僅かに外反する。外底部はヘラ切り後ナデ。口径19.0cm, 底径13.6cm, 器高6.8cm。

須恵器壺 (49~51) 49は葉壺形で肩が大きく張り, 口縁は短く直立する。復元口径8.0cm。50・51は壺の底部片。50は体部下位をヘラケズリ, 外底部に円弧状のタタキ後ナデ。復元底径16.0cm。51は体部中位に平行タタキ, 下位にヘラケズリ。外底部には円弧状のタタキ目を有する。内面体部と底部の境は指頭によるナデ。

須恵器鉢 (52) 体部は平行タタキ後ナデ。復元口径29.6cm。

須恵器甕 (53) 外面は頸部下位を平行タタキ。内面頸部は回転ナデ。

土師器椀 (54) ハ字形に開く高い高台を貼付し, 外底部は回転ヘラケズリ。底径11.8cm。

土師器甕 (55) 口縁部片。短い口縁が大きく外反する。内面頸部下位はヘラケズリ。

灰釉陶器壺 (56) 口縁部片で, 大きく湾曲して外反する。口縁端部付近の外面には2条の沈線を巡らす。胎土は精良で復元口径18.0cm。

灰釉陶器蓋 (57) 蓋の撮み部。大型で胎土は精良。

灰釉陶器甕 (58) 底部片で, 体部下位はタタキ後ナデ。内面にも工具痕あり。底部外面はナデ。

S D4570出土土器 (Fig.61・62, PL.18)

ここでは溝の下部で分離できたAとBに分けて報告する。

溝A出土資料 (Fig.61)。

〈1~29: A下層出土資料〉

須恵器蓋 (1~3) 1は体部と口縁部の境がなく端部へ至る。端部外面に沈線を巡らす。外天井部はヘラ切り後ナデ。復元口径12.8cm, 器高1.8cm。2は円柱状の撮みを持つ。口縁端部は丸みを持って肥厚し, 内面には身受けの段を有する。外天井部はヘラケズリ。口径18.8cm, 器高2.9cm。3の口縁部は鋭く直角に折り返して直立する。

須恵器環 (4~7) 4は鉢のように体部が大きく開く。器壁は比較的薄い。5は底部端に低く踏ん張る高台を貼付し, 体部中央は押し出されて沈む。底径9.2cm。6は平らな底部に低い高台を貼付し, 体部は直線的に開く。7は小型の環で, 体部と底部の境に三角突帯を貼付する。高台端部は僅かに内側に肥厚する。

土師器蓋 (8) 天井部は丸みを帯び, 口縁部で屈折して端部へ至る。口縁端部は肥厚させ, 内面に段を有する。復元口径19.0cm。

土師器皿 (9~15) 9~14は口径14.4~14.8cm, 器高1.7~2.1cm。9は口縁端部を欠損するが, 外底部はヘラ切り。10~12は体部が直線的に開きながら口縁部が外反する。体部の器壁は底部に対して薄い。14を除き外底部はいずれもヘラ切り。14は体部下位と外底部が

SD4570A 下層

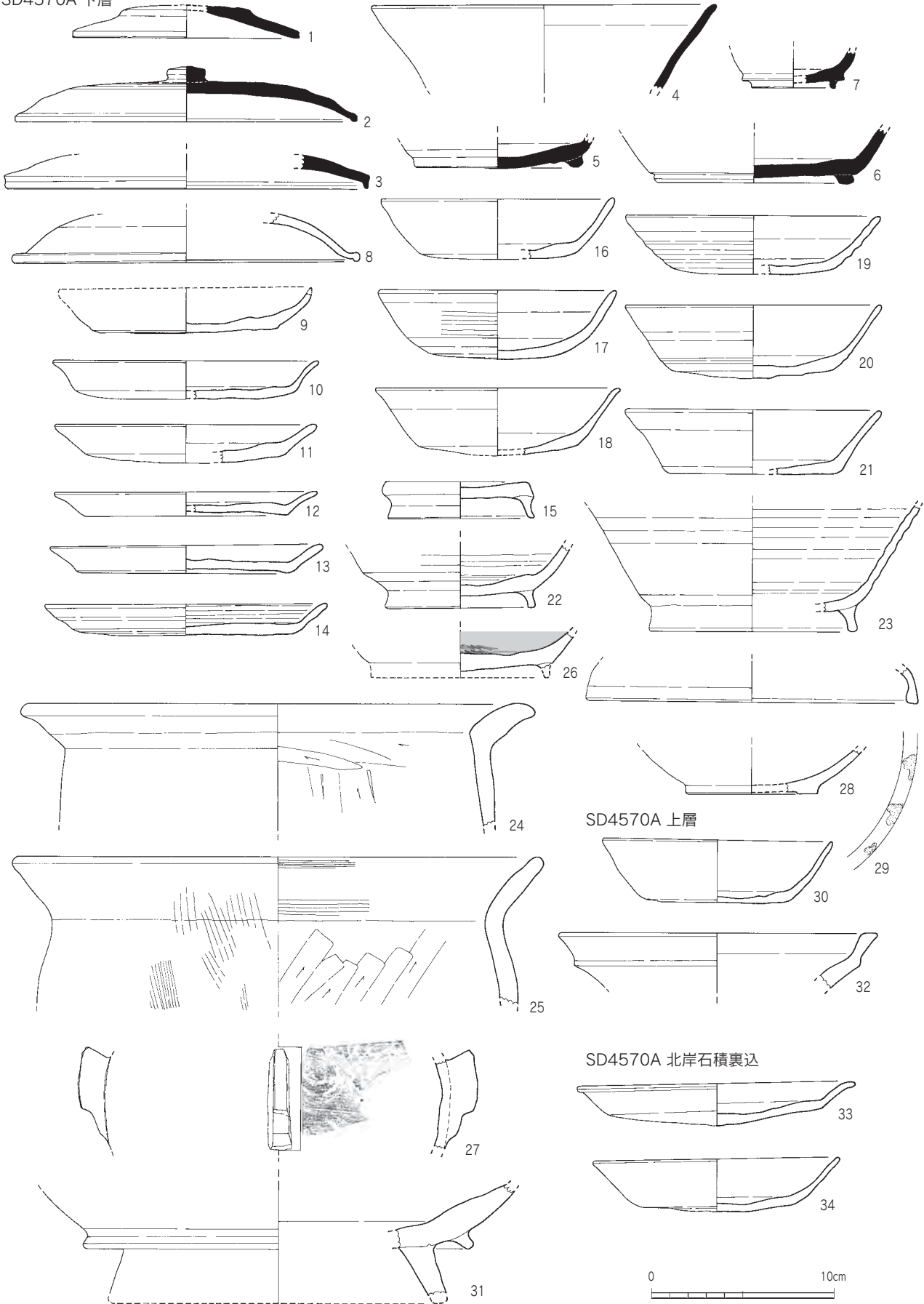


Fig.61 区画溝出土土器実測図 (7) 187次SD4570 (1/3)

回転ヘラケズリ、内外面ヘラミガキ。15は碗を転用して皿にしたもの。器体の側面を丁寧に磨いている。

土師器環 (16~21) 口径12.6~14.0cm, 器高3.2~4.0cmで、いずれも体部は大きく八字形に開く。17は体部下位が丸く、底部との境は不明瞭である。逆に21の体部と底部の境は明瞭である。17の体部下位と底部は回転ヘラケズリ、体部外面はヘラミガキ。18・20はヘラ切りで、20は板状圧痕あり。

土師器碗 (22・23) 22は外底部に方形の高台を貼付し、体部下位が丸みを持って開く。体部下位には回転ヘラケズリ。23は器壁が薄く、体部は直線的に開く。

土師器甕 (24・25) 24の口縁部は肥厚して外反する。内面頸部下位はケズリ。復元口径28.0cm。25は外面胴部にハケ目、口縁部内面に横位のハケ目、頸部下位はヘラケズリ。

黒色土器碗 (26) A類碗。高台を欠損する。内底面はミガキ、外底部はヘラケズリ。

灰釉陶器壺 (27) 方形の把手が付く灰釉陶器の胴部片。外面把手は工具によるケズリとナデ、内面は当て具痕跡をナデる。

白磁碗 (28) 刑窯系の白磁碗I類。蛇ノ目高台の底部片で、畳付のみ露胎となる。

青磁蓋 (29) 越州窯系青磁の蓋。灰緑色に発色し、口縁端部には目跡がある。胎土は精良。復元口径18.2cm。

〈30~34：A上層出土資料〉

土師器環 (30) 外底部はヘラ切り。口径12.6cm, 器高3.4cm。

土師器鉢 (31) 高台部で体部と底部の境に三角の突帯を巡らす。

灰釉陶器壺 (32) 頸部から開く口縁部を一度屈折させて端部を肥厚させる。内外面に暗緑色の釉が発色する。復元口径17.2cm。

〈33・34：溝A北岸石積みの裏込め出土資料〉

土師器皿 (33) 口縁部を大きく外反させる。外底部はヘラ切り。口径15.0cm。

土師器環 (34) 体部は直線的に開く。外底部はヘラ切り後、板状圧痕有り。口径13.6cm, 器高2.9cm。

溝B出土資料 (Fig.62)

〈1~35：B下層出土資料〉

須恵器蓋 (1) 天井部は高く、口縁端部を丸く肥厚させる。

須恵器環 (2~8) 2は外底部に大きく跳ねる高台を貼付する。体部は直線的で、口縁は肥厚する。復元口径9.8cm, 底径4.0cm, 器高3.5cm。3・4は低い高台を外底面端に貼付する。4の体部は直線的に開く。5~7は大型品。5の高台は僅かに踏ん張る。外底面は回転ヘラケズリ。6は太く大きな高台を底面端に貼付する。7の底部は中央で外に低く張り出す。8は大型の口縁部片で大きく開く。

須恵器甕 (9) 口縁は八字形に開き、端部を平坦に仕上げる。復元口径20.0cm。

須恵器壺 (10) 底部片。体部下半と外底部は回転ヘラケズリ。内面に工具痕あり。

土師器蓋 (11) 口縁端部を肥厚させ、内面には身受けのための僅かな段を有する。

土師器皿 (12~18) 12・13は高台付皿。12は太く低い高台を貼付し、体部は直線的に開く。口径13.2cm, 器高2.0cm。13は細くて端部が鋭い高台を貼付する。体部は大きく開く。

SD4570B 下層

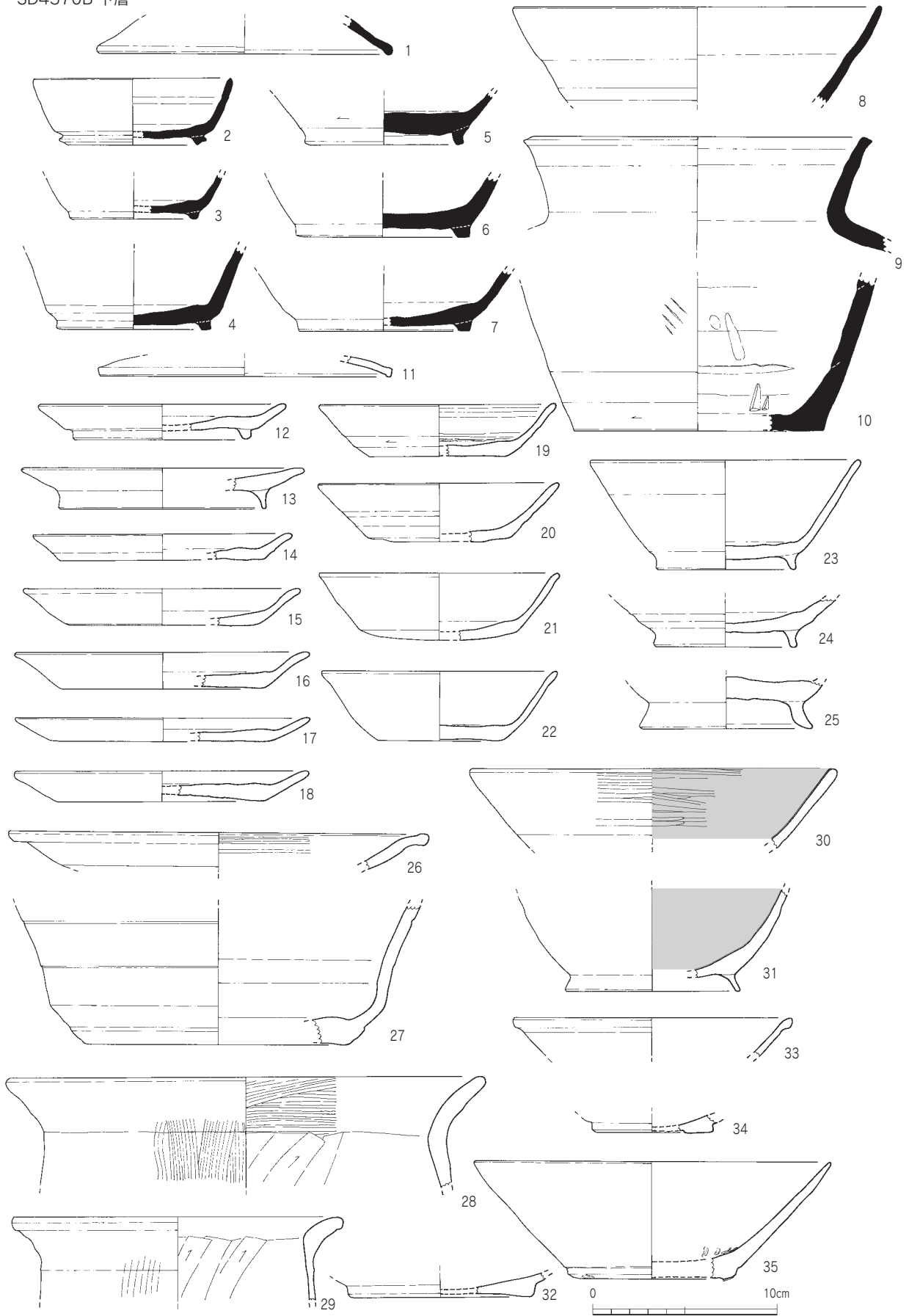


Fig.62 区画溝出土土器実測図 (8) 187次SD4570 (1/3)

13～18は口径14.0～16.0cm，器高1.5～2.0cm。磨滅で不明な15以外は外底部ヘラ切り。体部はいずれも大きく開く。

土師器環（19～22） 19～22は口径12.8cm～13.0cm，器高2.8～3.7cm。19は体部下位と外底部を回転ヘラケズリ。体部内外面をヘラミガキ。20は体部中位にロクロによる稜を作る。21の外底部はヘラ切り。22の口縁部は僅かに肥厚して外反する。外底部は回転ヘラケズリ。

土師器椀（23～25） いずれも高台を外底部の端に貼付する。23は細くて低い高台を底部端に貼付する。体部は直線的に開く。口径14.6cm，底径7.4cm，器高5.9cm。24の体部下位はナデによって稜を明瞭する。25の高く太い高台は大きく踏ん張る。

土師器高環（26） 環部の復元口径は22.8cm。内面にミガキ。

土師器鉢（27） 撥状に開く器形が特徴的で，須恵器と同様の器形で，内外面ヨコナデ。

土師器甕（28・29） どちらも口縁部が八字形に開く。28の口縁部は大きく開く。口縁部内面には横位のハケ目。29は口縁部が肥厚する。内面頸部下位はケズリ。復元口径18.0cm。

黒色土器椀（30・31） どちらもA類。30は内外面ミガキ。復元口径20cm。31は細くて八字形に開く高台を貼付する。

緑釉陶器碗（32） 円板状底部で，復元底径10cm。

白磁碗（33・34） どちらも刑窯系白磁碗。33は白磁I類-1で小さな玉縁を作る。34はI類の蛇ノ目高台で，畳付を露胎にする。

青磁碗（35） 越州窯系青磁碗I-1b類。内外面に重ね焼きの目跡が残る。

〈36～54：B上層出土資料〉

須恵器蓋（36・37） 36は口縁端部が丸く肥厚する。外天井部は回転ヘラケズリ後ナデ。37の口縁部は屈折して，肥厚する口縁端部を僅かに折り返す。

須恵器環（38・39） 38の体部下位は回転ヘラケズリ。39は低く踏ん張る高台を貼付。

須恵器甕（40） 口縁が大きく外反し，外面端部下位に段を有する。口縁部外面には漆が付着。復元口径24.0cm。

須恵器播鉢（41） 脚部下位を欠損する。播面部片で播面の径は11cm。

土師器皿（42～44） 42は小皿cで，体部は大きく開き，皿部に直立する高台を貼付する。口径11.2cm，器高2.0cm。43の体部の器壁は薄く，口縁端部で僅かに肥厚する。外底部はヘラ切り後，ナデ。口径14.0cm。44の器高は低く，体部が大きく開く。

土師器環（45） 外底部はヘラ切り後ナデ，内面にヘラミガキ。口径14.0cm，底径8.0cm，器高3.5cm。

土師器椀（46～50） 46～48は底部端にやや開き気味の高台を貼付する。46の体部は直線的に開く。49・50は高く細い高台を貼付する。49の底径は7.8cm，高台の高さ1.8cm。

黒色土器蓋（51） B類の壺蓋で内外面にミガキを施す。口径15.6cm。

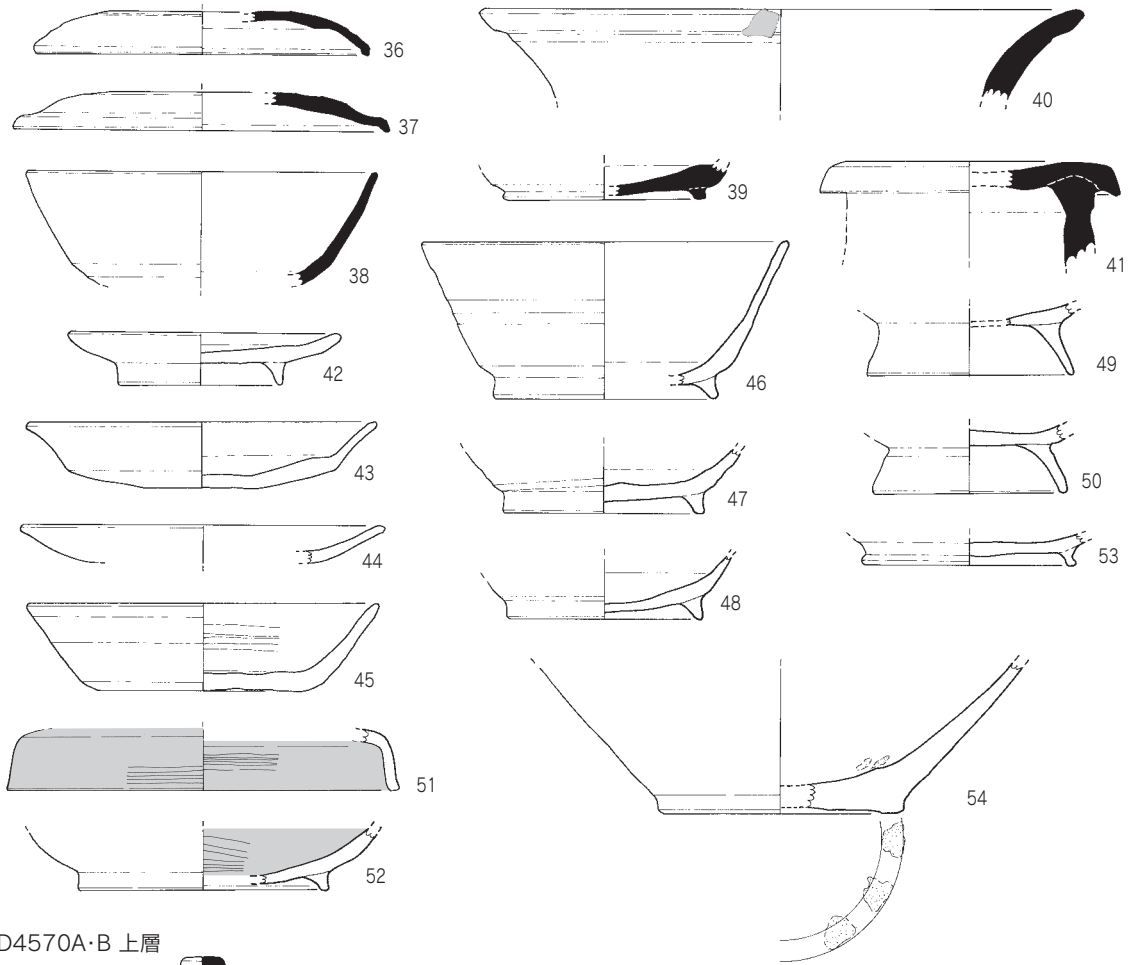
黒色土器椀（52） A類椀で細く鋭い高台を貼付する。内面はミガキ。

緑釉陶器碗（53） 高台端部は僅かに肥厚して踏ん張る。胎土は精良で釉は淡緑色に発色。

青磁碗（54） 越州窯系青磁碗の底部。全体に施釉するが，高台畳付部についてはカキ取り，目跡がある。

〈55～66：A・B埋土上層出土資料〉

SD4570B 上層



SD4570A·B 上層

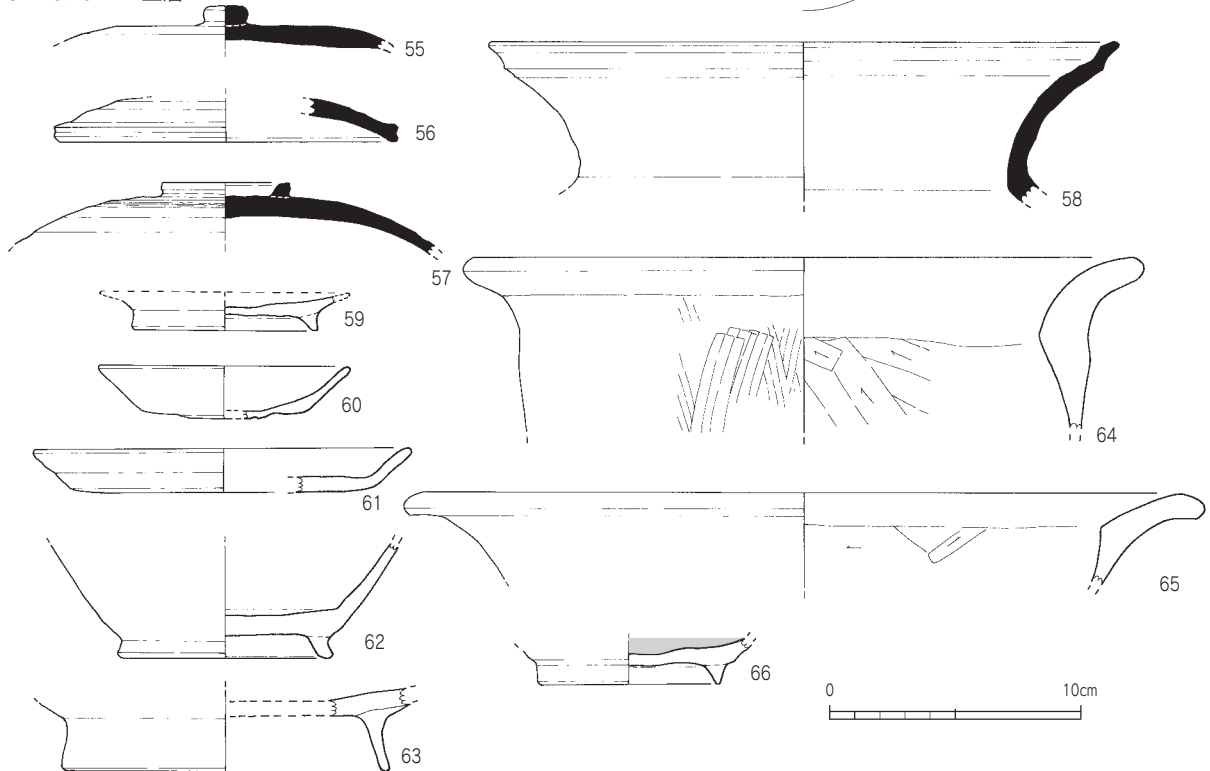


Fig.63 区画溝出土土器実測図 (9) 187次SD4570 (1/3)

須恵器蓋 (55~57) 55は円柱状の撮みを持ち、外天井部は回転ヘラケズリ。56は口縁端部を肥厚させて折り返し、外面には沈線状の段を有する。57は輪状の撮みを持ち、外天井部はカキ目。

須恵器甕 (58) 口縁部を屈折させて端部を上方に向ける。復元口径50.0cm。

土師器皿 (59~61) 59の体部は大きく開き、低い高台を貼付する。60は土師器皿bで、外底部はヘラ切り後板状圧痕。61は内面にヘラミガキ。復元口径15.0cm、器高1.7cm。

土師器椀 (62・63) 62は底部端にやや開いて踏ん張る高台を貼付する。63は大型品で、高くハ字形に開く高台を貼付する。

土師器甕 (64) 直立する体部から口縁部が肥厚して短く大きく開く。外面縦位のハケ目。体部下位はヘラケズリ。復元口径27.0cm。

土師器鍋 (65) 洗面器形の鍋で、頸部下位はヘラケズリ。

黒色土器椀 (66) A類椀。丸みを持つ坏部に小さい高台を貼付する。

S D4571出土土器 (Fig.64, PL.18)

〈1~5：溝底出土資料〉

須恵器坏 (1) 底部端に方形の高台を貼付し、体部は直線的に開く。外底部はヘラ切り。復元口径15.8cm、底径9.6cm、器高8.4cm。

土師器皿 (2~5) 口径14.0~14.6cm・器高1.5~2.0cm、口径16.0cm・器高2.1cmに量量が分かれる。3~5は体部下位で屈折し、口縁部は大きく外反する。2は外底部ヘラケズリ、4・5はヘラ切り後にナデか。

〈6~13：堆積土出土資料〉

須恵器壺 (6) 底部片で、高台は太くて大きく踏ん張る。外底部はヘラケズリで中央にヘラ記号あり。

土師器坏 (7) 直線的に体部が開き、口縁は肥厚する。外底部はヘラ切り。

土師器椀 (8) 底部端にハ字形に開いて踏ん張る高台を貼付する。外底部はヘラ切り。

土師器甕 (9) 口縁部片で、口縁内面は横位のハケ目、頸部下位はケズリ。

白磁碗 (10) 刑窯系白磁碗I類で、玉縁下位に段を有する。

青磁碗 (11) 越州窯系青磁碗の蛇ノ目高台底部。全面に施釉するが、畳付部については施釉後にかき取り、重ね目跡がある。

〈12~14：石列裏込め出土資料〉

白磁碗 (12~13) いずれも刑窯系白磁碗I類。口縁を折り曲げて肥厚させ玉縁とする。12・14は体部が大きく開く。

S D4572出土土器 (Fig.64, PL.18)

土師器坏 (15・16) 15の体部は直線的に開き、外底部はヘラ切り。16は直線的な体部に対して外底部は丸みを持つ。ヘラ切り後に板状圧痕。口径13.2cm、器高3.6cm。

土師器椀 (17) 底部は中央で深くなり、高台は高い方形でハ字形にやや開く。

灰釉陶器碗 (18) 高台は低く肥厚し、僅かに開く。内面は施釉、外底部は露胎。

S D2350出土土器 (Fig.65)

須恵器蓋 (1・2) 1の体部は屈折して口縁部へ至る。口縁端部は肥厚させて僅かに折り

裏込出土の
白磁

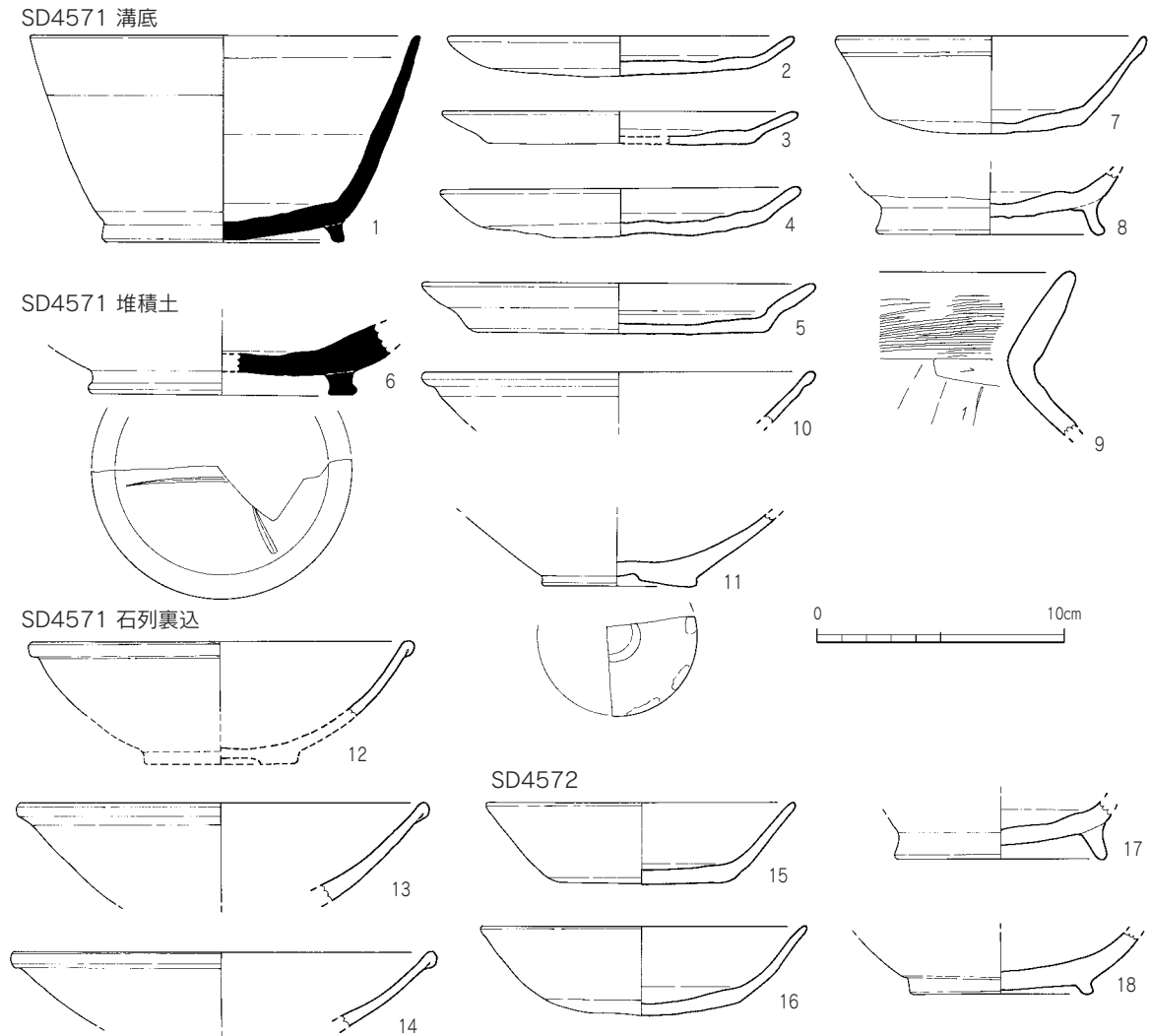


Fig.64 区画溝出土土器実測図 (10) (1/3)

曲げる。外天井部はヘラケズリ。復元口径15.0cm。2の口縁部は肥厚させて僅かに折り曲げる。

外面は強いナデで沈線状となる。外天井部は粗雑な回転ヘラケズリ。復元口径17.8cm。

須恵器坏 (3~6) 3・4は有高台の坏で、体部下位に丸みを持ち直線的に開く。高台は底部端に貼付するが、4が方形なのに対し、3は低い逆台形となる。外底部はどちらもヘラ切り。3は口径12.2cm、底径7.6cm、器高3.5cm。5・6は無高台の坏で器形もよく似る。体部の器壁は一定の厚みで直線的に開く。外底部はヘラ切り。5は外底部をヘラ切り後ナデ。

須恵器壺 (7) 底部片。太く方形でやや踏ん張る高台を底部端に貼付する。

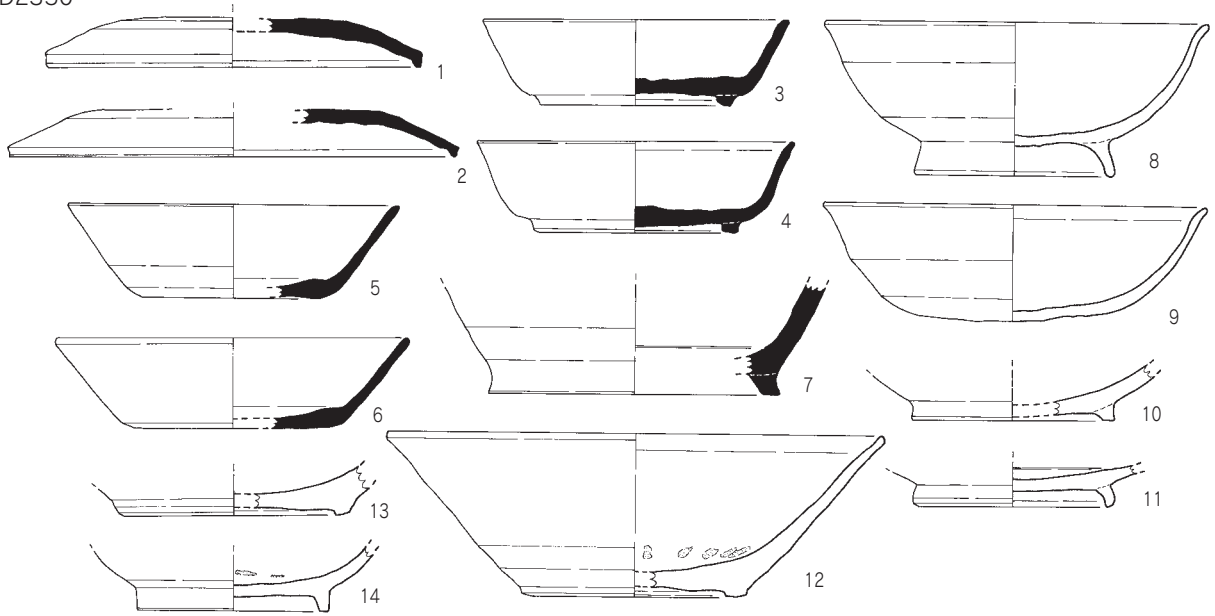
土師器碗 (8) 高くハ字形に開く高台を貼付する。体部下位に丸みを持ちながら口縁部は僅かに外反する。橙褐色で胎土は精良。口径15.0cm、底径4.0cm、器高6.2cm。

黒色土器碗 (9) A類碗か。内面は黒斑状に黒くなるが器面にミガキはみられない。口縁部は肥厚して外反する。外底面はヘラ切り後ナデで高台の剥がれた痕がある。

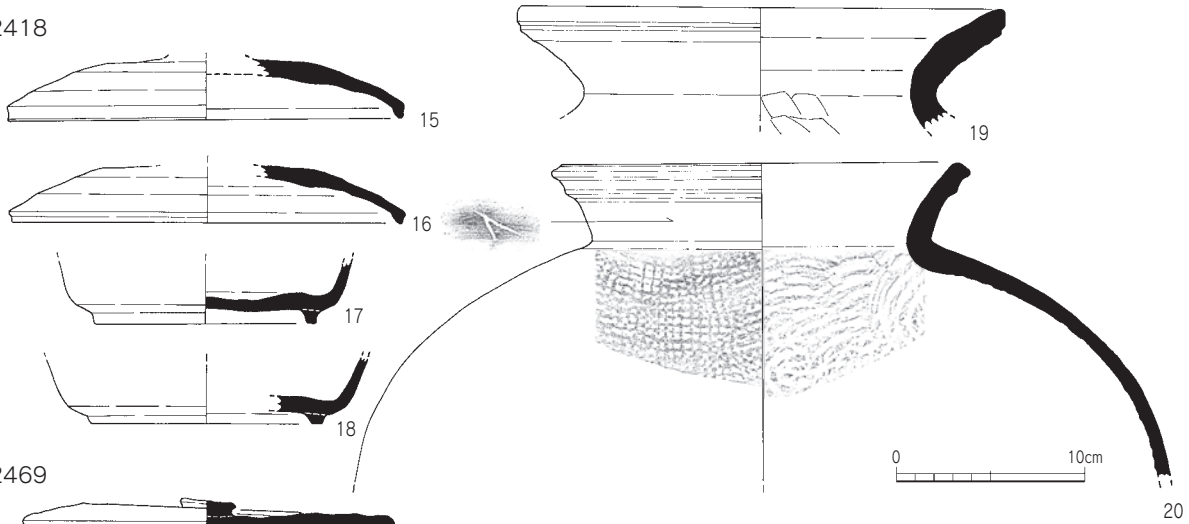
緑釉陶器碗 (10) 高台は低い方形で丁寧な作り。内外面にミガキ。

灰釉陶器碗 (11) 細く直立する高台端部が僅かに内湾する。外底部は回転ケズリ。

SD2350



SD2418



SD2469

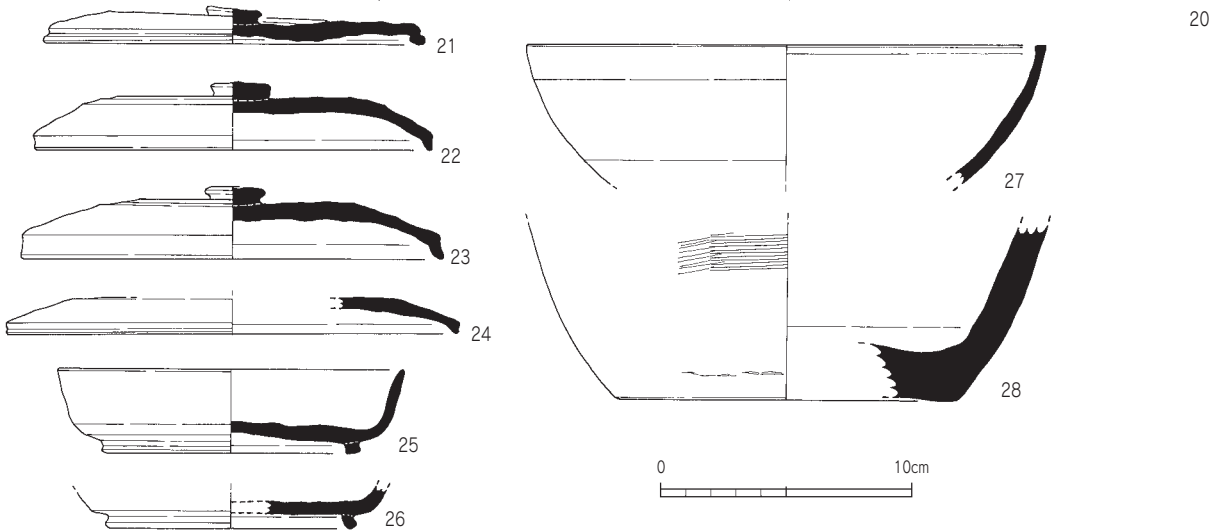


Fig.65 区画溝出土土器実測図 (11) (1/3・1/4)

青磁碗（12～14） いずれも越州窯系青磁碗。12は器形の全容が分かる I-1 a 類。体部は直線的に開き、口縁部を僅かに肥厚させる。体部下位を回転ヘラケズリ、底部は蛇ノ目高台だが、全施釉後に畳付の釉をカキ取る。黄緑色に発色する。口径19.8cm、高台径9.0cm、器高6.5cm。13も I 類の蛇ノ目高台の底部。14は碗Ⅲ類。高台畳付は露胎となる。

S D2418出土土器 (Fig.65)

須恵器蓋（15・16） 15は口縁部を肥厚させて折り返し、やや踏ん張り気味となる。外天井部は回転ヘラケズリ。16も口縁部を肥厚させて端部を僅かに折り曲げる。内面には沈線状の段を有する。

須恵器坏（17・18） どちらも体部下位に丸みを持って底部端に高台を貼付するが、18は低い逆台形である。17の外底部はヘラ切り後ナデ。

須恵器甕（19・20） 19の口縁部は大きく屈曲して開き、外面に沈線が巡る。復元口径19.0cm。20は大きな球形の胴部に小さい口縁部がラッパ状に開く。外面には1条の凸帯を有する。口径22.0cm。

S D2469出土土器 (Fig.65, PL.18)

須恵器蓋（21～24） 21は低平な撮みを持ち、口縁端部は肥厚させて押しえつけたように折り曲げる。外天井部は回転ヘラケズリ。口径15.2cm、器高1.5cm。22は高い天井部と体部との境が明瞭である。口縁部は嘴状に折り返す。23はボタン状の撮みを持ち、口縁端部は肥厚させて大きく折り返す。外天井部は回転ヘラケズリ。口径16.8cm、器高2.9cm。24の口縁端部は肥厚させて折り返し、外面には沈線が1条巡る。

須恵器坏（25・26） 25の体部は下位に丸みを持って直線的に立ち上がる。外底部には方形で多少跳ね上げる高台を貼付する。復元口径13.8cm、底径10.0cm、器高3.4cm。26の高台端部を肥厚させて踏ん張る。

須恵器鉢（27） 口縁端部を平らにして内傾させ、内面に沈線を巡らす。復元口径20.0cm。

須恵器壺（28） 壺底部。体部外面は横位ハケ目で、下半はケズリ後ナデ。内面はナデ。

S D2471出土土器 (Fig.66)

須恵器蓋（1・2） 1は比較的高い天井部と体部の境が明瞭で、口縁端部を肥厚させて僅かに折り曲げる。外面には沈線を巡らす。外天井部は回転ヘラケズリ後ナデ。復元口径13.0cm。2は外面体部にロクロナデによる稜線が際立つ。口縁端部は肥厚し、僅かに折り曲げる。外天井部はヘラ切り後ナデ。

須恵器坏（3・4） 3は低い方形の高台を底部端に貼付し、体部は下位で丸みを持って口縁へ開く。外底部はヘラ切り後ナデ。復元口径12.0cm、底径9.0cm、器高2.7cm。4は方形の高台を底部端に貼付し、体部との境は不明瞭。体部は直線的に開く。口径14.3cm、底径10.5cm、器高5.5cm。

須恵器壺（5） 長頸壺の口縁部片。ラッパ状に開く口縁部は大きく外反する。口径12.8cm。

須恵器高坏（6） 脚部片で、裾部にかけてラッパ状に開く。脚部下位には沈線を2条巡らす。裾端部は大きく折り返して嘴状になる。脚高8.3cm、裾部径11.2cm。

土師器皿（7） 底部片で方形の高台を貼付する。復元底径13.6cm。

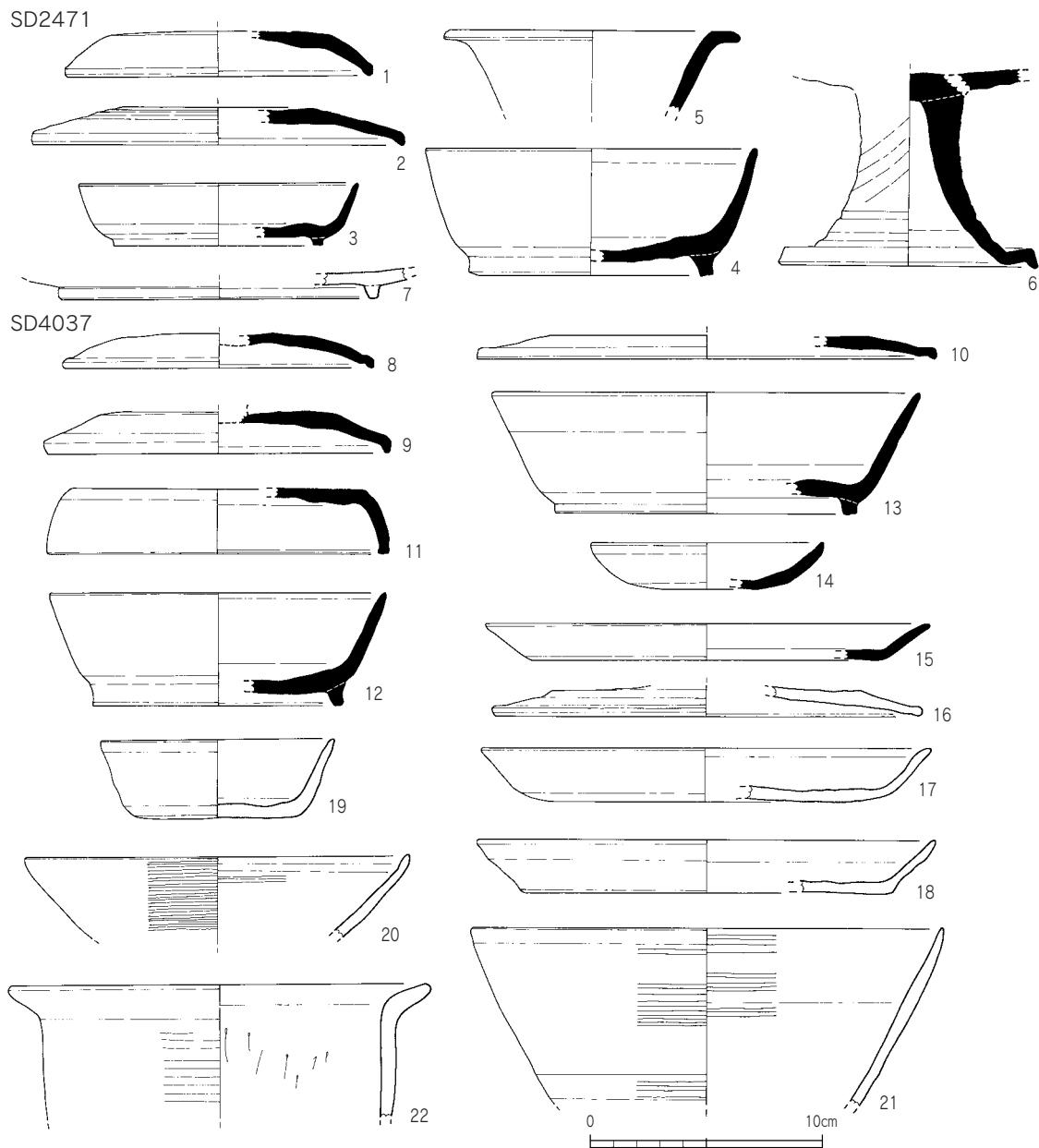


Fig.66 区画溝出土土器実測図 (12) (1/3)

SD4037出土土器 (Fig.66, PL.18)

須恵器蓋 (8~11) 8~10は坏蓋。口縁部は屈折して端部を肥厚させる。外天井部はヘラ切り後ナデ。復元口径13.4cm。9の口縁端部を嘴状に折り返すが、肥厚して鋭さを欠く。外天井部は回転ヘラケズリ。10の口縁部は屈折して、端部は肥厚する。復元口径19.6cm。11は壺蓋。端部は肥厚して平坦になる。外天井部は回転ヘラケズリ。復元口径14.7cm。

須恵器坏 (12~14) 12は底部端に比較的高い高台を貼付し、体部下位との境はナデにより明瞭。口縁部外面に赤色顔料を塗布している。口径14.4cm, 底径10.8cm, 器高4.8cm。磨滅により調整不明。13は底部端に高台を貼付し、体部は直線的に開く。外底部はヘラ切り。14は小型坏で、口縁部を内湾させる。外底部はヘラケズリ。復元口径10.0cm, 器高2.0cm。

須恵器皿 (15) 体部は大きく開く。外底部はナデ。

土師器蓋 (16) 口縁端部は丸みを持って肥厚し、内面には段を有する。復元口径18.2cm。

土師器皿 (17・18) 17は口縁部を僅かに肥厚させる。体部は磨滅著しいがヘラミガキの可能性あり。18は体部中位に稜が入る。外底部はヘラ切り未調整。口径19.6cm, 器高2.3cm。

土師器坏 (19・20) 19の底部下位はヘラ切り未調整で板状圧痕あり。20は体部が直線的に開き、口縁部に沈線状の段を有する。内外面ともに回転ヘラミガキ。

土師器椀 (21) 体部は深い。内外面ともに回転ヘラミガキ。体部下位は回転ヘラケズリ後ヘラミガキ。

土師器甕 (22) 大きく外反する口縁に対して直立する体部が特徴的である。外面は板状工具によるカキ目状のナデ。内面頸部下位はヘラケズリ。復元口径18.2cm。

③その他の区画溝

S D 368出土土器 (Fig.67)

土師器皿 (1～9) 口径は1が12.0cm, 2が13.0cm, 3が13.4cmの他は, 13.8～14.4cmの範囲にまとまる。底部から口縁部へは直線的に開くが, 4のみは口縁端部が肥厚して外反する。底部調整は, 1～5・8がヘラ切り, 他はナデである。いずれも第1整地A-3区出土。

S D 2389出土土器 (Fig.67)

須恵器坏 (10) 高台を底部の端付近に貼付し, 体部は直線的に開く。口径13.3cm, 底径7.8cm, 器高4.8cm。底部は切り離した後, 未調整。

土師器坏 (11) 底部と体部の境に僅かに丸みを持って直線的に立ち上がる。外底部はヘラ切り。口縁部にはタール状の油煙が付着しており灯火器として使用したか。

土師器椀 (12) 底部片で高台部は細く立ち上がる方形状となる。外面にはミガキを一部確認できる。

S D 2392出土土器 (Fig.67)

土師器椀 (13) 高台を底部端に貼付し, 体部は直線的に開く。体部外面には平面方形の粘土を付けている。復元口径13.2cm, 底径8.6cm, 器高3.7cm。

S D 2396出土土器 (Fig.67)

須恵器蓋 (14) 口縁端部を丸く肥厚させる。復元口径14.8cm。

須恵器鉢 (15) 底部片で体部と体部の境は工具による鋭いナデ。底径15.6cm。

土師器皿 (16) 破片資料で外底部はナデ。

S D 2398出土土器 (Fig.67)

須恵器坏 (17) 低い台形の高台を貼付し, 体部から口縁部へは直線的に開く。外底部はヘラ切り。復元口径13.9cm, 底径10.0cm, 器高4.0cm。

須恵器皿 (18) 底部から体部へは丸みを持つ。復元口径19.0cm。

S D 2399出土土器 (Fig.67)

須恵器坏 (19) 低い方形の高台を貼付する。体部は直線的に開き器壁は薄い。外底部はヘラ切り。復元口径は19.0cm。

S D 2403出土土器 (Fig.67)

須恵器蓋 (20) 口縁部は厚い嘴状となる。復元口径は19.8cm。

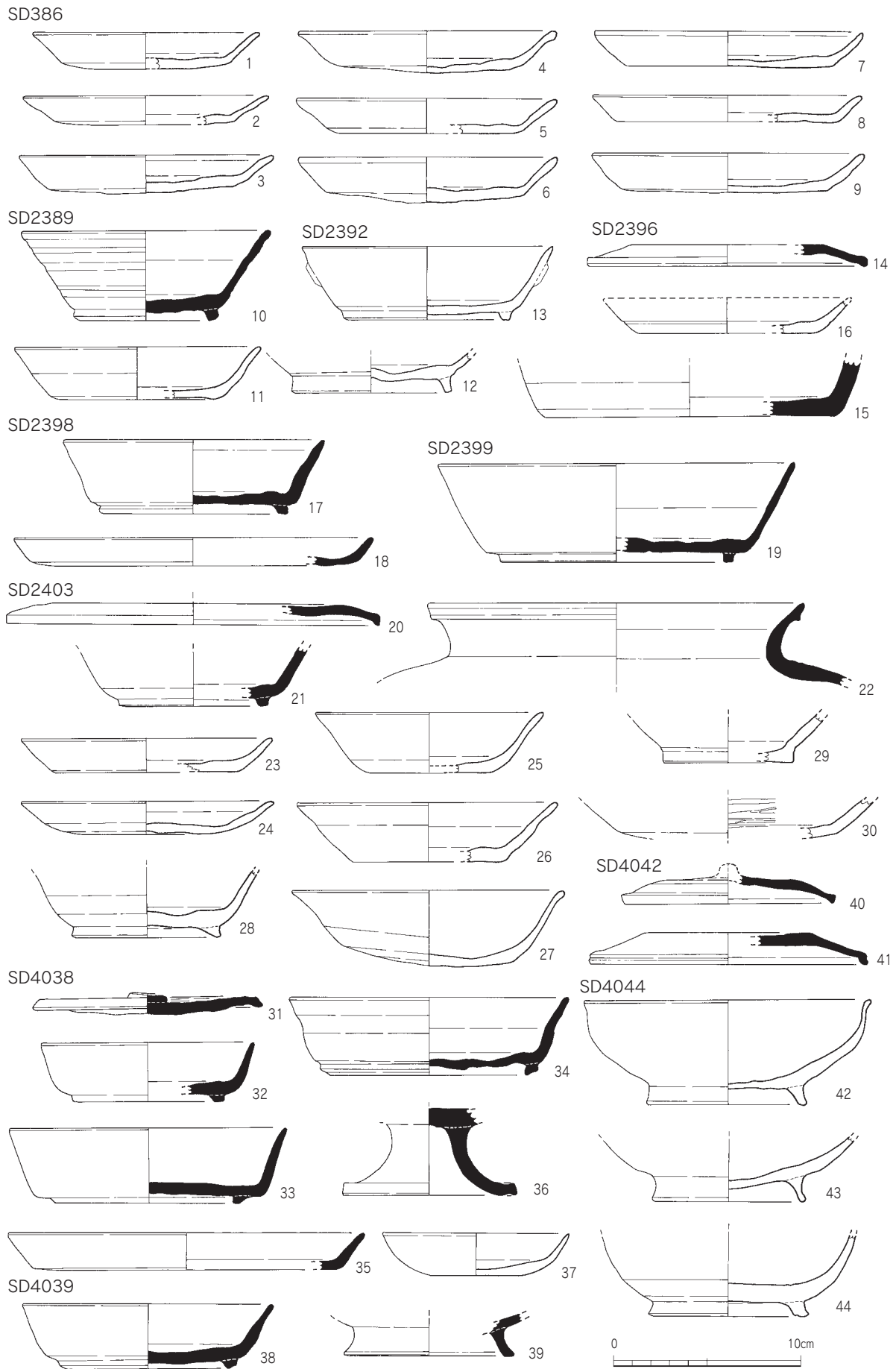


Fig.67 その他の区画溝出土土器実測図(1)(1/3)

須恵器坏 (21) 坏身片で、底部と体部の境に丸みを持つ。

須恵器甕 (22) 頸部は大きく開き、細く鋭い口縁部に至る。復元口径20.0cm。

土師器皿 (23・24) 23の底部と体部の境は明瞭だが、24は丸底に近い。また、24の外底部は板状圧痕あり。

土師器坏 (25~27) いずれも体部から口縁部へは開いて至るが、26は体部中位にナデによる稜が顕著である。27は焼歪みが大きい。口径14.5cm。

土師器椀 (28) 高台は低い方形で開き気味となる。外底部と体部との境は丸みを持つ。

緑釉陶器碗 (29) 磨滅が著しいが胎土は精良。

緑釉陶器皿 (30) おそらく皿片であろう、内面は丁寧な横位のミガキ。

SD4038出土土器 (Fig.67, PL.18)

須恵器蓋 (31) ほぼ完形で低いボタン状の撮みを持つ。天井部から口縁端部はほぼ低平で、端部を肥厚させて嘴状に折る。天井部は回転ヘラケズリで、口径12.3cm、器高1.1cm。

須恵器坏 (32~34) 32は体部下位に丸みを持ち、低い方形の高台を貼付する。33は低い方形の高台を持ち、直線的に体部が開く。口径14.8cm。34は高台が内側に伸びて、体部は中位で屈曲して開く。外底部はヘラ切り未調整。

須恵器皿 (35) 直線的に開く体部はナデ調整。復元口径19.0cm、器高2.0cm。

須恵器高坏 (36) 脚部片で、断面箱型の坏身が取り付くであろう。脚部残高4.7cm、裾部径9.3cm。

土師器坏 (37) 坏で中位に丸みを持つ。外底部はヘラ切り、復元口径10.0cm。

SD4039出土土器 (Fig.67)

須恵器坏 (38・39) 38は低く外反する高台を貼付する。体部下半はナデによる稜を持ち、口縁部へは直線的に開く。外底部はヘラ切り未調整。口径13.4cm、底径9.5cm、器高3.5cm。39は坏としたが、壺の底部の可能性もある。細くて高く踏ん張る高台を貼付する。

SD4042出土土器 (Fig.67, PL.18)

須恵器蓋 (40・41) 40は比較的高い天井部で口縁端部は断面三角形に肥厚する。41は口縁部を折り返してさらに踏ん張って、外面には沈線状の稜線が入る。復元口径14.8cm。

SD4044出土土器 (Fig.67, PL.18)

土師器椀 (42・43) 42は丸みを持った体部と外反する口縁部に特徴がある。高台は高く八字形に踏ん張る。磨滅により調整不明。43は細くて端部を肥厚させる高台を貼付するが、器面の剥落は激しい。

緑釉陶器碗 (44) 低く厚みのある高台を貼付し、体部は丸みを持っている。高台と体部との境はヘラケズリによって僅かな稜を形成する。見込みに2条の沈線を巡らし、高台内側にも沈線が入る。外底部は糸切調整で、暈付以外は淡緑色の釉を発色する。近江産であろう。

SD4566出土土器 (Fig.68, PL.19)

〈1~12：下層出土土器資料〉

須恵器蓋 (1・2) 1は外天井部に灰被りあり。2は天井部と体部の境に丸みを持つ。

須恵器坏 (3) 底部と体部の境は丸みを持って、口縁端部は外反する。高台は方形で、直線的に立ち上がる。復元口径12.8cm。

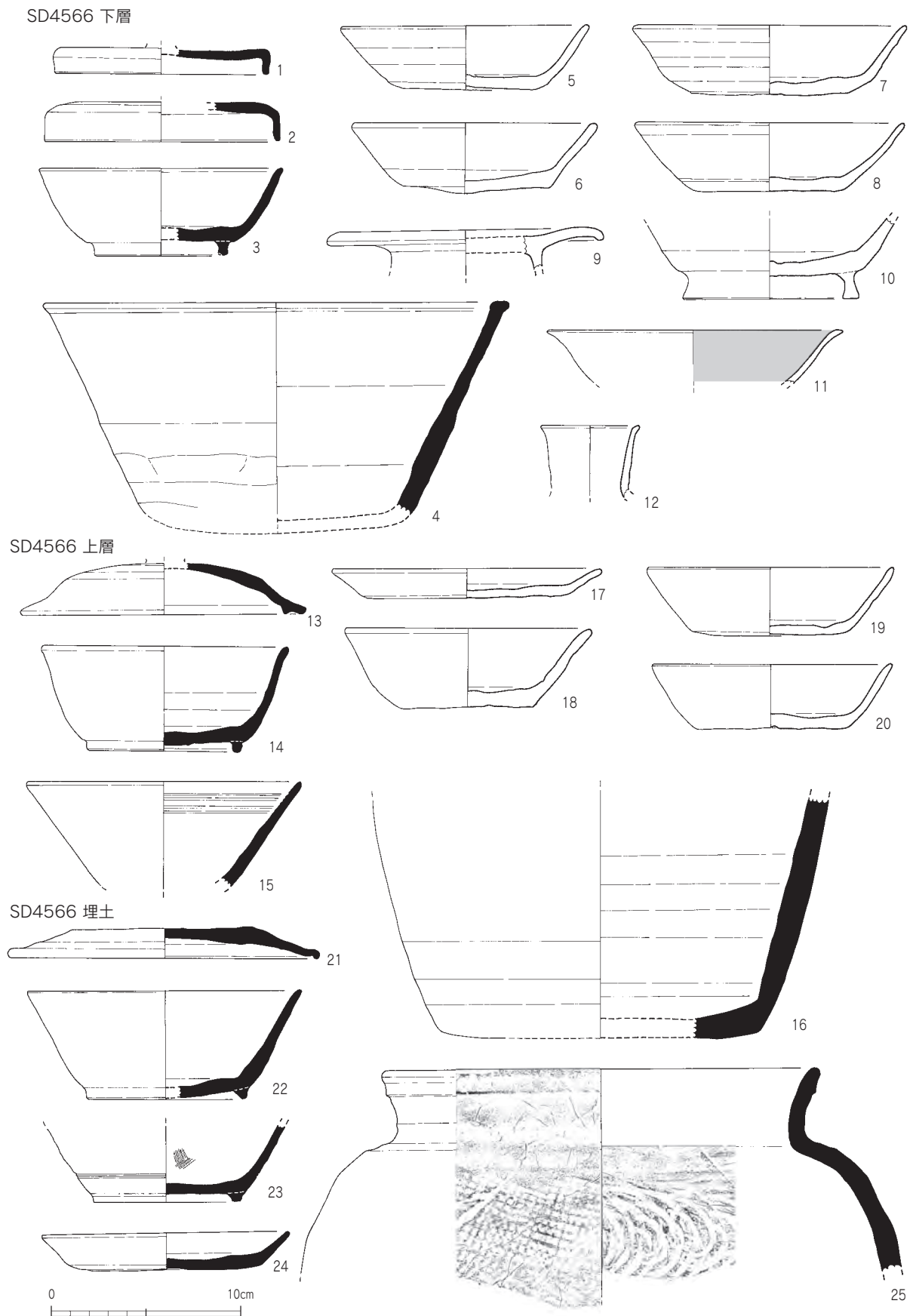


Fig.68 その他の区画溝出土土器実測図(2)(1/3)

須恵器鉢 (4) 直線的に開く体部下半は横位のヘラケズリ。

土師器坏 (5~8) 口径は12.8~14.4cm, 器高3.4~3.7cmである。6は体部から口縁部の器壁が厚くなる。7の体部下位はヘラケズリ。いずれも外底部はヘラ切り。

土師器皿 (9) 高台部を欠損するが、皿か。口縁部は大きく外反して垂下する。

土師器椀 (10) 高台は高く、端部で広がって踏ん張る。外底部はヘラ切り。

黒色土器椀 (11) A類の椀。口縁部は外反する。復元口径15.6cm。

灰釉陶器瓶 (12) 口縁部片。直線的に開く口縁部は高さ3.5cm程度ある。

〈13~20: 上層出土土器資料〉

須恵器蓋 (13) 口縁に身受けのかえりを持つ。天井部はヘラケズリ。

須恵器坏 (14・15) 14は低い方形の高台を貼付し、体部から口縁部へかけて僅かに外反する。口径12.8cm。15は内面に工具による沈線状の段を有する。体部はハ字形に開く。

須恵器鉢 (16) 体部下位から外底部をヘラケズリする。胴部はヨコナデ。

土師器皿 (17) 口縁部は肥厚しながら開く。外底部はヘラ切り。

土師器坏 (18~20) 口径は12.7~13.0cm。いずれも体部は直線的に開くが、19はやや外反しながら口縁を肥厚させる。外底部の調整はいずれもヘラ切り。

〈21~39: 埋土出土土器資料〉

須恵器蓋 (21) 撮みを貼付せず、口縁端部は肥厚して折り返す。天井部はヘラ切り。

須恵器坏 (22・23) 22は低い高台を底部端に貼付し、体部は直線的に開く。口径14.4cm, 底径6.4cm, 器高6.8cm。23も高台を底部端に貼付し、体部に沈線を巡らす。外底部はヘラケズリ。

須恵器皿 (24) 体部に比べて底部の器壁は厚く、外底部はヘラ切り。

須恵器甕 (25) 直線的に開く口縁部と丸みを持った肩部が特徴的。復元口径22.8cm。

土師器蓋 (26~28) 26の口縁端部は丸く肥厚し、内外面はミガキ。口径11.8cm。27の口縁端部には明瞭な折り返しや段はない。28の口縁部は肥厚させ、内面は身受けの段を有する。天井部はヘラ切り。

土師器皿 (29・30) 29は体部に厚みを持ってそのまま口縁部へ至る。丸みを持った外底部はヘラ切り。30は直立する高台に対して水平に開く体部が取り付く高台付皿。復元高台径9.0cm。

土師器椀 (31・32) 31は低く踏ん張る高台を貼付し、体部は直線的に開く。外底部はヘラケズリ。32はほぼ一定の器壁の厚さで、直線的に開く体部に特徴がある。内外面体部下位は粗いミガキで焼成は堅緻。口径17.4cm, 底径8.8cm, 器高8.6cm。

黒色土器椀 (33・34) いずれもA類。33の復元口径は19.6cm。34の内面には細かいミガキがある。

黒色土器壺 (35) A類壺の底部片。外底部はヘラ切り。

緑釉陶器碗 (36) 磨滅著しく、釉は剥落しており、発色は不明。

灰釉陶器碗 (37・38) 37は肥厚する口縁部が僅かに外反して稜を成す。38の輪状高台は細く内傾しながら直立する。また、体部の下位は工具による回転ヘラケズリ。

白磁碗 (39) 刑窯系白磁碗 I-4類。口縁端部は折り曲げて肥厚させる。高台豊付は露胎。

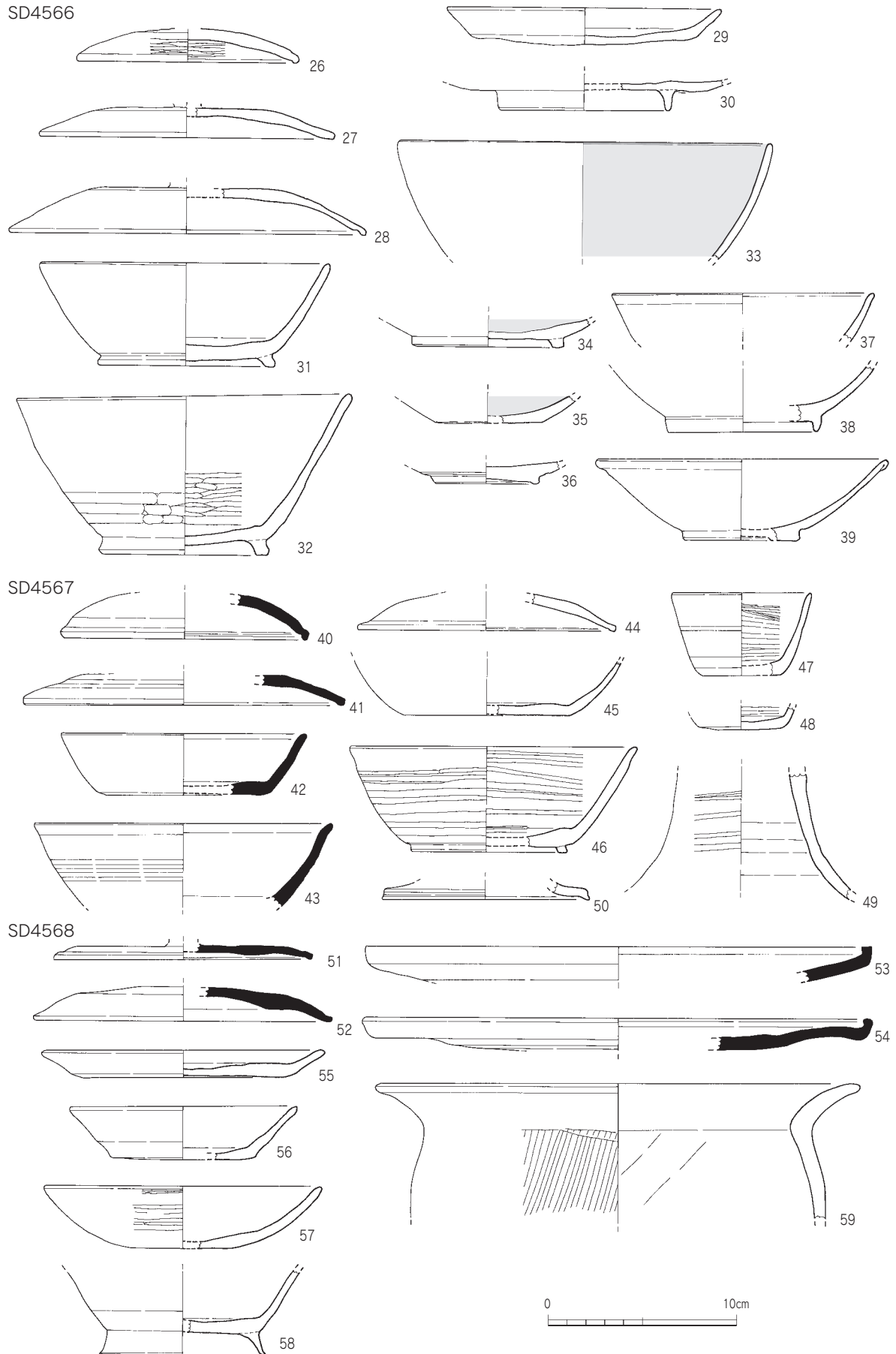


Fig.69 その他の区画溝出土土器実測図 (3) (1/3)

SD4569 下層

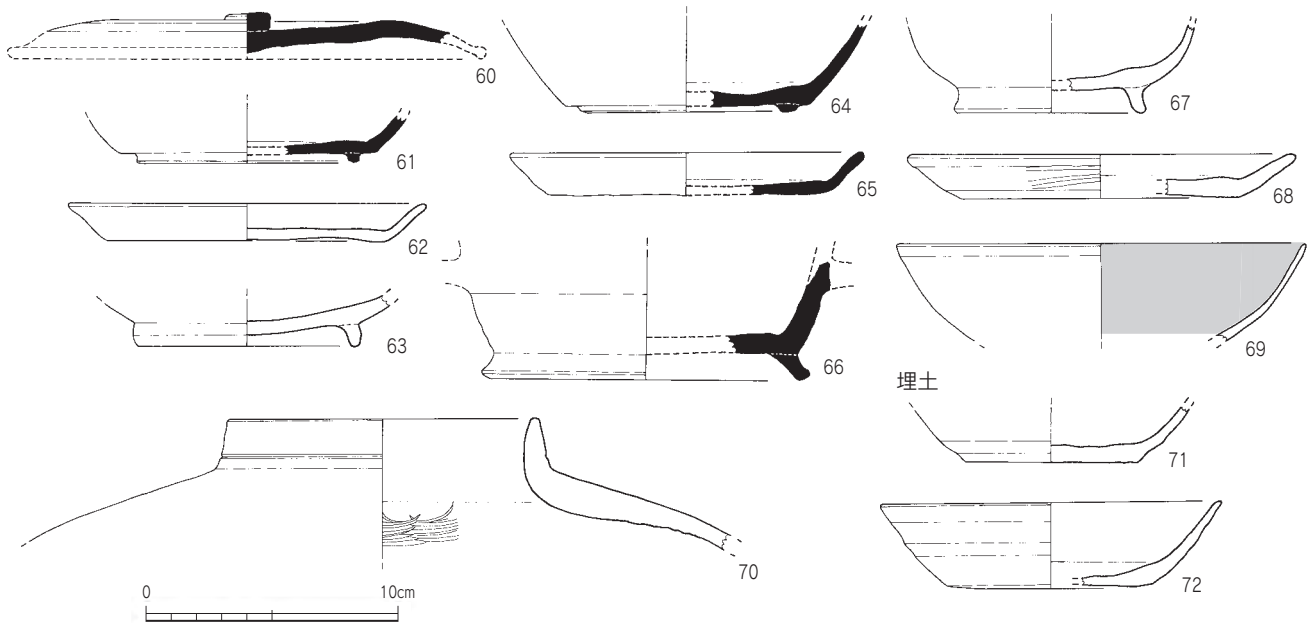


Fig.70 その他の区画溝出土土器実測図(4)(1/3)

SD4567出土土器 (Fig.69, PL.19)

須恵器蓋 (40・41) 40は丸みを持った天井部から口縁部で屈折させて端部へ至る。41は口縁端部を肥厚させる。復元口径16.8cm。

須恵器坏 (42・43) 42は無高台で、直線的な体部に特徴がある。43の口縁部は屈折して、僅かに外反させる。復元口径15.6cm。

土師器蓋 (44) 口縁部内側に身受けのための沈線状の段を有する。

土師器坏 (45) 体部の器壁は薄い。外底部はヘラ切り。

土師器椀 (46) 低い方形の高台を外底部端に貼付し、体部と底部の境は鋭い。体部から口縁にかけて直線的に開くが、口縁部付近で段を有する。内外面ともに横位のミガキ。口径15.6cm。

土師器小型坏 (47・48) どちらも外面体部下半をヘラケズリ。47の内面は横位のミガキで、復元口径7.3cm, 底径4.1cm, 器高4.4cm。

土師器高坏 (49・50) 高坏の脚片。49の脚部はスカート状に大きく開き、外面は横位のミガキ。50の脚裾部は端部を嘴状に折り返す。裾径10.9cm。

SD4568出土土器 (Fig.69)

須恵器蓋 (51・52) 51は口縁部を外側に屈曲させて端部を肥厚させる。復元口径13.6cm。52は口縁部が僅かに外反して踏ん張る。天井部はヘラケズリ。

須恵器高坏 (53・54) 坏部片。53は口縁端部を平らにするが、54は体部を外反させながら口縁部へと至り、端部を丸く納める。54は復元口径26.8cm。

土師器皿 (55) 外底部はヘラケズリ後ミガキ。口径14.6cm。

土師器坏 (56・57) 56の体部は直線的に開く。復元口径12cm。57は丸みを持った体部にミガキ調整。外底部はヘラケズリ。

土師器椀 (58) 高台は細くて、高くハ字形に開き、端部で僅かに踏ん張る。体部は直線的に開く。復元底径8.6cm。

土師器甕 (59) 口縁部は大きく外反する。内面は頸部下位をケズリ。復元口径25.6cm。

S D4569出土土器 (Fig.70, PL.19)

〈60～63：下層出土資料〉

須恵器蓋 (60) 低平なボタン状の撮みを持つが、口縁部を欠損する。

須恵器坏 (61) 平な外底部に貼付した低い高台は、僅かに外反する。外底部はヘラケズリで復元底径8.8cm。

土師器皿 (62) 体部は僅かに外反する。口径14.2cm, 器高1.5cm。

灰釉陶器碗 (63) 低めの輪状高台を貼付する。底径8.6cm。

〈64～70：上層出土資料〉

須恵器坏 (64) 低い高台を平らな底部に貼付し、体部は直線的に開く。外底部はヘラ切り。

須恵器皿 (65) 体部から口縁部にかけて肥厚させる。外底部はヘラ切り。

須恵器坏 (66) 体部下半には、本来把手が取り付く。ハ字形に開く方形の高台を底部端に貼付し、器壁の厚い体部が開く。

土師器坏 (67) 体部はハ字形に開く。復元口径13.4cm。

土師器皿 (68) 口縁部を僅かに肥厚させる。外面はミガキ、外底部はヘラケズリ。

黒色土器碗 (69) A類碗。丸みを持った体部の器壁は薄い。内面に僅かなミガキあり。

灰釉陶器壺 (70) 短頸壺で、張りを持つ肩部から直立する短い口縁部に特徴がある。内面頸部下位はナデ。口径12.4cm。

〈71・72：埋土出土資料〉

土師器碗 (71) 丸みを持った体部にやや肥厚して踏ん張る高台を貼付する。外底部はヘラ切り。

土師器坏 (72) 直線的に開く体部には、調整による稜線が明瞭である。外底部はヘラ切り。

④その他の溝

S D2010出土土器 (Fig.71, PL.19)

須恵器蓋 (1) 口縁部を僅かに屈折させて嘴状に折り曲げるが、端部は比較的厚い。復元口径14.0cm。

須恵器坏 (2～7) 2は低く内側に踏ん張る高台を貼付し、体部は直線的に開く。体部と底部の境は明瞭である。復元口径14.6cm, 高台径9.3cm, 器高4.3cm。3は厚く幅広い高台を貼付する。口縁部の形態は欠損のため不明。4は方形で低い高台を底部端付近に貼付する。体部は直線的に開く。5～7は無高台。5は底部と体部の境に丸みを持ち、体部から口縁部へは直線的に開く。口縁部に煤付着。外底部はヘラ切り。復元口径9.8cm, 器高2.4cm。6は体部下半をケズリによって底部との境を明瞭にしている。内面にはヨコナデ後にミガキ状の調整あり。外底部はヘラ切り。復元口径12.5cm, 器高3.8cm。7は体部に丸みを持つが、下半はケズリにより底部との境を明瞭にしている。外底部はヘラ切り。復元口径は16.3cm。

須恵器高坏 (8) 脚柱部で、残存部の高さは12cm程度。内外面ともにナデ。

須恵器壺 (9) 短頸壺で、口縁部はやや内傾しながら直線的に立ち上がる。復元口径11.6cm。

土師器小皿 (10・11) 小皿aで、どちらも口径は10.2cm。10は体部に丸みを持つ。外底

SD2010

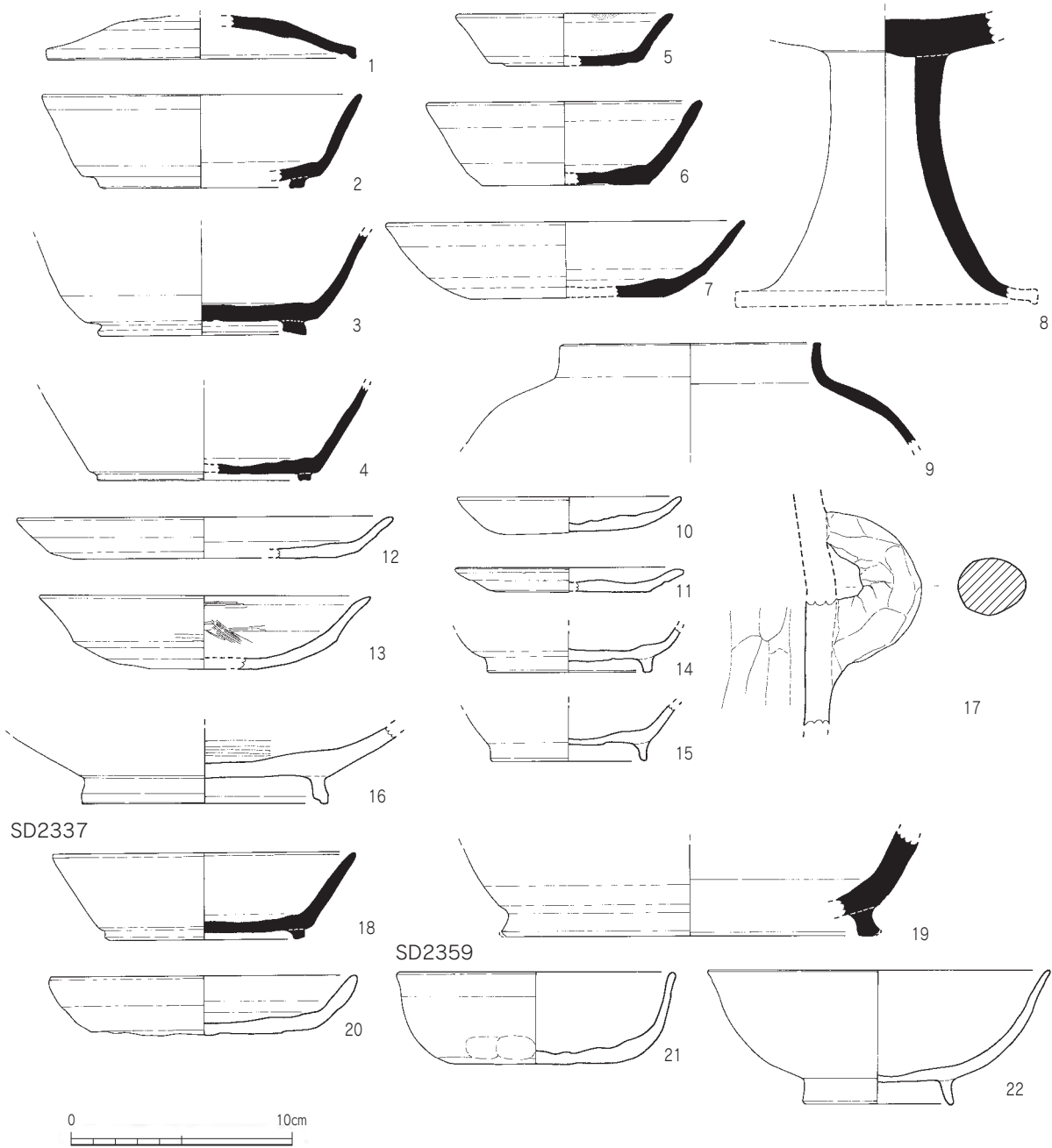


Fig.71 その他の溝出土土器実測図 (1) (1/3)

部はヘラ切りで板状圧痕あり。溝最下層の砂層より出土。11は口縁端部が肥厚して外反する。外底部はヘラ切りで板状圧痕あり。

土師器皿 (12・13) 12は復元口径17.0cm。外底部はヘラ切り。13は底部が丸みを持ちながら、体部との境を明瞭にする。体部は僅かに外反しながら口縁部を肥厚させる。内外面はミガキ、外底部はヘラ切り後ナデ。

土師器椀 (14・15) 14の高台は方形で厚いが、15は細く直立する。どちらも外底部に板状圧痕あり。

土師器鉢 (16) 大型の鉢で、高台畳付の内側に沈線状の段を有する。体部は大きく開く。

内面に僅かなミガキを確認できる。復元高台径11.2cm。

土師器甑 (17) 甑の把手部片。棒状の粘土を折り曲げてナデによって器面を調整する。外面ハケ目、内面は工具によるナデ。

S D2337出土土器 (Fig.71)

須恵器坏(18) 低い方形の高台を底部端付近に貼付する。体部は比較的厚く直線的に開く。外底部はナデだが一部板状の工具痕がある。復元口径13.4cm, 高台径8.4cm, 器高4.0cm。

須恵器壺 (19) 底部片。踏ん張った高台を貼付し、体部と底部の境は強いナデによって明瞭している。

土師器坏 (20) 体部は丸みを持ちながら、肥厚させて口縁部へ至る。外底部に板状圧痕あり。口径13.8cm, 器高2.7cm。

S D2359出土土器 (Fig.71, PL.19)

土師器椀 (21) 無高台の椀で、体部と底部の境は丸みを持ち、体部は直線的に立ち上がりながら口縁は僅かに外反する。外底部はヘラ切りで、体部との境には指頭痕がある。

灰釉陶器碗 (22) 細く直立する高台を貼付している。体部は丸みをもって、薄い口縁部が僅かに外反する。外面の剥落が著しいが内面には淡黄緑色の施釉がある。体部下半は無釉の露胎で胎土は精良である。口径15.6cm, 器高6.1cm, 高台径1.2cm。

S D2419出土土器 (Fig.72, PL.19)

〈1～16：焼土中出土資料〉

須恵器蓋 (1～6) 1は大型のボタン状の撮みと返りを持つが、焼歪みが激しい。外天井部に「×」のヘラ記号を持つ。2・3は口縁端部を肥厚させながら折り返す。4は撮みを欠損するが、3は厚い柱状の撮みを持つ。3の外天井部は再調整後に回転ヘラケズリで口径16.2cm。4は口縁部が反って端部を肥厚させる。復元口径は16.3cm。5は低平な天井部で、口縁端部を僅かに折り返す。6は身受けかえりを有する坏で、外底部はヘラケズリで、ヘラ記号を施す。口径12.0cm。

須恵器坏 (7) 断面方形の高台を底部端に貼付し、体部は直線的に開く。外底部は切り離した後、僅かにナデ。口径13.4cm, 高台径9.4cm, 器高5.4cm。

須恵器皿 (8) 口縁部が僅かに外反する。外底部はヘラ切り離した後ナデ。口径21.8cm。

須恵器高坏 (9・10) 9は直線的に開く体部中位に沈線を1条巡らす。口径13.9cm。10は口縁端部が方形となる坏部で、外底面は回転ヘラケズリ。

須恵器壺 (11) 長頸壺の口縁部片で、端部が大きく外反する。

須恵器平瓶 (12) 体部下位をヘラケズリするが、外底部は未調整。

須恵器甕 (13・14) 13は口縁部が鋭く折れて直線的に開く。外面の端部付近には沈線が巡る。復元口径21.2cm。14の口縁部は大きく反って外反する。

土師器坏 (15・16) 15は有高台の坏。平らな底部に高台を貼付する。体部の器壁はやや厚く直線的に立ちあがる。器面は磨滅しているが、ミガキのような痕跡がある。16は口縁端部を僅かに外側に折り返す。器面には「川」、外底部には「ㄱ」のヘラ記号がある。口径13.8cm, 底径9.3cm, 器高3.6cm。

土師器壺 (17) 口縁部は直立して端部を僅かに肥厚させる。胎土は精良。口径11.9cm。

SD2419 焼土中

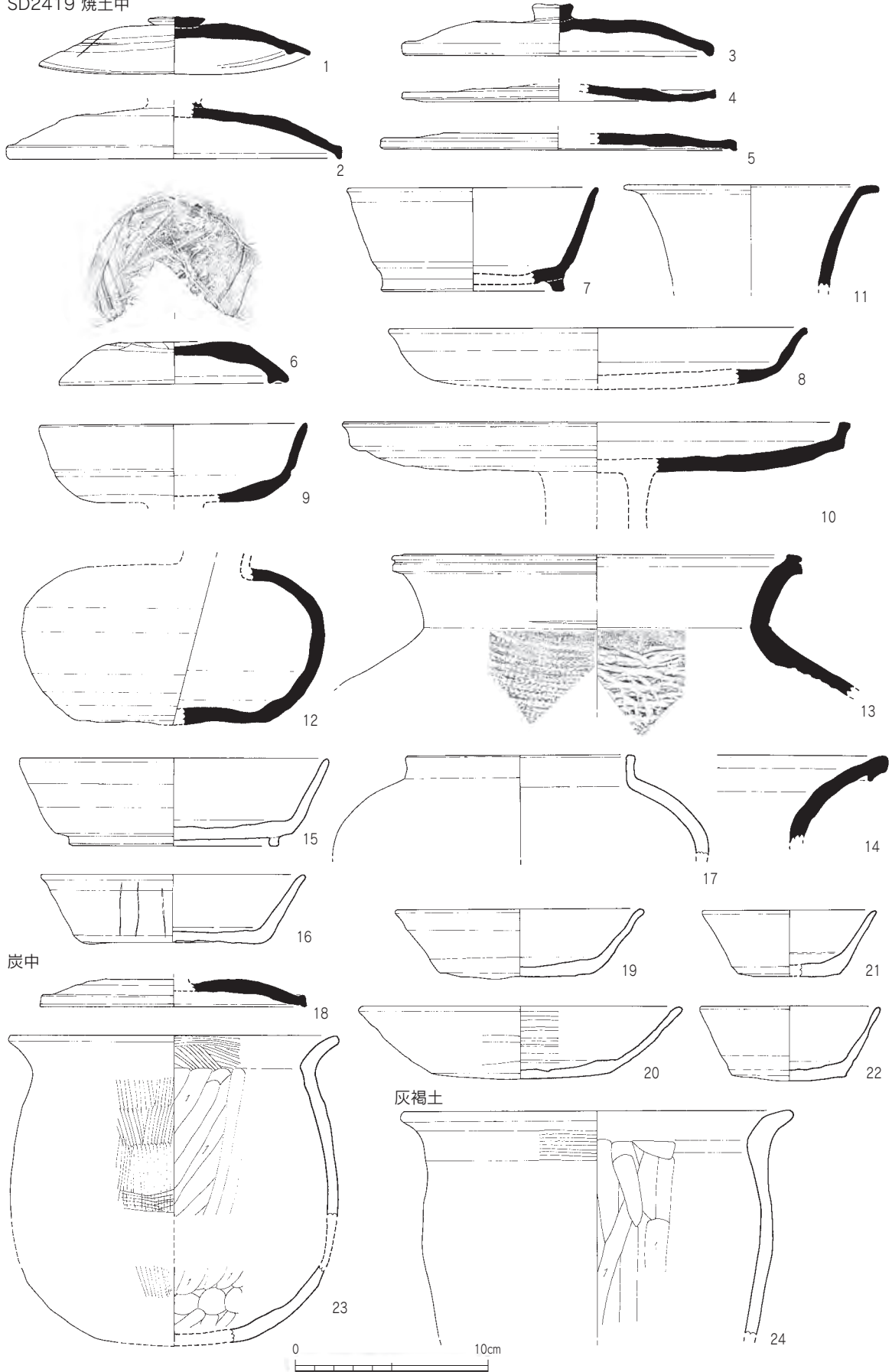


Fig.72 その他の溝出土土器実測図 (2) (1/3)

〈18～24：炭中・灰褐色土出土資料〉

須恵器蓋 (18) 口縁部を屈曲させて折り返し、端部を鋭く仕上げる。

土師器環 (19～22) 19は口縁端部を僅かに肥厚させる。外底部はヘラ切り。20は丸みを持ちながら開く体部と外底部をヘラケズリ、内外にヘラミガキする。口径16.8cm, 器高3.8cm。21・22は小型品でどちらも体部が直線的に開く、外底部はヘラ切り。21は口径9.4cm。

土師器甕 (23・24) 23は口縁部がハ字形に開き、底部は丸底となる。内底部には指頭圧痕を残し、未調整。24は口縁部を肥厚させて屈曲する。外面口縁部下位にハケ目、内面頸部下位はケズリ。口径20.4cm。灰褐色土出土。

S D2462出土土器 (Fig.73)

須恵器環 (1) 環の体部片。比較的厚みを持って直線的に開く。復元口径12.0cm。

S D2463出土土器 (Fig.73)

須恵器環 (2・3) 2は低い高台端部が跳反る。体部はやや肥厚して直線的に開くが、口縁端部を僅かに欠損する。3はやや細い断面方形の高台を底部端に貼付する。体部下半はナデによって丸みをもつ。復元高台径10.0cm。

須恵器甕 (4) 口縁部は大きく反って直線的に開く。復元口径26.0cm。

土師器蓋 (5) 口縁部を嘴状に折り返す。器面の調整は磨滅により不明。

S D2464出土土器 (Fig.73)

須恵器蓋 (6) 口縁部は屈折させて折り返すが、端部はやや肥厚する。復元口径15.0cm。

須恵器環 (7) 高台は低い方形で、端部が外側へ開く。

須恵器壺 (8) 丸みを持った体部下位は工具による横位のヘラケズリ。外底部は多方向のナデ。復元底径8.2cm。

土師器蓋 (9) 口縁部を屈折させ、端部は僅かに肥厚する。

土師器環 (10) 体部は下半に丸みを持ちながら直線的に開く。

S D2466出土土器 (Fig.73)

須恵器環 (11) 方形の高台を貼付し、体部と底部の境は強いナデ。体部下位に稜線を作る。

土師器蓋 (12) 口縁部内側に僅かな段を持ち、口縁端部を肥厚させる。比較的厚みを持つ天井部は回転ヘラケズリ。復元口径24.0cm。

土師器環 (13) 体部の器壁は薄い。磨滅で調整は不明。

S D2467出土土器 (Fig.73)

須恵器蓋 (14) 低平な体部で口縁部内面には段を有し、端部は肥厚する。外天井部は回転ヘラケズリ。復元口径14cm。

須恵器環 (15) 低い方形の高台を貼付する。復元底径7.6cm。

土師器蓋 (16) 口縁端部を細く納める。復元口径13.0cm

灰釉陶器碗 (17) 底部端に厚くて、ハ字形に開く高台を貼付する。

S D2473出土土器 (Fig.73)

須恵器蓋 (18) 平らな天井部から直線的な口縁部へ至り、端部を嘴状に折り曲げながら僅かに肥厚させる。

須恵器甕 (19) ハ字形に開く口縁端部を肥厚させ、外面に沈線を巡らす。頸部外面には「×」

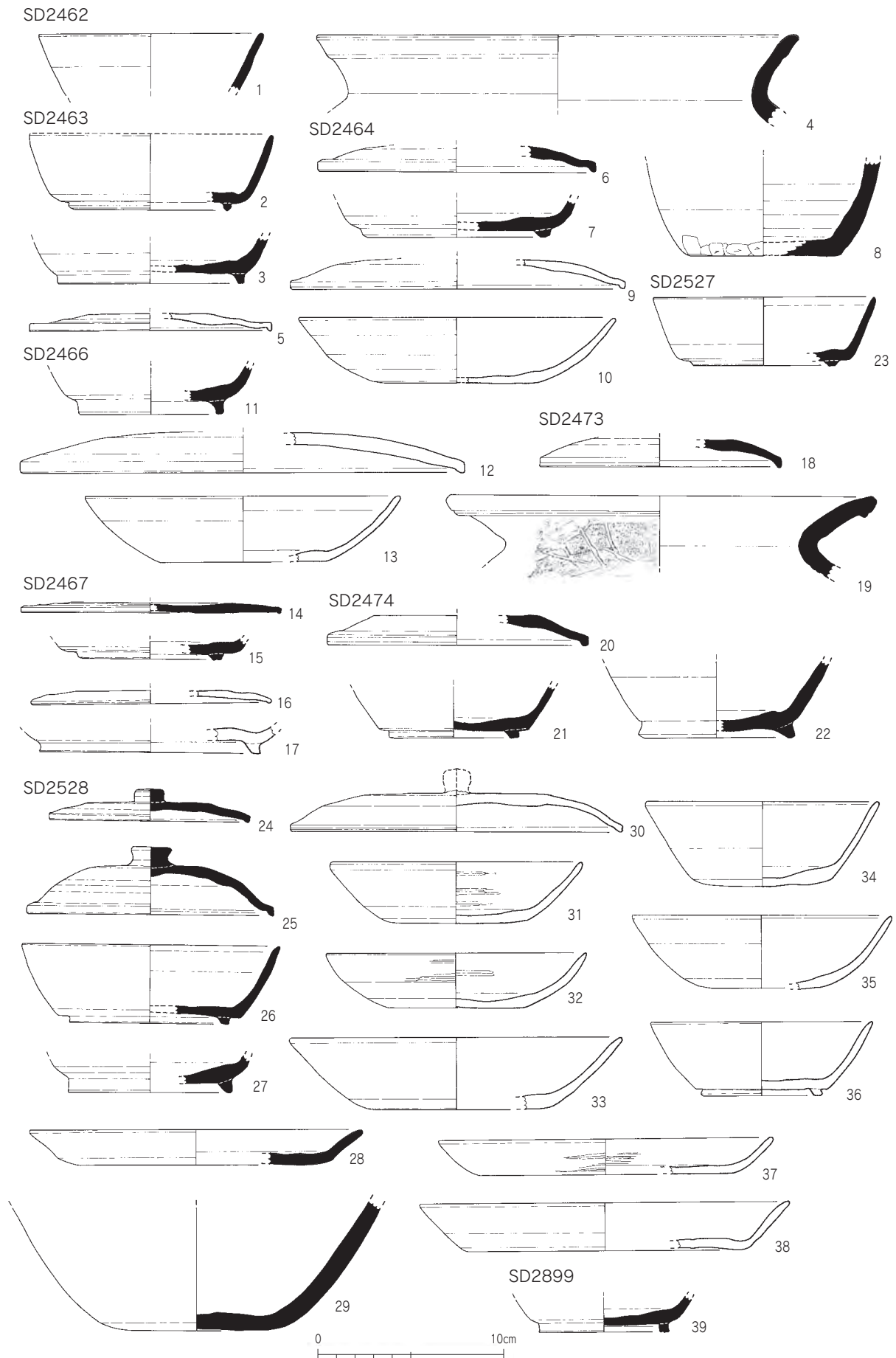


Fig.73 その他の溝出土土器実測図 (3) (1/3)

「1」「×」のヘラ記号。

S D2474出土土器 (Fig.73)

須恵器蓋 (20) 口縁端部をやや肥厚させて折り曲げ、端部はやや踏ん張る。

須恵器環 (21・22) 21は平らな底部端に高台を貼付し、体部は直線的に開く。口径7.0cm。

22は太い方形の高台を底部の端にハ字形に貼付している。

S D2527出土土器 (Fig.73)

須恵器環 (23) 低い方形の高台を平らな底部に貼付し、体部はやや内湾しながら直線的に開く。復元高台径は7.6cm。

S D2528出土土器 (Fig.73, PL.20)

須恵器蓋 (24・25) 24の撮みは円柱状で、口縁端部を肥厚させ、内面に身受けの僅かな段を有する。口径9.8cm。25は丸みを持った天井部から口縁部で一度屈折して端部を踏ん張るように折り返す。口径13.2cm。

須恵器環 (26・27) 26は平らな外底面に低い方形の高台を貼付し、体部から口縁部へは直線的に開く。口縁部内面には稜が立つ。口径13.6cm、底径8.6cm、器高4.3cm。27はハ字形に開く高台を底部端に貼付し、ナデにより体部下位に稜線をつくり出す。

須恵器皿 (28) 体部下位で器壁が一旦薄くなるが、口縁部へは肥厚して至る。外底面は回転ヘラケズリ。復元口径18.0cm。

須恵器壺 (29) 壺底部で、体部下位と外底部はタタキ後ナデ。

土師器蓋 (30) 撮みを欠損する。外側口縁部には沈線を巡らせ、内面には身受けの段を有する。復元口径17.8cm。

土師器環 (31~35) 31・32はどちらも体部に丸みを持つ。31の外表面は磨滅で調整は不明だが内面にミガキ、外底部は回転ヘラケズリ。32の体部下位はケズリ、内外面にミガキを施し、外底面は回転ヘラケズリ。34は直線的に開く体部が特徴的で、外底面はヘラ切り。口径12.4cm。35は外底部端に丸みを持つ。

土師器椀 (36) 平らな外底面に、低く丸身を持って踏ん張る高台を貼付し、体部は直線的に開く。復元口径11.8cm、底径3.2cm、器高4.0cm。底部形態は須恵器と似る。

土師器皿 (37・38) 37は体部下位に丸みを持つが、38は強いナデによって一旦器壁が薄くなり、再び肥厚して口縁へ至る。37の外底面は回転ヘラケズリ。38はヘラ切り。

S D2899出土土器 (Fig.73)

須恵器環 (39) 高台は直線的に立ち上がるが、畳付に1条の沈線を巡らす。

S D3818出土土器 (Fig.74)

土師器皿 (1) 体部は短く開く。外底部はヘラ切り。

土師器椀 (2) 方形の高台は高くハ字形に開く。外底部の調整は磨滅のため不明。

緑釉陶器碗 (3) 小さく鋭く立ち上がる高台を貼付する。釉薬が剥落しているが器形などから緑釉陶器とみられる。胎土は精良である。

S D3825出土土器 (Fig.74, PL.20)

須恵器蓋 (4~8) 4は低平な天井部と体部の境が明瞭でなく、口縁部は下方に小さく折り曲げる程度で突出する。撮みは扁平で中央が窪む。外天井部は回転ヘラケズリ。5は高く平

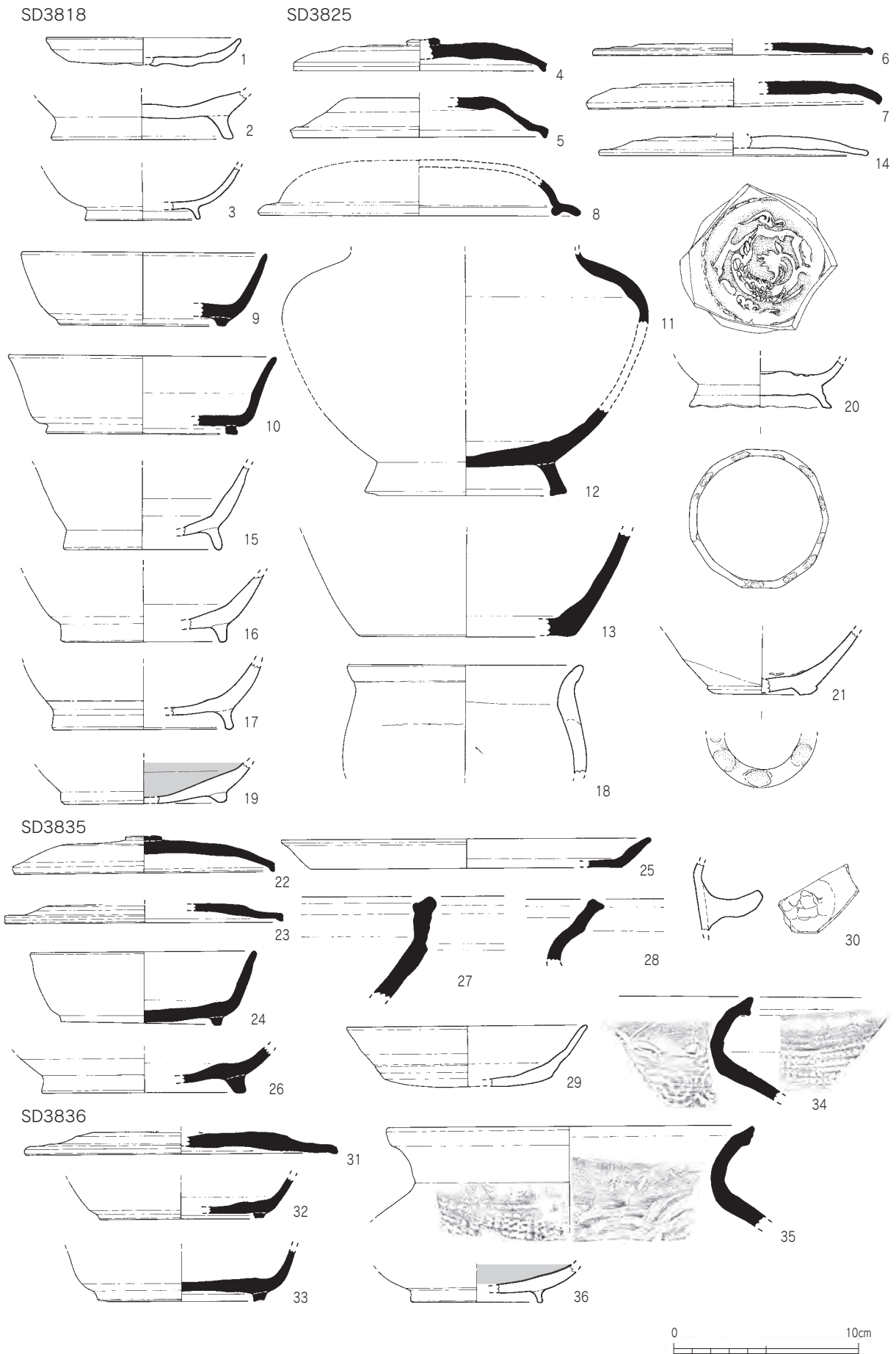


Fig.74 その他の溝出土土器実測図(4)(1/3)

らな天井部と体部の境が明瞭で、口縁部は屈折して端部を肥厚させて折り曲げる。5は口縁端部を僅かに肥厚させて内面に段を有する。7は口縁端部を断面方形にする。8は身受けの返りを持ち、天井部は大きく内湾する。胎土は精良で復元口径は17.6cm。

須恵器環（9・10） 9は低い高台を底部端に貼付する。体部下位に丸みを持ち、口縁端部が僅かに肥厚する。10は低く厚い高台を貼付する。丸みを持った体部下位から口縁部へは開いて至る。復元口径14.4cm、底径10.2cm、器高4.2cm。

須恵器壺（11～13） 11は短頸壺の頸部片で肩部は張りがなく体部へ至る。12は壺の底部片で高い高台がハ字形に開く。外底面は回転ヘラケズリ。13は、体部外面はナデ、外底部は工具によるナデ、内面底部付近には指頭圧痕がある。復元底径11.6cm。

土師器蓋（14） 口縁部内面に僅かに段を有する。外天井部はヘラケズリ。

土師器椀（15～17） いずれも方形で高くハ字形に踏ん張る高台を貼付する。15の体部は中位で薄くなる。16は器面の磨滅が著しい。17は体部下位に丸みを持ち、復元底径は9.6cm。

土師器甕（18） 頸部の屈折は弱いが、内面頸部下位はヘラケズリ。

黒色土器椀（19） A類椀で低い高台を貼付する。内面に僅かにミガキがみられる。

青磁碗（20・21） 20は越州窯系青磁碗で見込に龍雲のスタンプを施す。高台は高く端部が面取り風となる。全面に施釉し、灰緑色に発色する。畳付に目跡。上層出土。21は越州窯系青磁碗I類。体部下位は露胎で、見込と外底部は重ね目跡がある。灰緑色に発色する。

S D3835出土土器 (Fig.74, PL.20)

須恵器蓋（22・23） 22は扁平な撮みを持ち口縁端部を折り返す。外天井部は回転ヘラケズリ。口径14.0cm。23は天井部と体部の境が明瞭で、口縁部外面に沈線を巡らす。

須恵器環（24） 方形の高台を貼付し、体部は下位に丸みを持って直線的に開く。口径12.3cm、底径8.7cm、器高3.9cm。

須恵器皿（25） 外底部の調整は不明。復元口径20.0cm。

須恵器壺（26） 底部片。底部端に貼付する高台は厚いが丁寧である。

須恵器鉢（27） 口縁部は内側に屈曲して直立する。復元口径は30cmを超える。

須恵器甕（28） 口縁部は屈曲して開く。

土師器環（29） 器壁が肥厚する底部に対して体部は薄く、直線的に開く。外底部はヘラ切り。復元口径13.0cm、底径9.0cm、器高3.3cm。

土師器甕（30） 甕の把手。細く棒状に延びて端部が上向きにすぼまる。

S D3836出土土器 (Fig.74)

須恵器蓋（31） 天井部の器壁は肥い。口縁部内面に段を有し、端部に丸みを持つ。

須恵器環（32・33） 32は低く方形の高台を貼付し、体部下位はナデで僅かに稜を出す。外底部はナデ。33は方形の高台を貼付し、体部下半に丸みを持つ。

須恵器甕（34・35） 34は頸部から口縁部は大きく屈曲して至る。口縁部に自然釉を発する。復元口径20.0cm。35はS D3825出土甕片と接合した。復元口径22.9cm。

黒色土器椀（36） A類。内面に僅かなミガキを確認できる。

S D4044出土土器 (Fig.75)

須恵器蓋（1） 撮みを欠損する。口縁部は嘴状に折り返して先端部を鋭く仕上げる。

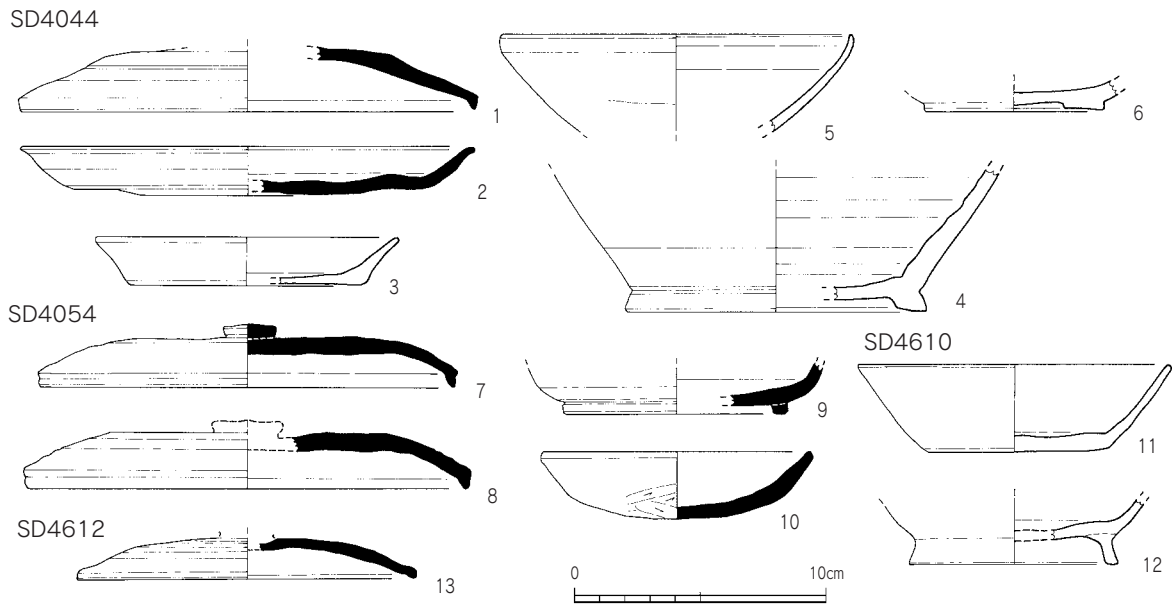


Fig.75 その他の溝出土土器実測図(5)(1/3)

須恵器皿(2) 体部で僅かに屈曲しながら口縁部は外反する。底部は少し焼き歪みがある。外底部はケズリのちナデ。復元口径13.8cm, 器高1.9cm。

土師器皿(3) 体部と底部の境の器壁は厚く, 外底部に板状圧痕あり。復元口径12.0cm。

灰釉陶器壺(4) 高台を底部の端に貼付し, 体部との境に沈線を巡らせる。内面はロクロによるナデで横位の稜が明瞭。

青磁碗(5・6) どちらも越州系青磁碗。5はII-2b類で口縁部を内傾させる。体部下半は露胎。6は蛇ノ目高台の底部で露胎。底径は7.0cm。

SD4054出土土器 (Fig.75, PL.20)

須恵器蓋(7・8) 7は比較的厚みのあるボタン状の撮みが付く。天井部は高く口縁端部を嘴状に折り返す。外天井部は回転ヘラケズリ。口径16.6cm, 器高2.5cm。8は撮みを欠損する。口縁部を嘴状に折り曲げ, やや肥厚する。外天井部の調整は回転ヘラケズリ。

須恵器坏(9・10) 9は方形の高台を貼付後, 底部と体部の境をナデによって沈線状の境界を作る。高台径9.8cm。10は丸底で, 底部外面は手持ちのヘラケズリ, 内面はナデ。

SD4610出土土器 (Fig.75)

土師器坏(11) 体部から口縁部へ直線的に開く。外底部はヘラケズリ。復元口径12.6cm, 底径7.6cm, 器高3.5cm。

土師器椀(12) 高台は大きくハ字形に踏ん張る。高台径8.4cm。

SD4612出土土器 (Fig.75)

須恵器蓋(13) 撮みを欠損する。丸みを持った天井部から口縁部へ屈折して至る。口縁部は肥厚する。内面は平滑で転用硯として使用された可能性がある。復元口径13.6cm。

4) 井戸

SE2346出土土器 (Fig.76)

須恵器甕 (1) 大型品で、頸部が鋭く屈曲する。焼成で少し赤変している。

土師器坏 (2) 口縁部が僅かに外反する。内面に油煙が付着、灯火器として使用か。

SE2502出土土器 (Fig.76, PL.20)

土師器坏 (3・4) 3は外底部と体部の境に丸みを持ち、外底部にはヘラ切り後、板状圧痕あり。4も板状圧痕あり。口縁部が少し外反している。

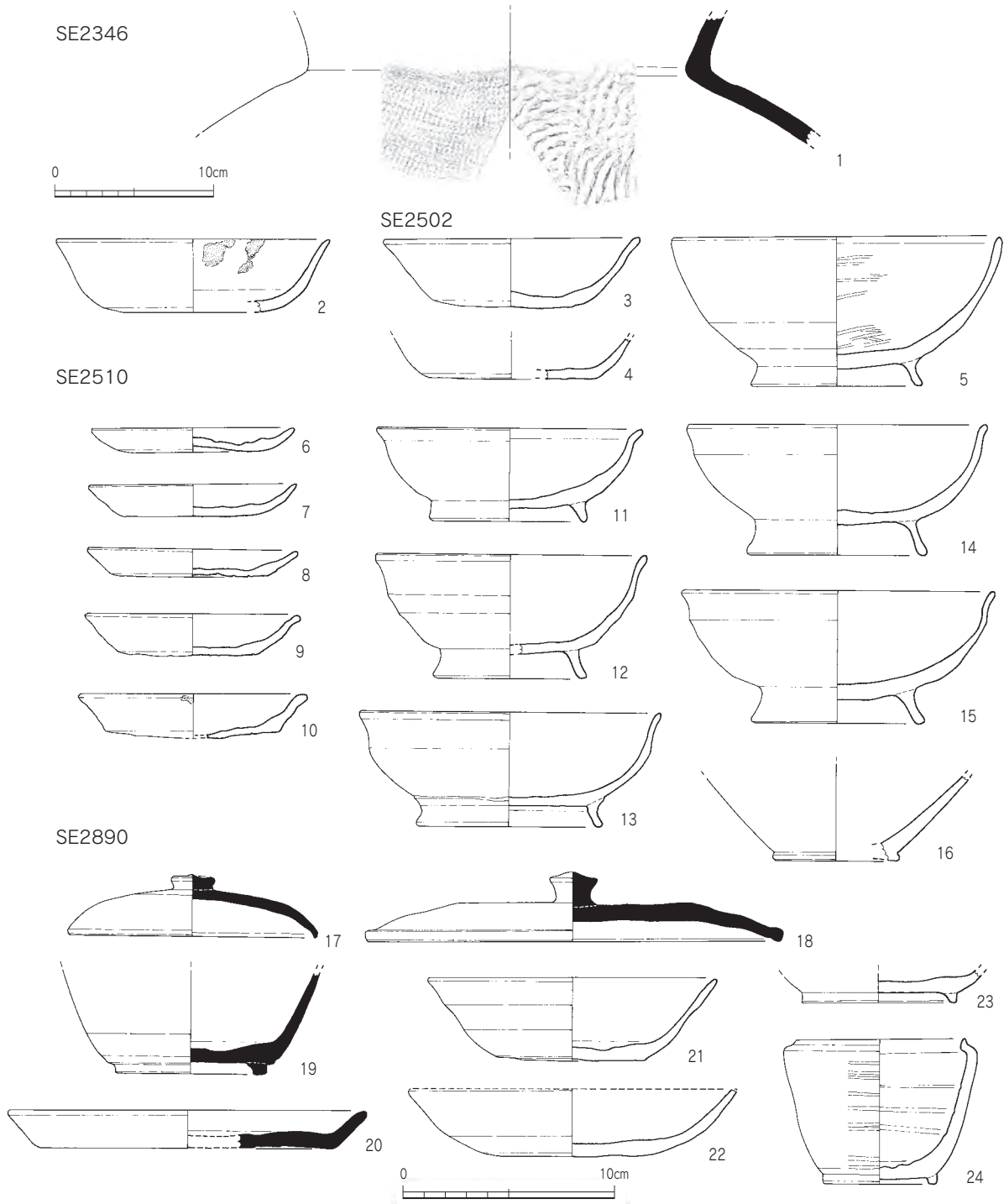


Fig.76 井戸出土土器実測図 (1) (1/3・1/4)

土師器椀 (5) 体部は丸みを有する。高台は厚みがなく僅かに踏ん張る。外底部はヘラ切り
りで板状圧痕あり。内面はミガキ。

SE 2510出土土器 (Fig.76, PL.20)

土師器皿 (6~10) 6~8の口径は9.7~10cmで器高1.2~1.5cm, 9・10は口径10.3cm
と10.9cmで器高は2cmを超える。外底部はヘラ切りで板状圧痕あり。

土師器椀 (11~15) いずれも体部中位に丸みを持って口縁部付近で外反し, 高台は高く
踏ん張る。外底部の調整には, ヘラ切りや一部板状圧痕がある。口径は12.6~12.8cm,
14.2~14.9cmでまとまっている。

青磁碗 (16) 越州窯系青磁碗で, 外底部は露胎の蛇ノ目高台。

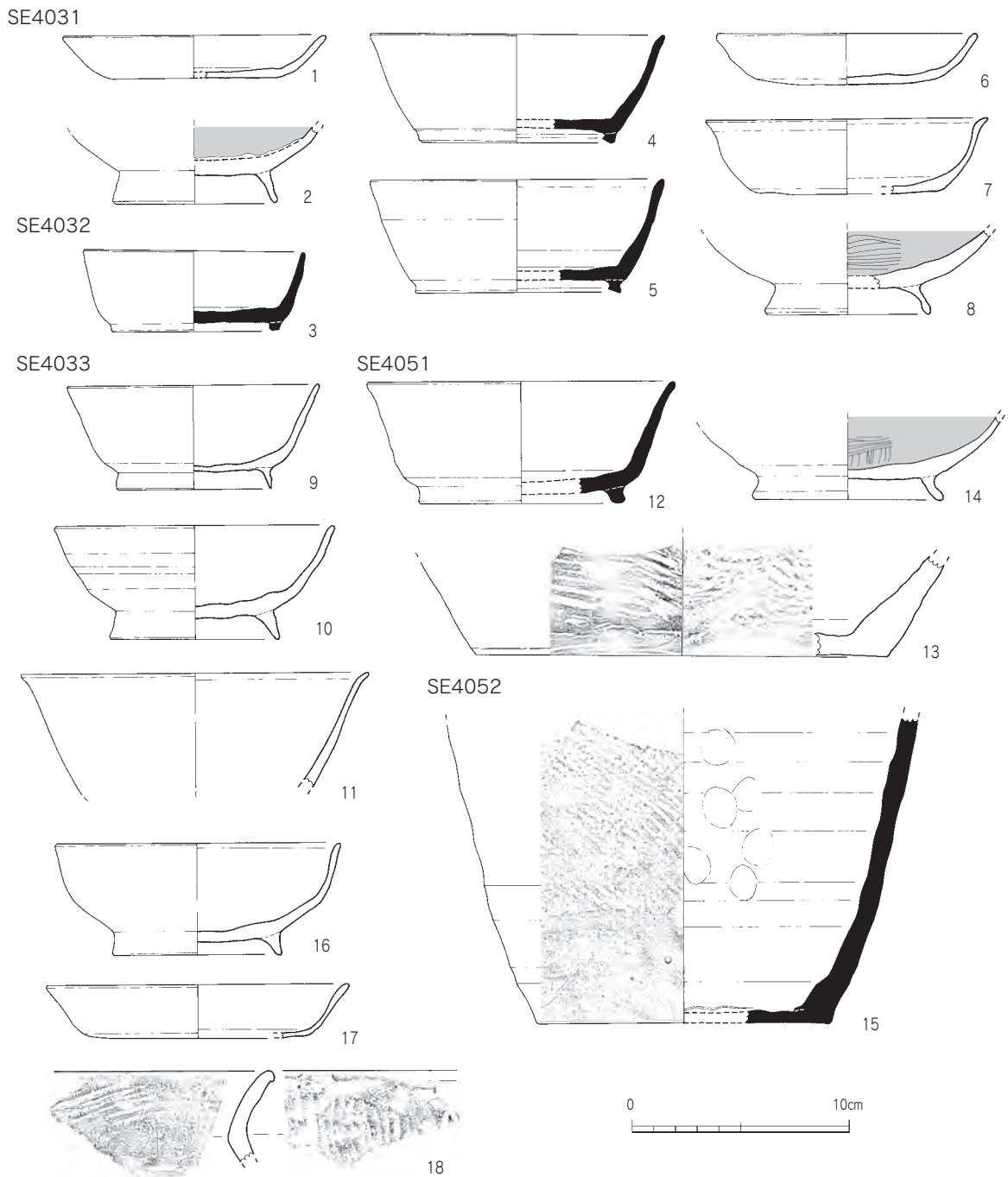


Fig.77 井戸出土土器実測図 (2) (1/3)

S E 2890出土土器 (Fig.76, PL.20)

須恵器蓋 (17・18) 17は宝珠状の撮みを持つ。天井部は大きく丸みを有する。口径11.6cm, 下層より出土。18の口縁端部は厚く丸みを有し, 外天井部と口縁部の境で僅かに屈曲する。外天井部の調整はヘラ切り離し。

須恵器坏 (19) 坏の高台は低く方形だが, 外底部と端部との境を強くナデる。

須恵器皿 (20) 口径14.0cmで, 外底部はヘラ切り未調整。

土師器坏 (21・22) 21の外底部はヘラ切り未調整で, 体部内外面はナデ。22は口縁端部付近を僅かに欠損する。外底部はヘラ切りで板状圧痕あり。

土師器椀 (23) 低い高台を底部端に貼付する。

土師器壺 (24) 頸部が屈曲する。外面体部に横位のヘラミガキ, 外底部はヘラケズリ。口径8.0cm, 器高6.8cmで胎土も精良。この他, 本遺構では須恵器や土師器の墨書土器が出土。

S E 4031出土土器 (Fig.77)

土師器皿 (1) 復元口径11cm, 器高2cm。外底部は磨滅するが僅かに板状圧痕がある。

黒色土器椀 (2) A類椀で高台が大きくハ字形に開く。内面には油煙が付着している。

S E 4032出土土器 (Fig.77, PL.20)

須恵器坏 (3~5) 3の高台部は低く外底部端に貼付する。3の体部は直線的に立ち上がるが, 4・5については口縁部付近で開き気味となる。3は口径10.2cm, 4・5は口径13.6cm。

土師器皿 (6) 底部と体部の境は丸みを持って不明瞭。

土師器坏 (7) 口縁部付近で肥厚しながら外反する。

黒色土器椀 (8) A類椀で鋭い高台部を貼付。内面横位のミガキで黒色, 外面は橙褐色。

S E 4033出土土器 (Fig.77, PL.20)

土師器椀 (9・10) どちらもハ字形に開く高台を持つが, 9の体部が直線的であるのに対し, 10は体部下半に丸みを持つ。10の外底部はヘラ切り未調整で板状圧痕あり。

青磁碗 (11) 黄緑色の釉調で体部下半にも施釉する。口縁部が外反する越州窯系碗I類。

S E 4051出土土器 (Fig.77)

須恵器坏 (12) 高台は僅かに踏ん張り, 口縁部は僅かに外反するが外底部と体部の境は明瞭である。口径14.2cm, 底径9.5cm, 高さ5.6cmで井戸の掘方より出土。

灰釉陶器壺 (13) 底部片で外面体部はタタキ, 底部はナデ。釉は緑白色に発色, 胎土精良。

黒色土器椀 (14) A類椀で, 内面のミガキは粗い。外底部には板状圧痕がある。

S E 4052出土土器 (Fig.77, PL.20)

須恵器壺 (15) 長胴となる壺の底部片。外面体部は斜格子のタタキで, 下半部は回転ヘラケズリ, 内面はヨコナデによる凹凸が明瞭である。胎土は粗く砂粒を多く含む。底径は13.4cm。

土師器椀 (16) 端部が細い断面三角形の高台を貼付し, 体部は大きく丸みを持つ。体部内外面はナデ調整で淡肌色に焼成し, 口径13cm, 底径7.8cm。

土師器皿 (17) 底部と体部の境は強いナデで器壁は薄い。井戸枠付近出土。

土師器甕 (18) 口縁部片で外面頸部下位に縦位の粗いタタキ, 内面口縁部には横位のハケ目調整。胎土はやや粗いが硬質に焼成する。

5) 土坑

S K 388出土土器 (Fig.78~82, PL.21・22)

S K 388出土土器は土坑内で一括出土した「S K 388埋土」出土資料と、上位堆積層を含む「S K 388周辺堆積層」出土資料の二つに分けて報告する。なお、すべての資料で漆等の内容物の有無を肉眼観察で検証したが、その痕跡は確認できなかった。ただし、17の胴部外面の一部には赤色顔料、39の胴部外面には白色物質の付着がみられた。

S K 388埋土出土土器 (Fig.78~81)

須恵器蓋 (1) 身受けのかえりは僅かで、天井部外面は回転ヘラケズリし、内面はナデ調整である。胎土はあまり砂粒を含まず、比較的精選されている。焼成はやや甘く赤褐色で、土師質に近い。

須恵器壺 (2~10) 2はやや小型の短頸壺である。全体的に回転ナデで調整するが、底部

SK388 埋土

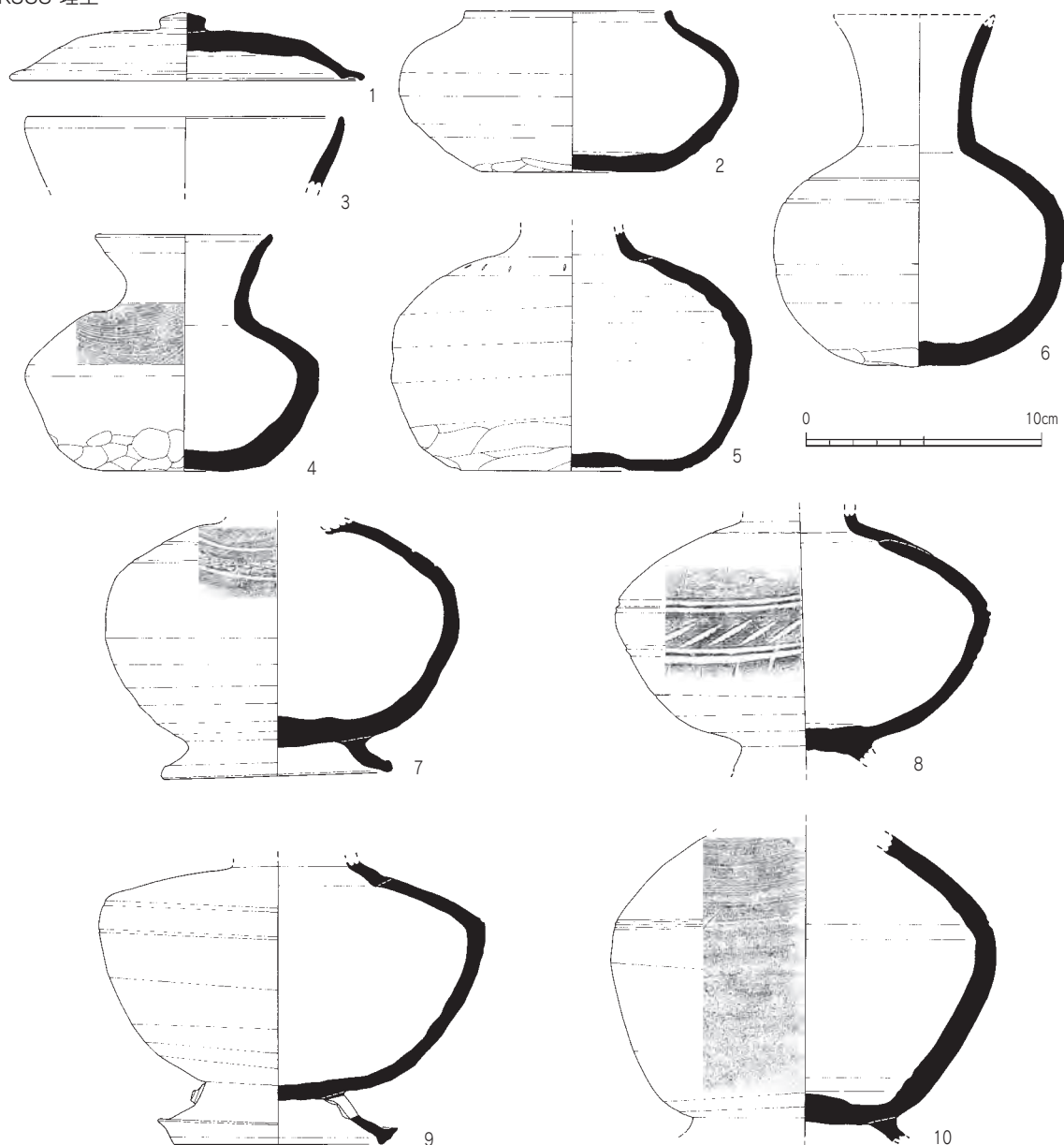


Fig.78 土坑出土土器実測図 (1) 17次SK388 (1/3)

外面付近は不定方向の手持ちヘラケズリ調整である。口縁部外面と内面は灰を被っておらず、正立状態で蓋を被せた状態で焼成されている。底部には焼成時段階でのひび割れがみられる。3は長頸壺の口縁部先端の破片である。先端付近がやや内湾する形態となる。他個体と胎土を比較したが³、同一個体の胴部は確認できなかった。4は小型の長頸壺で、口縁部の一部を欠損する。口頸部は中心からずれた位置で接合し、かつ若干の焼き歪みも認められる。肩部には粗雑なカキ目が巡る。胴部外面中位以下は回転ヘラケズリ調整で、下位になると手持ちヘラケズリ調整が加わる。肩部に他個体の小片が付着しており、焼成時に他個体と接していたことが分かる。5は長頸壺で、胴部は完存するものの、口頸部を完全に失う。頸部の破面は打ち欠いた後に、若干滑らかに削っている。頸部内面には風船技法の粘土接合面が残る。胴部外面は回転ヘラケズリ調整で、下位は手持ちヘラケズリ調整である。底部外面は指頭痕が目立つナデ調整である。6は長頸壺で、口縁部付近を斜めに欠損する。焼成が甘く、白灰色を呈し、欠損部分の破面を含め器壁全体が摩耗している。肩部に2条、胴部に1条の沈線を巡らせる。底部付近では手持ちヘラケズリ調整がなされている。

7～10は脚付長頸壺の胴部である。7は頸部から上位を欠損するが、胴部以下は完存する。頸部は風船技法の粘土接合面で剥離した状態で欠損する。破面には二次的な調整はなされず、経年変化で風化する。肩部は2条の沈線の間を波状文が巡る。胴部下半は回転ヘラケズリである。肩部や高台部分に焼成時に生じた亀裂が確認できる。8は肩部の張る長頸壺の胴部で、胴部のみが完存し、頸部と脚部を欠損する。頸部は打ち欠いた後に破面を滑らかに削っている。脚部も打ち欠くが、とくに調整は加えられていない。肩部に2条1対の沈線を入れ、その間に櫛状工具による刺突文を入れる。胴部下半は回転ヘラケズリ調整で、部分的にミガキ調整に近い部分もみられる。肩部上面に灰が被り、正立状態で焼成されている。9は頸部のみを欠損し、胴部と脚部は完存する。頸部は打ち欠いた後に破面を滑らかに削っている。肩部には2条の沈線が巡り、胴部下半は回転ヘラケズリで調整する。脚部には対となる二つの穿孔がある。ヘラ状工具の同一方向からの刺突によるもので、外面に押し出された粘土が溜まる穿孔と内面に押し出された粘土が溜まる穿孔が直線上に対に並ぶ。底部外面にはヘラ記号状の浅い沈線がある。肩部上面には濃緑色の自然釉が厚く掛かり、底部内面にも灰が被るため、正立状態で焼成がなされている。10は頸部と脚部を欠損し、胴部は完存する。頸部の破面は粘土接合面でないにも関わらず、正円に近くなるように意図的に打ち欠いている。破面は滑らかでないが、小まめに打ち欠いた痕跡を残す。脚部は粘土接合面で剥離する面積が広く、とくに二次的な調整は加えていない。胴部全体にカキ目を巡らし、胴部下半は回転ヘラケズリ調整である。底部内面の一部に灰が被り、正立状態で焼成がなされている。

大量の平瓶
が出土

須恵器平瓶(11～41) 11は頸部を粗く打ち欠いた状態で、胴部が完存する。頸部の破面はとくに二次的な調整を加えていない。胴部は全体的にカキ目を巡らせ、胴部下半から底部は手持ちヘラケズリ調整である。胴部外面にはヘラ記号状の沈線が粗雑に刻まれている。灰は肩部上面にかかる。12は完形品である。胴部外面の上半はカキ目が巡るが、頸部の周辺では、頸部を中心としたカキ目と重複するような状態で交差する。胴部下半は手持ちヘラケズリで、底部外面は指頭痕が目立つナデ調整を施している。頸部にヘラ記号がある。灰は胴部の側面を中心に被っており、傾いた状態で焼成されたと考えられる。

SK388 埋土

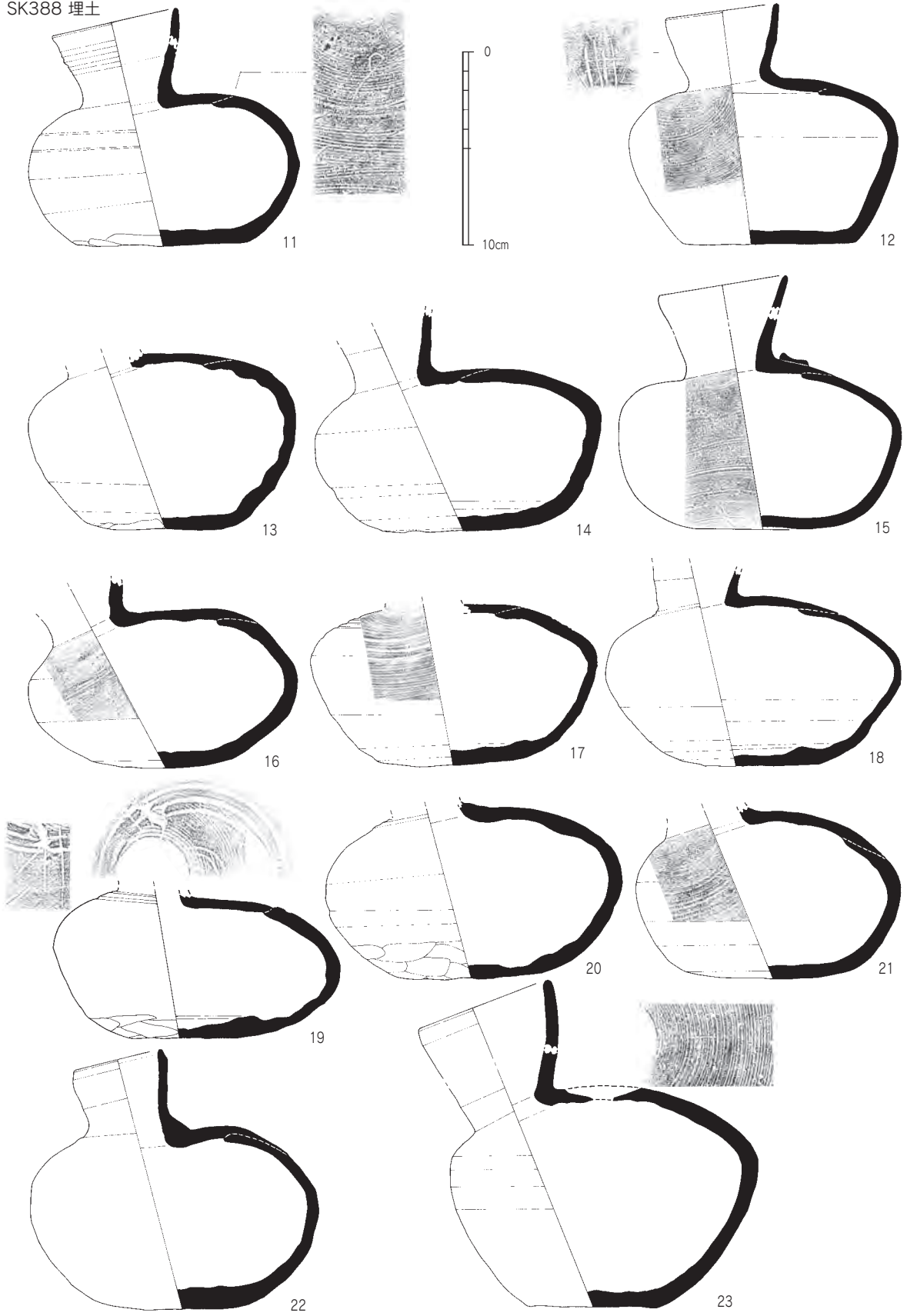


Fig.79 土坑出土土器実測図 (2) 17次SK388 (1/3)

SK388 埋土

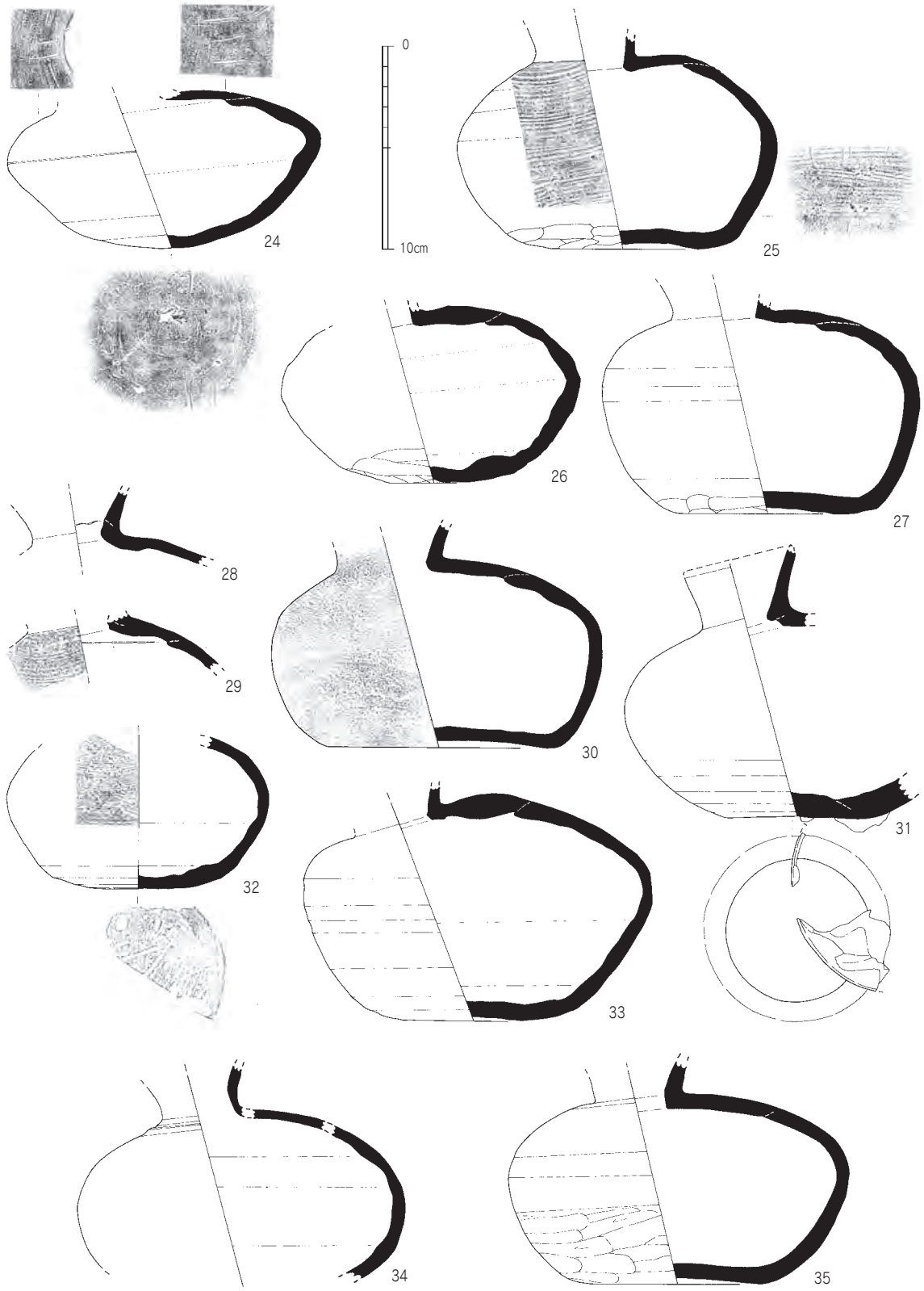


Fig.80 土坑出土土器実測図 (3) 17次SK388 (1/3)

13は頸部のみを欠損し、胴部は完存する。焼成が甘く、淡灰褐色を呈する。頸部は粘土接合面で剥離し、とくに二次的な調整は加えられていない。胴部下半は回転ヘラケズリ調整の後に、手持ちヘラケズリ調整が加えられる。底部外面の中心部が摩耗する。14は口縁部先端のみを欠損し、頸部以下は完存する。口縁部先端はやや粗く打ち欠かれ、二次的な調整はなされていない。胴部下半は回転ヘラケズリ調整であるが、調整時に胎土表面の乾燥が進んでいたためか、回転ヘラケズリ調整により器面が荒れている。底部外面は指頭痕の目立つナデ調整である。胴部側面のみに灰が被る。15は口縁部先端まで部分的に残るが、頸部の大半は欠損する。胴部は完存する。胴部上面の中心部には、頸部と並ぶ状態でボタン状の粘土が貼り付けられている。底部の中心部を起点にカキ目が胴部全体に巡っており、全体的に器壁は滑らかな曲線を描いている。灰は胴部上面や頸部内面に被っており、正立状態で焼成されている。16は部分的に口縁端部が残るが、頸部の大部分を打ち欠いている。胴部は完存する。胴部下半は回転ヘラケズリ調整で、底部外面のみが摩耗している。

17は頸部を欠損し、胴部が完存する。頸部は粘土接合面で丁寧に打ち欠かれており、破面を二次的に削っている。胴部中位から上はカキ目を巡らせ、頸部のまわりでは、頸部を中心に巡るカキ目と重複する。胴部下半は回転ヘラケズリ調整である。胴部側面の一部に赤色顔料が付着する。底部の中心部は若干摩耗している。18の頸部は粗く打ち欠かれている。胴部の3分の1を欠損するが、これは発掘調査時の損傷である。胴部下半は回転ヘラケズリ調整である。胴部上面に灰を被り、正立状態で焼成がなされている。19は頸部を欠損し、胴部は完存する。頸部は粘土接合面で剥離しており、とくに二次的な調整は認められない。肩部の上側に2条の沈線を巡らせる。頸部を中心軸としてカキ目が巡る。底部は不定方向の手持ちヘラケズリで、やや粗雑な印象を受ける。焼成はやや甘く、全体的に褐色を呈する。胴部上面の2ヶ所にヘラ記号がある。20は頸部を欠損し、胴部は完存する。頸部は丁寧に打ち欠かれ、破面を二次的に削る。胴部下半はこまめな単位の手持ちケズリで調整する。底部から胴部前面にかけて摩耗する。21も頸部を欠損し、胴部が完存する。頸部は、打ち欠いた後に破面を二次的に削る。胴部上面のみにカキ目を巡らせ、胴部下半は回転ヘラケズリで調整する。底部外面の中心部のみ摩耗が進む。22は全体的に完存し、底部のみ手持ちヘラケズリで調整する。頸部の接合が粗雑で、器面に粘土接合痕がみられる。胴部上面に不均一に灰を被っている。

23は明確に平底となる平瓶である。頸部の半分を欠損するが、胴部は頂部を除き完存する。頂部は風船技法の粘土接合面で剥離する。胴部上面はカキ目を巡らし、胴部下半は回転ヘラケズリ調整である。底部外面はナデ調整である。24は頸部を欠損し、胴部は完存する。頸部は粘土接合面で打ち欠かれ、破面を二次的に削っている。胴部下半は回転ヘラケズリで調整し、底部外面の中心部のみ若干摩耗する。底部と胴部上面の3ヶ所にヘラ記号がみられる。灰は上面と底部内面に被っており、正立状態で焼成される。25はやや粗雑に頸部を打ち欠く。胴部は完存する。胴部上半はカキ目が巡り、底部付近のみ手持ちヘラケズリで調整する。底部中心部が若干上げ底状で、円状に底部の接地面が摩耗している。胴部下半にヘラ記号がみられる。焼成はやや甘く、全体的に赤褐色を呈する。26は頸部のみ欠損するが、発掘調査時に半分が小片化したため、破面の調整の確認が難しい。頸部は粘土接合面で剥離しているのは確実である。底部付近のみ手持ちヘラケズリで調整する。底部の中心部のみ、若干摩耗する。27は頸

SK388 埋土

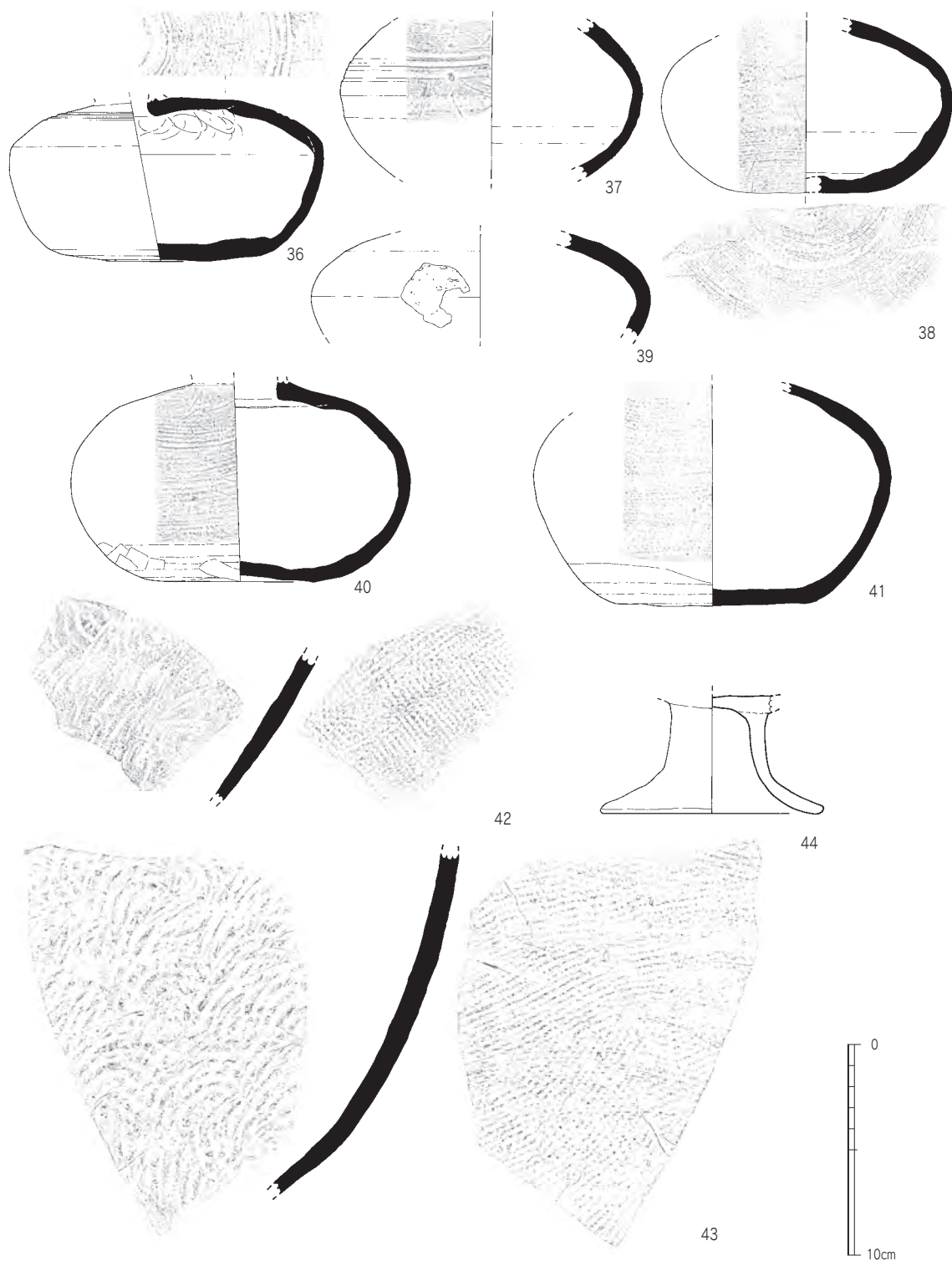


Fig.81 土坑出土土器実測図(4) 17次SK388 (1/3)

部を欠損し、胴部は完存する。頸部は打ち欠いた後に、とくに二次的な調整はしていない。底部付近は手持ちヘラケズリで調整する。胴部側面を中心に灰が被り、その対面で他個体の胎土が貼り付いて残る。

28・29は頸部の小片である。他個体との接合や胎土の比較を試みたが、同一個体は確認できなかった。28は口縁部を打ち欠いている。29も頸部を欠損するが、この破面は新しく、発掘調査時の損傷と考えられる。30は頸部を欠損し、胴部は完存する。頸部は粗く打ち欠かれ、二次的な調整はない。胴部上面はカキ目が巡り、胴部下半は手持ちヘラケズリで調整する。31は発掘調査時の破損により小片となる。頸部の破面も新しい。胴部下半は回転ヘラケズリで調整される。頸部内面や底部内面、胴部上面にかけて濃緑色の自然釉が垂れ下がり、灰被りも著しい。底部外面の一部には須恵器坏蓋と思われる口縁部が付着している。焼成時に正立状態で重ね焼きをしたか、もしくは不良品の坏蓋を焼き台に使用した可能性が考えられる。

32は胴部の破片である。底部外面は回転ヘラケズリで、ヘラ記号がある。胴部上面に灰を被る。33は頸部を欠損するが、胴部は完存する。頸部は打ち欠いたまま、とくに二次的な調整を加えていない。胴部上面はカキ目が巡り、胴部下半は回転ヘラケズリで丁寧に調整する。胴部上面に灰を被り、正立状態で焼成されている。焼成時に胴部の頂部付近に焼き膨れを生じ、かつ底部に亀裂が走っている。34は胴部の破片である。胎土や色調、調整方法を他個体と比較したが、同一個体は確認できなかった。残存範囲はすべて回転ナデ調整で、頸部の打ち欠きの有無は不明である。35は頸部を欠損するが、胴部は完存する。頸部は粗く打ち欠き、二次的な調整はみられない。胴部下半は手持ちヘラケズリ調整で、底部外面は指頭痕のあるナデ調整である。底部の一部が若干摩耗している。36は頸部を欠損する胴部の破片である。頸部は粘土接合面で打ち欠かれており、二次的な調整はない。肩部上側に3条の沈線が巡る。底部外面は回転ヘラケズリで調整する。胴部上面にヘラ記号状の沈線があるが、偶発的なものの可能性もある。灰は胴部上側に被っており、正立状態で焼成される。

37～39は胴部の破片である。いずれも他個体との接合を試みたが、胎土や色調、製作技法の違いから、同一個体は確認できなかった。37は肩部に3条の沈線が巡る。焼成がやや甘く、全体的に赤褐色を呈する。38は底部中心を軸にカキ目を胴部まで巡らせる。頸部の打ち欠きの有無は不明である。灰は胴部上面に被る。39は胴部の小片で、残存範囲は全て回転ナデ調整である。胴部上面に緑色の自然釉が垂れた痕跡がある。肩部に白色物質が付着している。40は胴部の破片である。頸部は粘土接合面で剥離するが、打ち欠きの有無は不明である。胴部の中位から上はカキ目を巡らし、肩部にヘラ状工具による刺突文もみられる。底部外面は手持ちヘラケズリで調整する。底部内面は粗雑なナデ調整である。41は胴部の破片で、頸部の打ち欠きの有無は不明である。胴部上半はカキ目を巡らし、底部付近のみ回転ヘラケズリで調整する。底部外面は手持ちヘラケズリで、指頭痕が残るナデ調整も加わる。底部内面は粗雑なナデ調整である。

須恵器甕 (42・43) 42・43は甕胴部下半の破片で、それぞれ別個体の甕の破片である。外面は擬格子目タタキで、内面には同心円当て具痕がみられる。加えて、外面には一定の間隔でカキ目が巡る。42は底部に近いめか、色調が淡灰白色となる。43は残存範囲の上部に灰被りがみられる。

土師器高坏 (44) 脚部の破片で、坏部の底部内面が若干残る。器面はナデ調整で整えられ、屈曲部付近には指頭痕がみられる。

S K 388周辺堆積層出土土器 (Fig.82)

須恵器坏 (1・2) 1は有高台の坏身の破片である。底部外面は回転ヘラ切りで、粗雑にナデ調整を加える。2は金属器模倣の坏身で、胴部中位に稜のある屈曲が特徴である。胴部中位から底部にかけて丁寧な回転ヘラケズリ調整で整える。高台の接合は甘く、全体的に粘土接合面で剥離している。底部内面は指頭痕を残すナデ調整である。

須恵器鉢 (3・4) 3は口縁部先端の破片で、内外面に濃緑色の自然釉が掛かる。口縁部下に沈線を巡らせる。4は把手付の胴部の破片で、鉢もしくは甑の可能性が考えられる。外面は格子目タタキで、内面には同心円当て具痕が確認できる。把手は粗雑なナデ調整で、指頭痕が多く残る。

須恵器平瓶 (5・6) 5・6は胴部上面から頸部にかけての破片である。「S K 388埋土」出土の平瓶と比較したが、同一個体は確認できなかった。5は口縁部先端を粗雑に打ち欠いている。とくに二次的な調整はしていない。6も口縁部の大部分を欠損するが、破面は比較的新しい。口縁部は焼き歪みが著しい。

須恵器甕 (7・8) 7・8は口縁部の破片である。「S K 388埋土」出土の甕片と比較したが、同一個体は確認できなかった。7は外面が平行タタキで、内面に同心円当て具痕がみられる。破損後に二次的に利用したためか、胴部内面の同心円当て具痕の摩耗が進んでいる。肩部には「T」字状のヘラ記号がみられる。8は外面が擬格子目タタキで、内面に同心円当て具痕が残る。頸部の回転ナデが胴部内面にも及んでおり、同心円当て具がナデ消されている。

土師器皿 (9) 底部外面は回転ヘラ切りで、中央部に板状圧痕が残る。内面には粗雑なミガキ調整が加えられている。



Fig.82 土坑出土土器実測図 (5) 17次SK388 (1/3)

SK2007出土土器 (Fig.83~85, PL.22)

須恵器蓋 (1~6) いずれも坏蓋である。1は扁平な形態で、天井部外面は回転ヘラケズリ調整である。2は口縁部先端の内面に沈線状の段を有する。焼成が甘く、淡褐色を呈する。3は天井部外面の回転ヘラケズリを部分的にナデ消す。4も3とほぼ同じ調整である。天井部外面に火襷痕がみられる。5は天井部外面の回転ヘラ切り痕をナデ消している。6の撮みはボタン状となる。天井部外面は回転ヘラ切り痕をナデ消す。焼成が甘く、淡褐色を呈する。

須恵器壺蓋 (7) 短頸壺の蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリで調整する。

須恵器坏 (8~10) 8は有高台の坏で、焼成がやや甘く灰褐色を呈する。9・10は無高

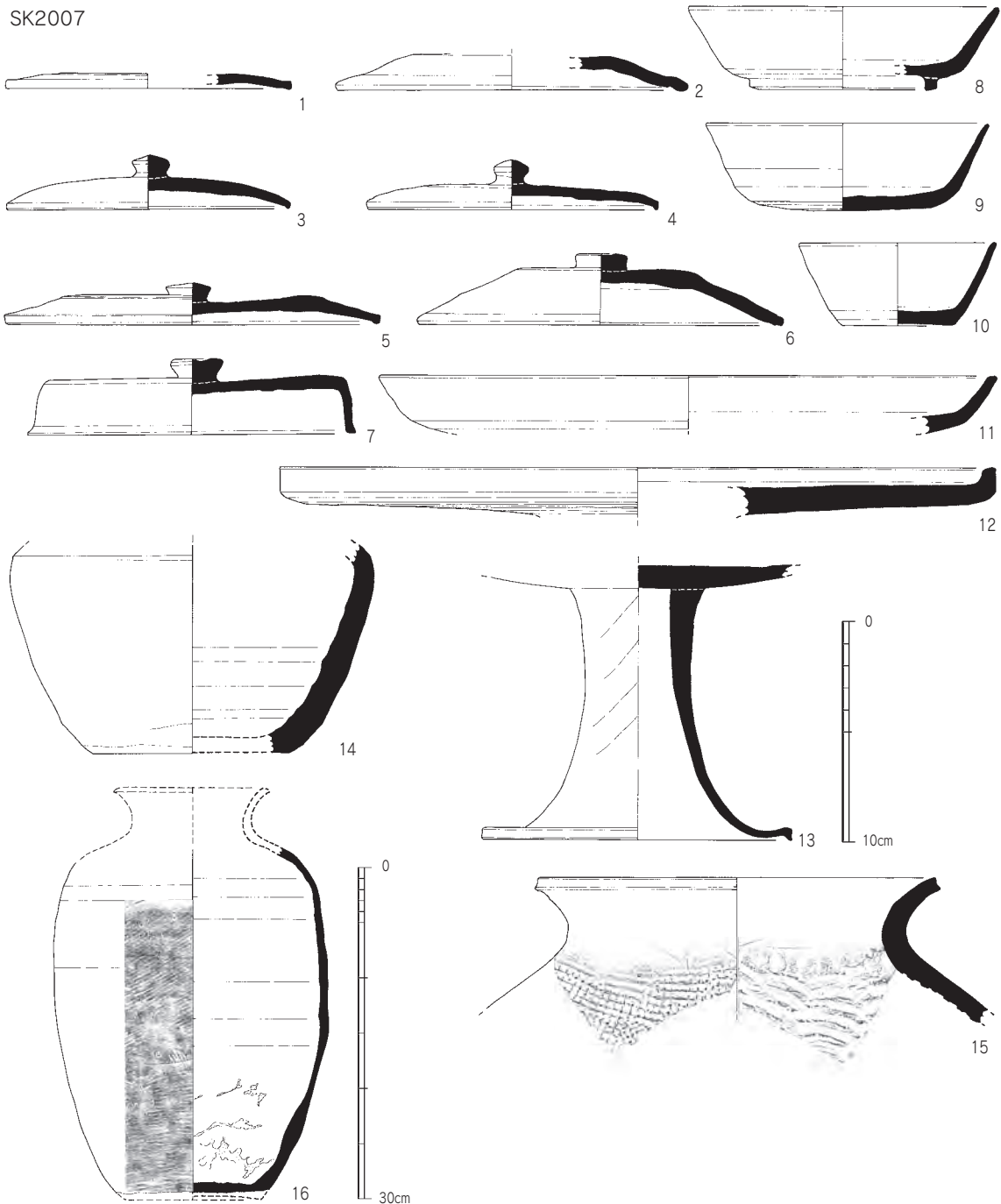


Fig.83 土坑出土土器実測図 (6) (1/3・1/6)

台の坏身である。底部外面は回転ヘラケズリで調整する。底部内面には火襷痕が明瞭に残る。10は小型品である。底部外面と胴部下端は回転ヘラケズリで調整する。胴部内面に火襷痕がみられる。

須恵器皿(11) 口縁部の破片で、底部外面は回転ヘラケズリで調整する。

須恵器高坏(12・13) 12は口縁部の破片である。口縁部先端はほぼ直立するように屈曲する。坏部内外面は回転ヘラケズリ調整で、平滑に整えられる。内面は回転ヘラケズリ調整後にさらにナデ調整を加える。坏部内面が円状に灰を被っておらず、重ね焼きの状況が分かる。13は脚部の破片で、内外面ともに回転ナデ調整である。脚部の器面には、しぼり痕がみえる。

須恵器壺(14) 壺底部の破片である。胴部下端のみ回転ヘラケズリで調整する。胴部内面は強い回転ナデ調整で、器壁が波打っている。

須恵器甕(15・16) 15は甕の口縁部の破片である。外面は格子目タタキで、内面は同心円当て具痕が残る。16は平底の長胴甕である。胴部の中位以下は回転ヘラケズリで調整し、その後に平行タタキを入れる。胴部内面の下位から底部内面にかけて白色物質が付着する。

土師器蓋(17~19) いずれも坏蓋である。17は天井部外面の回転ヘラケズリ調整の後に、内外面に回転性のミガキ調整を加える。18も17とほぼ同じ形態で、同様に回転性のミガキ調整を加える。19の天井部外面は回転ヘラ切り痕を残す。

土師器坏(20~40) 20~25は小型の無高台の坏身である。20・21は器形が類似するが、調整方法が異なる。20はミガキ調整がなく、底部外面は回転ヘラ切り未調整である。21は胴部下端と底部外面に回転ヘラケズリを加えた後に内外面にミガキ調整を行う。22はやや丸底状となるが、調整技法は21と同じで、光沢のあるミガキ調整が目立つ。23・25も底部外面を回転ヘラケズリで調整し、内外面に回転性のミガキ調整を加える。24は口縁部の破片で、内外面に若干のミガキ調整がみられる。胴部内面の一部に薄く黒斑がみられる。

26~33は中型の無高台の坏身である。基本的な調整技法は小型品と同じである。26は底部外面が回転ヘラケズリ調整で、内外面に回転性のミガキ調整を加える。器壁はやや摩耗が進んでいる。27は口縁部の破片で、外面のミガキ調整は口縁部付近のみで、下半は回転ヘラケズリ調整のままである。内面の一部に油煙痕が薄く残る。28は胴部下半の回転ヘラケズリ調整痕がよく残る。29も同様に内外面にミガキ調整を加えるが、胴部下半は比較的回転ヘラケズリ痕が残る。30・31も底部外面は回転ヘラケズリ調整で、内外面に丁寧にミガキ調整を加える。32はミガキ調整の単位がやや粗い。底部には黒斑がある。33は底部と胴部の粘土接合面での剥離がみられる。

34~36はやや大型となるが、基本的な調整技法は同じである。いずれも底部は回転ヘラケズリで、内外面にミガキ調整を加える。37は底部のみの破片で、皿の可能性もある。内面にヘラ記号がある。38は内面の胴部下半のミガキ調整がやや強めになされている。底部外面にヘラ記号がある。39・40は大型の坏身である。基本的な調整技法は他の坏身と同じで、内外面にミガキ調整を加える。

土師器椀(41~46) 41~44は底部の破片である。41は無高台の坏身と類似した調整技法で、底部外面が回転ヘラケズリで、内外面に回転性のミガキ調整を加える。高台の先端は自重により屈曲する。42は胴部外面下半が回転ヘラケズリ調整で、底部外面にヘラ記号の一部が

SK2007

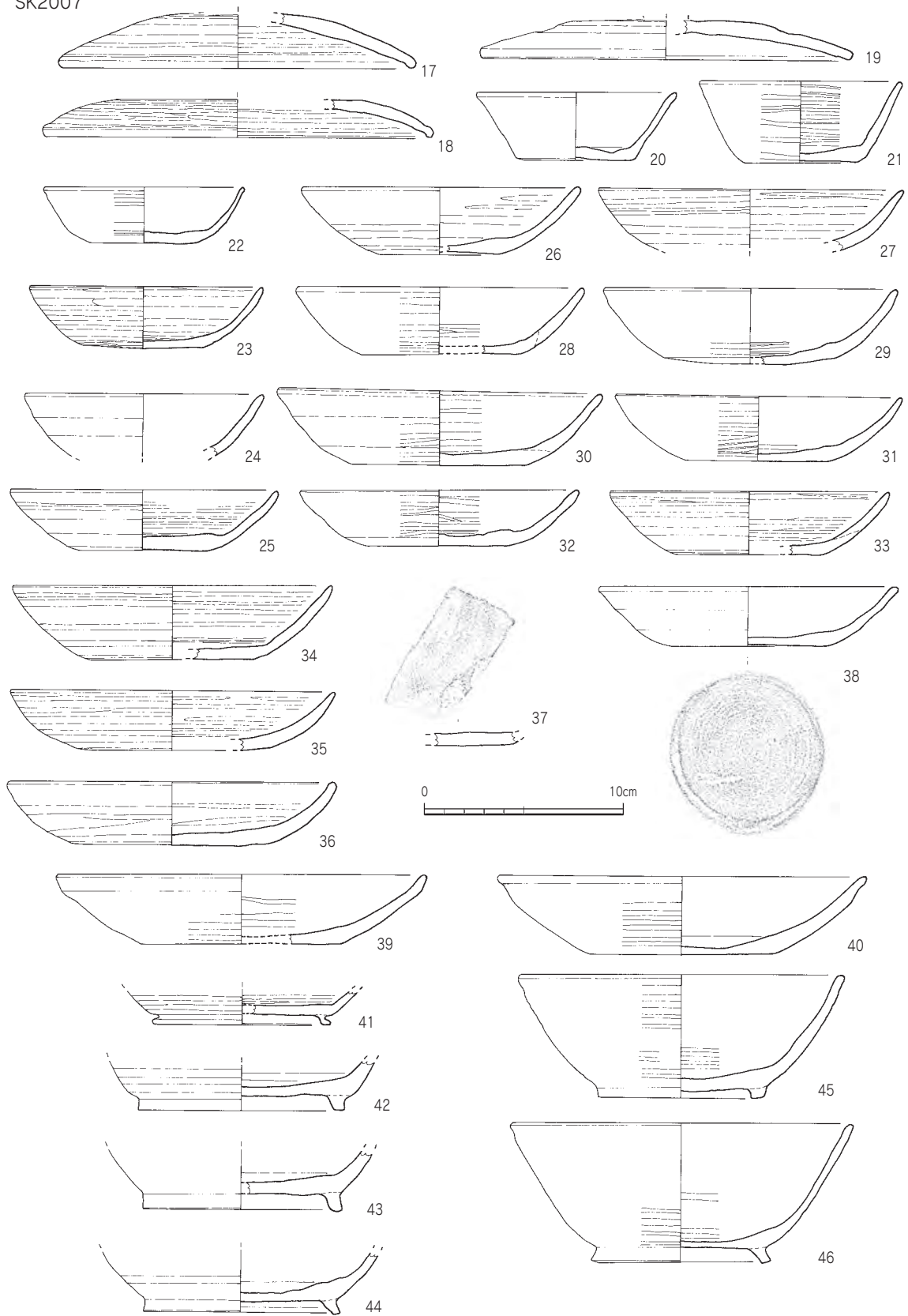


Fig.84 土坑出土土器実測図 (7) (1/3)

みられる。43も胴部外面下半が回転ヘラケズリ調整である。高台のナデ付けがやや甘く、部分的に粘土接合面での剥離がみられる。44も43と同様の調整技法である。高台の端部全体に黒斑がみられる。45・46の調整技法は41と類似している。底部外面は回転ヘラケズリで、内外面に回転性のミガキ調整を加える。46は高台のナデ付けが甘いためか、大部分が粘土接合面で剥離する。剥離面には、高台貼り付け以前につけた沈線が巡っている。

土師器皿 (47~51) 47・48は底部外面の回転ヘラ切り痕をやや粗雑にナデ消す。ともにミガキ調整はみられない。49は口縁部の破片で、内外面ともに回転ナデ調整である。50は底部外面の回転ヘラケズリ調整を丁寧にナデ消している。内外面には緻密なミガキ調整を加える。51も50と同じ調整技法だが、胴部の回転ナデが強いためか、ミガキ調整の及んでいない部分

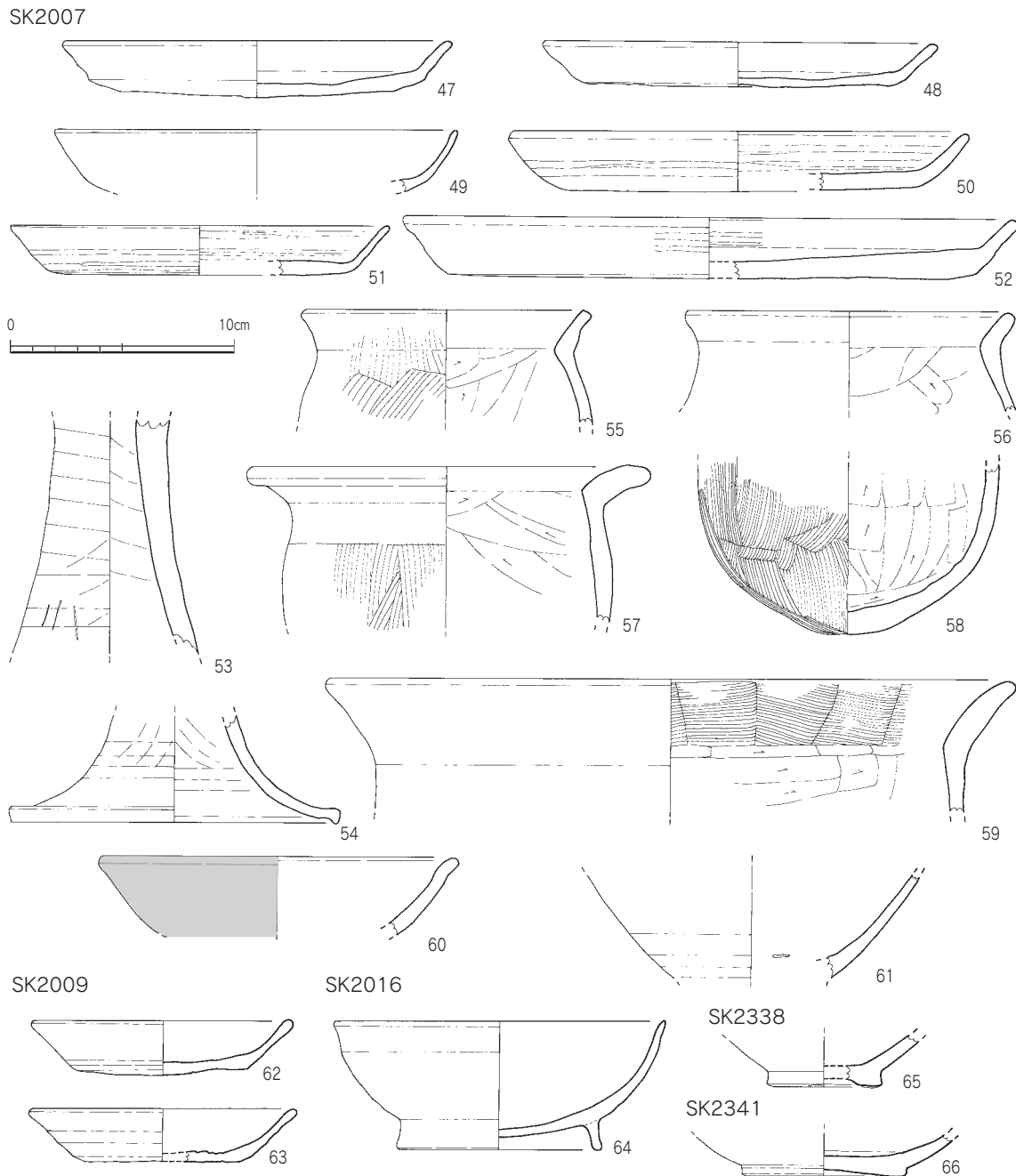


Fig.85 土坑出土土器実測図 (8) (1/3)

もある。

土師器盤 (52) 底部外面は回転ヘラケズリで、二次的なナデ調整を丁寧に加える。口縁部の内外面にはミガキ調整を行う。底部内外面にやや散らばる状態で黒斑がみられる。

土師器高坏 (53・54) 53は脚部の破片で、内外面にしぼり痕がみられる。脚裾付近にはヘラ記号がある。54は脚裾の破片で、端部が下方に屈曲する形態である。内外面は回転ナデ調整で、表面にしぼり痕がある。

土師器甕 (55~59) 55~57は口縁部の破片である。55は外面がタテ方向のハケ調整で、内面がケズリ調整である。56は外面がナデ調整で、内面がケズリに近いナデ調整である。57は鋤先状に外反する口縁部形態で、外面調整はタテハケである。内面は斜め方向のケズリ調整である。58は底部の破片である。外面はタテハケ調整で、内面は縦方向のケズリ調整である。底部外面の中心は二次焼成のために赤変し、そのまわりにススが付着する。胴部内面にも黒色

SK2344A

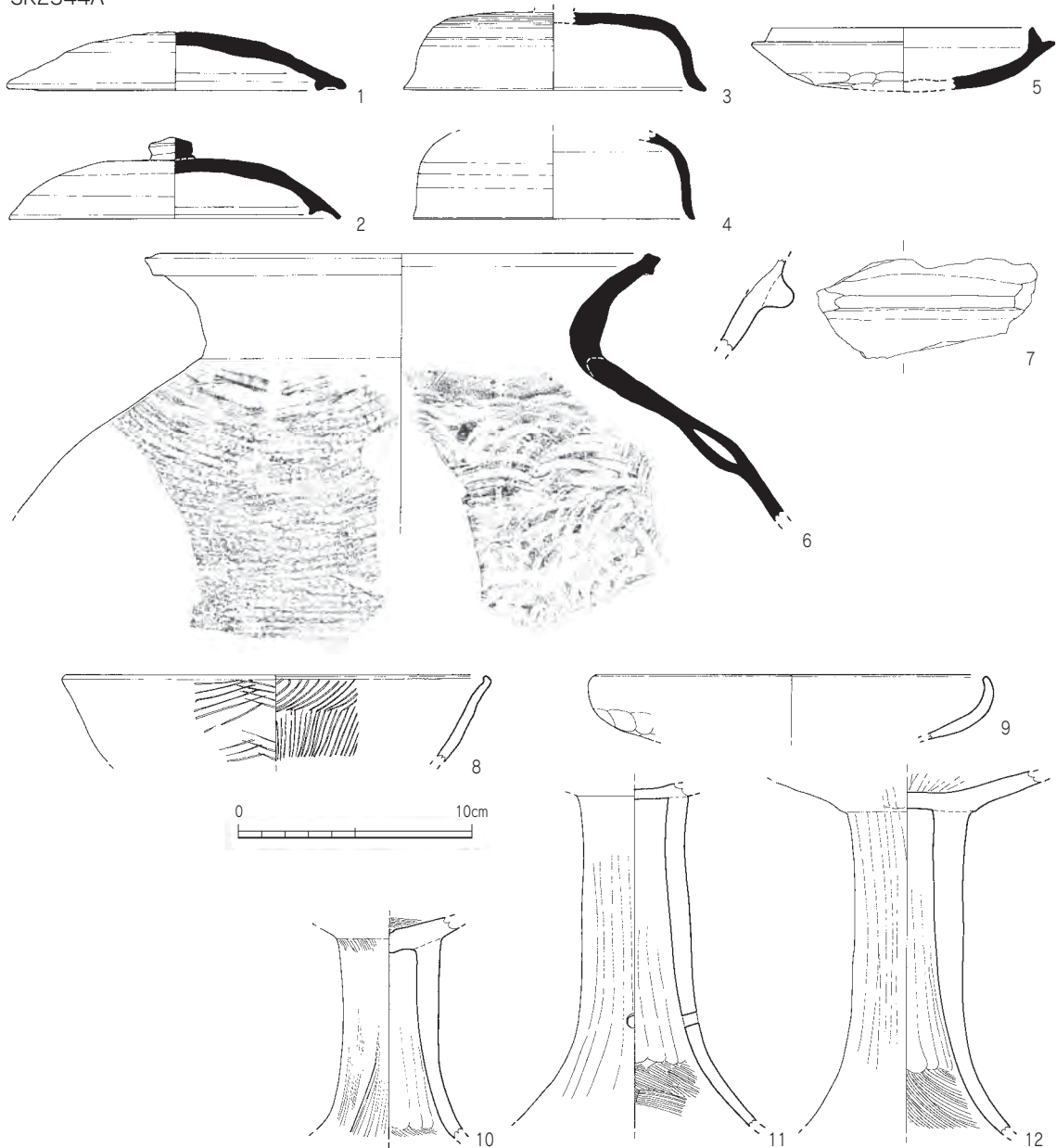


Fig.86 土坑出土土器実測図 (9) (1/3)

物質が付着しており、煮炊きの際に内容物が焦げ付いた可能性がある。59は大型の甕口縁部の破片で、外面は摩耗が著しい。口縁部内面は横方向の断続的なハケ調整で整えられる。胴部内面はヨコ方向のケズリ調整である。

黒色土器坏 (60) 坏口縁部の破片で、外面のみを黒色に燻す。内外面ともに回転ナデ調整で、ミガキ調整はみられない。

青磁碗 (61) 越州窯系青磁碗の胴部の破片である。見込部分に目跡の痕跡が僅かに残る。灰色の精良な胎土に淡緑色の釉が掛かる。

S K 2009出土土器 (Fig.85)

土師器皿 (62・63) 62・63は類似した法量の土師器皿で、底部外面は回転ヘラ切りである。62は土坑埋土の最上層から、63は土坑埋土の下層から出土した。

S K 2016出土土器 (Fig.85)

土師器椀 (64) 内外面を丁寧なヨコナデで整える。丸底状の底部外面には、回転ヘラケズリ調整を加えている。

S K 2338出土土器 (Fig.85)

SK2344B

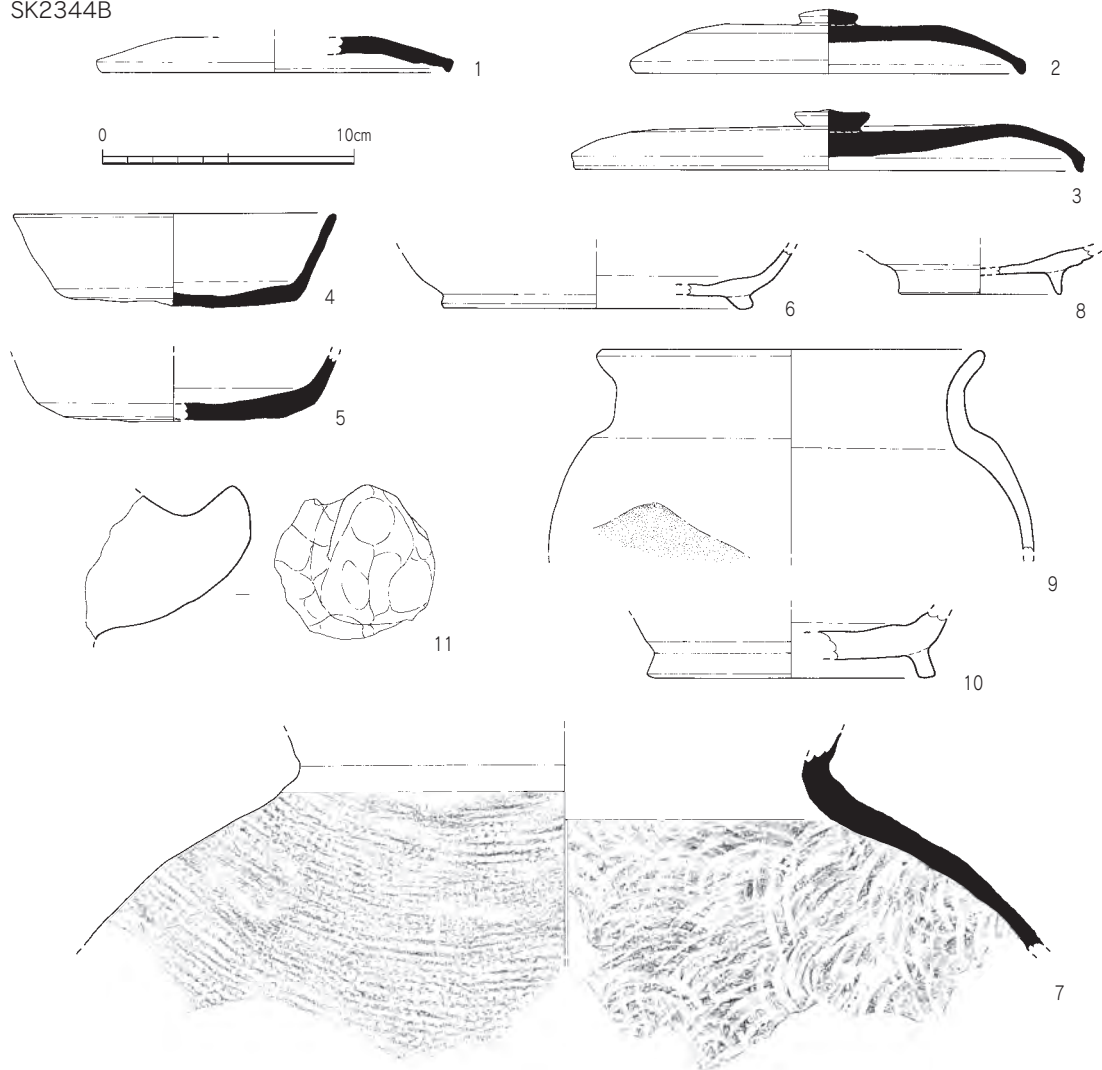


Fig.87 土坑出土土器実測図 (10) (1/3)

青磁碗 (65) 越州窯系青磁碗の底部の破片である。高台の先端には、白色粘土を使用した目跡が付着する。青灰色の釉を全面に掛ける。

S K 2341 出土土器 (Fig.85)

緑釉陶器 (66) 碗の底部の破片と考えられる。高台は回転ヘラケズリで、削り出している。淡黄褐色の精良な胎土に、緑色の釉を全面に施す。

S K 2344 出土土器

S K 2344は新旧二時期の土坑が重複しており、古段階を「S K 2344A」、新段階を「S K 2344B」に区分して、それぞれ別個に遺物を報告する。

S K 2344A 出土土器 (Fig.86)

須恵器蓋 (1~4) 1・2は坏蓋である。ともに口縁部に身受けのかえりを持つ形態のものである。1は天井外面を回転ヘラケズリで調整する。頂部には撮みを貼り付ける前に施文される同心円状の沈線がある。ナデ付けの痕跡は、とくにみられない。2は天井部外面にカキ目を巡らせる。天井部外面の灰被りは著しく、一部には窯壁が付着している。3・4は壺蓋である。3は肩部に沈線を入れ、天井部外面にカキ目を巡らせる。内面には火襌の痕跡がある。4は肩部に2条の沈線を巡らせる。天井部にかけて火膨れがみられる。

須恵器坏 (5) 5は坏身の破片である。底部外面は手持ちヘラケズリである。蓋受け付近には緑色の自然釉が付着する。

須恵器甕 (6) 口縁部から胴部の破片である。胴部外面は擬格子目タタキで、内面には同心円当て具痕がみられる。焼成時の焼き歪みで、口縁部が若干歪んでいる。肩部には焼き膨れが複数箇所で見られる。口縁部内面と肩部に灰が被っており、正立状態で焼成される。

弥生土器壺 (7) 胴部の破片で、若干歪み気味の突帯が貼り付けられている。胎土には石英を多量に含む。残存範囲では黒斑が目立つ。

土師器坏 (8) 暗文を入れた坏身口縁部の破片である。胎土は精良で、全体的に丁寧な造形である。

土師器皿 (9) 口縁部の破片で、底部外面は手持ちヘラケズリ調整である。

土師器高坏 (10~12) いずれも脚部の破片である。10は坏部内面の一部が残っており、不定方向のハケ目調整が確認できる。脚部の外面は縦方向のハケ目調整であるが、二次的なナデ調整もなされている。脚裾内面もハケ目調整である。部分的に黒斑も見られる。11の脚部外面は縦方向のミガキ調整である。脚部には円形穿孔があるが、残存範囲の対面に確認できず、もともと穿孔は一つだけだった可能性がある。10と同様に縦に伸びる黒斑が部分的にみられる。12も脚部外面に縦方向のミガキ調整を加えている。坏部内面も縦方向のミガキである。脚裾内面はハケ目調整である。

S K 2344B 出土土器 (Fig.87)

須恵器蓋 (1~3) 1~3は坏蓋である。いずれも口縁部端部を短く下方に屈曲させるものである。天井部外面は回転ヘラケズリ調整である。2・3は宝珠形が退化した撮みが残るが、1は撮みの有無が不明である。

須恵器坏 (4・5) 4・5は無高台の坏身である。4は一部欠損するが、ほぼ完存する。底部外面はヘラ切り未調整で、部分的に板状圧痕や偶発的なナデ消しがみられる。5も底部外

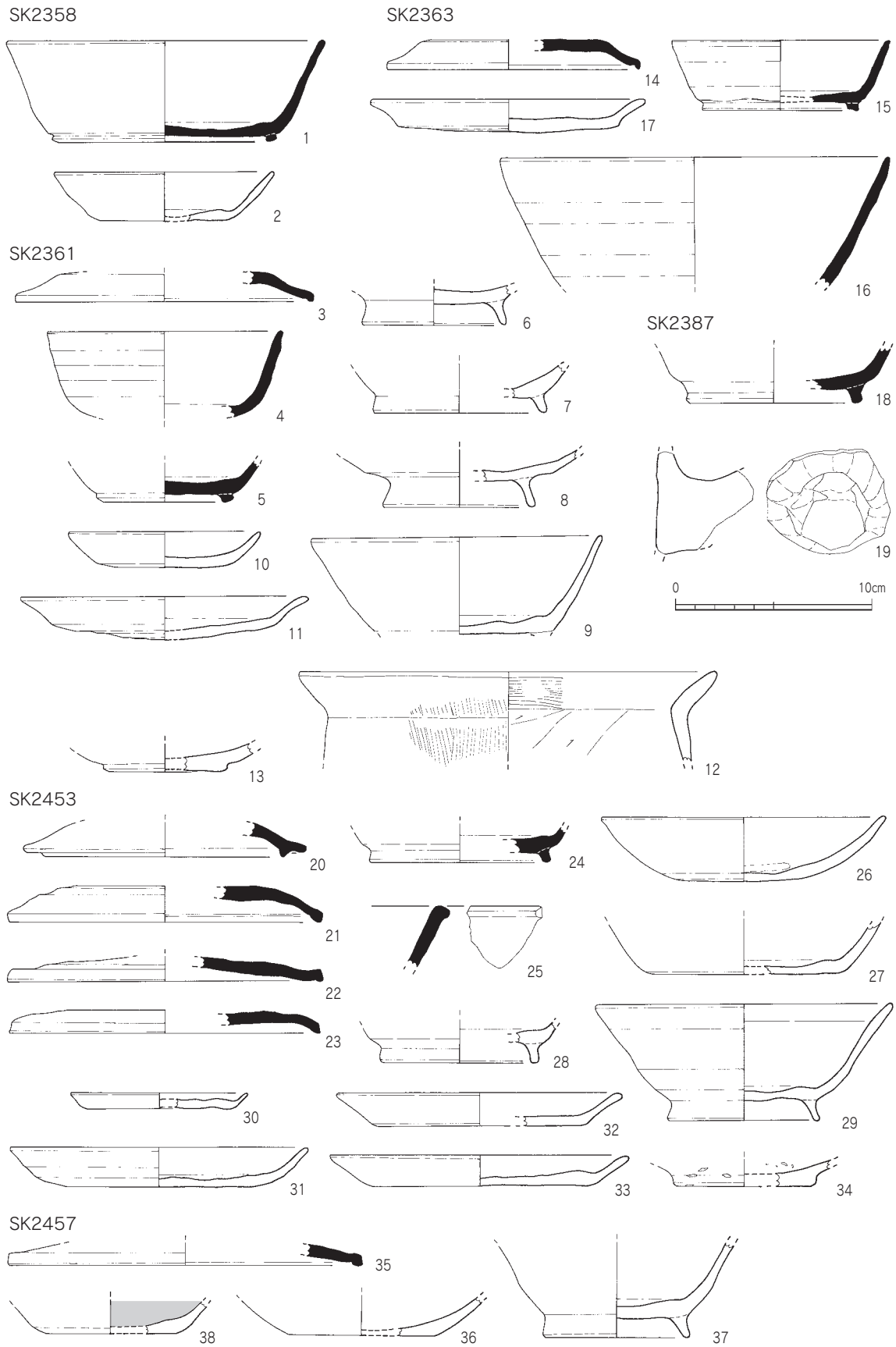


Fig.88 土坑出土土器実測図 (11) (1/3)

面はヘラ切り未調整である。窯焼成時に底部が床面に接していたためか、底部外面のみ著しく焼成不良で、軟質に近い焼き上がりである。6は有高台の坏身である。摩耗により、細かい調整は不明である。

須恵器甕(7) 甕の頸部から胴部にかけての破片である。胴部外面に格子目タタキ、内面に同心円当て具痕が残る。

土師器椀(8) 椀の底部の破片で、底部外面に浅く板状圧痕が残る。

土師器壺(9・10) 9は壺上半部の破片である。内外面ともにナデ調整で丁寧にならされている。胴部外面の一部に煤が付着する。10は器壁や高台の重厚さから、須恵器の有高台の壺を模倣した土師器壺の底部と判断している。高台の端部には板状圧痕が残る。

土師器甌(11) 甌もしくは鉢の把手部分の破片である。胴部との粘土接合面で剥離している。ナデ調整で整えられており、指頭痕が多く残る。

S K 2358出土土器 (Fig.88)

須恵器坏(1) 有高台の坏身で、底部外面は回転ヘラ切り痕を入念にナデ消す。

土師器皿(2) 皿の破片で、底部外面は回転ヘラ切りである。

S K 2361出土土器 (Fig.88)

須恵器蓋(3) 3は坏蓋の破片である。口縁端部に僅かに沈線状に残る屈曲部分を有する。

須恵器坏(4・5) 4・5は坏身の破片である。4は成形時の回転ナデが強く、器壁に筋状の稜が巡る。5の底部外面は回転ヘラ切り痕が残る。

土師器椀(6~9) 6~8は比較的高さのある高台を貼り付けた底部の破片である。とくに8は高台自体が華奢で、ナデ付けも丁寧である。6は底部外面に板状圧痕が部分的に残る。9は高台が全て粘土接合面で剥離している。体部から口縁部にかけて直線的に伸びる形状をしており、須恵器坏身の雰囲気を残している。

土師器皿(10・11) 10は小型の皿で、底部外面に板状圧痕を残す。11は口縁部が外反気味にのびる形態のもので、底部が回転ヘラ切りである。

土師器甕(12) 胴部外面は縦方向のハケ目調整で、胴部内面を斜め方向のケズリ調整で整える。口縁部内面には横方向にハケ状の痕跡が残っていて、板ナデによる調整が加えられている。

緑釉陶器皿(13) 皿の底部と思われる破片である。蛇ノ目高台の形態のもので、削り出しで成形される。淡黄色の土師質の胎土で、淡黄緑色の釉を全面に施す。

S K 2363出土土器 (Fig.88, PL.23)

須恵器蓋(14) 14は坏蓋の破片で、口縁端部を短く下方に折り曲げる。

須恵器坏(15) 15は有高台の坏である。ナデ調整を基調とした調整で仕上げる。

須恵器鉢(16) 鉢の口縁部の破片で、内外面を回転ナデで調整する。外面の回転ナデがやや強いため、筋状に鈍い稜がみられる。

土師器皿(17) 口縁部を外反気味に立ち上げる形態のものである。

S K 2387出土土器 (Fig.88)

須恵器坏(18) 底部の破片で、高台のナデ付けは丁寧である。

土師器甌(19) 甌の把手部分の破片で、先端を欠損し、胴部との粘土接合面で剥離する。

器壁は強いナデ調整で整えられている。

SK2453出土土器 (Fig.88, PL.23)

須恵器蓋 (20~23) 20~23は坏蓋の破片である。20は口縁部にかえりを持つ。窯焼成であるが、色調は淡赤褐色を呈する。21~23は口縁部端を下方に折り曲げる形態のものであるが、21・22は沈線状の表現に変化している。いずれも天井部外面は回転ヘラケズリである。

須恵器坏 (24) 有高台の坏の破片である。

須恵器鉢 (25) 鉢の口縁部の破片で、表面には自然釉がまばらに付着する。

土師器坏 (26・27) 26は底部が丸みを持つ形状のもので、丁寧な回転ヘラケズリ調整で整えられている。底部内面はナデ消しが強く、指頭痕が多く残る。27の底部は回転ヘラ切り未調整だが、全体的に器壁の摩耗が進んでいる。

土師器碗 (28・29) 28は底部の破片で、高台を中心に黒斑がみられる。29は体部が直線的に立ち上がる形態のもので、ハ字形に開く高い高台を持つ。

土師器皿 (30~33) 30は小型の皿の破片で、摩耗のため細かい調整は不明である。31~33は類似した法量の皿で、回転ナデ調整を基調とし、ミガキ調整はみられない。32のみが、やや外反気味に口縁部が立ち上がる。

緑釉陶器 (34) 碗もしくは皿の底部の破片である。淡褐色の胎土に淡緑色の釉を全面に施すが、既にその多くは剥落しており、断片のみが残る。

SK2457出土土器 (Fig.88)

須恵器蓋 (35) 坏蓋の破片で、口縁端部を僅かに下方に折り曲げる形態のもので、屈曲部が沈線状となる。

土師器坏 (36) 底部外面は回転ヘラ切りで、胴部に僅かにミガキ調整が残る。

土師器碗 (37) 高台の大半は粘土接合面で剥離しており、高台の接合は甘い。

黒色土器皿 (38) 内面のみを黒色に燻すA類。底部外面は回転ヘラ切りである。

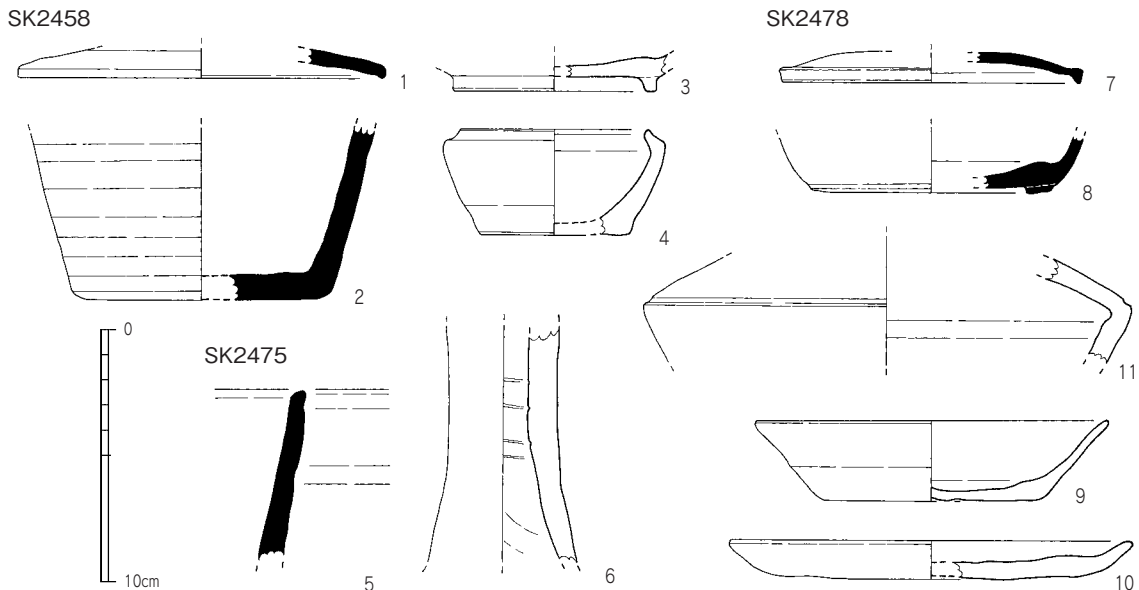


Fig.89 土坑出土土器実測図 (12) (1/3)

S K 2458出土土器 (Fig.89)

須恵器蓋(1) 口縁端部を僅かに下方に屈曲させる。底部外面は回転ヘラケズリで調整する。灰の被り方から、焼成時の重ね焼きの状況がわかる。

須恵器鉢(2) 平底の鉢の破片である。底部外面は回転ヘラ切りの痕跡を粗雑にナデ消し、部分的に板状圧痕も残る。胴部外面は回転ヘラケズリ調整である。底部内面に灰を被ることから、正立状態で焼成されている。

土師器椀(3) 底部の破片で、高台を粗雑にナデ付けている。

土師器壺(4) 小型の壺の破片で、須恵器壺の模倣品である。底部は回転ヘラ切りで、二次的に粗雑なナデ消しを施す。胴部は回転ナデ調整である。

S K 2475出土土器 (Fig.89)

須恵器鉢(5) 口縁部の破片で、端部を僅かに屈曲させる。内外面の回転ナデ調整が強い。

土師器高坏(6) 脚部の破片で、器壁は摩耗が進んでいる。外面に僅かに縦方向のケズリ調整の痕跡が残る。内面には粘土紐の接合個所が沈線状にみられる。

S K 2478出土土器 (Fig.89)

須恵器蓋(7) 7は坏蓋口縁部の破片で器壁が薄く、繊細な造形である。天井部外面は回転ヘラケズリ調整である。

須恵器坏(8) 8は有高台の坏の破片で、幅広扁平な高台が特徴的である。底部外面は回転ヘラ切りである。

土師器坏(9) 口縁部が直線的に立ち上がる形態のものである。底部外面は回転ヘラ切りである。残存する口縁端部に油煙が部分的に付着する。

土師器皿(10) 扁平な皿の破片である。焼成失敗のためか、器壁がねじれるように湾曲する。

灰釉陶器壺(11) 肩部と胴部との境は明瞭に屈曲し、1条の沈線を伴う。砂粒の少ない精良な胎土に緑色の釉を外面に掛ける。

S K 2479出土土器 (Fig.90, PL.23)

須恵器蓋(1~5) 1~4は坏蓋で、天井部にボタン状の撮みを有し、口縁端部を下方に屈曲させるものである。天井部外面は回転ヘラ切りである。5は壺蓋である。天井部外面を丁寧に回転ヘラケズリしている。

須恵器杯(6・7) 6は有高台の坏身で、回転ヘラ切りの痕跡もナデ消しており、丁寧な造形である。7は無高台の小型の坏身で、底部は回転ヘラ切りである。

須恵器壺(8) 内外面を回転ナデで調整する。胎土に砂粒を多く含む。

土師器坏(9~14) 9・10は有高台の須恵器坏を模倣したものである。形態だけでなく、製作技法も共通する。9は底部外面に格子目状のヘラ記号を施文している。11~14は一般的な土師器の坏身である。いずれも胴部が緩やかな曲線を描きながら、口縁部へと至る形状のもので、底部が丸底状を呈する。12を除いて、とくにミガキ調整はなされておらず、回転ナデを基調とする。12は底部の破片だが、部分的に回転性のミガキ調整がみられる。底部外面は丁寧な回転ヘラケズリ調整である。内外面に斜線を組み合わせたヘラ記号を施文する。13も底部外面を回転ヘラケズリで整える。底部外面の中心部にヘラ記号状の沈線があるが、意図的なものかは不明である。

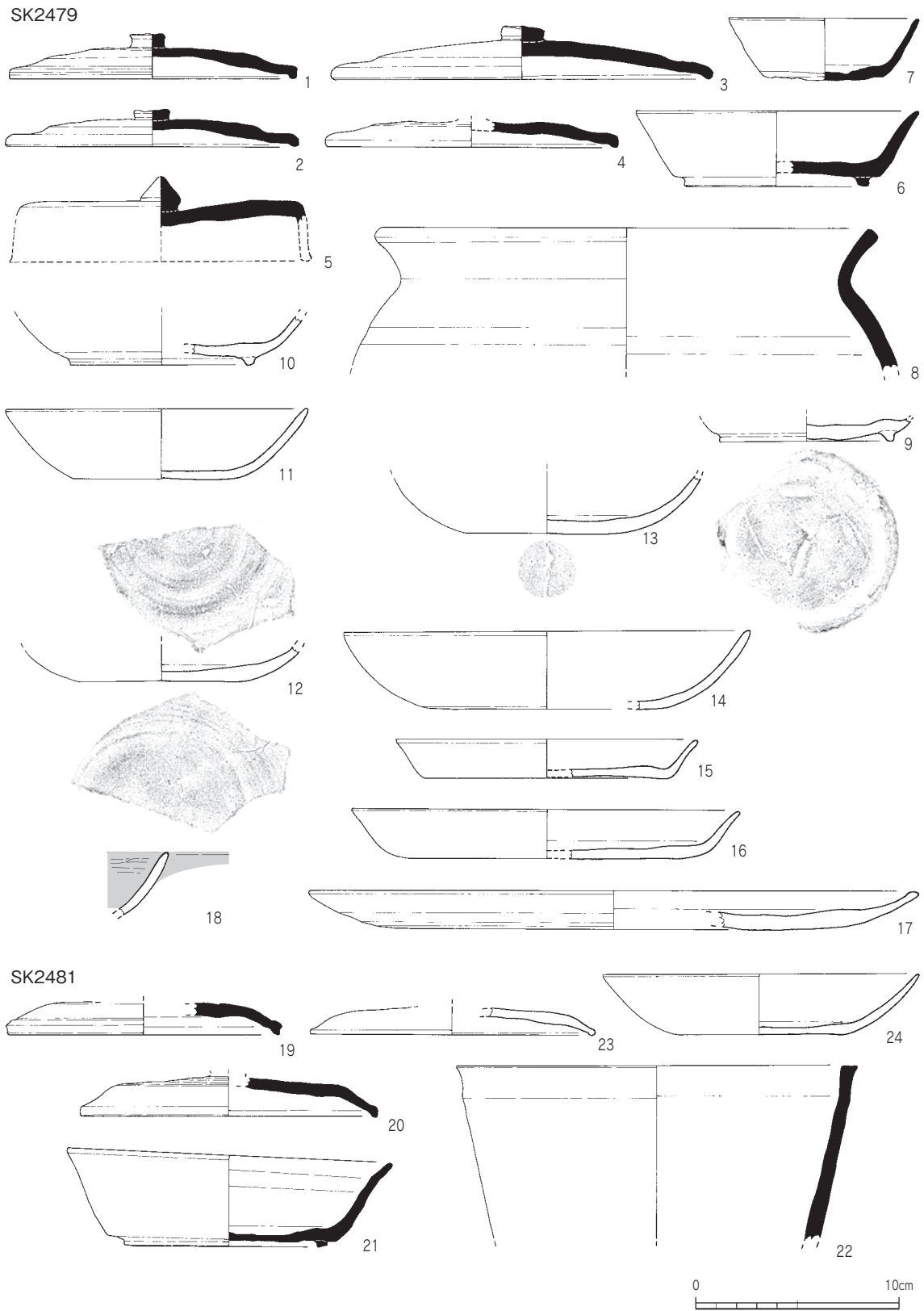


Fig.90 土坑出土土器実測図 (13) (1/3)

土師器皿 (15~17) 15・16は口縁部が外反気味に立ち上がる形態のものに対し、17は口縁部がやや内反する。15は底部外面の回転ヘラケズリ調整がとくに強い。

黒色土器椀 (18) 内面を黒く燻すA類で、一部が口縁端部外面にまで達している。内面の一部に細かなミガキ調整がみられる。

SK2481出土土器 (Fig.90)

須恵器蓋 (19・20) 19・20は坏蓋の破片で、口縁端部を下方に屈曲させる。ともに屈曲は弱く、沈線状の表現に変化している。天井部外面は回転ヘラ切りの痕跡をやや粗雑にナデ消す。20は残存範囲に撮みを欠損した状態が残る。

須恵器坏 (21) 有高台の坏で、焼き歪みがみられる。底部内外面を二次的にナデしており、

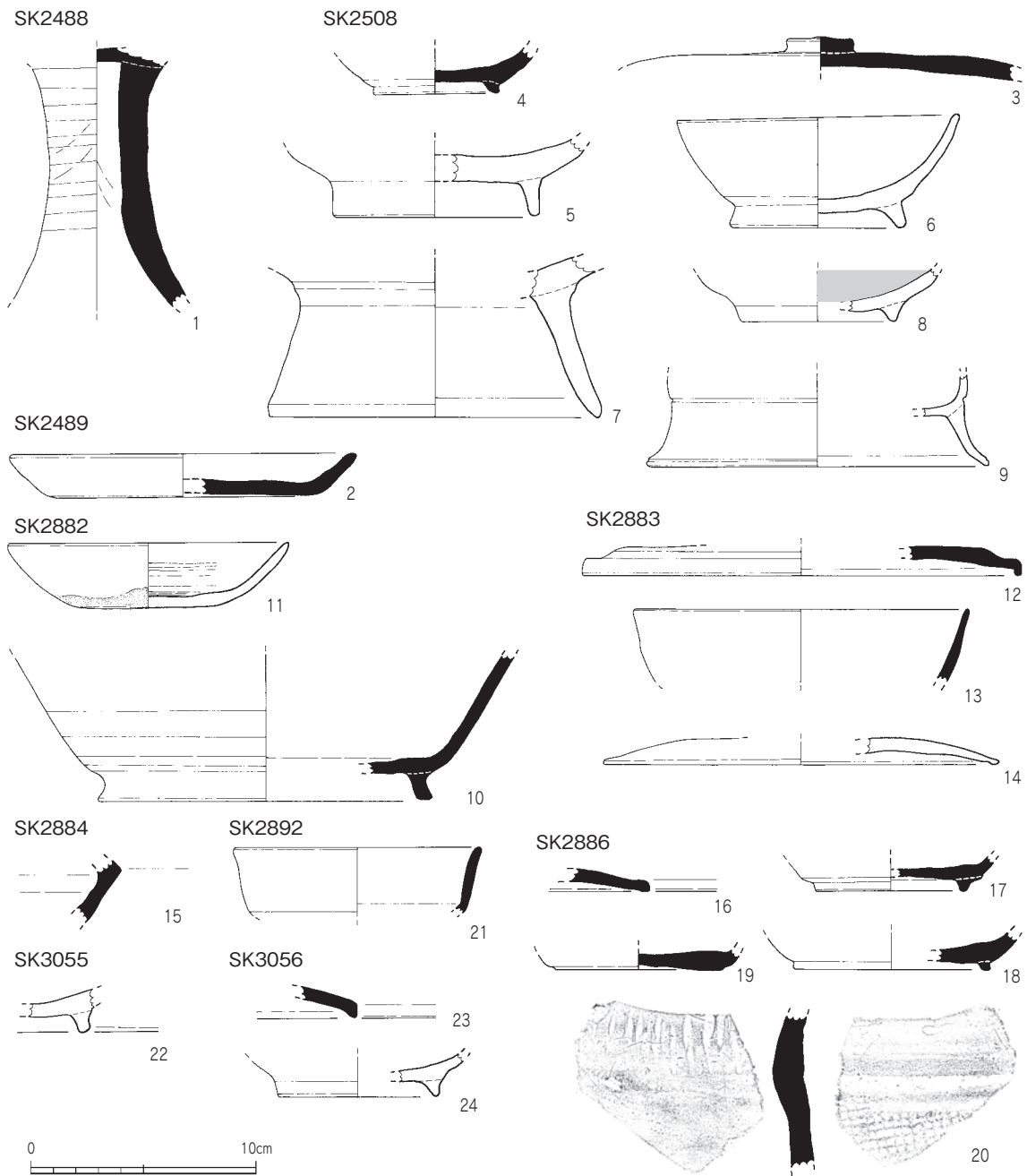


Fig.91 土坑出土土器実測図 (14) (1/3)

指頭痕が多く残る。

須恵器鉢 (22) 口縁部の破片で、内外面を回転ナデで調整する。

土師器蓋 (23) 須恵器の坏蓋を模倣したものである。口縁端部を下方に折り曲げる形態のものであるが、端部を若干肥厚させ、内面に沈線状の段を付ける程度の表現である。

土師器坏 (24) 摩耗のため、細かい調整は不明である。

S K 2488出土土器 (Fig.91)

須恵器高坏 (1) 脚部の破片で内外面ともに回転ナデで調整する。器壁には成形時のしぼりの痕跡がある。坏部の内面が部分的に残る。

S K 2489出土土器 (Fig.91)

須恵器皿 (2) 底部外面は回転ヘラ切りを二次的にナデ消す。胎土に砂粒を含む。

S K 2508出土土器 (Fig.91)

須恵器蓋 (3) ボタン状の撮みを有する大型の坏蓋の破片である。焼成が甘く、灰白色を呈する。

須恵器坏 (4) 有高台の坏身の底部である。高台のナデ付けはやや粗雑である。

土師器椀 (5・6) 5は器壁が厚く、壺類の底部となる可能性がある。6は体部が内湾する椀で、底部に板状圧痕を有する。

土師器鉢 (7) 長く直線的に伸びる高台の破片である。胴部を欠損しており、正確な器種は不明であるが、類例から鉢等の器種に付属する高台と考えられる。高台の付け根には、内外面に粘土接合のためのやや強めのヨコナデが施される。

黒色土器椀 (8) 内面を燻すA類。丸底状の底部にハ字形に開く高台を有する。

緑釉陶器香炉 (9) 香炉身の小片である。淡茶色の精良な胎土に淡緑色の釉が掛かっている。脚部と体部の境に沈線を巡らす。

S K 2882出土土器 (Fig.91)

須恵器壺 (10) 器壁が薄く、華奢な印象を受ける造形である。胴部外面下方は回転ヘラケズリで調整する。高台のナデ付けは丁寧に行っている。

土師器坏 (11) 内面をミガキ調整する坏身の破片である。底部外面に煤が付着する。

S K 2883出土土器 (Fig.91)

須恵器蓋 (12) 坏蓋の破片で、口縁端部を明瞭に下方に屈曲させる。天井部外面は回転ヘラ切りを二次的にナデ消す。

須恵器坏 (13) 坏身の口縁部の破片である。

土師器蓋 (14) 須恵器坏蓋を模倣した形態のものだが、摩耗が進み細かな調整は不明である。口縁端部は若干肥厚させ、沈線状の表現で口縁部を作る。

S K 2884出土土器 (Fig.91)

須恵器壺 (15) 長頸壺の胴部の小片である。肩部と胴部の境が明瞭に屈曲する。

S K 2886出土土器 (Fig.91)

須恵器蓋 (16) 16は坏蓋の小片である。焼成が甘く、軟質で暗茶褐色を呈する。

須恵器坏 (17~19) 17・18は有高台の坏の底部である。高台は低いが作りは丁寧である。19は無高台の坏の底部で、底部外面は回転ヘラ切りである。

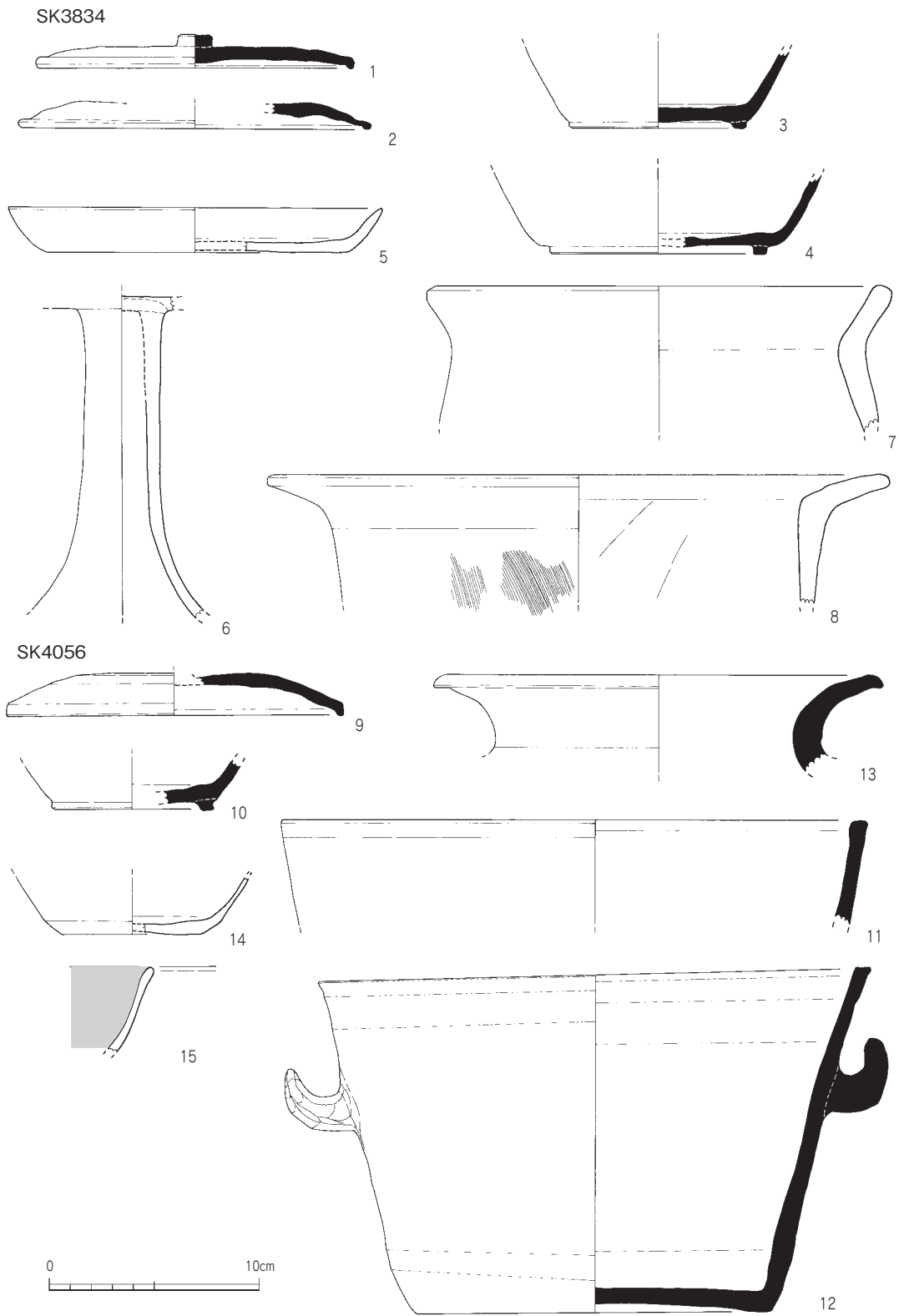


Fig.92 土坑出土土器実測図 (15) (1/3)

須恵器甕 (20) 甕の頸部と思われるが、ほとんど屈曲しない。胴部は格子目タタキで、頸部にはやや強めの回転ヨコナデがなされる。内面調整はヨコナデであるが、頸部内面にタテ方向の棒状圧痕が残る。

S K 2892出土土器 (Fig.91)

須恵器坏 (21) 残存範囲の下端で屈曲しており、坏部はあまり深くない。

S K 3055出土土器 (Fig.91)

土師器椀 (22) 底部の破片で摩耗が著しい。胎土に若干の砂粒を含む。

S K 3056出土土器 (Fig.91)

須恵器蓋 (23) 口縁端部の小片である。焼成が甘く、淡灰色を呈する。

土師器椀 (24) 底部の破片で摩耗が進む。胎土には2mm程度の砂粒を多く含む。

S K 3834出土土器 (Fig.92)

須恵器蓋 (1・2) 1・2は坏蓋の破片で、口縁端部を下方に屈曲させる。1にはボタン状の撮みが残る。口縁端部外面にのみ灰が被り、重ね焼きの状況を残す。

須恵器坏 (3・4) 3・4は有高台の坏身で、ともに高台がやや扁平である。4は高台の端部に板状圧痕が見られる。

土師器皿 (5) 回転ナデを基調とし、ミガキ調整は見られない。胎土に砂粒を含む。

土師器高坏 (6) 長脚の高坏で、坏部を欠損する。脚部は裾が大きく広がる。

土師器甕 (7・8) 7は頸部の屈曲が緩やかである。内外面はナデ調整である。胎土に砂粒を多く含む。8は頸部の屈曲がきつく、鋤先状に伸びる。外面調整はタテハケで、内面調整はケズリである。胎土に砂粒を多く含む。

S K 4056出土土器 (Fig.92, PL.23)

須恵器蓋 (9) 坏蓋の破片で、天井部外面の回転ヘラケズリが丁寧である。ヘラ記号ではないが、浅い沈線状の工具痕が残る。

須恵器坏 (10) 有高台の坏身の底部である。

須恵器鉢 (11・12) 11は口縁部の破片で、端部を若干肥厚させる。12は体部が斜め上方に直線的に広がる平底の鉢である。口縁端部は平たい。体部の中位よりやや上に、削って面取りされた一对の把手を貼り付ける。調整は底部外面から体部下位は回転ヘラケズリで、底部内面はナデを施す。

須恵器甕 (13) 甕の口縁部の破片で、焼き歪みにより大きく歪む。

土師器坏 (14) 坏底部の破片で、摩耗が進み、細かな調整は不明である。

黒色土器椀 (15) 内湾気味の立ち上がりで、内面のみを黒色に燻すA類。摩耗のため、調整の単位は不明だが、断片的にミガキ調整の光沢がみられる。

S K 4057出土土器 (Fig.93)

須恵器坏 (1) 小型の坏の底部片である。外傾する高台を貼り付ける。底部に文字様の墨書が認められるが、判読はできていない。

S K 4058出土土器 (Fig.93, PL.23)

須恵器壺 (2) 平底の壺の破片である。胴部外面下半は回転ヘラケズリである。全体的な造形はやや粗雑な印象を受ける。底部外面には藁状の圧痕が多くみられる。

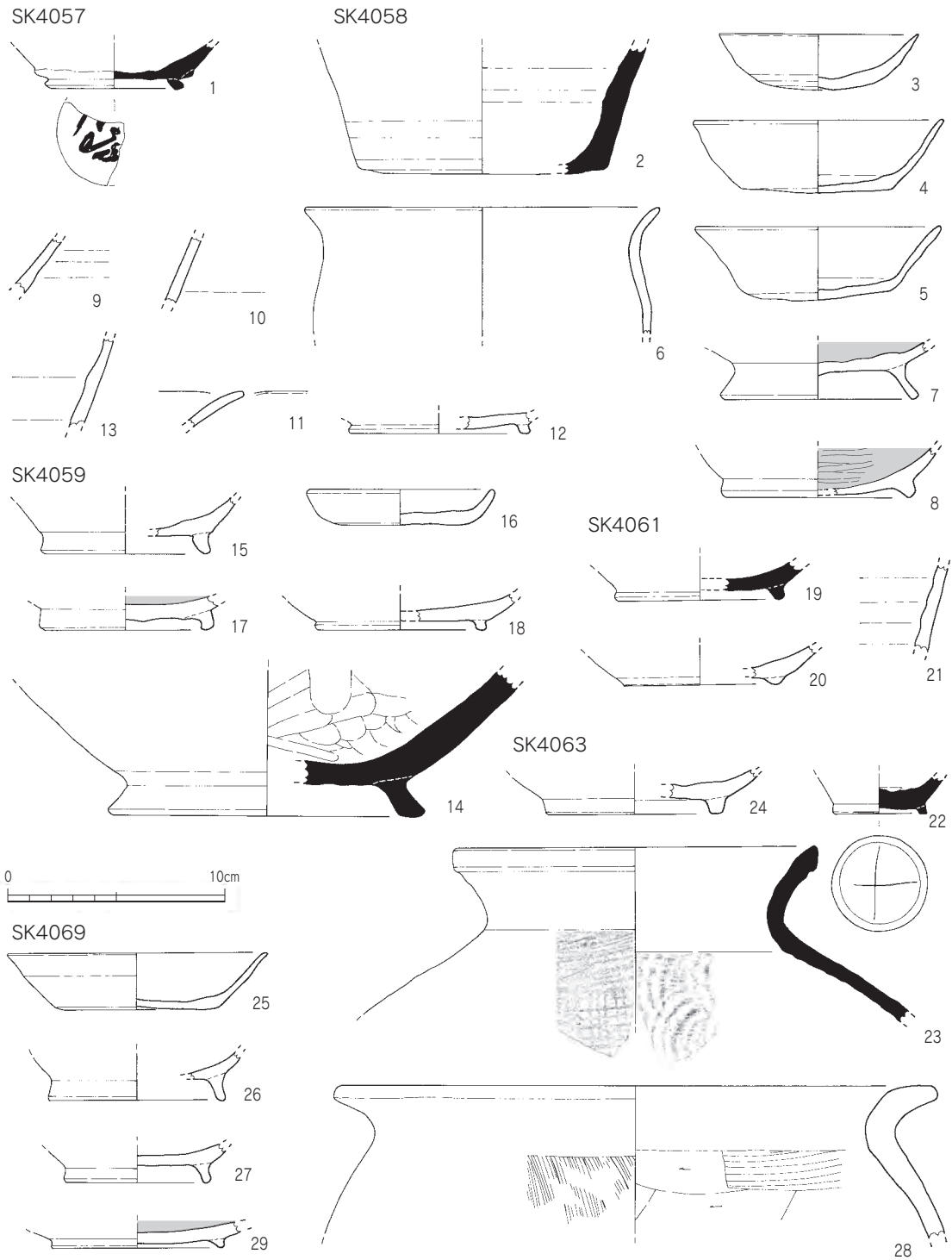


Fig.93 土坑出土土器実測図 (16) (1/3)

土師器坏（3～5） いずれも底部外面は回転ヘラ切りのまま未調整の坏身である。3は若干小振りで、底部が丸底状を呈する。

土師器甕（6） 器壁が極めて薄い甕の口縁部の破片である。胎土に砂粒を多く含む。

黒色土器椀（7・8） ともに内面のみを黒色に燻す黒色土器A類の椀である。7はハ字形に開く長い高台で、土師器椀に多くみられる形態である。8は底部が丸底状を呈し、低い高台がつく。内面には緻密なミガキ調整がみられる。

緑釉陶器碗（9・10） 9・10は碗の胴部の破片である。ともに淡褐色の胎土に淡緑色の釉を内外面に施す。

緑釉陶器皿（11） 口縁を輪花状にする皿の口縁端の破片である。淡褐色で須恵質に近い胎土に、透明感のある淡緑色の釉を内外面に施す。

灰釉陶器碗（12） 底部の破片で、高台は貼り付けている。底部内面に緑灰色の釉が薄く掛かる。

灰釉陶器壺（13） 壺胴部の破片で、外面のみに緑灰色の釉が掛かる。

S K 4059出土土器 (Fig.93)

須恵器壺（14） ハ字形に開く高台を持つ壺底部の破片である。底部外面は回転ヘラケズリであるが、二次的なナデと摩耗により調整単位が不明瞭である。内面は不定方向のナデ調整が入念になされている。

土師器椀（15） 底部の破片で、高台の貼り付けは粗雑である。

土師器皿（16） 底部は回転ヘラ切りそのまま、未調整である。

黒色土器椀（17） 内面のみを黒色に燻すA類。高台の貼り付けは入念に行っている。

灰釉陶器碗（18） 底部外面は回転ヘラケズリ調整である。灰色の硬質な胎土で、内面のみに緑灰色の釉がまばらに付着している。

S K 4061出土土器 (Fig.93)

須恵器坏（19） 有高台の坏身の底部である。胎土が非常に粗く、砂粒が多い。

土師器椀（20） 扁平な高台を持つ椀の底部である。摩耗が進んでいる。

青磁壺（21） 越州窯系青磁の壺胴部の破片である。内面の回転ナデが強く、壁面が波打っている。外面のみに淡緑色に発色する釉が掛かる。

S K 4063出土土器 (Fig.93)

須恵器壺（22） 小型の壺の底部である。底部外面はヘラ切り未調整である。底部外面には「十」字状のヘラ記号がある。

須恵器甕（23） 体部外面は格子目タタキ、内面には同心円当て具痕が残る。

土師器椀（24） 高台を比較的丁寧にナデ付けた椀底部の破片である。底部外面には黒斑が見られる。

S K 4069出土土器 (Fig.93)

土師器坏（25） 底部外面は回転ヘラ切りで、板状圧痕が部分的に残る。

土師器椀（26・27） ともに高台の貼り付けは比較的丁寧である。

土師器甕（28） 口縁部を短く屈曲させる形態のもので、外面はタテハケ調整である。内面は板状工具を用いた横方向のケズリ調整である。工具を強く当てたためか、部分的にハケ状の

痕跡が残る。

黒色土器碗 (29) 小さい高台を貼り付けたもので、内面のみを黒色に燻すA類。

S K 4573出土土器 (Fig.94~97, PL.23・24)

S K 4573出土遺物は、下層に堆積する「S K 4573暗褐色粘質土」と上層に堆積する「S K 4573黒色土」に分けて報告する。また、帰属層位が不明な遺物についても、「S K 4573埋土」として報告する。

S K 4573暗褐色粘質土出土土器 (Fig.94)

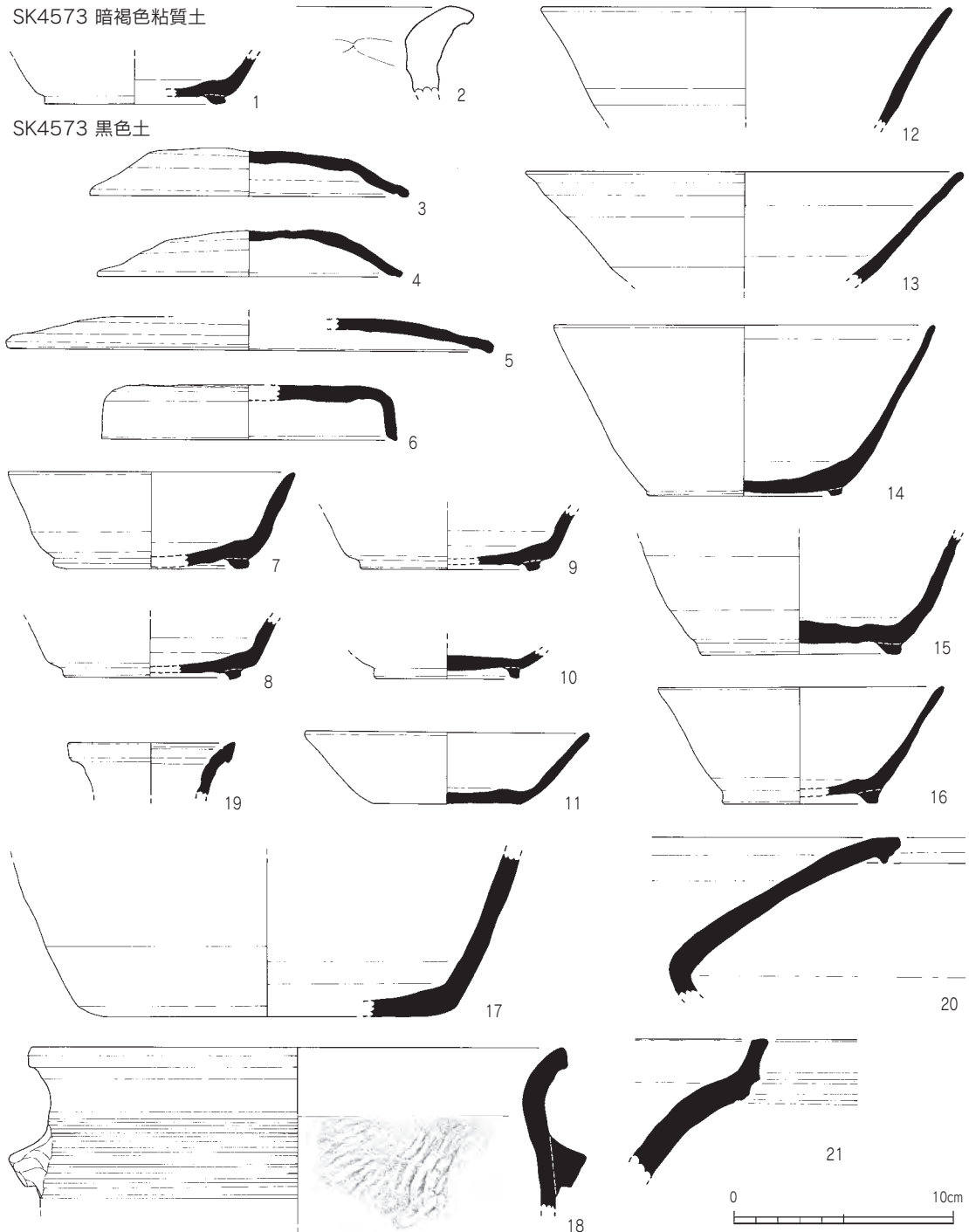


Fig.94 土坑出土土器実測図 (17) (1/3)

SK4573 黑色土

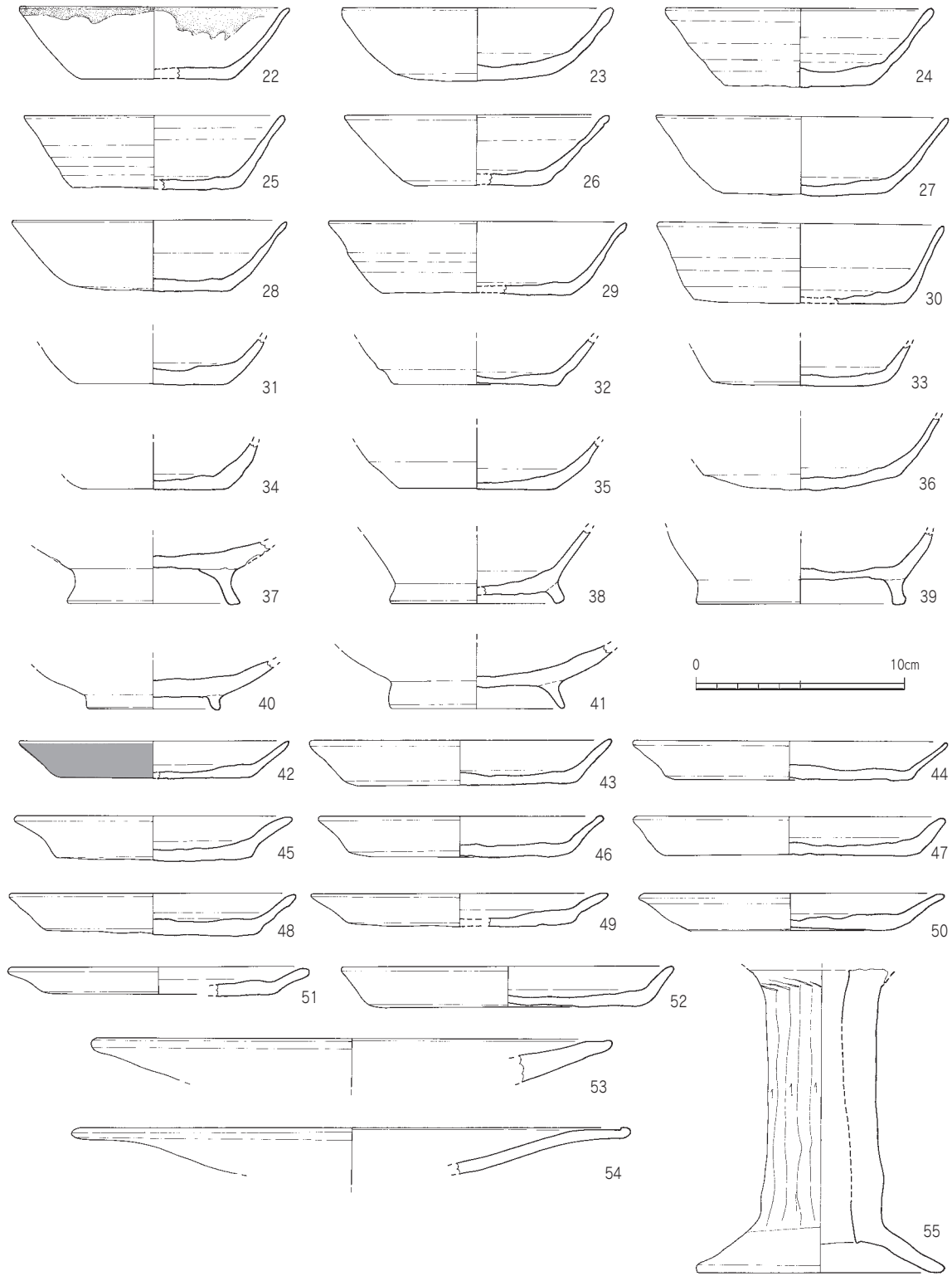


Fig.95 土坑出土土器実測図 (18) (1/3)

須恵器坏 (1) 焼成不良のため、淡灰褐色を呈する。器壁は摩耗が進む。

土師器甕 (2) 頸部が肥厚する甕口縁部の破片で、内面はケズリ状のナデである。

S K 4573 黒色土出土土器 (Fig.94~96)

須恵器蓋 (3~6) 3・4は撮みのない坏蓋である。天井部外面は回転ヘラ切りで、二次的にやや粗雑なナデ調整を加える。5は大型の蓋で、口縁部先端の内外面のみ黒色に発色している。6は短頸壺の蓋である。

須恵器坏 (7~11) 7~10は有高台の坏身である。7はやや焼成が甘く、淡青灰色を呈する。8の高台端部には蕈状の植物圧痕がみられる。11は無高台の坏である。底部外面は回転ヘラ切りで、粗雑なナデ調整を加える。

須恵器碗 (12~16) 底部から直線的に長く胴部が立ち上がり、低平な高台を貼り付ける一群を碗として報告する。12~14は大型品で、器壁の薄い胴部が特徴的である。胴部下半から底部にかけては回転ヘラケズリで丁寧に調整する。15は12~14に比べ器壁が厚く鈍重な印象を受ける。胴部下半は回転ヘラケズリ調整であるが、底部外面は粗雑なハケ調整を二次的に加えている。16は小型品で、底部外面は回転ヘラ切り未調整のまま、高台を貼り付けている。

須恵器鉢 (17・18) 17は鉢底部の破片で、摩耗が進行しているが、外面調整は回転ヘラケズリである。18は甌の可能性もある。口縁部先端を短く屈曲させ、意識的に口縁を成形する。胴部外面にはカキ目を巡らせる。胴部内面は同心円当て具痕がみられる。

須恵器壺 (19) 小型の長頸壺の口縁部片である。内面に沈線状の段を有する。

須恵器甕 (20・21) 20は長く外反する口縁部の破片である。回転ナデ調整を切るように、内外面に指頭痕が薄くみられる。21は口縁部先端をほぼ直立するように立ち上げる口縁部の破片である。口縁部先端の屈曲部外面には沈線状の段を巡らしている。

土師器坏 (22~36) 22~36は無高台の坏身である。22は口縁部先端の内外面に油煙が付着している。23は口縁部の一部を除くと、ほぼ完形品である。底部外面は回転ヘラ切りで、粗雑なナデ調整を加えている。24は回転ナデ調整が強く、器壁が波打っている。底部外面には板状圧痕がある。25・26は回転ヘラ切り痕を比較的丁寧にナデ消す。27は胴部下半の回転ナデ調整のみが強めになされている。底部外面は回転ヘラ切り痕のナデ消しの後に、板状圧痕が残る。28は回転ヘラ切り痕にとくに調整を加えていない。底部外面のみに黒斑がみられる。29は胴部中位の回転ナデが強いためか、沈線状を呈する。30は底部がとくに扁平で、押し当てたような状態で回転ヘラ切り痕がナデ消されている。31は底部外面に小さな指頭痕が数多く残る。32も30と同様に底部が扁平で、二次的なナデ調整が丁寧である。33はやや丸底状を呈し、底部外面は粗雑なナデ調整が加えられる。34は回転ヘラ切り痕を押し潰すように、複数方向に板状圧痕がみられる。35も回転ヘラ切り痕をナデ消す。一部に蕈状の植物圧痕がある。36は丸底状を呈し、底部外面に数多くの板状圧痕が残る。比較的硬質に焼き上がっているが、胴部には黒斑がみられる。

土師器碗 (37~39) 37は細く長い高台を貼り付ける。高台の一部が剥離しており、高台貼り付け位置に沈線を巡らしている状況を観察できる。38は器壁の摩耗が進んでいる。39は回転ヘラ切り痕にとくに調整を加えないまま、高台を貼り付けている。

土師器皿 (40~52) 40・41は有高台の皿である。40は器壁の摩耗が顕著で、細かな調整

SK4573 黑色土

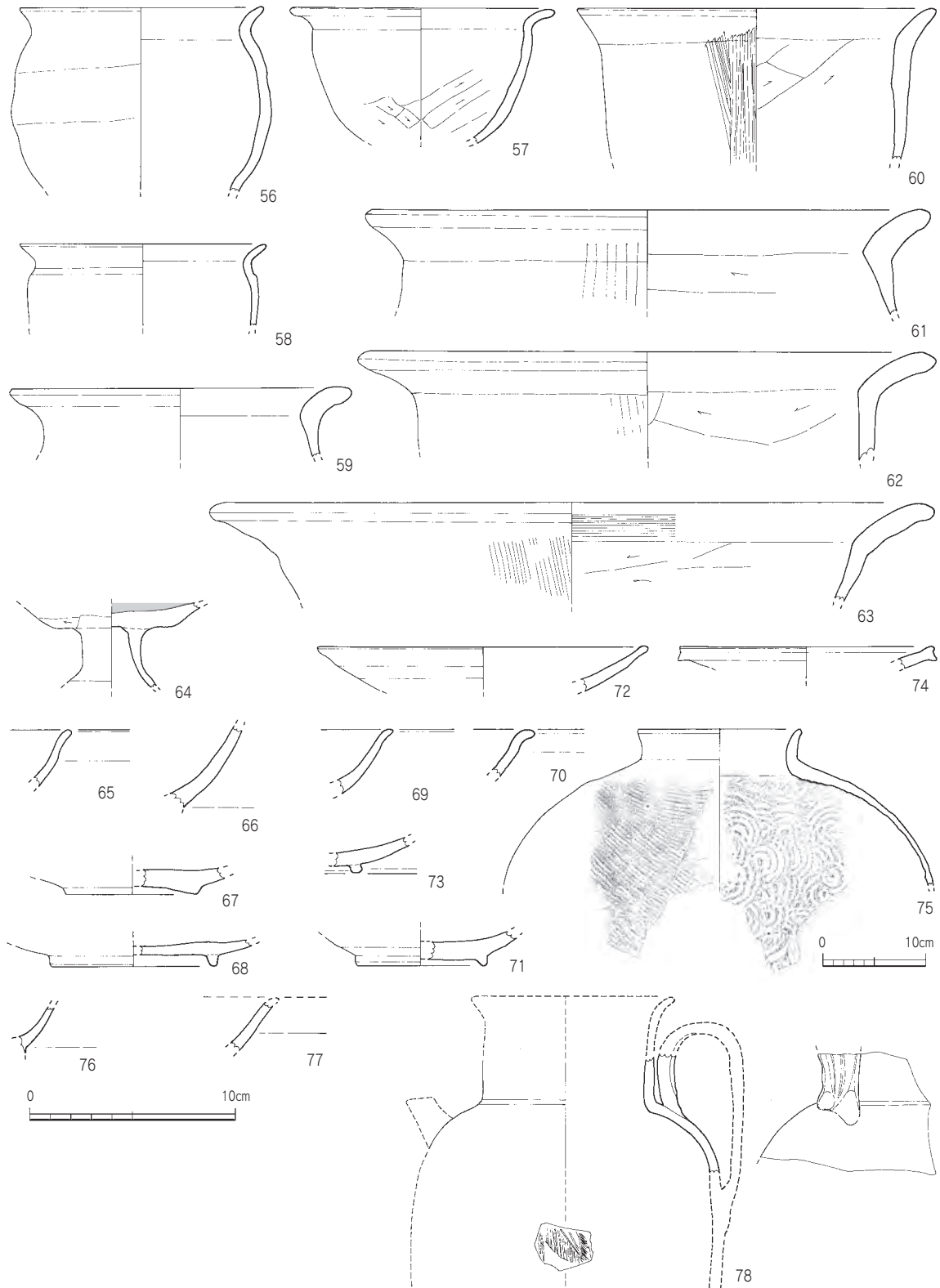


Fig.96 土坑出土土器実測図 (19) (1/3・1/6)

は不明である。形状の整った低い高台を貼り付ける。41は回転ヘラ切り痕を丁寧にナデ消し、細く高い高台を貼り付ける。高台には若干の歪みがみられる。

42～52は一般的な土師器皿である。42は回転ヘラ切り痕を丁寧にナデ消した後に、外面のみに丹塗りがなされる。丹の大半は摩耗により、剥落している。43は底部外面に工具痕や植物圧痕が散在してみられる。44は回転ヘラ切り痕をナデ消しているが、沈線状に痕跡がよく残る。底部の4分の1に偏った黒斑がみられる。45は底部と胴部の屈曲が段状になり、とくに目立つ。底部外面は回転ヘラ切り痕のナデ消し後に、板状押圧やハケ調整を粗雑に施している。46は胴部中位から緩やかに曲がる外反した器形となる。口縁部内面の回転ナデが強く、口縁部先端がやや肥厚するような状態である。47も回転ヘラ切り後に二次的なナデ調整を加えている。やや上げ底状になるためか、底部中央の回転ヘラ切り痕の残りがよい。48は他個体に比べ、底部の器壁が厚く鈍重な印象を受ける。器壁の厚さに伴い、底部の焼成が悪く、断面と底部外面が黒色を呈する。底部外面の回転ヘラ切り痕と植物圧痕を切るように、幾重にも板状圧痕が残る。49は焼成が良く、硬質に焼き上がるが、底部外面には黒斑が残る。50は底部内面の回転ナデ調整が強く、内面の器壁が波打っている。底部外面は、回転ヘラ切りに伴う粘土溜りが残るなど、やや粗雑な調整である。51はとくに扁平な皿で、口縁部先端が若干肥厚する。52は口縁部の一部に黒斑がみられる。

土師器高坏 (53～55) 53・54は坏部の破片である。ともに口縁部先端は上方に跳ね上げる形態であるが、内面に沈線状の段を有する程度である。器壁の摩耗が進み、残りはよくないが、とくにミガキ調整は確認できない。55は脚部である。坏部との粘土接合面で剥離しており、坏部に刻まれた4条の同心円状沈線の圧痕が観察できる。脚部の器壁は非常に肉厚で、重量感がある。棒状の工具に粘土を巻きつけて脚部を成形しており、内面には棒状工具を引き抜いた際の粘土片が付着している。また、棒状工具は回転させながら引き抜いており、内面には無数の条痕が残る。脚裾内面は回転ナデ調整である。脚部外面は縦方向のケズリ調整である。脚裾外面は粗雑な回転性のミガキ調整が加えられており、工具を強く押し当てたためか、部分的に沈線状になっている。

土師器甕 (56～62) 56～59は小型の甕の口縁部付近の破片である。56はヨコナデ調整で成形している。57は内外面をケズリ調整で整える。胴部下半に黒斑がみられる。58の内面には、当て具の痕跡が残る。胴部外面には煤の付着が確認できる。59は口縁部を肥厚させる形態のものである。口縁部先端と胴部上半の偏った部分が強く被熱しており、使用時の様子が窺える。60は頸部があまり締まらず、砲弾形の形状となる。外面調整は縦方向のハケで、内面調整は斜め方向のケズリである。61は頸部で強く屈曲させ、口縁部が肥厚する。外面は粗いハケ目のタテハケ調整で、内面は横方向のケズリ調整である。62も61と類似した形状で、調整方法も基本的には同じである。

土師器鍋 (63) 口縁部も含め、全体的に外反する形状となる。外面調整は縦方向のハケ調整で、若干方向が乱れる部分もある。口縁部内面は横方向のハケ調整で整え、胴部内面はケズリ調整である。頸部には黒斑がみられる。

黒色土器高坏 (64) 坏部の内面のみを黒色に燻すA類の高坏である。摩耗が全体的に進むが、内面の一部には光沢が残る部分も残り、丁寧なミガキ調整がなされていたと分かる。

緑釉陶器碗 (65・66) 65は口縁部の破片で、口縁先端をやや屈曲させる。淡褐色の胎土に淡緑色の釉を内外面に掛ける。釉の発色もよく、全体的に光沢がみられる。66は胴部下半の破片で、緩やかに内湾する形態である。淡灰色の胎土に、淡緑黄色の釉を内外面に掛けている。釉の残りはよく、ほぼ全面に残り、外面の掛けむらが観察できる。

緑釉陶器皿 (67・68) 67は円盤状の高台を削り出し、底部中央が若干上げ底状となる。淡灰褐色の胎土に緑色の釉を全面に掛ける。釉の大半は剥落する。68は回転ヘラケズリで調整した底部に低く細い高台を貼り付ける。淡褐色の胎土に緑色の釉を全面に掛けるが、剥落も目立つ。

灰釉陶器碗 (69~71) 69・70は口縁部の破片で、ともに先端を短く屈曲させる形態である。灰色の須恵質の胎土に緑灰色の釉が胴部内面に掛かる。口縁部内面や外面は若干の灰が被る程度であるが、光沢はある。71は底部の破片で高台を削り出して成形している。灰白色の須恵質の胎土に、緑灰色の釉が見込み部分にのみ掛かる。

灰釉陶器皿 (72・73) 72は口縁部付近の破片で、胴部下半は回転ヘラケズリ調整である。

SK4573 埋土

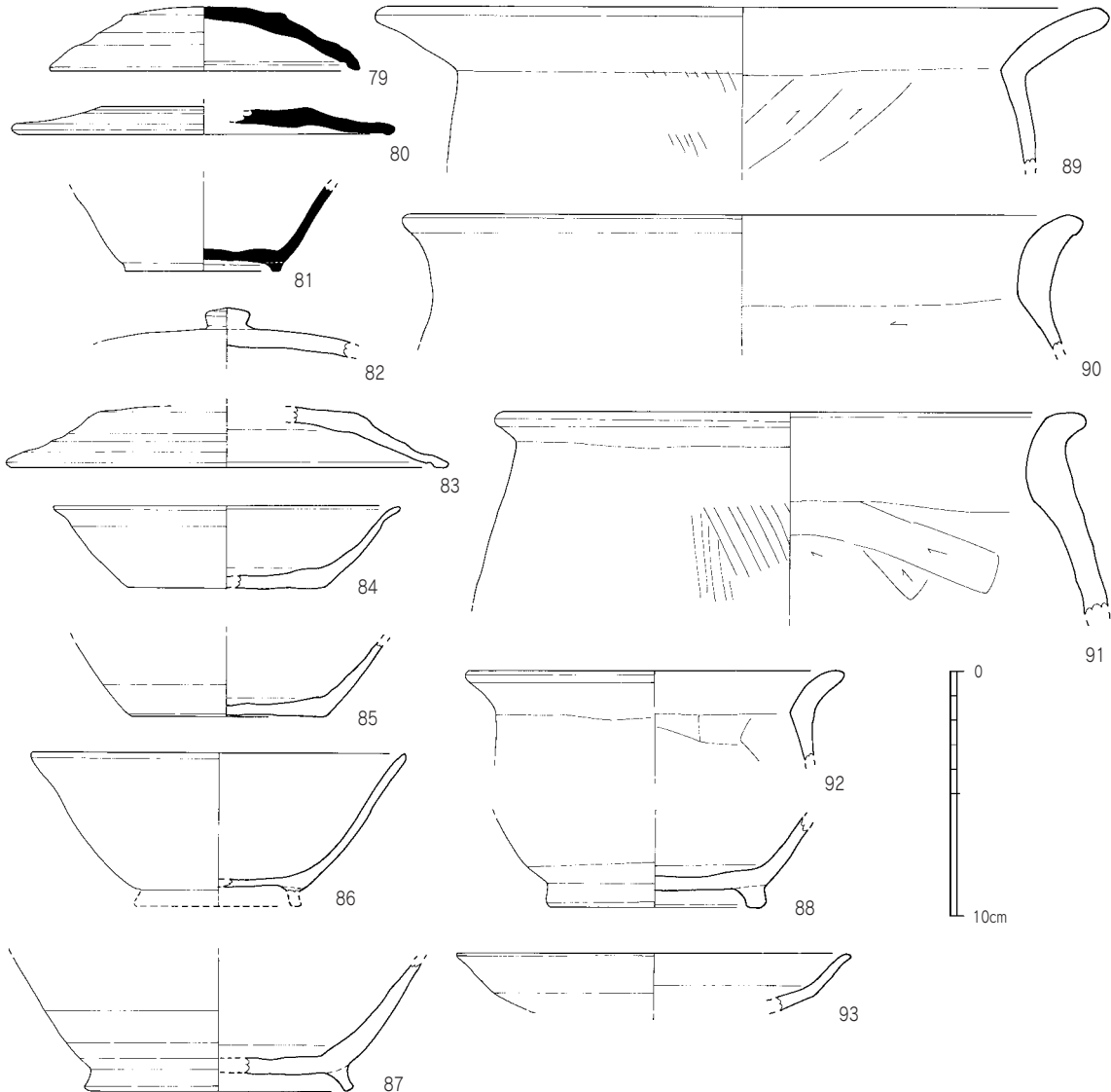


Fig.97 土坑出土土器実測図 (20) (1/3)

灰白色の須恵質の胎土で、内面のみに薄く釉が掛かり、若干の光沢を有する。73は底部の破片で、高台を貼り付けている。72と同様に内面のみに薄く釉が掛かり、若干の光沢がある。

灰釉陶器壺 (74) 小型の壺の口縁部片である。灰色の須恵質の胎土に、暗緑灰色の釉が内外面に掛かる。

灰釉陶器甕 (75) 胴部外面には平行タタキ、内面には同心円当て具が観察できる。胴部外面に濃緑色の釉が厚く掛かり、平行タタキ痕に釉が溜まっている。

白磁碗 (76) 白磁の底部小片である。精良な胎土に光沢のある白色の釉が掛かる。

青磁碗 (77) 越州窯系青磁の胴部小片である。内外面に緑黄色の釉が掛かる。

黄釉褐彩水注 (78) 長沙窯黄釉褐彩水注の取手部の破片で、釉は灰褐色に発色する。胎土はきめが細かく、砂粒をほとんど含まない。

S K 4573埋土出土土器 (Fig.97)

須恵器蓋 (79・80) 79・80は坏蓋の破片で、79は撮みがない。ともに天井部外面は回転ヘラ切りで、粗雑なナデ調整を加えている。

須恵器坏 (81) 有高台の坏身の底部である。

土師器蓋 (82・83) 坏蓋の破片で、82のみ宝珠形の撮みが確認できる。82の天井部外面は回転ヘラケズリ調整である。83は天井部外面の回転ヘラ切り痕をナデ消している。天井部内外面には黒斑がみられる。

土師器坏 (84・85) 無高台の坏身である。口縁部先端は短く外反する。回転ヘラ切り痕を粗雑にナデ消す。85は底部と胴部の屈曲部分で、内面に沈線状の段が見られる。

土師器碗 (86～88) 86は高台を除き、全体の形状が分かる。高台の剥離した箇所には高台貼り付け以前に付けられた沈線がみられる。87は胴部下半に回転ヘラケズリ調整がみられ、形態と調整技法で須恵器碗と類似する。88は器壁がやや肉厚である。

土師器甕 (89～92) 89は甕の口縁部の破片である。89は鋤先状に外反する口縁部形態で、若干口縁部端が歪んでいる。胴部外面はタテハケ調整、胴部内面はケズリ調整である。胎土に多くの砂粒を含む。90は摩耗が進む。内面調整は横方向のケズリである。91は器壁が肉厚で、ケズリ調整の及ばない頸部がとくに肥厚している。胴部内面のケズリ調整は強くなされている。胴部外面は粗いタテハケ調整である。92は小型の甕の口縁部の破片である。胴部内面はケズリ調整である。口縁部外面が若干煤けている。

白磁皿 (93) 白磁皿 I-1 a 類で、精良な白色の胎土に若干の青味が入った光沢のある釉を掛ける。

S K 4574出土土器 (Fig.98・99, PL.24)

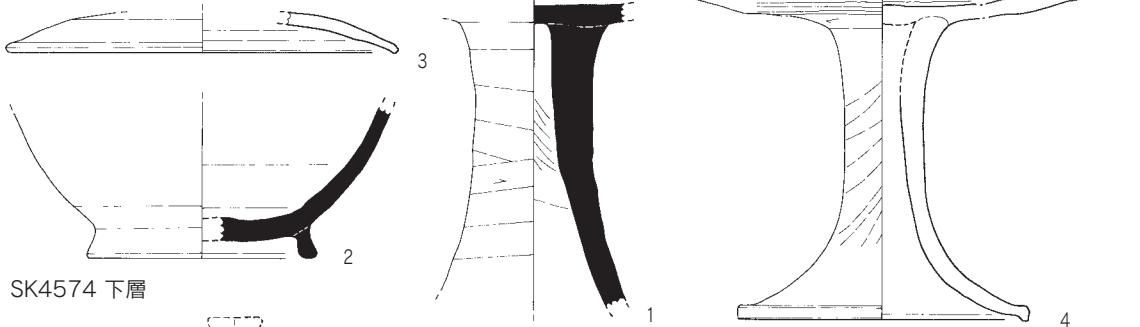
S K 4574出土遺物は、堆積土層の下層から「S K 4574中央柱穴」、「S K 4574下層」、「S K 4574上層」の埋没の古い順にそれぞれ個別に報告する。なお、S K 4574中央柱穴は、S K 4574の最下層で確認された遺構である。

S K 4574中央柱穴出土土器 (Fig.98)

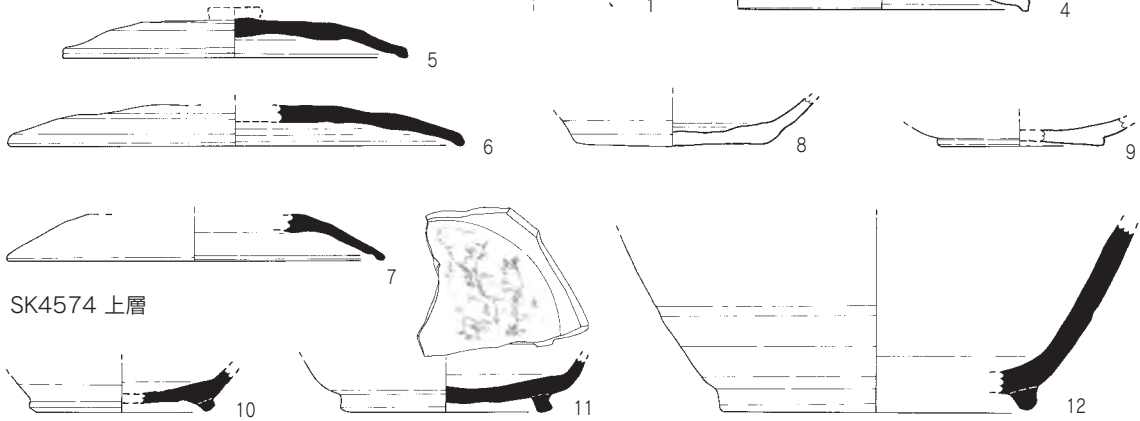
須恵器高坏 (1) 脚部の破片で、内外面を回転ナデで調整する。内面のしぼり痕がとくに明瞭である。

須恵器壺 (2) 壺底部の破片である。胴部下半を回転ヘラケズリで調整するが、高台貼り

SK4574 中央柱穴



SK4574 下層



SK4574 上層

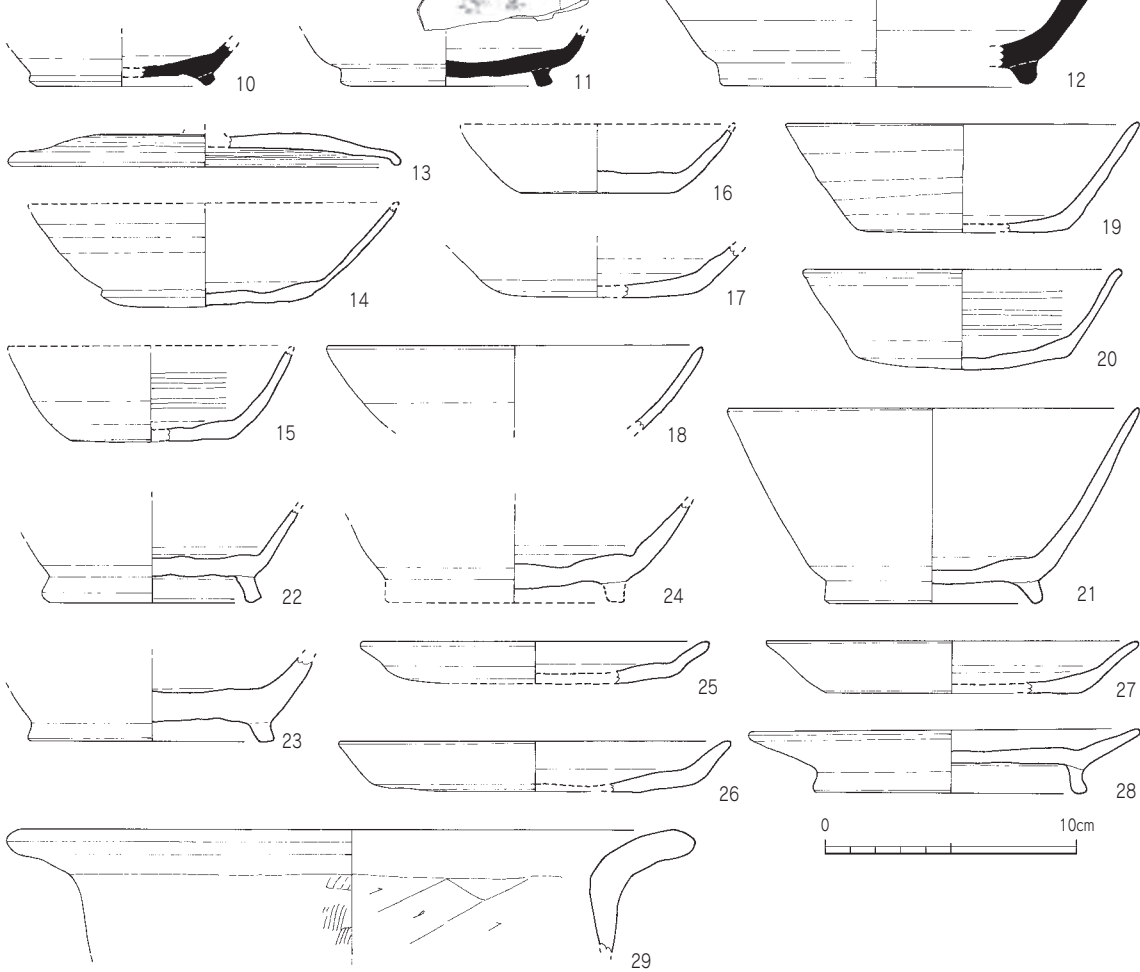


Fig.98 土坑出土土器実測図 (21) (1/3)

付けの際の二次的な回転ナデ調整が広範囲に及んでいる。胴部外面の上側がより灰を被っており、正立状態での焼成が想定される。

土師器蓋 (3) 須恵器坏蓋を模倣した形態である。器面は摩耗が進む。

土師器高坏 (4) 3と同様に須恵器を模倣した形態である。坏部の内外面は丁寧にミガキ調整を加える。

S K4574下層出土土器 (Fig.98)

須恵器蓋 (5~7) いずれも坏蓋の破片で、5のみ撮み痕跡が確認できる。6は口縁部先端外面のみが灰を被り、重ね焼きの状態が分かる。7は口縁部内面が凹線状に窪む。

土師器坏 (8) 底部外面は回転ヘラ切りである。胴部に黒斑がみられる。

緑釉陶器皿 (9) 円盤状高台を有する皿の底部で、褐色の胎土に淡緑黄色の釉が断片的に残る。

S K4574上層出土土器 (Fig.98・99)

須恵器坏 (10・11) とともに坏身底部の破片で、11の底部内面には墨痕がある。底部の約半分が残るが、残存範囲では擦れた痕跡は認められない。

須恵器壺 (12) 壺底部の破片で、胴部下半は回転ヘラケズリで調整する。

土師器蓋 (13) 須恵器坏蓋を模倣した土師器坏蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリで調整するが、内面にはミガキ調整を加える。

土師器坏 (14~20) 14~20は無高台の坏身の破片である。底部が残る資料ではいずれも底部外面は回転ヘラ切り調整で、とくに意識的に二次調整を加えた痕跡はない。14はとくに底部の成形が粗雑で、底部端が肥厚するように粘土が溜まる。15・20は胴部内面にミガキ調整を行う。16・17は胴部下半にのみ回転ヘラケズリ調整を加える。

土師器碗 (21~24) 21は摩耗が進むが、全体の形状が判別でき、底部から直線的に器壁が伸びる。高台のナデ付けが甘く、粘土接合面での高台の剥離が著しい。24にいたっては、底部が完存するものの、高台が全て剥落する。22・23は回転ヘラ切り後に、高台を貼り付けた状態がよく分かる。

土師器皿 (25~28) 25~27は口縁部付近の破片である。ミガキ調整の痕跡はみられない。28は有高台の皿で、大部分が残る。製作技法は21~24の土師器碗と類似しており、高台貼り付けの際に底部と胴部の屈曲部で底部内面が沈線状に凹む特徴を持つ。高台の接合は甘い。

土師器甕 (29) 大きく外反する口縁である。胴部外面はハケ調整で、内面は斜め方向のケズリ調整である。

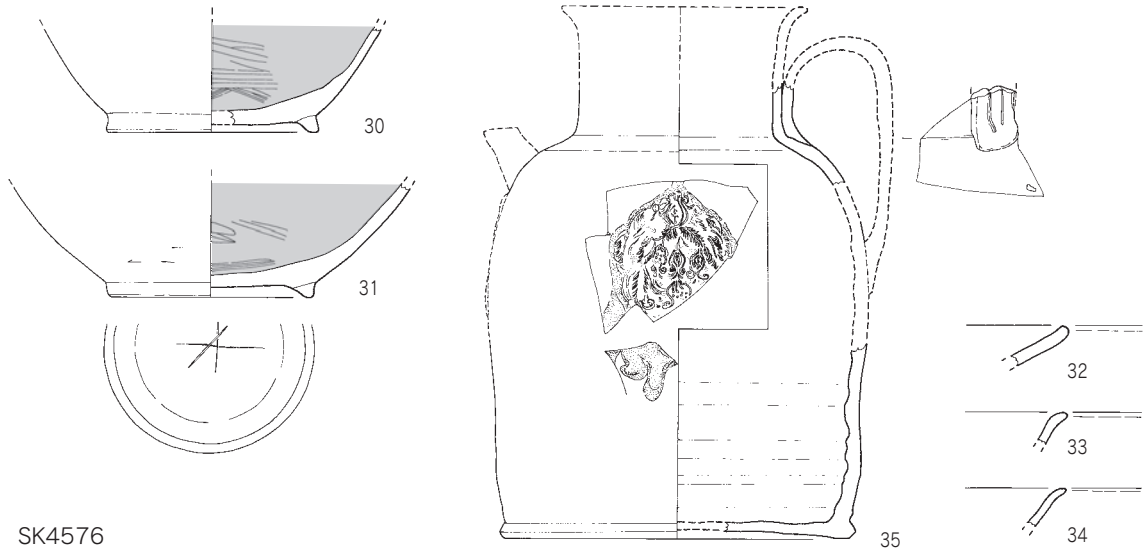
黒色土器碗 (30・31) とともに内面のみを黒色に燻すA類。胴部下半は回転ヘラケズリ調整で、高台の貼り付けは比較的丁寧である。内面はミガキ調整を施す。31の底部外面にはヘラ記号がみられる。

緑釉陶器皿 (32) 皿の口縁部小片である。淡黄白色の土師質の胎土に、淡緑色の釉を内外面に掛けるが、その大半は剥落している。

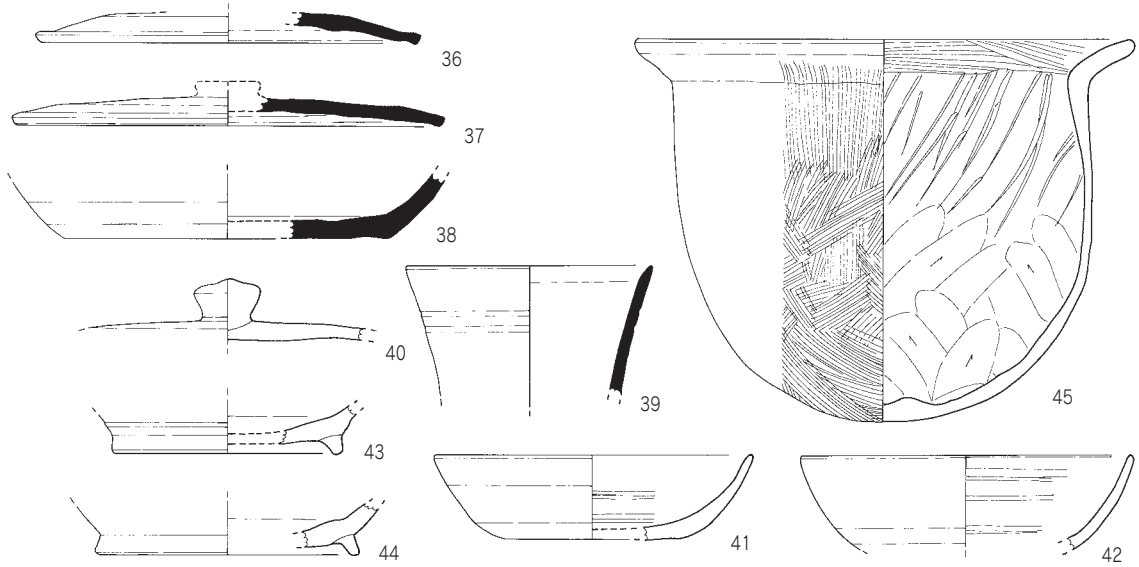
灰釉陶器碗 (33・34) 口縁部小片である。灰色の須恵質の胎土の内外面に緑灰色の釉が掛かる。釉はとくに内面に厚く掛かる。

黄釉褐彩水注 (35) 長沙窯系の黄釉褐彩水注で、取手部は暗褐包含層、胴部はS K4574

SK4574 上層



SK4576



SK4579

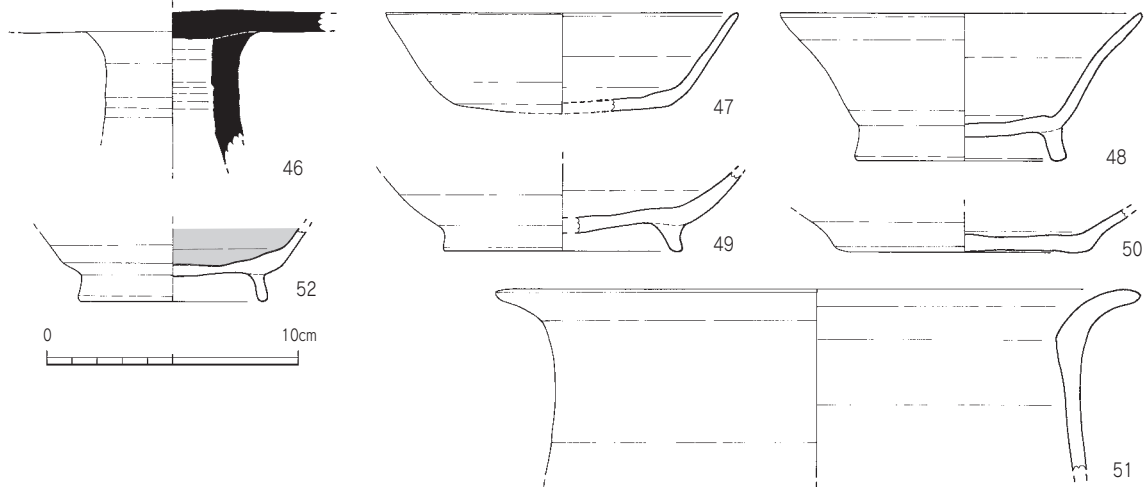


Fig.99 土坑出土土器実測図 (22) (1/3)

下層, 底部はS K 4574上層の出土であるが, 釉調・胎土の類似性から同一個体として復元した。胴部の貼花文 (メダイオン) は第84次調査出土品と接合した。

S K 4576出土土器 (Fig.99, PL.24)

須恵器蓋 (36・37) 36・37は坏蓋の破片で, 天井部外面は回転ヘラ切り痕を二次的にナデ消している。36は口縁端部外面のみに灰が被る。37は撮みの存在が確認できる。

須恵器鉢 (38) 平底の鉢の底部片で, 外面は全て回転ヘラケズリで調整する。

須恵器壺 (39) 長頸壺の口縁部片で, 頸部に2条の沈線が巡る。

土師器蓋 (40) 須恵器坏蓋の模倣品で, 大型のものである。

土師器坏 (41・42) 41・42は無高台の坏身で, 内面には回転性のミガキ調整が僅かにみられる。

土師器椀 (43・44) とともに椀底部の小片で, 高台の接合が甘い。

土師器甕 (45) 小型の甕で, ほぼ完形に近い。頸部の締まりが悪く, 胴部は球状を呈する。胴部外面は縦方向を基軸としたハケ調整で, 胴部中位はハケ目の方向が一定しない。口縁部内面も横方向のハケ調整で器面を整える。胴部内面は工具によるケズリ調整である。底部から胴部中位の外面には煤が遺存している。

S K 4579出土土器 (Fig.99)

須恵器高坏 (46) 大型の高坏の脚部の破片である。脚部内面に工具による圧痕が沈線状にみられる。坏部内面は不定方向のナデ調整で平滑に整えられる。

土師器坏 (47) 底部はヘラ切り未調整だが, 器壁の摩耗が著しい。

土師器椀 (48・49) 48は高台の貼り付けが丁寧であるが, 底部に強く押し付けたために, 底部内面が迫り出している。49は48に比べると高台の貼り付けが甘い。

土師器皿 (50) 底部は回転ヘラ切りで, 二次的に粗雑なナデ消しがなされる。

土師器甕 (51) 口縁部を若干肥厚させながら, 大きく外反する。内外面ともに摩耗が進んでいるが, 外面にはハケ目の痕跡が若干みられる。内面はナデ調整である。

黒色土器椀 (52) A類で内面のみを黒色に燻すが, 発色が悪く, 暗茶褐色を呈する。回転ヘラ切りの底部に高台を貼り付けている。

6) その他の遺構・層位

① 礫敷遺構出土土器

S X 4045出土土器 (Fig.100)

須恵器坏 (1・2) 1は坏身口縁部の小片で、残存する底部付近に僅かに回転ヘラケズリがみられる。2は有高台の坏身の底部片で、高台と体部の胎土が異なる。

② 暗渠出土土器

S X 2485出土土器 (Fig.100, PL.25)

須恵器蓋 (3~6) 3~6が坏蓋である。3は天井部外面に環状の撮みを有する。4はやや焼成不良で乳白色となる。5は天井部外面の回転ヘラケズリが丁寧で、均整のとれた造形となる。6は天井部を中心に焼き歪みがある。

須恵器坏 (7) 坏身口縁の小片である。

土師器坏 (8・9) 8は口縁部片で、胎土に金雲母を多く含む。9は小型の坏身底部の破片で底部がやや凸状に迫り出し、据わりが悪い。

土師器高坏 (10) 坏部との接合面で剥離する。外面は縦方向の強いヘラケズリで調整する。

S X 4055出土土器 (Fig.100)

土師器坏 (11) 有高台の須恵器坏身を模倣したもので、底部外面の回転ヘラケズリや高台のナデ付け等の製作技法も須恵器坏身と共通する。

③ 瓦敷遺構出土土器

S X 2523出土土器 (Fig.100)

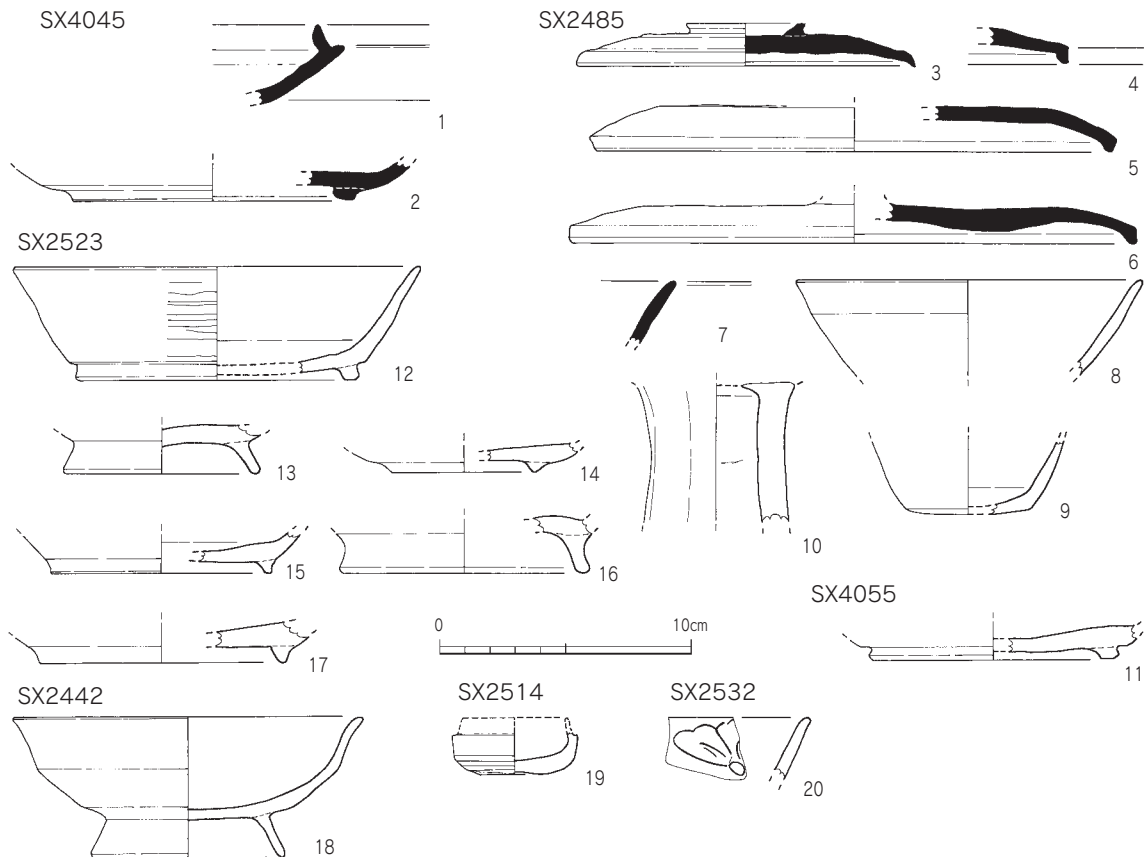


Fig.100 礫敷遺構・暗渠・瓦敷遺構・粘土採掘遺構出土土器実測図 (1/3)

土師器坏 (12) 有高台の須恵器坏身の模倣品で、外面に回転によるミガキ調整が残る。

土師器椀 (13~17) 13~17は椀底部の破片で、13・16は高台が高い。いずれも高台のナデ調整が粗雑で、粘土接合位置が容易に判別できる。

④粘土採掘遺坑出土土器

S X 2442出土土器 (Fig.100)

土師器椀 (18) 高い高台を持つ椀で、高台から体部外面に黒斑がみられる。

S X 2514出土陶磁器 (Fig.100)

青磁合子 (19) 越州窯系の合子の身である。口縁部を欠くが、立ち上がりの部分が僅かに残る。外面は回転ヘラケズリし、内面はヨコナデである。灰色の胎土で、淡黄緑色の釉が掛かるが、底部外面は露胎となる。

S X 2532出土陶器 (Fig.100, PL.25)

緑釉陶器碗 (20) 口縁部内面に毛彫り文様がある。淡黄緑色の釉が掛けられる。

⑤流路出土土器

S X 2480出土土器 (Fig.101~104, PL.25・26)

S X 2480出土土器は、堆積土上層から出土した土器のみを個別に取り上げている。まずは、この堆積土上層出土の記録がある土器を「S X 2480上層」出土土器として報告する。その後、堆積土上層と下層の双方から出土した土器を「S X 2480埋土」出土土器として報告する。

S X 2480上層出土土器 (Fig.101)

須恵器蓋 (1~8) 1~7は坏蓋である。いずれも口縁部にかえりを持つものである。3は撮みがなく、1と2は残存範囲では撮みの有無は確認できない。2のみ天井部が回転ヘラ切りの未調整で、1と3は回転ヘラケズリで調整する。4~7は撮みを持つが、いずれも撮みの大部分を欠損している。天井部の調整は回転ヘラケズリやカキ目で比較的広範囲に丁寧に施している。8は短頸壺の蓋で、肩部に沈線を入れる。

須恵器坏 (9~11) 9・10が高台の坏身で、ともに高台がハ字形に開く。10は焼き歪みや焼き膨れが著しく歪な造形である。底部内面にはヘラ記号がある。11は無高台の坏身で、底部外面は回転ヘラ切りの後に、粗雑なナデ調整を加えている。胴部内面には4条の沈線を巡らしており、底部内面にはヘラ記号もみられる。

須恵器壺 (12) 12はやや頸部の長い短頸壺である。胴部の内面には同心円当て具の痕跡がある。

須恵器甕 (13・14) 小型品である。ともに胴部外面は平行タタキで、胴部内面は同心円当て具の痕跡がある。13は残存する頸部に類似するヘラ記号が三つあり、14は頸部に「×」状のヘラ記号が一つ確認できる。

土師器甕 (15) 胴部外面調整はタテハケで、胴部内面調整は横方向のケズリである。

S X 2480埋土出土土器 (Fig.102~104)

須恵器蓋 (1~20) 1・2は撮みのない坏蓋で、口縁部にかえりを持つ。2は回転ヘラ切り未調整の天井部にヘラ記号を施文している。1は粗雑な回転ヘラケズリ調整を加えている。3は残存範囲では撮みの有無は確認できない。4~19は撮みを有する坏蓋である。撮みが残る資料は、いずれも宝珠形の撮みのもので、やや扁平なものの比率が高い。4~18は口縁部

官衙域整備
前の流路

SX2480 上層

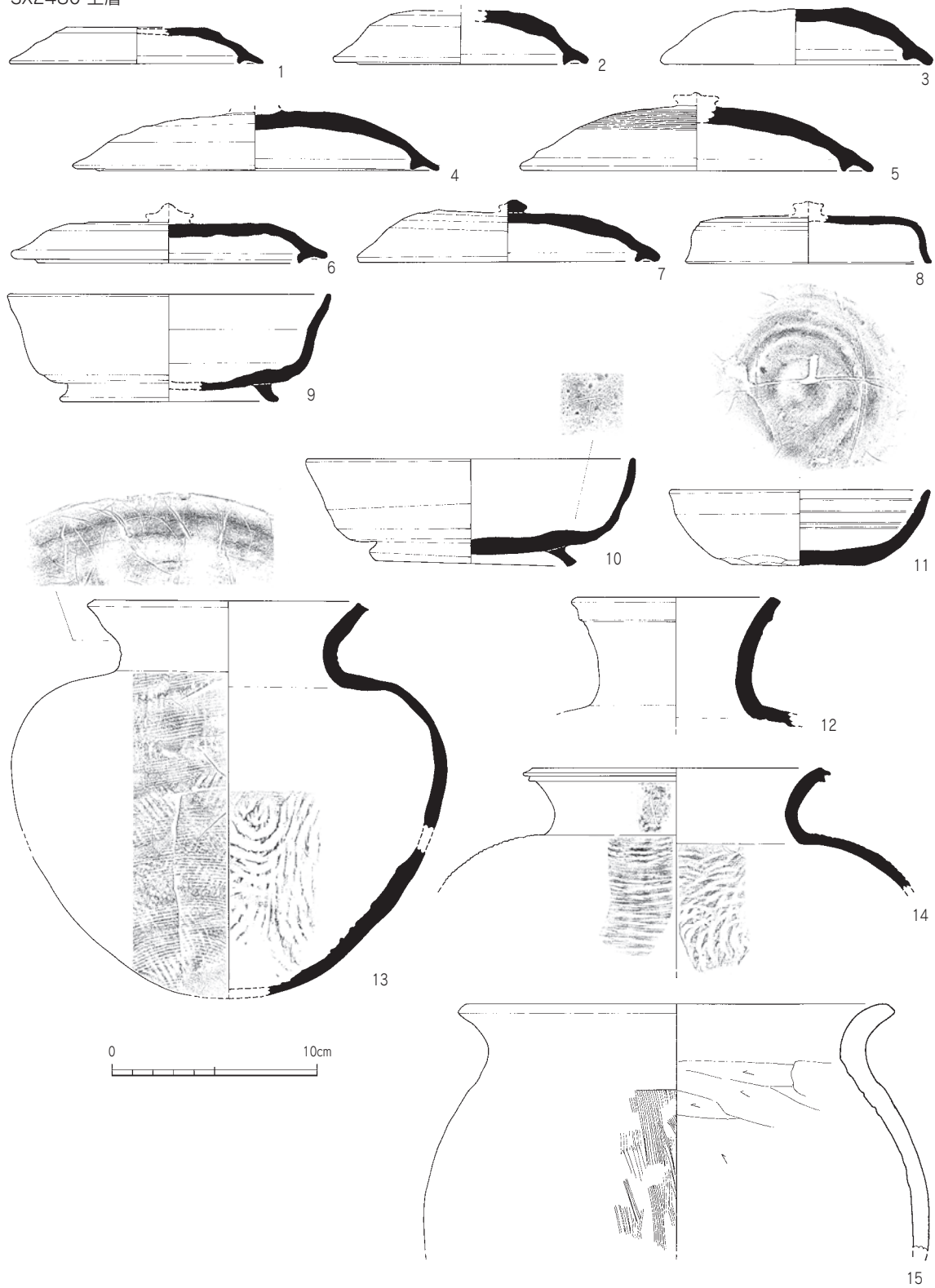


Fig.101 流路出土土器実測図 (1) 98次SX2480 (1/3)

SX2480 埋土

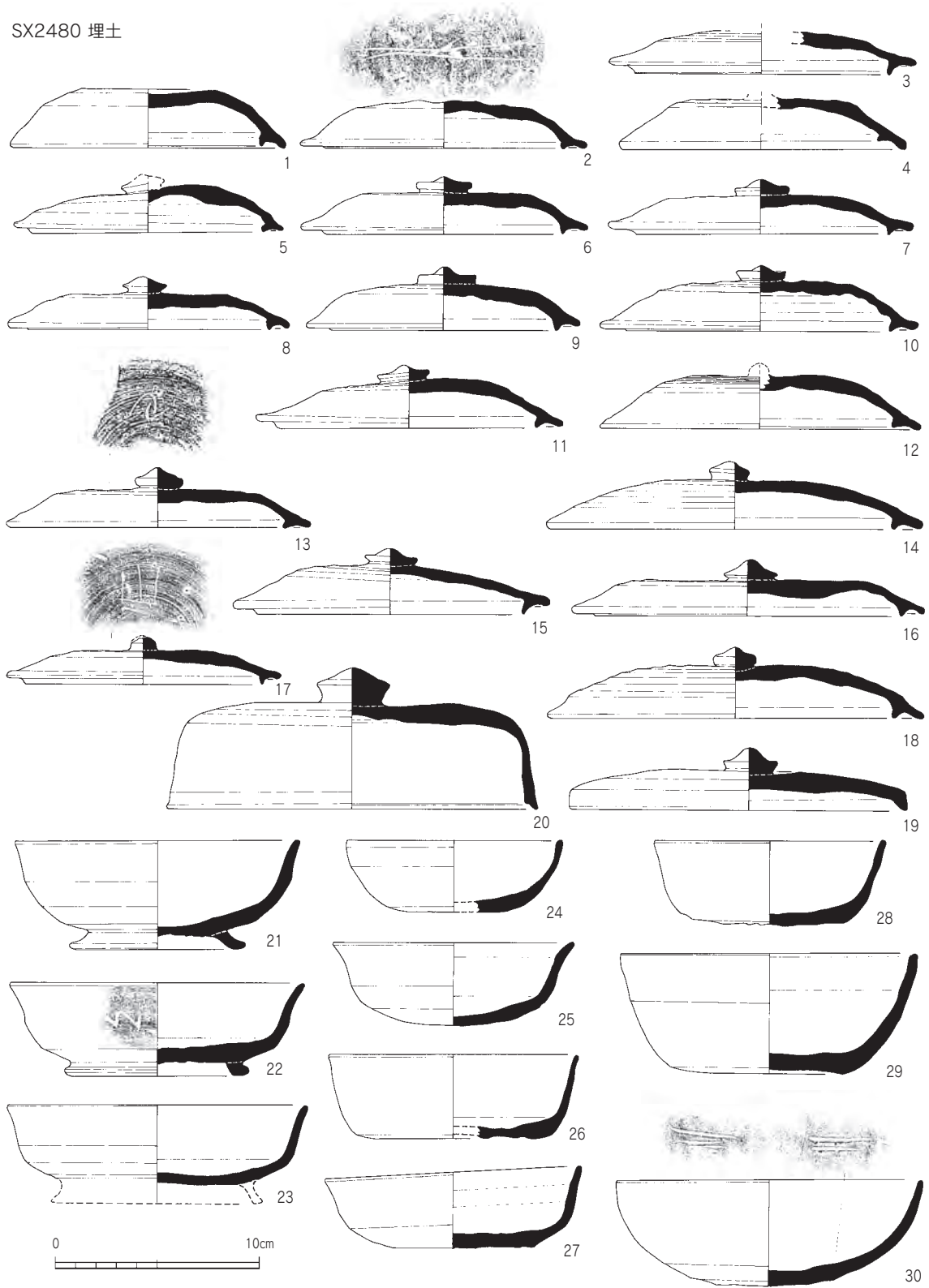


Fig.102 流路出土土器実測図 (2) 98次SX2480 (1/3)

にかえりを持ち、19のみがかえりがなく、口縁端を下方に折り曲げる。5は撮みの一部が欠けており、撮み貼り付け時の同心円状の沈線が観察できる。天井部外面の回転ヘラケズリを切る状態で、列点文を意識するような工具痕もみられる。9は宝珠形撮みの造形がとくに鈍重である。12は天井部外面にカキ目を入れる。焼成はやや甘く淡黄褐色を呈する。13は天井部外面の回転ヘラケズリ後に、ヘラ記号を施文する。須恵質の焼き上がりであるが、色調はむらのある淡褐色となる。15は天井部外面の回転ヘラケズリが強く、筋状に稜が走る。16は天井部外面の回転ヘラケズリが丁寧である。17は天井部外面に「山」字状のヘラ記号を施文する。かえりの成形は華奢な印象を受ける。18は天井部外面の回転ヘラケズリの範囲がとくに広く、入念である。焼き上がりは悪く、瓦質に近い。19はSX2480出土須恵器坏蓋では珍しい口縁部にかえりを持たない資料となる。天井部外面の回転ヘラケズリは丁寧で、宝珠形の撮みや全体的な器形も均整のとれた造形である。天井部内面には二次的な不定方向のナデ調整を入念に施している。20は大型の蓋で、短頸壺と組み合わせる可能性が高い。

須恵器坏 (21~30) 21~23は有高台の坏身である。いずれも高台がハ字形に開くものである。22は残存範囲で「w」状に見えるヘラ記号を施文するが、完存はしていない。また高台の端部は自重のためか、やや屈曲するような形状となる。坏部内面には、部分的に稲藁状の圧痕が残されている。23は高台の大部分を欠損しており、正確な形状は不明である。

24~30は無高台の坏身である。24は破片で口縁部にも焼き歪みが生じているが、小型に属するものである。25は底部外面の回転ヘラ切り痕を粗雑にナデ消している。26は底部内面の強い指頭痕が原因で、底部が歪な形状となっている。27は底部外面が回転ヘラ切りのまま、

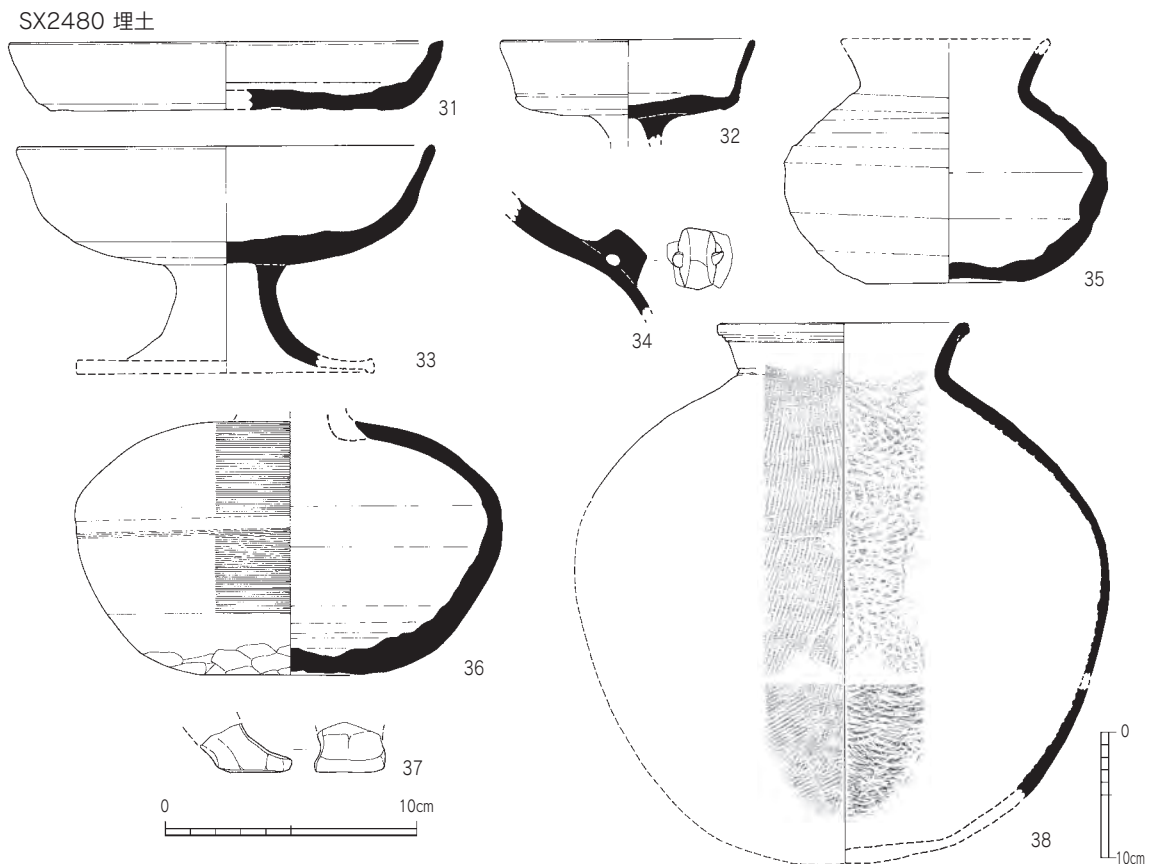


Fig.103 流路出土土器実測図 (3) 98次SX2480 (1/3・1/6)

意図的な調整はなされていない。28は口縁部の一部を除いて、ほぼ完存している。焼き歪みが著しく、平面形態が大きく湾曲している。底部外面は回転ヘラ切りの状態で放置されており、ヘラ状工具で掻き取られた粘土の一部がそのまま残されている。29はやや大型のもので、底部外面はヘラ切り未調整である。30は24～29の無高台の坏身に比べて、とくに底部の形状が曲線を描いている。底部外面の回転ヘラケズリは入念で、滑らかな器壁となる。底部内面は不定方向のナデ調整を加えた後に、対となる二つのヘラ記号を施文している。底部の一部を欠損しており、ヘラ記号の施文数は不確実ではある。焼き歪みがあり、平面形態は若干歪んでいる。

須恵器皿 (31) 口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部が若干肥厚する。底部外面は回転ヘラケズリ調整である。

須恵器高坏 (32・33) 32は小型の高坏で、脚部径の大きさからはそれほど長い脚部を取り付けていたとは考えられない。脚部は坏部外面の回転ヘラ切り痕にナデ付けられている。焼成は甘く、淡黄褐色を呈している。33は器壁の摩耗が進んでおり、細かい調整は不明である。坏部に比べ、脚部の調整が丁寧な印象を受ける。焼成は甘く、淡黄褐色を呈する。

須恵器壺 (34～37) 34は把手付壺の肩部の破片である。把手の穿孔は棒状工具の刺突でなされている。35は小型の壺の胴部である。底部外面は回転ヘラケズリを施すものの、その後のナデ調整や二次的な粘土の付着で粗雑な印象を受ける。また、底部各所に蕈状の植物圧痕が残る。36は長頸壺、もしくは平瓶の胴部である。胴部外面は緻密にハケ目が巡り、底部は手持ちヘラケズリが入念に施される。37は壺の脚部の破片で、獣脚状を呈する。

須恵器甕 (38) 胴部外面は平行タタキの後に、カキ目を広範囲に施している。内面には同心円当て具痕が残る。

土師器蓋 (39・40) とともに同じS X2480出土の須恵器坏蓋と類似した器形となり、口縁部にかえりを持つ。39は須恵器坏蓋を模倣したもので、回転ヘラケズリなど、須恵器の製作技法を取り入れている。40も須恵器坏蓋の形態を模倣したもので、口縁部外面には、土師器の製作技法であるミガキ調整が加えられている。

土師器坏 (41・42) 41は体部内面に2段の暗文、内底には螺旋状暗文を施している。体部外面上位はヨコ方向のヘラミガキ、下位はヘラケズリをしている。精製された胎土を用い、焼成は良好で淡赤褐色を呈する。42も類似した器形だが、器壁の摩耗が進行しており、細かな調整は不明瞭である。体部内外面に僅かにミガキ調整の痕跡がみられる。

土師器皿 (43～45) 43・44は口縁部が内湾気味に立ち上がる形態のものである。いずれも調整の残りが悪いが、43の底部外面は手持ちヘラケズリで調整されている。44は口縁部付近に黒斑がある。45は胴部外面にミガキ調整を加えている。内面には放射状暗文や螺旋状暗文を施している。胎土は若干の砂粒を含むが、比較的精良なものを用いており、淡橙褐色に焼成されている。

土師器高坏 (46) 坏部の大部分を欠損する。脚部外面は縦方向のケズリ調整である。

土師器鉢 (47) 内反する器形となり、口縁部直下に穿孔を施す。

土師器鍋 (48) 大きく外反するように開く器形となる。胴部外面は縦方向のハケ調整の後に、上位を中心にヨコ方向のミガキ調整を施す。胴部内面も同様のミガキ調整がなされる。口縁部には4カ所に穿孔がなされる。

SX2480 埋土

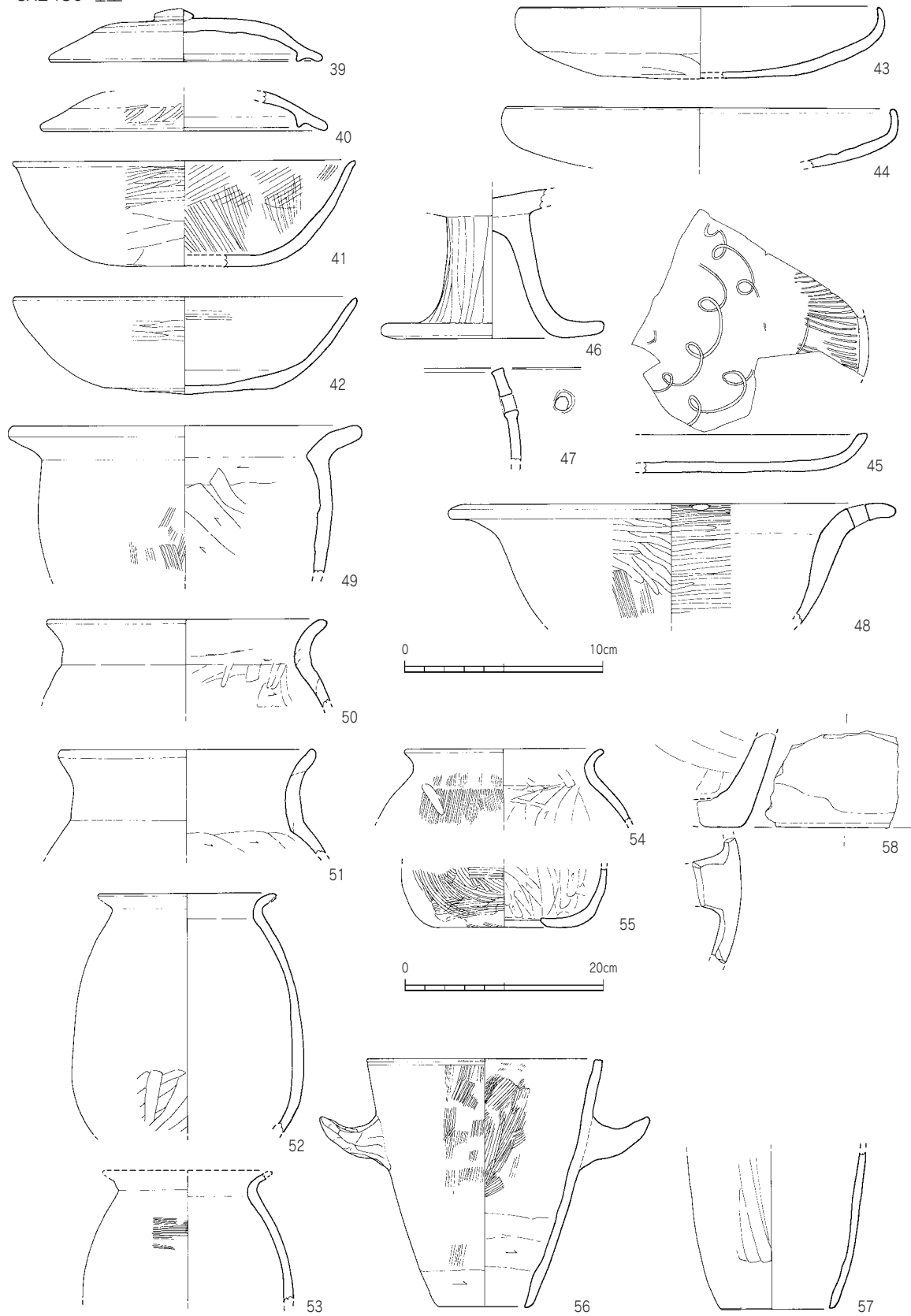


Fig.104 流路出土土器実測図(4) 98次SX2480 (1/3・1/6)

土師器甕 (49~55) 49は肥厚気味の外反する口縁部を持つ。外面は縦方向のハケ調整で、内面は斜め方向のケズリ調整である。50・51も同様に内面をケズリ調整で整える。外面はナデ調整である。50の口縁部には内外面に黒斑がみられる。52の胴部内外面の大部分はナデ調整であるが、胴部下半にのみ、手持ちヘラケズリ調整を加えている。53は胴部外面の一部にヨコ方向のハケ調整がみられる。54は短く屈曲する口縁部を持つもので、胴部外面はハケ調整である。胴部内面はケズリ調整で整える。55は壺底部の破片で、底部外面はヨコ方向とナメ方向のハケ調整が重複している。内面はケズリに近い強いナデ調整が加えられる。底部外面に煤が付着する。底部中央部には二次的な打ち欠きによる穿孔がなされており、穿孔後に廃棄されている。

土師器甕 (56~58) 56は単孔式の甕で、胴部左右に把手が取り付けられている。胴部内外面はタテ方向のハケ調整で、胴部下方にのみ、ヨコ方向のケズリ調整を加えている。57は単孔式の甕の下半部である。外面は工具による調整を施す。58は多孔式の甕の底部の破片である。底部の一部に煤が付着している。

SX4050出土土器 (Fig.105, PL.26)

須恵器蓋 (1~6) 1~4は坏蓋である。1は天井部を欠損するが、2~3は撮みを有する。

SX4050

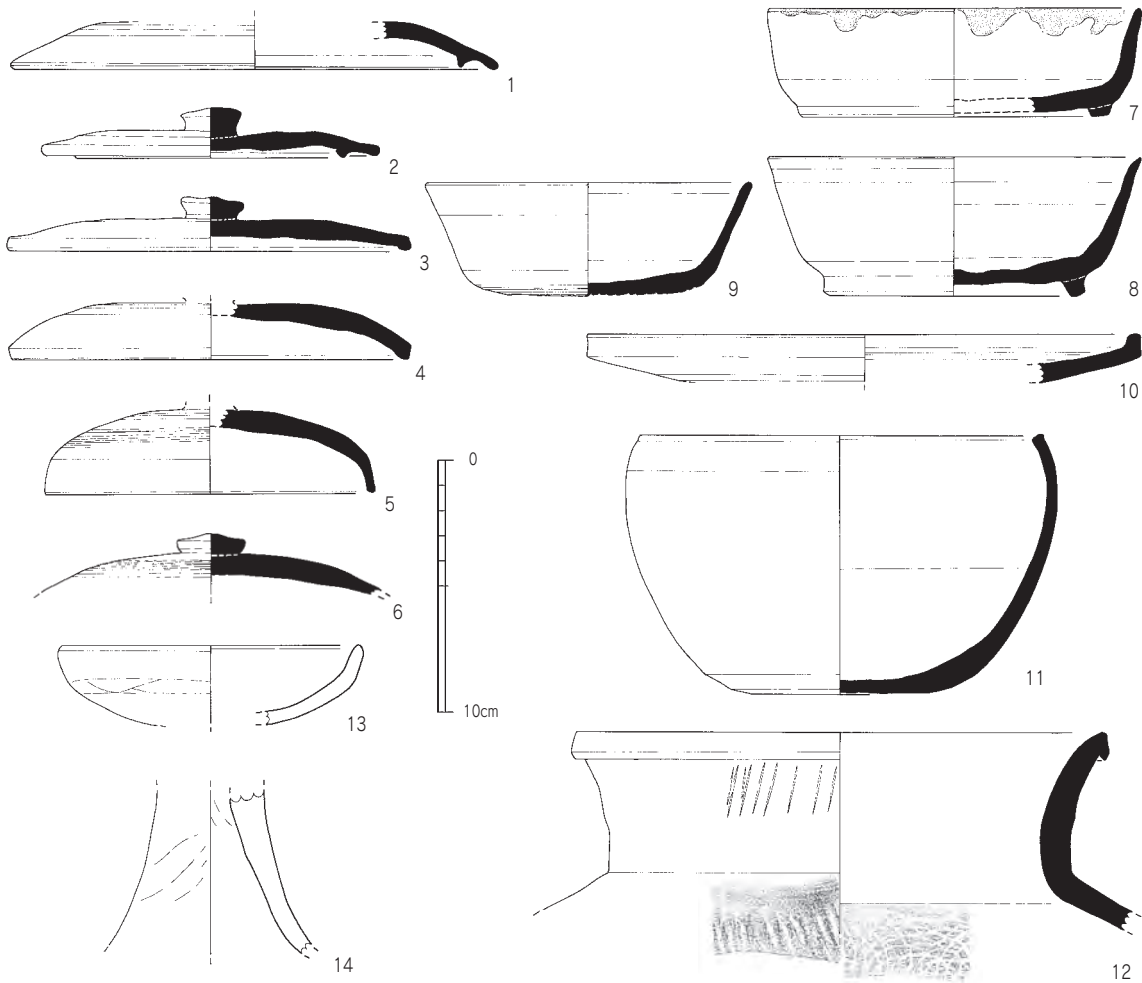


Fig.105 流路出土土器実測図 (5) 147次SX4050 (1/3)

5・6は短頸壺の蓋と考えられる。ともに天井部外面にはカキ目が施される。

須恵器杯（7～9） 7・8は有高台の坏身で、7の口縁部には油煙が付着する。8は無高台の坏身で、回転ヘラケズリの後に底部にカキ目を施す珍しい調整がみられる。

須恵器高坏（10） 口縁部の破片で、内面にはカキ目状の沈線がある。

須恵器鉢（11） 内湾する平底の鉢で、底部外面は回転ヘラケズリで調整する。

須恵器甕（12） 頸部外面にはヘラによる縦位の沈線がある。口縁部内面に灰を被る。

土師器坏（13） 小型の無高台の坏身である。基本的に回転ナデで調整するが、外面の屈曲部付近に手持ちのケズリ調整をやや粗雑に施す。

土師器高坏（14） 脚部の破片で内外面にしぼりの痕跡が明瞭に残る。

⑥溜り・落ち込み・その他出土土器

S X 2336出土土器・陶磁器 (Fig.106)

須恵器蓋（1～3） 1・2は撮み付の坏蓋である。2は回転ヘラ切りの後、とくに二次調

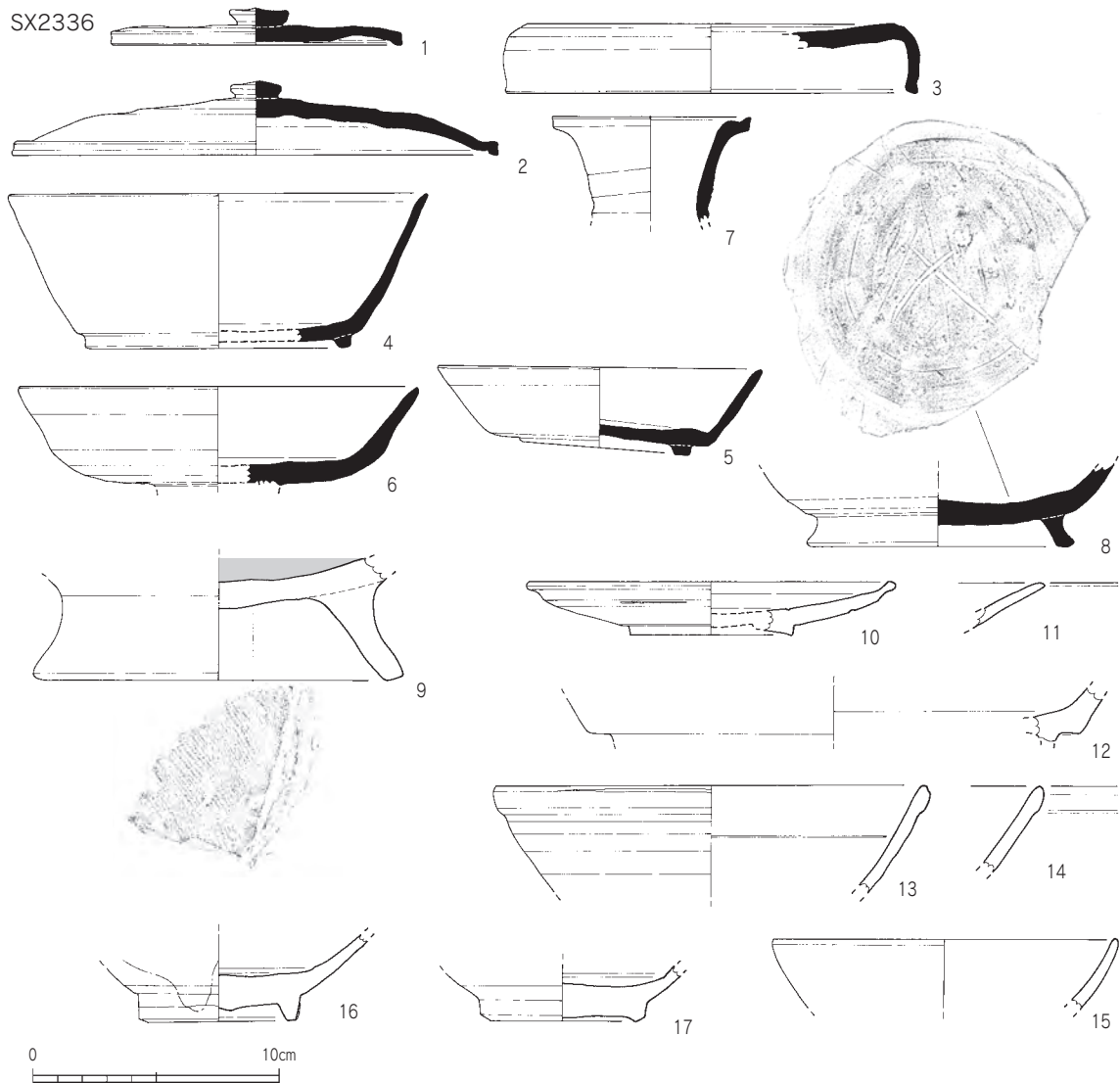


Fig.106 溜り・落ち込み出土土器実測図（1）(1/3)

整を施していない。3は短頸壺の蓋で、屈曲部内面の回転ナデ調整が強い。

須恵器坏(4・5) ともに有高台の坏身である。4は体部が直線的にのびる大型品で、底部外面に僅かに墨書があるが、判読はできない。5の高台底には焼成時に付着した砂粒が残っている。

須恵器高坏(6) 無高台の坏身と類似した形状だが、脚部が剥離した痕跡がある。

須恵器壺(7・8) 7は長頸壺の口部の破片で、端部は跳ね上げ口縁となる。8は器壁の厚さから、有高台の壺類の底部と判別する。底部内面には「×」印のヘラ記号があり、製作過程の途中で施文された可能性もある。

黒色土器壺(9) 器壁の厚さから有高台の壺と判別したが、盤状に上方が開放していた可能性もある。内面はナデ調整で、外面はハケ調整である。内面のみ黒色を呈するA類。

緑釉陶器皿(10・11) 10は蛇ノ目高台の皿の破片で、体部内面はヘラミガキで調整する。釉葉は全面に施され、淡黄緑色に発色する。体部外面には重ね焼きの際に付着した他個体の粘土が残る。11は口縁部端の小片で、内外面に僅かに緑色の釉が残る。

灰釉陶器盤(12) 回転ヘラケズリにより、屈曲部を成形した後に、回転ナデ調整で丁寧に二次調整を施す。内面のナデ調整による窪みには濃緑色の釉が厚く付着する。

白磁碗(13~17) 13・14は玉縁状、15は素口縁の口縁部の破片である。13の体部内面には沈線がある。15は釉の発色がよく、比較的きれいな白色である。16・17は底部の破片である。17には重ね焼きの痕跡があり、底部外面には僅かに墨書があるが、文字の判別はできない。

S X 2416出土土器 (Fig.107, PL.26)

須恵器蓋(1) 完形品の坏蓋である。天井部は回転ヘラ切りによる切り離しのままで、未調整となる。内面には漆が付着している。

須恵器坏(2) 有高台の坏身で体部下位を丸く屈曲させ、高台が外方に開く形状となる。底部外面にはヘラ記号がある。

S X 2477出土土器 (Fig.107)

須恵器蓋(3) 輪状撮みを有する蓋の破片である。回転ヘラケズリの範囲が狭い。

須恵器坏(4・5) 4が有高台、5が無高台の坏身である。いずれも回転ヘラ切りに後に、とくに二次調整を施していない。

須恵器鉢(6) 端部を僅かに肥厚させ、口縁部を意識してナデ調整を施す。

須恵器甕(7~9) 7は回転ナデで成形し、外面にはカキ目を施す。焼成はやや不良で、胎土は瓦質に近い。胎土の粘土には褐色粒子が多く混じる。8は広口を呈し、体部外面にはカキ目を施す。体部内面にはかなり大型の同心円当て具を用いて、細かい間隔で緻密に当てている。9は7と同様に回転ナデ調整で成形する。焼成は不良で、褐色を呈する。

土師器坏(10) 摩耗のため、細かい調整は不明だが、煤の付着が認められる。

土師器椀(11) 形骸化した高台を粗雑にナデ付けている。

土師器皿(12) 回転ナデによる調整が丁寧な皿の破片で、均整がある造形である。

S X 2507出土土器 (Fig.108)

須恵器坏(1・2) 1は底部がやや丸底状を呈するが、調整自体は丁寧に施している。2

は小型の有高台の坏身である。高台貼り付けのヨコナデが強い。

須恵器鉢 (3) 口縁を直立状に跳ね上げ、端部をやや内傾する状態で平坦に整える。外面に深い沈線を施し、口縁部を意識した調整を入念に施す。体部外面は格子目タタキで、内面下方には同心円当て具の痕跡が残る。

須恵器平瓶 (4・5) 4は体部天井付近の破片で、風船技法に伴う粘土接合面の剥離により、破損している。体部外面は入念に二次的なナデ調整を施す。5は体部の大部分を回転ヘラケズリで調整する。外面肩部には「レ」字状のヘラ記号を施す。

須恵器甕 (6) 頸部外面に部分的に板状工具の圧痕が残る。板状工具の幅は、おおよそ4cmである。体部内面には僅かに同心円当て具痕がみられる。

土師器椀 (7) 華奢な高台を貼り付けており、ヨコナデによる接合は丁寧である。

土師器皿 (8・9) いずれも底部外面は回転ヘラケズリで調整する。8は僅かに口縁部が外反気味になる。9は底部外面に「×」字状のヘラ記号を施す。

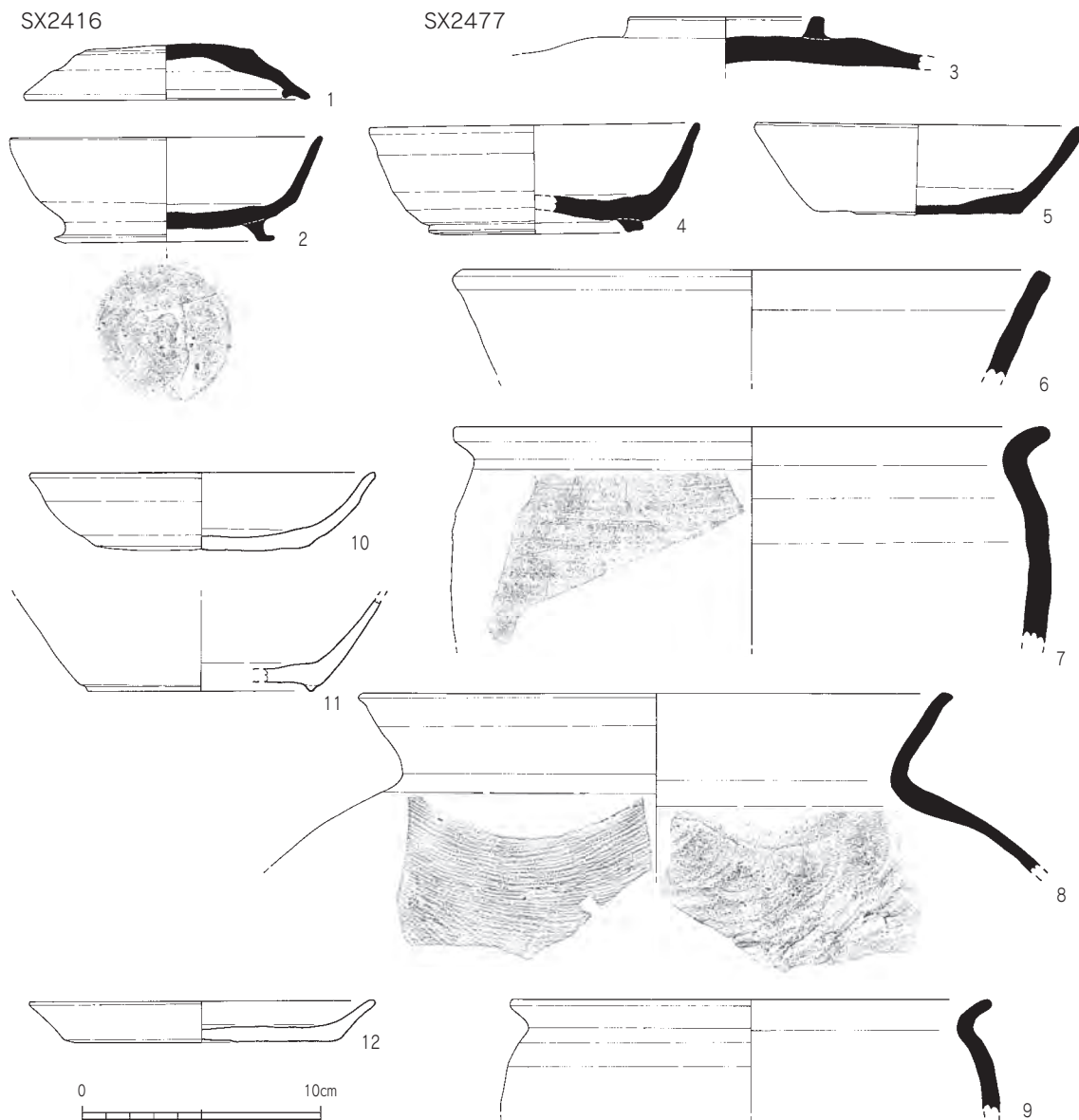


Fig.107 溜り・落ち込み出土土器実測図 (2) (1/3)

土師器盤 (10) 丁寧にナデ調整を施しており、口縁部端部の外反が特徴的である。口縁部内面や底部内面の一部に油煙の痕跡が残る。

土師器高杯 (11) 杯部との接合面で剥離する。器壁が厚く重厚な印象を受ける。

土師器甕 (12) 器壁が薄く、華奢な造形である。体部外面は二次焼成で赤変する。

SX3813出土土器 (Fig.108, PL.26)

須恵器皿 (13) 回転ナデ調整が丁寧な皿の破片で、底部内面に灰が被る。

須恵器甕 (14) 体部内面に僅かに同心円当て具痕がみられる。

土師器杯 (15・16) ほぼ同じ大きさの杯身の破片で、15は体部内面にミガキ調整が残る。

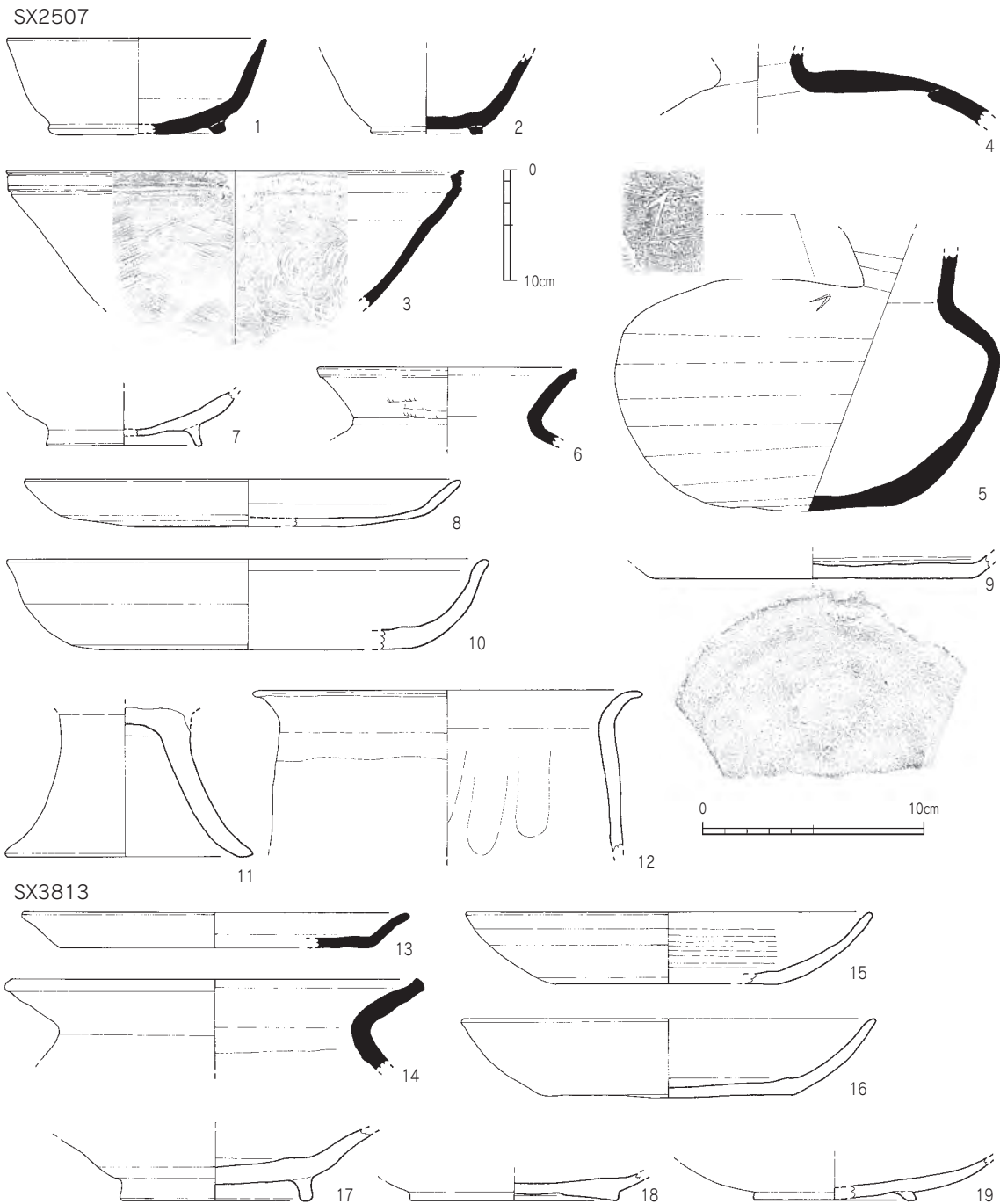


Fig.108 溜り・落ち込み出土土器実測図 (3) (1/3・1/6)

16は摩耗のため、細かい調整は不明である。

土師器碗 (17) 重厚な碗の底部の破片で、同一器種でも大型の部類に属する。一応碗としたが口縁が大きく開くことから輪状の撮みを有する蓋の可能性もある。

緑釉陶器皿 (18・19) 18は蛇ノ目高台で、灰色土師質の胎土に淡緑色の釉を全面に施す。19は貼り付け高台で、淡灰色須恵質の胎土に淡黄緑色の釉を施すが、見込み、体部外面の下半は露胎となる。

S X 3830出土土器 (Fig.109・110, PL.27)

S X 3830出土土器は大きく堆積土の上層と下層に分離して取り上げられている。以下では、堆積の古い順に「S X 3830下層」・「S X 3830上層」に分けて報告する。また、堆積土の帰属が不明な土器についても、「S X 3830埋土」として報告する。

S X 3830下層出土土器 (Fig.109)

須恵器蓋 (1～3) 1～3は坏蓋の破片である。1はかえりを有する口縁部形態のもので、天井部外面は回転ヘラケズリで調整する。2・3は口縁部を短く下方に屈曲させる口縁部形態

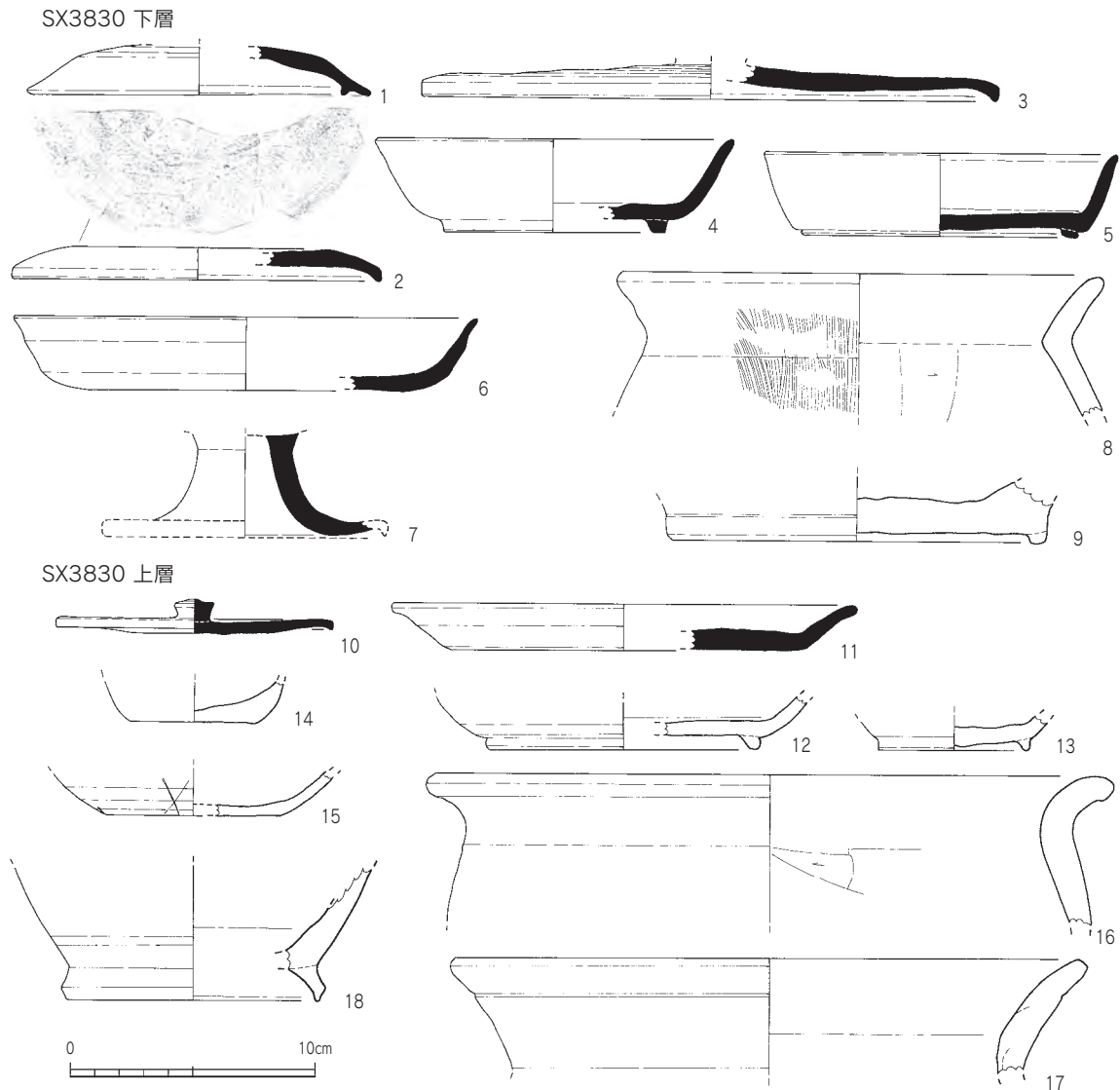


Fig.109 溜り・落ち込み出土土器実測図 (4) (1/3)

である。2の天井部外面には二次的な板状工具の痕跡がある。3は大型品で、撮みが剥離した痕跡がある。天井部は若干の焼き歪みがみられる。

須恵器坏（4・5） 4・5は高台付の坏身の破片である。4は外面のみに灰が被る。

須恵器皿（6） 回転ナデが強く、体部外面は凸凹が著しい。

須恵器高坏（7） 脚端を欠損するが、短く下方に折り返す形状となる可能性が高い。坏部との接合面で剥離する。

土師器甕（8） 外面調整のハケ目が口縁端部まで達するが、二次的なナデ調整で大部分がナデ消されている。内面はケズリ調整である。

土師器壺（9） 高台付の須恵器壺を模倣したもので、製作技法も類似する。

S X 3830上層出土土器 (Fig.109)

須恵器蓋（10） 小型の坏蓋の破片で、宝珠形の撮みを有する。

須恵器皿（11） 口縁部が外反する形状のもので、底部外面には蕈状の圧痕がある。

土師器坏（12～15） 12・13は須恵器の高台付坏身を模倣した坏身である。12の底部外面は回転ヘラケズリを入念に行うなど、須恵器坏身の製作技法と比べて遜色がない。残存部には、沈線によるヘラ記号の一部が認められる。14は小型の坏身で、底部内面の中央がやや窪む。15は須恵器の無高台の坏身を模倣した形状で、回転ヘラケズリを丁寧に施す。また、底部付近の複数個所に「×」字状の施文がみられる。

土師器甕（16・17） 16は口縁部を短く外側に折り曲げる形態で、口縁端部の外面には布状の圧痕が残る。17は口縁部が直線的に外側に向かって開放する。口縁端部下方には段状の沈線が巡る。

灰釉陶器壺（18） 底部にハ字形に開く高台が付く。高台の端部は短く内反させるように、撮み出している。高台内面の回転ナデは、やや粗雑である。

S X 3830埋土出土土器 (Fig.110)

須恵器蓋（1～5） 1～4は坏蓋である。いずれも口縁端部を下方に折り曲げる形態で、天井部にボタン状の撮みを有する。5は須恵器壺蓋で、宝珠形の撮みを有する。天井部は部分的に焼き膨れている。

須恵器坏（6～10） 6は有高台の坏身である。7は回転ヘラ切り後の二次的なナデが強いためか、底部内面が凸状に歪んでいる。9・10は無高台の坏身で、9の底部外面には「ノ」字にのびる浅い沈線があるが、鮮明ではない。

須恵器高坏（11） 脚端を短く下方に屈曲させる。坏部との接合面に亀裂がある。

須恵器鉢（12） 底部がすぼまる鉄鉢状である。胴部下半は回転ヘラケズリ調整である。

須恵器壺（13） 長頸壺の頸部の破片である。頸部中央に浅い沈線が1条巡る。

土師器坏（14） 底部は回転ヘラ切りでとくに二次調整を加えていない。体部は内外面ともにヘラミガキ調整を施している。

土師器甕（15・16） いずれも口縁部を短く屈曲させる形態をとる。16は器面調整が比較的残り、外面はタテハケ調整、内面はケズリ調整を施す。胎土には金雲母を多量に含む。

S X 3833出土土器 (Fig.110)

須恵器鉢（17） 胴部に環状の把手を取り付ける。把手は若干右下がりに傾いた状態にある。

胴部外面にはやや間隔が空いたカキ目を施し、胴部外面下方は回転ヘラケズリ調整で整える。

土師器甕 (18) 口縁部が若干肥厚して、端部に至る。内面はケズリ調整である。

S X 3838出土土器 (Fig.111~113, PL.27・28)

須恵器蓋 (1~13) 1は小型の壺蓋である。天井部外面に板状圧痕がある。2~13は坏蓋である。個体差はあるが、いずれも口縁部先端を下方に屈曲させる形態の坏蓋であり、受け部を持つ坏蓋はみられない。2~4は小型品で、4のみが回転ヘラ切り未調整である。7~9は回転ヘラ切りの痕跡を入念にナデ消している。7・9は口縁部外面のみに灰が被り、重ね焼きの状況が分かる。9はほぼ完形品である。10は回転ヘラケズリを丁寧に施す。12は大型品で、回転ヘラケズリで広範囲を調整する。天井部外面には、焼成時の火襷の痕跡が偏った状態でみられる。13はかなりの大型品で、壺や鉢などの器種と組み合わせる可能性がある。天井部外面は回転ヘラケズリで調整する。天地を逆転させて重ね焼きをしている。

須恵器坏 (14~25) 14~20は有高台の坏身である。14は底部外面に「ノ」字状のヘラ記

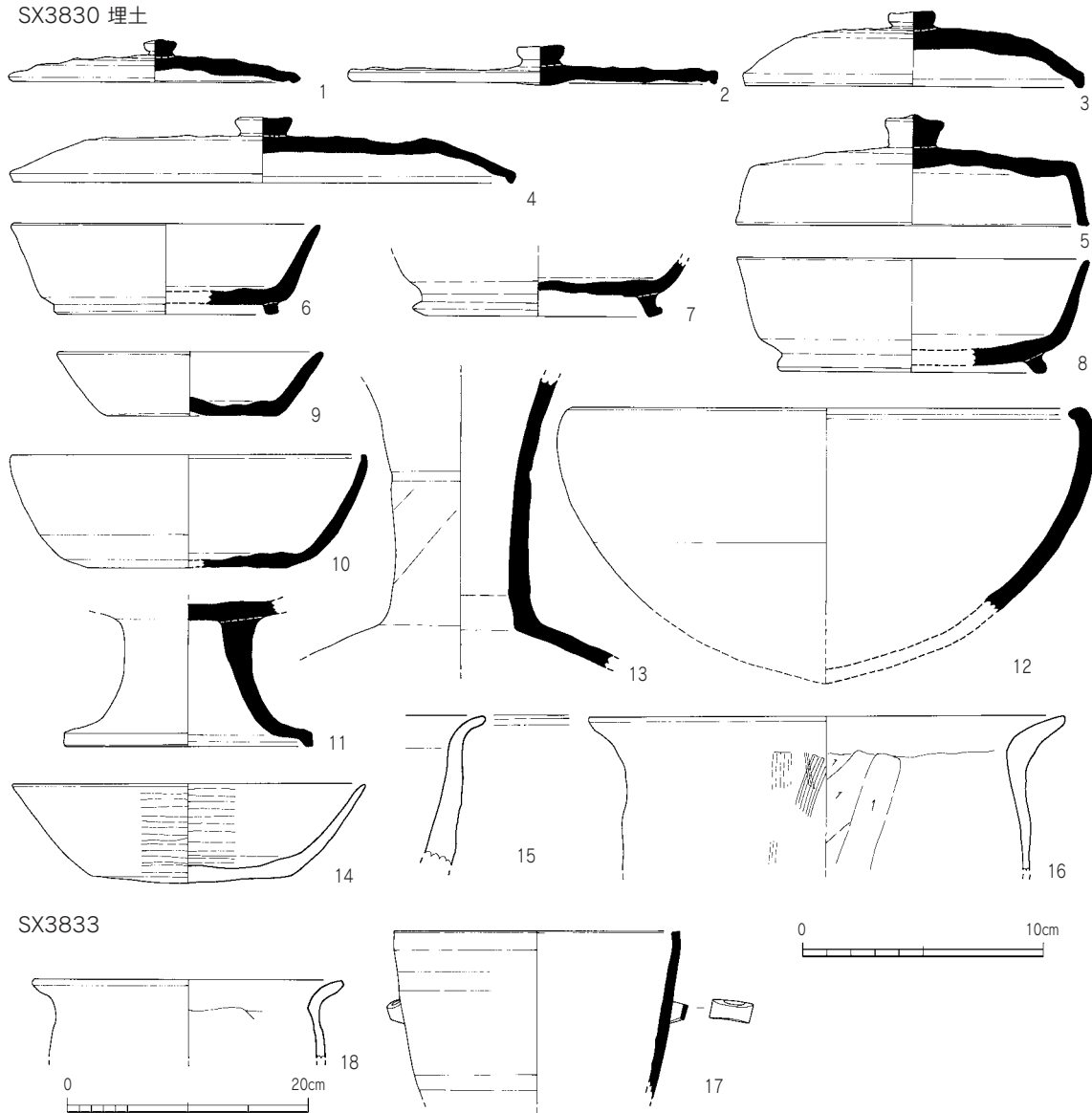


Fig.110 溜り・落ち込み出土土器実測図 (5) (1/3・1/6)

号がある。16は底部外面に板状圧痕が残る。17はやや大型品で、底部外面には回転ヘラ切りの際に生じた粘土溜りを残すなど、粗雑な調整が目立つ。19は丸底に近い形状をとるもので、高台が剥離している。口縁部先端を沈線状に凹ませる。20も19と類似した形態となる。調整技法に特徴があり、土師器の製作技法であるミガキ調整が入念に施されている。細く高い高台も丁寧にナデ付けられている。窯焼成で暗青灰色を呈し、須恵質の焼き上がりである。21～25は無高台の坏身である。21・23は回転ヘラケズリの範囲が広く、類似した特徴を持つ。ともに焼成時の火襷の痕跡も明瞭に残る。

22は回転ヘラ切り未調整で、若干の二次的なナデ調整が確認できる。底部外面には蕁状の植物圧痕が多く残る。24は口縁部先端の内面に沈線状の段を有する。胴部下半から底部にかけて丁寧に回転ヘラケズリで調整を施し、丸みを持った器形を作り出す。全体的な形状から、佐波理鉢を模倣した可能性が高い。25も24と類似した形状となるが、口縁部先端には段がない。

須恵器皿 (26～33) 26～28は小型の皿である。26は底部外面の回転ヘラ切りをナデ消している。27の底部外面は回転ヘラケズリである。外面の全体に厚く灰が被り、部分的に濃緑色の自然釉が付着している。28も回転ヘラケズリ調整を加えるが、範囲は狭い。外面に火襷の痕跡が明瞭に残る。29は回転ヘラ切りを二次的にナデ消しているが、沈線状にその痕跡が残る。31も回転ヘラ切りであるが、板状圧痕がみられる。32は底部外面を回転ヘラ切りで、やや粗雑にナデ消している。胴部外面のみに灰が被る。

須恵器盤 (34・35) 34は盤の破片である。口縁部先端が短く外側に屈曲する。底部外面の調整は摩耗のため、よく分からない。底部内面は部分的に回転ヘラケズリも利用して、底部の壁面を平滑に整えている。焼成は甘く、淡灰色を呈する。35は有高台の盤である。貼り付けている高台は、通常の須恵器坏身の高台と類似した形態のものである。高台の先端には部分的に棒状の圧痕が認められる。底部外面は丁寧に回転ヘラケズリ調整を加えている。

須恵器高坏 (36～40) 36～38は高坏の坏部で、口縁部先端の破片である。いずれも口縁部先端がほぼ直立状態で立ち上がる。底部外面は回転ヘラケズリ調整を加えている。36のみ焼成が甘く、灰色を呈する。39・40は脚部分の破片である。器壁は回転ナデで整えられ、内外面ともに若干波打つような状態となっている。しぼりの痕跡も観察できる。残存部上端に沈線が巡る。40は華奢な脚部の破片で、部分的に坏底部が残る。坏底部の内面は丁寧に調整が加えられており、平滑である。坏部と脚部の接合付近にのみ、若干の回転ヘラケズリが認められ、貼り付け時に生じた粘土の余りを掻き取ったような調整が観察できる。

須恵器鉢 (41～44) 41は鉢の破片で、胴部外面の下半を回転ヘラケズリ調整で整える。口縁部上端は平坦に成形する。42はほぼ直立した器壁を持ち、口縁部先端を若干肥厚させて、その上端を平坦に整える。鉢としたが、製作技法自体は須恵器甕と類似した特徴を持ち、外面を擬格子目タタキ、内面に同心円当て具痕とカキ目がみられる。このカキ目は手持ち状態でなされているため、実際にはハケ調整と大差ない。須恵器甕の製作技法で、形態的には鉢を製作したような状況である。43は内湾気味に器壁が立ち上がる鉢の破片である。底部外面下半は回転ヘラケズリで調整している。44には若干傾いた状態で把手が取り付けられている。把手の取り付け位置には、タテ方向の沈線が乱雑にひかれており、その上から把手が貼り付けられる。偶発的な可能性もあるが、内面にも把手取り付け位置に浅い沈線が入れられている。

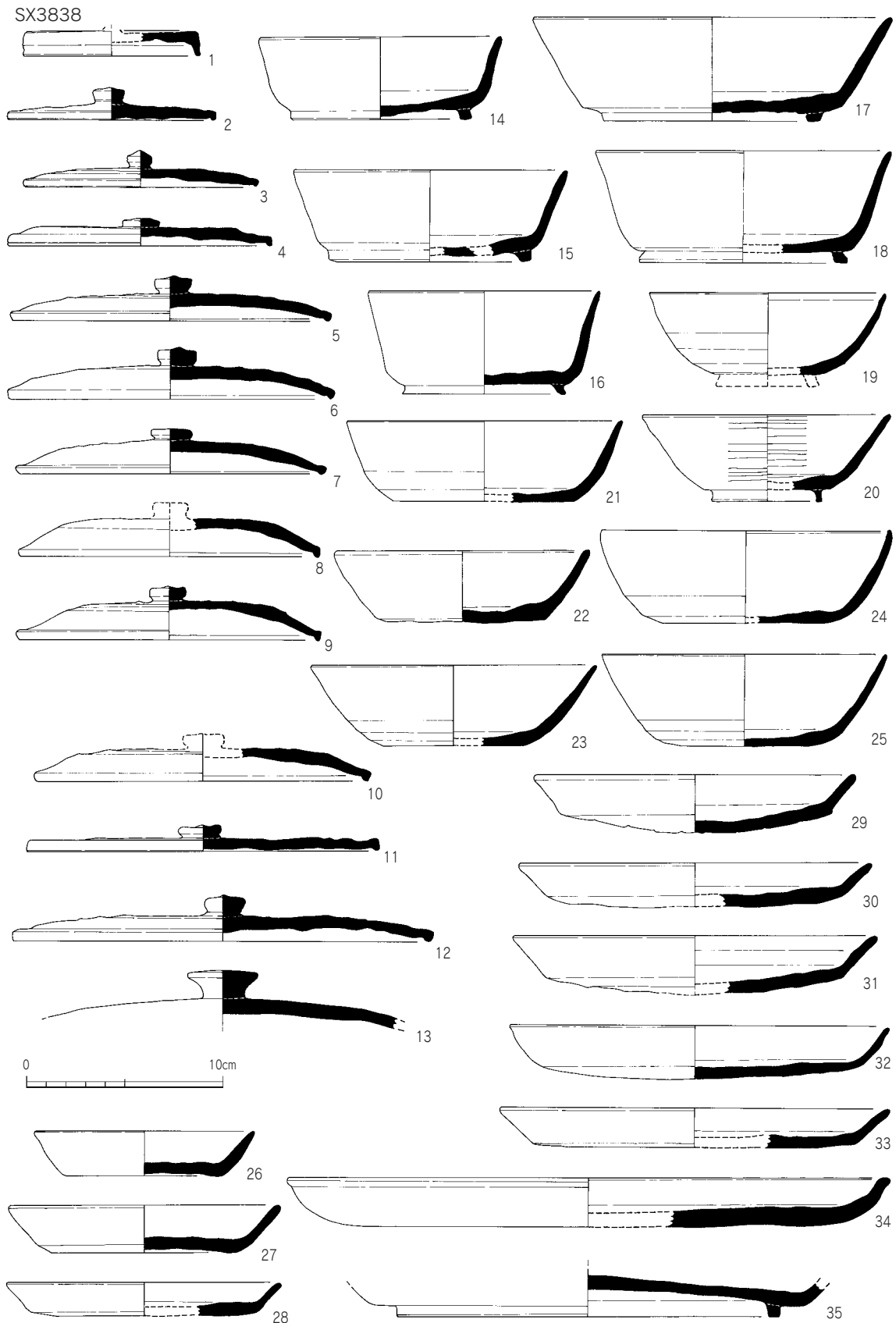


Fig.111 溜り・落ち込み出土土器実測図(6)(1/3)

須恵器壺 (45～51) 45～47は壺の口縁部の破片である。45は大きく外側に開く形態で、内面には部分的にカキ目が観察できる。46は小型の長頸壺の破片で、口縁部先端が跳ね上げ口縁となる。頸部にしぼり痕跡が観察できる。47は短頸壺の破片で、正確な径は不明だが、比較的小型品である。48・49は小型の壺の底部付近の破片と思われるが、49は小型の坏身底部との判別が難しい。48は丸底状の底部を持つ。49は胴部外面を回転ヘラケズリで調整しており、沈線も巡る。50は壺の底部で、重厚な高台を持つ。底部外面は回転ヘラケズリで丁寧に調整している。内面の回転ナデ調整が強く、調整の単位ごとに大きく波打っている。51は長頸壺、もしくは瓶類の肩部から底部にかけての破片である。肩部分は明瞭に屈曲する。底部外面は手持ちヘラケズリで粗雑に調整される。肩部下半のみが灰を被っており、倒立状態で焼成された可能性がある。

須恵器甕 (52～57) 52～57は甕の口縁部付近の破片である。いずれも頸部から口縁部にかけて、外反して器壁が立ち上がる形態のものである。52は口部先端を若干肥厚させ、外面に沈線状の段をつくることで、明瞭に口縁部を成形している。内面は回転ナデ調整が強い。53は口部先端を若干撮み上げるような造形である。胴部内面のごく僅かに当て具の痕跡が見られる。54は口縁部付近に若干の焼き歪みが生じている。胴部外面は擬格子目タタキで、内面には同心円当て具が並列して残る。頸部と胴部に用いた粘土の違いのためか、内面の頸部と胴部で色調が若干異なる。55の胴部外面には粗雑な平行タタキ目が横方向に確認できる。頸部と接合した後も、二次的にタタキを加えており、頸部下端に工具痕が強く残る。頸部には「十」字状のヘラ記号がある。56の胴部外面には縦方向の平行タタキ目がみられ、頸部にも及んでいる。57は外面に擬格子目タタキ目、内面に同心円当て具が確認できる。焼成は不良で、灰白色を呈する。

土師器蓋 (58・59) 58・59は須恵器坏蓋の形態を模倣した土師器坏蓋である。58は口部先端に沈線状の段を有し、若干下方に屈曲するように肥厚させる。天井部には撮みを有するが、粘土接合面で剥離する。内外面に回転性のミガキ調整を施す。59の天井部外面は回転ヘラ切り未調整で器面に凹凸もあり、粗雑な印象を受ける。

土師器坏 (60～66) 60・61も須恵器坏身の形態を模倣した土師器坏身で高台を有する。60は胴部外面の下半を回転ヘラケズリで調整し、上半をミガキ調整で整えており、須恵器と土師器の製作技法を折衷させたような造形である。61はより須恵器の製作技法に主体がある。底部内面には浅い沈線で「井」字状のヘラ記号がある。62・63は無高台の坏身である。62は底部下半を回転ヘラケズリで調整した後に、胴部全体にミガキ調整を加えている。63も同様であるが、底部には回転ヘラ切りの際に生じた沈線が螺旋状に残る。64は小型の無高台の坏身である。

土師器皿 (65～70) 65・66は小型の皿で、底部外面は回転ヘラ切りである。65は未調整で、66は二次的にナデを施す。67～70は皿の破片である。67のみ、外面に丹塗りがなされる。胴部下半まで丁寧に回転ヘラケズリで調整した後にミガキを加える。68～70もミガキ調整が加えられているが、68のみはミガキ調整が断片的でやや粗雑な二次調整である。

土師器盤 (71・72) 71は口径が大きく、胴部の器壁も一般的な皿に比べて厚いため、盤として報告する。製作技法自体は67～70の土師器皿と同様で、底部外面を回転ヘラケズリで

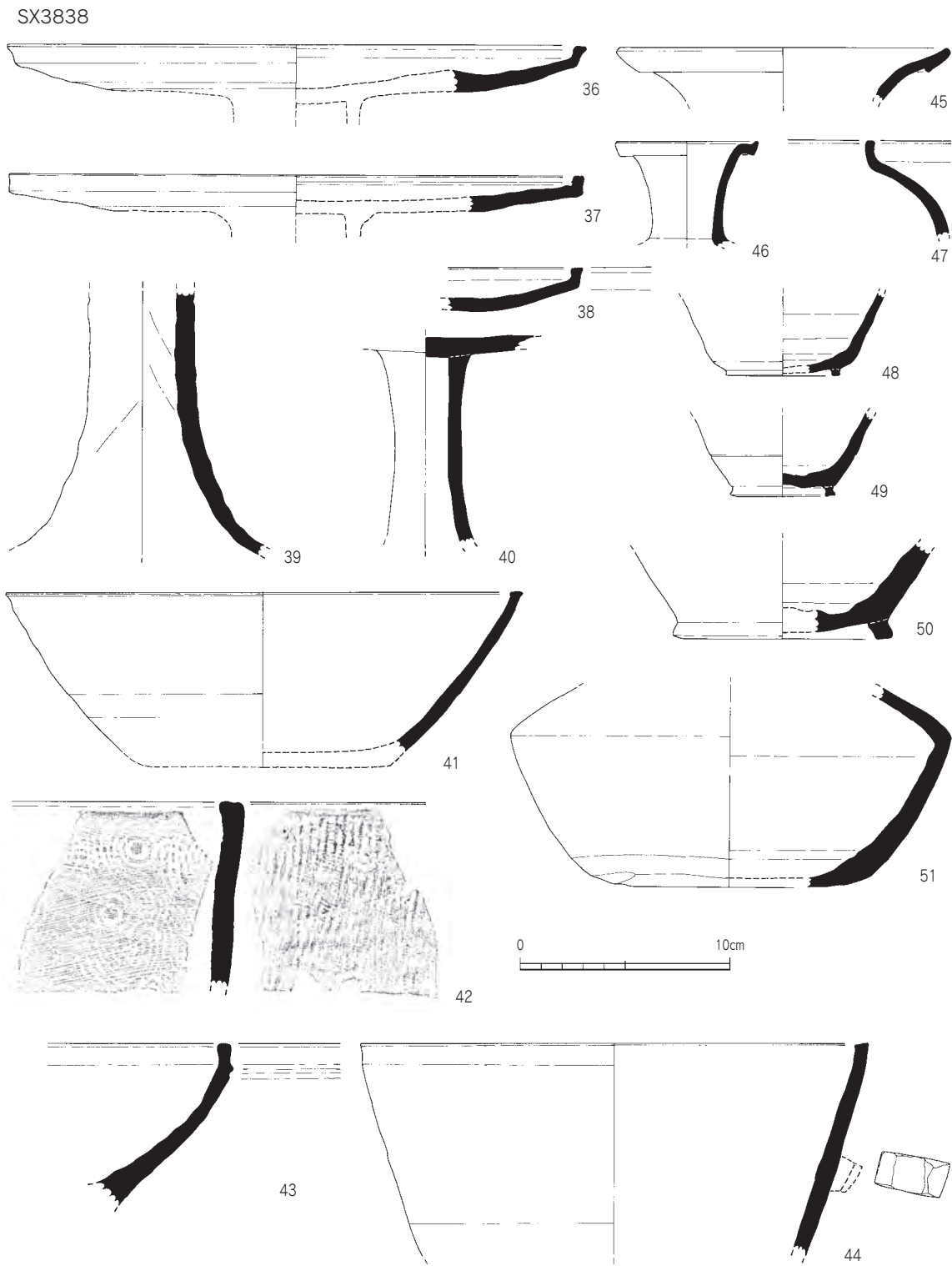


Fig.112 溜り・落ち込み出土土器実測図 (7) (1/3)

調整し、二次的に内外面に回転性のあるミガキ調整で整える。72は有高台の盤の破片である。高台の貼り付け以外は、製作技法も71と共通する。

土師器高坏 (73~76) 73は坏部分の破片で、粘土接合面で脚部と剥離する。形態的には、須恵器高坏を模倣したもので、口縁部先端を直角に跳ね上げる。坏部外面の下半は回転ヘラケズリ調整であるが、大部分の内外面にはミガキ調整を加えている。74も須恵器高坏を模倣した形態で、器壁が薄く、繊細な造形である。75・76は脚部の破片で、ともに内外面が回転ナデ調整である。器壁表面にしぼり痕がみられる。

土師器鉢 (77・78) とともに把手付の鉢、もしくは甑の破片である。77は内外面ともに強いナデ調整で、とくに内面はケズリ調整に近い。外面に大きな黒斑がみられる。78は胴部の器壁が5mm前後と非常に薄い。

土師器壺 (79・80) 79は小型の短頸壺の口縁部である。形態は須恵器の壺を模倣しているが、土師器特有のミガキ調整が加えられている。80は有高台の壺底部の破片である。器壁の厚さから、壺底部と判断した。79に類似した器形の破片である可能性が高い。

土師器甕 (81・82) とともに小型の甕の口縁部である。81は外面がハケ調整で、内面が縦方向のケズリである。外面胴部に煤が付着しており、煮炊きに利用されている。82は外面ナデ調整で、内面は横方向のケズリである。

黒色土器蓋 (83) 須恵器坏蓋の形態を模倣した黒色土器の坏蓋である。口縁部先端を下方に短く撮む。内外面にミガキ調整を施し、内面のみを黒色に燻すA類。

黒色土器坏 (84・85) 84は坏身口縁部の破片で内面のみを黒色に燻すA類だが、外面の口縁部先端まで黒化している。85は坏身底部の破片で、83・84と同様に内面のみを黒色に燻すA類。底部外面は回転ヘラケズリで、内外面にミガキ調整を施す。

緑釉陶器碗 (86) 円盤状高台を備えたもので、碗底部の破片と考えられる。明緑色の釉が内外面に掛けられるが、大部分は剥落している。胎土は淡茶色の土師質である。

緑釉陶器皿 (87・88) 短い高台を貼り付けた皿の底部片と考えられる。残存部分の底部外面が回転ヘラケズリ調整である。87は灰色の須恵質の胎土に緑色の釉を全面に掛けるが、剥落が進んでいる。88は淡橙褐色の土師質の胎土に淡緑黄色の釉を全面に掛ける。

S X 4060出土土器 (Fig.114, PL.28)

須恵器坏 (1) 大型の坏身で、底部はヘラ切り未調整である。

土師器碗 (2~4) いずれもハ字形の高台を貼り付けるもので、高台のナデ付けは粗雑である。底部はヘラ切り未調整で、2には板状圧痕が残る。

土師器皿 (5) 高台付の皿で、口縁部端に黒斑がある。

土師器把手 (6) 把手部の破片で、体部との接合面で剥離する。表面は粗雑なナデ調整で、指頭痕が多くみられる。あるいは鼎の脚柱部か。

黒色土器碗 (7) 丸みを持つ体部に断面三角形の高台を付けるA類碗。内面はヘラミガキがなされ、黒色に燻されている。底部外面はヘラ切り未調整である。

緑釉陶器皿 (8) 灰白色の胎土に淡緑色の釉を全面に施すが、外面の剥離が著しい。

白磁碗 (9) 口縁部の破片で、端部を外反する。内外面に施釉する。

青磁碗 (10・11) いずれも越州窯系青磁の破片である。10は口縁端部が僅かに外反する。

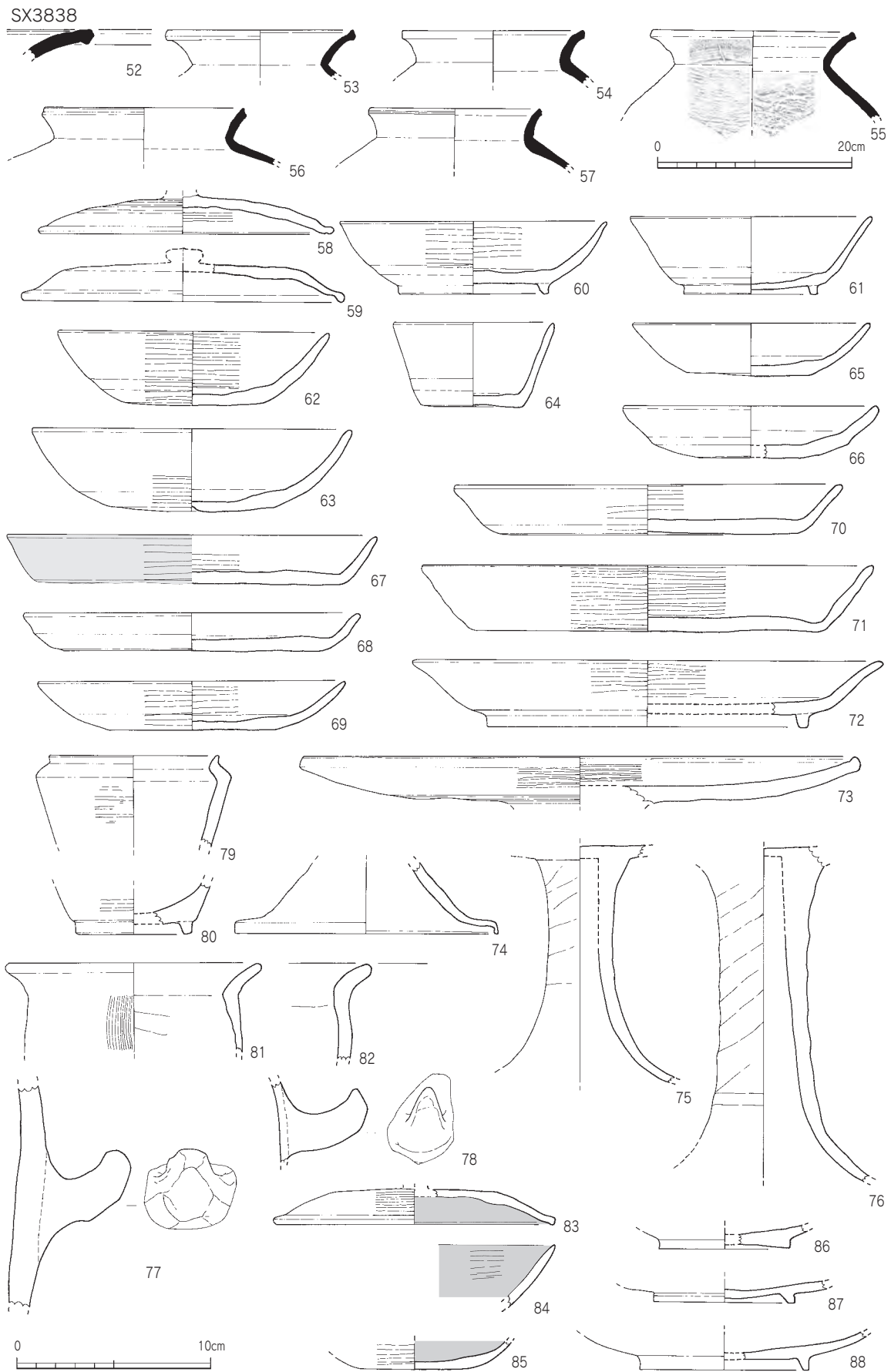


Fig.113 溜り・落ち込み出土土器実測図(8)(1/3・1/6)

内外面に僅かに黄緑色の釉が残る。11も内面に僅かに黄緑色の釉が残る。底部外面は露胎である。

S X 4065出土土器・陶磁器 (Fig.114, PL.28)

須恵器蓋 (12~15) 12~15は坏蓋で、いずれもボタン状の撮みを有し、口縁端部を下方に屈曲させる形態である。

須恵器坏 (16・17) 16・17は坏身で、底部外面はへら切り未調整である。

須恵器甌 (18) 甌の把手部分の破片である。体部外面はハケ調整で、体部内面には当て具の痕跡が残る。把手外面はケズりに近いナデ調整である。

須恵器壺 (19) 壺の肩部分の破片である。胴部外面は擬格子タタキ目、胴部内面には同心円当て具が残る。肩より上方は外面にカキ目、内面は回転ヨコナデである。

土師器高坏 (20) 脚端部下方に微細な段を有する。坏部底部はへら切り未調整。

土師器鉢 (21) 大型の鉢で、口縁は素口縁である。摩耗のため調整は不明である。

土師器甕 (22・23) 22・23は頸部が短く、外反する形状となる。22の内面はタテ方向のケズリ調整である。23は頸部と胴部の境に沈線状の段を有する。

土師器壺 (24) 把手部分の破片である。有翼壺の把手部となろう。

黒色土器碗 (25) 丸みを帯びた底部に高台が付く。内面のみ黒く燻すA類。

黒色土器鉢 (26) 内外面ともにへらミガキで調整される。内面のみ黒色であるA類。

灰釉陶器碗 (27) 内面に緑灰色の釉を施し、外面は露胎となる。

青磁碗 (28・29) 28・29は越州窯系青磁の破片である。29の見込には目跡がある。

S X 4066出土土器 (Fig.114)

須恵器蓋 (30) 坏蓋の破片だが、焼き歪みが著しい。口縁端部を僅かに撮み出す形状となる。

須恵器坏 (31) 坏身の破片で、底部外面はへら切り未調整である。高台のナデ付けは強いが、接合自体は甘い。

須恵器壺 (32) 高台付の壺の底部片で、残存範囲の外面はすべて回転へらケズリで調整している。内面は回転ナデ調整の後に、不定方向のナデを入念に施している。

土師器坏 (33) 有高台の須恵器坏を模倣した形態で、体部下方まで回転へらケズリで調整した後に、丁寧に高台を貼り付けている。底部の一部に黒斑がある。

土師器高坏 (34) 脚端を僅かに折り曲げる。外面は単位が大きいケズリ調整を施して器壁を整えている。

S X 4067出土土器 (Fig.115)

須恵器蓋 (1) 蓋の破片で器壁が厚く、鈍重な印象を受ける。口縁端部は僅かに下方に折り曲げる。

須恵器皿 (2) 金属器を模倣した須恵器の皿である。底部から明瞭な屈曲を経て、口縁部が立ち上がる。器壁は薄く、胎土は精良なものを用いている。

須恵器高坏 (3) 脚部の破片で、内面上方のヨコナデ調整が強い。

S X 4062出土土器 (Fig.115)

灰釉陶器瓶 (4) 底部のみの破片で、外面に緑灰色の釉が掛かる。底部は糸切による切り離して、その他の調整は回転ナデである。

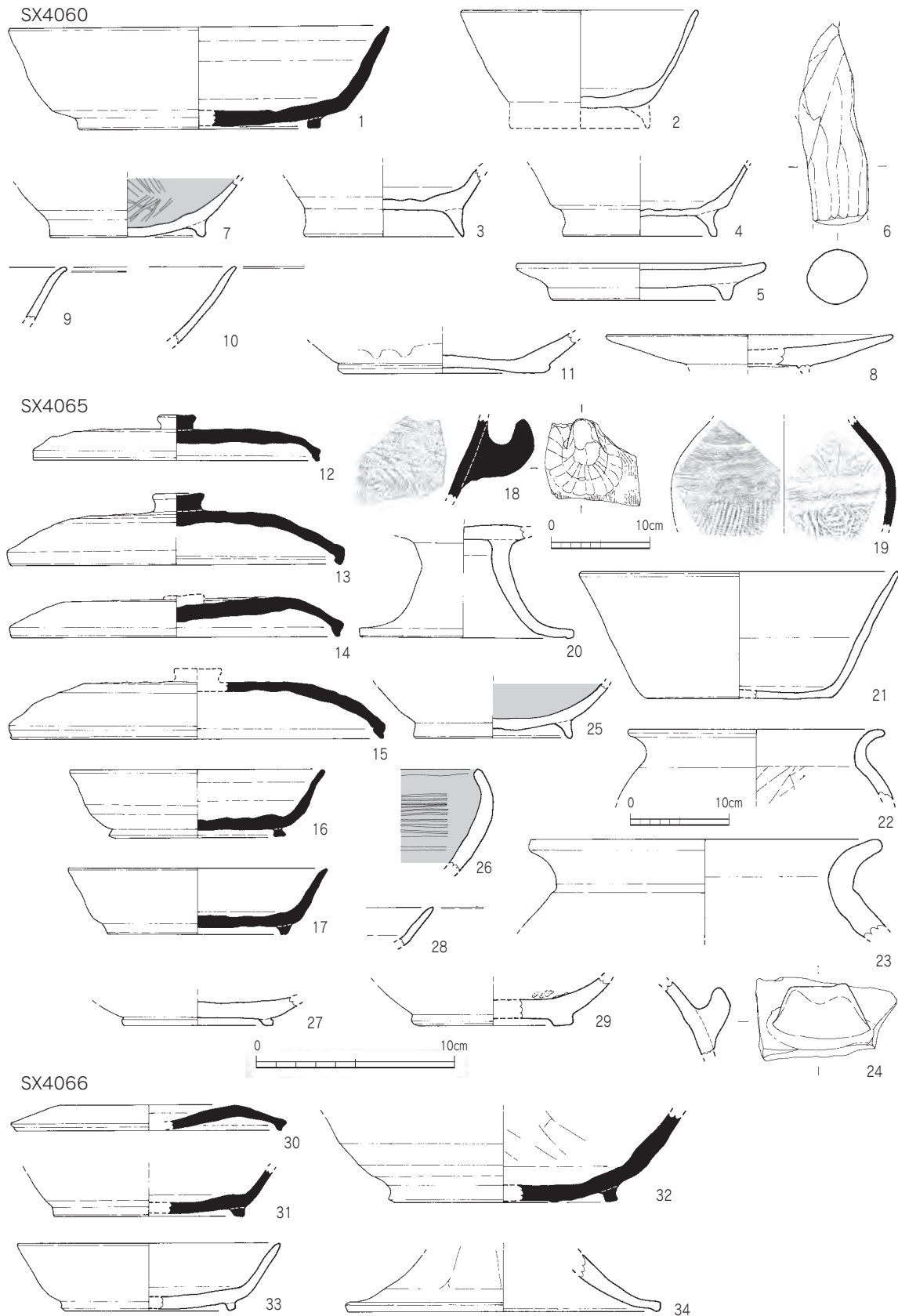


Fig.114 溜り・落ち込み出土土器実測図(9)(1/3・1/6)

S X 2454出土陶磁器 (Fig.115)

緑釉陶器皿 (5～8) いずれも緑釉陶器の底部付近の破片で、全面に釉葉を掛けるが、釉の剥離が著しい。5は高台付皿の底部の可能性が高い。底部外面は回転ヘラ切り後に、二次的にナデ調整を加える。8は底部を削り出して成形する。

白磁碗(9) 白磁碗 I-1類の口縁部片である。黄色味を帯びた白色の釉が均一に掛けられ、口縁部を玉縁状に仕上げる。

⑦その他の層位**S X 372** (Fig.115)

礎石建物 S B 370周辺部で検出した瓦溜り出土資料。

須恵器坏 (10・11) 10の高台は低く、断面三角形となる。外底部はナデ。11の底部片は低い高台部を貼付し、体部が開く椀形態をとる。胎土は粗い。

須恵器壺 (12・13) 12の体部下半は明瞭なナデ、内面はロクロによるナデで、稜が明瞭である。外底部は糸切り。13は底部と体部の境がナデによって丸みを持つ。外底部はヘラ切りで、植物繊維の付着痕跡がある。

土師器坏 (14) は直線的に開く体部にヨコナデによる横位の沈線状の線が入る。外底部は磨滅著しいがヘラ切りで一部板状圧痕。

土師器椀 (15～17) 15の土師器椀は、焼成によって多少歪む。体部中位にやや丸みを持って、口縁部が外反する。外底部に板状圧痕あり。口径12cm、底径6.8cm、器高4.1～5.1cm。17の外底部にも板状圧痕あり。

灰釉陶器碗 (18) 底部片で体部の端に低く丸みを持った高台を貼付する。外底面と体部下半は丁寧なケズリ、内面には薄緑色の釉が発色する。

青磁碗 (19・20) 内面に花文を有する龍泉窯系青磁碗の I-4 a 類で、黄緑色に発色する。20は外面に鏝のない片彫蓮弁を持つ龍泉窯系青磁碗 II-a 類の底部片。19・20は同じ地区で出土した。瓦溜りの下限を考える上でも重要な資料。

S X 373 (Fig.115)

礎石建物 S B 370周辺部で検出した土器溜り出土資料。

土師器皿 (21) 口縁部は厚みを持って外反し、ヘラ切りで板状圧痕あり。復元口径16cm。

土師器坏 (22・23) 22の外底部はヘラ切り、23は底部が凸状で外底部に板状圧痕あり。

土師器椀 (24) 外面下半にナデ調整による段が明瞭である。橙褐色を呈し、底径8.4cm。

黒色土器椀 (25・26) どちらも A 類。高台部については、24は小さく丸みを持つが、25は細く直線的に立ち上がる。

S X 374 (Fig.115)

S B 370に関係する第1整地層出土資料。

27・28は礎石建物を確認する際に設定したトレンチ内第1整地層で確認した廃絶に関わる資料。

土師器坏 (27) 坏 a で、口径13cm、外底部は糸切りで、板状圧痕あり。

土師器皿 (28) 口縁部内側に沈線が巡る。外底部はヘラ切り。

黒色土器椀 (29) A 類椀で、高台部は低く、ハ字形に踏ん張る。内面はミガキ。

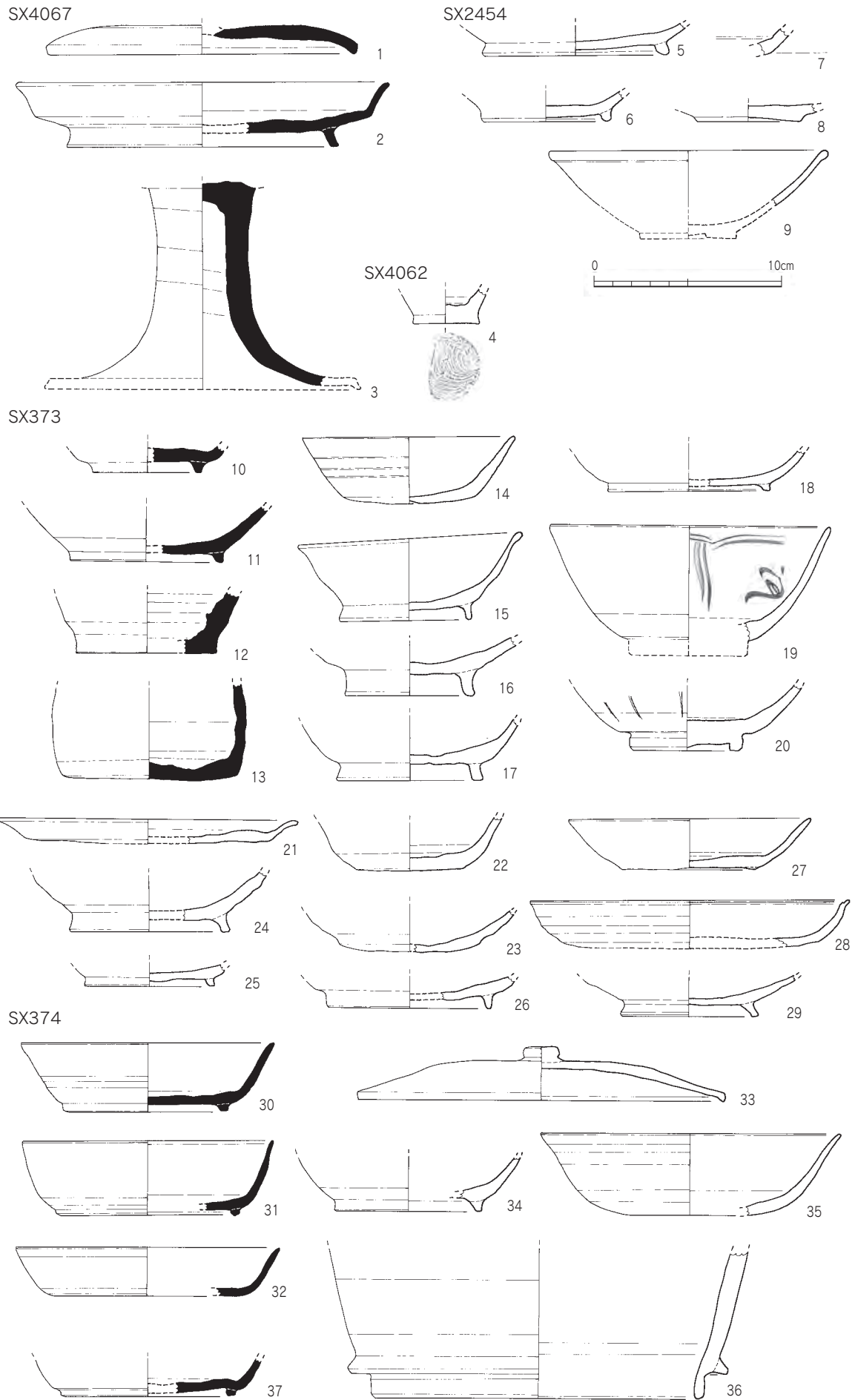


Fig.115 溜り・落ち込み・その他出土土器実測図 (1/3)

30～36は基壇東側中位で検出した東西溝内出土資料。瓦溜り下位に位置付けられ、S B 370造営時に近い頃に比定される。

須恵器坏 (30～32) 30の高台部は低い方形で、体部に2条の沈線が巡る。口径13.6cm、底径8.8cm、器高3.7cm。31の高台は低く少し外反する。32の外底部はナデ調整。

土師器蓋 (33) 口縁端部は厚く僅かに折り返し、撮みも丸みを持ったボタン状である。口径19.6cm。

土師器椀 (34) 高台は低く僅かに外反する。

土師器坏 (35) 直線的に立ち上がる体部の稜線に丁寧なミガキを施す。復元口径16cm。

土師器甗 (36) 下位口縁部に周囲に凸帯を巡らせる。胎土は精良で橙褐色を呈している。口径17.6cm。

37は第1整地・S B 370基壇積土下位出土資料。

須恵器坏 (37) 高台部は低く断面方形である。

(3) 木製品

1) 漆製品 (Fig.116, PL.29)

筒状木製品 (1・2) 1・2はともに厚さ約3mmの筒状木製品の表面に漆を塗布したものである。漆の被膜が剥落した部分もあるが、残りのよい部分では漆を塗布した際の刷毛状工

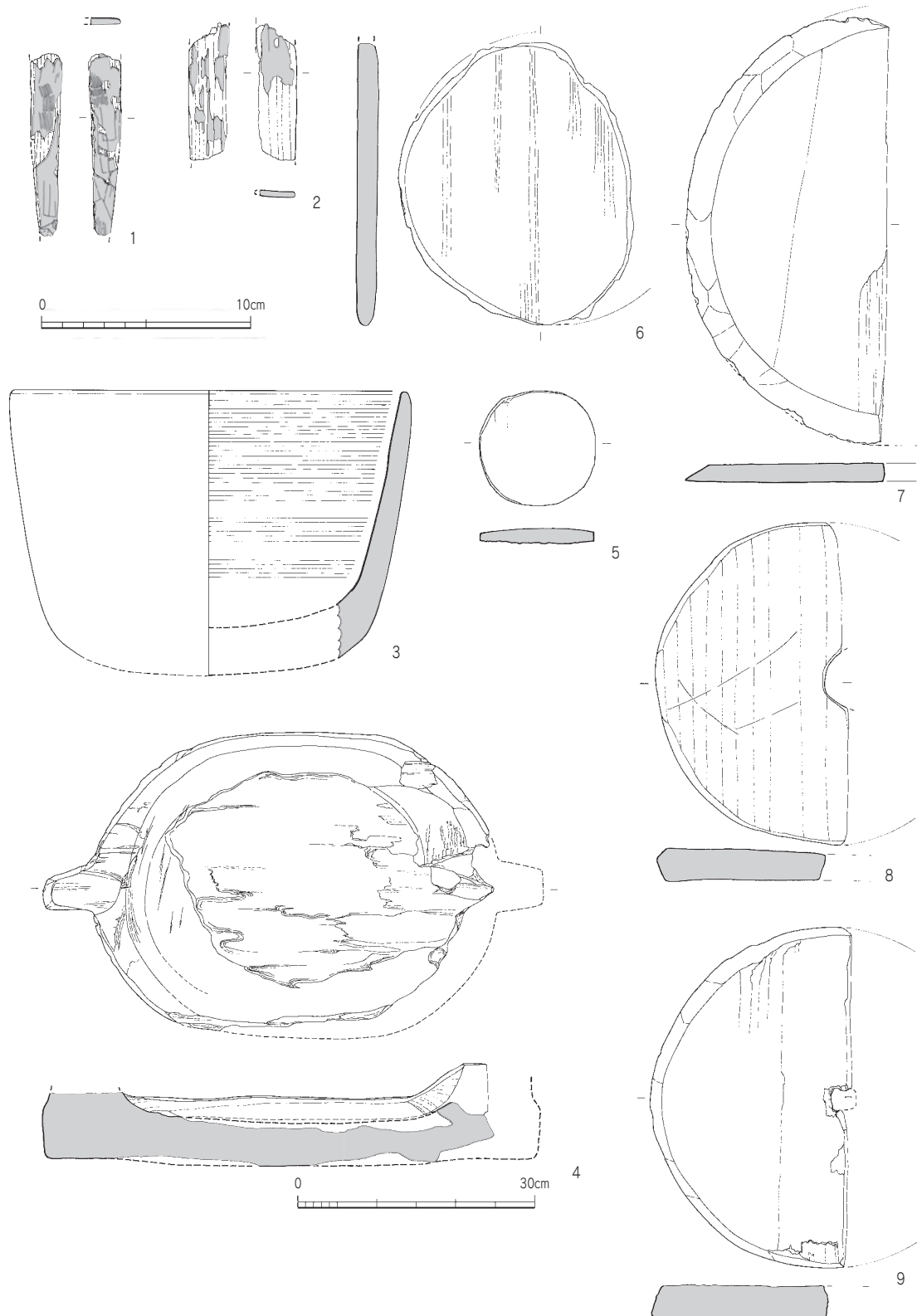


Fig.116 木製品実測図 (1) 漆製品・容器 (1/3・1/8)

具痕が薄く見える。上下端はともに欠損する。1・2はS D2340下層から出土した。

2) 容器 (Fig.116~119, PL.29・30)

木鉢(3) 挽物鉢の破片である。口縁端部は丸く仕上げ、一部は摩滅する。内面には轆轤挽の痕跡が残る。87次調査区のS D2340中層の青灰砂質土から出土した。

把手付大盤(4) 長径の両端に把手が付く。火を受けて全面的に炭化が進み、表面の加工痕跡を観察できない。内面はやや船底状を呈し、底部外面は平坦である。口縁部はほとんど欠損しており、詳細は不明である。14次調査区のS D320中層の腐食土から出土した。

円形蓋状木製品(5~9) 5はほぼ完存するが、6は縁部の腐食が著しい。5の片面は丁寧な削り加工をしているが、一方の片面は割載のままである。7~9は約半分を欠損する。容器類の蓋等に用いた可能性がある。7は周縁に緩やかな傾斜を削り出しており、一部に工具による加工痕を残す。8は中央に円孔、9は中央に方孔を穿つ。5は90次調査区のS D2340中層の青灰粘質土、6は84次調査区のS X2413埋土、7~9は85次調査区のS D2340下層から出土した。

曲物(10) 直径20cmの底板に高さ7.5cmの側板を4ヶ所で固定している。側板内面に刻み目は認められず、3段に縫っている。下端に幅1.5cmの箍を巻く。底板の表裏には不規則な切り目がある。76次調査区のS D320下層の黒茶色粘質土(腐植土D)から出土した。

曲物部材(11~47) 11~21は曲物の蓋や底板の部材である。11は曲物の蓋である。円盤に4個の孔を穿ち、身受けを直接板に皮で留めている。12は底板で、7ヶ所に円孔があるが、うち4ヶ所には樹皮が残っている。表面の一部に曲線の切り目が入っている。13・14はともに約2分の1を欠損する。残存部分では1箇所の穿孔に桜皮が残り、結合箇所の小ささから、11の事例を参照すると蓋である可能性が高い。14は端部からやや内寄りに周縁に沿って沈線がある。15~17は複数枚の板材を継いで、円形板をつくるものである。16の一部には方形状の穿孔が残る。18は3分の1を欠損している。両面ともに丁寧なケズリで仕上げる。残存範囲では4個の木釘孔があるが、うち2個には断面方形の木釘が残る。19~21は複数枚の板材を継いで、円形板をつくる。20の一部には穿孔がある。11は98次調査区のS D2340中層の黒色土、12は76次調査区のS D320中層の黒色粘質土(腐植土A)、13・14・19・20は87次調査区のS D2340下層、15は85次調査区のS D2340下層、16・21は84次調査区のS D2335、17は84次調査区のS D2340中層の黒灰粘質土、18は90次調査区のS D2340下層の腐食土から、それぞれ出土した。

22~47は曲物の側板の部材で、すべて147次調査区のS E4032の井戸枠中から出土した。木取りの状況がわかるように、側面図に木目を図示している。厚みのある板材が多く、大型の曲物を構成する部材と考えられる。板材の表面には沈線を刻んでいる。沈線は必ず板材の木目に対し、交差する状態で刻まれる。沈線の刻み方は、①縦方向の沈線に一方向から斜め方向の沈線を加えるもの、②縦方向の沈線に二方向から斜め方向の沈線を加えるもの、③縦方向の沈線のみのもので3種類が確認できるが、同一個体内でも沈線の加え方には差異があるため、本質的に大きな違いはない。いずれも、斜め方向の沈線が縦方向の沈線に先行することなく、必ず縦方向の沈線を刻んだ後に斜め方向の沈線を加えている。これらの部材は本来の天地が不

明であるため、斜め方向の沈線の先後関係は分からない。また、沈線の目的は木本来の組織を損傷させることにあるため、その部分の強度が弱くなり、資料の大半は縦方向や斜め方向の沈線に沿って割れている。22～33は、縦方向の沈線に一方から斜め方向の沈線を加えた部材である。縦方向の沈線はいずれも一定間隔をあけて刻まれているが、その間隔は厳密ではなく、

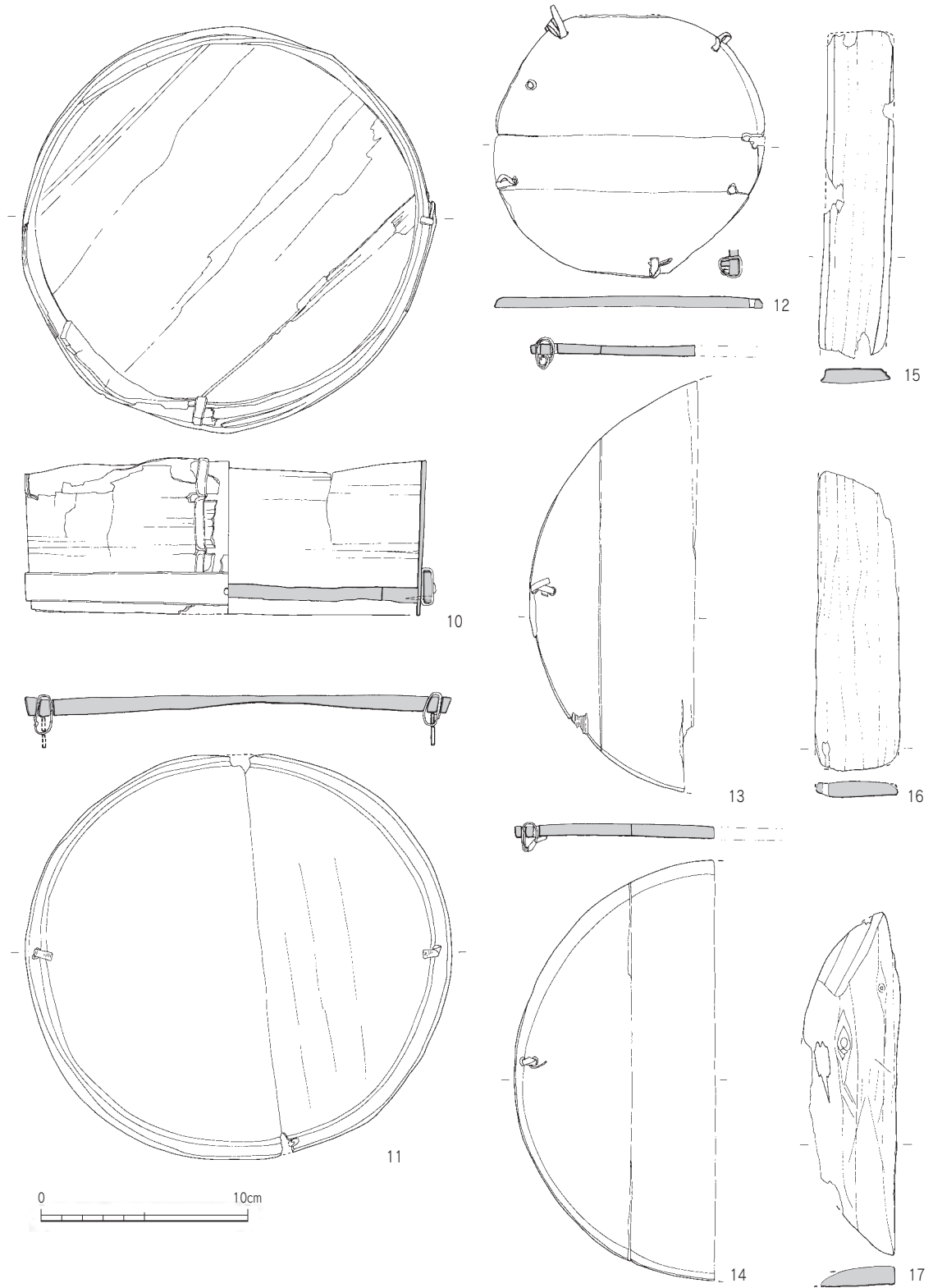


Fig.117 木製品実測図 (2) 容器 (1/3)

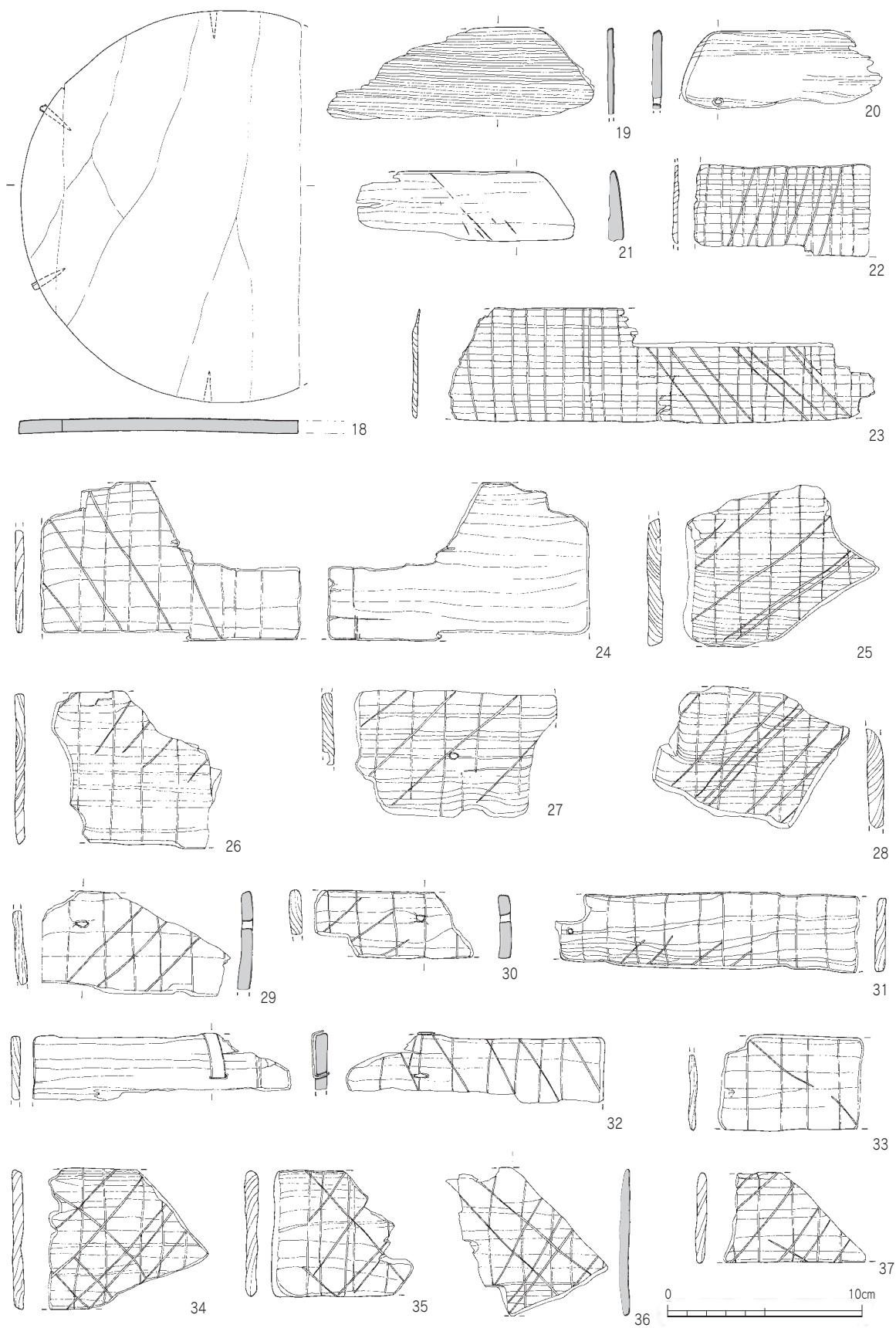


Fig.118 木製品実測図 (3) 容器 (1/3)

目分量で刻まれる状況にある。22・23は縦方向の沈線の間隔が比較的狭く、残存範囲ではほぼ同じ間隔で揃っている。厚みも類似しており、もともとは同一個体であった可能性がある。23をみると、斜め方向の沈線は全面的に刻むものでなく、限定的なものであることが分かる。24・32は一部で両面に沈線が刻まれるが、その頻度は均一でなく、片面のみに偏重する。25・28は斜め方向の沈線に偏りがみられる。縦方向の沈線に比べて、斜め方向の沈線は偏りが生じる頻度が高い。29・30・32は方形穿孔があけられており、32には他部材との結合に用いた桜の樹皮が遺存している。34～39は縦方向の沈線に二方向から斜め方向の沈線を加えるもので、斜め方向の沈線が格子目状に、ほぼ直角に近い角度で交差する。念入りに沈線を刻んでいるが、22・23に比べて、とくに板材の厚みに差異はみられない。40～47は縦方向の沈線のみのものであるが、同様に板材の厚みに差異は認められない。

方形盤 (48・49) 48・49は板目材を加工したものである。側縁のうち木目に平行する方は幅が狭く、直交する側は幅広にする。底部と側縁に二次加工の痕跡がある。48・49は87次調査区のSD2340の下層から出土した。

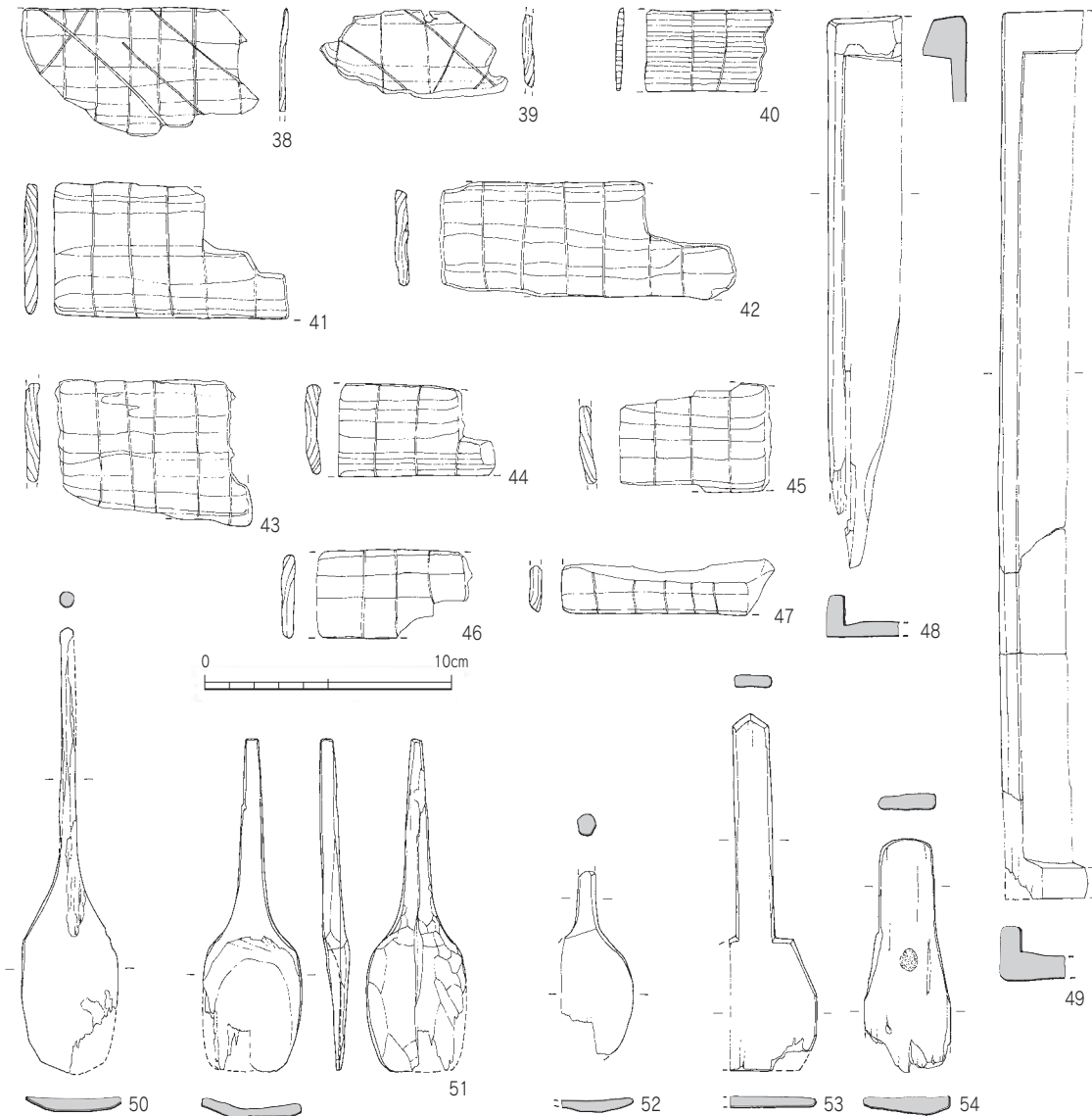


Fig.119 木製品実測図 (4) 容器・食膳具 (1/3)

3) 食膳具 (Fig.119, PL.30)

匙 (50~52) 50は板目材を加工したものである。身は先端を半円形にする。表裏で調整が異なり、表側は平滑に仕上げ、裏は粗いケズリで甲高にする。柄は面取りし、断面は円形に近い。51は厚さ1cmほどの板材を加工したもので、身はやや縦長の三味線胴状を呈し、中央部を窪ませている。裏面は表面にあわせて丸く削り、弧を描く。先端部は薄くしている。柄は断面方形で、端部に向かって細くしている。52の身は木目に沿いながら、3分の1ほどを欠損している。長楕円形の身で、一面を浅く弧状に削る。柄は細長く削り、断面は多角形である。50は90次調査区のS D2340中層の青灰粘質土、51は85次調査区のS D2340下層、52は124次調査区のS D2340下層から出土した。

篋状木製品 (53・54) 正確な用途は不明だが、板材の周囲を加工した篋状の木製品である。53は厚さ0.4cmの柾目材を加工したもので、身は四隅を大きく切り落として八角形にしている。約3分の1を欠損しているが、最大幅5.2cmに復元できる。柄は幅1.5cm、長さ9cmで下端部は圭頭にかたどっている。表裏ともに面取りを行っている。54は身部の大部分を欠損している。板目薄板材を削ったもので、柄は身に比べて短い。柄と身の境付近の上面に火箸を押し付けたような焦げが認められる。53は85次調査区のS D2340、54は124次調査区のS D2340下層から出土した。

4) 武器 (Fig.120, PL.31)

鞘 (55) 組合せ式の木製鞘の片面で、先端のみの残存だが、直刀を納めていたと考えられ

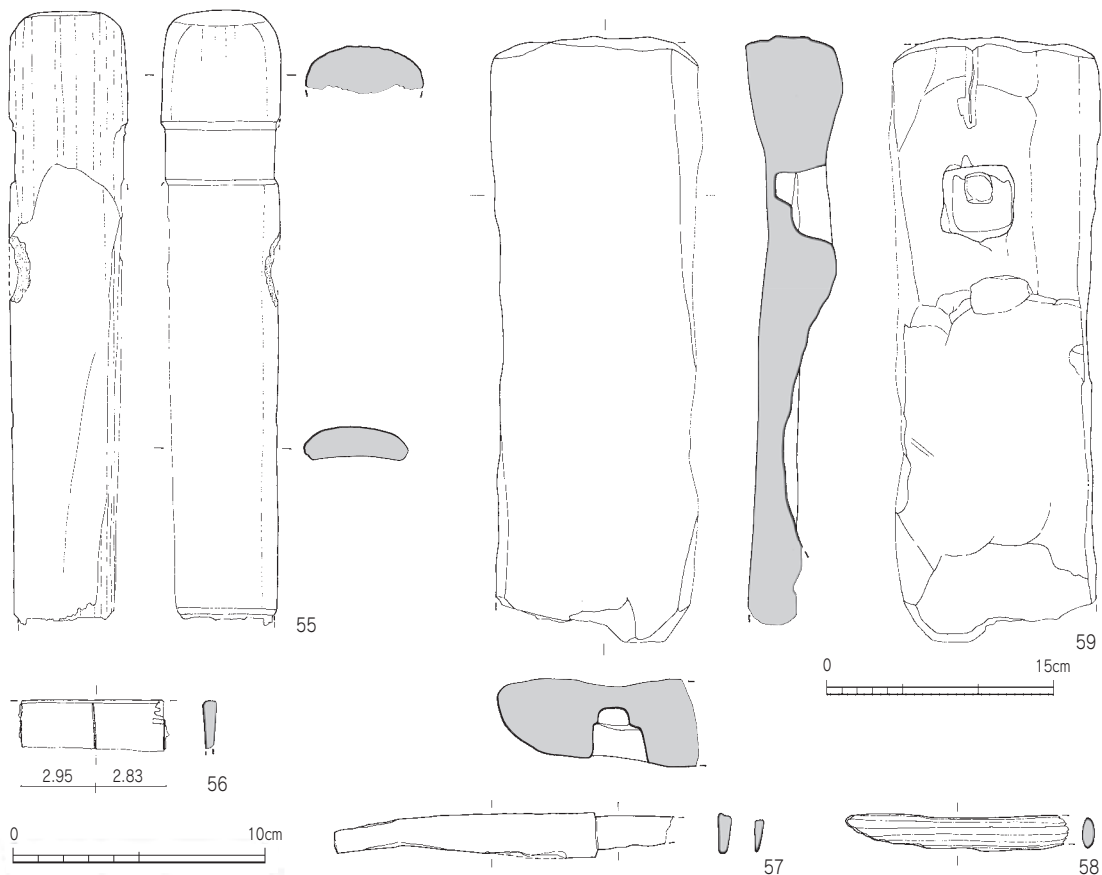


Fig.120 木製品実測図 (5) 武器・農工具 (1/3・1/5)

る。鞘の先端部は滑らかな円頭形に削り、先端より4cmのところに幅2cmほどの袢りを入れる。裏面は削りにより調整するが、先端から6cmほどの部分は破面がみられる。76次調査区のSD320下層の暗灰砂礫土（自然木・瓦合）から出土した。

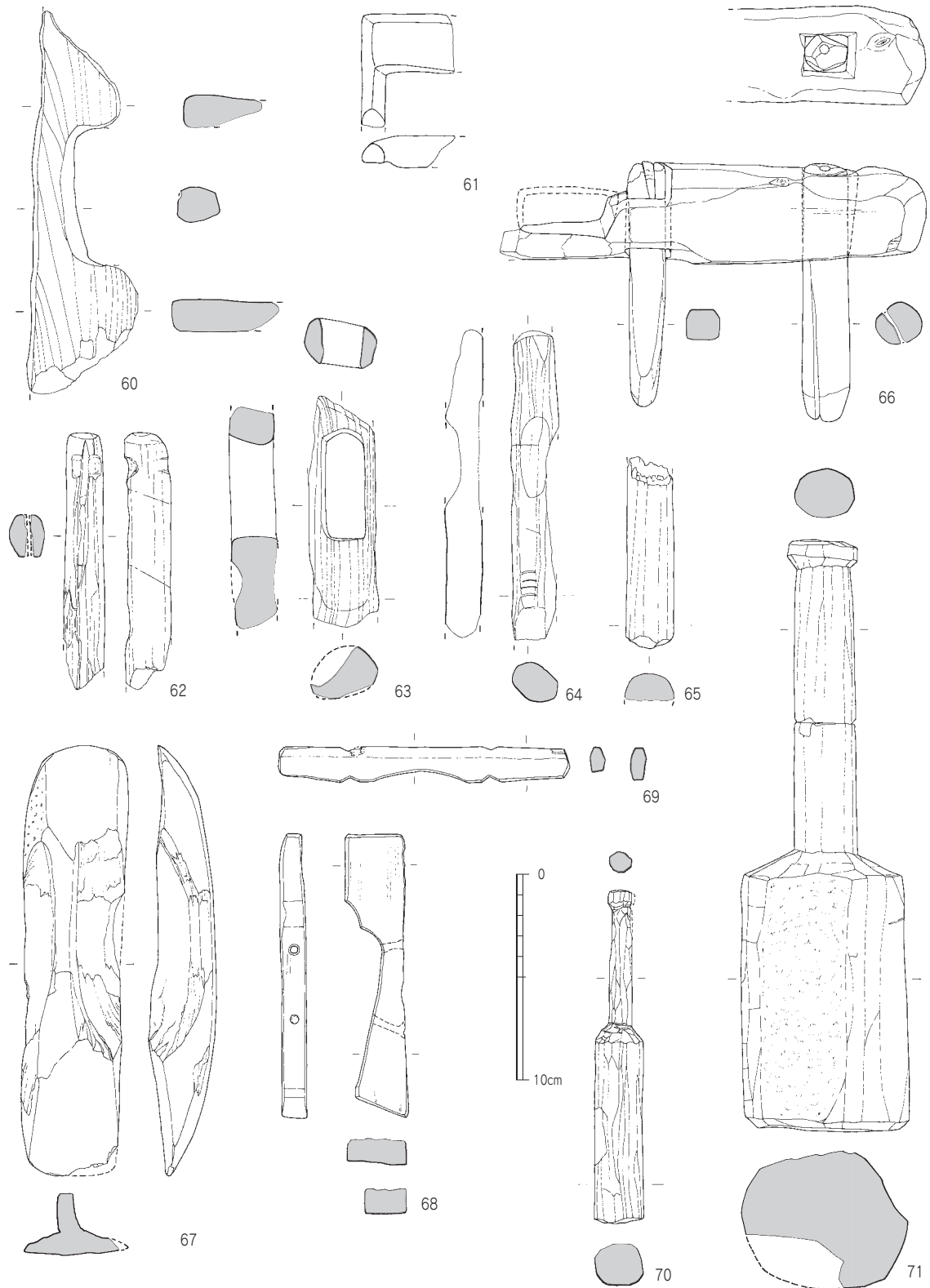


Fig.121 木製品実測図 (6) 農工具 (1/3)

5) 農工具 (Fig.120・121, PL.31)

木尺 (56) 2寸分を残すのみで、両端を欠損する。目盛は1寸刻みに刃物で断面「V」字形の溝を刻んでいる。1目盛の数値は多少のばらつきがある。90次調査区のS D2340中層の青灰粘質土から出土した。

刀子形木製品 (57・58) 57は柄を装着した状態の刀子を表現しており、その忠実な模倣から「様」として製作された可能性がある。刀身部分は大部分を欠損している。58は刀身状の木製品である。板材の端部を削って隅丸状に加工しており、刀子形としても、平面形態のみを模倣したものとなる。57は14次調査区のS D320上層、58は85次調査区のS D2340下層から出土した。

鍬先形木製品 (59・60) 59は鍬先の未製品と思われる板材である。表裏面ともに粗いケズリ痕跡を残し、凹凸が著しい。上半部中央に一辺4.6cm、深さ2.0cmの方形孔を穿つ。さらに中央に一辺2.0cm、深さ1.4cmの孔を穿つが、裏面までは貫通していない。60は表面の磨耗が著しく、表面調整は不明である。鍬先に類似した形態であるが、穿孔が大きく、厚みもやや華奢である。59は147次調査区のS X4050の腐植土層から、60は87次調査区のS D2340上層の暗灰色粘質土から出土した。

柄 (61~65) 61は柄の把手部分の断片の可能性があり、人為的に切断した痕跡があり、二次的な加工が加えられている。62は鎌の柄で、柄尻にかけて欠損する。柄元には刃の基部を装着するための長方形孔が、柄主軸に対して斜めにあけられる。装着孔より上部は締め具の当りと思われる凹みが認められる。63にも他部材と結合するための長方形孔が穿たれている。穿孔が大きく、あまり強度を必要としないものに用いられたと考えられる。64は63と同一個体の可能性がある。表面の磨耗が進んでいる。65は表面の残りがよく、縦方向のケズリ調整が明瞭である。断面円形を志向しているが、実際には多角形状の断面となる。61は98次調査区のS D2340中層、62は124次調査区のS D2340下層、63・64は90次調査区のS D2340中層、65は85次調査区のS D2340下層から出土した。

馬鍬 (66) 断面方形の材を台木として方形の孔を穿ち、齒を差し込んだものである。齒は2本残っているが、うち1本は自然木の枝を利用したもので、他の1本は削って加工したものを差し込んでいる。加工部材には頭部に楔を打ち込んでいる。いずれも末端部は摩滅している。台木の破損した方には方形の孔が齒と直角にあけられており、柄の装着箇所と考えられる。76次調査区のS D320上層から出土した。

鋸状木製品 (67) 直径5cm前後の自然木を加工したもので、下面は船底状を呈し、平滑である。下面は摩滅しており、とくに両側先端は消耗が進んでいる。上面は粗く削った後、両側から大きく削り込んで中央部に取手を作り出す。上面の一部に樹皮を残す。85次調査区のS D2340下層から出土した。

把手状木製品 (68・69) 68は片側のみに2段の削り込みを入れ、その中間部の下側のみに緩やかな曲線を描く抉りを入れる。両端部は角を削り落とす。中央部に他部材との結合のための円孔を交差するように穿つ。69は左右対称形の把手状木製品である。2箇所の上下にそれぞれ抉り込みを入れ、その中央の下側のみに曲線を描く抉りを入れる。両端部の角は削り落とされている。68・69は76次調査区のS D320下層の腐植土から出土した。

横槌（70・71） 70は全長16.3cmの小型品で、71は全長28.8cmを測る。大きさや重量は異なるが、ともに形態的には同じ構造となる。一木作りで、それぞれ丸材を削り込んで作製しており、表面には多くの加工痕を残す。柄の先端には、滑り止め防止用の突起も削り出されている。71には幅4cmほどの敲打痕が残り、実際の使用状況が分かる。70・71は98次調査区のSD2340下層から出土した。

6) 奢侈品 (Fig.122, PL.32)

扇（72） 長い短冊形の板材である。下端の中央に直径0.2cmほどの円孔を穿つ。その形状から、扇の骨材の一つと考えられる。76次調査区のSD320最下層から出土した。

木印（73） 木目の細かな材を加工したもので、印面は直径1.8cmの円形であるが一部を欠損する。印面中央には紐とは斜交する方向にV字形の切り込みを1条入れる。さらにそれに直交する方向にも同じ切り込みを入れるが、片側は周縁にまでは達していない。紐は4方向から削りを加えて分銅形に作り出している。全高は2.3cmである。14次調査区のSD320下層の腐植土から出土した。

琴柱形木製品（74） 厚さ0.8cmほどの板材を加工したもので、下半部両端は斜めに切り落とす。上半部も同様に斜めに削るが、下半部の境付近は緩くカーブを描く。14次調査区のSD320中層の腐植土から出土した。

7) 履物 (Fig.122, PL.32)

下駄（75～77） いずれも隅丸長方形を呈する2枚歯の下駄である。75と77は、十分に履き古したらしく、2枚歯の摩滅が著しい。とくに後歯は痕跡すらも留めていない状況にある。

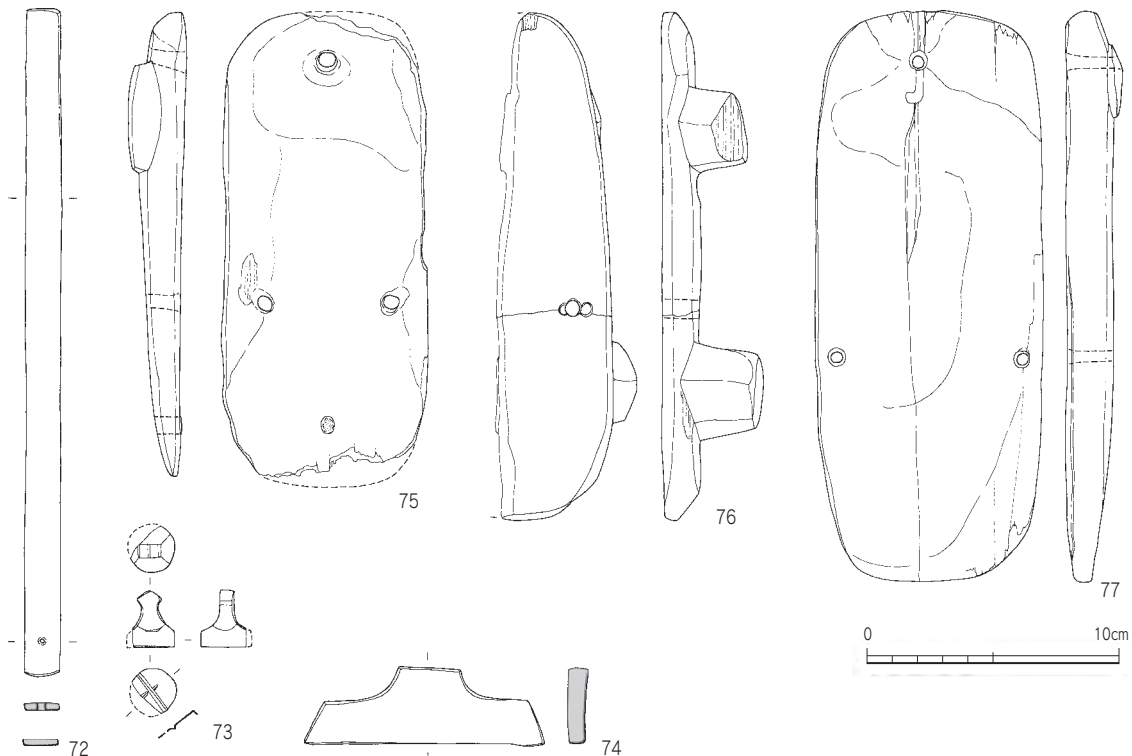


Fig.122 木製品実測図 (7) 奢侈品・履物 (1/3)

75の台尻には径0.6cmほどの木栓が差し込まれるが、用途は不明である。76は木目に沿った亀裂で半分を欠損する。歯は前後ともに摩滅するが、前歯の方がより摩滅する。歯の側面の調整を見ると、鋸挽で成形されているのが分かる。後方の鼻緒孔は直径0.6cmの錐で穿っている。孔の両脇に径0.4cmの三ツ目錐によると思われる円形の工具痕が残る。75・77は76次調査区のSD320中層の腐植土から出土した。76は14次調査区のSD320中層から出土した。

8) 祭祀具 (Fig.123・124, PL.32・33)

人形 (78~91) 人形は大きく3種類に分けられる。78~85は平面人形、86~88は立体人形、89~91は組合せ人形である。78は板の両側から抉りを入れて頭部を作り出し、片面に墨で眉、目、鼻、口を写實的に描いている。下半部は欠損している。79も78と同様に、板の両側からの抉りで頭を作り、片面に眉、目、鼻、口を表現している。口の下に顎髭らしき墨痕が認められるが、判然としない。下端部にも抉りを入れて足を作り出しているが、かなり短い。80は柾目材に両側から切り込みを入れて人形にしたものである。顔面は真直な側面に「V」字形の切り込みを入れ、口と鼻を表現する。とくに鼻は斜め上方に向かって大きく切り込みを入れる。両面に鼻と目を墨で描く。頭部は小刻みに削り、丸く作り出す。下半部では斜め下方に3個の切り込みを入れる。天地を逆にすると頭部と相似形の切り込みであり、頭部を作る際の仕損じの可能性もある。81~85は墨書が無く、左右からの抉りと端部の加工を用いて頭部のみを表現したものである。81と82は同形同大で、類似した形状となる。81は上端がやや円頭状で、82は圭頭状となる。下端はともに両側からの削りにより鋭角に尖る。83は上下端を

律令祭祀具
の出土

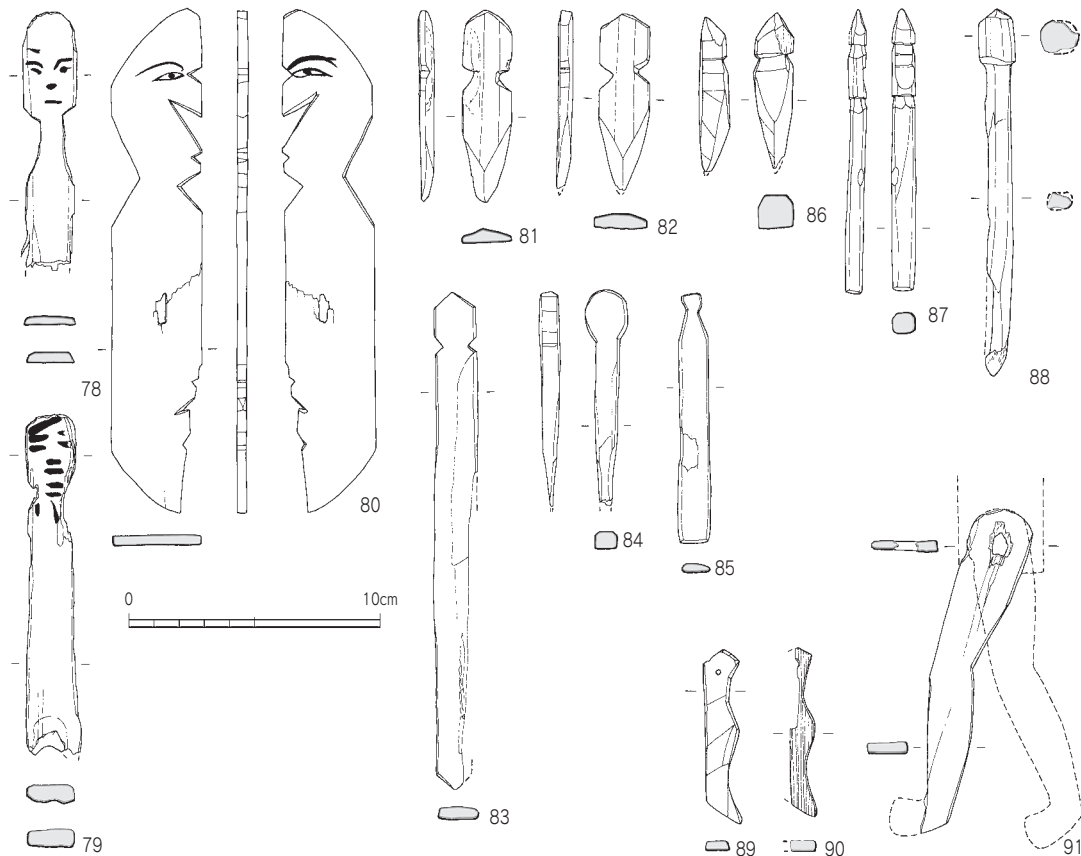


Fig.123 木製品実測図 (8) 祭祀具 (1/3)

圭頭状に削り出したもので、形態的には齋串と類似する。84・85は平面形態の類似から人形として分類したが、その形状は異質である。84は角材を加工したもので、上端のみを平面円頭状に削り出したものである。下端を四方から削り込んでおり、木釘の可能性もある。85も上端を平面円頭状に削り出すが、その大きさは小さい。表面を面取りし、全体的に丸みをもたせる。左右から切り込みを入れ、やや小さく円頭状に削り出す。86～88も墨書はなく、角材や枝材を立体的に加工して製作したものである。86は角材の正面観を意識して、上下左右と正面から削り出す。このため、裏面はとくに加工を施さず角材の平滑面をそのまま残す。これに対し、87は四方から加工しており、より立体的な造形となる。上側2箇所には抉りを下方から入れ、上端は四角錐状に削り出す。88も四方から加工を加えている。先端部分は二次的な焼成を受けている。89～91は組合せ人形の脚部の破片である。89は脚部の完形品で、短冊状の板材を加工して作っている。中央部分を山形に削り残しており、膝を表現したものの可能性が高いが、全体的に抽象的な造形となる。90は縦方向の亀裂により、約半分を欠損している。89と同形同大であることから、対となる部材である可能性が高い。それぞれの上端部にある円孔を用いて、胴体の部材を挟み込むように結合したと考えられる。91は89・90よりも一回り大きく、より写実的である。板片を削り、腿部から足先までを作るが、足先を欠損している。この際の削りの痕跡が板側片に残る。中央部付近から屈折させて、やや膝を折ったような状態に表現している。上端部は丸く削り出し、中心に胴部やもう一方の脚部と組み合わせるための円孔を穿つ。78・91は85次調査のS D2340下層、79は85次調査のS D2340上層、80は90次調査区のS D2340下層の腐植土、81・82・84・87は76次調査区のS D320下層腐植土、83は98次調査区のS D2340中層、85は14次調査区のS D320中層の腐植土、86は76次調査区のS D320最下層、88は76次調査区のS D2010の最下層、89・90は98次調査区のS D2340中層の腐植土から出土した。

齋串(92～104) 齋串は板材側縁の加工方法の違いで大きく3種類に分けられる。92～95は刻み目、96～101は切り込み、102～104は未加工となる。92は柾目材の板を加工したもので、両側縁に沿って鋸歯状の削り込みを入れている。頭部は圭頭状にかたどっている。厚みがあり、左右の抉りも大きいため、やや異質な印象を受けるが、基本的な属性は他の齋串と共通する。93は両側面にそれぞれ3つの浅い刻み目を入れる。表面は粗いケズリのままの状態を残す。94は木目に沿って縦方向に割れており、片側の6つの刻み目しか確認できない。表面は93と同様に粗いケズリ調整である。95は両側面にそれぞれ6つの浅い刻み目を持つ。表面は部分的に粗いケズリ痕を残す。

96～101は側縁に切り込みをもつ齋串であるが、96～99のように上方向からのみ切り込むものと、100・101のように上下二方向から切り込むものに細分できる。96は右側面の切り込み部分を欠損するが、左側面で上方向から3回の切り込みが確認できる。表裏面や側面は粗いケズリ調整で整えられ、頭部は圭頭状であるが、微妙に段を残す。97は切り込み部分の側縁がやや欠損するが、切り込み回数が比較的確認できる左側面では、上方向から4回の切り込みがある。表裏面は割載のままで、側面は粗いケズリ調整である。98も切り込み部分に欠損がみられる。左側面では上方向から5回の切り込みがなされる。端部を中心にケズリ調整がみられる。99は上端を鈍角の圭頭状に削り出し、その直下に上方向から1回の切り込みが入る。

下端は剣先状に尖らせる。100は上下方向の切り込みの間隔が狭い。両側縁は、それぞれ上方向からは3回、下方向からは2回の切り込みがある。表裏面は割載のままの状態、側面のみケズリ調整を加える。101は上半部を欠損し、下半部のみ残る。下方向からの切り込みが4回確認できる。側面に粗いケズリ調整がなされ、下端は剣先状に削る。102は板材側縁が若干欠損しており、両側縁に確実な加工痕が確認できない。形態的には96~101の切り込みを入れる斎串に類似する。103・104は厚さ1~3mmの薄い板材を加工したもので、残存範囲の側縁には加工が見られない。頭部は鋭角の圭頭状に加工し、下半は欠損する。92は85次調査区のS D 2340下層、93~100・104は14次調査区のS D 320下層の砂層、101は76次調査区のS D 320下層の腐植土、102・103は14次調査区のS D 320下層の腐植土からの出土である。

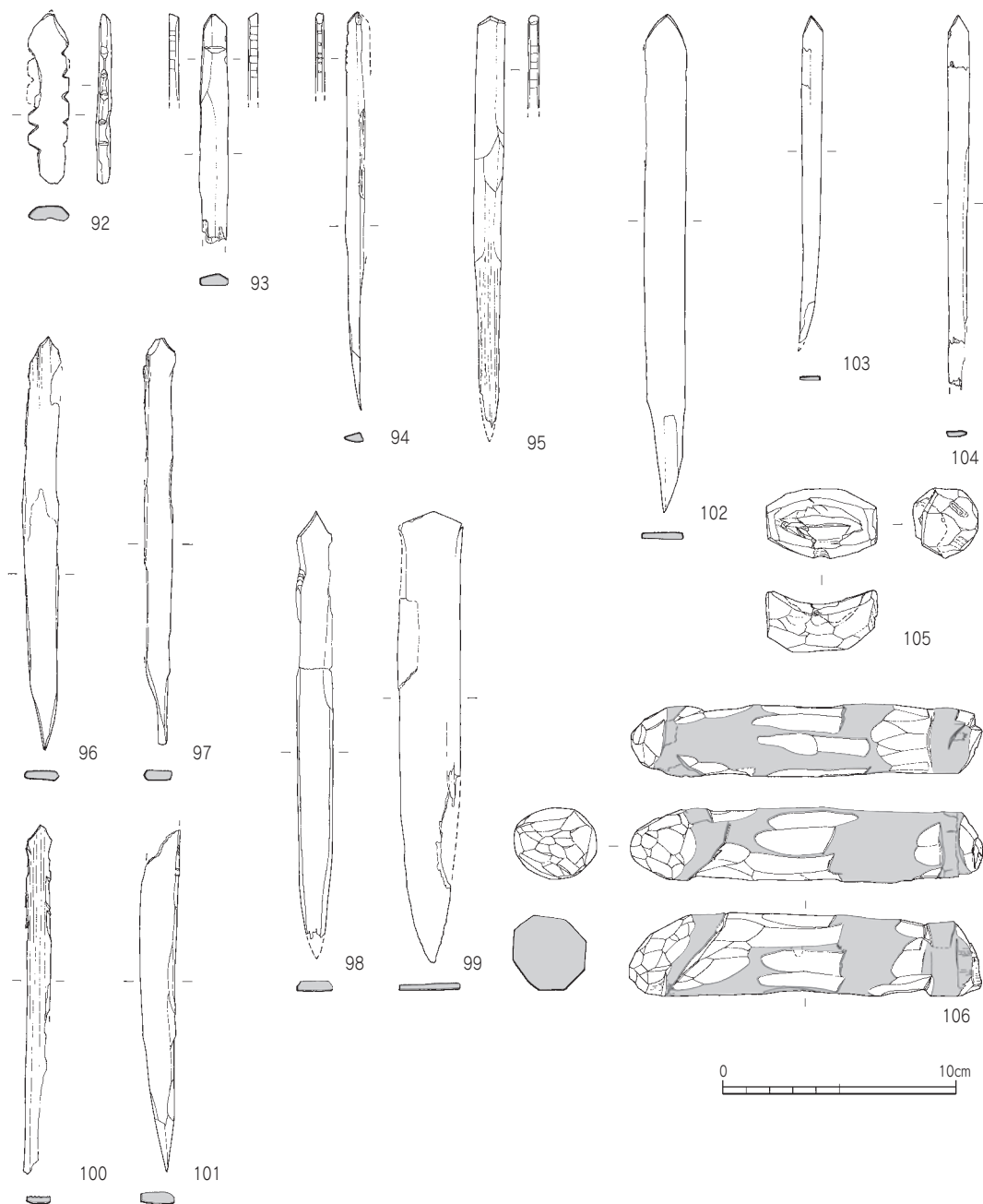


Fig.124 木製品実測図 (9) 祭祀具 (1/3)

船形（105） 角材を加工したもので、両端を直に切り落として外面を粗く削っている。外面は船底状を呈している。上面は内湾し、桃実状に削り貫いている。85次調査区のS D2340下層から出土した。

陽物形（106） 表皮が付いたままの枝材を加工したもので、一端を円錐状に丸く削る。先端部に近く側面から上面にかけて細い抉りを入れ、龟头状にする。末端は斜めに粗く削り落とし、末端部近くに抉りを入れる。中央部は粗く削る。削りを施していない部分には、全て樹皮が残る。76次調査区のS D320下層の黒茶色粘質土（腐植土D）から出土した。

9) 部材 (Fig.126, PL.34)

部材（121～130） 107は柁目薄板材を丁寧に削って整えたものである。一端を弧状に削

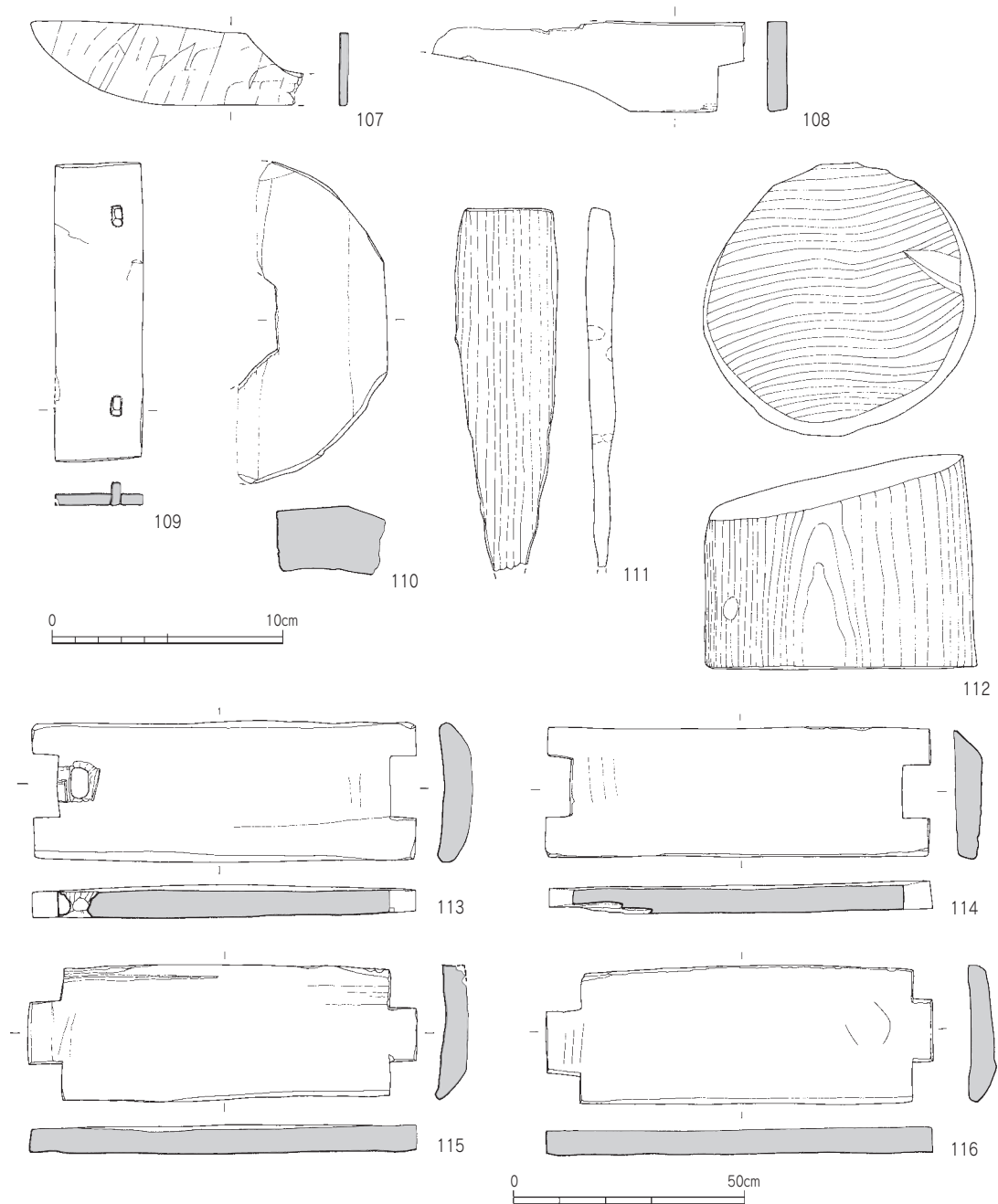


Fig.125 木製品実測図 (10) 部材 (1/3・1/15)

出して尖らせる。108も柾目薄板材を削って整えたものである。一方の側面に方形の抉りを入れる。109は方形の薄板に、高さ1.0cm、厚さ0.4cmの方形部材を差し込んでいる。他部材との結合に用いたと思われるが、完成品は不明である。110は厚い板材を手斧で粗くはつって加工している。中心部に孔を穿っているが、残存部からみて、六角形になると考えられる。111は先端部を剣先状に側縁から削り込んでいる。土留等に用いた可能性がある。112は直径約12cmの円柱状の木製品である。木目の状況から、大型の幹材を意図的に加工して、円柱状

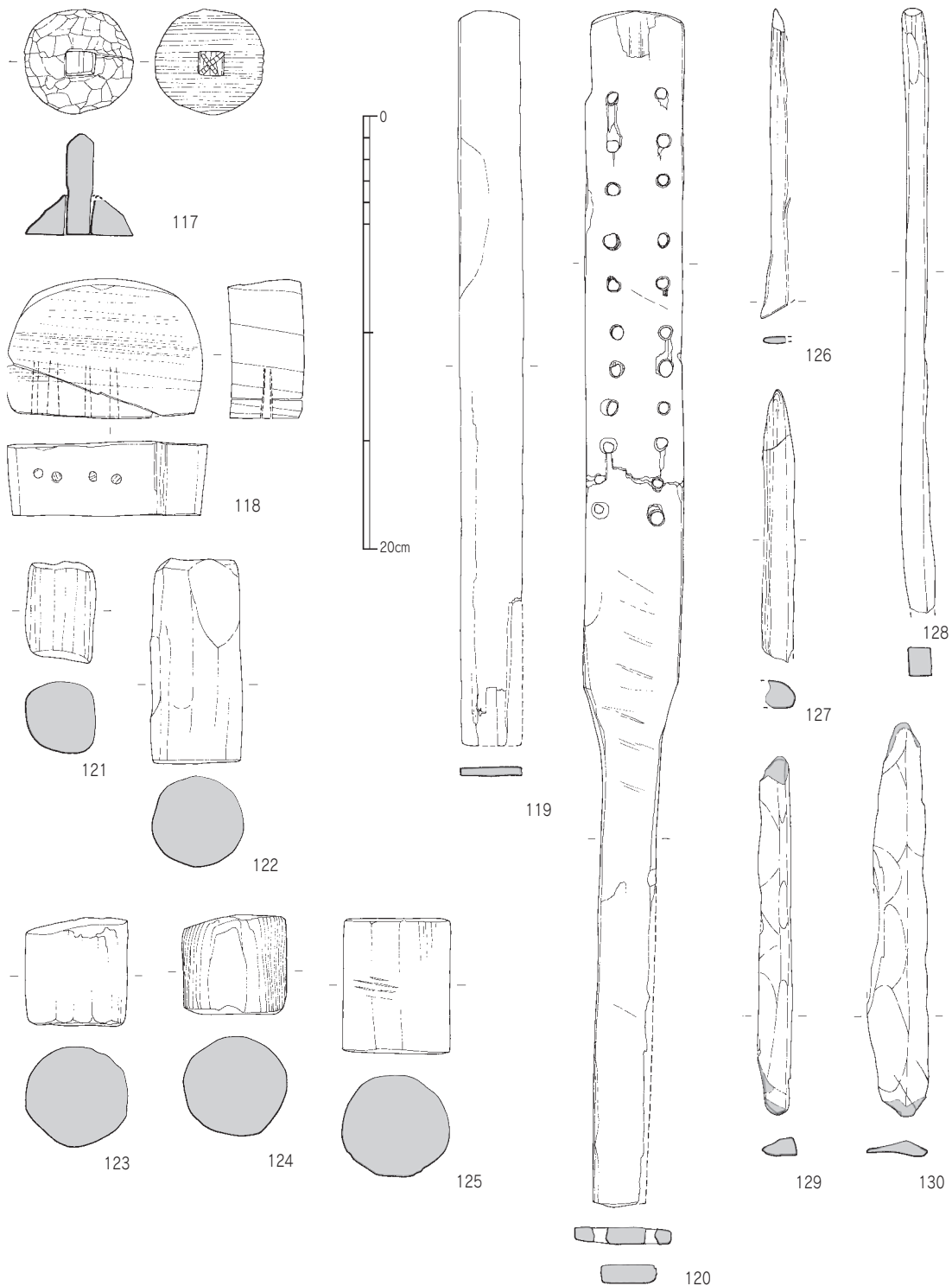


Fig.126 木製品実測図 (11) 用途不明品 (1/3)

にしていることが分かる。

113～116は87・90次調査区にあるS E2510最下段の井戸側の部材で、残存状況は良好である。部材全長約80cm、幅約30cm、厚さ約6cmで、4枚ともほぼ同じ法量の材である。隅の仕口は3枚組で、東西面の井戸側を出柄とする。各部材とも片面に樹木表面の自然面を一部残すため、木取りは木裏が内面にくるようにしている。木口面には鋸挽の痕跡があり、部材両面は手斧で削る。部材の一つには入柄の近くにノミで穿った孔がある。組合せの番付と考えられる刻線がみられる。組んだときの内法は約71cmの正方形となる。107は124次調査区のS D2340最下層、108は76次調査区のS D2011埋土、109・111は98次調査区のS D2340中層、110は14次調査区のS D320下層、112は85次調査区のS D2340下層から出土した。

10) 用途不明品 (Fig.125, PL.33)

用途不明品 (117～130) 117は印象形木製品である。円錐形部材の中央に1辺1.2cmの正方形の孔を穿ち、そこに頂部断面が圭頭形になる長さ4.7cmの棒を差し込んでいる。118は半月形木製品である。柁目良材を半円形にかたどった完形品である。周縁部は丁寧に削って、平滑に仕上げる。これに対し、両側面は裁断した鋸挽の痕跡を留める。途中で破損するが、木釘を打ち込んで修理している。木釘は底面から4本打ち込んでいる。119は短冊形木製品である。両面とも墨痕は認められない。120は有孔羽子板状木製品で、馬用のブラシとして用いられた可能性が高い。板目材を削って羽子板状に作る。片面は中央部を僅かに甲高にし、上端の木口は円頭形にしている。身には直径0.6cm前後の円孔を11対穿っているが、円孔の大きさは必ずしも揃っていない。一部には三ツ目錐を用いたとみられるような圈線が残る。柄は両側から弧状に削り込んで作っている。

121～125は円柱状木製品で毬杖に使用された可能性がある。側面はいずれも縦方向の削りで調整されており、意図的に円柱状に加工したのは明らかである。121は表面の腐食が進んでいる。122は片側をやや細めに削り、端部も斜め方向の削りを加えて角をとる。125の切断には鋸を用いたとみられる。側面には三ヶ所に刃物が斜め方向に当たった痕跡が残る。

126～130は先端部に燃焼痕跡があり、とくに129・130は両端が炭化している。いずれも自然の枝材が燃焼しているのではなく、表面に何らかの加工痕が認められる。もともとは、廃棄された木製品や加工の際に生じた不要材木であろうか。偶発的な燃焼の可能性もある。117は98次調査区のS D2340中層、118は124次調査区のS D2340最下層、119は90次調査区のS D2340中層、120・121・123～125・128は85次調査区のS D2340下層、122は124次調査区のS D2340下層、126・127・129は98次調査区のS D2340中層、130は98次調査区のS D2340下層からの出土である。

(4) 金属製品

1) 鉄製品

①武器 (Fig.127, PL.35)

鉄鏃(1～5) 1～3は二次的に被熱した長頸鏃の束である。かなりの高熱で被熱しており、鉄鏃自体が半溶解し、それぞれが溶着する状況にある。二次的な被熱のためか、錆による腐食はほぼなく、部分的に光沢すらみられるほど残りがよい。ただし、半溶解状態になった結果、鉄鏃自体が変形・膨張しているため、鉄鏃の形状を概ね留めながらも、「製品」としての鉄鏃本来の形状は細部では若干異なる。また、鉄鏃は刃部なら刃部、頸部なら頸部というように同じ部位付近で互いに溶着することから、軸を揃えて束ねられた状態で被熱する状況にある。矢柄等の有機質部材は燃焼により焼失する。このような特徴を持つ鉄鏃は、近年、不丁地区の北側にある蔵司丘陵周辺で膨大な量が出土している。1は大宰府史跡第14次調査区のSD320中層(黒色粘質土)から出土し、2・3は同じ第14次調査区のSE2503埋土から出土した。なお、昭和59年度概報では1以外にも、SD320中層から鉄鏃束が他に4点出土したとの記述がある。第14次調査区は、蔵司丘陵の南側に接する位置にあることから、1～3は蔵司丘陵周辺からの流れ込みや持ち込みの可能性が高い。

1は鉄鏃束の先端部分の破片である。上端部の一部と、下半部の大部分を欠損している。若干の軸のぶれはあるが、概ね軸を揃えた状態で複数個体がほぼ同じ部位で溶着する。束の中心部にある個体は溶解が進み、かつ断片的に溶着する個体も多い。このため、鉄鏃個体数の把握は難しいが、おおよそ25点が溶着する状況にある。刃部形式の大半は鑿箭式で、刃部先端まで残る確実な個体で6点確認できる。同じく刃部先端まで残る個体には、1点のみ片刃箭式が確認できる。いずれの刃部形式の個体も二次的な被熱により、刃部の研ぎ出しは消失している。鉄鏃断面の稜も大半が消失し、断面隅丸方形や円形となる事例が多い。僅かに稜を残す個体でも、鉄鏃自体の膨張により、稜の部分に縦状の亀裂を生じている。また、溶解が進んだ際に石英を主体とする砂粒を巻き込んだ結果、鉄鏃表面に砂粒が貫入する個体も認められる。色調は光沢のある暗青灰色で、黒味が強い。残存長6.2cmで、重量は102.9gを測る。2は鉄鏃束の篋被から刃部付近にかけた頸部を中心とする部位の破片である。大半の個体が上下端をそれぞれ欠損している。鉄鏃束の軸は大きく2方向に分かれ、おおよそ30度ほどのズレがあるが、いずれも頸部を中心とした部位の破片である。異なる鉄鏃束同士が溶着するというよりは、燃焼が進む過程で同じ鉄鏃束内でずり落ちた状態で溶着する。残存状況は1とおおむね同じだが、比較的原形を保つ個体が多く、約30個体が溶着する。1点のみ刃部先端まで残る個体があり、鑿箭式であるのが確認できる。確実に篋被形態が判別できる個体では、棘篋被が6点、閑篋被が1点含まれている。なお、1点のみ確認できる鑿箭式長頸鏃の篋被形態は棘篋被である。篋被から刃部先端までの長さは、9.4cmである。茎部先端まで残る個体もあるが、矢柄部分は完全に焼失しており、その痕跡は確認できない。茎部も含めた鉄鏃全長はおおよそ12.5cmに復元できる。いずれの個体も鉄鏃本来の形状を細部では消失しており、断面隅丸方形や円形に変形している。また、1と同様の砂粒の巻き込みがみられ、2はより面的に2mm前後の石英を主体とする砂粒が鉄鏃表面に貫入する。鉄鏃表面に砂粒が貫入する面では、鉄鏃が直線的に並ぶ状況にあり、地面や炉壁等の他物質と接していた可能性がある。推測される接地面の反対側

ではほぼ砂粒はみられず，かつ鉄鏃各個体の軸も比較的ズレが大きい。色調は光沢のある暗青灰色で，黒味が強い。残存長10.3cmで，重量は181.4gを測る。

3は鉄鏃束の頸部から茎部にかけての部位の破片である。いずれの個体も頸部上半部を欠損しており，刃部先端まで残る個体は認められない。鉄鏃束の軸は概ね揃っており，ほぼ同じ部

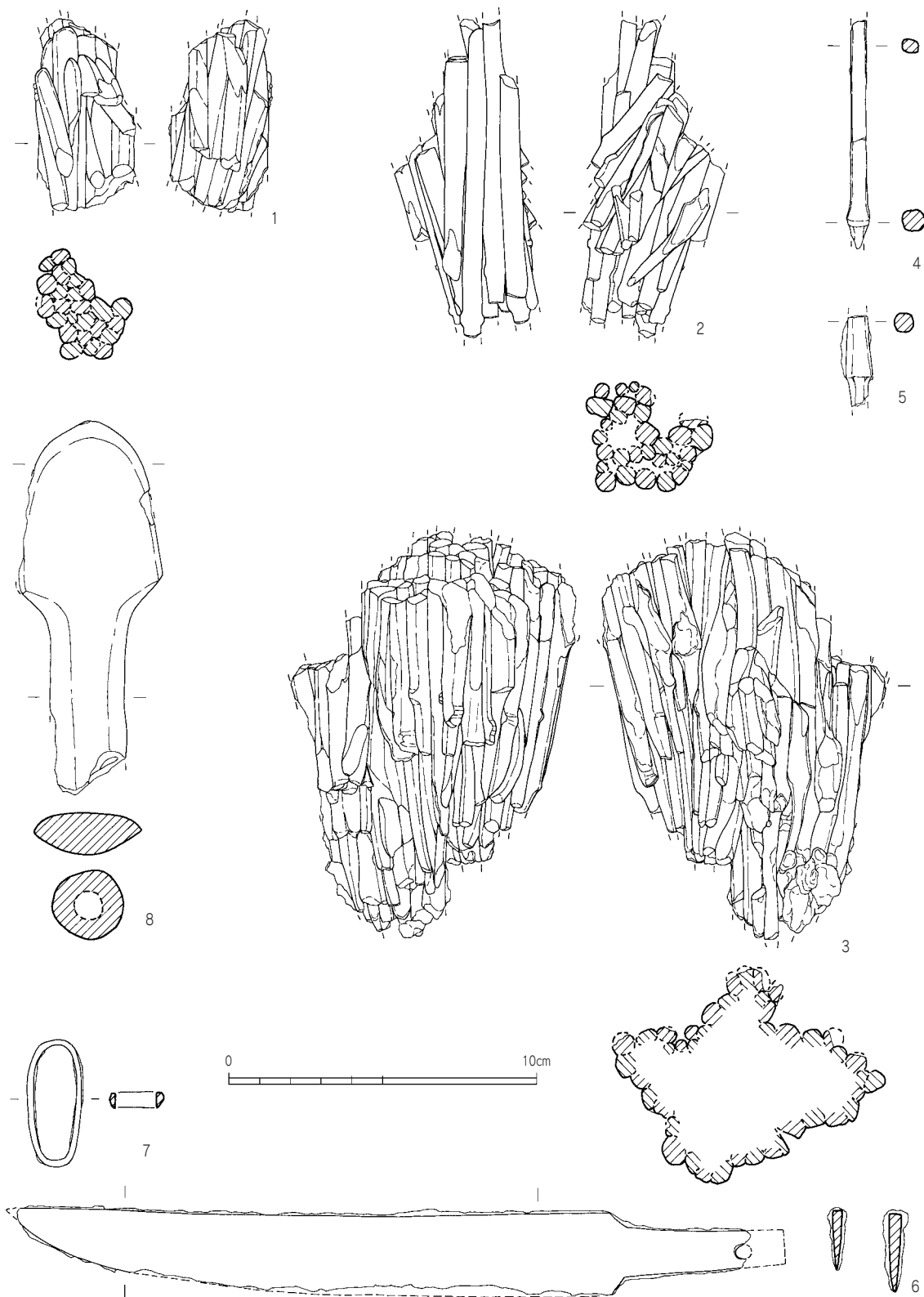


Fig.127 金属製品実測図 (1) (1/2)

位同士で溶着する。残存状況は1・2とほぼ同じで、比較的原形を保つ個体が多い。断片的に溶着する個体も含め、約90点が溶着する。確実に篋被形態が判別できる個体では、棘篋被が12点、関篋被が2点含まれている。茎部まで完存する個体が複数確認できるが、矢柄は完全に焼失している。茎部の長さは、最も長い個体で篋被から下端までが約5cmある。1・2と同様に、いずれの個体も鉄鍔本来の形状を細部では消失し、断面隅丸方形や円形に変形している。砂粒の貫入は若干あるが、その頻度は2に比べ著しく低い。色調は光沢のある暗青灰色で、黒味が強い。残存長13cmで、重量は791.9gを測る。4・5も鉄鍔の破片であるが、1～3のような二次的な被熱は受けていない。鉄鍔全体で錆化が進む一般的な埋蔵鉄製品と同じ遺存状態である。4は長頸鍔の頸部から茎部の破片で、遺存状態は良好である。刃部と茎部下半を欠損する。篋被形態は関篋被である。残存長7.4cmで、重量は3.7gを測る。85次調査区のSK2479から出土した。5は篋被付近の破片で、頸部と茎部の大部分を欠損する。篋被形態は関篋被である。残存長2.9cmで、重量は3.5gである。84次調査区の包含層から出土した。

鉄刀(6・7) 6は鉄製の小刀で、切先の先端を欠損する。腐蝕が進み刃部の残りはあまり良くないが、全体的な形状は比較的残されている。両関形態で明確な角度と段差をもって、茎部へと続く。茎部は目釘孔で欠損する。目釘孔の直径は約0.5cmである。残存長23.9cmで、刃部長は19.6cm前後に復元できる。鏹元で刃部幅2.2cm、棟幅0.4cmを測る。重量は71.8gである。7は鉄製の責金具である。残りは非常に良く、断面の細かな曲線まで観察できる。内面は鞘にあわせて直線をなす。責金具から予測される鞘の幅は3.7cmで、厚みは1.4cmである。責金具自体の全長は4.1cmで、重量は4.6gである。6・7はともに第84次調査区の床土下層の灰褐色土層から出土した。同一層位であるが、出土位置が離れるため別個体とみられる。

鉄矛(8) 8は鉄製の矛先である。柄との装着方法を重視して矛としたが、刃部幅が広く、形態的には槍に近い。錆の腐食が進んでおり、全体の形状を残すものの全体的に肥厚する状態にある。左側の刃部先端と右側の刃部先端の一部を欠損する。刃部の横断面は厚みのある凸レンズ状を呈し、腐食のため研ぎ出しの状況はよく分からない。明確な両関を経て刃部から茎部に至る。茎部はソケット状となり、柄を挿入して結合する形態である。茎部の下半は欠損し、目釘等の結合痕跡はみられない。第17次調査区の包含層下層から出土した。

②馬具 (Fig.128)

轡(9~11) 9・10は轡の破片で、ともに第17次調査区の包含層から出土した。出土位置も同じで、錆の状況も酷似することから、同一個体の破片とみられる。9は銜、もしくは引手部分の破片と考えられ、残存長4.5cmで、厚みはおおよそ1.1cmである。10は環状形轡の破片で、下半部を欠損する。11は第76次調査区の包含層から出土した。断片のため全体の形状は不明だが、曲線を描く形状から素環轡等の破片の可能性はある。

③工具 (Fig.128)

刀子(12) 刀子の茎部先端の破片で、錆により若干肥厚する状況にある。柄に由来するような木質等の付着はみられない。残存長は3.4cmである。茎部幅は1.5cmで、厚みは1.3cmである。重さは5.8gである。第129次調査区の包含層から出土した。

鋸(13) 鋸の刃部断片である。刃部先端に0.3~0.5cm間隔で、鋸歯がみられる。刃の表裏は錆の腐蝕が進んでいる。残存長4.2cm、残存幅3.0cmを測り、刃の厚みは最大0.7cmで

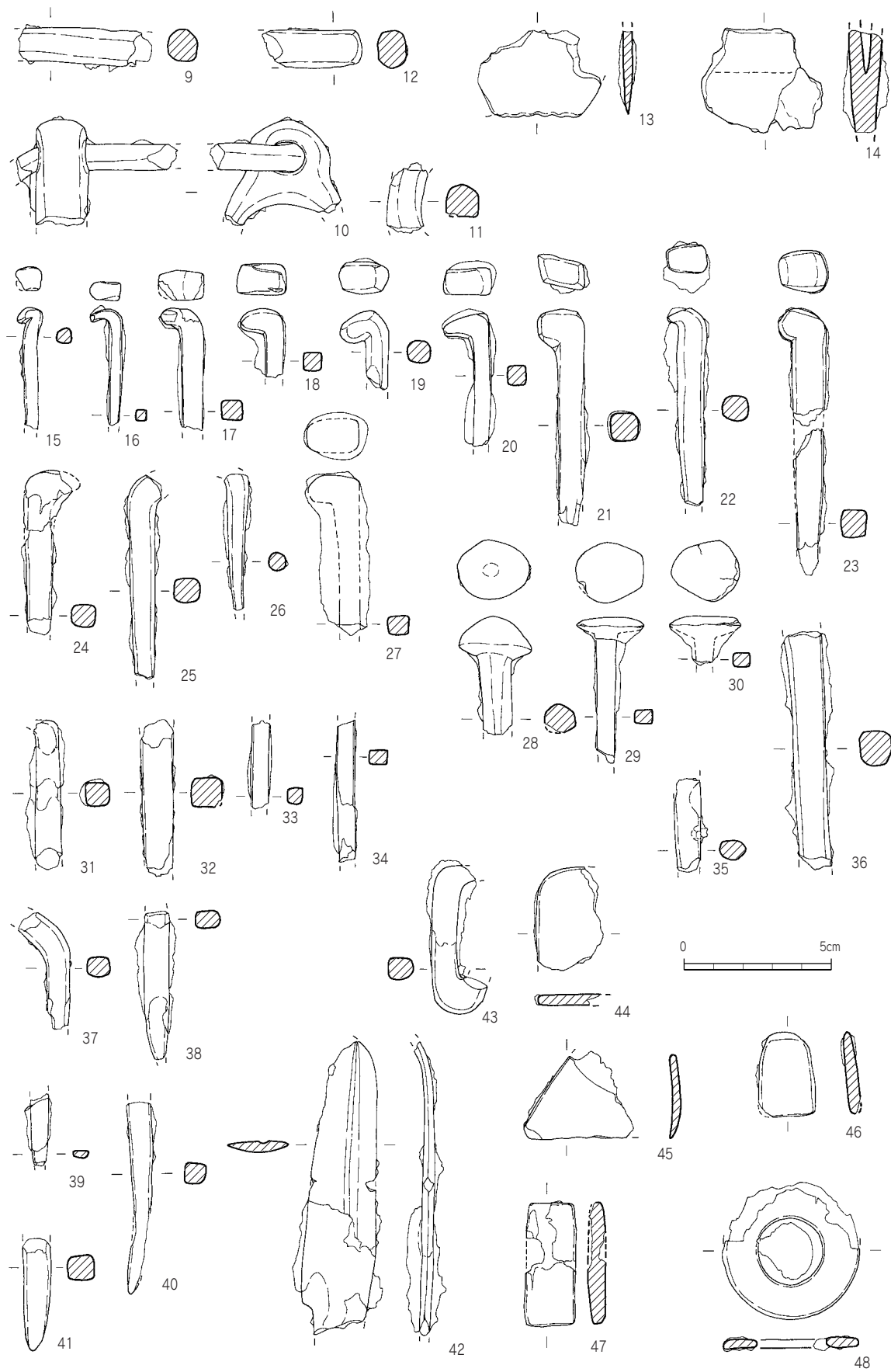


Fig.128 金属製品実測図 (2) (1/2)

ある。重さは7.9gである。第17次調査区の包含層から出土した。

④農具 (Fig.128)

鋤先 (14) 鋤先の刃部付近の断片である。僅かに袋状部分が残し、刃部先端は欠損する。錆膨れがひどく、資料の残りはあまり良くない。残存長は3.5cmで、重さは18.2gである。第147次調査区の包含層から出土した。

⑤建築部材 (Fig.128, PL.35)

鉄釘 (15~41) 15~27は釘頭部を片側に折り曲げる形態の鉄釘である。15は頭部と体部の先端を欠損する。土圧のためか、体部が屈曲している。頭部は強く曲線を描き、強く打ち込まれる状況にある。木質等は遺存していない。残存長4.1cmで重さは2.6gである。第14次調査区の包含層から出土した。16は体部の下端を欠損する。木質等は遺存していない。残存長4.1cmで重さは3.0gである。第187次調査区のSK4573から出土した。17は頭部の一部と体部下半を欠損する。木質等は遺存していない。残存長は4.2cmで、重さは5.7gである。第187次調査区のSB3815の掘り方埋土から出土した。18は頭部の破片である。体部の大半は欠損する。木質等は遺存していない。残存長は2.3cmで、重さは4.1gを測る。第187次調査の包含層から出土した。19も頭部の破片で、体部の大半を欠損する。木質等は遺存していない。残存長は2.8cmで、重さは3.2gである。第110次調査区のSD3220埋土から出土した。

20は頭部から体部上半にかけての破片である。体部の下半は欠損する。木質等は遺存していない。残存長は4.2cmで、重さは8.1gである。第187次調査区のSD4566埋土から出土した。21は頭部から体部にかけての破片で、下端部のみを欠損する。鉄釘を打ち込んだ際に歪んだためか、頭部がやや歪む。木質等は遺存していない。残存長は7.4cmで、重さは12.9gである。第85次調査区の包含層から出土した。22は頭部から体部にかけての破片で、下端部のみを欠損する。木質等は遺存していない。錆膨れにより表面の形状は歪であるが、錆の腐蝕自体はあまり進んでおらず、鉄本来の質感と重量感を残す。残存長は6.7cmで、重さは15.4gである。第14次調査区の包含層から出土した。23は頭部から体部にかけての破片である。2片に分かれているが、同一個体である。木質等は遺存していない。錆膨れにより全体的に肥厚する傾向にある。復元長は約10cmである。2片の重量をあわせて18.5gである。第187次調査区の包含層から出土した。

24は頭部から体部にかけての破片で、頭部の半分と体部下半を欠損する。木質等は遺存していない。残存長は5.7cmで、重さは8.7gである。第84次調査区の遺構面の上部に堆積する灰褐色土層から出土した。25は頭部から体部にかけての破片で、頭部先端と体部下端を欠損する。木質等は遺存していない。残存長は7.0cmで、重さは14.1gである。第17次調査区の床土内の攪乱土中から出土した。26は頭部から体部にかけての破片で、頭部先端と体部の下端を欠損する。木質等は遺存していない。残存長は4.1cmで、重さは3.9gである。第17次調査区の包含層から出土した。27は頭部から体部にかけての破片である。体部下半を欠損する。木質等は遺存していない。錆膨れにより、全体的に肥厚する傾向にある。残存長は5.6cmで、重さは20.0gである。

28~30は頭部が円頭形に成形された鉄釘である。28は頭頂部が山形に隆起し、29・30は頭頂部が扁平である。28は頭部から体部にかけての破片で、体部の下半を欠損する。頭部は

平面が歪な楕円形を呈し、断面が山形状となり、大型の鋳のような形状となる。全体的にやや錆膨れしている印象を受ける。残存長は4.1cmで、重さは12.4gである。第110次調査区のS D3220埋土から出土した。29は頭部から体部にかけての破片で、体部下半を欠損する。頭部は平面がやや歪な円形で、側面からみると扁平である。木質等は遺存していない。残存長は5.0cmで、重さは9.0gである。第187次調査区のS K4573埋土から出土した。30は頭部付近の破片で、体部の大部分を欠損する。29と同様の形態のもので、頭部は平面がやや歪な円形で、側面から見ると扁平である。木質等は遺存していない。残存長は1.6cmで、重さは4.1gである。第187次調査区のS D4570埋土から出土した。

31～41は鉄釘の体部の破片である。31は僅かに頭部付近の部位が残り、おそらく頭部を片側に折り曲げる形態の鉄釘であると考えられる。表面は全体的に錆膨れている。木質等は遺存していない。残存長は5.1cmで、重さは9.2gである。第84次調査区の遺構面上面に堆積する焼土層から出土した。32は頭部を完全に欠損している。表面は錆の腐蝕により、層状に剝離する部分が多く、木質等は遺存していない。残存長は5.1cmで、重さは10.8gである。第84次調査区の包含層から出土した。33・34は鉄鋸の頸部の可能性があるが、残存範囲では区別がつかない。33は上下端を欠損する。木質等は遺存していない。残存長は3.1cmで、重さは2.8gである。第187次調査区のS B4560の上面から出土した。34も上下端を欠損し、木質等は遺存していない。残存長は4.9cmで、重さは4.5gである。第187次調査区のS K457埋土から出土した。35も上下端を欠損する。木質等は遺存していない。残存長は3.2cmで、重さは3.5gである。第84次調査区の遺構面上面に堆積する茶褐色土層から出土した。

36は大型の鉄釘の体部片で、上下端を欠損する。表面は部分的に錆膨れが目立つ。木質等は遺存していない。残存長は8.1cmで、重さは22.4gである。第84次調査区の遺構面上面に堆積する灰褐色土層から出土した。37は鉄釘体部の破片で、大きく曲がっている。錆の腐蝕により、表面は層状に剝離する部分が多い。木質等は遺存していない。残存長は4.0cmで、重さは5.5gである。第147次調査区の包含層から出土した。38は鉄釘体部の破片で、上部を欠損する。下端部は僅かに欠けるものの、ほぼ完存している。木質等は遺存していない。残存長は5.1cmで、重さは8.6gである。第17次調査区の包含層から出土した。39は体部下端の破片と思われるが、断面が扁平なため刀子の茎部先端の可能性もある。木質は遺存していない。残存長は2.4cmで、重さは1.7gである。第17次調査区の包含層から出土した。40は頭部を欠損する体部の破片である。木質等は遺存していない。残存長は6.6cmで、重さは7.6gである。第17次調査区の床土から出土した。41は鉄釘体部下端の破片である。木質等は遺存していない。残存長は3.8cmで、重さは5.3gである。第147次調査区の遺構面上面に堆積する茶褐色土の下層から出土した。

⑥不明鉄製品 (Fig.128, PL.35)

不明鉄製品 (42～49) 42は両丸造の刃部の破片で、鉈の可能性もある。中央に溝状の掘り込みがあり、刃部は左右非対称である。刃部先端は屈曲するが、この屈曲は二次的なものと思われる。第147次調査区の遺構面上面に堆積する茶褐色土層で出土した。43は円環状に曲がる鉄製品で、鎖の一部材である可能性が高い。部分的に錆膨れが顕著に見られる。残存長は5.2cmで、重さは11.1gである。第84次調査区の遺構面上面に堆積する灰褐色土層から出土し

た。44は端部が曲線を描く扁平な鉄板で、用途は不明である。小札の可能性もあるため、X線透過で確認したが、穿孔はみられない。厚みは0.3cmとやや厚みがある。錆の腐蝕が層状に進むことから、鍛造品である。重さは6.5gである。第187次調査区のS K 4573埋土から出土した。45は平面三角形の薄い鉄板で、用途は不明である。中央部がやや湾曲する状態で遺存する。重さは5.9gである。44と同じS K 4573埋土出土品で、層状に剥離する腐蝕状態とともに質感も似ており、両者の共通性は高い。46は扁平な鉄片で、部分的に欠ける箇所もあるが、概ね完形品である。片側がやや円頭形となる。X線透過で穿孔の有無を確認したが、穿孔はみられなかった。全長2.9cmで、最大幅は2.0cmである。厚みは0.7cmで重さは4.4gである。用途は不明だが、木器等の楔のような用途も想定できる。第147次調査区の包含層から出土した。47も扁平な鉄片で、中央部を大きく欠損するが、全体の形状は把握できる。全長4.2cmで、最大幅は1.8cmである。厚みは0.6cmで重さは6.9gである。小型の鑿に類似した形状だが、打痕や刃部の研ぎ出しは認められない。46と同様に、木器等の楔のような用途も想定できる。第187次調査区の包含層から出土した。

48はドーナツ状の扁平な鉄製円盤で、用途は不明である。錆の腐蝕が層状に進むことから、鍛造品である。外径が約4.7cmで、内径が約2.2cmである。厚みは0.5cm程度で、重さは13.2gである。第76次調査区の包含層上層から出土した。49は鉄製鎖製品で、正確な用途は不明である。上部に直径0.9cmの孔を有する軸に、自在に回転する環を取り付け、その環に3条の鎖を垂下させる。その形態から、何からの物質を吊るす用途に用いるものと推測される。3条の鎖のうち、2条には下端に平面T字形を呈する金具を取り付けているが、1条は途中で欠損している。この平面T字形の金具の先端は長楕円形の輪となっている。3条の鎖は径0.6cmの輪をS字状に若干ひねり、それぞれ計5個の輪を繋いでいる。第14次調査区のS D 320中層から出土した。

2) 銅製品

①鏡 (Fig.129, PL.35)

銅鏡 (50) 多紐細文鏡の縁部分の破片である。不丁地区で出土した唯一の弥生時代の銅製品である。縁の断面は厚さ0.6cmで、丸く肥厚する形態である。鏡面は僅かにしか残らないが、厚さは0.2cmほどである。下端と右端の破損は比較的古く、経年変化による腐蝕がみられるが、上端の破損は比較的新しい。第83次調査区の石組溝S D 2335の埋土から出土した。

多紐細文鏡
の出土

②武器 (Fig.129, PL.35)

鞘金具 (51) 唐様大刀の心葉形鞘尻金具で、ほぼ完形品である。ただし、厚さが1mm以下と極めて薄く、土圧により大きく歪み、部分的に破損している。変形や破損により、本来の寸法と若干異なるが、全長は約2.0cmで、幅は約3.3cmである。肉眼観察では表面に鍍金や木製鞘の痕跡は見られない。第85次調査区の遺構面直上に堆積する茶褐色土層から出土した。

唐様大刀装
具の出土

③食膳具 (Fig.129, PL.35)

銅鉢 (52) 佐波里鉢の口縁部の破片である。表面は劣化が進み、残存状況はあまり良くない。内湾気味の器形で、口縁端部を肥厚させている。口縁端部は厚さ0.4cmである。胴部の厚みは0.2cmほどである。残存長1.5cmで、重さは3.3gである。第17次調査区の包含層から出

佐波里の
出土

土した。

銅箸 (53) 佐波里箸の破片である。残存状態は良好で、往時の表面の滑らかさを保っている。残存長9.7cmで上下端を欠損する。重さは10.2gである。第98次調査区のS X2480埋

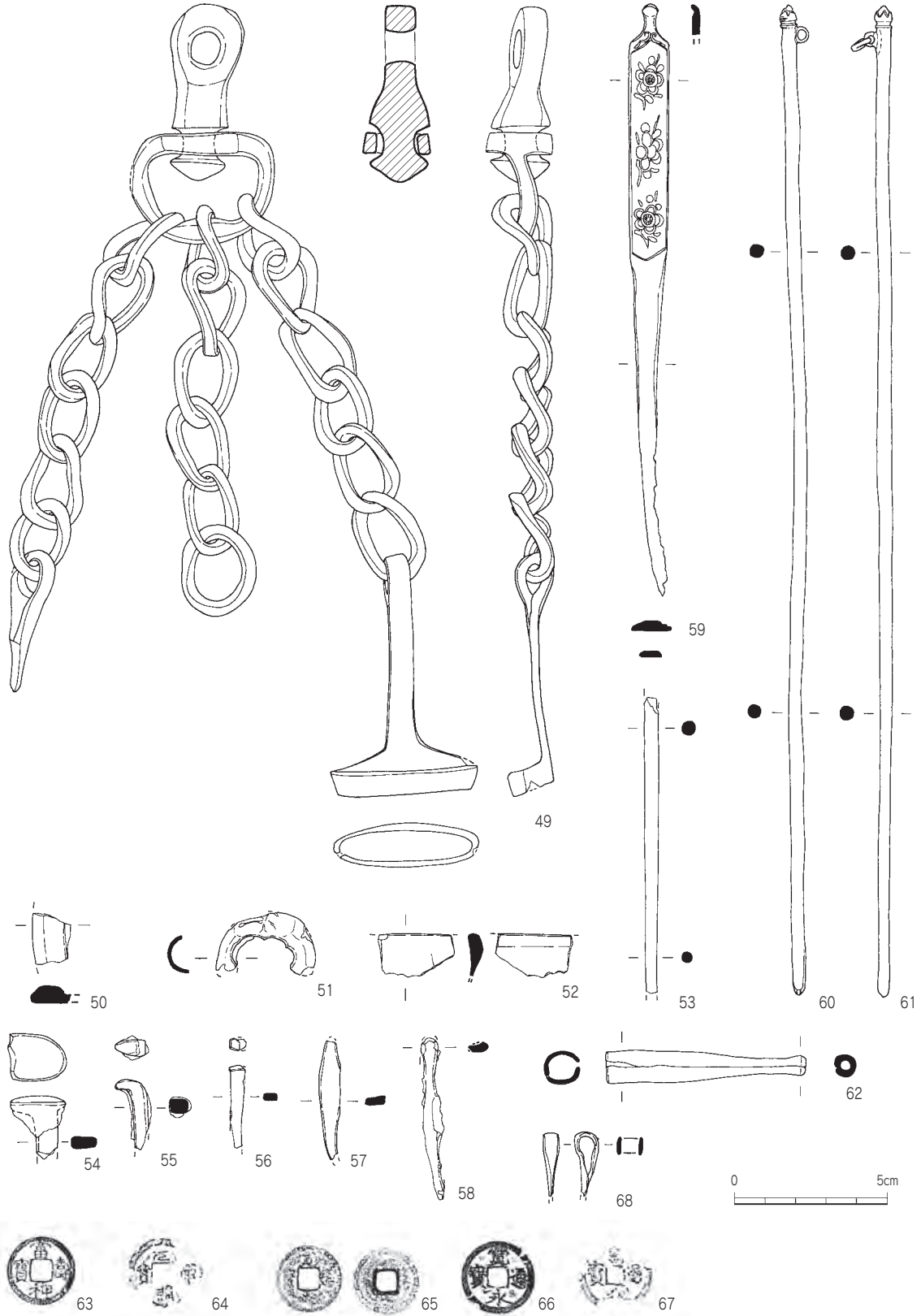


Fig.129 金属製品実測図 (3) (1/2)

土から出土した。

④建築部材 (Fig.129)

銅釘 (54~58) 54は頭部の平面形が歪な楕円形である。銅錆による腐食が進んでおり、錆膨れが目立つ。残存長2.0cmで、重さは6.2gである。187次調査区のS D4570B西端の中層から出土した。55は頭部が片側に下り曲がる形態で、残存長2.3cm、重さは2.2gである。銅錆により表面が剥離し、若干目減りしたような状態にある。83次調査区の包含層から出土した。56は直線的に伸びる形態で、銅錆の腐食があまりなく、金属質が良く残る。頭部には打痕がみられ、確実に打ち付けられている。残存長2.2cmで、重さは1.3gである。98次調査区の遺構面直上に堆積する暗褐色土から出土した。57は全体的に腐蝕が著しく、本来の形状をほとんど残していない。残存長3.9cmで、重さは2.9gである。84次調査区の遺構面直上に堆積する灰褐色土から出土した。58も腐蝕が進み、全体的に外表が剥がれたような状態で遺存している。本来の形状が比較的残るのは、頭部付近と体部下端のみである。残存長は5.3cmで、重さは5.1gである。85次調査区の遺構面上に堆積する焼土層から出土した。

⑤奢侈品 (Fig.129)

筭 (59) 梅の花の絵柄が目をひく筭で、ほぼ完存している。全長は19.2cmで、厚さ最大0.4cmである。第84次調査区の包含層から出土した。

火箸 (60・61) 金銅製の箸で同一形態、同一規格のものが2点出土した。食膳具としてはあまりに長い為、火箸としての用途が考えられる。全長はともに32.3cmで、直径は約0.5cmである。頭部は未開蓮花形を呈し、その下端には径0.5cmの鎖を通すための輪が付いている。61には鎖1個が遺存している。60・61の頭部には金箔も若干残っている。箸の下端はやや尖り気味である。60はS D320埋土、61はS D2011埋土からの出土である。出土遺構同士は切り合い関係にあり、近接した位置にあることから、60・61は本来的にセット関係にあったと考えられる。

煙管 (62) 真鍮製の煙管の吸口である。有機質部材は失われているが、吸口内部に僅かにその痕跡を残す。材質までは分からない。吸口端部を僅かに肥厚させる。全長6.5cmで、重さは10.4gである。84次調査区の床土から出土した。

⑥貨幣 (Fig.129, PL.35)

銅銭 (63~67) 63は「富壽神寶」で、弘仁九年(818)に鑄造された皇朝十二銭の一つである。大きさは垂直が2.26cm、水平が2.2cm、厚さが0.2cmである。76次調査区のS D2012埋土から出土した。64は「元符通寶」で、元符元年(1098)に鑄造された宋銭である。残りは悪く、破片の状態、85次調査区の床土から出土した。65~67は「寛永通寶」で、裏面は無文である。65は147次調査区の包含層、66は76次調査区の包含層、67は129次調査区の包含層から出土した。

富壽神寶

⑦不明銅製品 (Fig.129)

不明銅製品 (68) 細い板状の銅版を丸め、先端を尖らせる形態である。製品というよりは、部材の一つと考えられる。76次調査区のS D320中層から出土した。

(5) 土製品 (Fig.130~132, PL.36)

移動式竈(1~6) いずれも破片資料である。1は遺存部位から全体が推定復元できる資料で、復元高41.2cm、復元幅47.0cmである。土師質焼成で淡茶色を呈し、外面はハケ調整、内面はヘラケズリ調整し、廂部分はナデ調整後に一部ヘラケズリする。2は両側面に把手を有する資料で、内面は縦方向のケズリ、外面はハケ調整する。3~5はいずれも淡褐色~明褐色を呈する土師質の資料で、3は正面右上、4は正面左下、5は正面右下の破片である。いずれも調整は2と同じで、3は体部の内面と廂の正面側に多量の煤が付着する。6は、1~5と調整は共通するが、非常に硬質な土師質焼成である点が特徴である。廂は1・3に比べると小さく突帯状に貼り付けられる。茶褐色から暗茶褐色を呈する。

ミニチュア竈(7) 移動式竈を模した土師製ミニチュア製品で、187次SK4573より出土。破片資料であるが、復元される正面幅は11.4cm、高さは6.8cmである。本体部は横方向のナデ、正面の廂部分は縦方向のナデで仕上げる。胎土は粗く、色調は淡茶色を呈する。

土製人形(8) ミニチュアの人形の脚であるが、動物の脚のようである。体部との付け根で欠損し、付け根側が太く、脚先は少し外側に撮む。残存高は2.5cmで、淡褐色を呈する。

大和型土馬

土馬(9~12) いずれも大和型土馬で、9は須恵質、10~12は土師質である。9は10~12に比べて大型で、頸部から頭部にかけての破片である。径1.2cmほどの竹管文で目を表現し、頸の後ろを撮んでたてがみを表現する。耳は欠損する。破片ながらその大きさや形態は、大宰府史跡102次調査区(政庁後背地区)のSK2960から出土した須恵質の土馬に近いと考えられる。ただし、SK2960出土資料は成形時に軸棒が頭頂部にまで差し込むが、本資料は現状で軸棒を用いた形跡は見出せない。10は頭部片で、頸部に頭部を巻き付けて成形し、径5mmの竹管文で両目を表現する。頭部の側面観は三日月状を呈する。11は頸部付近の破片で、頸の後を撮み上げることでたてがみを表現する。鞍の存否は不明。12は胴部の後半から尾部にかけての破片で、足は外へ踏ん張り、尾は弧を描いて垂れる。鞍はないようである。

有孔円板(13) 上端に寄った位置に円孔が穿たれた円板で、土師器甕を転用したものである。側面はほぼ打ち欠いたままであるが、祭祀に用いられた有孔石製品と同じ用途であろうか。

ミニチュア土製品(14~17) いずれも土師質で、14は中心部にヘラを差し込んで粘土を抉り取った手捏ね品で、他の資料とはやや異質である。最大径5.5cm・高さ4.65cmである。15は小型で薄い椀状を呈する。復元径は3.0cm。16は厚手の坏状を呈し、径4.8cm・高さ1.9cmを測る。17は容器の底部片で、底径3.1cmを測る。どれも祭祀用であろうが、遺構との関係は不明確である。

土鈴(18) 土師質の小片であるが、胎土は極めて精良である。内面はナデ調整で、外面は非常に円滑であることから、型押しによる成形と推定される。外面に1条の沈線が巡る。

軒丸瓦の
転用品

紡錘車(19~23) 19・20は瓦転用、21・22は土製、23は土器転用である。19は軒丸瓦を転用したもので瓦当部の下半に相当するが、瓦当面は欠損と磨滅で瓦型式は不明である。ただし、顎の裏面に低い高まりが巡ることから老司式の系統の軒丸瓦を転用している可能性がある。中房部分を両面側から削り抜いて円孔を設けている。20は平瓦を転用したもので、凸面は縄目のナデ消し、凹面は布目が残る。側面は丁寧に研磨し、円孔は両側から穿つ。直径は7.6cm、厚さは2.5cmである。21は土師質で、径4.1cm・厚さ1.25cmを測る。22は半球状

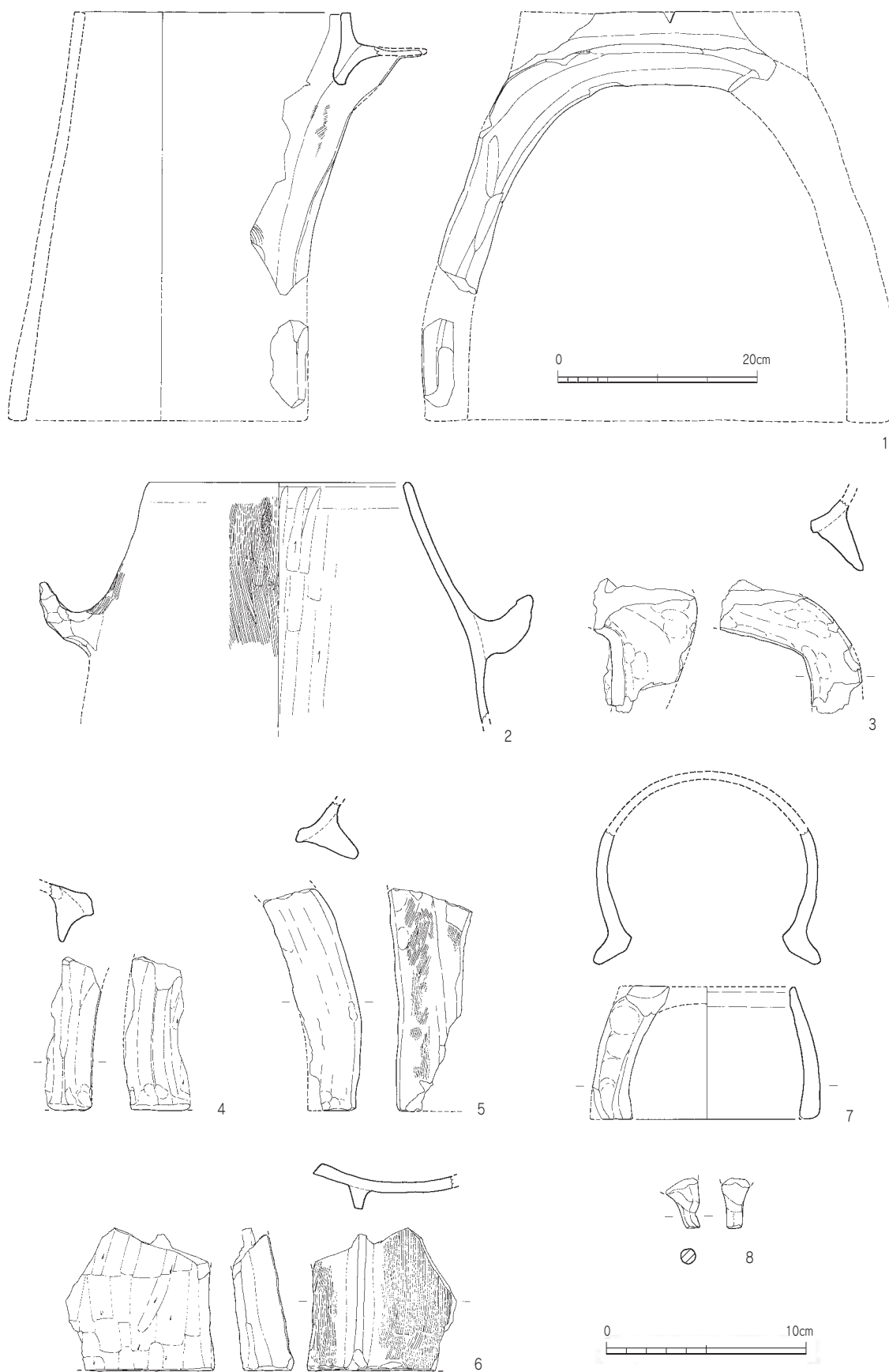


Fig.130 土製品実測図 (1) (1/3・1/6)

になる形態の紡錘車とみられ、若干還元気味であるが焼成は甘い。23は土師器甕の転用か。中央に径3mmの円孔を上面側から穿った際に、下面に大きな剥離が生じている。径5.2cm。

土錘(24~34) 30が須恵質である他は、全て土師質である。長さからは5cmを境に小型と大型に大別できるが、とくに大型では細身のものゝ太いものの2種があり、棒状とエンタシス状の違いもあり、その分類については他の遺跡出土の資料も含め検討する必要がある。概ね完形品であるが、30・32は下半部を欠損する。

土錘状土製品(35~37) いずれも真っ直ぐな円柱状を呈し、上記の土錘に比べて丁寧な調整である。上下端とも欠損しているため、全長は不明であるが、37は残存長8.0cmを測るので10cmあるいはそれを超えるものと考えられる。土錘としての確証がないため、土錘状土製品とした。

円板状土製品(38~67) 38~61は瓦転用、62・63は須恵器転用、64~67は土師器転用である。瓦転用のものは掲載していない資料も含めて通覧すると、径2cm程度、径3~4cm程度、径6cm以上に区分できる。ただし、径2cm程度の資料の多くは丸みを帯びて、瓦玉という表現が適している。凸面は38~40・43・48・53が縄目、46・47が格子目で、その他はナデ調整か磨滅している。ナデ調整のものは縄目と推定されるものが多い。凹面は磨滅しているもの以外は全て布目の痕跡が残る。側面はきれいに磨いて整えているものもあるが、打ち欠いたままのものも多い。38は凹面に布目とともに糸切り痕が残る。39は粘土板接合痕跡(Z型)のある模骨桶作りの平瓦で、右側面の一部が残り、ヘラケズリで3面の面取りがある。61は147次出土で『大宰府史跡平成5年度発掘調査概報』では瓦の周縁部を削ったものとされるが、他の瓦転用品とは厚さが全く異なり、焼成が少し甘い須恵器の範疇で捉えるべきか。径2.0cm、厚さ0.8cmを測る。62は須恵器蓋を転用したもので、側面を打ち欠いて整形する。全体的に摩耗がみられS D 320中層砂層出土なのでローリングを受けたのであろう。径4.8cm。

55~59は土師器で、65が高坏の転用である以外はいずれも甕の転用である。63・67の外面には煤が付着しており、甕としての使用痕跡が残る。側面はいずれも打ち欠きの後に研磨している。直径は65が6.5cm、67が5.9cmを測り、64は5cm程度になろうか。66は8cmを超えるとみられ、とくに法量の上での傾向は見出せない。

立方体状土製品(68) 一辺が4.4cmほどのやや不整形な立方体の土製品である。各面ともナデ調整で仕上げられ、とくに目立つ特徴はない。

棒状土製品(69~71) 69・70はともに土師製で、69が完形品で、70はさらに上下にのびる。69は端面を少し窪ませ、両端が少し太くなる。長さ3.4cm・径1.3cmである。70は縦方向に長いナデ調整で仕上げているが、元の全形は不明である。71は焼成前に軒平瓦の側面を切り落としたもので、断面三角形を呈し、元の凸面に縄目、凹面に布目が残る。

円板状土器(72) 一見高台を有する土師器坏の破片に見えるが、体部を接合した痕跡がなく、端部が丸く納められていることから、台付きの円盤状土器とした。高台の接合方法や調整などは通有の土器と同じである。復元される高台径は13.4cmである。

不明土製品(73・74) 73は土師質で、本来上面が窪む円盤状になるもので、推定される直径は6cmほどか。上面は指オサエ、下面はナデ仕上げによる。天地が逆になる可能性も否定できない。74は平瓦を転用したもので、破面の一部を再調整している。工具によってギザ

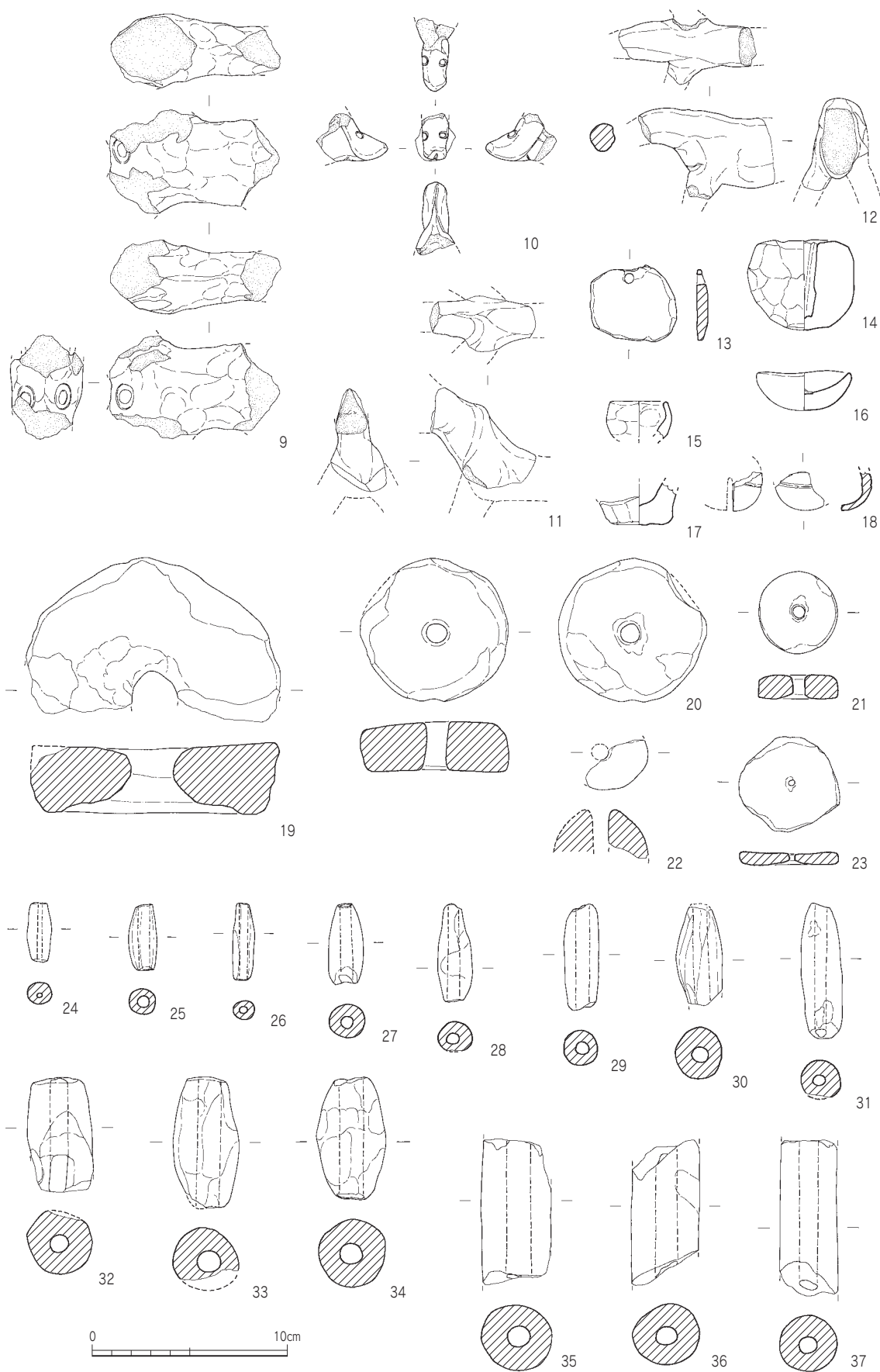


Fig.131 土製品実測図 (2) (1/3)

ギザになった側面もあるが、その要因については不明である。土師質で、凸面はナデ調整、凹面は粗い布目が残る。

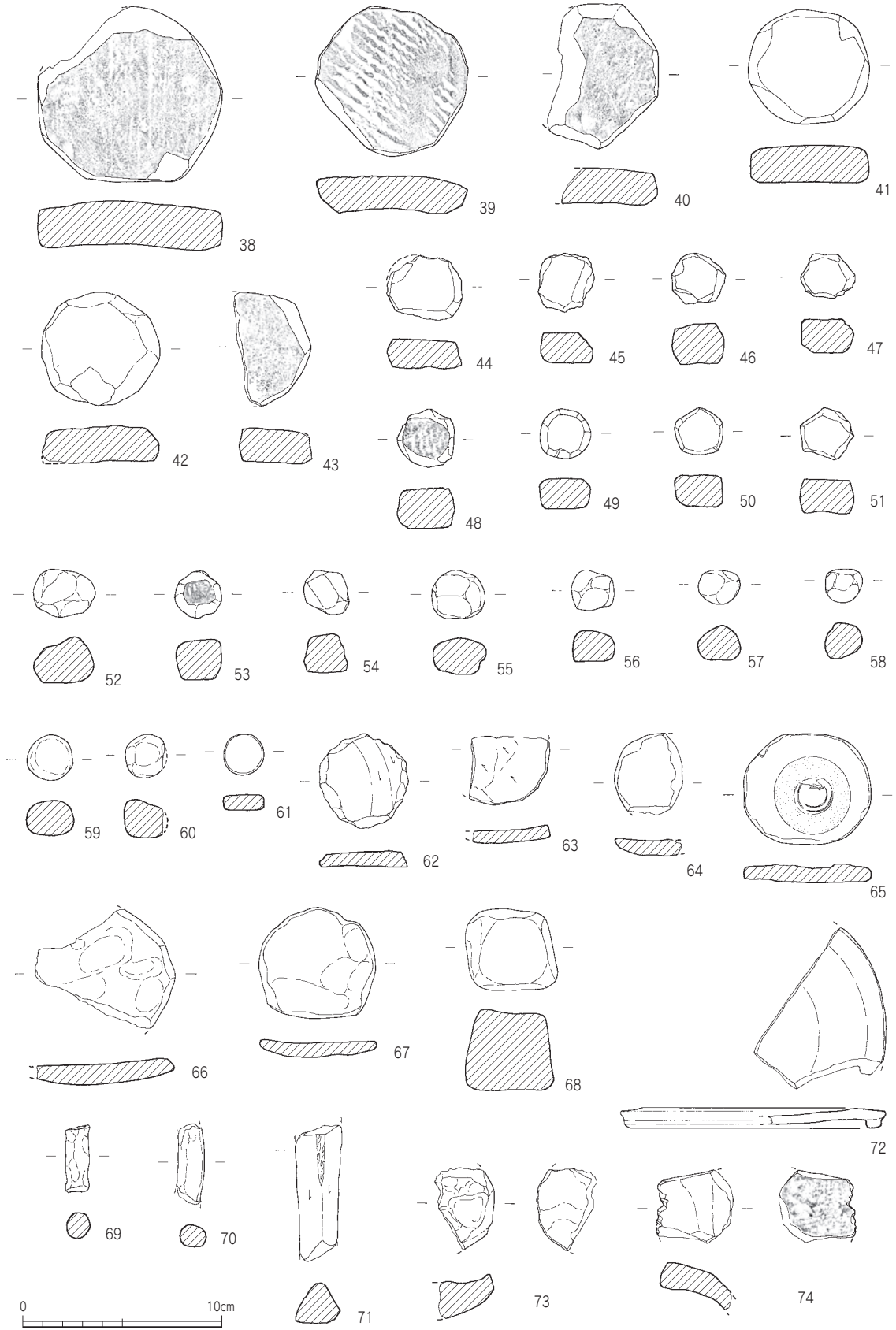


Fig.132 土製品実測図 (3) (1/3)

(6) 石製品

1) 滑石製品

①滑石製容器 (Fig.133, PL.36)

石鍋 (1~7) 1~7は方形把手を持つ、滑石製石鍋でA群に属する。1は正方形に近い方形把手を4ヶ所持ち、体部下半に丸みを持ちながら、口縁部へは直線的に立ち上がる。外面体部と底部の調整の一部は平ノミによる横位のケズリで、外底部は横・縦位のケズリ。内面には横位の線状痕が多数ある。A-2群で復元口径23.5cm、器高11.5cmを測る。14次補足SD320中層腐植土出土。2の器壁は均一の厚さで、口縁部を多少面取りしている。調整痕は細く短冊状となる。14次補足SD320上層・砂質土出土。3は口縁部がやや内傾し、口縁端部付近では器壁が薄い。14次補足SD320上層・粘質土出土。4は体部から口縁部にかけて内傾し、口縁部が肥厚する。内面には斜位の調整痕がある。14次補足SD320中層・黒色粘質土出土。5は体部下位に縦位のケズリ。14次SD320灰砂出土。6は方形把手の一部が欠損する。76次地点不明。7は方形把手の上端部を平坦にする。76次暗灰土B出土。

方形把手の
A 群

鉢等 (8・9) 滑石製鉢片。石鍋転用品の可能性も考えられるが、明確な端部と円形で口縁端部を丁寧に作出する器形から、鉢と理解できる。76次SD320下層腐植土を切る砂層堆積より出土。9は滑石製の器の平底となる底部片。内面に丁寧に同心円のケズリ痕跡を確認することができる。187次黒色土出土。

平底の底部

②滑石製転用品 (Fig.133)

短冊状石製品 (10・11) 石鍋体部を再加工した短冊状石製品で、上部に一箇所穿孔する。下半を欠損している。83次補足灰褐色より出土。11は石鍋の体部片の外面を一部加工したものの。短冊状石製品の未成品とみられる。14次補足SD320中層・黒色粘質土出土。

スタンプ状石製品 (12) 石鍋B群の鏝を取り込んで加工する。ただし、右側面をさらに加工しており、平面半月状になる。147-2次茶褐色より出土。

B群の鏝を
使 用

その他石製品 (13~18) 13はA群大型石鍋片の方形把手を取り込んだスタンプ状石製品、あるいは榿状石製品の未成品とみられる。76次SD320灰色砂礫層出土。14は平面方形に薄く削り出し、中央部に円形の突出部を持つ。形状からスタンプ形石製品、あるいは紅皿等の小型容器の可能性もある。98次出土地点不明。15は紡錘車などの用途が考えられる環状石製品。直径3.3cm、厚1cm程度である。110次灰褐色土出土。16はB群石鍋の鏝を再加工したもの。一部紐を通すための穿孔がみられることから石錘の可能性もある。187次黄灰色土出土。17は用途不明石製品で下半を1cm程度平面方形に削り出し、かつ先端部を薄く鋭く仕上げる。方形部に別の道具をかませてノミ状に使用した可能性がある。76次床土出土。18は方形状に加工し、表面に2条の線状痕が入るが用途は不明。187次黄灰色土出土。

2) 砥石 (Fig.134・135, PL.37)

1~10は14次・同補足調査資料。1は断面凸レンズ状となる石笄の転用品。表面に砥面がある。片岩製。2は多面体で複数箇所に半円状の砥面が多い。砂岩製。3は半損しているが、4面の砥面を持つ石英斑岩製。4は両端を大きく欠損する。粘板岩製で表面には縦位の線状痕が走る。5は石英斑岩製で黄色の層状節理がみえる天草砥石系。6は板状の素材を利用して両

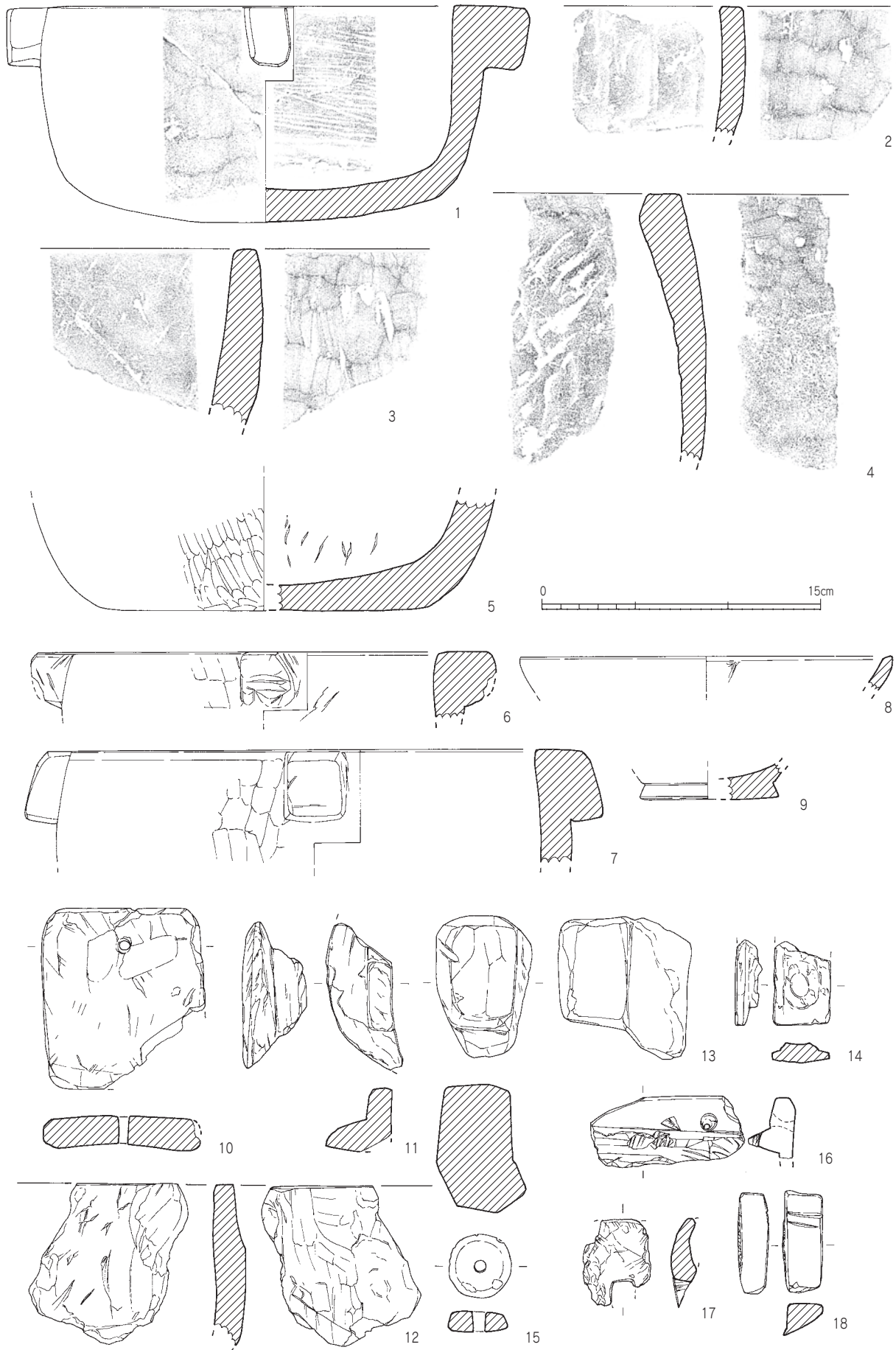


Fig.133 滑石製品実測図 (1/3)

面や側面、端部に砥面を持つ。表面には深く溝状となる数条の線条痕が走る。硬質砂岩製。7は4面に平滑な砥面を持ち、表面には縦位の鋭い線条痕が走る。平面と側面に煤付着。硬質砂岩製。8は茶臼転用品で平滑な摺面を利用して砥面としている。「関門層群」にみられる赤色頁岩系の石材を使用。S D 320中層・粗砂出土。1414.3 g。9は丸みを持った断面形状で両面に砥面がある。10の砥石は丸みを持つ。硬質砂岩製。

茶臼転用品

11は17次調査出土資料。板状で3面に砥面がある仕上げ砥石で石英斑岩製。第1整地上層出土。12は凸レンズ状となり丸みを持った砥面から手持ち砥石とみられる片岩製。13～20は76次調査資料。13は方柱状の安山岩製で砥面が4面ある。14は裏面を大きく欠損する。表面と端面に砥面がある片岩製。15は砥面が4～5面あり、端部には敲打痕が一部認められる。硬質砂岩製。16は厚い板状で4面の砥面を持つ大型品。表面のあばた状の痕跡は砥面に切られ成因は不明。S D 320下層腐植土出土。硬質砂岩製で重さ2202.8 g。17は方形状を呈した硬質砂岩製で、4面に砥面を持つ。18は粘板岩製。19・20は小型の石英斑岩製。

21～24は84次調査資料。21・22は端部に丸みを持ちながら、表裏・側面に砥面がある。21は粘板岩製で調査区S D 2419南の焼土中出土。23は厚い方形体で砥面を4面持つ。石英粗面岩製。24は板状形態の硬質砂岩製で表面は平滑である。2条の深く鋭い線条痕が走る。

25～27は85次調査出土。25は不定形の多面体で砥面が3面ある。一部赤化した面があるが、要因は不明。流紋岩製。26は板状素材で石英斑岩製の砥石。27は丸みを持った上端部側面にも砥面があり、線条痕が上下に走る。硬質砂岩製。28・29は87・90次調査出土資料。28は一面に平滑な砥面を持つが周囲の面に切られており、何らかの要因で破砕している。安山岩製でS D 2340青灰色砂質土出土。29は板状素材の上端部付近に2ヶ所穿孔している。砂岩系でS D 2340中層・青灰色粘質土出土。

S D 2340
出 土

30～35は98次調査資料。30は大きく破損しているが、本来は方柱状の形態であった可能性が高い。粘板岩製。31は複数の砥面を持つが、破砕後の使用痕跡はない。30・31共にS X 2480出土。32は緻密な硬質砂岩製で4面の平滑な砥面を持つ。表面には細い線条痕が数条走る。S D 2340中層・黒色土出土。33は裏面を破損するが一部砥面がある。石英斑岩製でS D 2340上層出土。34は平滑な一面以外は丸みを持った砥面で、手持ち砥石として使用されたのであろう。35は泥岩製の仕上げ砥石で暗褐色土出土。

S X 2480
出 土

36は104次調査出土。片岩製。37～39は129次調査出土。37は薄手の板状で表面に僅かに線条痕がみえる泥岩製。S X 3830出土。38裏面には凹凸があり他面と使用頻度に差がある。硬質砂岩製。39は砂岩製。表面には深い線条痕がある重さ613.4 g。

40～43は147次調査出土資料。40は石英斑岩製の板状素材を使用。41は片岩の節理を利用した板状の形態で表裏に砥面を持つ。42は砂岩製で表面に丸みを持つ砥面の形態から手持ち砥石か。43は表面と両端部が丸みを持ち両側縁が平行する。別用途の可能性もある。片岩製。

節理を利用

44～47は187次調査出土資料。44は方形体で各砥面は平滑だが、一面のみ線条痕が深く鋭く入る。石英斑岩製で、肉眼で観る限り天草砥石系である。45は棒状形態で3面に砥面があるが、両側の砥面は破砕剥離面に切られる。また表面には刺突状の痕跡が多数ある。砂岩製。46の表面には、比較的幅広の溝状の痕跡がある。47は表裏面が接した砥面を持つ。赤色泥岩製。

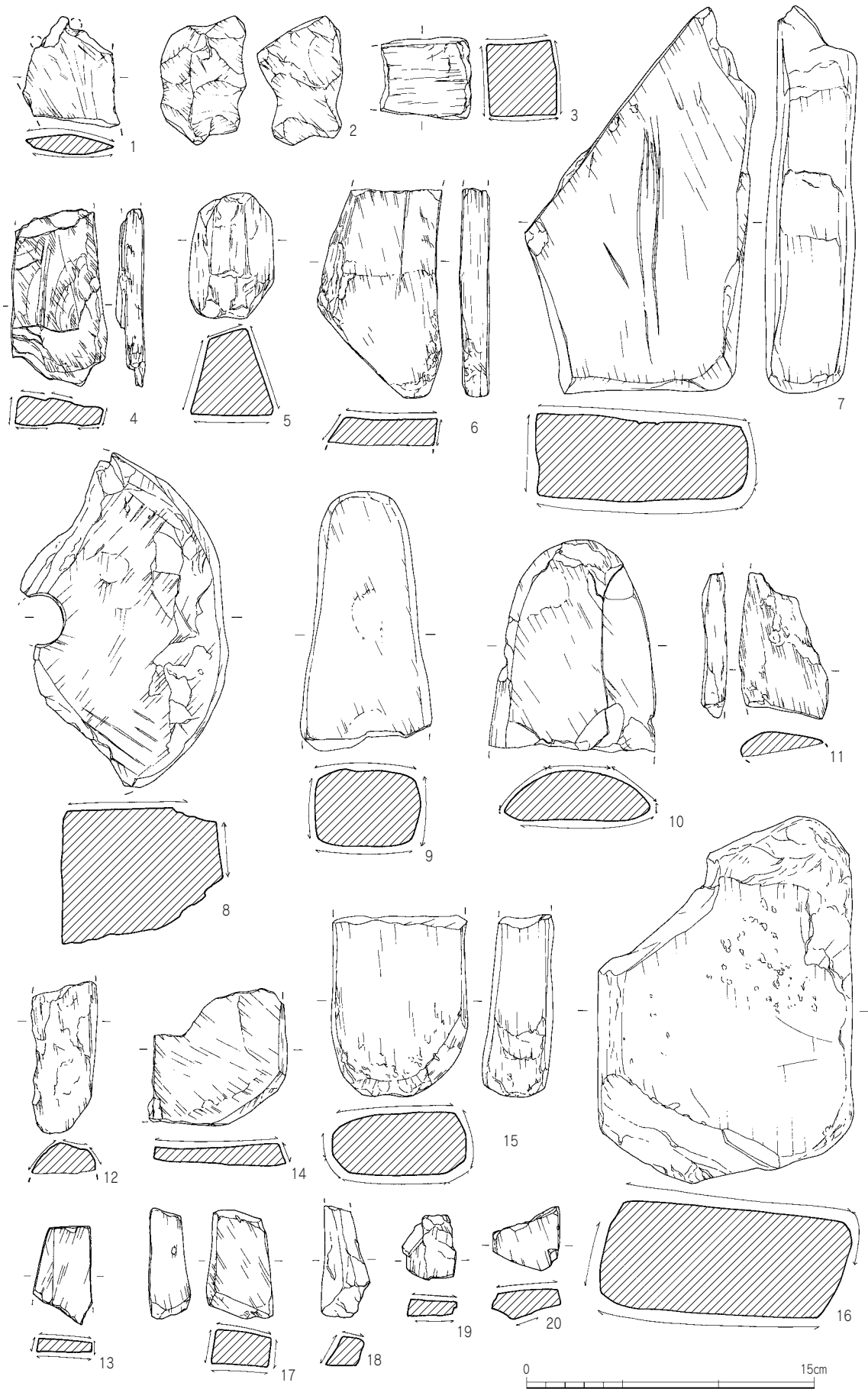


Fig.134 砥石実測図 (1) (1/3)



Fig.135 砥石実測図 (2) (1/3)

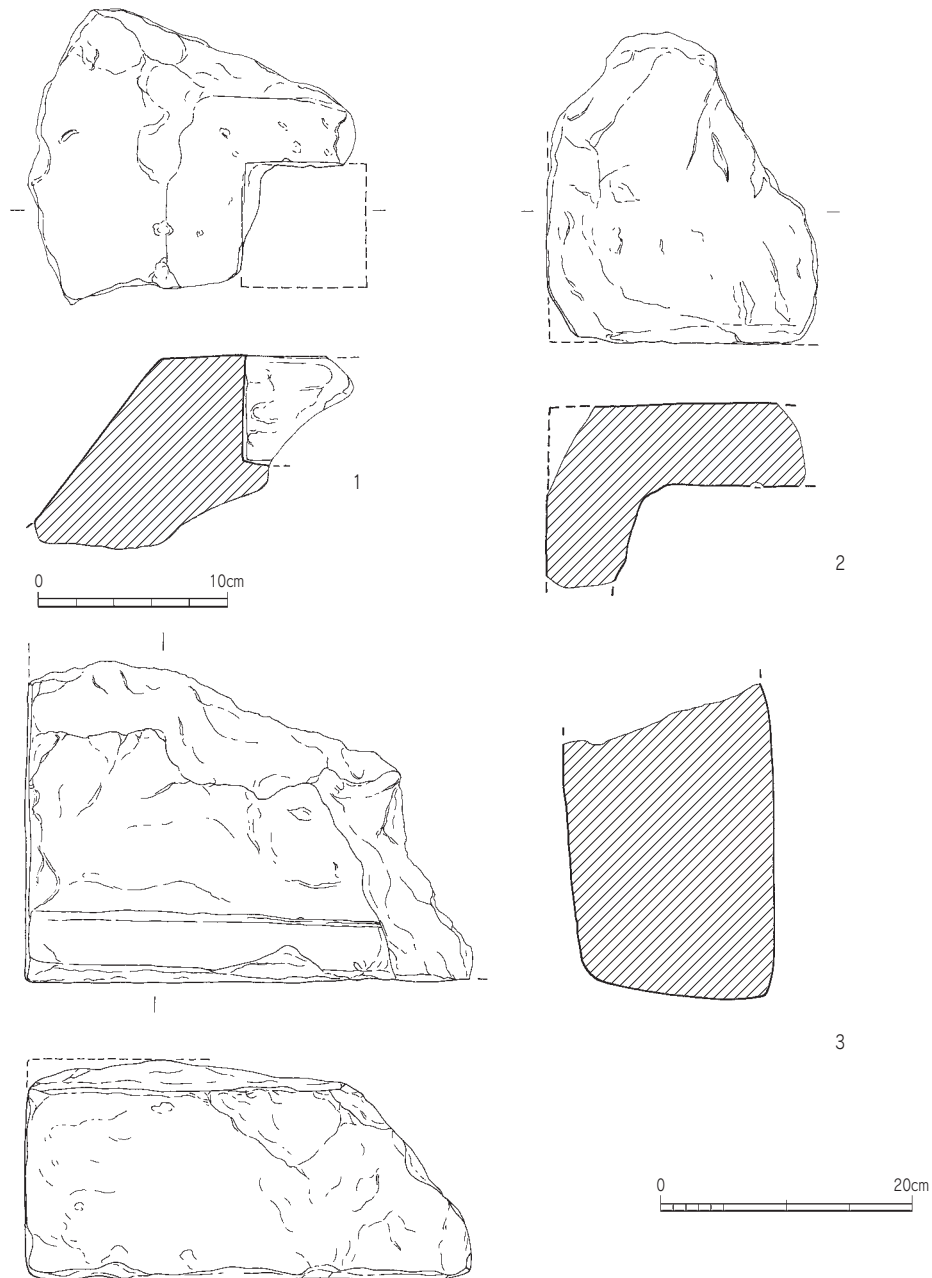


Fig.136 塔・地覆石実測図 (1/4・1/6)

3) 五輪塔 (Fig.136, PL.37)

1は大きく欠損するが、軒先状の作出と上面に方形孔があることから火輪とみられる。方形孔は深さ5.5cm程度。2も大きく欠損するが、多面体の方形から地輪とみられる。柄穴の端部にノミ痕がある。1・2に共に17次調査第1整地A-3土坑出土で凝灰岩製。

4) 地覆石 (Fig.136, PL.37)

3は凝灰岩を長方形に加工した地覆石とみられる石塊片。厚さ15cm以上、奥行き25cm以上あり、おそらく半分程度欠損している。また、上半部の激しい風化に対し、下半については磨滅が少ないことから、本来半分程度を地表に露出させた状態であったのかもしれない。

上半部は
風化

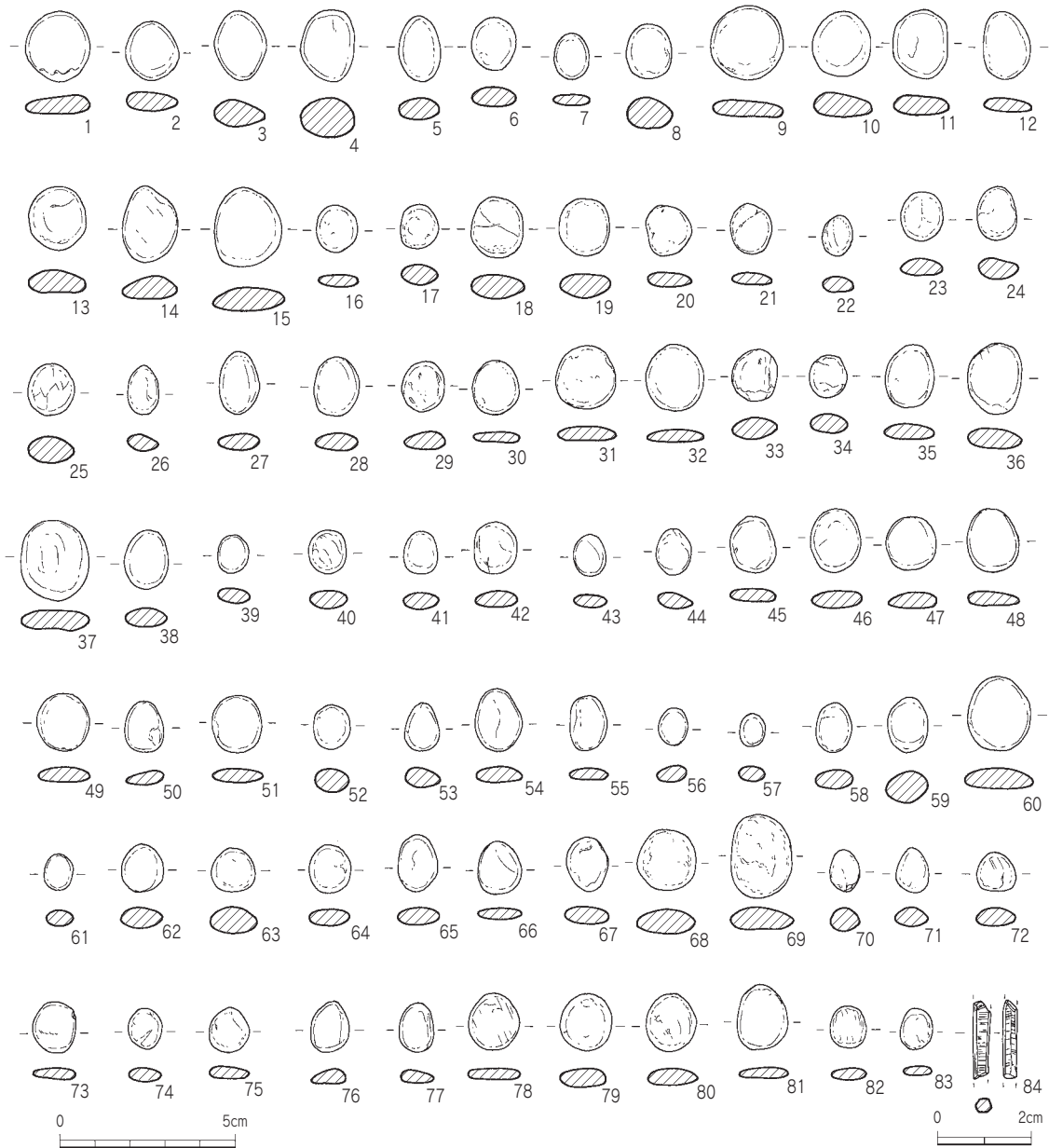


Fig.137 碁石・水晶実測図 (1/2・2/3)

5) 碁石 (Fig.137, PL.37)

1～83は各調査出土の碁石に関連する円盤状を呈する資料。大きさや形態によって大きく3種類に分かれる。①大きさ0.8～1.2cmで厚さ0.5cm前後，②大きさ1.2～1.7cm前後で厚さ0.5cm前後の厚みを持った正円形，③大きさ1.8～2.3cmで厚さ0.5cmの正円形である。①は石英の小礫の素材を活かして多少研磨したもの（17・22・26・39～41・61・70～72・74）が多く，蛇紋岩（7・21・43・44・53・56・66・67・75～77）については比較的厚みがない。②は石英（13・18・23・33・42），蛇紋岩（5・25・28・29・30・38・45・50・51・68・78・80・81），安山岩（46・47・49）がそれぞれある。③では石英製（3・4・13・14）は少なく，蛇紋岩（2・10・37・69）や安山岩（1・9・31・32）が多い。特に安山岩に正円形が多い。90次SD2340中層に石英の③（13）が，187次SD4570では石英製と蛇紋岩の①・②が多い。

3種の大きさと形態

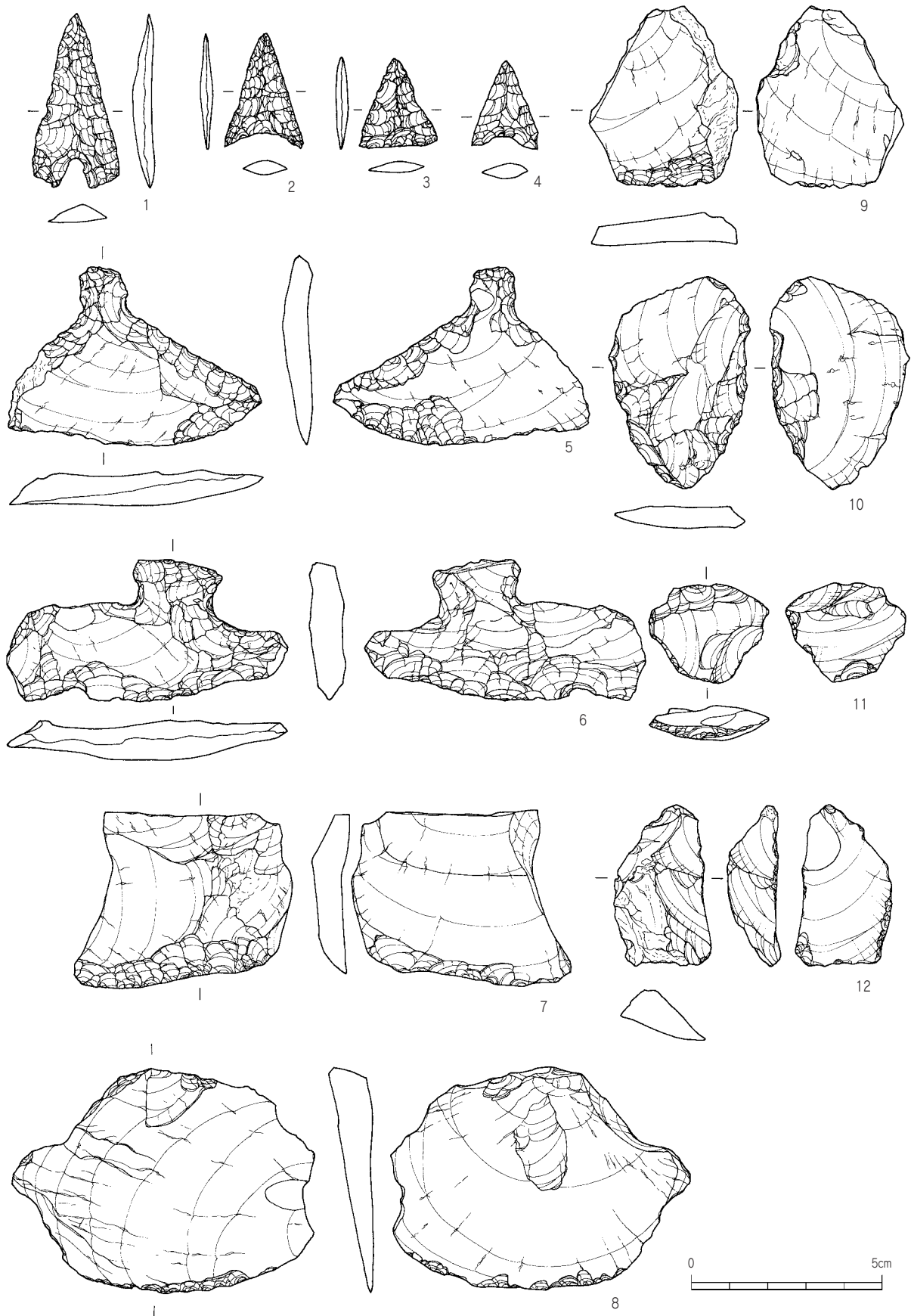


Fig.138 石器実測図 (1) (2/3)

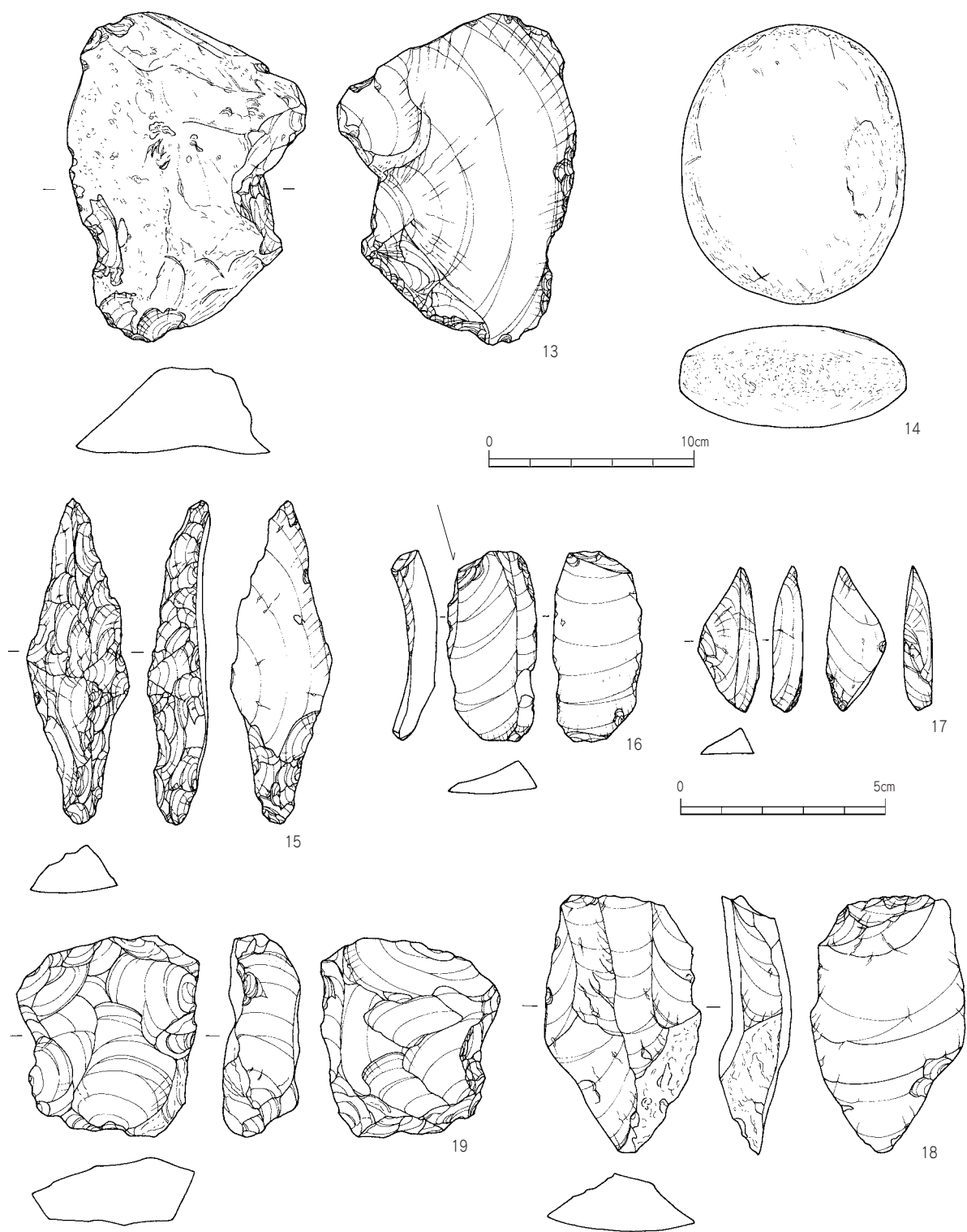


Fig.139 石器実測図 (2) (2/3・1/3)

6) 水晶 (Fig.137, PL.37)

84は87次調査S E 2510中より出土。6面体を持つ細い棒柱状の形態で、両端部を破損している。透明度の高い水晶で、肉眼観察で見る限り各面を砥ぎ込んだようにみえない。祭祀に関わるものかもしれない。

7) 石器類 (Fig.138・139, PL.37)

ここでは遺跡の時代とは直接関係ないが、遺跡形成史を考える上で重要な石器類を報告する。

①縄文時代石器 (1～14)

石鏃(1～4) 1は両側縁を直線的に調整し、基部に抉りを持って両基端部は台形状となる。サヌカイト製で長さ4.5cm程度の大型品。重さ4.3g。2は直線的な調整で両基端が鋭く尖るサヌカイト製。重さ1.2g。3は磨滅著しい平基の黒曜石製。重さ1.5g。4は姫島産黒曜石製。重さ1.1g。1～3は調整や形態から早期以前に属する可能性が高い。

早期以前の
石 鏃

石匙(5・6) 5はサヌカイト製の横長剥片を素材とし、丁寧に素材の側縁部に全周する刃部加工している。早期に属する資料であろう。重さ20.5g。6の下縁の刃部加工は粗く、直線的な刃部とならず、風化も進んでいない。重さ14.7g。

スクレイパー(7～11) 素材側縁や端部に刃部加工したスクレイパー類である。11以外はサヌカイト製。ただし7は下縁の刃部形成が直線的で石鎌など別器種の可能性もある。また8についてはサヌカイト製の薄手の大型剥片であることや風化が進んでいないことから、後晩期以降の切裁具などの可能性が高い。11は頁岩製で下縁部に刃部を持つ。重さについては、7は29.4g、8は37.7g、9は17.5g、10は14.7g、11は6.7g。

微細剥離を有する剥片(12) 黒曜石製で、側縁部に細かい剥離が連続する。重さ10.7g。

サヌカイト
礫 使用

二次加工石器(13) サヌカイト礫を分割して得られた大型剥片の側縁部や下端部に二次加工を行っており、さらに微細剥離も確認できる。重さ834.7g。

磨石・敲石(14) 円礫の端部に敲打痕、両面に擦痕がある。安山岩製。重さ1265.6g。

②旧石器時代石器 (15～19)

角錐状石器(15) 角錐状石器でサヌカイト製の横長剥片を素材としている。基部を中茎状に加工しており、先端部を一部欠損する。重さ20.7g。

彫器(16) 黒曜石石材を使用した縦長剥片素材の彫器。素材打面より左側縁に槌状剥離が入る。重さ8.4g。

二次加工剥片(17・18) 17は針尾淀姫系黒曜石製の横長剥片を素材とする二次加工剥片。重さ2.9g。18は縦長剥片の側縁部に二次加工をしている。背面の状況から、この石器の剥離以前に小型の縦長剥片を連続したことが分かる。作業面再生などにより剥離されたのかもしれない。重さ36.9g。

石核(19) 厚手の素材の周縁部より素材剥離を行った黒曜石製の石核。重さ43.5g。

**Administrative structures surrounding Kyushu's government headquarters
in the *Dazaifu* (大宰府) complex IV
- the *Fuchyou* (不丁) area -**

Contents

Chapter I Preface

- (1) Progress making excavation report
- (2) Excavation organization
- (3) Scheme to issue excavation report
- (4) Recording and arranging method of Finds

Chapter II Finds

- (1) Roof tiles and bricks
- (2) Pottery and porcelain
- (3) Wooden objects
- (4) Metallic objects
- (5) Baked clay objects
- (6) Stone objects

Summary

This volume is the official excavation report of the Fuchyou (不丁) area in the west front of the main government office of Dazaifu (大宰府). This includes 16 trenches excavated by the Kyushu Historical Museum, which has undertaken work since 1971.

The excavations unveiled various features, such as buildings, palisades, division ditches, foundations for tamped-earth walls with roofs, wells, pits, casting-related structural remains. The excavations also allowed us to identify the east-west length (about 84m) of the government office by two ditches running north-south. There were densely post-built structures in the front area where one single building constructed on base stones was revealed. In terms of finds, vast amounts of ceramics and roof tiles were recovered from the site, and ditches produced a large number of wooden writing tablets.

報告書抄録

ふりがな	だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと							
書名	大宰府政庁周辺官衙跡							
副書名	不丁地区 遺物編 1							
巻次	Ⅳ							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小田和利・杉原敏之・下原幸裕（編集）・小嶋 篤							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 Tel.0942-75-9575							
発行年月日	平成25(2013)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと(ふちょうちく)	ふくおかけんだざいふしかんぜおんじ	40221	210316	33°	130°	1971.08.20 ～ 2004.12.17	12,944	学術調査 住宅建設
大宰府政庁周辺官衙跡(不丁地区)	福岡県太宰府市観世音寺2丁目7番地 他			30'	30'			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大宰府政庁周辺官衙跡(不丁地区)	官衙	奈良～ 平安時代	礎石建物・掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑・暗渠・粘土採掘遺構		土器・陶磁器・瓦類・木製品・金属製品・土製品・石製品・木簡		土器・瓦・木簡の多量出土	
概要	<p>本報告書は、昭和46年度から九州歴史資料館が進めてきた大宰府史跡の発掘調査の中で、大宰府政庁の周辺に広がる官衙地区のうち、不丁地区の出土遺物に関する正式報告書の第1冊目である。出土遺物量は周辺官衙の中では最も多く、とくに当地区を画する東西の溝からは極めて膨大な量の遺物が出土した。</p> <p>本書で報告したのは、瓦埴類、土器・陶磁器類、木製品、金属製品、土製品、木製品で、木簡や製塩土器などの特殊遺物を除く主要遺物について報告を行った。</p> <p>各遺物の整理により、大宰府政庁第Ⅰ期の遺物、第Ⅱ期の遺物、第Ⅲ期の遺物がそれぞれ確認できたが、中世に下る遺構・遺物の少なさが指摘できる。当地区の評価については、特殊遺物の報告を含めて次巻において総括したい。</p>							

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年号 24	登録番号 0014

大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ

－不丁地区 遺物編 1－

平成25(2013)年3月31日発行

発 行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3
印 刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区那の津2丁目10番7号 B棟2号



Fig. 1 不丁地区主要遗构配置图 (1/600)